

ストライク・ザ・ブ
ラッド おバカな第四
真祖

京勇樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

吸血鬼や獣人などが、当たり前前に住んでる世界

そこには、世界的に認められた三人の真祖と、非公式の第四真祖が居た
しかし、その第四真祖はおバカで優しかった!?

目次

聖者の右腕編

プロローグ 物語の始まり	2
少女との邂逅	10
監視役の少女	19
引越しと二人の教師	35
渦中へ	47
交戦と暴走	56
一日の始まり	65
情報収集	73
交戦と死	81
復活	96
知ってしまった真実	107

戦王の使者編

島の秘密	115
交戦開始	123
終結	130
後始末とドタバタ	138
序章	156
何時もの日常風景	163
招待状とお届け物と	171
騒がしい出会い	181
会談 前	195
会談 後編	206
浅葱の行動	215
舞威姫の襲撃	226

見えた闇	312
流転	303
出会い	295
序章	289
天使炎上編	
後始末	283
決着	272
決戦の舞台	263
253	
交戦開始からの、落下。そして	
激突	247
現れる古代	240
動く者達	235

待ち人来る	408
始まり	403
蒼き魔女の迷宮編	
終局	395
決着	389
処断	382
怒りの宣告	375
目覚めと	364
天使の叫び	356
外法の技	346
邂逅するは	338
捕捉	329
置き去り	320

診察	483
母親	475
脱出	468
脱獄者達	461
終わりにして始まり	456
観測者達の宴編	
決着	450
監獄結界の真実	445
監獄結界	439
メイヤー姉妹	433
捕捉	428
騒動	421
異変	415

錬金術師の帰還	
幕引きの一幕	556
決着	548
魔女の復活	543
開戦	538
突入	534
前に	529
脱獄者達4	523
脱獄者達3	514
鼻血	508
行き先は	502
脱獄者達2	496
刺客	488

序章	563
錬金術師の奇襲	568
アデラード修道院	575
出張所	584
怒りの拳	592
古の錬金術師	601
ニーナ・アデラード	607
復活	612
正体	621
危機	629
復活の時	637
宣戦布告	643
終わりの刻	647

幕引き	651
黒の剣巫編	
招待	656
少女との出会い	661
結瞳という少女	667
料理	673
もう一人の結瞳	679
夢魔	686
解放	693
その名は	698
レヴィアタン	706
それぞれの突入戦	712
突入	717

代償と一端	723
心の氷	729
脱出	735
深海の歌姫	741
ハチャメチャ	749
焰光の夜伯編	
序章	754
中にて	758
ドタバタな朝	763
編入生	767
邂逅	771
急行からの急降下	775
騒動の幕開け	781

病院内にて	785
記録	790
ゴゾ遺跡	795
緊急事態	802
宴の幕開け	810
準備段階	814
焰光の宴 1	819
出会いから	823
焰光の宴 2	830
焰光の宴 3	835
焰光の宴 4	840
焰光の宴 5	846
焰光の宴 6	852

焰光の宴 終
冥き神王の花嫁編

焰光の宴 終	857
序章	865
来襲	869
突然の通達	876
トラブルのお届け物	881
始動	888
襲撃	892
敵対者	897
交戦	903
ザザラマガウ	908
三つ巴	915
一方、外では	921

二人の共通点	925
到着	934
怒涛	940
終わりと始まり	948
逃亡の第四真相編	
序章	952
大晦日の始まり	958
大晦日2	965
大晦日3	971
藍羽家	977
情報収集	984
暗雲	990
準備	996

突然	1069
グレンダの正体	1063
聖職派	1056
接敵	1050
到着と困惑	1046
幻想種	1037
別行動の一行	1032
神縄湖へ	1026
把握	1021
咎神の騎士編	1015
本土へ	1009
対閑古詠	1001
逃走開始	1001

怒涛の展開	1136
始まり	1131
不安	1127
序章	1123
タルタロスの薔薇編	1118
帰路にて	1111
決着	1105
戦闘開始	1098
帰還	1092
異境	1087
黒幕の正体	1082
相対	1076
休憩と謝罪	1076

後悔	1200
決着	1195
復讐者	1192
最後の一人	1186
急行	1182
選択肢	1176
千賀毅人	1171
明久の過去	1165
一方の船組	1161
幕間	1157
命懸け	1149
予想外の再会	1145
幕間 秘匿区画	1141

1200 1195 1192 1186 1182 1176 1171 1165 1161 1157 1149 1145 1141

序章

聖者の右腕編

プロローグ 物語の始まり

「ひめらぎゆきな姫柊雪奈。あなたに、絃神市に現れた第四真祖の監視を命じます」

そう命じられた少女

姫柊雪奈は思わず固まった

彼女は今朝から、嫌な予感はしていた

彼女の専門は、直接的な戦闘であり占いは苦手である

それなのに、朝起きた時点で胸騒ぎがしていた

ここに来て、彼女が所属している組織《獅子王機関》のトップ

三聖からの直々の呼び出し

呼び出しに応じて、三聖の間に行ったら、到着した瞬間に腕試しにと式神との戦闘

そして、唐突に見せられた一枚の写真

そこに写っていたのは、茶髪と垢抜けた顔が特徴的な男子

名前は吉井明久よしいあきひさと言うらしい

そこで告げられた衝撃的な言葉

第四真祖

この名前は、攻魔師ならば誰もが知っている名前である
 焰光カレイドブラッドの夜伯

十二体の神に匹敵するという眷獸を従える孤独にして最強の四番目の真祖
 しかしながら、この存在は都市伝説の域を出ないはずだった

真祖というのは、闇の血族を統べる帝王を示している

もつとも古く、もつとも強大な魔力を備えている《始まりの吸血鬼》である

公に存在が認められている三名の真祖は、それぞれ大陸に同族である数千数万の軍勢
 を従えて自治領である夜ドミニオンの帝国ロストウオーロードを築いている

欧州を支配している《忘却の戦王》

西アジアの盟主《滅びの瞳》フオーゲイザー

最後に、南北アメリカ大陸を支配している《混沌の皇女》ケイオスフライド

この三名に対して、第四真祖は一切の自治領と血族が存在しない

ただし、その存在は非公式ではあるが、世界中で大災害、大事故と共に確認されてい
 る

一番新しい記録では、四年前に起きた列車事故が第四真祖が起こしたとされている
 まさか、そんな存在が日本に居るとは、雪菜は思ってもいなかった

もし、第四真祖の存在が世界中に知れたら、それこそ大変な事になる

今の世界は、三人の真祖と帝国の存在が絶妙なバランスを保っているためになんとかなっている

だが、もし第四真祖の存在が公に知れたら、三人の真祖と結んだ聖域条約は破棄されて、魔族と人間の戦争が勃発するかもしれない

そうなったら、地力の差によって人間は滅びる可能性が極めて高い

いくら対魔装備があろうが、有能な攻魔師が存在しようが、それは有限である

消耗戦になると、結局は地力の差により負けてしまうだろう

そこで、日本に現れた第四真祖の監視及び緊急時の抹殺のために、雪菜を派遣するらしい

最初は、なぜ自分なのか。と雪菜は問い掛けた

雪菜の問い掛けに、三聖の返答は

『現在、獅子王機関には適切な人物が居らず、唯一接触出来そうだったのが、見習いである雪菜のみ』

というものだった

そう言われたら、雪菜としては断れるわけもなく、受け入れるしかなかった

そこで、三聖から任務に就く雪菜に対して選別とし、約一千万円程（別に給料アリ）と

獅子王機関が開発した最新鋭兵装

七式突撃降魔機槍シユネーヅアルツァー、銘は雪霞狼せつかろうが与えられた

この七式突撃降魔機槍は、獅子王機関が開発した神格振動波駆動術式により、あらゆる魔力を切り裂き無効化する能力を有している

まさしく、秘奥兵器と呼べる代物である

ただし、その性能通りにコストが高く、更には核には古代の宝槍を用いているので、量産が出来ないのである

開発元である獅子王機関にすら、雪菜に渡したのを含めて三本しか存在しない

そして最後に、雪菜には件の第四真祖

吉井明久が通っている学園の制服が与えられた

その制服を見て、雪菜は我知らずにため息を吐いた

占いなどを不得手とする雪菜が、最初に感じた嫌な予感が現実になるのは、もう少し先の話である

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「暑い……焼ける……溶ける……灰になる……」

そうボヤキながら歩いているのは、垢抜けた顔に茶髪が特徴の男子

吉井明久である

彼はつい数分前まで、近くのファミレスで友人達の力を借りて大量の夏休みの課題を終わらせた所である

その代償として、懐が寒冷化してしまい、明久は妹に対してなんて説明して小遣いを渡してもらおうか考えた

しかし、いくら考えても最適な説明が思いつかず、本当のことを話すしかないか。と深々とため息を吐くと

「アレって、いわゆる尾行なのかな？」

明久はそう言いながら、鏡代わりにしたスマホの画面を見た

そこには、電柱に身を隠している一人の少女の姿が見えた

今明久が歩いている道には、明久と彼女しか居ない

理由としては、ほとんどの人はバスかモノレールで移動しているからだ

理由は簡単

誰も、炎天下の中を汗だくになってまで歩きたくないからだ

明久が住んでいる絃神市は、海洋に浮かべられている人工島の集まりである

一応東京ではあるが、その位置は東京から南に330km近いために年がら年中暑いなぜそんな位置に浮かべたのかというと、絃神市は風水を使って良い立地を探した結

果、この位置に決められたのだとか

それと、絃神市に住んでいるのは人間だけではない

吸血鬼を始めとした魔族も住んでいるのだ

絃神市は通称、魔族特区と呼ばれている

魔族特区というのは、三人の真祖と各国首相が結んだ契約で、人間と魔族が共存する地である

魔族特区では、魔族特有の能力や魔族伝承の技術の研究なども盛んに行われているゆえに、“被害があまり出ないようにということも考えて”このような立地なのである

以上、説明終了

そして、明久が尾行に気付いたのは、ファミレスから出て数分後だった
視線を感じた明久は、背後に振り向いたのだ

そしたら、焦って電柱の裏に隠れる少女を見つけたのだ

それを見た明久は、思わず首を傾げた

だが明久は、深く考えずに流してそのまま歩き出した

だが、そのまま歩き続けていても視線を感じたので、スマホでメールや時間を確認するフリをして後ろを確認したら、少女はずっと明久を尾行していたのだ

最初はストーカーとも思ったが、すぐにその考えは振り払って、次に思いついたのが

尾行である

明久としては、尾行される理由に一つだけ覚えがあった

だが、“その事”に関しては、明久と二人の教師以外は知らないはずなのだ

それも、家族にも黙っているほどに

そして気付けば、明久はウエストアイランドの商店街に入っていた

それに合わせて、周囲にはかなりの人数が行き来している

買い物客やゲームセンターに行く途中の学生などが、ひっきりなしに歩いている

その人波を避けながら、明久は心中で

(頼むから、《アレ》がバレてませんように……)

と思った

その時だった

「ねえねえ、そのこのキミー。俺達と遊ばないか?」

「楽しいぜー?」

「結構です。興味はありませんから」

というやりとりが聞こえて、明久は嫌な予感がして振り向いた

そこでは、二人の男が先ほどの少女をナンパしていた

少女は断っているが、二人の男は尚もしつこく声を掛けている

確かに、明久を尾行していた少女は掛け値無しの美少女だ
そんな美少女とお茶できたら、男としてはラッキーだろう
だから男達は、断られるも声をかけ続けた

だが、少女はその全てを断り続けた

そしたら、スーツを着た男が我慢の限界に達したようで

「このメスガキが！ お高く澄ましてるんじゃねえぞ?！」

と声を張り上げながら、少女のスカートを大きく捲り上げた

それを見た瞬間、明久は

(あ……これは、面倒事に巻き込まれたなあ……)

と確信した

こうして、おバカな第四真祖と彼の周囲に居る少女達の物語は始まった

少女との邂逅

男にスカートが捲られた少女　姫柊雪菜は数舜ほどは何が起きたのか分からず、呆然としていた

だが、自身のスカートが捲られたと理解すると顔を真っ赤にして

「響ゆらぎよー！」

と言いながら、自分のスカートを捲った男に掌底を叩き込んだ

掌底を喰らった男は、まるで砲弾のように吹き飛び、背後のワンボックスカーにめり込むようにぶつかった

その光景を見て、もう一人の男は雪菜を睨みつけながら

「てめえ！　攻魔官だったのか！」

と言いながら、正体を表した

鋭く伸びた八重歯に全身から迸る、膨大な魔力の奔流

「D種っ！」

D種

正式名称は吸血鬼バンパイア

第一真祖の忘却の戦王の血を引く種族である

ロスト・ウォーロード

そして、吸血鬼は世界最強の魔族と言われている種族である

吸血鬼の身体能力は獣人には遠く及ばない

しかし、吸血鬼には他の種族にはない特殊能力がある

それは……

「来いよ、灼蹄！」

吸血鬼の男がそう言うと、男の隣に炎によって構成された馬が現れた

自身の魔力を糧に、自身に連なる獣

眷獣を召喚したのだ

この眷獣の召喚及び使役こそが、吸血鬼が最強と呼ばれる理由である

「やっちまいな、灼蹄！」

その吸血鬼は召喚に慣れてないのか、自身が放出している魔力に酔っている

そして、その異常な魔力の放出を男が腕に着けてある魔族登録証が検知し、それに連

動して近くのスピーカーから

『緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 異常な魔力放出を確認！ 付近の方々は避難して

ください！ 繰り返しします！』

という放送が、甲高い警報音と共に流れた

その放送を聞いて、近くに居た人々は一目散に駆け出した

魔族特区に住んでいる人々は、こういう事態に慣れているので僅か一、二分後には付近から人影は無くなった

正直に言えば、明久もこのドサクサに紛れて逃げれば良かったのだが、なぜか近くの物陰に隠れるだけだった

男が召喚した眷獣を見て、雪菜は険しい表情を浮かべて

「眷獣を街中で呼び出すなんて!」

と言うと、右手を素早く背中に背負っているギターケースへと伸ばした

そして、中から取り出したのは洗練された戦闘機を彷彿させるデザインの銀色の槍

だった

「雪霞狼!」
せつからう

雪菜は槍の銘を呼びながら、槍を展開させて構えた

その槍を見て、男は嘲りながら

「その槍がなんだってんだよ! 灼蹄、槍ごと溶かしちまいな!」

男が命じると、炎の馬は地面のコンクリートを溶かしながら雪菜目掛けて突進した

雪菜は槍を腰溜めに構えると、短い呼気と共に突き出した

その光景に明久は思わず、雪菜の正気を疑った

雪菜があのように使っているということは、対魔族用の武装だというのはわかった
恐らくは、対魔力等の魔術も付与エンチャントされているとも予想出来た

だが、ただの槍で若い世代とはいえ吸血鬼の眷獣を攻撃するなど愚の骨頂だと思つた
なぜならば、若い世代の吸血鬼の眷獣でも人間の軍隊の一個中隊以上の戦闘力を有し
ているのだ

古い世代ともなれば、下手したら旅団規模に匹敵し、真祖となれば、それは災害に匹
敵するのだ

だが、次の瞬間

信じられない光景を、明久は見た

「なっ!? 俺の灼蹄が!」

槍の穂先が当たった瞬間、まるで溶けるように炎の馬が崩れたのだ

そして、僅かに残っていた魔力の残滓を雪菜は槍を振るって掻き消した

一連の光景を見て、吸血鬼の男は信じられないといった様子で固まっていた

すると、雪菜は吸血鬼の男を睨みつけて槍を再び構えると風のように駆け出した

「う、うわああああ!」

吸血鬼は再び眷獣を召喚して雪菜目掛けて突進させたが、雪菜は槍を突き出して眷獣
を消し去るとその勢いのまま男に槍を突き立てようとした

だが

「はい、そこまで！」

それを明久が槍を横から殴ることで、阻止した

明久の行動に驚いたのか、雪菜は驚愕で目を見開きながら

「吉井明久!? 雪霞狼を素手で殴るなんて!？」

と言うと、大きく後ろに飛んで一台の車の上に乗った

それを見た明久は、肩越しに背後を見ながら

「そのアンタ! 今のうちに相棒を連れてどこかに行つて! それと、今回のことに懲りたら、女の子をナンパしないように!! それと、不用意に眷獣を召喚するのめね!」

と言うと、吸血鬼の男は何回も頷きながら

「あ、ああ……すまねえ!」

と言うつて、ようやく起き上がってきた相方に肩を貸して立たせるとどこかへと歩いていった

雪菜はそんな二人を睨みつけているが、微動だにしなかった

「キミもね……まあ、スカートを捲られたのは確かに嫌だったかもしれないけどね……やり過ぎだよ」

明久の呆れを含んだ言葉を聞いて、雪菜は明久を睨んで

「どうして邪魔をするんですか？」

と非難がましい口調で問い掛けた

雪菜からの問い掛けに、明久は頭を掻きながら

「邪魔っていうか……普通、ケンカしてる人達が居たら止めるでしょう？　　というか、なんで僕の名前を知ってるのさ？」

と言った

「……公共の場での魔族化、しかも市街地で眷獸を使うなんて明白な聖域条約違反です。彼は殺されても文句を言えなかったはずですが？」

という雪菜の言葉に、明久は、そうだけどね。と同意してから

「それを言うなら、先に手を出したのはキミでしょ？」

「そんなことは……」

明久の言葉に反論しようとしたが、雪菜はすぐに口を閉ざした

どうやら、先ほどの男と争い始めた時を思い出したらしい

明久はヤレヤレと首を振って

「キミが誰なのかは知らないけどさ、スカート捲られて下着を見られたからって、そんな物騒な物を使って殺そうとするのはあんまりでしょ？　　いくら相手が魔族だからって

「さ」

明久がそこまで言ったタイミングで、雪菜は槍を構えた

それを見て、明久は自身の失言に気づいた

「もしかして、見てたんですか？」

「えーっと……」

雪菜からの問い掛けに、明久は頬を掻いた

雪菜の立場からしたら、明久はナンパで困っていた雪菜を見捨てながらも、殺されそうになった吸血鬼の男を助けた身勝手な男である

その点に関しては、明久に否定する素材がない

どう言おうか明久が迷っていたら、そのタイミングで離島特有の強風が吹いた

その風によって、雪菜のスカートが捲り上げられてピンクと白のチェック柄の可愛らしい下着が見えた

「っ！… どこを見てるんですか!？」

雪菜は顔を真っ赤にしながらスカートを押さえて、明久に対して怒鳴った

「あ、いや、あの……」

予想外の事態と光景にドモっている、明久の鼻から赤い液体

つまりは、鼻血が流れてきた

明久は鼻血が流れたことに気づき、すぐさま手で隠した

だが、雪菜は鼻血に気づいており侮蔑の視線を明久に向けて
「……いやらしい……」

と言いつ捨てると、持っていた槍を手早くギターケースに収納して立ち去った
明久はそれを見送ると、近くの壁に背中を預けてズルズルと座り込んで

「本当に……勘弁してよ……」

と呟いた

鼻血が流れたのには、ワケがある

吸血鬼に備わっている吸血衝動

この原因が、性欲なのである

そして、吸血衝動が起きたら何かしら血を吸わないといけないのだ

例えばそれが、自身の鼻血だとしても構わないのである

自分の鼻血を吸ったことで、吸血衝動は収まった

後は鼻血が収まるのを待ち、すぐにこの場を離れようと明久は考えていた

先ほどの警報でもうすぐに、特区警備隊アイランド・ガードが駆け付けてくるだろう

島の治安を守るための、武装している攻魔官の部隊だ

騒動の原因ではないとはいえ、このまま長居したらかなり面倒である

具体的には、二人の教師に死ぬかもしれないほどの補習と追試を与えられかねない

そして、鼻血が止まったのを確認した明久は立ち上がって去ろうとした

「ん？ なにか落ちてる……」

その時に明久が見つけたのは、白を基調とした財布だった

「さっきの女の子のかな……」

明久は確かめるために、心中で謝りながら財布の中を確認することにした

小銭入れの部分には小銭が数枚入っていて、お札入れには一万円札と千円札が数枚入っていた

今の明久としては羨ましい金額だが、明久は無視してカード入れを見た

入っていたのは、銀行のキャッシュカードと一枚の学生証だった

「えーつと……姫終雪菜？」

そこには、ぎこちなく笑っている雪菜と雪菜の名前が印刷されていた

書いてある学校の名前は、明久と同じ学園の私立彩海学園の中等部だった

「……………どうしよう……………」

知らず知らずの内に、明久の口からそんな言葉が零れた

監視役の少女

「ありがとうございます」

明久はそう言うと、職員室から退室した

明久は補習が終わると、妹の風沙の担任の笹崎先生が来ているか訪ねたのだが、笹崎先生は休暇らしく居なかつた

さすがに、他の先生に雪菜の財布を預ける気にはならず退室したので「さて、どうしようかな……」

明久が首を傾げていると

「こんな所で、なにしてるんですか？」

という、明久の探している少女の声が聞こえた

背後に振り向くと、そこに居たのはまさしく、姫柊雪菜だった

「あ、キミは……」

明久が雪菜に気づくと、雪菜も明久の持っている財布に気付いた

「それ、私の財布ですよ？ 返してもらっていいですか？」

「あー……」

雪菜の言葉を聞いて、明久が唸っていると

クー………という、腹の鳴る音が聞こえた

「ん？ もしかして、キミ？ あ、もしかして、財布を落としたから、ご飯が食べられなかったの？」

と明久が問い掛けると、雪菜は顔を真っ赤にしながら

「………それが、最後の言葉でいいですか？」

と手を震わせながら、背中のギターケースに持っていった

「あ、その槍は勘弁して!？」

明久はそう言つて雪菜を宥めると、持っている財布を見てから歩み寄つて

「はい、もう落としたらダメだよ？」

と手渡した

「え？… え？…」

雪菜が呆然と財布と明久を交互に見ていると、明久は笑みを浮かべて

「ご飯一回奢るくらいなら、財布を拾った人にお礼する義務はあるよね？」
と言つた

明久の言葉を聞いて、雪菜は呆然と固まつた

◇
◇
◇
◇
◇
◇

数十分後、明久と雪菜は某ファーストフード店に来ていた

そして、二人は注文した品を受け取ると席に座って食べ始めた

「だけど、キミみたいな子が……僕になんの用?」

「なんの用とは?」

明久の言葉に雪菜が首を傾げると、明久は口の中の物を飲み込んでから

「だって昨日、僕を尾行してたでしょ?」

と問い掛けた

すると、雪菜は驚愕したように目を見開いて

「気づいてたんですか!」

と声を上げた

「いや、あれで気付かないほうがおかしいからね?」

雪菜の言葉を聞いて、明久は思わず突っ込んでいた

すると、雪菜は顎に手を当てて

「流石は、第四真祖……高い洞察力……」

と呟いた

それを聞いた明久は、心中で

(いや、キミの尾行が下手だったんだけど……)

と思った

そして、明久は再び

「それで、僕を尾行してたのはなんで？」

と問い掛けた

すると、雪菜は観念したのか

「私が尾行していた理由は……先輩の監視の為です」

と呟くように語った

「監視？　なんでさ？」

「え？　先輩……気づいてないんですか？」

明久の言葉を聞いて、雪菜は驚いた様子で明久に視線を向けた

「いや、気付くもなにも……そもそも、監視ってどこからの依頼なの？」

と明久が問い掛けると、雪菜は姿勢を正して

「私に先輩の監視を命じたのは……獅子王機関です」

「獅子王機関？　なにそれ？」

雪菜の告げた名前を聞いて、明久が首を傾げると雪菜が驚いた様子で

「獅子王機関を知らないんですか!？」

と明久に迫った

「うん……知らない」

明久がそう断言すると、雪菜は深々と溜め息を吐いて

「獅子王機関というのは、政府の特務機関です。霊的災害や魔導災害。魔導テロを阻止するための、情報収集や謀略工作を行う機関です。元々は平安時代に宮中を怨霊や妖から護っていた滝口武者が源流なので、今の日本政府よりも古い組織なんですけど」

「なるほど……要するに、公安警察みたいな組織なんだね……」

雪菜の説明を聞いて、明久は納得するも、すぐに首を捻った

「あれ……？ 魔導テロや魔導災害を防ぐ機関が僕を監視して……なんで？」

明久が首を傾げていると、雪菜は再び深々と溜め息を吐いて

「つまり先輩は、その存在自体が魔導災害や魔導テロと同義なんですよ……本当に知らなかったんですね」

と言った

「なんでさ……僕は第一から第三真祖みたいに軍隊も持ってないし、夜の帝国ドミニオンなんて無いのさ」

と明久が額に手を当てながら言うと、雪菜が冷たく攻撃的な眼差しで明久を見ながら「そうですね……わたしも、それを聞きたいと思ってました。先輩は、絃神島コトシマでなにをするつもりなんですか？」

と、問い掛けた

「なにをするって……どういうこと？」

「昨日、先輩の妹さんに会って話を聞きました」

雪菜のその言葉を聞いて、明久は僅かに顔をしかめた

昨日の夜、妹の風沙が雪菜に対して明久の恥ずかしい過去の話を洗いざらい喋ったというのを思い出したのだ

こういう時は、妹のお喋りを恨めしく思う

「あなたは、自分が吸血鬼であることを妹さんにも隠してますよね」

「まあ、そうだけど……」

確かに、明久は風沙にも自分が第四真祖だということを話していない

それは、とある理由からだ、雪菜は知らない

「家族にも正体を隠して魔族特区に潜伏しているのは、何か目的があるんじゃないですか？ 例えば、絃神島を陰から支配して、登録魔族たちを自分の軍勢に加えようとしているとか。あるいは、自分の快樂のために彼らを虐殺しようとか……なんて恐ろしい！」

雪菜が自分で語って怖がっていると、明久が手を振りながら

「待つて待つて……雪菜ちゃん、何か誤解してないかな？」

「誤解？」

明久の言葉を聞いて、雪菜は首を傾げた

「潜伏するもなにも、僕は吸血鬼になる前から、ここに住んでるんだよ？」

明久の説明を聞いて、雪菜は眉をひそめた

「……吸血鬼になる前から……ですか？」

「うん。記録でも何でも、好きに調べてよ。僕がこんな体質になったのは今年の春からだし、この島に引越してきたのは中学の時だから、もう四年近く前だよ」

明久は苦々しげに表情を歪めながら、そう説明した

そう

明久は生まれながらの吸血鬼ではない

約3ヶ月程前まで、明久は普通の人間だった

だが、今年の春先

ある事件に巻き込まれて、明久の運命は大きく変わった

明久はその事件の最中に第四真祖と名乗る人物に出会って、その能力と命を奪ったのだ

だが、雪菜は信じられないといった様子で首を振り

「そんなはずありません。第四真祖が人間だったなんて……」

「そんなこと言われてもね……事実、そうなんだけど」

と明久が頬を掻いていると、雪菜は明久を睨みつけながら

「普通の人間が、途中で吸血鬼に変わることなどあり得ません。たとえ吸血鬼に血を吸われて感染したとしても、それは単なる《血の従者》……疑似吸血鬼です」

と語った

「うん。そうらしいね」

雪菜の説明を聞いて、明久が肯定で頷くと雪菜は怒った様子で

「だったら、どうしてそんなすぐバレる嘘をつくんですか？」

と問い詰めた

「別に嘘をついてるわけじゃないんだけど……」

明久は疲れたように、溜め息を吐いた

明久としては、細かい説明とかをするのが苦手なのだ

雪菜は出来の悪い生徒を相手にする家庭教師のように、口調を改めて

「あのですね、先輩。真祖というのは、今は亡き神々に不死の呪いを受けた、もつとも旧き原初の吸血鬼のことですよ？」

と説明を始めた

「それくらいは、僕だって知ってるよ……」

明久は呟くように言うが、雪菜は気にしていない様子で

「普通の人間が真祖になるためには、失われた神々の秘呪で自ら不死者になるしかないんです。先輩にそんなことが出来るとでも？」

雪菜からの問い掛けに、明久は肩をすくめながら

「流石に、神の知り合いは居ないなあ……魔女や化け物みたいな知り合いは居るけど」と言った

すると、雪菜はジト目で明久を見ながら

「先輩が化け物って言うのはどうかと……」

と言うと、一回咳払いしてから

「だったらどうやって、吸血鬼になったというんですか？ 真祖になる手段なんて、あと

はもう……」

とそこまで言っただけで、雪菜は僅かに顔を青ざめた

神々の呪いを受ける以外に、人間が真祖になる方法はたった一つだけ存在し、雪菜はその方法を思い出したのだ

「先輩……まさか、あなたは……真祖を喰らって、その能力を取り込んだとでも……!? だけど、そんなことが……」

雪菜の顔に浮かんだのは、明久に対する畏怖の感情だった

自ら真祖になることは出来ずとも、真祖の力を手に入れる方法が一つだけ存在する
それが、真祖を喰らい、その能力と呪いを自ら内部に取り込むことなのだ
だが、もちろんのことだが魔力の劣る人物が、神々に近い力を持つ真祖を取り込むな
ど出来るはずがない

下手に真祖に手出しすれば、逆に自身の存在を取り込まれて消滅するのみである
だが、現実には吉井明久は、第四真祖の力を手にしたと言った

「真祖を喰ったって……人をそんな悪食みたいに言わないでくれるかな？」

明久は嫌そうな顔をしながら、コーヒーを飲んだ

「だったら、他にどうやって真祖の力を手に入れたと言うんですか？」

雪菜が問い質すと、明久は肩をすくめて

「悪いんだけど、詳しいことは説明出来ないんだ……僕はただ、この厄介な体質を……押し付けられたただだからね」

「押し付けられた……？」

明久の説明を聞いて、雪菜は驚いた様子で目を丸くした

「先輩は、自分の意志で吸血鬼になったわけではないんですか？」

「誰が好き好んで、自分から吸血鬼になるのさ」

明久は疲れた様子で、投げやり気味にそう言った

「それで、誰に押し付けられたんですか？」

「第四真祖に決まってるでしょ？ 先代の」

「先代の第四真祖……!?!」

雪菜は愕然と息を呑むと

「まさか、本物の焰光カレイドフラッドの夜伯のことですか!?! 先輩は、あの方の能力を受け継いだとでも

? どうして、第四真祖が先輩を後継者に選ぶんですか? そもそも、なぜあの焰光の夜伯なんか遭遇したりしたんですか?」

「いや、それは……グッ!?!」

雪菜の矢継ぎ早の問い掛けに、明久が答えようとした瞬間、明久は歯を食いしばって頭を抱えた

飲みかけだったコーヒーのカップが倒れて、薄まっていたコーヒーが零れた

明久はそれを気にした様子もなく、そのままソファに倒れ込んだ

噛み締めている唇から、苦悶の音が漏れた

明久の失われた記憶が、まるで呪いのように全身を苛んだ

「せ、先輩……?! どうしたんですか?」

雪菜が恐々と呼びかけると、明久は弱々しく笑みを浮かべながら

「ごめんね、雪菜ちゃん……今、その話は勘弁してね……」

と断った

「……………え？」

「僕には、その日の記憶が無いんだ……無理に思い出そうとすると、この様だしね……」

雪菜が戸惑っていると、明久は弱々しく説明した

「そう………なんですか？ わかりました………それじゃあ、仕方ないですね」

明久が体を起こすのを手伝いながら、雪菜は安堵した表情を浮かべた

「どうやら、記憶が無いという明久の言葉を信じたようだ

基本的に素直な性格なのだろう

明久は拍子抜けしながら

「……………信じてくれるの？」

「はい。先輩が嘘をついてるかそうでないか位は、だいたいわかりますから」

雪菜が当然という様子で言うと、明久は苦い表情を浮かべた

明久としては、遠回しに単純と言われている気になった

「こつちを向いてください。ズボン、拭きますから」

「あ、そのくらいは自分でやるよ」

雪菜がタオルを取り出しながらそう言うと、明久は手を左右に振った

だが、雪菜は構わず身を寄せて

「染みになっちゃいますから、早く」と拭き始めた

雪菜の細い指がタオル越しに明久の太ももに触れて、しかも体勢的に明久から雪菜の白いうなじが見えた

雪菜は明久の視線に気付かず

「わたし、獅子王機関から先輩のことを監視するように命令されてたんですけど……それから、先輩が危険な存在なら抹殺するようにとも」

「ま……抹殺？」

雪菜が予想外の言葉を告げたので、明久は固まった

だが、雪菜は穏やかな口調で

「その理由がわかったような気がします。先輩は少し自覚が足りません。とても危うい感じがします」

「いや、雪菜ちゃんも危なっかしい感じだよね？」

雪菜の言葉を聞いて、明久は思わず突っ込んでいた

「とにかく、今日から先輩のことはわたしが監視しますから、くれぐれも変なことはしないでくださいね。まだ先輩のことを全面的に信用したわけではないですから」

「監視かあ……まあ、いつか」

明久は一旦納得すると、少し不安になって雪菜に視線を向けて

「雪菜ちゃん……風沙には僕のこととは……」

と口ごもると、雪菜は少し悪戯っぽい笑顔で頷いた

彼女にしては珍しく、年相応の幼い笑顔だった

「はい、わかってます。先輩が吸血鬼だってことは内緒にしておきます。ですから、わたしのこと」

「わかってるよ。普通の転校生ってことにしとけばいいんでしょ？」

明久がそう言うと、雪菜は

「ありがとうございます」

と笑顔で頷いた

どちらにしろ、雪菜のような幼い少女が特務機関の監視役と言っても誰も信じらんないだろう

と明久は思った

「それで、先輩はこの後はどうするつもりなんですか？」

「え？ 図書館に行って、大量の夏休みの課題をやるつもりだけど……雪菜ちゃんは付いて来るの？」

「はい、監視役ですから」

明久の言葉に、雪菜は両手を強く握りながら答えた

「もしかして、この先ずつと?」

「もちろん、監視役ですから」

雪菜はそう言うと、明久のと自分のトレーを重ねて返却口に返してからギターケースを背負った

「ま……いつか」

明久はそう呟くと、雪菜と一緒に歩き出した

余談ではあるが、図書館で雪菜のほうが頭が良いと知り、明久はもう少し勉強も頑張ろうと思ったのだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

絃神島を構成している、人工島のアイランド・ウエスト

この地区は眠らない地区である

魔族との交流を行う絃神島では、魔族用に明け方近くまで経営している店が多い

このアイランド・ウエストは商業施設が集中しているので、それは顕著である

ある意味、眩いこのネオンこそが、人と魔族が平和に暮らしている証なのかもしれない

だが、どれほど平和に見えようが、闇というのは完全には無くならない

その証拠に、アイランド・ウエストの外れで……

「行きますよ、アスタルテ……我等の至宝を取り戻すために……」

「命令受諾……」

片眼鏡を付けた大きな体格の男が身を翻しながらそう言うと、まるで人形のような美貌の少女は眩くように返事をした

その二人が離れた場所には血だまりが出来ていて、二人の魔族の男が倒れていた
その二人はよく見れば、過日に雪菜をナンパした男達だった

「このような退廃した都……許せる道理はない……っ」

男はそう言うと、逆ピラミッド型の建物を睨みつけた

引つ越しと二人の教師

「雪菜ちゃんつてさ、意外ともの知らずだよね」

明久がそう言うと、雪菜は恥ずかしそうに

「言わないでください……」

と呟いた

なぜこんな会話をしているのか

それは、帰りの時にあるスポーツ用品店の前を通りがかった時だった

雪菜は、シヨウウインドウに飾ってあるゴルフクラブを見て

『先輩、これはなんですか？ 戦鎚メイヌの一種ですか？』

と言ったからである

雪菜のトンチンカンな言葉に、明久は数瞬間まるも説明した

そこから皮切りに、雪菜の天然染みた言葉が多数炸裂

明久は笑いを堪えながらも、全て教えたのだ

そして、二人が到着したのはアイランドサウスに建っている明久の自宅のあるアパ

トである

明久は内心で、何処まで付いて来るんだろ？ と首を傾げながらも、自宅の前に到着した

その時、背後から

「あ、明久君。おかえりー」

という少女の声が聞こえた

振り返るとそこに居たのは、長い髪を後頭部で纏めている幼い印象の少女だった

彼女の名前は吉井よしいなぎさ風沙

明久の妹だ

彼女は不在がちな両親の代わりに、家計全般と家事のほとんどを切り盛りしている賢妹である

ただ、そんな風沙にもたった一つだけ欠点がある

それは……

「ねえねえ明久君。今日ねスーパーで特売してたから、お肉を大量に買ったから鍋にしよう、鍋！ あ、雪菜ちゃん！ 雪菜ちゃんつてき、豚骨ベースと醤油ベースのどっちがいいかな？ 私、それで迷ってるんだー」

それがこの、おしゃべりである

風沙のマシガントークに、流石の雪菜も後退りした

それを見かねて、明久は軽くチョップを当ててから
「はい、そこまで。雪菜ちゃんが驚いてるでしょ?」

と風沙を注意した

すると風沙は、あいたつ。と言ってから唇を尖らせながら明久を睨んだ

明久はそんな風沙の頭を撫でながら、雪菜に対して

「雪菜ちゃん。どうせだから、食べてつてよ」

と言った

「え? いいんですか?」

キョトンとした様子の雪菜が聞くと、明久は風沙が持っているビニール袋の中を見ながら

「どうせ、僕達二人だけじゃ食べきれないしね」

と言った

すると、雪菜は少し考えてから

「わかりました。いただきます」

と微笑んだ

「じゃあ、入って入って」

明久は鍵を開けてから、雪菜に入るように促した

その後、明久と風沙作の料理が振る舞われ、雪菜は明久の料理の腕に驚愕して固まったのは余談である

翌日、明久は眠気を堪えながら自宅を出た

風沙は部活の朝練があるらしく、既に居なかつた

エレベーターを降りて、玄関から出た所に雪菜が立っていた

「あ、先輩。おはようございます」

「うん、おはよう……なにしてるの?」

嫌な予感がして、明久は恐々と問い掛けた

すると、雪菜はキョトンとしながら

「なについて……先輩の監視ですが?」

「まさか、一晩中ここに居たの!」

雪菜の言葉を聞いて明久は驚愕した

すると、雪菜はムンと両手を握りしめて

「監視役ですから!」

と言った

雪菜の言葉を聞いて、明久は額に手を当てた

実に、嫌な予感がしたからだ

「一つ聞くけどき……どこで寝たの？」

「え？ ……近くの公園ですけど？」

「ジーザス！」

雪菜の解答を聞いて、明久は思わず頭を抱えて叫んだ

「この島は暖かいですから、ダンボールがあれば十分に眠れますよ」

「聞きたくなかったよ、そんなこと！ シュール過ぎるからね！」

と明久が驚愕していると、雪菜はクスクスと笑って

「冗談ですよ。近くのホテルに泊まりました」

と言った

「冗談で良かったよ……雪菜ちゃんみたいな可愛い娘が公園で寝てたら、不用心過ぎる

……」

と明久が言っていると、雪菜が頬を赤らめて

「可愛い……私が……？」

と呟いた

そんな雪菜を見て、明久が首を傾げていると一台のトラックがアパートの前に止まっ

た

「ん？ 引っ越し業者？」

「あ、ここにです」

明久が不思議そうに首を傾げると、雪菜がトラックから降りてきた業者にそう言った
「え? ……部屋番号は?」

明久が問い掛けると、雪菜は業者に頭を下げてから

「705号室です」

「隣じゃん!?! まさか、先週に山田さんがいきなり引越したのって、獅子王機関がこのために?」

雪菜の言葉に明久が疑問に思っていると、雪菜は業者が置いていった荷物を確認しながら

「脅したわけではないですからね? 平和的に説得して出ていってもらいました」

「説得ねえ……」

雪菜の言葉を聞いて、明久はジト目で雪菜を見た

「ただ、この部屋には悪い気が籠もってます。至急引越しを進めますと説明したんです」

「思いつきり脅迫だよね!?! それは世間一般では靈感悪徳商法って言うんだよ!?!」

「冗談ですよ」

明久が全力で突っ込んでいると、雪菜は淡々とそう言った

全力の突っ込みで朝から明久が疲れていると、雪菜はクスクスと笑ってから
「先輩、一つお願いが有るんですが……」

と言つてきた

「なに……」

うなだれている明久が視線を向けると、雪菜は足下のダンボールを示しながら
「荷物、運んでもらつていいですか？」

と言つた

「あれ？ 業者は？」

雪菜の言葉を聞いて、明久は業者が帰つたことに気づいた

「あの業者は獅子王機関の偽装です。他にやる事が有るので、帰つたんです」
雪菜の説明を聞いて、明久は深々とため息を吐いて

「まあ、いいけどさ……荷物少ないね？」

と雪菜に問い掛けた

「私、元々私物が少ないんです」

「ふーん……ねえ、布団は？」

不安に思い、明久は問い掛けた

「ダンボールがあれば十分眠れます」

「よし、分かった。後で布団を買いに行こうか。ついでに、細々とね」

雪菜の言葉を聞いて、明久はそう言った

そして、ダンボールを雪菜の部屋に運ぶと明久と雪菜は学園に登校した

明久と雪菜、風沙が登校している彩海学園は中高一貫の学園で、かなり大規模の学園である

とはいえ、今は夏休み期間中なので登校してきている生徒はまばらである

明久が登校してきている理由は、簡単に言うとは補習だ

今の吸血鬼の体になってからは、遅刻と欠席、更には授業中の居眠りが多発

結果、単位がとて大変なことになってしまったのだ

明久としては意図的ではないが、二人の教師に言われたら断れない

もし逃げようものなら、考えるのも恐ろしいことになるだろう

雪菜が登校してきた理由に関しては、転校の手続きの残り担任教師との顔合わせ。

それと明久の監視らしい

「はあ……今日は数学と世界史と現国とマラソンか……死ねる」

「先輩は吸血鬼なんですから、簡単には死なないでしょう？」

明久の呟きを聞いて、雪菜がそう言うが明久はジト目で見ながら

「吸血鬼にとつては、この太陽光は厳しいの……」

と言いながら、校舎に入った

そして、約四時間後

「終わりました……」

と明久は力無く、書き終わったテスト用紙を教卓の位置に置いてある豪華な椅子に座っているゴスロリ服を着た幼女

担任である南宮那月みなみやなつきに渡した

「少し待て……」

那月はテスト用紙を受け取ると、素早く採点を始めた

那月の見た目は大体十五歳前後にしか見えず、その美貌と合わせて、まるで人形のよ
うな印象を受ける

だが、その見た目に反して、この彩海学園の教師であり、更には名の知れた魔術師で
ある

「那月ちゃん……やっぱりその服装は暑苦しいから、やめてくれない？」

と抗議した直後、明久の額に扇子が直撃した

「教師をちゃん付けで呼ぶな……それと、この服装は私のこだわりだ。文句を付けるな」

那月は唸っている明久を無視して、そう言いながら採点している

「だったらせめて……黒以外にしてくれないかな？ 暑苦しいから」

痛みを堪えて明久がそう言うと、那月は点数を記入してから

「この程度の熱気、夏の有明に比べたらどうってこともない」

と言ってから、明久が終わらせたテスト用紙数枚を見て

「ふむ……これなら、十分か」

と言った

「終わった……」

那月の言葉を聞いて、明久は机に突つ伏した

そして、那月がテスト用紙を回収していると

「あ、そういえば、那月ちゃん……獅子王機関って知ってる？」

と問い掛けた

明久がちゃん付けしたので、扇子を投げようとしていた那月は、明久が言った名前を

聞いて、目を細めた

「お前……その名前をどこで聞いた？」

「え……う、噂ですけど？」

那月のプレッシャーに明久は驚いて、明久はごまかした

すると、那月はフンと鼻を鳴らしてから

「どんな噂を聞いたかは知らんがな、奴らには関わるなよ？」

奴らはお前の天敵だから

な」

と言った

「天敵……?」

「ああ……奴らはその為だけに作られたのだから……それに、奴らは私達の商売敵だ」
明久が首を傾げていると、那月がそう説明した

その言葉を聞いて、明久が内心で冷や汗を流しているとドアが開いて

「吉井、テスト補習が終わったのなら、次はマラソンだ。昼食後、体操着に着替えてグラウンドに來いよ」

と言ったのは、筋肉隆々の男性

熱血教師の西村宗一にしむらそういちである

彼は特定の科目を担当しておらず、何と全ての科目を教えることが可能なのである
そして普段は、それを活かして補習を担当している

なお、そんな彼の愛称は鉄人である

なぜそんな愛称なのかと言うと、理由は彼の趣味にある

趣味はレスリングと筋トレ、更にはトライアスロンである

これでは、鉄人と呼ばれるのも仕方ないだろう

しかしながら、彼の凄い所は別にある

今は教師が本職だが、彼は那月と同じように国家攻魔官の一人なのである

那月が空間系の魔術を得意としているが、西村は魔術は補助的な物しか使えないだが、彼にとってはそれで十分だった

彼の戦闘技法は、その鍛え上げられた肉体による近接格闘戦である

その戦闘力の高さは、驚いたことに完全に獣化した獣人を超越しているらしい

閑話休題

西村の言葉を聞いて、明久は窓から外を眺めた

太陽は相変わらず、サンサンと地面を照らしており、熱気で空気が歪んで見えるほどだった

その光景を見て、明久は深々とため息を吐いて

「不幸だ……」

と呟いた

この時、どこからか

「上条さんのアイデンティティが!?!」

という叫び声が、明久の耳に聞こえた

渦中へ

クタクタになりながらも、体育の補習であるマラソンを終えて、明久は雪菜と一緒に買い物に向かった

目的は第一に雪菜の布団やら、生活必需品の買い物で、第二に風沙からメールで送られてきた夕飯の買い物である

「そういえば、雪菜ちゃんて幾ら位お金を持つてるの?」

ふと気になって、明久が問い掛けると、雪菜は持っていたカバンの中から真新しい通帳を取り出して

「これくらいです」

と見せた

通帳に記載されている金額を見て、明久はビシリと固まった

「い、一千万……?」

そこに記載されていた金額は、一学生が持つには過剰な金額だった

「はい。なんでも、先輩の監視をする為の前払い金だとか……」

「僕が理由なの? ねえ、僕が理由なの!」

雪菜の言葉を聞いて、明久は目を見開いた

それではまるで、戦場に向かう人への前手向けてはないかと明久は思った

だがとりあえず、お金の心配はしなくて済んだ

そして、明久は雪菜と一緒に買い物を終えて帰宅した

そして、夕食後

「ふい……満腹だよー」

凧沙はそう言いながら、リビングのソファに寝転がった

「凧沙、行儀悪いよ？」

明久が注意するが、凧沙は気にせずに寝転がったまま

「明久くん、アイスー」

とねだった

「冷蔵庫には無いよ」

明久がそう言うのと、凧沙は頬を膨らませて

「だったら、買ってきてよー」

と言った

凧沙の言葉に、明久は深々と溜め息を吐いて

「わかったよ……太つても知らないからね？」

と言うと、リビングから出た

「太りません！」

風沙の抗議の声を聞きながら、明久は自室に戻つて財布を取ると玄関から出た
すると

「どこに行くんですか？」

という、雪菜の声が聞こえた

明久が視線を向けると、そこには半裸状態の雪菜が居た

「なんで、そんな格好なの!？」

明久が驚愕していると、雪菜は胸元を隠しながら

「シャワー浴びてる最中だったんですから、仕方ないじゃないですか!!」

と顔を赤くしながら抗議した

確かに、言われてみれば、雪菜の髪は水気がある

どうやら、明久が出掛けようとしたことに気づいて、慌てて出てきたらしい

そのことに、明久は溜め息を吐くと

「待ってるから、ちゃんと拭いて、服を着てきてよ……」

と言った

すると、雪菜はジト目で明久を睨み

「本当ですわ……?」

と問いかけてきた

「本当だから、早く着替えてきて……下手したら、僕が変態扱いされかねないから……」

雪菜からの問い掛けに、明久はそう言いながら手をヒラヒラとさせた

雪菜は数瞬間悩むと、部屋に戻っていった

そして数分後、雪菜はキッチンと服を着てその背中に、あのギターケースを背負って現れた

「よし、それじゃあ行こうか」

明久はそう言うと、雪菜を伴って歩き出した

「それで、どこに行くんですか?」

「コンビニだよ……風沙に頼まれてアイスを買に行くんだ」

明久の説明を聞いて、雪菜は納得した様子で頷いた

「コンビニですか……高神の社には無かったですね」

「高神の社ってのは、獅子王機関の?」

雪菜の言った場所を聞いて、明久は首を傾げた

「ええ……獅子王機関の育成所がある場所です」

「そっか……」

雪菜の説明を聞いて、明久は頷いてから目的地に向かって黙々と歩いた

そして、コンビニで目的のアイスを買って出ると、雪菜はコンビニ前の建物

ゲームセンターの入り口にある筐体の中を見て、動きを止めた

雪菜が止まったことに気づいて、明久も筐体、UFOキャッチャーの中に視線を向け
た

中に入っていたのは、招き猫のぬいぐるみだった

「確か、ねこまたん……だっけ……興味あるの？」

明久が問い掛けると、雪菜は慌てた様子で手をパタパタと振りながら

「い、いえー！あの、そういうわけじゃ!？」

とドモリながら、否定していた

そんな雪菜を見て、明久は微笑むと

「ちよつと待ってね……」

と言うと、お金を取り出して筐体に入れた

すると、テンポのいいBGMが鳴りますが、明久は気にせずに操作を始めた

「よし……(ハハ)だー！」

明久は意気込みと共に、降下ボタンを叩いた

すると、アームがゆっくりと下がっていき、人形の山に突っ込んだ

そして、数秒間固まってからゆっくりとアームが上がった

「よし……そのままそのまま……」

アームは確かに、ねこまたんを挟んでいた

そして数秒後、ねこまたんは取り出し口に落ちた

「はい、ゲットつと……はい」

明久は取り出し口から取り出すと、雪菜に手渡した

「あ、ありがとうございます……」

雪菜はお礼を言うと、ねこまたんを胸に抱いた

その姿は年相応の少女らしさがあり、明久は笑みを浮かべた

その時

「貴様ら……こんな時間になにをしている？」

今、一番聞きたくない声が聞こえた

その声を聞いて、二人はビシリと固まった

二人は筐体のほうに体を向けているので、声を掛けてきた人物の姿が筐体のガラスに

映った

「貴様ら……こんな時間に学生が外出していると、補導の対象になると知っているか？」

声を掛けてきたのは、彩海学園教師にして国家攻魔官

南宮那月だった

どうやら仕事帰りらしく、その手には何時も学園に持っていくカバンを持っていた
「さて、私には貴様らを補導する権利が有る……というか、そつちの茶髪は私の知つてい
る奴のような気がするんだがな？」

背後から放たれている威圧感プレッシャーに、二人はガタガタと震えた

彼女、南宮那月は空隙の魔女と呼ばれる手練れの魔術師である

雪菜ももちろん、そのことを知っているので震えている

「さて、貴様らには大人しく付いて来てもらう……」

那月がそう言いながら、一歩前に出た時だった

遙か彼方で、大爆発が起きた

「なんだ!？」

そのことに気を取られて、那月が爆発の起きた方向に視線を向けた

「今だ!」

その隙を突いて、明久は雪菜の手を取って駆け出した

「あ、こら待て! ええい……明日は覚えていろよ、吉井明久!!」

どうやら、バレていたらしい

明久は雪菜の手を握ったまま、しばらく走り続けた

そして気づけば、自宅のアパートの近くまで戻っていた

そこからでも、爆発によって起きた火災が見えている

「先輩……先ほどの爆発……」

「うん……一瞬だったけど、魔力を感じた……多分、吸血鬼だね」

雪菜が問い掛けると、明久は頷いてから答えた

雪菜は少しすると、ギターケースから雪霞狼を取り出した

「雪菜ちゃん？」

明久が懐疑的な視線を向けると、雪菜は未だに燃えている場所に視線を向けて

「私は今から、あの場所に行つてきます……先輩はここに居てください」

と言った

「雪菜ちゃんが行く必要なんて……」

明久がそこまで言うのと、雪菜は真剣な表情を浮かべて明久を見上げながら

「私は国家攻魔官です。魔族絡みの事件が起きたら、その事件を止める義務が有ります」

と言うと、再び燃えている場所に視線を向けた

「先輩は一応、一般人ですし、なにより……風沙ちゃんが待っています。ですから、ここで

別れましょう」

と言った

「でも、雪菜ちゃん……」

と明久が口ごもっている、雪菜は身を翻して

「それでは……」

と言うと、二人が居た高架橋から飛び降りて通り過ぎようとしていたモノレールの屋根に飛び乗った

そのモノレールの行き先は、丁度よく爆発の有った方向だった

「あ……」

咄嗟に手を伸ばしていた明久は、すぐに欄干から身を乗り出すようにモノレールに乗り移った雪菜を見下ろした

そして、雪菜が乗ったモノレールの行き先を見ると

「ほっとける訳ないでしょ！」

と言うと、自宅の方へと駆け出した

この時は気付かなかったが、明久は絃神島を巡る戦いに飛び込んだのだった

交戦と暴走

明久と別れて数分後、雪菜は爆発が起きた場所に到着した

その現場は激しく炎上しており、爆発が直接起きたであろう建物はもはや原形を留めていなかった

周囲の建物の雰囲気から見て、恐らくは何らかの工場だったのだろう

油断無く周囲を見回していると、雪菜は膨大な魔力の奔流を感じて視線を向けた

視線を向けた先に居たのは、魔力によって構成された全長数メートルに匹敵する巨大な猛禽類の姿だった

眷獣の近くを見回すと、一人のスーツ姿の男性を発見した

間違い無く、召喚した吸血鬼だろう

その吸血鬼に対して、雪菜が突撃しようとした時

再び魔力の奔流を感じた

その直後、巨大な猛禽類の眷獣を更に巨大な虹色の腕が殴り飛ばした

「もう一体!？」

驚きで雪菜が足を止めていると、驚愕の事態が起きた

虹色の腕が猛禽類を掴むと、猛禽類が徐々に弱まっていったのだ

「まさか……魔力を奪ってる!？」

雪菜が驚愕している間にも、腕の脊獣は確実に猛禽類の脊獣から魔力を奪いとった

そして、猛禽類の姿が掻き消えると

「ぐあつ……!？」

という叫びが聞こえた

声のした方に視線を向けると、先ほどの吸血鬼が出血を伴って倒れていた

その吸血鬼の近くには、マントを羽織り小さな片眼鏡を掛けた大柄な男が居た

そして、その男の手には血に濡れた斧が握らていた

しかもその男は、吸血鬼に対して斧を振り上げた

それを見た雪菜は、槍を構えて男と吸血鬼の間に立ちはだかった

「……なんのつもりだ？」

「無抵抗の魔族に対する攻撃は、国家攻魔法及び聖域条約に違反しています」

男の疑問の言葉に対して、雪菜はそう返した

すると、男は鼻で笑い

「魔族を守る条約など、この口タリンギアの織教師……ルードルフ・オイスタツハに守る

義務無し!」

と言った

「ロタリンギア!? 欧州の攻魔官がなぜ日本に!？」

「答える義務無し!」

雪菜の疑問にルードルフは答えず、斧を構えて突撃した

「その魔族を助けたいならば、命を懸けて助けてみよ!」

ルードルフはそう言うのと、斧を雪菜目掛けて振り下ろした

だが雪菜は斧を軽く避けると、雪霞狼による刺突を放った

「む!？」

ルードルフはそれをなんとか斧で防ぐが、そこから雪菜の連撃が始まった

突き、斬撃、薙払い

それらの攻撃が常人には視認することすら不可能な速度で、次々と繰り出された

「ぬ……オオオオオ!」

ルードルフは耐えきると、雪菜に対して斧を振るった

だが、雪菜はそれを大きく後ろに飛んで避けた

そう、まるで《先を読んだように》

「その槍に霊視……まさか、獅子王機関の劍巫けんまか!？」

ルードルフは雪菜の正体を察して、雪菜を睨んだ

「警告します。今すぐに投降してください」

雪菜が投降勧告するが、ルードルフは意に介さず立ち上がり

「アクセプトここで会えるとは、なんとたる僥倖……アスタルテ！」

「命令受諾」

ルードルフの呼び声に応じて、一人の少女が現れた

その少女は淡々と返答すると、背中から先ほど見た虹色の腕を出して雪菜目掛けて繰り出した

「っー」

雪菜は腕を迎撃するために雪霞狼を繰り出すが、雪霞狼の穂先は腕の表面で止まり、共鳴現象を起こした

「共鳴現象!? まさか、その眷獣は!?」

雪菜が驚愕していると、ルードルフは口端を吊り上げて

「いかにも! 獅子王機関が開発した神格振動波駆動術式です。とはいえ、オリジナルには劣るコピーですがね!」

と語って、少女、アスタルテに視線を向けて

「アスタルテ、彼女に慈悲を!」

と命令した

「命令受諾」
アクセプト

アスタルテは頷くと、苦痛を堪えるような表情を浮かべた

その直後、もう一本同じ腕が現れて雪菜目掛けて繰り出された

（しまった！ 避けられない！）

今現在、雪菜は最初の腕と膠着状態にあつて身動きが出来ない状態だった

雪菜に腕が近づき、当たると思つた時

「ちよいさー！」

という声と共に、腕が別の方向に弾かれた

「よし、間に合つた！」

そう言つたのは、肩に竹刀袋を担いだ明久だった

「先輩!？」

雪菜が驚いていると、明久は雪菜に軽く手刀を当てて

「まったく、雪菜ちゃんが戦つてどうするのさ」

と言つた

明久の言葉に雪菜が口ごもっていると、ルードルフは目を細めながら明久を見た

「貴様……ただの人間ではないな。何者だ？」

「人に訪ねるより先に、自分が名乗つたら？」

ルードルフにそう返すが、ルードルフは答えなかった
すると、雪菜が

「先輩、彼はロタリングアの織教師。ルードルフ・オイスタツハだそうです」
と教えた

「ロタリングア？ 欧州の人がなんで日本に？」

雪菜の説明を聞いて、明久は首を傾げながら竹刀袋の紐を解いて中から刀を取り出した
た

「この魔力値……貴族を超えている……旧き世代……いや、そういうえば日本に第四真祖
が現れたという情報があったな……」

ルードルフは呟くように言うと、明久を見て

「まさか……第四真祖か！」

と叫んだ

明久は刀を鞘から抜くと、八相の構えを取った

「せ、先輩？ ……その刀は？」

と雪菜は、明久が持っている刀を指差した

「ん、これ？ 父さんがグレーなフィールドワークで手に入れて家に置いていった刀の

一本……確か……雷切」

雪菜の問い掛けに対して、明久はそう答えた

雷切

この刀は昔、戦国時代に立花道雪が使ったとされる刀で、逸話としては、雷を切つたとされる刀である

その証拠と言うべきか、その刀は放電を始めた

「雷切つて……国宝の筈……」

雪菜が呟いていると、明久の一撃で行動を止めていたアスタルテが明久に視線を向けて

「再起動完了……命令再履攻……エクスキュート 執ロドダグ・キュロス 行、薔薇の指先」

と呟いて、二本の腕を明久めが繰り出した

「待ちなさい、アスタルテ！」

ルードルフが止めるが間に合わず、明久目掛けて腕が肉薄した

「っ！」

明久は最初に迫つた右腕を刀で弾くが、もう一本の迎撃が間に合わず、後ろに飛んで避けようとした

だが、アスタルテが咄嗟に左手を開いたので、爪が明久の胸部を切り裂いた
その直後、明久が顔を青ざめた

「待って……出てくるな……っ！」

明久はまるで、家の中の子供に言い聞かせるように呟いた

「や……やめ……っ！　ぐっ……アアアアアアア！」

明久が叫んだ直後、明久の全身から雷光が溢れ出た

「先輩!？」

雪菜は驚きで固まり、ルードルフは右腕を顔の前に掲げると

「これは拙い……アスタルテ！」

「命令受諾」
アクセプト

とアスタルテと共に逃げ出した

雪菜は二人が逃げるのに気付いたが、今は明久のほうが心配だったようで、その場に

留まった

「先輩！　先輩!!」

雪菜が繰り返し呼んでいると、徐々に明久から溢れていた雷が収まり始めた

そして、完全に収まると明久は力無く倒れた

「先輩！」

雪菜は駆け寄ると、明久を抱き起こした

どうやら明久は意識を失ったらしく、規則正しく呼吸を繰り返していた

その事に雪菜は安堵すると、焼け野原と化した周囲を見回して
「どうしろって言うんですか……」

と弱々しく呟いた

こうして、おバカな第四真祖の物語は始まったのだった

一日の始まり

ルードルフとの交戦の翌日

明久と雪菜は二人で学校に向かっていた

その理由は、今日が夏休み期間に設けられた登校日だからである

二人は炎天下の中、学校に向かって歩いていった

「被害総額、五百億円だそうですよ。先輩」

雪菜はそう言いながら、ビルの壁面にある巨大な画面を見ていた

ニュースキャスターが紙を見ながら声を出しているが、周囲が煩いので詳しくは聞かえない

だが、画面下部に《昨日起きた落雷により、アイランドサウスの工業地帯とライフラインに甚大な被害が発生しており、未だに復旧には至っておりません。人工島管理公社の発表によりますと、被害総額は五百億円は下らないとなっております……》

という文章が右から左へと流れている

「まあ、先輩は不老不死ですから五百年位タダ働きすれば、全額返済出来るかと……つて、聞いてますか。先輩？」

「聞いてる聞いてます聞いてますよの三段活用……というか、僕だって好きであんなことをしたわけじゃ……!」

雪菜の問い掛けに明久は頷くと、近くの電信柱にキツツキみたいに頭を打ちつけ始めた

「分かりましたから、止めてください。周りの視線が凄いですから」

雪菜が宥めると、明久は頭を打ちつけるのを止めて再び歩き出した

「それにしても……街中で眷獣を暴走させたら、ああなるって分かってた筈ですよ? それなのに、なんで制御しなかったんですか?」

雪菜が苦言を言うと、明久は洗面を浮かべて

「確かに、あの雷は僕の眷獣だけどき……使役してるのと使えるってのは、別でしょ?」
と言った

「どういうことですか?」

明久の言葉の意味が分からなかったのか、雪菜は首を傾げた

「つまりさ……雷を含めて、僕の中に居る眷獣達は、僕を使い手だって認めてないんだ」
明久の言葉を聞いて、雪菜は目を見開いた

「使い手とは、認めてない!?!」

「そ……つまり、眷獣達にとって今の僕はタダのパートみたいな感じなんだよね」

明久がそう言うのと、雪菜は明久の前に出て

「どういうことですか!?! 　　なんで、先輩を使い手だつて認めてないんですか!?!」
と詰め寄つた

明久はそんな雪菜を宥めながら、深々と溜め息を吐いて

「まあ、理由としては……僕が一回も血を吸つたことがないから……かな?」
と言つた

すると、雪菜は怪訝そうな表情を浮かべて

「血を吸つたことがないんですか?　　吸血鬼なのに?」

と首を傾げた

雪菜の言葉に、明久は唇を尖らせて

「前にも説明したと思うけど、僕は春まで普通の人間だつたんだよ?　　それなのに、吸血鬼になったから血を吸えつて言われてもね……いきなりは無理だよ……」

と明久は言つた

すると雪菜は、顎に手を当てて数秒間黙考すると

「やはり、先輩は危険です」

と言つた

「ん?」

雪菜の言葉に明久が首を傾げていると、雪菜は真剣な表情で

「今の話が本当だとしたら、先輩は、私が思っていた以上に危険な存在ですね……どうにかして、きちんと眷獣達を制御出来るようになってもらわないと……」

と呟いた

明久はそんな雪菜を見て

「雪菜ちゃんつてさ、変わってるよね」

「えっ……そうですか？」

明久の言葉を聞いて、雪菜は目を丸くした

「そんなこと、先輩だけには言われたくないですけど。私のどこが変わってるんですか？」

「だってさ……今の僕の話の聞いたら普通は違うと思うよ？ 眷獣達を制御出来ない吸血鬼なんて、危険だから近づかないようにするとか、いつそ討伐しようとか、位に考える人が居るって聞いたよ？」

明久が苦笑混じりにそう言うと、雪菜は胸元に手を当てて

「そうですか？ 言われてみればそんな気もしますけど……でも、相手は先輩ですから」

「……ねえ、どういう意味さ？」

明久が問い掛けると、雪菜は何かを思い出すように

「いえ、別に深い意味は。ただ、そんなに悪い吸血鬼《ヒト》ではないと思うので……ただ、少しだらしなくて、たまにイヤらしいだけで」

と言った

それが冗談ではないと思い、明久は深々と溜め息を吐いた

そして、学園に到着すると

「あ、明久」

「お？　噂の転校生と一緒に登校か？」

という声が聞こえた

明久が視線を向けると、そこに居たのは一組の男女だった

片方は制服を校則ギリギリまで改造して、茶髪にピアスを付けた少女

名前は藍羽浅葱

明久のクラスメイトの一人であり、明久は知らないが通称で《電子の女帝》と呼ばれ

ている少女だ

もう一人は逆立った髪に首に掛けたヘッドホンが特徴の男子だった

名前は矢瀬基樹

陽気な友人で、明久とは何かと話が合う男子だ

「あ、浅葱に基樹じゃん。おはよう」

明久が挨拶すると、基樹は片手を上げて

「おーっす」

と軽い感じで挨拶して、浅葱は顔に掛かった髪を右手で払ってから

「おはよう、明久」

と挨拶した

そして浅葱は視線を雪菜に向けて

「明久。その子は？」

と問い掛けた

明久は一瞬雪菜を見るが、雪菜は首を振った

すると、明久は頷いてから

「ウチの隣に引っ越してきた、姫終雪菜ちゃん」

と無難に紹介した

明久が紹介すると、雪菜は軽く頭を下げながら

「初めまして、先輩方。姫終雪菜と言います。吉井先輩の家の隣に引っ越してきました、まだ学校までの道がうる覚えだったので、案内してもらいました」

雪菜がそう紹介すると、まずは基樹が右手を出して

「おう、よろしくな。俺は明久の親友の矢瀬基樹だ。んで、こっちは藍羽浅葱」

「よろしくね」

基樹が紹介すると、浅葱は手をヒラヒラさせながら挨拶してから欠伸をした
「どうしたの、浅葱。眠そうだね？」

明久が問い掛けると、浅葱は眠そうに目元をこすりながら

「そうなのよ……昨日の事故でシステムが吹っ飛んだとかで、いきなり呼ばれて復旧に
今朝方まで掛かったのよ……安いモノを使うからあなるんでしようが……」

浅葱が欠伸混じりに文句を言うと、明久は冷や汗をダラダラと流して
「そ、そっか……うん、お疲れ様。浅葱」

と浅葱を労った

雪菜はそんな明久を、目を細めて睨んでいる

すると、浅葱は再び欠伸をして

「ダメ……やっぱり眠い……」

と言うと、フラフラと揺れ始めた

「浅葱。こんな所で寝るなよ……明久、悪いんだが浅葱を教室まで運ぶぞ」

「了解」

罪悪感もあり基樹からの要請に明久は頷くと、浅葱が落としたカバンを拾ってから

「それじゃあね、雪菜ちゃん」

と雪菜に言うと、浅葱を基樹と一緒に担いで運び始めた

雪菜は明久達が高等部の入り口に入ったのを確認すると、自身は中等部の入り口に入った

こうして、また一日が始まった

情報収集

数分後、明久と基樹の二人は浅葱を引きずりながら教室に到着した

なお、浅葱は数分間引きずられたというのに一回も起きなかった

そこから、相当眠かったのだらうと明久は分かって、心中で再び謝ってから席に座った

すると、数人の男子が集まり

「朝から大分お疲れみたいだな」

「……大丈夫か？」

「お疲れなのじゃ」

と明久を労ってきた

「ありがとう」

明久は労ってきた友人達、坂本雄二、土屋康太、木下秀吉に感謝の言葉を告げた

「しかし、噂の転校生と一緒に登校とはな」

「……羨ましい」

雄二と康太の言葉に、秀吉は腕組みしながら頷いている

「噂の転校生？」

明久が問い掛けると、秀吉が頷いてから

「うむ。中等部の聖女と並ぶ美少女で、中等部だけでなく高等部の男子も見に行くほどじゃ」

と説明した

「そつか……まあ、確かに美少女だよな」

と明久が納得したタイミングで、チャイムが鳴った

入ってきたのは、西村だった

「席に座らないと、欠席にするぞ！」

西村がそう言うのと、雄二達は急いで席へと戻った

「藍羽は……寝ているのか……まあ、管理公社から連絡は受けているがな」

西村はそう言うのと、出席簿に何かしら書き込んだ

そこを皮切りに、出席確認が終わり、当たり障りのない話をして、西村は出席簿を持つと教室から去ろうとした

その時、視線を明久に向けて

「吉井、後で南宮先生の所に行くように。呼んでいたぞ」

と言って、教室を去った

西村の言葉を聞いて、明久は深々とため息を吐いた。そして、昼食を食べると明久は職員室へと向かったが

「南宮先生の執務室なら、最上階だよ？」

と笹崎先生に言われて、最上階へと向かった

途中で雪菜と出会った

「雪菜ちゃん？」

「あ、先輩……先輩も呼ばれたんですか？」

雪菜の言葉に明久は頷いて、溜め息混じりに

「どう考えても、昨日のことだよね……」

と言いながら、最上階に到着した

「……何、この豪華なドアは？」

明久は那月の執務室のドアを見て、思わず眩いた

そこにあつたのは、豪華にして大きな木製のドアだった

「那月ちゃん……入りますよ……」

と言いながら、明久はドアを開けた

その直後、扇子が明久の額に直撃した

「教師をちゃん付けするな」

明久は悶絶しているが、那月は無視して書類にサインをしていた

「南宮先生、お呼びした要件は一体？」

雪菜が問い掛けると、那月は視線を二人に向けて

「いやなに、昨日の事件は知っているな？」

と問い掛けた

すると、ようやく立ち直った明久も頷いた

「吸血鬼コウモリを襲っている奴が確認されたからな、念の為にそのバカに忠告をしとこうと

思ってたな」

と明久を指差した

「南宮先生、先輩が吸血鬼だって知ってたんですか？」

那月の言葉を聞いて、雪菜は問い掛けた

「ああ……吉井、気をつけろよ」

「了解です」

那月の言葉に明久は後頭部を掻きながら、気を抜いた感じで返答した

「話は終わりですよ？ それでは」

明久はそう言うのと、踵を返して執務室から出ようとした

「ああ……待て、お前ら」

那月の呼び声に反応して、二人は振り向いた

その直後、雪菜の目前に招き猫のぬいぐるみが見れた

雪菜は落ち始めたぬいぐるみを慌てて掴むと、嬉しそうに抱き締めて

「ね、またん……」

と呟いた

そして、数瞬後にハツとした

それは、昨日に雪菜と明久が逃げ出した時に落とされたぬいぐるみだった

二人を見て、那月はニヤリと笑みを浮かべて

「今回は見逃してやるさ……転校生が吉井を回収してくれたからな」

と言った

どうやら、アイランド・ガードが来る前に雪菜が明久を回収したお礼らしい

「要件は終わった。さっさと帰れ」

那月はそう言うと、再び書類の処理を始めた

そして、二人は那月の執務室から去った

だが、二人は帰らずに食堂へと向かっていた

「先輩、帰らないんですか？」

雪菜が問い掛けると、明久は頷いて

「うん……那月ちゃんは言わなかったけど、多分、あのオッサンはここ数日襲撃してたはずだよ」

明久がそう言うと、雪菜は目を見開いた

「風沙が言ってたんだけど、登録魔族の怪我人が多く出てたんだって」
「なるほど……」

風沙のおしゃべり好きを思い出して、雪菜は納得した様子で頷いた

「だから、先にちよつと情報収集しようかなって」

「情報収集ですか……」

雪菜の言葉に明久は頷いて

「僕の知り合いに、情報収集が得意な人が何人か居るんだ」

二人が会話している内に、食堂へと到着した

そこでは、驚きの光景が広がっていた

一人の少女の前に料理が山盛りされた皿が、幾つもあつた

「ヤッホー、浅葱」

「あら、明久」

大量の料理を食べていたのは、浅葱だった

浅葱はかなり細いが、平均男子よりもかなり大食いなのである
見慣れた明久は普通だが、雪菜は驚愕で目を見開いて固まった

「あ、明久。運んでくれてありがとうね」

「いやいや……それより、ちよつとお願いがあるんだ」

明久の言葉を聞いて、浅葱は首を傾げた

「なによ?」

「ちよつと、ロタリングアの会社のことを調べてほしいんだ」

明久の頼みが予想外だったのか、浅葱は片眉を上げた

「ロタリングアの会社? どうしてよ?」

「うん。ちよつと、課題を出されちゃってさ。夏休み中にも、ちよつと見学に行こうか
なって」

明久の言葉を聞いて、浅葱は納得した様子で端末を操作し始めた

明久の課題の多さは浅葱も知っており、度々手伝っていたのだ

数秒すると、浅葱は首を傾げた

「あれ? 珍しいわね……ロタリングアの企業、島内にはないわね」

「え、無いの?」

明久の言葉に、浅葱は頷いて

「ええ……有ったとしても、既に撤退してるわね」

浅葱の言葉に、明久は端末を覗き込みながら

「どい？」

と問い掛けた

「ここよ。アイランド・イーストの製薬会社跡」

浅葱の説明を聞いて、明久は顎に手を当ててから

「撤退してたんじゃ、仕方ないかなあ……自分でなんとかしようっと」

と言った

「あたしも手伝いましょうか？」

「行き詰まったら、お願いするね」

明久はそう言うのと、お礼として五百円を置いて食堂から去った

交戦と死

明久が戻ると、雪菜は近寄り

「どうでした？」

と問い掛けた

「島内にロタリンギアの会社は無いね。有ったとしても、既に撤退してた」

明久が浅葱から得た情報を説明すると、雪菜は顎に手を当てて

「だったら、獅子王機関に問い合わせで、ロタリンギア系の教会などを教えてもらいましょう」

と言った

だが、明久は首を振って

「その企業跡に行ってみよ」

と言った

「どうしてですか？」

雪菜が問いかけると、明久は人差し指を立てて

「テレビや漫画だと、表向きは機能停止してるけど実際は稼働してて使える。ってパ

ターンが有ってね。まあ、もしかしたら居るかもよ？　　つて位だね」

と言った

明久の言葉を聞いて、雪菜は驚いた様子で

「驚きました……先輩がそこまで機転が回るなんて」

「そこはかとなく馬鹿にしてないかな？」

雪菜の言葉を聞いて、明久は思わずそう言った

しかし、雪菜は明久の言葉を聞き流して

「それで、場所はどこなんですか？」

と明久に問い掛けた

明久はため息を吐くと、後頭部を搔いてから

「アイランド・イーストの旧製薬会社跡」

と告げた

数十分後、明久と雪菜は件の製薬会社跡に来ていた

しかし、見た感じでは如何にも使われてません

といった感じで、窓ガラスも所々割れており、何よりもドアを鎖と南京錠で閉められていた

その光景を見て、明久は腕組みして

「うーん……ここじゃなかったか」

と半ば諦めた様子に、明久は呟いた

だが、雪菜は槍を取り出すとドアに近づいて

「いえ、先輩。当たり前です」

と言うと、槍の切っ先でドアを軽く刺した

その直後、キーンというガラスを引つ掻いたような音が響き渡って、景色が変わった
先ほどまで閉まっていたドアが、開いていた

「これは……」

明久が驚きで固まっていると、雪菜は呆れた様子で

「初歩的な幻術ですよ、先輩。魔力を感じなかったんですか？」

と明久に視線を向けた

「あのね、前にも言ったと思うけどさ。僕は春先までは、一般人だったん……って、聞いてないね」

明久が抗議するが、雪菜は無視して中に入っていく、明久も後を追って中に入った
やはり廃墟だったのだろう

そこかしこに薬剤の瓶やら、何らかの器具などが転がっている

さらに進むと、割れたガラス容器

培養槽が見えた

「培養槽……？ 何に使ってたんでしょうか……」

「人造人間ホムンクルスだよ。確か、治験に使う為に一部の企業が使ってるらしいよ」

雪菜の疑問に対して、明久はウロ覚えながら答えた

聖域条約が結ばれてから、人造人間技術とクローニング技術が発達した

だが、倫理的問題とコストの問題から人造人間技術が生き残った

だが、それでも色々な問題が有って広くは普及しなかった

だが、それでも製薬系の企業にとっては大助かりだった

新しい薬の治験などに、一般人を使う必要が無かったからである

そして、先日襲撃してきたルードルフが連れていたのは、人造人間の少女だと雪菜は明久に教えていた

そして奥へと進んでいると、稼働している設備があり、その設備の中に不思議の生物が浮いているのを見つけた

一つは腕が四本ある猿で、また一つは上半身が女性で下半身が魚のような見た目の生物だった

それらは全て、自然界には存在しない筈の生物だった

「これは……」

雪菜は呆然とした様子で培養槽に触れるが、明久はギリツと歯を鳴らした
ルードルフが何をしたのか、わかってしまったからである

その時だった

「警告します……」

という声が聞こえて、明久と雪菜は振り向いた

そこに居たのは、手術衣のような服を着た少女

アスタルテだった

「先輩、見ちゃダメです！」

「はへ？」

雪菜の言葉の意図が分からず、明久はマヌケな声を漏らした

だが、雪菜の言葉の意味を察した

よく見たら、アスタルテは濡れており、着ている手術衣は透けていたのだ

「先輩……」

「今回は偶然でしょ!?!」

雪菜がジト目で睨みつけると、明久は叫んでからアスタルテに視線を向けた

「警告します……今すぐ、この島より退避して下さい」

アスタルテのその言葉に、明久は眉をひそめた

「どういふこと?」

明久が問いかけると、アスタルテは無機質な声で

「この島は、龍脈の交差する南海に浮かぶ儂き仮初めの大地。要を失えば、滅びるのみ

……」

「え?」

アスタルテの詩的な言葉に、雪菜は驚きの声を漏らして、明久は訳が分からずに首を傾げた

その時、アスタルテの背後に大柄な男

ルードルフが現れた

「……然様。我らの望みは、要とした祀られし不朽の至宝。そして今や、その宿願を叶える力を得ました。獅子王機関の劍巫よ、貴方のおかげです」

身構えていた雪菜に対して、ルードルフは斧を向けながらそう言った

ルードルフの言葉に雪菜は困惑していたが、明久は拳を握りしめながら

「力を得た……だって……? それはもしかして、その子の体内に埋め込んだヤツのこと?」

「先輩?」

初めて聞いた怒りが滲んだ声に、雪菜は動揺して明久を見た

明久は雪菜の前に出て、怒りが籠もった目でルードルフを睨んだ

だが、ルードルフはそんな明久を無関心に見ながら

「気付きましたか。さすがは第四真祖と言っておきましょう。しかし、もはや貴方といえども、私たちの敵ではありません。我らの前に障害はなし」

「ふっざけるなあああ!!」

ルードルフの言葉を聞いて、明久は怒りの雄叫びを上げた

それと同時に、明久の怒りに呼応して、明久の全身から電流が溢れ出した

「先輩!」

明久から溢れ出した魔力と電流に、雪菜は驚愕した

だが、明久はそんな雪菜に気づかず、ルードルフを睨んで

「アンタ、その子に眷獣を植え付けたな!」

と怒鳴った

「え!」

明久の言葉を聞いて、雪菜は視線をアスタルテに向けた

そして、周囲の培養槽の中で浮かんでいる異形の生物達を

それらは全て、人造人間に眷獣を寄生させた成れの果てだったのだ

「如何にもその通り! 自らの血の中に、眷属たる獣を従えるのは吸血鬼のみ。ですが

私は、捕獲した孵化前の脊獣を寄生させることによって、脊獣を宿した人造人間を生出すことに成功したのです……成功例は、そこに居るアスタルテだけです」

「黙れええ！」

傲然とした態度のルードルフに、明久は怒鳴った

「どうして吸血鬼以外に脊獣を使役出来る魔族が居ないのか、アンタだって知らないわけないでしょ!?! 分かっててそんなことをやったのか!?!」

明久が怒りを露わにするが、ルードルフは受け流して

「もちろんですとも。脊獣は実体化する際に、凄まじい勢いで宿主の生命を喰らう。それを飼い慣らせるのは、無限の負の生命力を持つ吸血鬼だけだと言いたいのでしよう?」

「だったら、その子は……」

ルードルフの説明を聞いて、雪菜は信じられないといった表情でアスタルテを見た
「ロドダクテュロスを宿している限り、残りの寿命はそう長くはないでしょう。保つてせいぜい二週間といったところでしょうか。これでも倒した魔族を喰らって、ずいぶんと引き延ばしたのですがね……しかし、私たちの目的を果たすためには十分です」

ルードルフの言葉に、明久は怒りで言葉を無くした

だが、明久の代わりに雪菜が自身の想像に怯えるように

「魔族を……喰ったって……まさか、この島で魔族を襲っていたのは……」

と途切れ途切れに、言葉を紡いだ

「そう。一つは、彼らの魔力を眷獣の生き餌にするためでした。そしてもう一つの理由は、アスタルテに刻印した術式を完成させるために……獅子王機関の剣巫よ、その槍を持つ貴方との戦いは、素晴らしく貴重なサンプルになりました」

ルードルフのその言葉に、雪菜は肩を震わせて

「そんな……そんな……そんな……の為だけに、その子を育てていたんですか、あなたは!!
まるで彼女を道具みたいに!!」

雪菜の怒りの言葉に、ルードルフは愉快そうに笑みを浮かべて

「なぜ怒るのですか、剣巫よ? 貴方もまた獅子王機関によって育てられた道具ではありませんか?」

「……それはっ……!!」

ルードルフの言葉に、雪菜は息を呑んだ

「不要な赤子を金で買い取って、ただひたすらに魔族に対抗するための技術を仕込む。そして戦場に送り出す。まるで、使い捨ての道具のように……それが獅子王機関のやり口なのでしょう? 剣巫よ、その歳で、それほどの攻魔の術を手に入れるために、貴方はなにを犠牲に捧げたのです?」

ルードルフのその言葉は、雪菜の心を深く抉った

雪菜は無言で唇を噛み締めて、槍を握り締めた

雪菜が顔面蒼白で俯いていると、明久がルードルフを睨み付けて

「黙れよ、アンタ……」

と呟くように言うが、ルードルフは表情を変えずに

「道具として作り出したものを道具として使う私と、神の祝福を受けて生まれた人を道具のように貶める貴方達。いずれが、罪深き存在でしょうか？」

「黙れって言ってるだろうが、腐れ神父ポウズがああ!!」

怒りで明久が咆哮した直後、明久を包んでいた雷光が青白い光に変わった

特に、握り締めた左手を濃密な雷光を放っていた

ありふれた高校生だった筈の明久の姿が、撒き散らされた濃密な魔力によって何倍にも膨れ上がっている程に錯覚した

それは、明久が初めてみせた吸血鬼としての権能だった

自らの身体を媒介にして、眷獣の一部を実体化させたのだ

「先輩!？」

先ほどよりも濃密な魔力に雪菜は驚愕し、ルードルフは斧を構えた

「ほう……眷獣の魔力が、宿主の怒りに呼応しているのですか……これが第四真祖の力

……いいでしょう……アスタルテ！ 彼らに慈悲を！

「……命令受諾」
アクセプト

創造主たる殲教師の命令に従い、人造人間の少女は明久の前に立ちはだかったアスタルテの小さい身体から、巨大な脊獣がまるで陽炎のように姿を現した

虹色に輝く半透明の巨体

今はもはや腕だけでなく、ほぼ全身が出現していた

体長は約五メートル

全身を分厚い肉の鎧で覆った、顔のないゴーレムだった

宿主である少女を身体の中に取り込み、人型の脊獣が咆哮した

「君も大人しく、従ってるんじゃないー！」

明久は雷撃を纏った拳で、そのゴーレムに殴りかかった

ほんの僅かに漏れた程度とはいえ、その雷撃は第四真祖の脊獣の力だ

まともに喰らったら、普通は消し炭になるだろう

「ダメです、先輩！」

明久が飛びかかった直後、雪菜は思わず叫んでいた

だが、次の瞬間に吹き飛んでいたのは、明久だった

「がっ……あー！」

吹き飛んだ明久の肉体は、まるでボールのように二度三度と床を跳ねた。倒れた明久の身体から、白い蒸気と肉の焼ける臭いが雪菜の下まで来た。その姿はまるで、雷に打たれたような自身の魔力に焼かれたような姿だった。

「先輩っ！」

倒れた明久を庇うために、雪菜はアスタルテへと突撃した。

解放された雪菜の呪力に反応して、槍の穂先が青白い光に包まれた。

真祖の眷獣すら滅ぼす降魔の光。

いかなる魔族の権能をもってしても、この槍の一撃は防げない。

その筈だった。

「雪霞狼が……止められた!？」

雪菜の一撃が、完全に体表で止まっていた。

前の一撃は、僅かとはいえ突き刺さったのに。

しかも、前に起こっていた共鳴が更に強くなっていた。

「まさか!？」

「そうです、剣巫よ。魔力を無効化し、あらゆる結界を切り裂く神格振動波駆動術式……世界で唯一、獅子王機関が実用化に成功していた、対魔族戦闘の切り札を完成させまし

た。貴方との戦闘データを参考に、ようやく完成させました」

ルードルフの満足そうな笑い声に、雪菜は激しく動揺した

ルードルフが求めていたのは、神格振動波駆動術式だったのだ

そして、ルードルフ達は雪菜と戦ったことで、世界で唯一神格振動波駆動術式を実用化した雪霞狼と戦ったことで、詳細なデータを得てしまったのだ

「そんな……わたしのせいでは……」

ルードルフに機密事項たる神格振動波駆動術式のデータを渡してしまったことを、自分のミスと思い、雪菜は戦意を喪失

その結果、雪菜はダラリと槍を下ろした

そんな雪菜を見て、ルードルフは斧を高々と掲げて

「さらばだ、娘。獅子王機関の憐れな傀儡よ……せめて、魔族ではなく、人である我が手にかかって死になさい」

「……っ！ しまっ！」

戦意を喪失し、意識を乱していた雪菜は、ルードルフの攻撃に対処するのが遅れたルードルフも降魔官の一人である

その攻撃速度は、人の域を超えていた

もはや迎撃も間に合わず、回避すら間に合わない

ルードルフの振り下ろした刃が雪菜に迫った直後、雪菜の身体を鈍い衝撃が襲った
そして、雪菜の顔に生温い液体が掛かった

それは、赤い液体

つまりは、血だった

だが、それは雪菜の血ではない

その血は、雪菜の目前にてルードルフの刃が胸部まで食い込んだ明久のものだった

「……ガハッ！」

「……先……輩？」

明久が口から血を吐き出すと、雪菜は呆然とした

目の前の光景を信じたくなくて、雪菜は首を左右に振った

ルードルフはその光景を見ても、無表情なままだった

「……ふんっ」

そして、明久に食い込んでいた斧に更に力を加えた

「ガアアアア!?!」

「先輩!」

ルードルフが力を込めた斧は明久の身体を切り裂き、明久は血を大量に吐き出しながら前に倒れ、雪菜は明久を受け止めた

だが、ブチブチという音がして、雪菜の腕の中に残ったのは、明久の頭だけだった。明久の身体は雪菜の眼前で、二つに切り裂かれていて、腕の中の明久の頭の瞳は光を無くしていた

「先輩……？ そんな……嫌……嫌ああああ!!」

雪菜は明久が死んだのを信じたくなくて、明久の頭を抱き締めながら泣き叫んだ。ルードルフはそんな雪菜を見て、再び斧を振り上げるが数秒すると下ろして

「行きますよ、アスタルテ……いよいよ、我らの至宝を取り戻すのです！」

と雪菜に背を向けた

「……命令受諾……」
アクセプト

アスタルテは機械質的に返答すると、雪菜に顔を向けた

その顔はまるで、雪菜に早く逃げてと言っているようだった

復活

「つたく……2日連続で呼び出すなんて！」

そう悪態を吐いたのは、この部屋の主と言っても過言ではない美少女

藍羽浅葱である

彼女が居るのは、人工島管理公社の本部

キーストーン・ゲートの地下深く

サーバールームである

彼女は学校からの帰り道、寄り道して帰ろうと思っていたら、人工島管理公社から呼び出されたのである

内容としては、モノレールの運行プログラムに不具合が発生して、我々には手に負えないので、助けてほしい

というものだった

どうやら、先日の落雷の影響が残っていたらしい

そして、その修正が終わり背伸びをした時だった

ズズンという鈍い音と共に、部屋が揺れた

「なに、今の……モグワイ！」

彼女が名前を呼ぶと、メインモニターに不細工なコアアのような姿のアバターが映った

このアバターが、今彼女が使っているスーパーコンピュータの管理AI、モグワイである

「今の揺れはなに？」

浅葱が問いかけると、モグワイは数秒してから

『驚いたな……侵入者だ』

と何とも人間くさく言った

「侵入者!? 未登録魔族のテロリスト? それとも、どこかの夜の帝国ドミニオンの軍隊でも侵攻してきたの?」

浅葱は一瞬驚くが、すぐに気を持ち直してモグワイに問い掛けた

何せ、このキーストーン・ゲートにはアイランドガードの精鋭二個大隊が常駐しており、並大抵の軍隊やテロリストならば、簡単に撃退できるのだ

だが

『いや、侵入者はたった二人だ……しかも、神父と眷獣を宿したホムンクルスの二人』
というモグワイの言葉を聞いて、浅葱は驚愕した

たった二人に侵入を許したというのは、この島でも初めてだったからだ

『しかもさっきの揺れは、そいつらとの戦闘で支柱の一本が折れたみたいだな』

「支柱が折れた!？」

モグワイの言葉を聞いて、浅葱は再び驚愕した

ここ、キーストーン・ゲートはテロや侵攻を想定して建造されたので、軒並み耐久性は高く作られている

その中でも、支柱はプラスチック爆弾を使っても破壊されない。という謳い文句だった

それが折れたなど、浅葱は初めて聞いたのだ

『今エレベーターやエスカレーターをオススメしないぜ、嬢ちゃん。奴らと鉢合わせする確率が高すぎるからな』

モグワイはそう言うと、非常階段を使った避難ルートを表示した

「そのルートなら、鉢合わせする確率は低いつてこと?。」

『一応な』

モグワイの言葉を聞いて、浅葱は少し考えると

「OK、そのルートで脱出するわよ!。」

と言うと、愛用のノートパソコンと端末を持って立ち上がった

場所は変わって、旧製薬会社跡

「先輩……起きてください。先輩」

「後五分……」

なんともベタな寝言を聞いて、雪菜は深々とため息を吐いてから

「いい加減に、起きてくださいー!」

明久の頭に、拳を振り下ろした

「あ痛っ!?!」

殴られた明久は、殴られた部分を抑えながら跳ね起きた

「あ、雪菜ちゃん」

「ようやくお目覚めですか……」

惚けた様子の明久に、雪菜は深々とため息を吐いた

その間に明久は周囲を見回して

「(ハハ)は……?」

と雪菜に問い掛けた

「どうやら、彼らが休憩所として使っていたらしい部屋です」

雪菜が答えると、明久は何があったのか思い出したらしい

「ああ……そっか、僕……一回死んだのか」

と呟いた

「そうです……ルードルフの攻撃を受けて、死んでました……」

雪菜はそこまで言うのと、涙混じりで明久を睨んで

「生き返るなら生き返るつて、先に言ってから死んでくださいよ！ 私がどれだけ心配したと思ってるんですか！」

となんとも、ハチャメチャなことを叫びながら明久をポカポカと叩いた

「ごめんごめん……けど、これでアヴローラが言ってくれたことがようやく分かったよ……」

「先代の第四真祖が言ってくれたこと？」

明久の言葉を聞いて、雪菜は首を傾げた

「そ……真祖にとつて、不死というのは権能じゃない。呪いだつてね……ああ、これは恨むよ……アヴローラ……」

「先輩……」

雪菜が心配そうに声を掛けると、明久は天井を見上げて

「死にたくなつても死ねないし、年も取らない……だから、周りの人達に置いていかれる……これは確かに、呪いだよ……」

旧き世代の吸血鬼といえど、普通ならば心臓を破壊されたら死に至る

だが、第四真祖の明久にはそれが当てはまらない

ルードルフの攻撃により、完全に破壊された心臓も再生し、流れ出た血もほとんどが明久の体に戻った

もしかしたら、神話に出てくる吸血鬼のように、灰からでも復活出来るかもしれない「だからって……だからって、どうして私を庇ったりしたんですか!!」呪いだろがなんだろが、必ず復活出来る保証なんてなかったんですよ!! 生き返れなかったら、どうする気だったんですか!」

雪菜は涙混じりではあるが、本気で明久に怒っていた

「まあ、それでも良かったと思うよ?」

「なにが良かったんですか!」

「だって、雪菜ちゃんが無事だったから」

明久の言葉を聞いて、雪菜は感情が複雑に入り混じった表情を浮かべた

泣くことも笑うことも出来ないで、苦悶している壊れた人形のような表情だった

「……て……よかったです」

「え?」

雪菜の言葉がよく聞こえず、明久は首を傾げた

すると雪菜は、まるで感情を無くした能面のような表情を浮かべて

「先輩は、私を庇ったりしなくてよかったです……もう忘れてしまったんですか?」

私がここに来たのは、先輩を殺すためなんですよ？」

雪菜のその言葉に、明久は思わず眉をひそめた

「あの殲教師が言っていたことは本当です。私は使い捨ての道具です。ずっと前から気づいてたけど、認めたくなかっただけなんです。私は実の両親にお金で売られて、ただ魔族と戦うための道具として育てられてきたんです……だから、私が死んでも、誰も悲しまない。でも、先輩は違うじゃないですか……！」

そう言った雪菜は、泣いているのを見られたくないからか、明久に対して背を向けた。そして、その姿が明久には、ルードルフに連れられたアスタルテと重なった

創造主の命令に縛られていた、哀れなホムンクルスに

「雪菜ちゃん……」

ルードルフとの戦闘中、雪菜が動揺した理由を明久はようやく悟った

僅か十四歳だというのに、ロタリングアの殲教師を圧倒する戦闘能力を持っている獅子王機関の劍巫

降魔の槍を操り、魔族と戦うためだけに育てられた戦闘のエキスパート達

だからこそ、同じように戦いの道具として造られたアスタルテに、雪菜は自分を重ねてしまったのだ

そして、ルードルフの言葉はそんな雪菜の心を深く抉ったのだ

それが理由で、雪菜は動揺したのである

(雪菜ちゃんをそこまで追い込んだのって、僕が原因かも……)

明久はそう思っていた

なぜなら、雪菜と出会って僅か数日だが、明久は第四真祖の力を持っているのに、人間であろうともがいていたのだ

そして雪菜は、戦う力を得るために、当たり前前の日常を捨てている

だが明久は、誰よりも強い力を与えられたというのに、何の変哲もない日常を選んでいた

そんな明久の行動は、雪菜のこれまでの道のりの全否定しているように見えたのかもしれない

だから彼女は、自分が死ぬべきだったと言ったのだ

だからこそ明久は、行動を起こした

明久に背を向けて、俯いていた雪菜を、明久は抱き寄せた

「せ、先輩？」

「泣く人が居ない？ そんな訳ないでしょう？」

雪菜が戸惑った様子でいると、明久は囁くように喋りだした

「人は誰かしら、誰と出会って育っていく……雪菜ちゃんだってさ、友達^が居たはずだよ

？ お姉さん代わりが居たと思う……その人達はどのようなのさ？」

明久のその言葉に、雪菜はハツとした

確かに居た

自分と同年代でありながら、自分を妹のように扱ってくれた人が

「それにさ、風沙も悲しむし、僕も悲しい……誰だつてさ、人が死んだら悲しいんだ……だから、そんなことを言わないでよ……」

「でも、私は……」

明久の言葉を聞いて、雪菜はまだ躊躇っていた

「もし、支えが欲しいのなら……僕じゃダメかな？」

「……え？」

明久の言葉の意味が分からず、雪菜は首を傾げた

「雪菜ちゃんは一人じゃないよ……僕が居る」

「先輩……」

明久の言葉を聞いて、雪菜は顔を赤くした

「まあ、僕じゃ嫌かもしれないけどさ」

明久はそう言いながら、立とうとした

だが、復活したばかりだからか、足から力が抜けて、雪菜の方に倒れた

「先輩!？」

「ごめん……まだ上手く動けないや……」

雪菜が心配そうに声を上げると、明久は震える手を見つめた

「血が……足りないんですか?」

「多分ね……」

ほとんど戻ったとはいえ、地下水道に流れたのや、薬物と混じってしまった分は減っている

雪菜はそれに気づいたのだ

「まあ、少し時間を置けば、多少は……」

明久はそう言いながら手を動かすが、雪菜は首を振って

「いえ……そんなに時間はありません」

と言った

「どういうこと?」

「先ほど、大きな爆発音が聞こえました……それに、アスタルテさんが言ってた要……」

雪菜がそこまで言うと、明久はハツとして

「まさか、キーストーン・ゲート!？」

と声を上げた

「恐らくは……」

「でも、至宝ってなんだろう……あ、そうだ」

明久はポンと手を叩くと、ポケットから携帯を取り出した

「流石は魔族特区製の携帯だよ……壊れてないや」

明久はそう言いながら、携帯を操作した

「浅葱なら分かるかな……」

と呟いた

そして、おバカな第四真祖はこの島の隠された秘密を知る

知ってしまった真実

「あ……あ……」

非常階段の出入り口から入った浅葱は、目の前の光景を見て身が竦んだ

目の前に広がっているのは、床一面に広がっている血の池に、その血の池に横たわり呻き声を漏らしている武装攻魔官達

そういった光景を見慣れてない浅葱は、ただただ、座り込むことしか出来なかった

そして、そんな浅葱の前をルードルフとアスタルテが通るが、彼らは浅葱を一瞥しただけで通り過ぎた

そして、二人が通り過ぎて数分後、浅葱の携帯が鳴った

最初浅葱は、それを認識出来なかったが、ヨロヨロと取り出して画面を見て、一気に覚醒した

画面に表示されていたのは《吉井明久》の名前だった

「は……」

『浅葱、大丈夫!?!』

明久の声を聞いて、浅葱は涙が流れたが、拭うと

「大丈夫じゃないわよ！ 歩き過ぎて足が痛いし、アイランド・ガードが壊滅状態だし！」

と喚いた

「本当に……なんなのよ……」

と浅葱が涙混じりに言うと、明久が

『襲撃してきたのは、鉄人並みにガタイのいい神父とホムンクルスの女の子でしょ？』

と問い掛けた

「なんで、明久が知ってるのよ？」

『ん？ まあ、ちよつとばかり死にかけてたからね』

明久の言葉を聞いて、浅葱は息を呑んだ

明久はなんだかんだで正直なので、嘘は言えないのだ

その明久が死にかけてと言ったのだ、本当なのだろう

「死にかけてたって、あんた……」

『今は大丈夫だから。それで、例の二人はどこに行ったか分かる？』

明久が問い掛けると、浅葱は傍らに置いておいたノートパソコンを掴んで操作してから

「あいつら、最下層に向かっているみたいよ」

と言った

『最下層？　なんか貴重な物でもあるの？』

「別に無いわよ。有っても、キーストーンが有るだけ」

『だよね……』

明久はそう言うのと、数秒間黙考してから

『そのキーストーンがなにか、貴重な素材を使つてるとかはないかな？』

と問い掛けた

「そんな筈ないわよ。確か、魔術的に補強してあるけど。素材自体は至って普通の筈よ」

『それじゃあ、至宝ってなんのことだ……？』

明久の言った至宝という言葉に、浅葱は思わず眉をひそめた

「至宝？　なにそれ？」

『知らないよ。あの神父がそう言ってたんだ』

明久がそう言ったタイミングで、ノートパソコンの画面に警告文が表示された

「はあ!?!　なによ、これ!?!　軍事並のプロテクトじゃない!」

『無理なこと?』

明久がそう言うのと、浅葱は挑発的な笑みを浮かべて

「まさか！　私を舐めないでよね！　モグワイ！」

浅葱が呼ぶと、ノートパソコンの画面端に不細工なアバターが現れた

『やれやれ……AI^{ヒト}使いの荒い嬢ちゃんだぜ。俺は本来、アレに関しちや、触つちやいけないことになってるんだが?』

モグワイが人間臭くそう言うのと、浅葱はキーボードをタイピングしながら鼻息荒く

「そんなの無視よ、無視! とつとつと、プロテクトを外しなさい!」

と命じた

『まあ、嬢ちゃんの命令ならいいけどよ……後悔すんじやねえぞ?』

「……え?」

モグワイの言葉に浅葱が首を傾げた直後、画面にソレが表示された

「なによ、これ……これが、至宝!」

画面に映し出されたソレを見て、浅葱は呆然と言った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「そっか……そういうことだったんだ……」

明久は呟くように言いながら、携帯を閉じた

「これで、彼らが戦う理由が分かりましたね」

雪菜の言葉に、明久は同意するように頷いた

「さて、急いでキーストーン・ゲートに行かないと……」

明久がそう言うと、雪菜はキュツと唇を引き結んで

「先輩……今のままで、彼らには勝てません……」

と呟くように言った

雪菜の呟きを聞いて、明久は動きを止めた

「今のままの先輩では、また殺されるだけです……わかってますよね？」

雪菜が再び言うと、明久は無言で頷いてから

「彼は正規の攻魔師だし、経験もかなりあるだろうしね……でも今からじゃあ、大した戦力の強化なんて」

「あるじゃないですか」

明久の言葉に被せるように、雪菜は声を上げた

雪菜のその言葉に明久が首を傾げていると、雪菜は明久に近寄り

「先輩……私の血を吸ってください」

雪菜はそう言うと、制服のリボンを解いた

「ゆ、雪菜ちゃん？」

言葉の意味が分からないのか、明久は呆然とした

「今まで人間の血を吸ったことがないから、眷獣達は先輩のことを宿主だと認めてないって、先輩は言いましたよね？」

「う、うん……確かに言ったけど……」

明久が呆然としてしていると、雪菜は明久の間近にまで近づき槍の刃で首筋を薄く切つたすると、切り傷から鮮血が首筋に沿って流れ始めた

「だから、今ここで私の血を吸えば、眷獣達は先輩を宿主と認める筈です」

「そうかもしれないけど、確証は……」

と明久が言いよんどんでいると、雪菜は明久の目を見つめて

「確証が無くとも、確率が有るなら、それに賭けたいんです」

と言うと、僅かに首を傾げて

「それとも……私じゃ、魅力は無いですか？」

と問い掛けた

「いやいや、雪菜ちゃんは可愛いから！ むしろ、それが困るわけで！」

と明久が慌てていると、雪菜は明久に抱き付き

「だったら……問題ないですよね？」

と呟くように問い掛けた

その言葉を聞いて、明久はゴクリと喉を鳴らすと

「……僕初めてだから、痛くしたらごめんね……」

と言うと雪菜を抱き締めて、雪菜の首筋にその鋭く伸びた犬歯を突き立てた

すると、雪菜の口から熱っぽい吐息が漏れた
茜色の陽の光が、一つになった二人を照らした

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「お、おお……」

地下深く、海底付近

そこは広大な広さのスペースで、巨大な構造物が鎮座していた

ルードルフはその構造物を見て、感動したように涙をこぼしながら両膝を突いた

正確に言えば、その構造物、キーストーンの中に埋まっている物を見ていた

しかし、数秒もすればそれは荒々しい笑みに変わった

「ロタリンギアの聖堂より篡奪されし不朽体……我ら信徒の手に取り戻す日を待ちわびたぞ！ アスタルテ！ もはや、我らの行く手を阻むものはなし！ あの忌まわしき楔を引き抜き、退廃の島に裁きを下しなさい！」

ルードルフは高らかに笑いながら、背後に眷獣を纏って立っていたアスタルテに命じた

だが、アスタルテは一切動かずに

「命令認識^{リシューブド}。ただし、前提条件に誤謬があります。ゆえに、命令の再選択を要求します」

と言いながら、視線を上に向けた

「なに？」

アスタルテの言葉を聞いて、ルードルフは怪訝そうな表情を浮かべながらアスタルテの視線を追った

視線の先、キーストーンの後ろから二人の少年と少女が現れた

片や、槍を持った凜とした少女 姫柊雪菜

そして、もう片方は血に染まったボロボロの制服を着た第四真祖

吉井明久だった

「やあ……少しばかり、今の命令は待ってもらおうよ」

明久はそう言いながら、ニヤリと笑みを浮かべた

島の秘密

「西欧教会の《神》に使えた、聖人の遺体……」

明久はそう言いながら、キーストーンと呼ばれている構造物を憐れむように眺めた。その半透明な構造物の中心部には、誰かの《腕》が浮かんでいた。

ミイラのように干からびた、細い腕だった。

その手首部分には、まるで磔にあつたかのように、無惨な傷跡が残されていた。

自らの信仰のために苦難を受け入れ、命を失った殉教者の遺体である。

それらは神の聖性が現世に顕現するための依代であり、それ故に人々の信仰の対象になる。

強い聖性を帯びたその遺体は、決して腐らず、様々な奇跡を引き起こすと言われている。

その聖人の遺体の一部が、キーストーンの中に埋め込まれていたのだ。

「聖遺物って言うんだってね？ やっぱりこれが、アンタの目的だったわけ？」

明久は神妙な表情を浮かべて、ルードルフに問い掛けた。

浅葱が嚴重なプロテクトと突破して調べ上げた、この島最下層の秘密。

それが、この聖遺物の存在だったのだ

巨大な人工都市である絃神島は、聖遺物が引き起こす奇跡によって存在していたのである

「貴方達が絃神島と呼ぶこの都市が設計されたのは、今から四十年以上も前のことです……」

そう語り出したルードルフの声は低く荘厳さが満ちていて、まさしく西欧教会の神父に相応しいものだった

「レイライン……東洋でいう龍脈が通る《海洋上》に、人工の浮島を建設して、新たな都市を築く……それは、当時としては画期的な発想でした。龍脈が流し込む靈力は住民の活力へとつながり、都市を繁栄へと導くだろうと誰もが考えた。しかし、建設は難航しました。海洋を流れる剥き出しの龍脈の力は、人々の予想を遥かに超えていたからです」

ルードルフの説明を聞いて、明久は無言で頷いた

この島が、本土から遠く離れた南の海上に建設された理由

それが龍脈……地球表面を流れる巨大な靈力経路の存在であった

「都市の設計者、絃神千羅はよくやりました。東西南北……四つに分割した人工島を風水でいうところの四神に見立て、それらを有機的に結合することで龍脈を制御しようと

した。だが、それでも解決できない問題がひとつだけ残ったのです」

「要石の強度……だね？」

明久が続けるように言うのと、ルードルフは重々しく頷き

「いかにもそのとおり……絃神千羅の設計では、島の中央に四神の長たる黄龍が……連結部の要諦となる要石が必要でした。しかし当時の技術では、それに耐えうる強度の建材を作り出すことができなかったのです。故に、彼は忌まわしき邪法に手を染めた……」

「供犠建材……」

ルードルフの説明を聞いて、雪菜は弱々しく呟いた

絃神島の設計者たる絃神千羅は、光学的に行き詰った問題の解決策として、呪術に頼った

それが、人柱

建造物の強度を上げるために、生きた人間を生贄にする邪法を使うことを思いついたのである

だが、龍脈とは自然界の気の流れであり、その荒々しい力は、人工島の連結部に過大な負荷を与える

それを受ける要石の役目には、生半可な呪術では到底耐えられなかったのだ

それこそ、神の奇跡に匹敵するほどでなければ無理だったのだ

ゆえに……

「彼が都市を支える贄として選んだのは、我らの聖堂より篡奪した尊き聖人の遺体でした。魔族共が跳梁跋扈する島の土台として、我等の信仰を踏みにじる所業……決して許せるものではありません！」

ルードルフはそう言うと、戦斧を構えた

それは言外に、話は終わりだという意思表示だった

ルードルフの目的は聖遺物の奪還である

明久たちと無理に戦う必要など、ルードルフにはない

ゆえに、ルードルフは明久からの問い掛けに答えたのである

それと同時に、ルードルフの正当性の証明でもあった

ルードルフはもはや、如何なる説得にも応じなければ、決意を覆す方法もなかった

「ゆえに私は、実力をもって我らの聖遺物を奪還します。立ち去るがいい、第四真祖よ。

これは我等と、この都市との聖戦です。貴方といえども、邪魔は許さぬ！」

「あなたの気持ちもわかるよ……絃神千羅のやったことは、絶対に許されない……」

明久はそう言うと、要石とルードルフの間に立った

「だけど、アンタのやり方は間違ってる！ 何も知らず罪も無い五十六万人を、その復讐

の巻き添えにする気!?　ここに来るまでアンタが傷付けたアイランドガードの人達だつて一緒だよ。無関係な人達を巻き込むな!」

確かに、ルードルフの行動は正義かもしれない

だが、そのやり方を彼は間違えていた

しかし、それは今はい

ルードルフが、彼の決断でこの島を破壊しようというのなら、吉井明久は絶対にそれを止めると決めていた

「この街が贖うべき罪の対価を思えば、その程度の犠牲、一顧だにする価値なし」
明久の言葉に対して、ルードルフは無表情で冷酷に告げた

すると、明久の横に雪菜が寄り添うように立った

そして、ルードルフに向けて雪霞狼を突きつけながら凜と響く声で

「供擬建材の使用は、今は国際条約で禁止されています。ましてや、それが篡奪された聖人の遺体を使ったものであれば、尚更……っ!」

と叫んだ

だが、ルードルフは表情を変えずに

「だから、なんだというのです、剣巫よ?　この国の裁判所にでも訴えろと?」

と問い掛けた

すると雪菜は、なおも縋るように

「現在の技術ならば、人柱なんか使わなくても、人工島の連結に必要な強度の要石が作れる筈です。要石を交換して、聖遺物を返却することも……」

と説得を試みたが、ルードルフは雪菜を睨みつけて

「貴女は、己の肉親が人々に踏みつけにされて苦しんでいるときにも、同じことが言えるのですか？」

と怒りを滲ませた声で言った

ルードルフのその言葉を聞いて、雪菜は一瞬動揺した

劍巫として育てられた雪菜は、実の両親を知らなかった

ルードルフはその事を知っている上で、雪菜の心を抉る言葉を言ったのだ

「アンタは……っ!!」

ルードルフの言葉に明久は怒り、一步前に出た

だが、それをすぐに雪菜が明久の腕を掴んで止めて笑みを浮かべた

笑みを浮かべている雪菜の瞳には、穏やかな光が満ちていた

すると、ルードルフは荒々しく息を吐いて

「もはや言葉は無益なようです。これより我らは聖遺物を奪還する。邪魔立てするとうならば、実力を持って排除するまで……アスタルテ！」

「……命令受諾。執行せよ、薔薇の指先」

ルードルフが命じると、それまで沈黙していたアスタルテが微かに悲しみを滲ませた声で答えた

すると、虹色の脊獣の輝きが増して、それに比例して撒き散らされていた魔力が勢いを増した

「結局、こうなるのか……」

明久は嘆息しながら、背負っていた竹刀袋を持って、紐を解いた

「……けどさ、忘れてないかな？ 僕はアンタに胴体を斬られた借りがあるんだよ？ とつくの昔に死んだ設計者に対する復讐よりもさ、その決着をつけようよ」

と言いながら、明久は刀、雷切を抜くと同時に、明久の左腕から雷光が溢れた

「貴様……その能力は……」

明久から迸る雷光を見て、ルードルフは表情を歪めた

なぜならば、その雷光が怒りに任せた暴走じやないことに気づいたからだ

明久の意志に呼応して、血の中に棲んでいる獣が目覚めようとしているのだ

「さあ、始めようか、オッサン……ここから先は、第四真祖の戦争だー」

明久はそう言いながら、雷切を突き付けた

すると、雪菜が寄り添うように雪霞狼を構えて、悪戯っぽく微笑みながら

「いいえ、先輩。《わたしたちの聖戦^{ケンカ}》、です！」
と宣言した

交戦開始

「はあああああー！」

戦端が開かれて一番最初に動いたのは、雪霞狼を構えた雪菜だった

雪菜はまさしく光の如き速度で、アスタルテへと迫った

もちろん、アスタルテとて只々座して待つていただけではない

その砲弾の如き拳を繰り出して、雪菜への迎撃を始めた

その一撃は建物を揺らし、ギイギイと嫌な音を起こさせた

アスタルテの眷獣は人型だが、生物ではない

その正体は、濃密な魔力の塊である

振るわれた拳の威力は、最大級の呪砲に匹敵し、繰り出される蹴りは儀式魔術を凌駕

していた

そして、巨大クレーンのような太い腕は特殊合金性の隔壁すら引き裂く

人が喰らったたら、間違い無く致命傷に至る威力

だが雪菜は、その悉くを鮮やかに受け流した

雪霞狼

七式突撃降魔機槍に刻印されている神格振動波駆動術式が、実体化している眷獣の暴風が如き攻撃を防ぎ、逆に魔力によって構成されている肉体を引き裂こうとした

だが、アスタルテの薔薇の指先も同じ神格振動波駆動術式を纏っているのです、雪霞狼の斬撃は、その肉体を浅く傷つけるだけだった

普通の魔族だったら致命傷を受けるはずなのに、浅く傷つける程度で止まり、その傷すら一瞬にして再生する

戦闘技術では雪菜が勝っているものの、雪菜にはアスタルテを倒すだけの攻撃力はない

逆に、圧倒的威力を誇るアスタルテは、雪菜の体術と槍技に翻弄されており、雪菜に触れることすら出来なかった

二人の戦いは、完全に膠着状態になっていた
だが、それこそが明久達の作戦だった

「ああああああ！」

気合いと共に青白い稲妻を刀に纏わせながら、明久はルードルフに突きを放った

ルードルフは一瞬驚きの表情を浮かべるものの、すぐに我に返り、明久の突きを避けるとその体格からは予想出来ない速度で、戦斧を轟音と共に振り下ろした

明久はそれを、雷切を引き戻し刃を斜めにするこゝで受け流した

すると戦斧は床にめり込み、明久はその隙に距離を取った

「ほう……素人ではありませんね……今の動き方から察するに、剣術家ですか」
ルードルフがそう言うと、明久は刀を構え直して

「正確には、剣道兼剣術なんだけどね」
と返した

明久は昨年まで、彩海学園の剣術剣道部に所属していた

なお連名になっている理由は、人数の少ない二つの部活が纏まった名残らしい

そして剣術というのは、呪力や霊力を使って戦う剣技を指す

明久はその剣術側に特化していたが、剣道も使っている

そして、今のこの状態こそが二人が考えた作戦だった

吸血鬼たる明久とは決定的に相性の悪いアスタルテを雪菜が足止めし、その間に明久がルードルフを撃破する

そうすれば、人造人間たるアスタルテは戦うことを辞める筈だと

二人が短いながらも、アスタルテと言葉を交わしたからこそその判断だった

心の優しいアスタルテは、創造主たるルードルフの命令に従って戦っていて、本当はこのような戦いは望んでいないと

だから明久は、なんとしてもルードルフを撃破しないといけない

だが

「ぬうん！」

ルードルフはその戦斧をまるで暴風のように振るい、明久はそれを避けた

だというのに、掠っただけで、制服の袖が大きく裂けた

速くて重い

もし直撃を受けたら、あの跡地と同じことになるだろう

復活できたとしても、それはルードルフによって聖遺物を取り返された後になる

だからこそ、明久は絶対に喰らうわけにはいかなかった

そんな明久の焦りを見抜き、ルードルフは豪快に笑いながら

「確かに凄まじい魔力ですが、そのような攻撃では私に触れることは出来ませんよ。競

技用の技などではね、第四真祖！」

「わかってるよ……だから！」

明久はそこから、意識を切り替えた

今までは直線的な動きだったが、そこからはまるで流れるような動きに変わった

そして、フェイントが入り混じった連撃を繰り返して、ルードルフを押し始めた

「ぬ……これは！」

しかも、雷撃を纏っているので、一撃当たる度に、ルードルフに向かって雷撃が迫っ

た

ルードルフは一旦大きく距離を取って、仕切り直すと

「先ほどの言葉は撤回です。認めましょう、貴方はやはり侮れぬ敵だと……ゆえに相應の覚悟をもって相手をさせてもらいます！」

ルードルフはそう言うのと、羽織っていた外套を脱ぎ捨てた

「なに……っ!？」

ルードルフの全身から凄まじい呪力が溢れ出し、明久は圧された

外套の下から現れたのは、輝きを纏った装甲強化服だった

黄金の光を放ち、その輝きを見た明久の目に激痛が走り、光を浴びて明久の肌が焼け
た

「ロタリングアの技術によって作らし聖戦装備《要塞の衣》^{アルカサバ}！ この光をもちて、我が障害を排除する！」

そこから、ルードルフの攻撃力と速度が上がった

装甲鎧が、ルードルフの筋力を飛躍的に強化しているのだ

黄金の光で視界を奪われて、明久は風切り音と圧、更に勘で攻撃を避けた

だが、掠って頬から鮮血が溢れ出した

「厳しいな！ そんな装備があったなんて!？」

明久が苦しげに言うが、ルードルフは構わずに攻撃を敢行した

「くっ……」

目の回復に時間が掛かり、明久は防戦一方となった

「先輩！」

そんな明久に気づいて、雪菜は心配そうな声を上げたが、明久は右手の親指を立てて、大丈夫という意思表示をした

そして、ルードルフの一撃を避けた明久は一気に後ろへと跳んで距離を取った

「そういうことなら、こっちも遠慮しないで使わせてもらうよ！ 死なないでね、オッサン！」

「ぬ……!?!」

本能的に危険を感じ取ったのか、ルードルフは腰を低くして身構えた

そして、高々と掲げられた明久の右腕から鮮血が噴き出した

「カレイドブラッド焰光の夜伯の血脈を継ぎし者、吉井明久が、汝の枷を解き放つ！」

明久がそう言うのと、溢れ出していた鮮血が濃密な雷光へと変わった

これまでとは比較にならない膨大な光と熱量、そして衝撃波

倉庫街を焼き払ったのと同じ、第四真祖の眷獣である

だが前回と違うのは、その雷光が無差別ではなく、凝縮されて巨大な獣の姿へと変

わったのだ

それが本来の眷獣の形

明久が初めて完全に掌握した、第四真祖の眷獣の真の姿である

「疾こく在いれ、五番目の眷獣……獅子レゾルス・アウルムの黄金！」

そして今ここに、災厄の化身がその姿を現す

終結

明久の放出した雷光が、瞬く間に獣の姿を形作った

そして現れたのは、雷光の獅子だった

戦車に匹敵するその巨体は、全てが荒れ狂う雷の魔力の塊だ

全身は目が眩むような輝きを放っており、咆哮は雷鳴の如く大気を震わせた

明久が先代の第四真祖から引き継いだ眷獣は、全て合わせて十二体

だが、雪菜の血を吸っても明久を宿主と認めたのは、たった一体

この雷光の獅子だけであつた

だが、それは予想出来ていた

雪菜と出会って、僅か数時間

なぜか、この雷光の獅子は異様なまでに活性化していたのだ

倉庫街では、雪菜を守るために、自ら暴走するほどだ

その理由も、今ならよくわかる

この雷光の獅子は、初めて会った時から雪菜に懐いていたのだ

雪菜の血の臭いに、強烈に惹きつけられていたのだ

「これが貴方の眷獣か……！　これほどの力を密閉された空間で使うとは、無謀な！」

ルードルフは雷光の獅子が放つ魔力の波動に圧倒されて、動きが鈍っていた

その隙を突いて、雷光の獅子が前足をルードルフ目掛けて振り下ろされた

その一撃は、ルードルフが咄嗟に後ろに跳んだので、カスる程度だった

だが、それだけでルードルフのその巨体が数メートルも跳ね飛ばされた

更には、衝撃波でルードルフの纏っていた装甲鎧から火花が散り、熱で戦斧の刃が溶

け出した

そして攻撃の余波は、もちろんキーストーンゲートにも及んだ

撒き散らされた稲妻が、ゲートの外壁を伝って周囲に拡散し、設置されていた非常灯

や監視カメラのほとんどが破壊された

ワイヤーケーブルを固定していた巻き上げ機ウインドも、鈍い悲鳴ウレを上げている

戦闘が長引いたら、島すら無事では済まないのは明々白々だ

「アスタルテー！」

ついに、殲教師が己が従者を呼んだ

次の瞬間には、雪菜と戦っていたアスタルテは爆発的な魔力を放出した

自然災害に匹敵しうる猛威を振るう明々の眷獣に対抗出来るのが、アスタルテの眷獣

は薔薇の指先しか存在しないと判断したのだろう

アスタルテは圧倒的な魔力に物を言わせて、雪菜を振り切つて、雷光の獅子の前に立ちほだかつた

雪菜の危機と判断したのか、宿主たる明久の意思を無視し、雷光と化してアスタルテへと襲いかかつた

次の瞬間、薔薇の指先が虹色に輝き、雷光の獅子は跳ね返された

跳ね返しのは、薔薇の指先の神格振動波駆動術式である

本来だつたら全て消し去る筈なのに、消しきれずに跳ね返すだけになつたらしい

とはいえ、跳ね返した雷光に残された魔力も膨大で、雷撃は一撃で天井を破壊

瓦礫が降り注いだ

「うわたたたたたた!?!」

「きゃあああ!?!」

流星に瓦礫はどうしようもなく、明久達は逃げ惑つた

そして、なんとか瓦礫を避けきり、明久はアスタルテに視線を向けた

獅子の一撃を受けたというのに、アスタルテの薔薇の指先は無傷だった

「くっ! ……ダメなのか!?! 僕の眷獣でも、アスタルテの結界は突破出来ないなんて

……!」

無傷のアスタルテを見て、明久は唇を噛んだ

獅子の一撃にすら耐えたのだ

どんな攻撃をしようが、全て簡単に防がれるだろう

それに、これ以上の戦闘には、キーストーンゲートの方が耐えられない

もし、キーストーンゲートの外壁が壊れたら、水深二百二十メートルの水圧が一気に押し寄せて、明久達は一瞬で押し潰される

雪菜は間違いないで即死で、明久はどうなるのか予想出来なかった

「先輩……」

雪菜が心配するように明久に寄り添い、明久を支えた

はつきり言って、明久も雪菜も疲労はピークに近い

明久は慣れない戦いで精神的に疲れて、雪菜はあれほど強力なアスタルテを相手にしたのだ

もはや、決着が近いのは目に見えている

「ごめんね、雪菜ちゃん……アスタルテちゃんは、倒せないかもしれない……!」

明久は不甲斐ない自分に腹が立ち、声を震わせた

あと少し

あとほんの少しで、島を救える

だというのに、その少しが明久には余りにも遠く感じられた

だが、雪菜は正反対に華やかな笑みを浮かべて

「いいえ、先輩。この聖戦は、私達の勝ちですよ」と宣言した

雪菜がそう言った理由が分からず、明久は不思議そうな表情を浮かべた
すると、雪菜は明久の前に出て

「……獅子の神子たる高神の劍巫が願ひ奉る」

銀色の槍を振るいながら、雪菜は舞った

まるで、神に勝利を願う劍士のように

あるいは、勝利の預言を授ける巫女のように優美に

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて、我に悪神百鬼を討たせ給え！」

粛々とした祝詞を雪菜が唱えると、雪霞狼が神々しい光を放ち始めた

灰白いその光は、あらゆる結界を切り裂く神格振動波である

だが、その形はアスタルテのものとは違った

細く、鋭く、まるで光り輝く牙の如く

「ぬ、いかん！」

雪菜の狙いに気づいて、ルードルフは無防備な雪菜目掛けて戦斧を投げようとした
だが

「させない！」

それを、明久の放った高速の突きが阻んだ

それをリードルフは、戦斧で防いだ

そして、雪菜にとつてはそれだけで充分だった

その一瞬で、雪菜はまるで飛ぶように駆け出した

それはまるで、しなやかな純白の雌狼のように

雪菜の速度に、アスタルテの反応が遅れた

互いに、同じ神格振動波駆動術式が槍と脊撃に刻印されている

だが、アスタルテは鎧のように全身を覆っているのに対して、雪菜の槍は、その力を

穂先の一点に集中していた

ただただ、細く鋭く、相手の結界結を貫くためだけに

「雪霞狼！」

雪菜が繰り出した一撃は、アスタルテの防御結界を突き破り、顔のない人型脊獣の頭

部に深々と突き刺さった

その時には、明久にも雪菜の言葉の意味が分かっていた

結界を貫通したとはいえ、雪菜の槍は、巨大な脊獣にとつては大したダメージにはな

らない

だが、その槍は今も眷獣の頭に深く突き刺さっている

それはまるで、雷を呼び寄せると避雷針のように

「獅子の黄金!!」

明久が命ずるよりも早く、まさしく光速で雷の獅子が疾った

そして雪菜はすでに、槍を手放して空中に舞っていた

その数瞬後、雪菜が突き刺した槍へと明久の眷獣が降り注いだ

雷へと姿を変えて、眷獣は薔薇の指先の体内へと流れ込んだ

魔力の塊たる眷獣を倒すには、より強い魔力をぶつける

真祖の眷獣の圧倒的な魔力が、今度こそ一撃でアスタルテの眷獣に致命傷を与えて、

消し飛ばした

「アスタルテ……ッ!?!」

ルードルフが呆然と見ていた先では、アスタルテが力無くその場で倒れた

アスタルテの存在こそが、ルードルフの目的たる聖遺物の奪還には必要不可欠だった

そのアスタルテが倒れたことで、ルードルフの野望は潰えた

そして、現実を受け入れられずに固まっていたルードルフの目の前に、雪菜が華麗に

着地

そして、放心していたルードルフは反応が完全に遅れた

気が付けば、ルードルフの装甲鎧に雪菜が掌を押し当てていた

「響よー」

放たれたのは、鎧を貫通して人体内部にダメージを与える剣巫の掌打だった

雪菜の一撃を喰らい、ルードルフは苦悶の呻き声を漏らし、それと同時にルードルフの長身がくの字に曲がった

そこに

「これで、終わりだー」

明久が追撃に斬撃を放った

斬撃とはいえ峰打ち

しかし、峰打ちとはいえ吸血鬼の腕力を全開で放った一撃は、ルードルフの装甲鎧を打ち砕き、ルードルフをまるでボールのように飛ばした

飛ばされたルードルフは、数メートル吹き飛び壁に激突

地面に倒れると、震える手をキーストーンへと伸ばしたが、そのまま力無く落ちた
こうして、戦いの幕は下りた

後始末とドタバタ

明久がルードルフ・オイスタツハを倒した時、一人の少女が吉井家のテラスからキーストーン・ゲートを見ていた

少女の名前は、吉井風沙

何時もは結い上げている髪はストレートになっており、表情も何時もと違ってどこか大人びて見えた

「なるほど……目覚めたのは、お前か……」

風沙はそう言いながら、妖艶な笑みを浮かべた

しかし数秒後に風沙が欠伸すると、雰囲気が一変し、年相応の眠そうな表情に変わり

「眠い……」

と言うと、部屋へと戻っていった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

明久がルードルフ・オイスタツハを倒してから、数十分後

「……こうして、第四真祖は一人の花嫁を得た訳だ……しっかし、あんたらも酷いことをするよな」

夕暮れに染まった教室でそう言ったのは、首にヘッドホンを掛けたツンツン髪が特徴の男子

矢瀬基樹だった

そして、そんな基樹が話し掛けていたのは、窓枠に止まっている一羽のカラスだった。ただし、そのカラスは普通のカラスではなかった

目に光はなく、どこか無機質な感じすらした

「あの責任感の強い子だったら、ああなるって予想していただろうに」

基樹がそう言うと、カラスが口を開き

『確かに、予想はしていましたよ。それに、第四真祖の花嫁になるということは、王妃になるということ……あの子にとっては、悪くない話です』

カラスから聞こえた声は、しゃがれた老人のような声だった

「そうかもしれないが……」

カラス、獅子王機関三聖の一人の言葉を聞いて、基樹は頭を掻いた

雪菜は天涯孤独であり、肉親の類は居ない

そういう意味では、第四真祖も同じである

だが、納得していいのか基樹が悩んでいたら

『それでは』

とカラスは言うと、一枚の札に変わり飛んでいった

基樹はそれを見ると、ため息を吐いて

「ヤレヤレ……あいつも大変だねえ」

と首を振った

その時、基樹の足下の影が盛り上がって、一人の人物が現れた

小柄な体躯に、目つきの悪い三白眼

土屋康太だった

「おう、康太。首尾はどうだ？」

基樹がフレンドリーに話し掛けると、康太は近寄ってきて

「……問題ない。生き残っていたカメラの映像は全てすり替えておいた。……これで、
ルードルフ・オイスタツハと戦ったのは、鉄人ということになった」

と答えた

康太の報告を聞いて、基樹はカラカラと笑うと

「OK OK！ ナイス人選だ！ 四仙拳の一人なら、誰も怪しまないだろうよ」

と告げた

鉄人こと、西村総一は那月と同じように、かなり名の知れた攻魔官の一人である

那月は欧州の魔族を恐怖のどん底に突き落としたのに対して、西村はアジア方面の魔

族の恐怖の対象だった

那月は空隙の魔女と呼ばれ、西村は鋼の拳聖と呼ばれていた
とはいえ、そんな二人の本職は教師なのだが

閑話休題

「……しかし、あいつも難儀な人生を歩むことになるな」

康太がそう言うと、基樹は頷いて

「そうだな……だが、頑張ってもらおうぜ。我らが親友にはな」

と言うと、キーストーン・ゲートに視線を向けた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ルードルフとの戦いから、三日後

「よし、これで終わりつと……」

雪菜はそう言いながら、荷物を詰め込んだダンボールを閉じた

そして、額の汗を拭うと部屋の中をグルリと見回した

来た時よりも、荷物が倍近くまで増えている

ルードルフを倒した後、アスタルテの眷獣をなんとか掌握しようとしたが、その前に

那月と西村が現れて、明久達に帰るように促した

那月達ならば大丈夫だろうと判断し、明久達は帰宅

その後、雪菜は報告書と壊れた雪霞狼を獅子王機関へと送り、来るであろう帰還命令のために、身支度をしていた

来る前は緊張し、自分に第四真祖の監視役という大役が務まるか不安だったが、今と成っては、逆に明久を心配するようになっていた

明久の性格を考えると、どんな理不尽だろうが、誰かが助けを求めたり、事件が起きたら、真っ先にその現場に駆け込み、相手を助けるために全力で挑みかかるだろう

そう思うと、雪菜は自然と苦笑を浮かべて

「仕方のない先輩ですね……」

と呟いた

その時、チャイムが鳴った

雪菜は引き継ぎの剣巫が来たのかと思ひ、居間に据え付けられているインターホンに歩み寄って

「はい」

とボタンを押した

すると、インターホンの画面に映ったのは、引き継ぎの剣巫などではなく、某黒猫の宅急便だった

『お届け物です』

「あ、はい。わかりました」

まさか荷物が来るとは思わず、雪菜は首を傾げながら玄関へと向かった。そしてドアを開けると、既に宅配業者の姿は無かった。

左右を見回してから足下を見ると、そこには銀色のケースが置いてあった。その銀色のケースに伝票が付いているのに気づき、雪菜は確認して驚いた。なにせ、その伝票の送り主には《獅子王機関》の名前が明記されていたからだ。それを見た雪菜は素早く周囲を確認すると、銀色のケースを室内に運んだ。

(帰還命令にしては、大き過ぎる……)

雪菜はそう思いながら、銀色のケースに掛けられていた封印を解除すると、蓋を開けた。

そして、中に入っていた物を見て驚いた。

中には、壊れた筈の雪霞狼が新品同様に修理されて収納されていた。

なぜ雪霞狼が送られてきたのか分からず、雪菜は困惑していた。

その時、雪菜はケースの蓋の裏側に一つの封筒が張り付いているのを見つけた。

雪菜はそれを剥がすと、便箋を読んだ。

《雪霞狼の修理が終わったので、そちらに送る。なお、今回の事は緊急事態に付き、不問に付す。引き続き、第四真祖の監視に当たれ》

「不問……」

手紙を読み終わると、雪菜は呆然と呟いたのだった

ほぼ同時刻、明久は学園の食堂の机に突っ伏していた

「熱い……焼ける……焦げる……灰になる……」

明久は如何にも、燃え尽きました。という風体で呟いた

明久が学園に居る理由は、追試である

午前中で四教科終わり、午後に三教科やる予定である

そのために今明久の前には、参考書が広げられている

なお、追試を受けている理由はと言うと、あのルードルフ・オイスタツハと戦って

た時間、実はまだ追試があったのだ

だが、ルードルフ・オイスタツハと戦ったために出席出来ず、結果、追々試という見

事に残念なことになったのだ

「島を助けたのに、これはあんまりだ……」

あまりの不幸に、明久は涙した

しかし救いと呼べるのは、今回の事件を越えてから、浅葱が何かと明久を手伝って

れていることだ

今回だって、《わざわざ明久のために》追試のポイントを教えてくれたのだ

キーストーン・ゲート襲撃に巻き込まれた浅葱は、ルードルフ・オイスタツハを倒したのが明久だと知っている

浅葱からしたら、明久が彼女を命懸けで助けたという形になっているようだ

しかし実際は、アレは明久が勝手に行動を起こしただけであり、浅葱が恩義を感じる必要はないのだが、明久としては勉強を教えてもらっているので、非常にありがたい
そしてその浅葱本人は、飲み物を買いに購買に向かったところである

「……………はあ」

浅葱が用意した問題集を眺めて、明久は深々と溜め息を吐いた

浅葱は非常に頭が良く、定期試験の順位は常にトップクラスである

だが、本人が天才肌なためか、教え方はよろしくない

教え方ならばむしろ、年下の雪菜の方が上手である

その証拠に、浅葱が「あたしが戻るまでに、解いておきなさい」

と置いていった参考書の表紙には、某難関高校の名前が書かれてあり、内容も複雑なものだった

「食っちゃろか……」

もはや末期的なセリフを言うと、明久は再び溜め息を吐いてから机に突っ伏した

その時、明久の脳裏によぎったのは、雪菜のことだった

雪菜は、自分は明久の監視役を解任されるでしょう。と言っていた

監視役であるのに、明久を危険に晒し、しかも、眷獣まで目覚めさせたとあっては、とんでもない失態だと

おそらくは、高神の杜という獅子王機関の育成機関に戻り、剣巫の修行を再開するだろう

明久にそれを止める理由は無かった

本来ならば、雪菜のような少女が明久の監視をするという事態が、そもそも異常事態だったのだ

しかし、雪菜の替わりの攻魔師が監視役になる、というのは、明久としては気に入らなかつた

そして、明久の知らない所で別の任務に就いて、傷つくのを考えるだけで、何故か胸の奥が鈍い痛みを発した

その理由が分からず、明久がウダウダしている

「試験勉強ですか、吉井先輩……？ でも、その公式、間違ってますよ？」

と正面から、聞き覚えのある声が聞こえた

明久が驚いて顔を向けると、正面の席に雪菜の姿があつた

「ゆ、雪菜ちゃん？」

「こんにちは、先輩。どうしたんですか、そんなびつくりした顔をして」

明久が驚いた表情を向けると、雪菜はそう言いながら首を傾げた

すると明久は、恐る恐ると雪菜の背負っているギターケースを指差して

「いや……そのギターケースって、まさか……」

と問い掛けると、雪菜は頷いて

「はい、雪霞狼です。先ほど、修理されて戻ってきました」

と答えた

「えっと……どうして？」

「先輩の監視をするのに、必要だからじゃないでしょうか？　これは元々、第四真祖と戦うための装備ですから」

明久が疑問を口にする、冷静に返した

だが、その目は、どこか嬉しそうに笑っている

明久は混乱しながらも、なんとか口を開き

「それはつまり、雪菜ちゃんが、僕の監視役を続けるってことなのかな？」

と問い掛けた

「そういうことになりますね。実は私にも、なんで、そんな許可が出たのか、いまいち良

く分かりませんが……残念ですか、先輩？」

雪菜はそう言うのと、ふふつと微笑んだ

雪菜の言葉を聞いて、明久は苦笑を浮かべながら

「ううん……良かったよ。雪菜ちゃんも元氣そうだし」

「え？ 私ですか？ はい、私は別になんとも……」

明久の言葉の意図が分からなかったらしく、雪菜はキョトンとした表情を浮かべた
すると明久は、小声で

「ほら、僕がああ施設であんな事をしたわけだし……」

「あんなこと……？ ……っ！」

最初は不思議そうにしたが、思い出したらしく、雪菜は顔を真っ赤にした
「出来れば忘れてほしいんですが……」

「ガンバリマス……それで、身体は大丈夫なの？」

再び明久が問い掛けると、雪菜はコクコクと頷いて

「はい。一応検査キットで調べましたが、だいじょうぶ陰性でした。月齢を計算して、あの日なら比較的
安全だつてわかってましたし」

雪菜がそう言うのと、明久は安堵した様子で

「そっか……まあ、無事で良かったよ」

と呟いた

明久が危惧したのは、雪菜の吸血鬼化である

女性の場合、吸血鬼に噛まれると、場合によっては吸血鬼化する可能性もあったのだ
特に雪菜の場合、巫女という体質なので、その恐れが高かったのだ

「すみません、心配させたようで」

「ううん……こつちこそ、ごめんね」

「せ、先輩が謝る必要はないと思います。あの時は、私のほうからしてほしいと誘ったわけですし……」

雪菜が恥ずかしそうに顔を赤らめると、明久も恥ずかしそうにしながら

「それはそうだけど、雪菜ちゃんに痛い思いをさせちゃったし……」

「大丈夫です。あの時は少し血が出ただけで、先輩に吸われた痕も、もう消えかけてますから」

雪菜はそう言いながら、首筋に手を置いた

そこには、目立たないように肌色の絆創膏が貼ってあった

それが、自分の初めての吸血なんだな

と明久は自覚した

その時、明久は背後から恐ろしいまでの殺気を感じた

そして、まるで錆びたブリキの人形のように振り向くと、そこに居たのは、雪菜と同じ中等部の制服を着た少女だった

「ふーん……明久君が、雪菜ちゃんのなにを吸ったって？」

風は吹いていない筈なのに、何故か結い上げられている髪が揺れていた

明久は恐怖で顔を青ざめながら

「な、風沙？ どうして、ここに居るのかなー？」

と問い掛けると、風沙は感情を押し殺したような声で

「さつき購買部で浅葱ちゃんに会ってね、明久君が試験勉強してるっていうから、励ましてあげようと思ったんだけど、そうしたら、何やら二人で、聞き捨てならない話をするみたいだし？ その話、もう少し詳しく、聞かせて欲しいかなあってね」

吉井風沙が、攻撃的な笑顔を明久に向けた

釣り上げている唇の端が痙攣しているのは、怒りが頂点に達した時の風沙のクセだ

「よし、落ち着こうか、風沙。君は多分、何か勘違いをしていると思うんだ」

明久はそう言うのと、同意を求めるように雪菜に視線を向けた

すると雪菜も、慌てた様子でコクコクと頷いた

「ふーん……勘違い？ どこが勘違いなのかな？ 明久君が雪菜ちゃんの初めてを奪つ

て痛い思いをさせて、おまけに体調を気遣っちゃったりしてる話のどこに、どう勘違い

する要因があるのかな？」

「その想像の全てが、勘違いなんだよ」

明久は途方に暮れながら、肩を落とした

だが、風沙に本当のことを教えるわけにはいかないのだ

出来たら、もうしばらくは知らないでいてほしい

「そういえば、浅葱に会ったんでしょ？ どこに行ったの？」

明久がそう問い掛けると、風沙はまるでゴミを見るような冷たい視線で明久を見ながら

「浅葱ちゃんなら、さっきからずっと、あたしと一緒に明久君の話を聞いてたよ？」

と言った

「え？」

そう言われて初めて、明久は風沙から少し離れた所に浅葱が居るのに気づいた

風沙の殺気に混じりすぎて、浅葱の殺気に気付かなかったのだ

制服を粹に着こなした、華やかな顔立ちの少女の筈なのに、今は、その美しい容貌には、復讐の女神を彷彿させる黒い炎しか見えなかった

しかも、その手に握られているのは、一本のペットボトル

「よし待とう、浅葱！ 浅葱には何時か説明しようとは思ってたんだよ？ だけど、これ

には込み入った深い事情があつてね! というな、なんで浅葱まで怒つてるの!」

明久が必死に釈明を試みるが、浅葱は聞かずに

「明久のバカー!」

と見事なピッチングフォームで、ペットボトルを投げた

「あーぷ!」

顔面にペットボトルを食らい、明久は椅子ごと倒れた

「せ、先輩!」

明久が倒れたのを見て、雪菜は心配そうに立ち上がった

すると、浅葱はツカツカと雪菜に近寄つて

「あなたも、いい機会だからはつきりさせておきたいんだけど、明久とはどういう関係なの?」

「私は吉井先輩の監視役です」

浅葱からの問い掛けに対して、雪菜は冷静に言い返した

物腰は穏やかであるが、雪菜は武闘派で、浅葱も運動神経はいい方だ

二人の少女は、見えない火花を撒き散らしながら睨み合い

「監視役? ストーカーってこと?」

「違います。私はただ先輩が、悪事を働かないようにと思つて……」

「そのあなたが、このバカを誘惑してどうするのよ!？」

「そ、それは……そうですけど……」

雪菜が口を嚙みかけた時、ようやく復活した明久が

「雪菜ちゃん、そこは否定しよう!」

と突っ込んだ

すると、浅葱は明久に冷やややかな視線を向けながら

「誰か、ここに淫魔が! 妹さんのクラスメイトに手を出す淫魔が居ますよ!」

と大声を上げた

「やめい! 浅葱、人の話を聞いて!」

明久はなんとか、浅葱を落ち着かせようとするが、今度は風沙が

「明久君のドスケベ! 変態っ! エロっ! いくらなんでも不潔だよ!」

と涙目で叫ぶと、続いて雪菜が

「や、やめてください、二人とも! 確かに、吉井先輩はいやらしい所もありますけど!」

とフオロー(?)を始めた

「風沙もちよつと落ち着いて! 雪菜ちゃんも、全然フオローになってないからね!」

明久がそう突っ込むが三人は聞かずに、口論を続けた

そんな状況を見て、男子達からは嫉妬と羨望の視線が

女子達からは、犯罪者を見るような侮蔑の視線を向けられた

その状況に、明久は思わず

「ああ、もう……不幸だああああ！」

と叫んだ

その時、どこからか

「だから、上条さんのアイデンティティを奪わないでくださいませんかねえ?」

という声が聞こえた気がした

だが、この時はまだ、明久達は気付いていなかった

これは、世界最強の吸血鬼

第四真祖、吉井明久の苦難の日々のほんの始まりの序章に過ぎないことを……

なお、ルードルフ・オイスタツハの目的である聖遺物だが、これは世界中で大きな波紋となった

聖遺物を使い、人工島を支えるという所業に、西欧教会を始めとして、あらゆる機関や組織から非難が殺到

更には、ルードルフに対して滅刑嘆願すら殺到

日本政府としても無視は出来ず、島は二年以内に要石を通常の建材で造られたものに交換し、聖遺物は口タリンギアに返却されることが決定

ルードルフ本人は国外追放処分になり、アスタルテは主たるルードルフの命令に従つただけということで、保護観察処分に決まつた
　　こうして、絃神島を巡る戦いは幕を閉じた

戦王の使者編

序章

「クソツ、クソツ、クソツ、クソツ！」

「人間共め、よくも同胞達を！」

と悪態を吐きながら、二人の獣人達が屋根や巨大重機の上を跳んでいた。彼らは獣人主義者のテロリストで、先兵として島に入っていた。

しかし、彼らが潜伏していた倉庫に対して、アイランドガードが突入。完全に油断していたテロリスト達は、瞬く間に無力化されて捕まった。

だが、彼ら二人はなんとか脱出に成功。

這々の体で逃げていた。

そして遠く離れたことを確認すると、あるコンテナの上に着地して振り返った。「こうなったら、一足早いが」

「全部まとめて、吹き飛ばしてやる！」

二人はそう言うと、ポケットの中から小さな黒い物体を取り出した。

それは、彼らが潜伏していた倉庫に仕掛けてある爆弾の起爆スイッチだった。

全てが終わったら、証拠隠滅のために爆破するつもりだった

だが、仲間達が捕まったことが我慢ならず、全て吹き飛ばさないと気が済まなかった
「同胞達の仇だ！」

「死ねえ！」

二人はそう言いながら、同時にスイッチを押した

だが、爆発どころか、火災すら起きなかった

「ど、どうなってやがる!？」

「故障か!？」

二人はそう言いながら、慌ててスイッチを何回も押した

だが、一切反応しない

そして気付いた

起爆スイッチが、いやに軽いことに

その時だった

「今時、暗号化もされてない起爆スイッチとはな……黒死皇派とはいえ、財政難か？」

という声が聞こえて、二人は声のした方向に振り向いた

すると少し離れた場所に、豪華なドレスを着た少女とスーツ姿の大柄な男が居た

しかも、少女の手の中には機械が剥き出しになった2つのスイッチが有った

それは、先ほど二人が押したはずの起爆スイッチの中身だった

少女はそれを足下に落とすと、ガシヤリと踏み碎いた

そして、少女は獣人達に視線を向けて

「獣人共^ネ。今なら、楽に捕まえてやるが？」

と問い掛けるが、獣人達は

「貴様ら、タダでは済まさん！」

「八つ裂きにしてやる！」

と牙を剥いた

すると、少女は呆れた様子で

「やれやれ……これだから粹^ネがった獣人の相手は疲れる……」

と溜め息混じりに言う^コと、男に視線を向けて

「西村、一匹任せるぞ」

と言った

「わかった。任せろ」

男、西村は頷くと、僅かに腰を落とした

「死ねえええ！」

獣人達は叫びながら、それぞれ西村と少女に飛びかかった

少女は軽やかに避けて、西村は上半身を僅かに後ろに逸らすだけで避けた

その後、少女に対して一人の獣人がその爪を振るった

しかし、少女は軽々と爪の連撃を避け続けた

だが気付けば、少女はコンテナの端に追い込まれていた

「これで逃げられないぞー！」

「ふむ……そうかな？」

獣人の殺気を軽やかに受け流し、少女は首を傾げた

そして、その獣人は背後に振り向きながら

「おい！ 人間一人殺すのに、何時まで……！」

と言おうとして、途中で固まった

なぜならば、西村の前で

その獣人はコンテナにめり込むように、倒れていたからだ

その光景に獣人が固まっていると、少女が

「西村、殺してはいないだろうな？」

と問い掛けた

すると西村は、少し呆れたように

「一発殴っただけだ……まったく、これならばまだ、学校の生徒達の方がタフだぞ」と言った

すると、残っていた獣人はビクツと体を震わせて

「西村……？　まさか、鋼の拳聖の西村か!？」

と戦慄していた

「ん？　なんだ……俺を知っている奴が居たか」

西村がそう言うのと、少女はクククツと笑って

「当たり前だろ。お前は私と同じ位に有名だ」

と言った

すると、西村は溜め息混じりに

「確かにな……俺もお前も、互いに有名になったな……南宮」

と少女

那月の名を呼んだ

その直後、獣人は目を見開きながら那月に視線を向けて

「まさか……空隙の魔女、南宮那月か!？」

と叫んだ

すると、那月は冷たい笑みを浮かべて

「ほう……：獣人^{ネコ}風情が私を知っていたか……」
と言った

すると、獣人はギリリツと歯を剥き出しにして

「魔族狩りの攻魔官共が……なぜ、この島に居る！」
と叫んだ

すると、西村と那月は笑いだして

「教師が学校のある島に居るのが、そんなに不思議か？」

「まあ、獣人^{ネコ}如きには分からないだろうがな？」

と言った

すると、獣人は眉をひそめて

「教師……：学校……：だと？」

と呟いた

「さて……：明日の授業の準備がまだ有るのでな」

「貴様をサツサと捕まえようか」

西村に続いて那月はそう言うのと、パチンと指を鳴らした

その直後、獣人目掛けて何本もの鎖が殺到した

「う、ウワアアアアア!？」

獣人は逃げようとしたが、呆気なく捕まった

そして、那月は捕まえた獣人達を逆さまに吊すと

「さてと……尋問はアイランドガードに任せるとしようか」

と言った

すると、西村が頷き

「明日も問題児達で忙しいからな」

と同意した

そして、西村と那月ある方向に視線を向けて

「また、あのバカが動くかな……」

「まあ、十中八九動くだろう」

と話すと、次の瞬間には姿を消した

こうしてまた、人工島に災厄が近づく……

何時もの日常風景

「暑い……」

夏休みも終わって時は経ち、九月半ばのとある日の朝六時半頃

明久は珍しく自分で起きた

それは自分でも思っている事で、明久は思わず

「珍しい……起こされる前に起きた……」

と呟いた

第四真祖になる前は、部活の朝練等もあつて普通に起きていたが、第四真祖になつてからは、あまり起きられなくなつた

故に、最近明久は周囲から《部活を辞めて気が抜けたダメ高校生》という認識であり、それは妹たる風沙からも思われていた

その時に気づいたが、隣の風沙の部屋から壁越しに楽しげな話し声が聞こえてきた

「誰か来たのかな、こんな朝早くに……」

明久はそう呟くと、顔を洗うために部屋を出た

そして手早く顔を洗うと、明久は居間に向かった

すると、机の上に風沙が作ったらしいベーグルサンドとイタリアンサラダ、さらにはハムエッグが三人分有った

何時もより手が込んだ朝食と一人分多いことから、明久は

「珍しい……母さんが帰ってきてるのかな？」

と言った

明久と風沙の母親は、島内にあるとある大企業の主任研究者である

そしてそういった役職故に、母親は一週間に一回帰ってこれるかどうかという勤務状態なのである（本来は来賓用の部屋を占拠して、そこに住んでいる）

明久は欠伸をしながら、風沙の部屋のドアを開けて

「風沙。母さん帰ってきて……」

と言っていて、明久の言葉は止まった

そこには確かに、風沙が居た

だが、居たのは風沙だけではなかった

風沙の部屋には、もう一人の少女が居た

華奢な体格だが、どこか鍛え上げられた獣のような雰囲気纏っている凛とした少女が居た

彼女の名前は、姫柊雪菜

風沙のクラスメイトにして、吉井家の隣の部屋に住んでいる第四真祖たる明久の監視役の少女だ

しかし、問題はそこではなかった

二人はなぜか、二人揃って下着姿だったのだ

よく見れば、二人の足下には、お揃いのコスチュームがある

どうやら、それに着替えていたらしい

「なんでさ!?!」

「何時まで見てるの、明久君!」

明久が驚愕し、風沙はそんな明久を見ながら怒鳴った

次の瞬間、風沙の近くに居た雪菜の姿が消えた

そして気付いたら、雪菜は明久の懐に肉薄しており、それを見た明久は、なんとか一

歩下がろうとした

だがそれよりも早くに、雪菜は全身を使って、明久の顎に掌底を叩き込んだ

その一撃で、明久はまるで打ち上げられたロケットのように宙を舞い、廊下の壁に背

中を思いつ切り打った

そして、ズルズルと廊下に倒れ込みながら

「本当に、なんでさ……!」

と言いなから、明久の意識は闇に沈んでいった

なお、そんな明久が最後に見たのは、恥ずかしそうに顔を赤らめながら胸元を掻き抱いている雪菜の姿だった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数十分後、明久達の姿はモノレール車内にあつた

明久は首が痛いのか、首筋に手を当てて微妙な表情を浮かべていた
すると、雪菜がオロオロとした様子で

「だ、大丈夫ですか、先輩？」

と明久に問い掛けた

すると明久は、視線を雪菜に向けて

「ああ、うん、大丈夫だよ」

と答えた

すると、頬をぷつくりと膨らませた風沙が

「心配する必要無いよ、雪菜ちゃん！ 着替えを覗いた明久君が悪いんだからね！」
と言った

すると、明久が

「そもそも、なんで雪菜ちゃんが吉井家こっちで着替えてたのさ？」

と問い掛けた

すると、凧沙が呆れた様子で

「明久君、もう忘れちゃったの？ 昨日の夕食の時に教えたじゃない。今度の球技大会で着るコスチュームの試着をするって」

と言った

すると、明久は数秒間唖ってから

「そういえば、そんな話を聞いたような……」

と呟いた

すると、凧沙が溜め息混じりに

「明久君の老後が心配だよ……」

と呟いた

それを聞いた明久は、心中で

(いや、老いることはないけどね)

と思つてから

「そもそも、なんで吉井家ウツチなのさ？ 別に学校でもいいでしょ？」

と言った

すると、凧沙が

「家でやった方が、すぐに修正出来るでしょ？　後は雪菜ちゃんだけなんだよ」

と答えた

「そっか……でも、コスチューム？」

と明久が首を傾げていると、雪菜が

「頼まれたんです。応援してほしいって……」

と恥ずかしそうに答えた

「頼まれた？」

雪菜の言葉に明久が疑問符を浮かべていると、風沙が

「そうだよ。クラスの男子達が全員土下座しながら『姫が応援してくれたら、死ぬ気で頑張って優勝を目指す』って」

と教えた

姫というのは、おそらく雪菜のあだ名だろうと明久は思いながら

「男子が全員、土下座？」

思わず呆然とした

確かに、雪菜はなんだかんだで押しに弱く真面目な性格である

そのように必死に頼まれたら、雪菜は断れないだろう

だが、いくらなんでも男子全員土下座とは、予想の斜め上であった

「それでいいのかな、中等部は……」

明久がポツリと呟くと、雪菜と凧沙は何とも言えない表情を浮かべた
すると

「いやあ、最初はドン引きだったけど、思わず納得しちやったよ。相手は雪菜ちゃんだし
ね。だから、女子達あたし達も協力するんだ」

と説明すると、ニヒヒと笑い出して

「あ、明久君も応援しようか？」

と問い掛けた

「いや、流星にいいよ。自分達のクラスだけにしな。余計な軋轢を生みたくないでしょ
？」

明久のその言葉を聞いて、凧沙はあーと声を漏らしてから

「下手したら、明久君が亡き者にされそうだから、辞めとくね」

と言った

「待って、それはどういう意味さ」

明久が問い掛けるが、凧沙は答えなかった

「ま、こつそりと応援はするよ。ね、雪菜ちゃん」

「はい。応援します」

風沙の言葉に、雪菜は半ば諦めた様子でそう言った

それを聞いて、明久が恥ずかし気に頬をポリポリと搔いているとモノレールが止まり、ドアが開いた

なので、明久達は何時ものようにモノレールを降りて改札へと向かった

何時もの日常風景で、何時ものやりとり

だが、明久達は港に見慣れない大きな豪華客船が泊まっていたことには、とうとう気付かなかった

招待状とお届け物と

明久が学校に到着すると、下駄箱の所で浅葱と出会った
どうやら、今登校してきたらしい

「やつほ、浅葱」

「あら、明久。おはよう」

二人は何時ものように挨拶すると、上履きに履き替えて、教室へと向かった
すると、浅葱が思い出したように

「ねえ、明久は決めたの？ 出場する競技」

と明久に問い掛けた

すると明久は、思い出すように唸りながら

「あー……確か、築島つきしまさんに楽なのって頼んだなあ……」

と言った

築島というのは、明久と浅葱のクラスのクラス委員長である

なお、本名は築島倫つきしまりんと言う

真面目な少女なのだが、どこか茶目つきがあり、時々とんでもない爆弾発言をするの

だ

だが、問題児の集まりである明久達のクラスを纏められている実績があり、教師達からは信頼が厚い

「まあたアンタは、そんな手抜きして……元運動部なんて、体育祭や球技大会位でしか役に立たないんだから、真面目にやりなさいよ」

浅葱がそう言うのと、明久はジト目で浅葱を見ながら

「浅葱……君は今、全元運動部を敵に回す発言をしたよ？」

と唸るように言った

「事実でしょ」

そんな会話をしている内に、明久と浅葱は教室に到着した

すると、二人が到着したことに気づいた築島と基樹がニヤニヤと笑みを浮かべて

「いらつしやいお二人さん」

「お前らにうってつけの競技、選んでおいたぜ」

と言いながら、黒板を指差した

そして、明久と浅葱は黒板を見て固まった

なにせ、そこには……

男女混合テニス 明久&浅葱

と書かれてあったからだ

そして放課後、明久はジャージに着替えると校庭脇のベンチに座っていた

今明久は、浅葱とのテニスの練習は一休みしていた

そして、相手の浅葱は喉が渴いたとのことで、購買まで飲み物を買に行っている

「暑いなあ……」

明久がそう言いながら、胸元を扇いでいると、遠くで何かが一瞬光った

それと同時に、明久は自身の直感に従って前へと飛んだ

その直後、明久が座っていたベンチが碎け散った

「なんだ!? なんでするか!? なんなんですか!? の三段活用!?!」

と明久が驚いていると、その碎け散ったベンチの場所から、二頭の金属製の獣が現れた

「嫌な予感……」

明久がそう呟いた直後、その二頭の獣はそれぞれ牙と爪で明久に襲いかかってきた

「おっとお!!」

初撃はバックステップで避けたが、獣達は素早く連撃を繰り出してきた

「なんとおお!!」

明久はそれをなんとか、側転で避けた

だが、次の一撃は避けられないと思った

その時だった

「先輩、伏せてくださいい！」

という声が聞こえて、明久は転ぶように伏せた

その直後

「雪霞狼！」

という凜々しい声と同時に、銀閃が走った

「はああああ!!」

続いてもう一閃閃き、明久に襲いかかってきた金属製の獣達は瞬く間に金属製の紙に

戻った

「雪菜ちゃん！」

「先輩、大丈夫ですか？」

明久は現れた人物、雪菜を見上げた

近づいてきた雪菜は、明久に手を貸して明久を立たせた

立ち上がった明久は、ジャージに付いた砂埃を叩き落としてから

「雪菜ちゃんは、なんでここに？」

と雪菜に問い掛けた

すると雪菜は、雪霞狼を地面に突き立てて

「先輩に付けておいた式が、危機を知らせてきたんです」

と言いながら、落ちていた金属製の紙を拾い上げた

すると明久は、そんな雪菜をジト目で見ながら

「ねえ、雪菜ちゃん……プライベートは見えないよね？ 見えないよね!」

と問い掛けたが、雪菜は聞き流して何か呟いてから金属製の紙に指を滑らせた

すると、金属製の紙は蝶になってパタパタと飛んでから、地面に落ちた

「なにをしたの？」

雪菜が何をしたのか分からず、明久は問い掛けた

すると、雪菜は金属製の紙を溜め息混じりに見ながら

「ダメですね……逆探知出来ません……」

と呟いた

「逆探知？」

「はい。これを使っていた術者を特定しようと思っただんですが……相手もなかなかの手

練れみたいですね」

雪菜はそう説明すると、明久へと体を向けて

「それに、今の術は対象の相手に手紙を届ける術の筈で、あんなに攻撃的じゃないんです

が……」

と困惑した様子で、砕け散ったベンチに視線を向けた

それに続くように、明久もベンチへと歩み寄ると、しやがみこんで

「ねえ、雪菜ちゃん……手紙を届ける為の術って言ったよね？」

と雪菜に問い掛けた

すると、雪菜はキョトンとした表情で

「ええ……そうですが……」

と答えた

すると明久は、ベンチの有った場所から何かを摘まんで

「じゃあ、これは僕宛ってことかな？」

と言いながら、摘まんでいた物を見せた

それは、蠟で封がされた一通の封筒だった

そして雪菜は、その蠟に刻まれてある紋章を見て、目を見開いて

「そんな!?! その紋章は、戦王領域の!?!」

と驚愕の声を上げた

「戦王領域? って、なんでさ……」

明久が訳が分からず首を貸している、騒ぎに気付いたらしく教師達が駆け寄ってき

た

それに気づいて、明久は封筒をポケットに隠した

そして、教師達に状況を説明すると、この日は練習も早々に切り上げて帰ることに
なった

そして、帰り道で明久は封筒を開いた

戦王領域からの手紙と聞いて、英語とかかな？ と危惧していたが、意外にも日本語
だった

手紙の内容は簡単に言うと、ダンスパーティーの招待状だった

ただし、条件が厄介だった

何せ、異性の伴侶を同伴させて、尚且つ、礼装の着用が義務だったのだ

「うーん……礼装なんて持つてないし、相手なんてもつとなあ……」

と明久が後頭部を搔いていると、雪菜が

「先輩、踊れるんですか？」

と問い掛けた

すると、明久は胸を張って

「踊れるわけないじゃん！」

と断言した

「威張らないで下さい……」

明久の言葉を聞いて、雪菜は深々と溜め息を吐いた

そんな会話をしている内に、部屋の前に到着した

その時、明久は不在時受け取り棚に、大きな箱が入っていることに気付いた

「なんだろ……え、!?」

「先輩? どうしました? ……え?」

固まった明久に続いて、雪菜も箱に付いてる伝票を見て固まった

なぜならば、その伝票には《宛、第四真祖吉井明久殿 発、獅子王機関》

となっていたからだ

数秒して復活すると、明久と雪菜は顔を見合わせてから箱を雪菜の部屋の方へと運んだ

明久としても雪菜としても、獅子王機関からの宅配便の中身に思い当たりが無かったのである

念の為に、明久は雪菜に立ち会ってもらい、箱を開けた

中に入っていたのは、何か黒い物だった

「なんだこれ……」

明久はそう言いながら、それを掴み出した

するとそれは広がり、礼服の上着になった

「これって、スーツ？」

明久はキョトンとしながら、もう一つも掴み出した

それは黒いズボンで、更にはワイシャツまで入っていた

しかも驚いたことに、サイズは明久にピッタリだった

「なんで獅子王機関が先輩に？」

「さあ……ん？ もう一着ある……」

明久はそう言いながら、中に入っていた一着を取り出した

明久が取り出したのは、白を基調として水色のアクセントが入った一着のドレスだっ

た

「ドレス？　なんで……って、なんか紙が……」

明久が首を傾げていると、ドレスから小さな紙が一枚ヒラヒラと落ちた

明久はドレスを一旦置くと、紙を拾い上げた

「えつと……姫柊雪菜様……式用ドレスセット一式……Cカップ……B77……W56

……って!!」

途中まで読むと、明久はそれが雪菜のスリーサイズを書いたものだど気付いて固まっ

た

そして、背後から漂ってくる不穏な気配に気付いて、ゆっくりと振り向いた

そこには、無表情になり雪霞狼を持った雪菜が佇んでいた

明久は心中で

(あ、これは、地雷踏んだ……)

と思いつながら、正座した

すると、雪菜は雪霞狼を高々と掲げながら

「先輩……何か、言い残すことはないですか？」

と明久に問い掛けた

明久は諦めながらも、精一杯の笑顔を浮かべて

「うん……そのドレス、似合うと思うよ、雪菜ちゃん」

と誉めた

すると雪菜は、顔を真っ赤にしながらも雪霞狼を振り下ろした

その直後、明久の悲鳴が轟き渡った

騒がしい出会い

「オシアナス・グレイブ……洋上の墓場？ 趣味悪くない？」

と言ったのは、港に来て、目的の船の名前を見た明久である

あれから数時間後、復活を果たした明久は送られてきたスーツに着替えると、指定された港へと来た

そこに停泊していたのは、全長二百mは有ろうかという、メガヨットだった

世界大戦時の駆逐艦に匹敵するサイズで、豪華絢爛な装飾が施されている

居住性はもちろん、船内には二十人近くが一気に入浴出来るサイズの湯船が有るらしい

その事は、招待状と共に送られてきたパンフレットに書いてあった

明久はそんな船を見上げながら、心中で

(お金の無駄遣いだなあ……)

と呟いた

その時、隣から

「せ、先輩……どこか可笑しい所はないですか？」

という、恥ずかしそうな声が聞こえた

明久が隣に視線を向けると、そこにはドレスを着た雪菜が居た

ただし、ドレスを着慣れていないからか、どこか恥ずかしそうにモジモジとしている
そんな雪菜を見て、明久は微笑みながら

「大丈夫、よく似合ってるよ。雪菜ちゃん」

明久はそう言いながら、雪菜の頭を撫でた

正直言うと、明久もスーツは初めて着たのでかなり違和感を感じている

だが、男としてのプライド故か、雪菜には悟らせまいと必死に表情に出ないように努力している

そして、タラップ入り口に立っていた少年に招待状を見せて中に明久達は入った
はつきり言って、中の豪華さは、明久の予想以上だった

それに思わず、明久は

「凄い場違いだなあ……」

と呟いた

なにせ廊下ですら、赤い絨毯が敷き詰められており、調度品は素人の明久ですら一級品と分かる代物だった

そして、案内板に従ってホールに着いたのだが、明久と雪菜は思わず足を止めた

なにせ、そこには既に、何十人も男女が集まっていて、シャンパンを飲みながら談笑していたのだ

もちろんだが、明久は初めての場所である

そんな場所の雰囲気呑まれたのか、明久は足を止めた
すると、雪菜が明久の背中を軽く叩きながら

「先輩、早く行きましょう」

と言った

それで我に返り、明久は軽く深呼吸してから

「よし……行こう」

と言うと、堂々と歩き出した

そして、ホールの半ばまで来ると、一人のウェイターが近寄ってきて

「飲み物は如何ですか？」

と明久達に対して、シャンパンを乗せたトレイを差し出した

だが、明久は右手を上げて

「すみません。先を急ぐので」

と断りながら、ウェイターの顔を見た

ウェイターは壮年に差し掛かっており、頬には大きな裂傷の跡があった

更には、そのウェイターの身の内から、凄まじいプレッシャーを明久は感じた（凄いプレッシャーだ……護衛かな？）

明久のその判断は、おおよそ正しいだろう

なにせ、明久を呼び出した相手は、戦王領域の大貴族らしい護衛役がウェイターをやっている、なんら不思議ではない

「失礼しました」

明久の言葉を聞いて、ウェイターは一礼してから去った

それを確認すると、明久は隣に居る雪菜に視線を向けて

「雪菜ちゃん。相手……えっと、デイミトリエ・ヴァトラーの居場所は分かる？」

と問い掛けた

すると、雪菜は頷いてから

「この上のフロアみたいですね……あの階段から行けるかと」

と言いながら、前の大きな階段を指差した

そして階段に歩み寄り、足を上げた直後

明久は上半身を僅かに逸らし、横合いから突き出されたフォークを右手の人差し指、

中指、親指で止めた

そして、フォークを突き出した人物を軽く睨み付けながら

「どういうつもり？　今の、回避してなかったら、目に刺さってたよ？」
と問い掛けた

「刺そうとしたのよ。第四真祖、吉井明久」

明久の問い掛けにそう答えたのは、明久と同じ位の身長的美少女だった

雪菜もかなりの美少女だが、目の前の美少女は方向性が違った

雪菜が人形のような印象の美少女ならば、目の前の美少女はモデルのような印象だった

出る所は出て、引つ込むべき所は引つ込んでいた

美少女の言葉に対して、明久が再び問い掛けようとした

その時、明久の隣に居た雪菜が驚いた様子で

「紗矢華さん！」

とその美少女の名前を呼んだ

その直後、明久ですら反応しきれない速度で雪菜に抱き付いて

「雪菜！　久しぶり、元気だった!？」

と雪菜に問い掛けた

「は、はい……」

問い掛けられた雪菜は、居るとは思ってたが、かなり戸惑っていた

「ああ、雪菜、雪菜、雪菜……！ 私が居ない間に、第四真祖なんかの監視任務を押しつけられて、可哀想に！ 獅子王機関執行部も、私の雪菜になんてむごい仕打ちをするのかしら！」

「あ、あの……紗矢華さん……!?」

明久が固まっている内に、美少女

紗矢華は雪菜を撫でまわした

「でも、もう大丈夫よ。この変質者があなたに指一本触れようとしたら、私が即座に抹殺するわ。生命活動的な意味でも社会的な意味でも……」

「ちよつ……さ、紗矢華さん……！ さすがにそれは……やつ！」

目の前で暴走してる紗矢華を見て、明久は溜め息混じりに

「まさか、あの時の狙撃は君なの？ 距離四百五十での狙撃」

と問い掛けた

すると、どこか感心した様子で紗矢華が

「へえ……よく分かったわね」

と言った

すると、明久は軽く睨みながら

「あの位置を狙える箇所は、大体10箇所所有るけど……あの角度からだ、距離四百五十

離れた15階建てのビルの屋上が適してる」
と指摘した

明久の話しを聞いて、紗矢華は笑みを浮かべて

「へえ……ただの変態真祖って訳じゃないみたいね」

と言った

この言葉には、流石の明久も頭に来た

「誰が変態だ。君もいきなり出てきて、何の用？」

明久が睨み付けながら問い掛けるが、紗矢華は小馬鹿にしたように鼻で笑って

「あんたに教える訳ないでしょ」

と言った

明久は紗矢華から雪菜に視線を移して、雪菜に対して

「知り合いみたいだけど、前に言ってたルームメイト？」

と問い掛けた

「……はい」

明久の問い掛けに対して、雪菜は申し訳なきそうに頷いた

「煌坂紗矢華。獅子王機関の舞威姫よ。バカ明久」

「OK……いい加減にしないと、僕だってキレルぞ、コラ？」

声を低くして魔力を滲ませながら言っていると、紗矢華は眉を細めた

「へえ……」

と面白い、といった様子だった

「ところで、舞威姫つてなに？ 劍巫とは違うの？」

明久が問い掛けると、雪菜は頷いて

「どちらも同じ攻魔師ですが、収めてる業が違うんです」

「どんな？」

明久が再び問い掛けると、紗矢華が得意げに

「舞威姫の真髄は呪詛と暗殺。つまり、あなたのような雪菜に付きまとう変態を抹殺す

るのが、私の使命よ」

と言い放った

それを聞いて、明久はどこか疲れた様子で

「ねえ、雪菜ちゃん……この子つて、アホの子？」

と小声で、雪菜に問い掛けると、雪菜は苦い表情を浮かべた

だが、気を持ち直したらしく

「でも、どうして紗矢華さんが？ 外事課で多国籍魔導犯罪を担当していた筈ですよ

？」

と紗矢華に問い掛けた

すると、紗矢華は

「今もそうよ。この島には、任務で来たの」

と優しげな口調で、雪菜に答えた

「任務？」

雪菜が目を細めながら問い掛けると、紗矢華は投げやりに

「あなたと同じよ、雪菜。吸血鬼の監視役。アルデアル公が絃神市の住民を危険に晒さないよう、監視するのが私の任務。今は彼に依頼されて、あなた達の案内に来たのよ」

と説明した

その説明を聞いて、明久は事態を把握した

雪菜が明久の監視役として来たように、紗矢華はヴァトラーの監視役を命じられて、この船に乗り込んでいるのだ

もし、そのヴァトラーが島にとって危険な存在になった場合、即座に抹殺するために「もう疲れたから、早く案内して」

明久が疲れた様子で言うと、紗矢華は明久を汚らわしい物を見るようにしながら

「言われなくても、連れて行ってあげるわよ。だから、さっさと死んできてちょうだい」

と言った

「僕は死ねないからね」

明久はそう言うのと、紗矢華に続いて階段を上がっていった

どうやら、先ほどまでの会話から察するに、紗矢華は雪菜に姉妹同然の深い愛情を
持つているようだ

そんな紗矢華からしたら、明久は雪菜を横から奪った邪悪な吸血鬼らしい

これで、もし明久が雪菜の血を吸ったのが知れたら、かなり面倒な事態になる
来る途中に雪菜が、明久が狙われるかも。と言った気持ちがかかった

だが、今の明久にとって、紗矢華は大した危険ではなかった

明久中に流れている吸血鬼の血が、激しく騒いでいる

とてつも無く強い力を持った吸血鬼が、近づいてきているようだ

相手の正体も、明久を招待した目的も、明久は分からない

三大真祖は休戦協定を結んでいるらしいが、それに明久が適用されるとは思っていな
い

交渉の内容によっては、この船の上で戦闘に発展する可能性が高い

明久は確かに第四真祖と呼ばれているが、実際はほとんど素人に近い

対して相手は、戦王領域の真祖の系譜に連なる貴族

勝てる見込みは無いに等しい

改めて緊張していると、大きなドアが見えて

「この先よ」

と言いながら、紗矢華がドアを開けた

どうやら、ヴァトラーは外の甲板に居るようだ

紗矢華の先導に従って、明久と雪菜も外に出た

外に居たのは、純白のスーツを着た青年だった

線が細い為に、外見的な威圧感はない

だが、その身から滲み出る魔力は凄まじい

明久達が来たのに気づいたらしく、その青年は振り向いた

金髪が揺れて、青い瞳が明久を見た

次の瞬間、明久に向かって純白の閃光が走った

「先輩っ！」

一番先に反応したのは、素早く槍をギターケースから引き抜いた雪菜だった

雪菜が槍を構えながら明久の前に出ようとすると、僅かに遅れて紗矢華も背中に背

負っていた楽器ケースに手を伸ばしながら動いていた

だが、二人でも間に合わない

青年が放った閃光の正体は、光り輝いている炎の蛇だ

灼熱の炎によって構成された、吸血鬼の眷獣

流星の如き速度で迫ってきた蛇に對して、明久はギリギリで反応した

明久は左手中指を伸ばし、縛っておいた糸を勢いよく引つ張った

次の瞬間、袖の中から一本の短い木の棒が出てきた

その糸を縛ってる側を左手で掴み、右手で反対側を掴んだ

その直後銀閃が走り、純白の蛇は真つ二つに切り裂かれた

明久の左手に握られていたのは、一振りの小太刀だった

摂氏数千度に達するだろう炎の蛇を斬ったというのに、溶けてすらいない

そして、明久が斬った炎の蛇は数瞬後には溶けるように消えた

この間、僅か二秒足らず

そして、刀を振るった明久は、そのままの流れで、刃を鞘に納刀した

その時になってようやく、大きく息を吐いて

「あ、危なかったあ……い！」

と喋った

その直後、雪菜が歩み寄って

「先輩、大丈夫ですか？」

と問い掛けた

「うん……大丈夫」

雪菜を安心させようと、明久は笑みを浮かべながら答えた

すると、パチパチと軽い調子で拍手が聞こえて

「いやいや、お見事。この程度の眷獣では、傷を付けることも出来なかつたねエ……しかし、なかなか面白い刀を持つてるみたいだ」

と緊張感も欠片もなく言った

青年は明久に歩み寄ると、少し離れた場所で片膝を突いて、恭しく貴族の礼を取って「御身の武威を険するがごとき非礼な振る舞い、衷心よりお詫び申し奉る。我が名はデイミトリエ・ヴァトラー、我らが真祖、忘却の戦王よりアルデアル公位を賜りし者。今宵は御身の尊来を頂き、恐悦の極み」

と口上を上げた

その見事な口上に、警戒していた明久は戸惑った

雪霞狼を構えた雪菜も、雪菜に近づいていた紗矢華も呆然としている

そして、ようやく立ち直った明久は、ヴァトラーを軽く睨み付けながら

「あんたが、デイミトリエ・ヴァトラー？ 僕を呼び出した張本人？」

と首を傾げた

すると、ヴァトラーはニヤリと笑いながら顔を上げた

人懐っこいが、どこか狡猾さを感じる悪戯っぽい笑みだ

そして、ヴァトラーは立ち上がる

「初めまして、と言っておこうか、吉井明久。いや、焰光カレイドフラッドの夜伯……我が愛しの第四真祖よー！」

と言うと、両手を大きく広げた

それを見て、雪菜は呆然と目を見開き、紗矢華はどこか呆れた様子で深々と溜め息を吐きながら首を振っていた

それに遅れること、数秒後

「……………はい？」

あまりに予想外の言葉に、明久は思わず首を傾げた

これが、第四真祖、吉井明久と、アルデアル公、デイミトリエ・ヴァトラーの運命の出会いであった……

会談 前

明久がバトラーと出会っていた頃、浅葱は部屋でウダウダしていた

放課後、明久を意識してテニスウェアを着たというのに、明久は一切反応しなかった
それが腹立たしくもあり、これ以上どうしようか悩んでいた

その時、浅葱のパソコンが着信を知らせた

最初、浅葱はスパムメールか確認する程度だった

しかし、題名は『解読希望』

そして、依頼主はカノウ・アルケミカル・インダストリー社と表示されていた

浅葱も何度か、仕事の依頼を受けたことのある、島内の大手企業の一つだ

「解読希望？ 仕事の依頼にしちゃ、変ね……」

浅葱はそう言うと、メールを開いた

すると表示されたのは、あまりにも奇怪な文字だった

あらゆる言語や古代文字とも違った文字

「パズル？ ……いいじゃない、あたしに挑んだことを後悔させてやるわ」

浅葱はそう言うと、鬱憤を晴らすために、解読に意識を集中した

それが、後に大変な事態を招くとは気づかずに……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「明久君！ 明久君つてば、もう！」

風沙は甲高い声で叫びながら、部屋のカーテンを開けてから明久からタオルケットを奪い取った

「朝だよ、起きなよ。遅刻するよ。朝ご飯どうするの！ あー、また目覚まし時計壊れる！ 教科書は揃えたの？ 宿題は？ 服も脱いだら、ちゃんと畳んでよー。つて、スーツはハンガーに掛けて！ シワになるでしょ!？」

「風沙。お願いだから、もう少し寝かせて……」

明久はそう言うと、風沙に奪われたタオルケットを取り返して被った

デイミトリエ・ヴァトラーとの会談が終わって帰ってきたのは、夜中の3時だったつまり、バリバリの寝不足である

「明久君、さつきもそう言ったじゃない。もう……遅刻しても構わないからね」

風沙は諦めた様子でそう言うと、部屋から出ていった

風沙が部屋から出ていくと、明久はヴァトラーとの会談を思い出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「君の中から感じる気配……それは、獅子の黄金かい？ ふウン……普通の人間が第四

真祖を食ったって噂、わざわざ確かめに来たのも、案外無駄じゃなかったわけだ」

明久に奇襲したというのに、ヴァトラーは悪びれもせずにそう言った

巨大クルーズ船《オシアナス・グレイヴ》の広い上甲板

夜風にコートを靡かせながら、ヴァトラーは愉しげな表情で笑っていた

「……獅子の黄金を知ってるの……？」

明久は愉しげに笑っているヴァトラーを、困惑気に睨みながら問い掛けた

ヴァトラーの見た目は二十代前半だが、ヴァトラーは間違いなく《旧き世代の吸血鬼》である

実際の年齢は、今の見た目の数倍に達するだろう

そこまで行くと、その吸血鬼の実力は真祖に匹敵すると言われている

そうになると、ヴァトラーの有する記憶量は、明久の記憶量を遥かに上回っているだろう

そして、明久の知らない第四真祖の事も知っているはずである

「ん？ 焰光カレイドブラッドの夜伯、アヴローラ・フロレスティーナの五番目の眷獣だろ。制御の難しい

暴れ者と聞いてたけど、上手く手懐けてるみたいだね。霊媒の血がよっぽど良かったんだね」

ヴァトラーの淡々とした言葉に、明久は顔をしかめた

先代の第四真祖、焰光の夜伯、アヴローラ・フロレスティーナ……その名前を聞いただけで、明久は頭痛に苛まれた

昔、どこかで出会ったはずの彼女のことを、明久は断片的にしか思い出すことが出来ない

もはや、呪いに匹敵する強固な封印が、明久の記憶を奪っているのである

「あんたと先代……どういう関係なの？」

だんだんと激しくなる頭痛に明久は苛まれながらも、明久はヴァトラーに問い掛けた
すると、ヴァトラーはどこか怪しい笑みを浮かべて

「最初に言わなかったつけ？　ボクは彼女を愛してるんだ。永遠の愛を誓ったんだよ」と言った

それを聞いて、明久はジト目でヴァトラーを見ながら

「愛を誓った……って、あんた確か、第一真祖の一族じゃなかったつけ？」
と問いかけた

すると、ヴァトラーはクククツツと笑うと

「まあね。でもうちの真祖は、そういうのをあまり気にしない吸血鬼だからね」と答えて、犬歯を剥いた

そして、続けて

「要は、《血》が強ければいいのさ。先祖が誰だろうが無関係に、強い血族が生き残る。吸血鬼つてのはそういうものだろ？ そんなわけで、仲良く愛を語らおうじゃないか、吉

井明久」

「よし、待とう。なんでそんな話になった？」

「ん？」

嫌な予感に襲われて、明久は近寄ってきたヴァトラーを止めた

が、ヴァトラーは意味が分からないらしく、首を傾げた

そんなヴァトラーに対して、明久は少し距離を取ってから

「だって、あんたが愛を誓ったのはアヴローラなんでしょ？」

「だけど、彼女はもう居ない。君が彼女を喰ったんだろう？」

明久の問い掛けに対して、ヴァトラーは平然とした様子で返した

そして、ヴァトラーの言葉を聞いて、明久は低く唸った

明久には、その時の記憶がない

だが、ほんの数ヶ月前までは普通の人間だった

しかしその時を境に、第四真祖と呼ばれる吸血鬼の力を手に入れた

考えられる可能性は、たった一つだけ

それが、明久が真祖を《喰った》ということ

先代の第四真祖を融合補食し、その存在と能力を奪ったのである

人間だったはずの明久が、真祖の吸血鬼を喰う

想像するだに、忌まわしい光景だろう

だが、ヴァトラーの声音には、明久を責めるような響きは一切無い

むしろ、ヴァトラーは明久を賞賛するように微笑み、唇の端を軽く舐めて

「……だからボクは、彼女の《血》を受け継いだ君に愛を捧げる。彼女に永遠の愛を誓ったボクとしては、当然の行動じゃないか」

「その理屈がおかしいの！ 血筋が同じなら、なんでもいいの!?!」

明久が本気で突っ込むと、ヴァトラーは当然と言わんばかりに頷いて

「もちろんそうだよ。きみが第四真祖の力を受け継いだということは、つまり彼女がきみを認めたということだ。それに比べれば、ボク達が男同士だという事実なんて些細なことだよ」

と告げた

すると、明久は一気に距離を取って

「些細じゃないからね!?! そこは重大な問題だからね!?! それと、その舌使いはやめて!!」

と怒鳴ると、明久は逃げる算段を考え始めた

すると、雪菜が前に出て

「アルデアル公……恐れながらお尋ねします」

意外な乱入に、ヴァトラーは不思議そうな表情を浮かべた

これまでで、雪菜の存在を毛ほども意識していなかったらしい

「きみは？」

「獅子王機関の劍巫、姫柊雪菜と申します。今夜は第四真祖の監視役として参上いたしました」

恭しく雪菜が名乗ると、ヴァトラーは退屈そうに見下ろして

「ふうん……なるほど。紗矢華嬢のご同輩か」

と呟いた

そして、数秒間雪菜を見てから

「ところで明久の身体から、きみの血と同じ匂いがするんだが……もしかしてきみが獅子の黄金の霊媒だったりするのかな？」

「……っ!?!」

ヴァトラーの指摘に、雪菜の全身が僅かに硬直した

そして、明久もヴァトラーの言葉で表情が固まった

先代の第四真祖から明久が引き継いだ眷獣の数は、全部で十二

だが、明久が掌握したのはたった一体だけ

他の眷獸達は明久を宿主とは認めておらず、制御不能の状態であるそれは、紆余曲折あつて雪菜の血を吸ったことで掌握したのであるもちろんのこと、その事実は迂闊に話せる内容ではないのだが……

「匂いつて……そんなことまでわかるもんなの!？」

明久が呟くように言ったのを、紗矢華が聞き逃さなかった

紗矢華から凄まじい殺気が放たれて、明久は納得した

紗矢華は呪詛と暗殺の専門家と言った

そして、紗矢華が放っている殺気はそれを信ずるに値する程だった

「いや、嘘だよ。ちよつと言つてみただけだ」

ヴァトラーはそう言うのと、クツクツクと笑つてから

「でもまあ、きみが明久の血の伴侶候補だというのなら、ボクにとつては恋敵つてことになる。それに敬意を評して、特別に質問を受け付けてあげるよ。なにが聞きたい?」

「前提からしていろいろと間違つてるでしょ!？ 恋敵つてなにさ!？」

明久が抗議するが、ヴァトラーは何事もなかったように聞き流した

そして、雪菜は深々と溜め息を吐いてから、ヴァトラーを険しい目で見て

「貴公がこの島を来訪された目的についてお聞かせください。そうやって第四真祖とい

かがわしい縁を結ぶことが目的なのですか？」

雪菜が咎めるように問い掛けたが、ヴァトラーはむしろ愉快そうに眉を上げて

「ああ、そうか、忘れていたな。本題は別にある。もちろんそつちもあるんだけどね」

「そつちもあるんかい……」

ヴァトラーの言葉を聞いて、明久はうんざりした様子で呟いた

雪菜は攻撃的な気配を纏いながら、威嚇するようにヴァトラーを睨み

「本題というのは……？」

と問いかけた

すると、ヴァトラーは指を鳴らしながら

「ちよつとした根回しつてやつだよ。この魔族特区が第四真祖の領地だというのなら、

まずは挨拶しておこうと思つてね。もしかしたら迷惑をかけることになるかもしれない

いからねエ」

と語つた

すると、大勢の使用人達が現れた

その彼らはワゴンを運んでおり、その上には料理の皿が満載されていた

しかも、パーティー会場に出されていた料理が、みすぼらしく思えるほど豪華だった

「……迷惑とは、どういうことですか？」

出された料理には目もくれずに、雪菜は問いかけた

するとヴァトラーは、生ハムを一切れ啜えて

「クリストフ・ガルドシユという名前を知ってるかい、明久？」

「誰？」

明久が首を傾げると、目の前にワインが出された

出してきた人物を見ると、それは先ほど中でシャンパンを出してきた男だった

とりあえず明久が受け取ると、ヴァトラーも受け取って貴族らしく様になる姿で明久の前に掲げた

悔しいが絵になる光景だった

そして、一口飲むと

「戦王領域出身の元軍人で、欧州では少しばかり知られたテロリストさ。黒死皇派という過激派グループの幹部で、十年ほど前のプラハ国立劇場占拠事件では民間人に四百人以上の死傷者を出した」

「黒死皇派って名前は聞いたことがある……だけど、何年も前に壊滅したんじゃないかってっけ？ たしか、指導者が殺されたって……」

明久はうろ覚えで昔みたニュースを思い出した

当時小学生だった明久ですら知ってるのだから、かなりの大事件だった

「そう、彼はボクが殺した。少々厄介な特技を持つ獣人の爺さんだったけどね」
ワイングラスを傾けながら、ヴァトラーは悠然と笑った

明久は目の前の青年貴族を凝視した

今更ながら、この軽薄な男が世界的に重要人物だと実感した

そしてこれが、今回の事件の始まりだった

会談 後編

「ガルドシユは、その黒死皇派の生き残りだ。正確に言えば、黒死皇派の残党達が、新たな指導者としてガルドシユを雇ったんだ。テロリストとして圧倒的な実績を持つ彼をね」

「ちよつと待って。あんたがこの島に来た理由に、そのガルドシユって男が関係してるの?」

ヴァトラーの言葉を聞いて、明久は嫌な予感を覚えて問い掛けた
すると、ヴァトラーは感心した様子で頷いて

「察しがよくて助かるよ、明久。その通りだ。ガルドシユが、黒死皇派の部下達を連れて、この島に潜入したという情報があつた」

と答えた

「……なんで、ヨーロッパの過激派が、わざわざこんな島に来るの?」

「さあね……まったく、なにを考えてるんだか」

明久の問い掛けに対して、ヴァトラーは興味ないとばかりにとぼけた態度で肩をすくめた

そんな態度に明久がイライラしていると、明久の近くまで来た紗矢華が事務的な口調で

「黒死皇派は、差別的な獣人優位主義者達の集団よ。彼らの目的は、聖域条約の完全破棄と、戦王領域の支配権を第一真祖から奪うこと……」

と教えた

しかも、紗矢華は蔑むような視線を向けてきたので、明久は睨むような表情で

「だったら、ますますこの島は関係無いんじゃないの？」

「いえ、先輩。違います」

明久の反論の言葉を、雪菜が即座に否定した

「この島は魔族特区……聖域条約によって成立してる街だ。彼らが、この街で事件を起こすことには意義があるのサ。黒死皇派の健在を印象づけるという程度の自己満足だけだねエ」

「なっ……そんな勝手な理屈で……」

明久はそう言いながら、拳を握りしめた

「とはいえ、魔族特区があるのは日本だけじゃない。彼らがこの島に来たことには、他にもなにか理由があると考えるのが妥当だろうねエ」

「なにかって……なにさ？」

「そんなことは知らないよ」

明久の問い掛けに対して、ヴァトラーはぞんざいに首を振った

そして、奇妙に浮き立ったような声で

「考えられるとすれば、そうだな……真祖を倒す手段を手に入れるため、というのはどうかなア。なにしろ彼らの最終目的は第一真祖を殺すことだからねエ」

ヴァトラーの話しを聞いて、明久は呆れた表情で

「あんたはそれでいいの……？」

と問い掛けた

真祖とは、最も古く、そして最も強大な力を持つている吸血鬼だ

その真祖を倒せる手段を手に入れる、ということは、他の全てのの吸血鬼にとつても黒死皇派の存在が驚異になる

ということを意味している

危険なのは、ヴァトラーも同じ筈なのだが……

「別に構わないよ……と、あの真祖じいさんなら言いそうだけどねエ。ボクにもいろいろと立場つてものがあつてサ、そうも言つてられないわけだ」

まるで他人事のように両腕を広げ、ヴァトラーは意味あり気な含み笑いを浮かべた
そんなヴァトラーを、雪菜は生真面目な表情で睨みつけ

「クリストフ・ガルドシユを、暗殺なさるつもりなのですか？」
と問い掛けた

すると、ヴァトラーは肩をすくめて

「まさか。そんな面倒なこととはしないよ。そもそもボクの眷獣たちは、そういう細かい作業に向いてないんだ。街ごと焼き払うとか、そういうのは得意なんだけどねエ」

雪菜の問い掛けに対して、ヴァトラーはのらりくらりと答えをはぐらかした

そして、ヴァトラーの言葉を聞いて

「自慢することじゃないでしょ……」

と明久は呟いてから、胸をなで下ろした

だが

「でもサ、もし仮にガルドシユのほうからボクを殺そうと仕掛けてきたら、応戦しないわけにはいかないよねエ。自衛権の行使ってやつだよ。そうだろ？」

油断した明久を嘲笑うように、ヴァトラーはそう言いながら同意を求めてきた
この段階になり、明久はようやくヴァトラーの目的を察した

ヴァトラーは、黒死皇派と呼ばれている過激派グループの指導者を殺している

つまりは、黒死皇派にとっては指導者の仇である

黒死皇派の残党達は、ヴァトラーに復讐する機会を待ちわびているだろう

「もしも、ガルドシユが本当に真祖を殺す方法を入手したのなら、黒死皇派は真つ先にヴァトラーを狙うはずだ」

「それこそが、ヴァトラーの狙いなのだ」

「あんたがこの島に来たのは、テロリストを挑発して誘き出すのが、本当の目的か……こんな目立つ船で来たのも……」

「明久が睨み付けて問いかけると、ヴァトラーは肩をすくめて」

「いやいや……それはどちらかと言えば、愛しい君に会うのが目的なんだが」

と答えて、明久に近づいてきたが、明久はジリジリと後退して

「ふざけてる場所じゃないでしょ。戦争がしたいなら、自分の領土くにでやってよ。他国の街に迷惑をかけたな！」

明久がそう言うと、ヴァトラーは再び肩をすくめて

「もちろんボクはそう願ってるよ。この都市の攻魔官たちがガルドシユを捕まえてくれれば、文句はない。手間が省けていいよねエ。彼らがガルドシユを捕らえられるなら、の話だけだサ」

ヴァトラーはそう言うと、ゾツとするような冷たい笑みを浮かべて

「だが、ボクが従えている九体の眷獣……こいつらは宿主であるボクの身に危険が迫つたら、何をしでかすかわからない。この島を沈めるくらいのことには平気でやるヨ。だから」

ら、君には最初に謝っておこうと思ったのサ」
「なっ……」

ヴァトラーの話を聞いて、明久は絶句した

ヴァトラーは、彼の命を狙うたった数十人のテロリストを殺すためだけに、島を沈める気なのだ

それを、明久の前で平然と宣言した

それはつまり、明久が止めようとしても無駄だという、ヴァトラーの意思表示だ
もしも邪魔をするのなら、明久すら倒すと

それが、軽薄そうな青年貴族たるヴァトラーの言葉に隠されている、ヴァトラーの本心だった

腹が立たない訳ではない

だが、事実上、明久にはヴァトラーを止める術がないのだ
実力で止めようとしたら、この島に甚大な被害が出るからだ

ヴァトラーが正当防衛を主張する限り、雪菜達獅子王機関も手出し出来ない

正式な外交使節であるヴァトラーを、テロリストに狙われているという理由だけで、島から追い出すのも不可能なのだ

事実上の八方塞がりの状況に、明久の思考が空回りを始めた

その時、雪菜が一步前に出て

「せっかくですが、そのようなお気遣いは無用でしょう、アルテアル公」

と冷たく澄んだ声で、そう告げた

「ゆ、雪菜ちゃん?」

明久が不安そうに呼びかけるが、雪菜は明久には目もくれなかった

そして雪菜の言葉を聞いて、ヴァトラーは訝しむような表情を浮かべて

「……どういうことかな? まさか明久が、ボクの代わりにガルドシユを始末してくれるとでも? だけど、第四真祖のやつよりは、まだボクの眷獣たちのほうが大人しいと思っただけね」

と言った

すると、雪菜は静かな決意がこもった表情で頷き

「そうですね……ですから、わたしが第四真祖の代わりに、黒死皇派の残党を確保します」

「雪菜!」

雪菜の言葉を聞いて、紗矢華は悲鳴を上げた

有能ぶっている彼女ですら、雪菜のこととなるとそんな余裕は無くなるらしい

しかし、それは明久にとっても同じだった

「なんでそうなるのさ!? 代わりにもなにも、僕はガルドシユって奴の相手をする気なんて……!」

「先輩たちは黙っていてください。監視役として当然の判断です。第四真祖をテロリストと接触させるわけにはいきませんから。相手が真祖を殺そうとしているのなら、なおさらです」

明久が止めようとするが、雪菜は即座に抑揚のない声で断った

傍目には冷静のように見えるものの、これは半ば意地になっっている時の雪菜の特徴だ
生真面目な性格のために、一度思い込んだら頑固だ

「ふうん……なるほど。面白い……さすがにボクの恋敵になろうというだけのことはないな」

「え? いえ、べつにそういうわけでは……」

ヴァトラーの話を聞いて、雪菜は強張っていた表情を緩めて戸惑い始めた

そんな雪菜を見て、明久は

(え、戸惑うところって、そこ?)

と疑問に思った

だがそんな雪菜を見て、ヴァトラーは愉快そうに、しかし、どこか酷薄そうな微笑みを浮かべて

「ならば、まずは獅子王機関の劍巫の実力、見せてもらおうか。明久の伴侶にふさわしいか、見極めさせてもらうよ」

と宣言した

それを聞いて明久が、勝手に決めないでくれるかな!?

と突っ込んだが、キツパリと無視された

そして気付いたら、紗矢華は軽い放心状態で絶句したまま固まっていた

どうやら、雪菜に黙ってる。と言われたのが相当にショックだったらしい

そして、雪菜とヴァトラーの二人はそんな明久と紗矢華を無視

雪菜は挑発的な笑みを浮かべていたヴァトラーに対して、無言で頷いた

こうして、深夜にまで及んだ会談は幕を下ろしたのだった

浅葱の行動

「もう、遅刻しても知らないからねー！」

妹の風沙はそう言うと、明久の部屋から去った

そのことに勝利感を覚えつつ、明久は惰眠を貪ろうとタオルケットを被った
その数瞬後

「明久、起きなさい！」

という聞き慣れた声のした直後、腹部に衝撃が走った

「おっ！おっ！」

叫び声を上げながら、明久は視線を向けた

腹部に乗っていたのは、浅葱だった

「なんで居るの？」

明久が問いかけると、浅葱は毅然とした態度で

「昨日、マトモに練習出来なかったから、朝練するって言ったでしょう？」

と言った

「確かに言ったけど、態々僕の家に来て来る？」

明久がそう言うと、浅葱は

「どうせ、寝坊するつもりだったんでしょ？」

と言った

その言葉に、明久は口をつぐんだ

浅葱が言ったのは、完全に凶星だったからだ

「やっぱりね……」

浅葱はため息を吐くと、キッと明久を睨んで

「とつとつ着替えなさい！」

と声を張り上げた

そんな明久達の光景を、ベランダから一羽の小鳥が見つめていた

その小鳥は野生ではなく、呪術によって作られた式だ

そして、それを操ってるのは、遠く離れたビルの屋上に立っている長身の美少女

煌坂紗矢華だった

紗矢華は、明久と浅葱のやり取りを見ると、歯を食いしばって

「第四真祖……吉井明久！」

と憎しみの声を漏らした

◇
◇
◇
◇
◇
◇

朝練も終わり、何とか朝一の授業も終えた

すると明久は、立ち上がってドアから外に出た

そして、渡り廊下に差し掛かったタイミングで

「先輩、どこに行くんですか？」

「やっぱり居たね、雪菜ちゃん」

声のした方を見ると、そこには雪菜が居た

「私は先輩の監視役ですから。で、どこに行くんですか？」

「ん？ 那月ちゃんのこと？」

明久はそう言うと、雪菜と一緒に那月の執務室へと向かった

「那月ちゃん、ちょっと聞きたいことが、おぶっ!？」

「先輩!？」

明久の額に扇子が直撃し、明久は倒れた

「教師をちゃん付けで呼ぶなど、何回言えばわかる。このバカは」

「ぼ、暴力反対……」

明久が悶絶していた、まさにその時

「お茶はいかがですか、第四真祖」

と聞き覚えのある声が聞こえた

明久と雪菜が視線を向けると、そこにはメイド服を着た人形のような顔立ちの少女が居た

「あなたは!？」

「アスタルテちゃん!？」

明久と雪菜の二人は、その少女

アスタルテをよく知っていた

少し前に起きた事件で、職教師の男に産み出された人造人間の少女だ

「アスタルテ。そのバカに茶はいい。私用に新しいのを淹れてくれ」

「命令受諾《アクセプト》」

那月の命令にアスタルテは無表情で頷くと、壁際にあるティーセットへと向かった

「那月ちゃん!　なんで、アスタルテちゃんがここにっ!？」

話してる途中で明久は大きく飛んで、壁にぶつかった

「貴様は学習しないな。吉井……………まあ、アスタルテが居る理由だがな、アスタルテは今、保護観察処分中だな。攻魔官であり教師たる私が引き取ったんだ。まあ、メイドも一人欲しかったしな

「

「それが本音だよね!？」

明久が突っ込みを入れたタイミングで、アスタルテが那月にカップを渡した
すると、アスタルテが恭しく頭を下げた

その表情は、どこか微笑んでいるようだった

「まあ、アスタルテちゃんが好きならいいけど……」

明久がそう言いながら立ち上がると、那月が

「それで、何の用だ」

と明久に問い掛けた

すると、明久は真剣な表情で

「クリストフ・ガルドシユ、どこに居るの？」

と問い掛けた

「貴様、その名前をどこで聞いた？」

那月が睨むように問い掛けると、明久は

「ディミトリエ・ヴァトラー」

と答えた

すると、那月は舌打ちして

「あの蛇使いめ、余計なことを……」

と吐き捨てるように言った

そして、明久を睨み付けながら

「で、なぜそいつの居場所を？」

「捕まえる」

那月の目付きが、一気に厳しくなった

「捕まえるだと？ 貴様が？」

「正確には、僕と雪菜ちゃん」

明久がそう言うのと、那月はするどく睨んで

「今の貴様が行っても、殺されるだけだぞ。相手は、元々プロの軍人だし、更には、超古代の遺物持っているらしい」

と語った

「超古代の遺物？」

明久がそう言うのと、予鈴が鳴った

「鳴ったぞ。とつとと戻れ」

と那月は言いながら、手をヒラヒラと振った

時間もあつて、明久達は教室へと戻った

そして、昼休み

明久は、浅葱に近寄り

「浅葱、ちよつと調べてほしいことがあるんだ」

と言った

「調べてほしいこと？」

浅葱が首を傾げると、明久は頷き

「そ。那月ちゃんに課題出されちゃつてさ。超古代文明のことを調べて、レポートにしろつてさ。なんでも、ちようど良く超古代文明の物が輸入されたみたいだし」

明久がそう言うのと、浅葱は納得した様子で頷き

「またあんたは……」

と苦笑いを浮かべた

が、端末を振りながら

「調べてあげたいけど、こいつじゃあ、パワー不足なのよねえ」

と呟いた

だが、何か思い付いたらしく指を立てて

「明久、付いてきなさい」

と言って、歩きだした

そして、着いたのは生徒会室だった

「生徒会室？」

明久が疑問符を浮かべていると、浅葱が

「このパソコン、なかなか性能が高いのよ」

と言いながら、ドアに手をかけた

「待って、鍵は……」

「え、開いたわよ?」

浅葱がそう言うと同時に、ドアは抵抗なく開いた

「セキュリティの意味がない件について」

明久がそう言ってる間に、浅葱は中に入った

明久がそれに続いて中に入ると、浅葱がドアを閉めて施錠した

「浅葱?」

「勝手に使ってるんだから、見つかるわけにはいかないでしょ?」

浅葱の説明を聞いて、明久は納得した

明久が納得してる間に、浅葱はパソコンを使って調べ始めた

「あ、これね」

しかも、ものの数秒で見つけたらしい

「早っ」

明久が覗きごこむと、浅葱は画面を指差しながら

「えっと、ナラクヴェーラって言うみたいね……」
と呟いた

「ナラクヴェーラ……」

明久がそう繰り返して呟いていると、浅葱が額に手を当てているのに気づいた

「浅葱？」

「なんか、聞き覚えがあるような……」

浅葱が首を傾げて唸っていると、ドアがガタガタと揺れた

「やばっ！」

浅葱は急いでパソコンの電源を切ると、明久の胸ぐらを掴んで机の下に隠れた

その直後、ドアが開いて明久達のすぐ目の前を誰かが通り過ぎて、奥のパソコンを使い始めた

「ここに入れるってことは、生徒会顧問の岡峰ね？ 早く終わりなさいよ……」

浅葱は呟くようにそう言いながら、髪を掻き上げた

すると、明久の視界に小さいピアスが見えた

青い宝石が付いている、小さいピアスだった

そのピアスに、明久は見覚えがあった

なにせ、そのピアスは浅葱が誕生日プレゼントとして明久に買わせたピアスなのだ

「それ……………」

「あ、気付いた？」

浅葱の言葉に、明久は頷いた

すると、浅葱は微笑みを浮かべて

「大事にしてるんだからね？」

と言うと、明久の頬に軽くキスした

その直後、明久の鼻から血が流れた

「あ、明久？」

「あ、やばっ」

明久は慌てて隠すが、既に後の祭だ

浅葱は微笑んで

「エッチ」

と明久の額を指で突つついた

それに明久は慌てて反論するが、浅葱は笑うだけだった（二人して小声で）

それをまた、窓の外から一羽の鳥が見ていた

ただし、その鳥は野性の鳥ではなく式神だった

そして、その使い手は学校から少し離れた鉄塔に立っていた沙矢華だった

「吉井明久、もう、許さないっ！」

沙矢華はそう言いながら、楽器ケースのロックを外した
そして、事態は大きく動き出す

舞威姫の襲撃

時は経ち、放課後

明久は上にジャージを着て屋上に居た

なぜ屋上に居るのかと言うと、明久は浅葱と一緒にテニスの練習をしていたところだ
しかし、ペアの浅葱の姿はない

浅葱は今、購買まで飲み物を買いに行っている

明久はベンチに座って、グツタリしていた

はつきり言って、かなり暑いために体力の消耗が激しい

「あー………暑い、焼ける、溶ける、灰になる………」

明久はそう言いながら、空を見上げた

その時

「第四真祖、吉井明久!!」

と声を上げながら、一人の少女

煌坂紗矢華が、その手に剣を持っていた

「なんとおおお!!?」

明久は叫びながら、前に跳んで避けた

紗矢華が振るった剣により、明久が座っていたベンチは見事に真つ二つにされた
「えっ!?! 煌坂さん!?!」

明久が驚いていると、紗矢華はめり込んでいた剣を引き抜いて

「吉井明久………あんたが居ると、雪菜が危ないのよ」

と言つて、再び剣を構えて

「だから………ここで死ねえ! この欲情真祖!!」

「そつちが本音だよね!?!」

明久はなんとか回避しながら、紗矢華を止めようと必死に考えた

だが、その直後

「あんたが居るだけで、雪菜が危険な場所に行くことになる! あんたさえ居なければ、私の雪菜はもっと安全な場所に居たはずなのよ!!」

という紗矢華の叫びを聞いて、明久の動きが止まった

紗矢華の言葉に、明久は動揺したのだ

確かに、そうかもしれないと

だが、今この時に限っては、致命的となつてしまった

回避行動が鈍くなり、彼女が振るった剣が、明久の胸部を浅く切り裂いた

「しまっ……待って……」

明久はそう呟きながら、自身の体を抱き締めて固まった
「出てくるなあああああっ！」

明久が叫んだ直後、明久の体から魔力の奔流が放たれた
それと同時に、明久の体から高周波が解き放たれた

「吉井明久!? 今すぐやめなさい!」

紗矢華はそう言うが、明久はこれ以上被害を広げないだけで精一杯だった
なにせ、今出ようとしているのは、明久が把握した眷獣ではないのだ

その証拠に放たれているのは、電撃ではなく高周波である

明久は今にも出ようとしている眷獣を必死に押さえ込んでいた
その時、ドアが開いて

「明久!? 何が起きてるの!」

とタイミング悪く、浅葱が戻ってきた

そして浅葱は、剣を持っていた紗矢華に気づいて

「ちよつとあんた! その手の剣はなに!」

と紗矢華に歩み寄った

その時、浅葱が来たことに明久が気づいて

「浅葱!? つつ! ヤバッ!」

ほんの僅かだが、制御が甘くなった

その瞬間、更に強い魔力と高周波が放たれて浅葱は吹き飛んだ

「きゃっ!」

吹き飛んだ浅葱は、壁にぶつかりと気を失ったらしい

ぐったりと倒れた

「浅葱っ………つつ!」

明久はなんとか押さえ込もうとするが、一向に収まる気配がない

これ以上はマズイ

明久がそう思った

その時だった

「獅子の神子みこたる高神の劍巫が願ねがい奉る!」

制服のスカートスカートを翻しながら、黒髪の少女がドアを開け放って現れた

現れた少女

雪菜は手に持った七式突撃降魔機槍

シユネーヴアルツァーを回しながら

「雪霞の神狼、千劍破ちはやの響なきをもて楯と成し、兇変災禍を祓はらいたまえ!」

と祝詞を唱えると、ひび割れた屋上に穂先を軽く突き刺した

その直後、キーンという澄んだ音が響き渡ると同時に、青白い光が一気に広がった光が収まると、明久から吹き出していた魔力も収まっていた

魔力が収まり、明久は力なく座り込んだ

紗矢華も安堵したのか、座り込んだ

すると、雪菜が槍を引き抜きながら

「先輩。紗矢華さん………何が起きたんですか？」

と二人に問い掛けた

その表情はかなり硬い

いや、はつきり言って怒っている

「あー……彼女がいきなり襲ってきてね」

「ち、違うのよ、雪菜!! この変態真祖が悪いのよ!？」

明久が紗矢華を指差して事実を言うのと、紗矢華が明久を指差しながら喚いた

二人の言葉を聞いて現状を理解したのか、深々と溜め息を吐いた

そして、絶対零度の目で二人を見下ろして

「わかりました………私が藍羽先輩を保健室へ運びますから、お二人はここで座って反省しててくださいね」

雪菜はそう言うと、浅葱を背負った

紗矢華と明久の二人は、本能的に逆らえないと思った

そのタイミングで、息が荒い風沙が現れて

「雪菜ちゃん……いきなり走り出して、どうしたの……って、なにこれ!? ちゃんどうしたの!?!」
「というか、その人! その剣なに!?!」

と喚きだした

それを見て、雪菜は再び溜め息を吐いて

「いいですね。反省しててください!」

と言うと、歩きだした

なお、槍は既に収納してある

風沙はその雪菜の後に続こうとしたが、少しの間紗矢華を睨むと雪菜に続いた

そして場所は変わり、保健室

「診察を終りました!」

そう言ったのは、保健室に居なかつた養護教諭の代わりに居た人形のような顔立ちのメイド服の上に白衣を着た少女

アスタルテだった

本来だったらアスタルテの居場所はこの保健室らしく、アスタルテの便利さに目を付

けた那月が、自分用のメイドに無理矢理連れ出したらしい

アスタルテは元々、医療品メーカー用に設計された臨床試験用の人工生命体である
医療活動に必要な知識は、標準装備として遠隔記憶に焼き付けられている
免許取り立ての新人医師並の高度医療知識を備えているらしい

「衝撃波、および急激な気圧の変動による軽いショック症状と推定されます。後遺症の心配はありません。ただし、本日中は安静を保つことを推奨します」

「わかりました。ありがとうございます」

アスタルテの説明を聞いて、雪菜はアスタルテに礼を言った

お礼を言われるとは思ってなかったのか、アスタルテは少し戸惑ってから

「受諾」

と答えた

そして、強張っていた雪菜の頬から力が抜けて、柔らかさが戻った

浅葱に大きな怪我が無いというのは、何よりも朗報だった

もし浅葱に大怪我があったり、何らかの障害が出たと聞いたら、明久が落ち込むと思っていたからだ

すると、雪菜の背後に居た風沙が

「わあ……雪菜ちゃん、メイドさんだよ。メイドさん！　なんでメイドさんが居るのか

な？ 新しい看護師さんなの？ ねえ、そうなの？」

と矢継ぎ早に問い掛けた

「えーつと……………」

どう答えたらいいか分からず、雪菜は途方に暮れた

そして、どう答えたらいいか分からなかった雪菜に代わって

「アスタルテは私が雇ったメイドだ。吉井風沙」

と保健室に現れた那月が答えた

風沙はきよんとしてから、振り返って

「あ、南宮先生。いつもお兄ちゃんがお世話になってます。可愛いですね、その服」

「お前は兄貴と違って、礼儀をわきまえているな」

行儀よく頭を下げた風沙を尊大に見返して、那月はふてぶてしく微笑みを浮かべた

唯我独尊を地でいく那月でも、服を褒められるのは嬉しいらしい

そして那月は、眠っている浅葱を見下ろして

「それで、この有り様は、お前の監督不行き届き、ということでもいいのか、転校生？」

と雪菜に問い掛けた

「はい。すみません」

そして雪菜は、何の言い訳もしないで頭を下げた

それを聞いて、那月はずまらないと言わんばかりに鼻を鳴らして

「なら、後始末もお前に任せる。本当なら、吉井明久のバカを今からしばきにいくつものところだが、私は急ぎの用ができた」

と言った

すると、その用というのが分かったのか、雪菜の目付きが鋭くなり

「黒死皇派の潜伏場所が分かったんですか？」

と声を潜めて問い掛けた

「建設中の増設人工島サブプロットだそうさ。なんの捻りもない隠れ場所だな。気持ちは分かるが、余計な真似はしてくれなよ。今回のテロリストどもの相手は警察局《うちら》の仕事だ」

那月の言葉に雪菜が頷くと、那月は悠然と微笑んで

「アスタルテは置いていく。看護の手が足りなければ、使っていざ」

と言うと、姿を消した

この後、この戦いの大きな転機を迎える

動く者達

「くそっ！ 明久のバカが……暴走させやがって……まだ耳が痛いぜっ」

そう毒づいているのは、モノレール用の高架橋をあり得ない速度で走っている基樹である

彼は普通の人間ではなく、ハイパーアダプター 過応適応者と呼ばれる存在である

魔術師ともまた違い、昔で言う超能力者に近いだろう

そんな彼の能力は、風を操る能力である

今は風をブースターのようにして、時速100 km程で走っている最中である

なお普段は、サウンドエスケープ 音響結界という結界を学校全体に張っている

その結界は結界内で起きている音により、誰が何処で何をしているかを詳細に知ることが出きるのだ

しかし欠点として、大きな音に弱い

だから、明久が屋上で暴走した時に発生した膨大な音により、その結界は破壊されてしまった

その副作用により、彼は耳鳴りに襲われていた

しかし、修復しながらギリギリ気付けたことがあった

それは、黒死皇派のリーダーが学園に侵入し、浅葱、雪菜、凧沙が誘拐されてしまったのだ

なお、保健室に居たアスタルテはそんな三人を守ろうと巻属で攻撃しようとしたが、それより先にガルドシユによつて撃たれてしまった

「しかし、このタイミングで誘拐するなんざ、ガルドシユの野郎も相当イカレてやがんな！」

基樹は悪態を吐きながらも、三人が乗せられたバンを追っていた

「この先にあるのは………民間の飛行場か!!」

基樹がそう言った直後、件のバンはその飛行場に入った

基樹は高架橋から近くのビルの屋上に飛ぶと、ポケットに手を入れて、ボトルを取り出した

そして蓋を開けると、中の錠剤を一気に口に入れて、乱暴に噛み砕いた
今彼が噛み砕いたのは、彼専用の強化薬ブースターである

それを服用することにより、一時的に能力を強化することが出きるのだ
彼はヘッドホンを付けると、意識を集中して

「届けえ!!」

と大声を出した

数秒後、上空に空気によって構成された基樹が表れた

これは、意識を飛ばして遠くまで偵察するのに向いた技である

そして基樹は、飛行場から飛び立ったヘリコプターを追いかけた

せめて、敵の本拠地を探るためである

しばらくヘリコプターを追いかけっていると、基樹はある物を見つけた

しかしそれは、敵の本拠地としては、予想外過ぎた場所だった

「嘘だろ……あれは……つつ!？」

驚きで固まっていると、背後に膨大なエネルギーを感じて振り向いた

そんな基樹に見えたのは、灼熱の蛇だった

「なっ!？」

回避する暇もなく、基樹は蛇に食われて、意識が元の身体に戻った

しかし、先ほどの分身で受けたダメージにより、上手く動けなかった

それでもゆっくと、先ほどの攻撃の発生源に視線を向けた

そこに居たのは、純白のスリーピースを着た優男

デIMITリエ・ヴァトラーが居た

ヴァトラーはやれやれ、といった様子で

「君、過応適応者かい？ 流石は、魔属特区だね。面白い人材が居る……けどね、ボクの楽しみを奪わないでくれるかな？」

と言うと、右腕を基樹へと向けた

「……基樹っ！」

基樹の身体の下の方の影の中から康太が表れた直後、大爆発が起きた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ダメだな、お客さん。ここから先は、警備隊が通行止めしてて、行けないな」
「そうですか……わかりました。降ります」

乗っていたタクシートの運転士にそう言うと、明久は降りる準備を始めた

すると、運転士はメーターを止めて

「千七百円ね」

と運賃を要求してきた

それを、先に降りていた紗矢華が

「だつてさ、吉井明久」

「後で請求するからね!？」

明久は文句を言いながらも、お金を払った

そして、タクシーから降りると運転士が

「坊主……悪いことは言わねえ。死に急ぐなよ？ 俺、元軍人だったんだがな……あの音、重機関銃の音だ……ありや、戦場だ」

と言ってきた

すると、明久は

「大丈夫ですよ。僕は、簡単には死にませんから」

と言うと、銃声が聞こえる方へと向かった

事件を解決するために

浚われた友人と妹、雪菜を助けるために

現れる古代

「さてと……近くには来たけど……」

「どうやって増設島まで行くのよ？」 橋は警備隊アイランド・ガードに封鎖されてるわよ？」

件の増設島サブフロートの近くまで来た二人は、橋が見える場所まで来ていた

しかし、その橋は警備隊アイランド・ガードによって封鎖されていた

しかし明久は、周囲を見回して

「あ、あそこだ」

と言うと、歩き出した

それを追って、沙矢華も歩き出した

そして、その増設島サブフロートと二人が居る増設島サブフロートが近い場所まで来た

とは言え、幅は10m近く離れている

「ちよつと、ここからどうするのよ？」

沙矢華が問い掛けるが、明久は準備運動してから

「煌坂さん。それ、貸して」

と沙矢華が背負っていた、あの剣を入れてある楽器ケースを指差した

沙矢華は不思議そうにしながらも、楽器ケースを明久に手渡した

明久はそれと一緒に、雪菜の雪霞狼の入った楽器ケースを背負った

「ちよつと、どうするのよ？」

と再び問い掛けた

「煌坂さん。失礼」

明久は一言断ると、沙矢華を横抱き

つまり、お姫様抱っこした

「へ？ ちよつ!？」

「いっくよー!!」

掛け声の直後、明久は自分の唇を噛んだ

それにより口の中に血の味が広がり、明久の吸血鬼としての身体能力が発揮された

その瞬間、明久はズギュッ! という音と煙と共に、明久は跳んだ

そして、ダンツという音がして、明久は着地した

着地した明久は、後ろを見て

「うわっ………ギリギリだったなあ」

と呟いた

すると、顔を赤くした沙矢華が

「あ、あんたね!？」

と暴れだした

「つと、暴れないで!? 落ちるから!？」

明久はそう言うのと、沙矢華を下ろした

下ろされた沙矢華は、顔を赤くしながら胸元を抑えて

「いい!?! これはノーカンだからね!？」

と叫んだ

沙矢華がなぜ叫んだのか分からず、明久は首を傾げた

すると、背後の空間が揺らめいて

「貴様、戦場で淫行とはいいい度胸だな。吉井明久」

と声がした

振り向くと、そこには那月と西村が居た

「あ、那月ちゃんと鉄人……」

明久が二人を呼んだ直後、那月からは空間魔法を使ったデコピン

西村からは、拳が繰り出された

それを受けて、明久は地面にめり込んだ

「教師は敬え。バカ者」

二人の言葉に明久は、弱々しく片手を上げるとすぐに地面に落ちた
なお、この光景を見ていた沙矢華は震えていた

数分後、明久は復活すると

「痛たたた………」

と言いながら、首を鳴らした

そして、銃声が聞こえてくる方向を指差して

「あそこに、黒死皇派が居るの？」

と二人に問い掛けた

すると、那月が

「ああ。だが、お前が出る必要は無いだろう。相手は数も少なければ、武器も大したこと

はない」

と言った

その時だった

コツコツと足音が聞こえて

「いやあ、それはどうだろうネ」

と純白のスリーピースを着た優男

デIMITリエ・ヴァトラーが現れた

すると、那月と西村がヴァトラーを睨んで

「蛇使い……………貴様……………」

「何故、ここに居る？」

と問い掛けた

するとヴァトラーは、肩を竦めて

「いやア、船を奴等に乗っ取られてネ。逃げてきたのサ」

と飄々と言った

それを聞いて、那月は片眉を上げて

「逃げてきただど？」

と問い掛けた

すると、ヴァトラーは頷いてから

「そうサ。ああ、そうそう……………途中でこんなのを拾ったんだけど、君達の知り合いかな？」

と言つて、何かを投げた

片方は首に掛けたヘッドホンと逆立った髪型が特徴で、もう片方は背が低く特徴的な髪型だった

「基樹！ 康太!？」

明久は駆け寄ると、二人を抱き起こした

「あ、やっぱり知り合いだった？ 海を漂ってたから、拾っておいたよ」

ヴァトラーがそう言うのと、那月と西村がヴァトラーを睨んだ

その直後、閃光が走り、包囲していた装甲車が一台爆発した

「な、なに!?!」

明久が爆発のした方向を見ると、更に爆発がして装甲車が次々と吹き飛んだ

そして、黒死皇派が隠れていた塔からそれが現れた

黒い装甲に二本の鋏、まるで生物のような存在だった

「なにあれ!?!」

明久が驚愕していると、ヴァトラーが興味深々と言った様子で

「なるほど………あれが、ナラクヴェーラか」

と言った

すると、那月が舌打ちして

「ちつ………古代のガラクタ風情が………西村、警備隊を逃がすぞ」

「わかった」

那月の言葉に西村は頷いた

そして、二人が離れた

そのタイミングで、明久の携帯が鳴り響いた

明久は背負っていた二つの楽器ケースを沙矢華に渡すと、ポケットから携帯を取り出した

そして、画面に表示されていた名前は

「え、浅葱!？」

誘拐された浅葱からだった

そして明久は、この戦いの中心へと至る

激突

「浅葱、大丈夫!？」

明久は電話を耳に当てると同時に、捲し立てるように問い掛けた
すると、予想していたのとは違う声で

『先輩、私です』

と言ってきた

それは、明久の監視を任務としている少女の声だった

「あれ? 雪菜ちゃ……」

「雪菜! 大丈夫なの!?! ケガしてない!?!」

明久の口から雪菜の名前が出た直後、沙耶華が明久から携帯を奪っていた

明久が睨むが、彼女は無視して会話している

「え……うん、うん……わかったわ」

沙耶華はそう言うと、明久に向き直って

「はい。雪菜が変わってって」

と明久に携帯を返した

明久は携帯を受けとると、耳に当てて

「雪菜ちゃん。大丈夫？」

と問い掛けた

『はい、大丈夫です。それよりも先輩、黒死皇派の近くに居ますよね？』

「うん、そう」

雪菜からの問い掛けに対して、明久は素直に答えた

雪菜が明久に、監視用の式を付けたというのを思い出したからだ

『先輩。先輩なら頼まなくてもやると思いますが……ナラクヴェーラを足止めしてくれませんか？ 今、藍羽先輩がナラクヴェーラのコマンドを解析中です』

「わかった。やってみる」

雪菜の頼みを聞いて、明久は軽く準備運動を始めた

い どうやら、浅葱がナラクヴェーラのコマンドを解析し終わるまで押さえればいらしい

そして、明久が準備運動をしていると

『それより先輩……黒死皇派の居る増設島に、よく入れましたね？』

と雪菜が問い掛けてきた

心なしか、声音が低い

明久はなんとかしようと考えたが、諦めて

「距離が近い場所で、幅跳びしました」

と、素直に白状した

『ほう……幅跳びですか……沙耶華さんを抱えて？』

「はい……お姫様抱っこして、跳びました」

電話越しだと言うのに、明久は恐怖から正座して頭を下げている

それを見て、沙耶華は困惑した様子で首を傾げている

『……それで、沙耶華さんはなんと？』

「顔を真っ赤にして、今回はノーカンだからねと……」

はつきり言うと、今の明久の気分は死刑を待つ死刑囚の気分だった

1つでも失言があれば、死を告げる刃が振り下ろされるだろう

そういう確信が、明久にはあった

そして、数秒後（明久にとっては、凄く長かった）

『いいでしょう。今回は不問にします』

と言う雪菜の言葉に、明久は心の底から安堵した

そして、深々と息を吐いていると

『それで先輩……大事な話があります』

と言ってきたので、明久は再び正座して

「はい、なんでしょう」

と耳を傾けた

『沙耶華さんが男嫌いの理由なんですけど……』

その話を聞いて、明久は目を見開いた

そして、一回沙耶華に視線を向けると

「それ、本当……？」

と問い掛けた

明久の問い掛けに対して、雪菜の口から告げられたのは肯定の言葉だった

それを聞いて、明久はメキメキという異音がするほどに携帯を握りしめた

ふと気づけば、明久の目が赤くなっている

どうやら、怒りから吸血鬼の力が出ているようだ

それでも壊れないのは、魔族特区製故にだろう

怒りを抑えるために、明久が深呼吸すると

『先輩……そちらを頼みます。私もこっちで、出来ることをしますから』

「うん、わかった……後で、無事に会おうね」

『はい』

と会話を終えると、通話を切りポケットに仕舞った

そして立ち上がると、素手の西村と交戦しているナラクヴェーラに視線を向けた
すると、沙耶華が

「どうするつもり?」

と、明久に問い掛けた

それに対して、明久は右手を左脇に持っていていきながら

「あれを押さえる。雪菜ちゃんに頼まれたし」

と言って、右手の親指でそれを押し込んだ

その直後、明久の左手に鞘に納められた一本の小太刀が袖の中から出てきた

「その刀は確か、アルデアル公の時の……」

そう、その小太刀はヴァトラーが放った眷獣を切り裂いた刀だった

その小太刀が気になるらしく、沙耶華は小太刀を指差しながら

「その小太刀、なんなの?」

と明久に問い掛けた

その問い掛けに対して、明久は

「数年前に、父さんがグレーなフィールドワークで手に入れた一本で……銘は鉤切長光」

と説明した

明久が告げた銘を聞いて、沙耶華は目を見開いた

鉤切長光の銘を、彼女も知っていたからだ

鉤切長光はその昔、人に化けて悪事を働いていた妖怪を、その妖怪が持っていた鉤ごと切り裂いたという刀を、折れた時に小太刀の長さに打ち直した一品だ

そういう偉業を成した一品故に、鉤切長光は魔殺しの概念を宿した小太刀で、破魔の刀として有名なのだ

しかし、この小太刀は途中で行方知れずとなり、獅子王機関でも探していたのだ

それがまさか、魔の象徴たる吸血鬼の明久が持っているのだから、なんとという皮肉だろうか

そして明久は、西村が最後の警備隊員を連れて離れたのを確認してから

「それじゃあ、行きますかー」

と鉤切長光を抜刀して、ナラクヴェーラに向けて駆け出した

そして、世界最強の第四真祖と超古代の兵器がぶつかる

交戦開始からの、落下。そして

長光を握った明久は、ナラクヴェーラ目掛けて駆け出した

ナラクヴェーラはそんな明久に気付いて、レーザーを撃つたが、明久は吸血鬼の身体能力を活かして回避

肉薄すると、長光を振るった

長光は魔殺しとして有名だが、斬鉄剣としても有名だった

魔殺しと斬鉄

その二つと更に明久の剣術家としての腕が合わさり、ナラクヴェーラの足を一本切断した

しかし、ナラクヴェーラは多脚式の兵器

一本切断したとて、他の足ですぐにバランスを調整

そして、前足を明久目掛けて振り下ろした

明久は初撃は避けたが、次撃

振り回しは避けられそうになかった

だがそれを、沙矢華が防いだ

く六式降魔機剣《デア・シユライフツツ》を振ったのだ

すると、その軌跡上でナラクヴェーラの前足が火花を散らしながら止まった

「これは……」

「煌火燐の空間切断術式……」

沙矢華はそう答えると、再び剣を振るった

次の瞬間、ナラクヴェーラのもう一本の足が切断された

「最強の楯と最強の切れ味……それが、煌火燐の能力よ！」

彼女がそう告げた直後、二本の前足を失ったナラクヴェーラは倒れた

「よし、これで！」

と明久は喜ぶが、それはすぐに驚愕に変わった

何故ならば、ナラクヴェーラの足が修復されたからだ

「そんな!? サブフロート増設島の素材を吸収、物質変換して修復してる!？」

沙矢華が驚いている間にナラクヴェーラは立ち上がり、沙矢華を狙ってレーザーを発

射した

「危ないっ!」

直撃する直前に明久が突飛ばしたから、沙矢華には当たらなかった

しかし、明久の左足が大きく抉れた

それを見て、沙矢華は顔を青ざめて

「あ、あんた……足が……」

と眩くが、明久はなんとか笑みを浮かべて

「僕なら、大丈夫……もう、再生するから……」

と答えた

事実、明久の左足は白煙を上げながら再生

明久はよろめきながら立ち上がった

すると、ナラクヴェーラは足を全て折り畳んでいた

「なんだ、あいつ……なにを？」

ナラクヴェーラが何をしようとしているのか分からず、明久は首を傾げた

その時、ナラクヴェーラの胴体下部から炎が噴き出し、ナラクヴェーラが浮き上がっ

た

「まさかあいつ、飛ぶつもり!？」

「させるか!」

沙矢華は驚き、明久は右腕を上げた

そして

「疾く在れ!」[＊] 五番目の眷獣!

「^{レグルス・アウルム}獅子の黄金!」

明久の右腕から放たれた濃密な雷撃は獅子を象り、空中に現れた

そして、明久が手を振り下ろしたら、獅子の黄金はナラクヴェーラに落雷した
その直後、増設島の表面が、割れた

「あ、やべ」

手加減を忘れていた明久が、思わず呟いたが、時既に遅しだ

ナラクヴェーラだけでなく、二人も増設島の中に落ちた

「この、バカーー!?!」

「ごめんなさい!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あんたね……私が居なかったら、瓦礫に潰されてたわよう?」

「返す言葉ありません」

沙矢華の苦情に、明久は軽く頭を下げた

なにせ、なんとか着地はしたもの、明久が破壊した増設島の表面が崩落してきたの
だ

それを、沙矢華が剣を振って防いだのだ

空間切断術式による、切断断層の守り

そして、空間切断による切れ味

それを使つて、瓦礫を防いだのだ

そして二人は今、脱出するための出口を探していた

「まったく……貴方に雪菜を任せるのは、やっぱり危ないわね」

そう苦言を呈したのだが、沙矢華は微笑んでいた

そして、捜しながら歩いてでいた時だった

「あのね……雪菜ちゃんから、聞いたんだ……煌坂さんが男嫌いになった理由を」と言つた

その瞬間、沙矢華の体が僅かに震えた

彼女が男嫌いになった理由

それは、虐待だった

巫女の素質を持つ少女というのは、得てして人並み外れたモノを持つ者が多い

容姿然り、能力然り

沙矢華は幼い頃から巫女としての能力が開花しており、それを気味悪がった父親が殴る蹴るの暴行を加えていたのだ

なお、母親は物心付いた頃から居なかつた

それでも沙矢華は、何時か父親が優しく接してくれると信じていた

それが裏切られたのは、中学生になって少し経つた時だった

ある日、沙矢華が学校から帰宅した時、父親が突如襲いかかったのだ

沙矢華は、当時から同年代の中でも抜きん出た容姿だった

そして父親は、そんな沙矢華を犯そうとしたのである

しかしそれは、タイミングよく来た警察によって防がれた

それは、通っていた学校の先生が沙矢華の体の痣に気付いて警察に通報していたのだ
虐待の疑いアリと

それが功をそうし、間一髪で間に合ったのだ

その後、沙矢華は警察に保護されて、児童相談所に預けられた

そこから更に、沙矢華の能力を知った獅子王機関が引き取ったのだ

そして、高神の杜で修練を積み重ね、舞威姫になったのだ

「ごめん……知ってたら、別の方法を考えたけど……」

「え？ ……ああ、渡る時ね？ いいわよ……それに、嬉しかったし」

沙矢華は最後に頬を染めながら言った

「へ？ 嬉しかった？」

「ええ……ほら、私、大きいでしょ？」

と沙矢華は、何かを気にした様子で明久に問い掛けた

そして、明久は沙矢華の胸部を見て

「まあ、うん……大きいね」

と答えた

その直後、沙矢華は顔を真っ赤にしながら

「胸じゃないわよ！ 背よ！ 背！」

と明久に反論した

「え、あ、はい。すいません」

明久は一旦謝った後、沙矢華を見て

「そんなに、気にしなくていいんじゃない？ 煌坂さん、いわゆるモデル美人なんだし」

と言った

それを聞いて、沙矢華は顔を真っ赤にしたまま固まった

「雪菜ちゃん是人形みたいな美少女で、煌坂さんはモデル美少女だね」

「あ、ありがとう……」

沙矢華はそう言うと、小さくくしゃみした

「どうやら、今までで濡れたから体が冷えたらしい」

「あ……これ着てて」

明久はそう言うと、着ていたジャージを差し出した

すると、沙矢華はプイとそっぽを向いて

「要らないわよ、あんたの汗が染み込んだジャージなんて。妊娠するわよ……それに、雪菜に悪いし」

と言った

それを聞いて、明久は

「いやいや、しないから。煌坂さんは吸血鬼をなんだと思ってるのさ」

と突っ込んだ

そして、真剣な表情を浮かべて

「それに、雪菜ちゃんは関係ないでしょ？　煌坂さんだって女の子なんだから、体を冷やしたら大変なんでしょ？」

と言った

それを聞いて、沙矢華は少ししてから

「……ありがとう」

と呟いてから、受け取った

そして、羽織った

その間に、明久は周囲の瓦礫を蹴ってどかしたりしながら

「獅子の黄金じゃあ、感電するだろうしなあ……」

と呟いた

それを聞いた沙矢華は、何かを決心した様子で

「ねえ、吉井明久」

と、明久に声を掛けた

「うん？ なに？」

「もしかして、新しい眷獣が欲しいのかしら？」

沙矢華の問い掛けに、明久は少し考えてから

「まあ、欲しくないって言ったらウソになるね……獅子の黄金は、現状じゃあ使えないし」

と答えた

すると、沙矢華は明久に抱き付いて

「だったら、私の血……吸う？」

と呟くように問い掛けた

「煌坂さん……？」

まさかそんな事を言うとは思わず、明久は固まった

そして、気付いた

彼女の体が、小さく震えていることに

「今の状況を打開するには、どう考えても貴方の力が必要……だけど、今の貴方の眷獣の

中には最適な奴は居ない……だったら、新しい眷獣に賭けてみない？」

沙矢華はそう言いながら、着ていたワイシャツの胸元を開けた

そこに見えたのは、豊かな胸の谷間だった

明久は、少し間を置いてから

「いいの？ 僕が、怖くないの？」

と問い掛けた

すると沙矢華は、優しく微笑みながら

「なんでかしらね……貴方は、怖くないの……」

と答えた

その答えを聞いて、明久は沙矢華を優しく抱き締めて

「僕、まだ大して経験無いから……痛くしたら、ごめんね」

と優しく囁いた

それを聞いて、沙矢華は小さく

「ん、大丈夫」

と答えた

その数秒後、二人の体は完全に重なり、艶やかな声が静かに聞こえた

決戦の舞台

「あ、あれは……」

黒死皇派との戦闘に一段落付き、雪菜はオシアナスグレイブの甲板上から絃神島の方を見た

その時見えたのは、高く舞い上がる一体の赤い眷獣だった

緋色の体を持つ、二角獣^{バイコリン}

かなり離れているというのに、桁外れの魔力と分かる

そんな眷獣を放てるのは、絃神島だと一人だけだ

「どうやら、あのバカが新たな眷獣を把握したようだな」

と言ったのは、空間魔術で転移してきた南宮那月だった

雪菜が視線を向けると、那月はどこか面白そうな表情で

「私は藍羽と吉井の妹を連れて離脱するが、お前は どうする？ 転校生？」

と雪菜に問い掛けた

すると雪菜は、毅然とした態度で

「先輩の所に行きます。私は、先輩の監視役ですから！」

と告げた

場所は変わり、絃神島の増設島

サブフロート

緋色の二角獣が現れて広げた穴から、這い出てきた人物達

ぶつちやけてしまえば、明久と沙矢華の二人である

「よっしや、生還！」

「よっしや、生還……じゃないわよ！」

沙矢華はそう言うのと、明久の襟首を掴んで

「あんたね!!? 手加減くらいしなさいよ! 私が煌華燐で瓦礫を防がなかったら生き埋めだったわよ!!? おまけに穴を倍以上に広げて!!」

と叫びながら、明久を高速で振り続けた

そして明久は、振られながらも

「仕方ないじゃん!!? 慣れない眷獣だったんだからさ!!? 破壊って意味じゃあ、獅子の黄金より質悪いんだよ、あいつ!!?」

と反論した

すると沙矢華は、飽きたのか襟首から手を離して

「やっぱり、あんたと雪菜を一緒に居させたら危ないわね」

と言いながら、苦笑した

離された明久は、吐き気を堪えながら姿勢を直した
その時だった

増設島の中から、所々色ちがいになっているナラクヴェーラが飛翔してきた
「げっ!?! あいつ、まだ動けたの!?!」

「超古代の遺産よ!?! 簡単には壊れないわよ!」

明久の言葉を聞いて、沙矢華はそう返した

その間、ナラクヴェーラは周囲を索敵するように頭を左右に動かしていた

明らかに、最初の時とは挙動が違った

それを好機と判断したのか、沙矢華は

「せっ!!」

と短く気合いを発しながら、煌華燐を振るった

しかし全てを切り裂く筈の刃は、ナラクヴェーラの装甲に当たり火花を散らすだけ
だった

「えっ!?! つっ!」

沙矢華は驚いたが、再び煌華燐を振るった

だが、結果は同じだった

「まさか、斥力場を装甲表面に展開して、空間切断術式を防いでる!?!」

煌華燐で斬れない理由に気付き、沙矢華は驚愕した

その横を、明久が高速で駆け抜け

「しっ—」

と雷を宿した左拳を叩き込んだ

が、それもまた大したダメージにはなっていないかった

「効いてない……まさか、学習してる!?!」

距離を取った明久は、痛いのか左手を振りながら効かない理由に気づいて驚愕していた

その時ナラクヴェーラの腹部が開いて、中から大量の炎弾が発射された

「間に合って!!」

沙矢華はそう叫びながら、煌華燐を振った

どうやら、放たれた攻撃には斥力場は無かったらしい

空間断層により、炎弾は弾かれて明後日の方向に飛んでいった

しかし、その炎弾が当たった各所でビルが崩れ、火災が発生していた

「なんて、こつとを……」

威力を目の当たりにして、沙矢華は呆然としていた

しかしナラクヴェーラは、絶好のチャンスだというのに攻撃しなかった

正確には動いているのだが、調子を確かめている感じだった

「まさか、浅葱が解読したの？ 頑張りすぎでしょ……」

それがコマンドを確認していると明久は気付いき、明久は呟いた
すると、近くに純白のスーツを着た優男

ヴァトラーが現れて

「ふむ……どうやら、奴らは解読に成功したみたいだね」

と言った

明久が視線を向けると、ヴァトラーはある方向を見ながら好戦的な笑みを浮かべていた

明久は嫌な予感がして、ヴァトラーの見ていた先に視線を向けたそこに見えたのは、増設島に横付けされたヴァトラーの巨大クルーザー

オシアナス・グレイブだった

しかもその船腹が開いて、中から十機近くのナラクヴェーラと一回り大きなナラクヴェーラが出てきていた

「まだあんなに有ったの!? しかも、あの大きいのはリーダー機!?」

まさか他に存在していたとは思わず、明久は驚愕していた

しかし、ヴァトラーは笑いながら

「推察するに、あれ一機ずつが貴族級かなア？ いいね、最高だ！」

と獯猛な表情を浮かべて、ナラクヴェーラに近づこうとした

だがそれを、明久が腕を上げて制止して

「ヴァトラー……あんたは下がってろ」

と言った

すると、獲物を取られたと思つたらしくヴァトラーは明久を睨んで

「どういうつもりだい、明久？ 僕の楽しみを奪わないでくれるかな？」

と言った

しかし明久は、そんなヴァトラーを睨み返して

「ヴァトラー……確か前に、絃神島は、僕の領土だつて言つてたよね？」

と問い掛けた

そう問われて、ヴァトラーは思い出すように腕組みしながら

「ふム……確かに、言つたね」

と肯定した

それを聞いて、明久は船内から出てきたナラクヴェーラを睨みながら

「だつたら、僕が力尽きるまでは僕が対処する！ それがスジつてもんでしょ！ 引つ

込んでろ！」

と啖呵を切った

それを聞いて、ヴァトラーは笑みを浮かべて

「ふむ、なるほどネ……確かに正論だ……ならば敬意を表して、舞台を整えてあげよう！」

と言つて、タン！と軽く地面を踏んで

「ウハツラ！ バツナンダー！」

と二体の眷獣を召喚した

それは、巨大な蛇だった

明久の眷獣には及ばないが、その存在自体が災害と同じ眷獣

ヴァトラーはその二体を見ると、更に体から魔力を放出し始めた

すると、頭上に居た二体の蛇の眷獣が合わさり始めた

そして、現れたのは全く別の眷獣だった

「眷獣を、融合させた!？」

「うん、こんなものだろう……」

驚く明久を尻目に、ヴァトラーは腕を掲げると振り下ろした

するとその眷獣は、増設島と本島の連結部分を次々と破壊した

それにより、増設島は本島から離れて漂い始めた

「眷獸で、連結を全部破壊したのか……」

「これで、心置き無く戦えるだろう？ 明久？」

ヴァトラーはそう言うのと、数歩下がった

癪ではあるが、確かにその通りだった

明久の眷獸は、天災と同義だ

離れば、心置き無く眷獸を使える

その時だった

リーダー機らしい大型機体が、一步前に出て

『戦争は楽しいなあ！ 第四真祖！』

と男の声が聞こえた

それを聞いて、明久は相手を睨んで

「欧州のテロリストだかなんだか知らないけどね、僕だっていい加減頭に來てるんだ……別に自国でどうするかなんて、僕には知ったことじゃない……だけどね、他人の国たる日本で暴れるな！ あんたらのせいだ、こっちはいい迷惑なんだ！」

と怒鳴るように、話し始めた

すると、明久の怒気に反応しているのだろう

一瞬だが放電し、空気が震えた

「黒死皇派だろうがなんだろうが、もう知ったことか！　ここから先は、第四真祖ホの戦争ケンカだ!!」

明久がそう叫ぶと、右側に沙矢華が寄り添うように立った

その直後、反対側の左に小柄な美少女

雪菜が着地して

「いいえ、先輩……私達の戦争ケンカです！」

と宣言しながら、雪霞狼を構えた

決着

現れた雪菜は、沙矢華を見てから明久に視線を向けて

「新しい眷獸を、掌握したんですね。先輩……」

と低い声音で、言葉を発した

それを聞いて、明久は冷や汗を滝のように流しながら

「う、うん。まあ、やむにやまれぬ事情があつてね？」

と言った

それによくように

「そ、そうよ、雪菜。だから、決してやましい事はなかったわよ？」

と沙矢華が、ドモリながら言った

それを聞いて、雪菜は深々と溜め息を吐きながら

「沙矢華さん……ポタン、掛け違えてます」

と沙矢華の胸元を指差した

「つつ!?!」

指摘された沙矢華は、慌てた様子でポタンを直し始めた

この時、雪菜は沙矢華が着ていたジャージに気付いた

それは、明久がテニスの練習に着ていたジャージだった

《男が着ていたジャージを、嫌がる素振りも無く着ている》

そこから分かるのは、明久が無理矢理にでも沙矢華の血を吸った訳ではない
という事だった

(そもそも、そんな人ではないですが……)

雪菜はそう思いながらも、雪霞狼を明久に突き付けた

「ゆ、雪菜ちゃん?」

雪霞狼を突き付けられて、明久は両手を上げながら雪菜の名前を呼んだ

すると雪菜は、ダンダンと地面を踏み鳴らしながら

「別に、怒ってなんかいませんよ? ええ……先輩が私の居なかつた時に、勝手に血を

吸ったことを怒ってませんとも……っ!」

と早口で言った

それを聞いて、明久は

(絶対に怒ってるじゃないのよー!?)

と心の中で叫んだ

その直後

『そろそろ始めるぞ、第四真祖！』

とガルドシユの声が響き渡った

どうやら、ナラクヴェーラの把握は終わったらしい

ガルドシユが乗っている大型機

女王^{マリー}を中心に、動き始めた

それを見て、明久が

「流石に、全部を一気に相手にするのは厳しいし……」

と呟いた

そして、右手を突き出して

「行け！ 獅子の黄金！」

と眷獣を召喚した

狙いとしては、全体攻撃だ

雷撃を食らったのは、最初の一体だ

その一体には効果は期待出来ないが、他の奴には効果が有る筈だと明久は思った

だが

「効いてない!?!」

獅子の黄金の莫大な雷撃が直撃したというのに、ナラクヴェーラ群は無傷だった

どうやら中のパイロットも無事らしく、普通に動いている
すると、雪菜が

「どうやら、学習したデータを共有する機能が有るようです。恐らくは、それかと」
と言った

すると、沙矢華が

「じゃあ、私の煌華燐も……」

と言いながら、剣を下ろした

雪菜の言った通りならば、煌華燐の空間切断も効かない

「どうすれば、あれを破壊出来るんだ……」

「方法なら、あります」

明久が悔しそうに言う、雪菜がそう言った

「本当なの、雪菜ちゃん？」

「はい……ですよね？ モグワイさん？」

明久が問い掛けると、雪菜がポケットの中からスマホを取り出した

明久には、見覚えがあった

見た目は普通のスマホだが、その中身は普通のとは比較にならない程の改造が施され
ている

浅葱のスマホである

「それって、浅葱の？」

『よう、初めましてだな。俺の名前はモグワイだ、よろしく。剣巫の嬢ちゃんの言う通り、方法はあるぜ』

浅葱のスマホの画面に映っていた、不細工なコアラのアバター

モグワイはそう言った

『浅葱の嬢ちゃんが、奴らにバレないように新しい制御コマンドを作ったのさ。名付けて、《滅びの言葉》だな。タダでは使われないのが、浅葱の嬢ちゃんだけ』

その効果を発揮させるには、動きを止めて取り付く必要があるだろう

「だったら、早速使おうしかないか……」

明久はそう言って、左手を掲げた

そして

「カレイド・ブラッド焰光の夜伯の名を継ぎし者……吉井明久が、汝が枷を解き放つ……疾こく在いれ！ 九番

目の脊獣……アルナスル・ミニウム緋色の双角！」

左手から鮮血を噴き出して、新しい脊獣を召喚した

それは、音叉を彷彿させる二本の角を持つ獣

バイコン双角獣だった

その身体を構成しているのは、破壊の波動

高周波だった

その高周波は二本の角で増幅され、莫大な音を撒き散らしていた
呼び出された眷獣は、ナラクヴェーラ群を敵と認識したらしい

一気にナラクヴェーラ群目掛けて、空を駆けた

ナラクヴェーラ群は迎撃するが、それらは音と膨大な魔力で弾かれた
そして、ナラクヴェーラ群の間を通り過ぎた

たったそれだけで、ナラクヴェーラ群は大ダメージを受けた

だがそれでも、完全に破壊するけとは出来なかった

恐らくは、明久が手加減したからだろう

緋色の双角は破壊という点に於いては、獅子の黄金の比ではない

だから、未だに近い距離の本島と雪菜達に影響が出ないように手加減したのだ
「ヤバイ……手加減し過ぎた!」

と明久は焦った

だが、それを

「任せなさい!」

と沙矢華が前に出る

沙矢華が劍の柄を捻ると、刀身が開き、両端に糸が繋がった
それは、弓だった

「変型した!？」

「これが、六式降魔機装デア・フライシュッツの本当の姿よ」

明久が驚くと、沙矢華はそう告げた

そして、太ももから細い銀色のダーツを取って振った

すると、それは一気に伸びて矢になった

沙矢華は、その矢をつがえると

「獅子の舞女たる、舞威姫が讃え奉る……極光の焰紅、煌華の麒麟……祖は天楽と轟雷を
統べ噴焰を纏いて、妖霊冥鬼を射貫く者なり！」

と祝詞を唱えて、真上に放った

すると、空中に魔法陣が描かれた

放った矢の正体は、鳴り鏑矢である

現代では唱えられない術式を、鏑矢の表面に施された凹凸によって唱えて、広範囲に
展開することが可能なのだ

そして、今回放ったのは広範囲に於ける呪詛

それにより、ナラクヴェーラの動きを制限させたのである

それを見て、明久と雪菜は同時に動き出した
特に、明久は

「久しぶりに……行くか」

と言つて、一瞬にして姿を消した

「これが、先輩の縮地っ！」

雪菜はそのことを、風沙から聞いていた

明久は過去に、剣術大会の個人戦にて優勝した経緯を持つ

その決め手となったのは、二つ

その一つ目が、縮地

あらゆる距離を、一瞬にして詰める高速移動だ

「一歩……音を置き去り……二歩……距離を無くし……三歩……必到！」

明久は一気に女王に取り付くと、左手を大きく引いた

そして、もう一つが明久の異名となった技

「連牙！」

高速多段突きである

明久は五連続突きを、女王のコクピットに叩き込んだ

そして、一気に高く跳ぶと

「獅子の黄金！ 緋色の双角！」

と二体を呼んだ

この時、明久の脳裏にあったのはヴァトラーがやった二体の融合だった

明久にはまだ出来ない技術だが、真似することは出来た

二体の攻撃を、同時に放ったのである

これにより、女王だけでなく周囲のナラクヴェーラまでも機能を停止した

だが、まだ諦めていないらしく、女王の中からガルドシュが現れて

「戦争は楽しいなあ、第四真祖！」

と言つて、拳銃を未だに跳んでいる明久に向けた

だが、ガルドシュは忘れてしまっていた

今戦っているのは、明久だけではない

「貴方がやっているのは、戦争ではありません！ テロ行為です！」

雪菜はそう言いながら、ガルドシュの腕を雪霞狼で切り裂いた

拳銃を持っていた腕が宙を舞い、ガルドシュは素早く反対の手でナイフを抜いた

だが、それを振らせずに

「守るべき国も、人々も居ない貴方に、戦争という言葉を使う権利はありません！ 響よ

！」

と雪菜は言つて、掌を叩き込んだ

「ガッ!？」

その一撃を食らつて、ガルドシユは大きくバランスを失つた

その時

「これで、終わりだあー！」

と明久が、ガルドシユの頭を思い切り蹴つた

その一撃で、ガルドシユは女王のコクピットから転落した

すると、それまで動きを止めていた女王が動き出した

どうやら、自動操縦らしい

しかし、本格的に暴れる前に雪菜が

「ぶち壊れてくださいー！ ナラクヴェーラー！」

と浅葱のスマホを、コクピットの中に投げ入れた

それを見ると、明久は雪菜を抱きしめて跳んだ

そして、沙矢華の近くに着地した

その時、ナラクヴェーラーはまるで岩のようになって崩れていった

その光景を見て、雪菜が

「なんでも、ナラクヴェーラーの自動修復機能を逆利用して破壊するそうです」

と説明した

それを聞いて、明久が

「流石は浅葱だね……それを利用して壊すなんてさ……」

と言った

そして、大きく伸びをして

「ようやく、終わった……」

と呟いた

後始末

明久が古代兵器

ナラクヴェーラを破壊して、数時間後

「なるほど……つまり緊急事態により、紗矢華さんの血を吸った……ということですね？」

「はい……その通りです」

明久と紗矢華の二人は、揃って雪菜の前で正座していた

「あのー……雪菜？　なんで、私まで？」

と紗矢華が手を挙げると、雪菜は紗矢華を見て

「紗矢華さんに関しましては、学校でのことに関して師家様から伝言を預かってます」

と言った

すると、紗矢華は体をビクツと震わせて

「師家様は……なんて？」

と雪菜に問い掛けた

すると、雪菜は静かに

「お前が発端の校舎破損に関して、学校の降魔官から抗議文が来た。帰ってきたら、覚悟しな。です」

と言った

それを聞いて、紗矢華は両手を突きながら項垂れた

それを聞いていた明久は

(師家様つて、誰だろう?)

と思った

すると雪菜が

「さて、先輩」

と明久に声を掛けた

それに明久が、体をビクツツと震わせると

「お二人の話の聞いた処、先輩は紗矢華さんから私が見てない所で、血を吸ったんですよ?」

と問い掛けてきた

気のせいとか、真ん中辺りを強調している

「はい、その通りです」

明久がそう答えると、雪菜はチラリと紗矢華を見た

紗矢華は今も、明久が渡したジャージを着ている

「まあ、無理矢理ではないので、紗矢華さんから吸血したのは不問にしますが……」

「もし、無理矢理だったら？」

明久がそう問い掛けると、雪菜は収納していた鎗を展開して

「突き刺してました」

と告げた

（まあ、先輩の性格で無理矢理は無いのは確かですが）

（良かった……無理矢理じゃなくて、本当に良かったっ！）

雪菜の言葉を聞いて、明久は冷や汗を流した

そもそも、無理矢理吸おうとしたら紗矢華に斬られていた可能性が非常に高いのだが

明久はそこに気づいていない

「まあ、確かに獅子の黄金だけでは対処のしようが無かったから仕方ないのかもしれないが

せんが……先輩」

「はい、なんででしょうか」

雪菜に呼ばれて、明久は反射的に背筋を伸ばした

すると、雪菜が

「紗矢華さんに何て言ったのか知りませんが、私は忘れていませんからね……先輩が私

に可愛いと言ったのは」

と言った

その直後、明久の視界に銀閃が入った

「なんとおおお!？」

それを見た明久は、己の直感に従って回避行動を取った

その一撃の主は勿論、紗矢華である

「今ここで、あたしが殺してやるー!!」

顔を真っ赤にした紗矢華は、そう叫びながら剣を振り回した

「結局こうなるの!？」 あー、もう………なんでさー!？」

明久はそう叫びながら、紗矢華の剣撃を回避し続けたのだった

紗矢華の体力が尽きるまで

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は経ち、翌日

絃神島の国際空港の待ち合いロビーの椅子に、一人の優男

デイミトリエ・ヴァトラーが座っていた

そして、そのヴァトラーの手には、一枚の書類があった

「これからは、退屈しないですみそうだ」

その書類を読んだヴァトラーは、深い笑みを浮かべながらそう呟いた
すると、スーツを着た紗矢華が歩み寄って

「アルデアル候、頼まれていたチケットです」

と一枚のチケットを差し出した

なぜチケットを買っているのか

それは、先日の戦闘でヴァトラーの船

オシアナス・グレイヴが沈んでしまったのだ

それにより、ヴァトラーは当初の移動手段を失ってしまったのだ

だからヴァトラーは、絃神島の国際空港に来ていたのだ

「ああ……残念だけど、そのチケットはキャンセルになるね」

「はい？ どういうことですか？」

ヴァトラーの言葉の意味が分からず、首を傾げた

するとヴァトラーは、持っていた書類を紗矢華に差し出した

紗矢華は受け取った書類を読むと、驚愕の表情を浮かべてヴァトラーを見た

するとヴァトラーは、笑みを浮かべて

「君がチケットを買ってきける間にネ、特使が来て渡してくれたんだヨ」

と答えた

その特使というのは、如何にも学校に一人には居る見た目委員長という少女獅子王機関三聖の一人、閑古詠だったのだが

そして、書類の内容は要約すれば以下の通りである

日本政府は、アルデアル候

デイミトリエ・ヴァトラーの絃神島への大使としての着任を認める

というものだった

つまり、ヴァトラーが戦王領域の大使として絃神島が赴任するということだった

「ククク……この島に居れば、退屈しないですみそうだな……愛しの第四真祖よ……」

ヴァトラーはそう言うと、懐から携帯を取り出しながら立ち上がった

恐らくは、母国に連絡するのだろう

なおこの時、補習中だった明久が寒気に襲われていたりするのだが、それは余談だろ

う

こうして、絃神島にまた一つの爆弾が残ることになったのだった

天使炎上編

序章

「があっ!?!」

「ア—ロ!?!」

燃え盛る船内の通路、そこで一人の騎士が倒れ、それをその騎士の上官騎士団長が抱えた

しかし、数瞬した後には苦しそうな表情を浮かべると、その騎士の遺体を通路に横たえた

そして、キツと前方を睨み付けて

「貴様! この飛行船を我等、聖環騎士団旗艦ランヴァルドと知つての狼藉かあ!!」
と怒声を張り上げた

前方に居るのは、騎士団長の部下を殺した敵が居た

長い金髪に、蠱惑的な肉体をライダースーツに包んだ女が
すると、その女は

「はあ……クソ怠いたらないわあ……」

と気だるげに呟いた

そして、左手に持っていた長大な槍を無造作に肩に担ぐと

「別に、あんたらの事なんて、どうだっていいの……この飛行船であんたらが後生大事に匿ってるクソ雌ブタをさっさと明け渡せって言ってるのよ」

と告げた

それを聞いて、騎士団長は

「そう言われて、明け渡すかあ!!」

と怒鳴ると、一気に肉薄して持っていた剣を振り下ろした

その斬撃速度は、通常の人間の速度を超越していた

その理由は、騎士団長が纏っていた甲冑にあった

その甲冑は彼の母国

アルディギア王国の技師達がその技術の粋を尽くして作り出した、騎士団長専用甲冑だった

騎士団長の高い剣術の技量と、高い霊力資質

その二つを活かせるように、何回も作り直した特注品だった

それを纏つてから、騎士団長は殆ど負け知らずだった

事実、騎士団長の剣速に敵の女は反応しきれていなかった

(取った!!)

と騎士団長が確信した瞬間、驚くべきことが起きた

甲高い音が鳴り響き、剣が弾かれたのだ

騎士団長は弾かれた勢いを利用し、後退

距離を取ると、剣を見て舌打ちした

剣の刀身にヒビが入っていたのだ

騎士団長はその剣を放すと、もう一本の剣を抜いた

そして、女を睨み付けて

「貴様、その槍……ただの槍ではないな……」

と問い掛けた

何故ならば、先程彼の斬撃を弾いたのは、勝手に伸びた槍だったからだ

女の技量ではない

「自律武器インテリジェンス・ウエポンってやつよ、知ってるでしょ？」

女の話聞いて、騎士団長は敵の正体を察した

「吸血鬼か……」

女が担いでいるのは、眷獣なのだ

眷獣は何も、生物の形だけではないのだ

数少ないが、目の前の女のように武器型も存在しているのが確認されている
その時、女の背後に新たに敵が現れた

獣人の男だった

「B・B……してやられたよ。……目標には逃げられた」
ターゲット

獣人の男はそう言うと、騎士団長の前に無造作に何かを投げた

それは、引きちぎられた首だった

最後まで奮闘したのだろう

その顔は傷だらけだった

「アーノルド……つつー！」

それは、ランヴァルドに乗っていた補佐官だった

補佐官もそれなりの腕を誇っていたが、獣人の男はかなりの腕のようだ

「何やってんのよ、アンタ……はあ、かつ怠い……」

「仕方ねえだろ……この騎士、かなり強かったんだ。ポッドに乗って逃げられた」

その会話を聞いて、騎士団長は補佐官が任務を果たして殉職したことを察し、内心で
称賛した

よくやったと

B・Bと呼ばれた女は、深々とため息を吐くと

「はあ……怠いわあ……これ、残業代出るのかしら？」

と言いながら、腕時計を見た

「貴様ら……ただで帰れると思うなよ！」

騎士団長がそう言った直後、騎士団長が持っていた剣が眩く輝いた

その輝きに、二人は目を細め

「ヴェルンドシステムによる人工聖剣……流石は、旗艦つてやつね……そんな代物を搭載してたのね……」

「面倒な……」

と呟いた

ヴェルンドシステム

それは、アルディギア王国が誇る対魔族用戦闘システムだ

ただの剣や槍を聖剣や聖槍にまで引き上げるシステムである

それは、精霊炉が一定範囲内ないと使えないという制限があるが、一度発動すれば、無類の強さを誇るのだ

「確かにそれを出されたら、アタシ達は苦戦確実ね……だけど、残念でした……時間切れよ」

B・Bがそう言うと、獣人の男が近くの扉を蹴破った

そして、二人して飛び出した

「待て!!」

騎士団長は二人を追い、扉近くまできた

その時、騎士団長は頭上が明るく輝いていることに気付いて頭上に視線を向けた

その先に見えたのは、仮面を被った存在だった

その背には翼があり、神々しい光を放っていた

「あれは、まさか……天使?!!」

その正体に騎士団長が気付いた直後、騎士団長の意識は消失した

それから数時間後、駆け付けた絃神島の警備隊が海域で見つけたのは、ランヴァアルドの残骸だけだった

出会い

「暑い……焼ける……溶ける……灰になる……」

最早お決まりの台詞を言いながら、明久は学校に登校していた

その両隣には、雪菜と凧沙の姿もある

絃神島はあれからは一応の平和を保っていた

明久達は普通に過ごし、普通に登校していた（成績はギリギリだが）

「今日は暑いですね……」

「だね……」

流石に暑さに参ったのか、雪菜と凧沙の二人はハンカチで汗を拭いている

球技大会も問題なく終わった（結果は聞かないでほしい）

校門に入れば、生徒達が挨拶を交わしている

明久は下駄箱から上履きを取って履き替えると、廊下に出た

その時

「あ」

と雪菜の声が聞こえた

見てみると、雪菜の下駄箱の中から凄まじい数の便箋が溢れてきていた。全て、ラブレターなのだろう。

「相変わらず、凄い数だね。雪菜ちゃん」

「ええ……」

明久の言葉に頷きながら、雪菜は鞆の中から出した紙袋にラブレターを入れていく。雪菜は全て読むつもりである。

そして、真摯に受け止めたうえで、振るのである。

今の自分には、それよりも優先すべきことがあると

(まあ、雪菜ちゃんは掛け値無し的美少女だしね……気持ち分かる)

明久はそう思いながら、少し前を思い出した。

約一ヶ月前、雪菜に強引に迫った輩が居た。

サッカー部所属で、校内でもかなりイケメンと知られている男子だった。しかし、同時にかなり女遊びをしているとも噂されていた男子だった。

その男子からの告白も、雪菜は振っている。

すると、こともあろうにその男子は雪菜に襲いかかったのだ。

そして、その男子は……大変なことになった。

具体的な表現は避けるが、病院に入院している。

今もだ

これに関して、雪菜も少しやり過ぎたと反省しているが、見ていた明久からしたら自業自得としか言えなかった

その後、その男子のやっていたこと全てが露見

その男子の評判は、地に落ちた

なんでも、サッカー部も強制退部になったらしい

閑話休題

雪菜が紙袋に全てのラブレターを入れて立ち上がった時、明久は風沙の姿が無いことに気づいた

「風沙、どうしたの?」

明久はそう呼び掛けながら、風沙の下駄箱の方に視線を向けた

その先では、風沙の手に一通の便箋があった

「明久君……」

「あれま……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は経ち、昼休み

明久は校舎の屋上

その給水塔の影で寝ていた

ふとその時、明久は近くに人が来たことに気づいた

薄く目を開けると、雪菜の姿が見えた

「やっぱり、雪菜ちゃんか」

「探しましたよ、先輩」

雪菜はそう言うのと、明久の隣に座った

「気にならないんですか？ 凧沙ちゃんに来た手紙」

「んー……」

雪菜の言葉に、明久は気の無いような声を出した

「先輩っ」

「……まあ、気にならないって言ったら嘘になるけどさ……凧沙だって、もう中学生なんだ……彼氏の一人は居ても可笑しくないよ」

雪菜が責めるように声を上げると、明久はそう言った

雪菜の影に埋もれているが、凧沙も美少女だ

明久が知らないだけだが、中等部では凧沙も人気である

スタイル的には、所謂お子様体型だろう

しかし、その元気に励まされているという男子が多数居る

特に風沙は、チアリーダー部、ダンス部に所属している
運動部の男子達から人気なのだ

その時

「来てくれてありがとう、風沙ちゃん」

と男子の声が聞こえた

「ここだったんかい……」

明久はそう言いながら、縁まで移動した

すると下に、風沙と男子が居た

その二人の間には、段ボールがあつて、中には

「ニャー」

「かわいい!!」

猫が居た

「猫かい!?!」

それを見た明久は、思わず突っ込みを入れていた

「明久君……何してるの?」

気付けば、風沙が明久を見上げていた

◇
◇
◇
◇
◇
◇

そして放課後

「すいません、お兄さん。私のせいでした」

と明久に謝罪してきたのは、銀髪碧眼の美少女

叶瀬夏音だ

通称、中等部の聖女と呼ばれている少女である

「つまり、捨て猫が増えすぎたから、里親を探してたつてことか」

「そうだよ」

明久の言葉を聞いて、風沙が頷いた

「ごめんね、竹内君」

「まあ、あんな方法じゃあ誤解されますね」

明久は相手の男子

竹内正也たけうちまさやに謝罪した

彼は剣道剣術部時代の後輩である

人の良い少年で、彼も夏音からの相談に応じたようだ

その時、明久の妹を思い出したらしい

そして相談するために、風沙の下駄箱に手紙を入れたらしい

「しかも、これでもまだ一部なんだ？」

「はい、そうなんです」

明久の問い掛けに、夏音はそう言った

話を聞く限り、まだかなり居るらしい

学校に持ってきたのは、その一部らしい

その時

「知っているか、貴様ら。学校に動物の持ち込みは禁止されているぞ？」

と声が聞こえた

振り向くと、黒いゴスロリ服を着た少女教師

南宮那月が居た

「あ、那月ちゃん。づあ!？」

「吉井兄、お前はいい加減に学習しろ」

ちゃん付けした明久は、那月の空間魔術を使った衝撃攻撃で蹲っている

そんな明久を無視して、那月は夏音の持っている段ボールを覗き込んで

「という訳で、この猫は私が没収して夜食にしよう」

と言った

次の瞬間、夏音がその段ボールを抱えて震えている

しかも、涙目だ

「冗談なんだがな」

「冗談って分かりづらいんだよ。那月ちゃんは」

那月の言葉にそう言った直後、明久は再び衝撃攻撃を喰らって倒れた

「まあいい……今回は見逃してやるから、さっさと行け」

那月はそう言うと、校舎に戻っていった

そして明久は立ち上がると、夏音の後に付いていった

流転

学校から出た明久達が向かったのは、ある廃教会だった

その教会は今から数年前に、虐殺事件が発生

しかも犯人は、放火まで行った

それにより、生存者はたった一名のみ

その後、その一人も引き取られて、その教会は再建されることなく放棄された

なお、その犯人は未だに捕まっていないらしい

夏音の話では、そこにまだ多くの子猫が居るらしい

「(ハハ)か……」

「はい……私も、前までお世話になってました」

夏音のその言葉で、明久は気づいた

夏音が、その唯一の生存者だと

(本当だったら、怖いからここに来たくないだろうに……強くて、優しい子なんだな)

明久がそう思っていると、夏音が大きなドアをゆっくりと開けた

最初は暗くて見えなかったが、段々と見えてきた

中は当時のままなのだろう

炭化した椅子や机が散乱している

すると、その物陰から子猫が続々と姿を現した

その数は、明久の予想以上だった

すると、雪奈が

「先輩！ 子猫がこんなに居ます！ 可愛い！」

と声を上げると、目を輝かせながら子猫を抱き上げた

それを見た明久は

（ああ、そういうえば雪奈ちゃんって、猫が好きだったつけ）

と思い出した

雪奈が子猫と戯れているのを見てから、明久は教会の中を見回した

そして、それを見つけた

金属製の大きなレリーフだった

恐らくは、過去に何らかの偉業を成し遂げたのだろう

女性の姿が刻まれていた

すると夏音が、子猫達に猫缶を与えながら

「それは、ニーナ・アブラード様でした」

と言った

「ニーナ・アデアロード？」

明久が首を傾げながら問い掛けると、夏音は立ち上がった

「はい……この教会の名前にもなった御方で、偉業を成し遂げたと聞きました」

と言つて、手を組んで目を閉じた

その姿はまるで、シスターのようだった

(これは確かに、聖女だ……)

その姿を見て、明久はそう納得した

夏音は悲劇の地だった教会で、誰に言われた訳でもなく、自ら率先して子猫の世話をしている

それも、子猫を捨てた身勝手な飼い主に怒ることもなく粛々と

その姿を、聖女と言わずに何と言うのか

その後、明久達は手分けして子猫を引き取ってくれる里親を探した

その努力が実り、三日ほどで子猫達の里親は見つかった

「ありがとうね、内山くん」

「いいですよ、吉井先輩。家の家族、皆動物好きですから」

と言ったのは、バスケット部の中学生

うちやまゆうぎ
内山雄貴だった

彼は、明久が現役だった頃にバスケットとの折衝役をしてくれた後輩だった
明久の所属していた剣術剣道部は、学校では弱小だった

故に、体育館の使用争いについても後塵を拝していた

そこで、同じく弱小だったバスケットと一緒に体育館の使用争いに参加

使用権を手に入れた後は、気の強かったバスケットからは彼が

剣術剣道部からは、明久が使用に関する詳しい調整をしていたのだ

明久が引退した後も、彼が調整役らしい

その関係から電話番号を交換しており、明久は連絡を取ったのだ

そして、彼に渡した段ボールに居たのが、教会に居た最後の子猫だった

「よし……これで、全部見つけられたね」

と明久が言うのと、夏音が

「はい、後はこの子猫達だけでした」

と言った

振り向いた明久が見たのは、いつの間にか新しい二匹の子猫を抱いている夏音だった

「いつの間にな?」

「先ほど見つけました」

明久が驚いていると、夏音はそう言った
それを見た明久は、頭を搔くと

「乗り掛かった船だし、最後まで付き合うよ」
と言った

しかし、夏音は首を振って

「後は、私だけで大丈夫でした。お兄さん、ありがとうございました」
と言って、去っていった

ことは、その日の夜に起きた

突如として、電話が掛かってきて

『七時までには、サウス商業地区のテレビ局ビルの屋上に来い。祭をやるぞ』
と那月が言ったのだ

明久としては拒否出来る訳がなく、なんとか時間までに向かった
そこに居たのは、那月だけではなかった

他に、浴衣を着たアスタルテも居た

「アスタルテちゃんも居たんだね……楽しんでる？」
アクセプト
「受諾」

明久の問い掛けに、アスタルテは頷いた

その表情は何時も通りだったが、心なしか楽しそうだった
(まあ、楽しそうならいいか)

明久はそう思うと、ある方向を見た

その先には、半ば倒壊したビルがあった

「で、呼んだ理由はあのビルなの？」

と明久が問い掛けると、那月は

「貴様にしては、察しがいいな。吉井兄」

と言った

どうやら、当たりらしい

そして明久は、そのビルをじっと見詰めながら

「あれ、どうやってやったの？ 爆弾？」

と那月に問い掛けた

すると那月は、鼻を鳴らして

「管理公社が連中の話では、魔術らしい」

と言った

すると、明久の隣に居た雪奈が

「あれを、魔術ですか……」

といぶかしんでいた

そんな雪奈の姿は、浴衣姿である

「なぜ転校生が居るのか、問いたいだが……まあいい……今から二日程前の夜、空を高速で飛行しながら交戦していた存在が二体確認された」

と那月が言うのと、雪奈は目を細めた

「おかしいですね……あれほどの破壊をする戦闘が起きたのなら、私が気づかない訳がないんですが……」

「ふむ……転校生でも気付かなかったとなると、やはり普通の魔族でも無さそうだな……」

雪奈の高速を聞いて、那月は何処か納得した様子でそう言った

「で、なんで今日呼んだのさ？」

と明久が問い掛けると、那月が

「管理公社の連中が、今日出る確率が高いと言ったんだよ……それで、貴様にも手伝ってもらおうと思ってるな」

と言った

「手伝うって……どうすればいいのさ」

「なに、貴様の眷獣で撃ち落とせばいい」

明久の愚痴に那月はそう言うのと、ニヤリと笑みを浮かべて

「無駄足にならずに済んだな……アスタルテ、公社に連絡しろ。花火の時間だ、とな」
[アクセプト
受諾]

那月の指示に従い、アスタルテは袖の中から通信機を取り出した

「花火?」

「なんだ、今の奴等は花火を知らんのか?」

明久の言葉を聞いて、那月はバカにしたような表情で明久を見た

すると明久は、手を振って

「そうじゃなくって、なんで花火を上げるのさ?」

と那月に問い掛けた

すると那月は、花火が上がったのとは逆方向の空を指差して

「あれを気付かせないためだよ」

と言った

その方向を見ると、空を飛びながら激しく戦闘している存在が居た

「こんな近いのに、気付かなかった!?!」

「そんな!?!」

明久と雪奈が驚いていると、那月が

「なるほど……この近きで、まったく魔力を感じないとすると、普通の魔族ではないな」と言った

そして、明久を見て

「いいか、殺すなよ」

と言った

そして明久は、真実を垣間見る

見えた闇

「捕まえろって言われてもなあ……」

と明久が頭を掻いていると、那月が指を鳴らした

その直後、那月の周囲から神々しい雰囲気レゾナンスの鎖が射出された

その鎖は、束縛レゾナンスの鎖だ

神々が鍛えたとされる鎖で、簡単には切れない代物だ（一瞬、それを見た明久は身震いした）

それを那月は、亜空間を使って召喚

それで、飛び回っている二体を捕まえた

だが次の瞬間、驚くべき光景が見えた

なんと、片方が鎖を引きちぎったのだ

「嘘?! あれが千切れるなんて!?!」

「ちいっ!?!」

明久は驚き、那月は舌打ちした

しかもその余波で、もう一体を縛っていた鎖も千切れた

その直後、その二体の戦闘で近くの鉄塔の一部が破損

鉄塔はバランスを失い、崩れ始めた

だがその直後、那月が再び鎖を召喚

鉄塔の崩壊を防いだ

すると、那月が

「吉井！ 手段は問わん！ どちらか片方でも捕まえろ！ 私は鉄塔のバランスを保つ

！」

と言つて、姿を消した

それを聞いて、明久は深々と溜め息を吐きながら

「やるしかないな……」

と言いながら、念の為に持つてきていたケースを下ろした

そして中から、それを取り出した

長さ1、6 mに達する刀を

分類的には、ギリギリ野太刀に類する刀だ

普通の野太刀は、約20 kg程だ

しかし、明久が持つている野太刀は約倍の45 kgある

明久がそれを片手で持つと、雪菜が

「先輩、その刀……もしや、火車切広光かしゃぎりひろみつでは？」

と恐る恐る問い掛けた

明久はそれを肩に担ぎながら

「あ、知ってたんだ。その通りだよ」

と肯定した

火車切広光

その刀はその昔、火車を切り捨てたという伝説を持つ刀だ

火車というのは、本来ならば悪さをした死者を焼きながら地獄に運ぶ役割の妖怪だ
だが、その切られた火車は生きた人々を焼きながら走っていた火車だった

それを討つために、ある武将がその野太刀を持ち出し、切り捨てたらしい

討つたのは、土御門に連なる一族だった

しかしその一族は禁忌に手を出し、人から鬼に堕ちた

結果、土御門宗家が動き、ある意味内乱になった

その戦鬪で、火車切広光が喪失

明久の父親は、それを発見

明久に管理を任せただ

「本当、父さんってば……フラッと帰ってきたかと思ったら、簡単に置いてくんだ……仕

舞う場所、大変なんだよね……」

明久はそう言うのと、自身の唇を軽く噛んだ

それにより、吸血鬼としての身体能力が解放された

すると、明久は

「雪菜ちゃん、準備は？」

と問い掛けた

すると雪菜は、雪霞狼をクルクルと回してから

「何時でも大丈夫です」

と答えた

それを聞いて、明久は頷くと

「じゃあ……行くよー！」

と言って、跳んだ

お詠え向きに、空中には那月が張った鎖がある

明久と雪菜は鎖の上に着地すると、一気に駆け出した

どういう訳か、二体は鉄塔の周囲で戦っている

鉄塔に渡れば、二体の近くに行けると判断したのだ

そして二人で到着すると、対象を探した

その時だった

「先輩！」

と雪菜が、明久を突き飛ばした

「おろっ!？」

明久と雪菜は一緒に転がり、通路に倒れた

その直後、先程まで明久が居た場所を何かが通り過ぎた

明久が頭を上げると見えたのは、二体がもつれあうようになって、一つ下の通路に居たのだ

片方は黒髪で、もう片方は銀髪だった

その時だった

銀髪の個体が、黒髪の個体の翼を切り裂いた

「血が出ない……肉体的には繋がってないのか……」

と明久が言った直後、その銀髪の個体が黒髪の個体の腹部に噛みつき、捕食を始めたのだ

「なっ!？」

「あれは……霊的器官を取り込んでる!？」

明久と雪菜が驚いた

その時、銀髪の個体の顔に着いていた仮面が壊れて、顔が見えた

「そ、そんな……!?!」

「か、夏音ちゃん!?!」

その正体は、中等部の聖女

叶瀬夏音だった

結局、明久と雪菜は見ていることしか出来なかった

「もう一体には、逃げられた……か」

「すいません、南宮先生……」

「いや、構わん……もう一体を捕獲出来たしな」

雪菜の謝罪に那月はそう言うのと、救急車に入れられていくもう一体を見た腹部に怪我を負ったものの、生きているらしい

そして那月は、ある物を取り出した

それは、砕けた仮面の一部だった

その裏面には、不思議な模様が書かれていた

「それで、本当にもう一体の顔は見えないんだな?」

「は、はい……見てません」

那月の問い掛けに、雪菜はそう答えた

因みに、報告しているのは雪菜だけだ

明久は嘘が吐けないので、トイレに行っていることにしている

雪菜の報告を聞いて、那月はしばらく雪菜の顔を見ていたが、溜め息を吐いて

「まあ、いいだろう。あのバカと一緒に帰ってよし」

と言うと、管理公社の人間に持っていた破片を渡した

「はい、失礼します」

雪菜はそう一礼すると、そこから離れた

そして、ある場所に着くと

「先輩、なんとか誤魔化せました」

とそこに居た明久に言った

「ん、ありがとうね、雪菜ちゃん」

明久はそう言うのと、ある物を手渡した

「あ、これ……」

「射的でゲツト」

それは、誤魔化してくれた雪菜に対しての謝礼だった

猫のキーホルダーだ

そして明久は立ち上がると、月を見上げて

「さて、調べないとね……」
と言った

そして、事件の中枢に近づくと

置き去り

翌日、商業地区

「……、か……」

「はい、叶瀬さんの家のある会社……カノウアルケミ・インダストリーの子会社。メイガスクラフトです」

二人の前には、一面ガラス張りの建物が見えた

カノウアルケミ・インダストリー

名前からも分かるように、錬金術を使った製品を多数出している企業である

その子会社

メイガスクラフトは、傀儡魔術を使ったロボット開発・販売をしている会社である

企業母体はアルディギア王国にあるらしい

夏音はその社員の一人の養女として、社員寮に住んでいるらしい

それを知った二人は、直接来たのである

真相を知るために

明久と雪菜は中に入ると、受付に歩み寄った

受付に座っていたのは、人型のロボットだった

二人が近付くと、そのロボットが

『どのようなご用件でしょうか？』

と問い掛けてきた

すると雪菜が

「叶瀬賢生かなせけんせいさんに面会したいのですが」

と言った

叶瀬賢生

それが、夏音の養父の名前である

すると、少ししてから

『叶瀬賢生は、ただ今不在です。御名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？』

と受付ロボットが返した

「獅子王機関の姫終雪菜です」

と雪菜が言う

『少々お待ちください』

と言った

すると明久が

「獅子王機関のこと、言って良かったの？」

と雪菜に問い掛けた

それに対して、雪菜は

「一応、政府直轄の組織ですから、大丈夫かと。それに、居留守という可能性もなきにしもあらずですから」

と返した

その時

「すみません。お待たせしました」

と声が聞こえた

声が聞こえた方向を見ると、赤いスーツを着た金髪の女性が居た

掛けている眼鏡と微笑みからは、出来る女性を彷彿させる

よく見れば、左手首には登録魔属を示す腕輪がある

だが、この時明久は剣士としての勘故か

その女性を、信用してはいけないと思った

「私は叶瀬賢生の補佐をしています、ベアトリス・バスラーと申します」

とベアトリスは名乗りながら、頭を下げた

すると雪菜が

「私は獅子王機関の劍巫。姫終雪菜です」

と名乗った

それに続いて

「彩海学園の吉井明久です」

と、明久も名乗った

すると、ベアトリスが

「姫終雪菜様と吉井明久様ですね？ 申し訳ありませんが、叶瀬賢生はただ今、当社私有地にて実験をしております、不在なんです」

と説明した

「私有地？」

「はい。敷地内の滑走路から出ますセスナに乗りまして、少し離れた海上の無人島です」

雪菜が問い掛けると、ベアトリスはそう答えた

それを聞いて、雪菜は少し頬をひくつかせて

「何時戻るか、分かりますか？」

と問い掛けた

するとベアトリスは、軽く頭を下げながら

「申し訳ありませんが、何時戻るかは私も分かりません」

と言った

続けて

「叶瀬賢生は、研究が一段落するまで、長期で研究室に籠ることがザラですので、何時戻るといえるのは、確約出来ません」

と言った

それを聞いて、雪菜は顎に手を当てて黙考を始めた
すると、ベアトリスが

「なんでしたら、直接行かれますか？」

と問い掛けた

それを聞いた雪菜は、驚いた表情で

「いいんですか？」

と返した

すると、ベアトリスは微笑みながら

「はい。政府直轄機関の方を無下には出来ませんから」

と答えた

それを聞いた雪菜は、少しすると

「では、お願いします」

と言った

それを聞いたベアトリスは、僅かに口端を上げて

「承りました。手続きをしますので、少々お待ちくださいませ」

と言つて去つた

それから数分後、二人はベアトリスに案内されて一機のセスナの所に着いた

そのセスナに背中を預ける形で、一人の男が待つていた

身長は、約180

髪はボサボサで、革のジャンパーを着ている

「紹介します、こちらはこのセスナのパイロットを勤めます」

「ロウ・キリシマだ。よろしくな」

と男

ロウは言つて、右手を出した

そのロウの右手首に、登録魔属を示す腕輪が見えた

「姫柊雪菜です」

「吉井明久です」

二人が握手すると、ロウはセスナの後部ドアを開けて

「乗りな。直ぐに出るからよ」

と言った

そう言われた二人が座席に座ると、ロウは後部ドアを閉めてから運転席に座った
そして、セスナは発進した

「大体、数十分で着くからな！」

とロウは言ってきた

「わかりました！」

と明久は返答すると、視線を雪菜に向けた

何故なら、発進してから、雪菜はずっと黙っていたからだ

雪菜は硬い表情で

「大丈夫……大丈夫……」

と繰り返して呟いていた

そして、外を見ようともしなかった

それを見た明久は、少し考えてから

「雪菜ちゃん、もしかして……飛行機が苦手なの？」

と問い掛けた

すると雪菜は、凄まじい勢いで明久に顔を向けて

「そ、そんなことはありません！」

と否定したが、その様子はどう見ても精一杯の我慢をしている子供だった。そんな雪菜が微笑ましかった明久は、雪菜の頭を優しく撫でた。すると、ロウが

「ああ、ちくしょう。羨ましいな、こんちきしょうめ！」
と叫んだ

今の明久と雪菜の姿は、どう見ても付き合い始めたカップルのそれである。それに気づいたのか、雪菜は顔を真っ赤にしてアワアワとしていた。すると

「見えたぜ、お二人さん！ あの島だ！」

とロウが言った

明久が窓から先を見ると、小さな島が見えた

どうやら、そこらしい

「しつかり掴まってるよ？ あの島の滑走路は、整地なんてされてねえんだ」
とロウは言うのと、着地態勢に入った

明久が手摺を掴むと、雪菜は明久に抱き付いた

そしてセスナは、ガタガタと揺れながら着地した

完全に止まると、ロウがドアを開けて

「着いたぜ。降りな」

と言った

言われた通り、明久と雪菜はセスナから降りた

そして、島を見た二人の第一印象は

《本当に、研究所があるの?》

だった

無理もない

木々が生い茂り、所々に建物が見えるが、ボロボロだからだ

二人が固まっていると、セスナが動き出した

「はい!？」

明久が振り向くと、ロウが

「悪いな! 恨むなら、B・Bを恨みな!」

と言って、飛び立った

それを見送った明久は

「しまった……罨だったかあ……」

と額に手を当てた

そして二人は、この島で出会いをする

捕捉

無人島に置いてかれて、数時間後

明久は岩場で座っていた

そこに、雪菜が現れて

「先輩、首尾はどうですか？」

と明久に問い掛けた

すると明久は、適度な枝と流れついていた釣り糸を使って作った釣竿を上げて

「まあまあ、かな？　ここら辺の魚、警戒が薄いし」

と言って、同じく拾ったバケツを指差した

その中には、数匹の魚が泳いでいた

それを見た雪菜が

「最初獅子の黄金を使うと言われた時、どうしようかと思いましたがよ」

と言った

すると明久は

「効率が良さそうだったからね」

と言った

だが、雪菜が

『電気シヨック漁は、違法ですよ?』

と言われて、断念

そして、適度な釣り場を探しながら枝とバケツ。釣糸を入手して、今に至る

そして、また簡易釣竿で一匹の魚を釣り上げると

「それじゃあ、御飯にしようか」

と提案した

そして明久は、バケツを持って、一時的に寢床に選んだ場所に向かった

そこは、トーチカだった

しかも、つい最近使われた形跡があった

その証拠に、中には大量の空薬莖が落ちていて、壁には穴

弾痕が多数空いていた

それを見た二人は

《ここで、何らかの実戦訓練が行われていた?》

と予想した

その後二人は、安全確保のために周囲を散策

一先ず安全と確認した後に、食料確保に動いたのだ

そして明久は釣りに回り、雪菜が食べられる野草等を探しに回った

その結果

「まあ、これなら何とかなるかな？」

「恐らくは」

雪菜が見つけたのは、ヤシの実が数個とキノコ数種。一応食べられる野草数種

そして明久が、魚を数匹だった

無いよりはマシと判断し、二人は調理すると食べた

そして、寝たのだが

「ひいっきし!？」

明久は、くしゃみして起きた

いくら屋根のある建物とはいえ、夜になると多少は冷えたようだ

念のためにと寝る前に燃やしていた焚き火も、消えていた

そして気付けば、雪菜の姿がなかった

それを確認した瞬間、一気に明久の意識は覚醒した

そして明久は、近くに置いてあったケースを開くと、中から火車切を取り出した

(周囲に、人の気配無し………だけど………)

明久はなるべく音を立てないように、ゆっくりと唯一の出入口に向かった
そして壁に背中を預けながら、ゆっくりと外を見た

(誰も……居ないな)

明久は一先ず安全と分かると、大きく呼吸して緊張感を解いた
そしてトーチカから出ると、周囲を見た

鬱蒼と生い茂る森の中、時折何らかの動物の鳴き声が聞こえる

「拐われたって訳じゃ、無さそうだけど……」

と明久は呟くと、火車切を肩に担いで歩き出した

そして、暫く歩いていると

「霧……か」

明久の周囲には、霧が立ち込めていた

「霧が出るってことは……確か、近くに水源が有るんだっけ？」

明久はそう首を傾げながら、更に歩いた

その時、パシヤリという水の音を聞いて、明久はそちらの方を向いた

その先に見えたのは、長い銀髪の美少女だった

その美少女は水浴びをしているらしく、裸身だった

「君は……」

と明久が声を上げると、その美少女はゆっくりと顔を明久に向けた
その顔立ちは、夏音に非常に似ていた

だが違うと、明久は直感的に思った

その時

「何してるんですか、先輩」

と首筋に、冷たい刃が当てられた

それに思わず、明久は両手を上げて

「いや、雪菜ちゃんが居なくなっただから、何か起きたのかと思ひまして……」

と釈明した

すると、少しして槍が引かれて

「……わかりました」

と雪菜は言った

それを聞いて、明久は安心して振り向こうとした

その瞬間

「今振り向いたら、刺しますよ」

と雪菜が言ったので、振り向くのを止めた

そして、少ししたら

「いい、いいですよ」

と聞こえたので、振り向いた

次の瞬間、明久は固まった

なぜならば、雪菜は透けているワイシャツを着ていたからだ

「え、えつと……」

と明久が狼狽していると、雪菜が顔を赤くして

「仕方ないじゃないですか！ 汗で気持ち悪かったから洗ってたんですよ!」

と言った

どうやら雪菜は、水浴びをしながら次いでに着ていた制服を洗っていたようだ

そこに明久が来てしまい、慌てて来たようだ

しかし、雪菜の制服は濡れたまま

そこで取り合えず、上を着た

ということらしい

そこで明久は、上に着ていたジャージを脱いで

「はい、これ着て」

と雪菜に渡した

受け取った雪菜は、一度槍を地面に刺して

「すいません、ありがとうございます」

と言って、ジャージを着て、ファスナーを閉めた

そして、明久に視線を向けて

「それで、先輩は何を見ていたんですか？」

と問い掛けた

すると明久は

「いやそれがね、さっきそこに夏音ちゃんに似た女の子が居たんだ」

と言いながら、先ほどまで少女が居た池を指差した

それを聞いた雪菜は、明久が指差した池を見た

だが、そこに人影は無い

「居ないみたいですね……」

「だね」

そう会話すると、雪菜は

「先輩、ここに来てください」

と言いながら、その池の奥に向かった

「え、信じてくれるの？」

「先輩は、何だかんだで嘘は言いませんから」

明久の問い掛けに、雪菜はそう返した

そして、立て続けに

「それに、少し気になることがあるんです」

と言った

「気になること？」

と明久が問い掛けると、雪菜は頷き

「はい……」

と言った

その時だった

何処からか、低いモーター音が聞こえてきた

明久と雪菜が居たのは、ちょうど浜に差し掛かった場所だった

そこから見えたのは、高速で接近してくる大型の影だった

それを見た明久は

「助けが来た？」

と言った

だが、雪菜が

「いえ、それだったら船の筈です」

と言った

その段階になって、明久にもそれが見えた

それは、一般的にはホバークラフトと呼ばれている乗り物

正式名称は、エルキャット L-CAC だった

「まさかとは思うけど……」

「そのまさか、みたいです」

二人がそう言ったタイミングで、L-CACは接岸し、前部装甲を下ろした
そこから、重火器を持った大量の兵士が現れた

邂逅するは

「中から出てきたのは……」

「兵隊です！」

砂浜に接岸したL-CACの中から出てきたのは、黒いボディアーマーを装着したメイガスクラフトの兵隊だった

その手に持っているのは、大口径銃だった

サーモグラフィでも装備しているのか、まっすぐ明久と雪菜の居る場所に走ってくる

「島に置き去りだけじゃなく、撃滅するつもりみたいだね……」

「捕捉されるのも、時間の問題ですね……」

二人がそう話している間にも、着実に兵隊は近付いてきている
少しすると、雪菜が

「先輩、15秒……持てますか？」

「まあ、それくらいなら」

明久がそう返事すると、雪菜は雪霞狼を展開した

そして、兵隊をキツと睨んで

「行きます！」

と言つて、高く跳んだ

そして、一体の敵に

「鳴雷!!」

と技を放つた

そして明久は、火車を担いで

「いっしやあー！」

火車の横腹で、別の一人を叩いた

明久が叩いたのは大きく吹き飛び、雪菜の技を食らつた兵隊は倒れた

それを見て、雪菜は

「二人一人は、大したことありませんね。これならば、時間は掛かりますが全員倒すことも」

と雪霞狼を構えた

その時

「雪菜ちゃん！ そいつ、まだ！」

と明久が声を上げた

その直後、先程倒れた兵隊が雪菜の足を掴んで立ち上がった

「きゃあああ!?!」

持ち上げられた拍子に逆さまになり、雪菜はジャージを抑えた

「いのー」

明久はその兵隊の肘に、火車の峰を叩き込んだ

その一撃でその兵隊の右腕が肘から折れたが、雪菜はその際に脱出し着地した腕が折られた兵隊は、まるで何事も無かったかのようにもう片方の腕で銃を構えた

「どうなってるの、こいつ……痛みを感じてないみたい」

と明久が言うと、雪菜が明久と背中を合わせて

「すいません。先輩……困まりました」

と謝罪してきた

確かに、気付けは二人は兵隊に囲まれていた

「これは……かなり、ピンチっぼい?」

「ぼいじゃないですよ」

と二人が会話した直後

「二人供、そのままです」

と声が聞こえた

その瞬間、一発の弾丸がまるで意思を持っていてかのように不思議な軌跡を描いて、二人を囲んでいた兵隊を撃ち抜いた

それを見た二人は、同時に弾が飛んできた方を見た

その先に居たのは、荘厳な装飾が施された銃を持った夏音によく似た美少女だった
「あ、あの子は、さっきの……」

「あれは、古式呪式銃……」

その美少女は、明久が見つけた美少女だった

雪菜が見ていたのは、その美少女が持っていた銃だった

フrintロックをベースに作られた特殊銃

呪式銃である

希少金属で作られた弾丸の中に様々な術式を封じ込め、それを発射することで威力を発揮する銃である

呪式銃はフrintロックをベースに作られたために、単発という欠点がある
しかし、それを補って余りある威力や効果がある

だが、呪式銃はその弾丸が希少金属を使っているために非常に高価なのだ
故に、確認されている数は少ない

それを個人で持っているとしたら、余程の資産家か物好き

もしくは、高い身分の者に限られる

そして、その美少女は明久達を見ながら

「今のうちに、こちらに」

と、二人を手招きした

明久達はその美少女を信じて、そちらに向かった

すると、その美少女は

「今のが、最後の弾カイトリツジ丸でした」

と言いながら、その呪式銃を腰のホルスターに納めた

よく見れば、銃身下部には短いが銃剣があつた

恐らく、ある程度は接近戦闘が可能なのだろう

「助けていただき、ありがとうございます……あの、貴女は？」

雪菜がそう問い掛けると、その美少女は毅然とした態度で

「私の名は、ラ・フォリア・リハバインです」

と名乗った

そしてラフォリアは、明久を見て

「貴方が、吉井明久ですね？」

と問い掛けた

「なんで、僕の名前を……」

「だって、貴方でしょう？ 日本に現れたという第四真祖なのというのは」

明久の問い掛けに、ラフォリアはそう返した

「そうだけど……」

「なぜそれを知っているんですか？ 貴女は何者なのですか？」

雪菜がそう問い掛けると、ラフォリアは

「ラ・フォリア・リハバインと名乗りました」

と言った

そして、まるで貴族のようにスカートを持ち上げて

「北歐、アルディギア王国国王、リハバインが娘。アルディギア王国第一王女、ラ・フォ

リア・リハバインです」

と名乗った

「なっ……」

「なんですと……」

予想外過ぎる人物との邂逅に、二人は固まった

すると、ラフォリアは

「明久、あれを沈められますか？」

と接岸していたLーCACを指し示した

「沈めなくても、あれ使えるんじゃない？」

と明久が言うが、ラ・フォリアは首を振って

「あれは、メイガスクラフトから遠隔操作されているので、操縦は不可能です。何より中には、メイガスクラフトが作ったロボット兵隊が大量に入ってます」

と説明した

それを聞いて、明久は

「なるほど、ロボットだったのか……道理で、動いてた訳だし、変な手応えだった訳だ」と納得した

すると、ラ・フォリアが

「ほら。早くした方がいいですよ」

と言った

見てみると、LーCACの中から次々と新たなロボット兵隊が出てきた

「げっ……やるしかないか」

明久はそう言って、火車を地面に刺した

そして、左手を掲げて

「疾く在れ！ 獅子の黄金！」

と眷獸を召喚

そして、L I C A C 諸とも兵隊を吹き飛ばした

外法の技

Ｌ－ＣＡＣを吹き飛ばした後、明久達はラ・フォリアの先導で彼女が乗ったという脱出ポットに着いた

「これが、脱出ポット……？」

「ええ、そうですか？」

明久が呆然とした様子で問い掛けると、ラ・フォリアは小首を傾げながらそう言った隣の雪菜を見れば、雪菜も驚いていた

しかし、二人が驚くのも無理はない

ラ・フォリアが乗ってきたという脱出ポットは、金色に輝いているからだしかも中には、洗濯機やら台所、浄水器とトイレがあった

それを見た明久は

(通りで、数日間此処に居るって聞いたのに、綺麗だったわけだよ……)

と納得していた

するとラ・フォリア、雪菜に視線を向けて

「それで雪菜は、制服は大丈夫なのですね？」

と問い掛けた

問い掛けられた雪菜は、制服を着ている

あの戦闘の最中で大分乾いたらしい

「はい、大丈夫です」

雪菜がそう答えると、ラ・フォリアは洗濯機を指差し

「あの洗濯機には乾燥機能も付いているので、気になるなら使ってくださいね」

と言つて、微笑んだ

「あ、ありがとうございます」

雪菜が礼を述べると、ラ・フォリアは脱出ポットの中に入った

すると、明久が

「……まさか、王女様に会うなんてなあ」

と呟くように言った

それを聞いて、雪菜が

「そうですね……私もそうです」

と同意した

すると、中からラ・フォリアがその手にトレイを持って現れた

そのトレイには、ティーポットとティーカップが乗っている

なぜそれを持ってきたのか分からず、二人が見守っているとラ・フォリアは、それを

脱出ポット外壁の一部がせり出して出来ている机にそのトレイを置いて

「それでは、お茶にしましょうか」

と言つて、微笑んだ

「……………ほ？」

予想外の事態に明久は、思わず変な声を出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そこは敵地だと言うのに、ラ・フォリアは堂々としていた

所作にも、焦っている気配は微塵もない

正反対に焦っている気配があるのは、雪菜だ

雪霞狼を地面に突き刺し、それを基点に結界を展開

雪菜曰く

『探査魔術の阻害用です』

とのこと

だが肉眼で見られたら終わりらしく、今も気配察知に意識を向けている

そして明久は……流れに身を任せることにしたようだ

「あー……………いい茶葉だねえ」

「おや、分かりますか？」

明久の言葉を聞いて、ラ・フォリアがそう問い掛けた
すると明久は、ティーカップに視線を下ろして

「前に、母さんの研究室に置かれて有つたのを幾つか飲んだからねえ……んー……これ
は、F & Mのファーストフラッシュユ？」

「正解ですよ、明久」

明久の母親は、絃神島でも屈指の大企業の一つの一研究部門の主任を勤めている
故に、研究室には一流のお茶やコーヒー等が置いてあつた

とはいえ、明久の母親は家事はてんでダメである

だから時折、明久か風沙が掃除・洗濯

更に料理の作り置きの配達

時には、会社の上役が視察に来た時のお茶煎れをやっていた

何故か、母親の研究部門には、家事が出来る人材が極端に居ない

前に家事用ロボットがあつたが、何故か一日で壊れて以来配備されない
そんなことをやっている内に、全てではないが銘柄を覚えたのである

「先輩、暢気過ぎです」

「もうね、急展開過ぎて思考が追い付きましえん」

雪菜の言葉に、明久はそう返した

それは俗に、諦めたとも言う

そんな明久に、雪菜は深々と溜め息を吐いた

すると、ラ・フォリアがクスクスと笑い

「明久は、大物になりそうですね。流石は、複数の女性を侍らす孤高の真祖です」

と言った

次の瞬間、明久は吹いた

そして、ラ・フォリアに対して

「待って、そんなこと言ったのは誰さ!?!」

と問い掛けていた

するとラ・フォリアは、人差し指を立てて

「アルデアアル候です」

と言った

それを聞いた明久は、頭を抱えて

「あの戦闘バトルジャンキー狂めえ……」

と漏らした

そんな明久を見て、ラ・フォリアは

「しかし、思ったより普通の人なんですね。明久は」と言った

すると明久は、頭を掻いて

「まあ、つい最近まで普通に高校生してたからね……」

と答えた

そして、ラ・フォリアに視線を向けて

「そういえば、ラ・フォリアはなんで絃神島に？」

と問い掛けた

なお、ラ・フォリアを呼び捨てにしているが、それはラ・フォリアに頼まれたからだ
様や王女として接されるのは、飽きた。と

途中でアダ名を提案されたが、それは辞退した

明久の問い掛けを聞いたラ・フォリアは、ティーカップを置いて

「絃神島に居る、我が親族を迎えに来たのです」

と言った

「親族？」

明久はそう言いながら、心中で

(はて、絃神島にアルデイギアの大使なんて居たっけ?)

と首を傾げた

それは、那月と西村の教育の賜物だった

アルディギア王国は世界でも有数の対魔武器工業産国だ

特に、ヴェルンドシステムを使った擬似聖剣が筆頭に上げられる

これを使うには、かなりの大きさの聖霊炉を使う必要がある

そしてそれを動かすには、かなりの技量の魔術師が居る必要があるらしい

だが、何事にも例外は存在する

それが、王族だ

王族の血筋は、血から髪に至るあらゆる部位が霊媒として使えるのだ

故に、王族は自身を一時聖霊炉代わりにして、ヴェルンドシステムをさせる

と、明久は二人から頭に叩き込まれた

そして、王族は大使として着任することもあるらしい

もし大使が着任したら、教えてやる

と、那月が言っていたのを明久は覚えていた

すると、ラ・フォリアが

「はい。名前は、叶瀬夏音です」

と言った

それを聞いて、明久と雪菜は目を見開いた

まさか、夏音が王族だとは予想外だったからだ

だが、明久は直ぐに納得した

まず、その精神が高潔なこと

更に、夏音とラ・フォリアの見た目が瓜二つだったので

「彼女は、前王がメイドとして働きに來ていた日本人女性との間に産まれた子なんです……まあ、私の叔母に当たる方ですね」

その説明を聞いて、明久は驚いた

「それってつまり……浮気で出来た子供ってこと？」

明久がそう問い掛けると、ラ・フォリアは頷いて

「そうですね。おかげで、今王宮内はてんでこ舞いです。具体的には、前王を殺そうとする前女王とか」

「……oh」

ラ・フォリアの言葉に、明久はそう言うことしか出来なかつた

はつきり言ってしまうば、自業自得だからだ

「彼女が王族だと判明したのは、最近で、居場所を特定したのが数日前なんです」

ラ・フォリアはそこまで言うと、紅茶を一口飲んだ

そして

「そこで、丁度手が空いていた私が迎えに来たのです」

と言った

それを聞いて明久と雪菜は、洗面を浮かべた

そして、顔を見合わせてから

「確かに、夏音ちゃんは絃神島に居ます」

「ですが、彼女は……」

と言葉を濁した

すると、ラ・フォリアは頷いてから

「ええ……私も一目見ました……エンジェルフォウ人造天使にされたようですね」

と言った

「人造天使？」

「はい。アルディギア王族の血はその体自体が霊媒です。体に特殊な魔術細工を施した個体を何人か用意し、最後の一人になるまで戦わせながら、霊的機関を取り込ませることで至る高位存在です」

明久の問い掛けに、ラ・フォリアがそう答えた

その直後、雪菜が立ち上がり

「それは、壺毒ではないですか！ 禁呪を人間で行ったと言うんですか!？」
と憤った

壺毒

または、蟲毒

これは平安時代、毒を持った虫を大量に集めて、一つの壺の中に入れて殺し合わせた後に、最後に生き残った虫に、死んだ虫が合わさり、強力な毒を持った蟲を作りだし、その蟲を使って毒殺する

という呪法である

しかし、その余りの無惨な方法故に現代では禁呪に指定されている

怒りを露わゆしている雪菜を、明久が落ち着かせていると、ラ・フォリアが

「ええ……はつきり言つて、外法の技です……そして、人造天使のことを知っているのは、極僅かです……その一人が、元宮廷魔導技師の叶瀬賢生です」

と言った

その時、明久達の耳にある音が聞こえた

それは、L-C-A-Cのモーター音だった

天使の叫び

「あのLーCACCは……」

「またメイガスクラフトか……よし、吹っ飛ばす」

明久はそう言うと、腕捲りした

すると、そんな明久の肩にラ・フォリアが手を置いて

「待ってください、あれを」

とLーCACCを指差した

よく見れば、白旗が振られていた

「……白旗だあ？」

それを見た明久は、思わず顔をしかめた

それから十数分後、三人はLーCACCが接岸した砂浜に居た

そしてそこには、ベアトリスとロウ

そして、一人の男性が居た

その男性を見て、ラ・フォリアは

「久しぶりですね、叶瀬賢生」

とその男性の名前を呼んだ

すると、白髪に眼鏡を掛けた男性

叶瀬賢生は右手を胸元に当てて

「久方振りにございます、姫殿下。ご機嫌麗しゅう」

と言った

確かに、元宮廷魔導技師なだけはある礼儀作法だった

すると、そんな賢生にラ・フォリアは

「世辞は無用です。賢生……夏音を人造天使にしましたね？」

とストレートに聞いた

すると賢生は

「流石は姫殿下……知っておいででしたか」

と言って、懐からリモコンを取り出した

それを操作すると、L・C・A・Cの中から二体のロボット兵士が機械式の箱を運んでき

た

丁度、一人が入る大きさの箱だ

賢生が再び操作すると、蓋が開いて中から白い煙が出てきた

その白い煙が晴れると、見えたのはピッチリとしたスーツを着た夏音だった

「一つ聞くよ、賢生さん」

と言ったのは、一歩前に出た明久だ

「なんだ、第四真祖」

「貴方は、夏音ちゃんがアルディギア王族の血筋だから引き取ったのか？」

明久がそう問い掛けると、賢生は

「いや、そうではない……夏音は、私の姉の娘だから引き取ったんだ」

と言った

その言葉を聞いて、三人は驚愕で目を見開いた

「姉の娘……だつて？」

「ああ……姉に子供が居たのを知ったのは、ほんの偶然だがね……」

賢生はそう言うと、夏音を見た

「私は夏音を引き取ると、夏音のために人造天使計画を始めた……計画は順調に進み、もはや最終フェイズだ。後は、昇天させるのみ」

「昇天……？」

賢生の言った昇天という言葉の意味が分からず、明久は首を傾げた

すると、ラ・フォリアが

「最終フェイズに至った人造天使は、最終的にこの世から姿を無くします」

と言った

すると、賢生は頷き

「そうだ……そうすれば、夏音はもう悲しまなくて済む」

と言った

それを聞いて、雪菜が

「悲しまなくて済むって……ちゃんと、叶瀬さんに聞いたんですか!？」

と問い掛けた

すると、賢生は

「夏音が産まれてからの記録は、全て見た……だから私は、これ以上夏音が悲しまなくなるようにと、この計画を始めた」

と答えた

夏音の人生は、事実を述べると悲劇に満ちていた

夏音は、当時メイドの一人として雇われた日本人と当時の王の間に出来た子供だ
妊娠したことに気付いた夏音の母親は、何も言わずに辞職し、絃神島に帰国

そして産んだ後は、母親は病気に侵されていたこともあり、アデラード教会に預けられた

そして今から数年前に、その教会で放火殺人事件が発生

生き残ったのは、夏音だけだった

それを知った賢生は、それが理由で夏音が泣かないのだと思い、人造天使計画を立案実行に移したのである

ああ、それもまた一つの愛情かもしれない

だが、それは余りにも

「ちゃんと話し合ったのかよ……少しは考えないのかよ……夏音ちゃんは、自分の人生に悲観なんてしてなかった筈だ！ あんたの考えを、夏音ちゃんに押し付けるな!!」

それは余りにも、一方的な考えだった

明久は、たった二日程しか夏音と接していない

だが、夏音の精神は理解しているつもりだった

夏音の精神は、正しくシスターだった

現代の聖女と呼べるほどに、高潔だった

子猫を捨てた身勝手な人達に憤ることもなく、その子猫達を拾い、世話し、一緒に里親を探した

それは、今を精一杯に生きてたからだ

自分に出来ることを、精一杯頑張って生きてきたのだ

だから夏音は、賢生の計画も受け入れたのだ

自分に出来ることだから

明久の言葉を聞いても賢生は答えず、背を向けて

「起動せよ、XDAー7」

と言いながら、リモコンを操作した

すると、今まで目を閉じていた夏音が目を開いた

そして、背中から三対六枚の翼を出して飛んだ

「夏音ちゃん！」

「先輩！」

明久が刀を構えると、雪菜は明久のフォローに回ろうとした

だがその雪菜の前に、ライダースーツを着て赤い槍を持ったベアトリスが現れた

「アンタの相手はアタシだよ、メスガキ！」

「吸血鬼ですか！」

ベアトリスの牙を見て、雪菜はベアトリスの正体に気付いた

その雪菜を援護しようと、ラ・フォリアは、懐から一丁のマシンガンを取り出した

すると、ラ・フォリアの前に獣人になった口ウが着地した

「オレの相手をしてもらうぜ」

「つつ……」

その時、眩い光りが辺り一帯を照らした

それは、夏音からだった

夏音の背にある翼が、光を放っていたのだ

「獅子の黄金！ 双角の深緋！」

空を飛んでいる夏音には刀が届かないので、明久は二体の眷獣を召喚

夏音に向けて放った

（ごめん、夏音ちゃん！ 今は寝てて！）

その一撃は、明久は精一杯手加減していた

本気で放ったら、殺してしまうかもしれないと思ったからだ

だが次の瞬間、その攻撃は夏音をすり抜けた

「なっ!？」

と明久が驚くと、賢生が

「無駄だ。今の夏音は、高次の存在になっている。通常の攻撃は意味を成さない」

と言った

つまり、見えてはいるが違う次元に居るということだ

違う次元に居るのであれば、誰が攻撃しようが意味を成さない

「夏音ちゃああああん!!」

と明久が叫んだ直後、夏音から一際強い光りが放たれた
その光を浴びた直後、明久の身体中から血が吹き出した

「先輩!!」

それを見た雪菜は、叫びながら明久に駆け寄った

その直後だった

夏音の両目から、血の涙を流しながら頭を抱えて

「アアアアアアアアアア!?!」

と叫び始めた

すると、夏音を中心にして猛吹雪が起き始めた

どうやら、それは予想外らしい

ベアトリス、ロウ、賢生の三人はLーC A Cに後退

沖の船に向かった

雪菜は泣きながら明久の名を呼び、ラ・フォリアは泣き叫ぶ夏音を見上げて

「夏音……貴女は、泣いているのね」

と呟いた

目覚めと

「一応、簡易結界は張りました。ですが、すいません。外には出れなくなりました」
「いえ、大義でした。雪菜」

雪菜の報告を聞いて、ラ・フォリアはそう言った

雪菜が張った結界というのは、雪霞狼を使った結界だった

それを張ったことにより、三人は冷気に襲われることは無くなった

しかしそれにより、周りは完全に氷に囲まれてしまったのだ

今吹雪は収まっているが、何が起きるか分からない

何より、明久が目覚めないのだ

夏音の攻撃なのか、明久は全身から出血し倒れた

その明久を守るために、明久を中心にして結界を張った

そして、未だに目覚めぬ明久を見て

「胸の傷だけが、治らない……」

と呟いた

明久の胸部

そこには、手のひらサイズの十字形の傷があつた
他の傷は、粗方治つた

しかし、それだけは治らない

すると、ラ・フォリアが

「この傷は、神気による傷ですね」

と言つた

それを聞いて、雪菜が

「神気の傷？」

と問い掛けた

すると、ラ・フォリアは頷いて

「ええ。明久の胸には、今も見えない剣が刺さっているのです。言うなれば、神気の剣で

す」

と言つた

それを聞いた雪菜は、慌てた様子で

「そんな！ 何とかならないんですか!？」

とラ・フォリアに問い掛けた

すると、ラ・フォリアは

「私達には、その剣は抜けません……」

と言った

すると雪菜は、砂浜に両膝を突いて

「そんな……」

と俯いた

しかし、ラ・フォリアは

「まだ諦めるには早いですよ、雪菜」

と言った

「本来ならば、神気の剣に胸部を貫かれた時点で、幾ら第四真祖とは言え消滅は免れない筈です。しかし、未だに消滅していません」

ラ・フォリアはそう言いながら、明久の胸部に手を添えた

そして

「やはりですか」

と言った

「何がやはりなんですか？」

雪菜が問い掛けると、ラ・フォリアは明久の顔を見て

「今明久の中で、神気と明久の眷獣の力がせめぎあっています。ですが、その眷獣の力が

弱いのか、徐々に押されているようです」

と言った

すると、雪菜が

「ですが、高次の気たる神気を押さえる眷獣なんて……」

と言いながら、唸りだした

それを聞いて、ラ・フォリアが

「確か、明久が掌握している眷獣は二体。雷と音の眷獣でしたね？」

と問い掛けた

その問い掛けに、雪菜は頷いて

「はい、その通りです」

と肯定した

するとラ・フォリアは

「ということは、今中で抗っているのは次元を司る眷獣のようですね」

と言った

それを聞いた雪菜は

「新しい眷獣が、動いてる……まさか、暴走してる？」

と呟いた

今まで、明久の中の眷獣は近くに霊媒が居ると目覚めてきた

だが、強制的に起きた場合、凄まじい力を放出した

今は恐らく、神気の剣にその殆どの力が使われているから、まだ災害は起きていない
しかし、その均衡が破れたらどうなるのか

それは、雪菜には想像出来なかった

ふとその時、雪菜の耳に衣擦れの音が聞こえた

それが気になり、雪菜は顔を上げた

その直後

「な、何をやってるんですか!？」

と雪菜は、悲鳴のように叫んだ

何故ならば、ラ・フォリアが上着を脱いで明久のワイシャツを脱がしていたからだ

「何って、明久の眷獣掌握の手伝いをしようかと。吸血が必要なのでしよう?」

「そうですが、何故脱いでいるのですか!？」

雪菜がそう問い掛けると、ラ・フォリアは

「吸血衝動を起こすには、性欲を刺激するのでしょうか? 性欲を刺激する方法は、メイド

達から聞いています」

と言った

それを聞いて雪菜は、心中で

(アルディギア国王、メイドの選別はキチンとしてください！)

と叫んだ

そうしている間にも、ラ・フォリアは明久のワイシャツを脱がしていき

「おや、明久は予想以上に筋肉質なのです。流星は、剣術大会個人戦優勝者」

と言った

そして、ラ・フォリアはリボンをほどき第一ボタンを外そうとした

その時

「私が血を与えます！」

と雪菜は叫んだ

すると、ラ・フォリアが微笑んで

「はい、お願いしますね」

と言った

「え」

アツサリとしたラ・フォリアの返しに、雪菜が固まっていると

「では、お願いしますね」

と言つてラ・フォリアは、明久の上からアツサリと退いた

それを見て、雪菜は気づいた

(しまった！ 嵌められた！)

と

雪菜の性格と任務の両方を使った、ラ・フォリアの策だったのだ

そして雪菜は、ものの見事に嵌まったのである

「どうしました、雪菜？ なんなら、私が脱がしましょうか？」

「いえ、大丈夫です。自分でしますから！」

手をワキワキと動かすラ・フォリアを止めると、雪菜はリボンを外し、第一ボタンを外した

そして、予備武器のナイフで首筋を薄く切った

そうして、明久の上に乗る

「先輩……」

と言いながら、明久の頭を抱き締めた

すると、明久の唇に雪菜の首筋から流れてきた血が垂れた

その直後、明久の腕が雪菜を抱き締めた

「先輩!?! 起きてるんですか、先輩!?!」

雪菜がそう問い掛けるが、返答は無い

意識はまだ、戻っていないようだ
すると

「先輩！　すぐ近くに人が居るんですよ!?　何処を舐めてるんですか!?　先輩!!」
と雪菜の慌てる声が聞こえた

そして最後に、雪菜は熱を帯びた吐息のような声を漏らして力が抜けた
どうやら、明久が雪菜の首筋に牙をたてたようだ

明久が目覚めたのは、それから数分後だった

「あー……んう?」

明久がその声を漏らしながら起きると、ラ・フォリアが

「起きましたか、明久」

と声を掛けた

すると明久は

「あれから、何分経った?」

と問い掛けて、身を起こした

するとラ・フォリアが

「大体、二十分といったところですね。それと、右手の位置に注意を」

と言った

それを聞いた明久は、右側を見て

「うお、雪菜ちゃん!？」

と声を上げた

そして、雪菜の首筋の包帯を見て察した明久が

「迷惑掛けたのかあ」

と呟いた

そんな明久に、ラ・フォリアが近寄

「雪菜は、貴方を助けるために血を吸わせたのですよ」

と言った

そして明久に、詳細を説明した

それを聞いて、明久は

「でも、新しい眷獣が目覚めた気配なんて」

と言いながら、首を傾げた

するとラ・フォリアが

「ちよつと、触りますよ」

と言いながら、手を当てた

そして、数秒後

「なるほど、そういうことですか」

と納得した様子で呟いた

そして

「明久。この眷獣は、二人分の霊媒が必要なようですね」

と言った

そして、立て続けに

「どうやら、かなり特殊な眷獣のようですね。二人の血を吸って、ようやく完全に目覚めるようです」

と言った

「二人分か……」

と明久が呟くと、ラ・フォリアはワイシャツの第一ボタンを外して

「明久、私の血を吸いなさい」

と言った

それを聞いた明久が目を向けると

「明久。貴方は、世界最強の吸血鬼なのでしょう？」

と問い掛けた

それを聞いた明久は、頭を掻きながら立ち上がり

「まあ確かに、世界最強の第四真祖と呼ばれてるね」

と認めたと

するとラ・フォリアが

「私の父親は、少々親バカの気がありましたね。私を嫁に欲しいのなら、俺と軍を倒せ。と言うでしょう……明久」

と言いながら、明久を真剣な表情で見た

そして明久は、そんなラ・フォリアを見ながら

「人間に勝てないと、世界最強だなんて言えないよね」

と言って、ラ・フォリアを抱き締めた

そして、真剣な表情で

「王様とだって、倒してみせるさ」

と言った

それを聞いたラ・フォリアが頷くと、明久はラ・フォリアの首筋に牙を突き立て

怒りの宣告

吹雪が収まったのを確認して、賢生達三人は上陸した

夏音が居た場所には、まるでかつてのバベルの塔のような氷柱があった
賢生はそれを見上げると

「夏音……」

と夏音の名前を呟いた

その直後だった

氷柱の一番下の一角が、溶けたのだ

そこから現れたのは、明久達だった

「流石は、有名な妖刀ですね……まさか、炎も出るなんて……」

「呪文は、うろ覚えだったけどね」

ラ・フォリアの言葉に、明久はそう返した

その左手に持つのは、燃え盛る大太刀

火車宏光だった

火車宏光の分類は、斬馬刀になる

斬馬刀というのは、その名前の通り馬諸とも相手を斬るために造り出された刀である
それにより、刃の厚さ、長さ、重さのどれをとつても刀の中では最たる物として知ら
れている

火車宏光は、その中では比較的短い部類に入る

しかし火車宏光には、その名前の由来となった火車を斬ったという伝説がある

それによるのか、火車は呪文を唱えると刀身に炎を宿すようになっていた

真つ赤な炎を

明久はそれを使い、氷を溶かしたので

そして明久は、火車宏光を軽く振って炎を消した

そして、賢生達を見て

「どうも、生きてたよ」

と言った

すると、賢生が

「眷獣の能力で、復活したのか」

と言った

やはり、元宮廷魔導技師だけはあつた

察しが良かった

「そうだね……なあ、賢生さん……あんたさ、夏音ちゃんとキチンと話したの？」
「……どういう意味だ？」

明久が問い掛けると、賢生は首を傾げた

すると明久は、氷柱の中で両膝を抱えている夏音を指差し

「あの子は、一生懸命今を生きてたんだ。多分、シスターにもなりたかった筈だ。あの高潔な精神は、聖女って呼ばれるのも納得だ」

と喋りだした

そして続けて

「あんたが夏音ちゃんの父親だって言うなら、ちゃんと将来のことも話し合ったの？
話し合わずに決めたならあんたは、父親失格だ！」

と言った

すると、ベアトリスが前に出て

「あんたらの子供の将来についての話しなんざ、どうだっていいんだよ」
と言った

そして、胸元から何らかのリモコンを取り出して

「こいつらであんたを殺さないで、兵器の検証にならないからさー！」
と言って、操作した

その直後、L-I-C-A-Cの方から新たに二体の仮面を被った人造天使が現れた
「他にも居たのか」

「……私が用意したのは、七体だけだ……クローンか」

明久が呟くように言うと、賢生がそう言った

すると、獣人化したロウが

「うちの会社な、経営ヤバいんだわ。ロボット開発って凄いい勢いで進むのと同時に、コストが上がり、売上が落ちる。掃除ロボットを魔術を使って兵器化して売り込んでも、なかなか売れない」

と言った

本来ロボットには、ロボット三原則という規則があり、人間には攻撃出来ないようになっっている

それを、死霊術で書き換えることにより兵器として使えるようにしたのでらう

だが、そのロボット兵士もラ・フォリア曰く、大したことはない

らしい

「だから、この人造天使を兵器として売り込むことで経営を建て直そうってハラさ！

特に、第四真祖を殺せたとなったら、特大の売り文句になるさ！　そして、そのメス

ブタ」

ベアトリスはそう言うと、ラ・フォリアを見た

そして、右手に持っていた槍を肩に担いで

「あんたには、この世の物とは思えない快樂を与えてから、丁寧に切り刻んで、大量にクローニングしてあげる。アルディギアの血族なら霊媒として優れてるし、あんたのクローンなら欲しいって金持ち連中が居るだろうからさ！」

と言った

その直後、ベアトリスの眼前に火車が迫った

ベアトリスはそれを間一髪で回避すると、明久に視線を向けて

「この、クソガキが……」

と明久を睨んだ

先程のは、明久が持っていた火車をまるで弾丸のような速度で投げたのだ

明久が投げた火車は、ベアトリスの背後のL-CACの装甲に突き刺さった

明久は、低い声音で

「もう喋るな、クソ年増……」

と言った

そして、ベアトリスを睨んで

「あんた、ラ・フォリアを何だと思ってる……いや、ラ・フォリアだけじゃない……その

人造天使の素体にされた子達もだ……その子達や、ラ・フォリアは一人の人間だ……それを、切り刻むや増やすだ？」

と喋りだした

その身からは、怒りに触発されて凄まじい圧の魔力が放たれていた

そして

「もういい加減、頭に来た！ 会社の経営がヤバイ？」

そんなの知るか！ ラ・フォリアを利用する？ そんなこと、させるか！ 夏音ちゃんを、死なせてたまるか!!」

と怒鳴った

その圧に押されたのか、ベアトリスは一步後退りした

そして明久は

「夏音ちゃんとラ・フォリアは、僕が助ける！ こっから先は、第四真祖僕の戦争だ!!」
と宣告した

すると、その隣に雪菜が寄り添い

「いえ、先輩……私たちの戦争ケンカです！」

と言いながら、雪霞狼を構えた

すると、雪菜の反対側

右側に、ラ・フォリアも立った
その手には、武骨な兵器
マシンガンが握られている
そして、火蓋は切られる

処断

明久達三人は、同時に動いた

雪菜はベアトリスに

ラ・フォリアは口ウに

そして明久は、夏音に

「はっ！ あんたみたいなメスガキに、アタシが負けるとでも!?」

「既に、勝機は見えています」

ベアトリスの言葉に、雪菜は冷静にそう返した

そして、雪菜は超高速の突きを繰り出した

だがその一撃は、曲がりくねった槍によって防がれた

しかし雪菜は、冷静に

「やはり、意思インテリジェントウエホンを持つ武器ですか」

と言った

「ほう、よく分かったね。メスガキ」

「先程、先輩が刀を投げた時に、その槍が一瞬曲がったのが見えたので」

ベアトリスの言葉を聞いて、雪菜は淡々とそう言った
するとベアトリスは、槍を回して

「こいつの正体が分かったからって、避けられるかは別問題だろ」
と言った

そして、肩に担ぐと

「串刺しにしちまいな、蛇紅羅^{ジャグラー}！」

と言つて、槍を振り下ろした

「確かに、普通だったなら無理でしょう……しかし」

雪菜はそこまで言うのと、蛇紅羅を雪霞狼で防いだ

次の瞬間

「ですが、使い手が悪ければ、その力を發揮出来ない」

雪菜はあえて、雪霞狼を手放した

「なっ!?!」

まさか武器を手放すとは思っていなかったらしく、ベアトリスは驚愕で目を見開いた
その隙を逃がさず、雪菜は一瞬にして懐に入ると、右手をベアトリスの腹部に当てて

「響^{ゆびせ}よー！」

と得意技を叩き込んだ

「がふっ!？」

その一撃を喰らい、ベアトリスは口から血を吐き出した

しかもその一撃で、ベアトリスは大きなダメージを受けた

「このメスガキ……何を!？」

ベアトリスがそう問い掛けると、雪菜は落ちていた雪霞狼を拾い上げ

「貴女の体内に、衝撃を通しました」

と答えた

吸血鬼の体は確かに、大抵の傷を即座に修復することができる

しかし、何事にも例外は存在する

吸血鬼の高速再生は、直接的なキズは即座に治す

だが、体内のダメージ

並びに、身体機能に対するダメージは治すのに時間が掛かるのだ

そして雪菜がやったのは、横隔膜に対する強烈な衝撃波である

鎧を着けていても大ダメージが通るのに、ライダースーツ一枚で防げる訳がない

ベアトリスは、震える足でなんとか距離を取ると

「ロウ！ 腐れメスガキ一匹無力化するのに、何時まで掛かってるんだ！」

と声を上げた

そして返ってきたのは

「ちくしょう……騙されたぜ……」

という、ロウの言葉

そして、ロウが倒れた音だった

その音に顔を向けると、金色に輝いているラ・フォリアと同じ様に金色に輝く呪式銃だった

「ロウ！　メスガキ一匹に勝てないのかよ！」

とベアトリスが苛立った声を上げると、ラ・フォリアが
「恥じる必要はありません。この身は、精霊なのですから」

と言った

それを聞いて、ベアトリスはロウが負けた原因に気がついた

「ヴェルンドシステムだと!?　バカな！　あれは、一定範囲内に精霊炉がないと使えないはず!？」

「ええ、ですから……私が、精霊炉（せいれいろ）になったのです」

驚くベアトリスに、ラ・フォリアはそう返した

そして、ベアトリスは

「まさか……自分の中に精霊を召喚したのか!？」

と驚いた

そう

それこそが、アルデイギア王族のみが扱える術式だった

ラ・フォリアは口ウと戦いながら呪文を唱え、自分の体内に精霊を召喚

自分自身を精霊炉にして、呪式銃の銃剣をヴェルンドシステムによつて聖剣クラスにまで引き上げたのだ

そうとも気付かず近づいた口ウを、一撃で倒したのだ

「私、ラ・フォリア・リハバインの名の下に……ベアトリス・バスラー……貴女を処断します」

ラ・フォリアはそう言いながら、ゆっくりとした歩調でベアトリスに近付いていく
するとベアトリスは

「それ以上……近寄るんじゃねえ！」

と言つて、蛇紅羅を振るつた

だがその一撃を、雪菜が見逃す訳がない

雪菜は雪霞狼を振るい、蛇紅羅を弾き飛ばし、そしてベアトリスの膝裏を蹴つた

それによりベアトリスは膝を突いたが、すぐに立ち上がるうとした

だがその時、既にラ・フォリアは目の前に居た

「貴女達に無惨に殺された騎士達と非戦闘員の無念……そして、親族の怨み……篤と知りなさい」

ラ・フォリアはそう言つて、呪式銃を振つた

その一撃は、ベアトリスの右肩から左腰まで切り裂いた

その一撃を喰らい、ベアトリスは砂浜に倒れた

それを、雪菜が見下ろしていると

「殺してはいません。まあ、死ぬ程痛いでしょうがね」

とラ・フォリアが言つた

「いいんですか?」

と雪菜が問い掛けると

「この者達には、何をしていたのか洗いざらい吐いてもらう必要があります。処刑は、その後です」

とラ・フォリアは言つた

そして二人は、明久の方を見た

明久は増えた二人の攻撃を避けながら、夏音に獅子の黄金と双角の深緋を繰り出して
いた

だがその攻撃は、夏音を通り過ぎるだけ

「急いで止めないと」

雪菜はそう言うのと、ベアトリスから落ちたりモコンを拾った

そして何とか操作すると、少ししてから二体の人造天使は砂浜に膝を突いて止まった
すると明久が

「夏音ちゃん……今から、君を解放するよ」

と言って、左腕を高々と上げた

そして明久は、新たな眷獣を召喚する

決着

「カレイド・ブラッド 焰光の夜伯の名を継ぎし者……吉井明久が、汝が枷を解き放つ……疾こく在いれ！ 三番

目の眷獸！ アル・メイサ・メルクリ 龍蛇の水銀！」

と明久が言う、掲げていた左腕から鮮血が溢れた

そして、それを媒介に現れたのは水銀色の対の龍蛇だった

それは互いの尻尾を噛むように現れて、まるで無限の記号を表していた

その龍蛇が咆哮すると、莫大な魔力で空間が震えた

それを見た賢生は

「今さら、新しい眷獸を出した所で、夏音の優位性は変わらん」

と言った

だが明久は、構わずに

「行け！」

と指示を下した

そして龍蛇は、その顎門あぎとで周囲の空間を噛み千切った

「なっ……高次元が噛み千切られた!？」

その光景を見て、賢生は目を見開いた

そして、その龍蛇の攻撃の正体を見抜いた

「そうか、次元喰ディメンジョン・イーターいか!？」

そう

龍蛇の水銀の正体は、次元喰いだっただ

その攻撃能力は、今の明久の中では一番凶悪なのだ

その顎門に噛まれたら、噛まれた場所は存在が次元から消える

それだけでなく、例えば高位次元の相手が居ようが、同じ次元に引きずり落とすのだ

だから今の夏音は、確かに天使の力を有しているが、今は明久達と同じ次元に居るの

だ

たったそれだけだが、明久達に戦いやすくなっただ

しかし、依然として明久に夏音の攻撃はみえない

回避出来てるのは、ひとえに明久の直感からだっただ

夏音に生えている、三対六枚の翼

その翼に付いている、巨大な目

それが、明久を見た瞬間にそこから動いてるだけだ

だから時々、ギリギリのタイミングがあっただ

更に言えば、明久の眷獣達は対人攻撃に向いていない

いくら夏音が高位の存在だろうが、直撃を受けたら無事とは思えなかった

「次元を落とされたとはいえ、夏音の優位性は変わらない！ 夏音の体表に施した術式が健在ならば、夏音は人造天使の力を振るえる！」

賢生がそう言った直後、夏音の頭上に十数本の光の剣が現れた

見えるのは、恐らく力を高めたからだろう

「つつ……これ以上は、どうしようもないのか!?!」

と明久が言った時、明久の隣に雪菜が現れて

「いえ、私達の勝ちですよ。先輩」

と言つて、駆け出した

そして雪菜は、雪霞狼を構えた

その雪菜を狙い、光の剣が殺到した

しかしその光の剣は、龍蛇の水銀に食われた

それは、次元喰いを使った防御だった

龍蛇の水銀に食われた空間は、消滅する

ならば、先の空間を食えばどうなるのか

それは、沙矢華の煌華燐と同じ効果を得ることになる

その隙に、雪菜は一気に跳躍

夏音と同じ高さになった

そこに

「はああああ!!」

と雪霞狼を振るった

しかしその一撃は、夏音の体表を掠める程度だった

だがその直後、変化が起きた

夏音が苦しみだしたのだ

それは、夏音の体表に施された術式の効果が失われたからだ

制御下を外れた力が、夏音を蝕んでいたのだ

そしてとうとう、力に耐えきれなくなったらしく、夏音の背中にあつた翼が夏音から離れた

それに伴い、夏音が落下

しかし夏音は、雪菜がキャッチ

そして明久は、夏音から離れた翼を見上げた

その翼からは、膨大な力が無秩序に放たれていた

放置したら、全員が無事には済まないだろう

すると雪菜が

「先輩！ あれを！」

と翼を見上げた

「今は夏音ちゃんの術式を破壊したことで離れてますが、もしまたあれに取り付かれたら、何が起きるか分かりません！」

雪菜のその言葉を聞いて、明久は頷き

「龍蛇の水銀！」

と指示を出した

すると、龍蛇の水銀は翼に向かっていく

翼は逃げようとしたのか、空に向かっていく

しかし、夏音という依り代を失った翼の動きは遅かった

龍蛇の水銀はあつという間に追い付き、その二つの顎門で翼に噛み付いた

そして、一気にその翼を食べていく

最後の翼の欠片も、二つの顎門に食われて消滅

それを確認した明久は、満足そうに咆哮していた龍蛇の水銀を消した

すると、ラ・フォリアが賢生に歩み寄り

「これで、終わりです。賢生」

と宣告した

すると賢生は、リモコンを手放すと両ヒザを突いた
こうして、人造天使計画は幕を下ろしたのだった

終局

その後明久達は、救援にやってきた防衛部隊の船に乗せられた

そしてその船には、沙矢華も居た

会った瞬間斬られそうになったが、それはラ・フォリアの取りなしで止められた

その後明久は、船内で軽く体を洗った

その後、部隊の一人からワイシャツを貰った

しかし、予備のためか少し派手な柄だった

その後明久達は、部隊に捕縛された賢生を窓越しに見た

端から見たら、かなり大人しい

部隊の人から聞いた話しでは、抵抗しなかったらしい

それを見た明久達は、意識を取り戻したらしい夏音に会いに行った

夏音は、宛がわれた部屋でベッドに横たわっていた

「あ、お兄さん……」

「いいよ、寝てて」

明久達を見て、夏音は一度起き上がろうとしたが、それは明久が止めた

そして、夏音が落ち着くのを待ってから

「夏音ちゃん、助けられて良かったよ」

と明久が言った

すると、夏音が

「お兄さん……ご迷惑をかけました」

と謝った

すると明久は

「いいよ……あれは、行き過ぎた父親の暴走だから」

と返答した

すると、雪菜が

「そうですね、叶瀬さん……今は、体を休めてください。力が外れたとは言っても、体はダメージが残ってるんですから」

と言った

人造天使の力は術式によって制御されていたが、反動が無い訳ではなかった

夏音の体の内側は、天使の力によってダメージを負っていたのだ

部隊の医療官によれば、本来は激痛で立てないレベルらしい

しかし、夏音はそれを顔に出さなかった

それは、父親たる賢生を思つてだろう

「はい、ありがとうございます……」

夏音はそう言った

すると、ラ・フォリアが

「初めまして、叶瀬夏音さん。私の名前は、ラ・フォリア・リハバイン。北歐、アルデイ

ギア王国の第一王女です」

と名乗った

すると、夏音は寝た状態だが

「叶瀬夏音でした。ごめんなさいでした、ご迷惑を……」

と謝罪した

しかし、ラ・フォリアは微笑みを浮かべて

「いえ、構いませんよ。今回のことには、我がアルデイギアの技術が悪用されましたから」

と言った

賢生は昔、アルデイギアの宮廷魔導技師だった

そして、人造天使はそのアルデイギアの技術を使って作り出されたのだ

確かに、彼女が介入するには十分すぎる理由だろう

「それで、夏音。貴女に大事な話があります」

「大事な話……でした？」

ラ・フォリアの言葉を聞いて、夏音は首を傾げた

すると、ラ・フォリアは頷いてから

「貴女を、我がアルディギアの王室に迎え入れたいと思っています。どうですか？」

と問い掛けた

それに対して夏音は

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、船に乗って約2時間後

明久達は、絃神島に帰った

そして港には、那月と西村が居た

そこまでは、明久の予想通りだった

だが何故かそこには、浅葱と凧沙が居た

「あ、浅葱に凧沙……なんで、ここに居るのかなー？」

と明久が問い掛けると、まず浅葱が

「あんた……今日は、私の美術の課題、手伝うって言ってなかった？」

と明久を睨んだ

それを聞いて、明久は思い出した

確かに、今日は浅葱の美術の課題を手伝う約束をしていた

それを思い出して、明久は自分の額に手を当てた

「しまった……」

そして、風沙に視線を向けると

「私は、明久君の心配をしたの！ 一日経っても帰ってこないし！」

と言った

確かに、それは道理である

「あ、はい。ごめんなさい」

風沙の言葉を聞いて、明久は素直に頭を下げた

その時、船の中からストレッチャーに乗せられて夏音が現れた

「あれ!? 夏音ちゃん!？」

夏音に気付いて、風沙はそのストレッチャーに近寄った

すると、隊員が

「すまない、彼女は疲労が激しい。今は、病院に運ばせてくれ」

と風沙を止めた

「あ、はい……」

凧沙は素直に身を引き、そのストレッチャーを進ませた

それに遅れて、最後にラ・フォリアが姿を現した

すると、凧沙が

「あれ!? アルディギアの王女様!?!」

と驚いていた

確かに

まさか、こんな所で会えるとは思わないだろう

そんなラ・フォリアだが、一瞬微笑んだかと思つたら

「昨晚は、楽しかったですよ。明久」

と言つて、頬にキスした

それに、明久が驚いて固まっていると

「明久! どういうことよ!?!」

「明久君!?!」

と浅葱と凧沙が詰め寄つた

それに同調するように

「吉井明久!?! やっぱり、あんたは!?!」

と沙矢華が、顔を真っ赤にしていた

そして、明久は

「待って!! 僕にも何がなんだか!？」

と言った

だが、三人は一気に明久を追い掛け始めた

明久は、それから逃げながら

「ああーもう……不幸だああああ!!」

と叫んだ

「だから、上条さんのアイデンティティーいいいい!!」

と何処かで、一人の男子学生が叫んだとか

そして翌日、空港にて

「しかし、残念でしたね。ラ・フォリア殿下。夏音さんが断って」

とスーツ姿の沙矢華が言った

そう

夏音は、ラ・フォリアの提案を断ったのだ

絃神島に居たいと

「いえ、これが良かったのかもしれませんが」

ラ・フォリアがそう言うと、沙矢華が不思議そうに首を傾げた

それを見て、ラ・フォリアは

「だって、そのほうが面白そうではないですか」

と笑みを浮かべたのだった

こうして、人造天使事件は幕を下ろしたのだった

蒼き魔女の迷宮編

始まり

絃神島も10月になり、島全体があるイベントの準備に明け暮れていた

その名も、波朧院フェスタだ

なお名前の由来は、ハロウィンである

完全に、当て字だ

なお、その波朧院フェスタは絃神島最大級のイベントだ

この時ばかりは、絃神島のあらゆる企業と学校ははっちゃける

企業の力を見せつけるためのパレードや、出店

更に、有志によるライブや何らかのパーティーも行われる

そしてそれに合わせるように、観光客が島に押し寄せる

この絃神島は、魔族特区と呼ばれていて、本土に比べて魔族の数が圧倒的に多い

それ故に、滅多なことでは観光目的の一般人や取材は入れない

しかし、波朧院フェスタではその規制が緩和されるのだ

そしてその影響は、交通に出る

その影響を、明久達はモロに受けていた

「ぐおっ……だ、大丈夫？ 雪菜ちゃん？」

「な、なんとか……」

明久と雪菜は、すし詰め状態のモノレールに揺られていた

なお風沙は、部活の出し物が忙しかったために既に登校している

最近は元気になっているようで、明久としては非常に嬉しいところだった

その時、明久の視界にある光景が見えた

それは、反対側のドア付近

そこに、中等部の制服を着た女子がスーツを着た男に痴漢されているらしい光景だった

痴漢と分かったのは、そのスーツの男が嫌らしく笑っていたからだ

「あいつー！」

「先輩!？」

妹が居る明久としては、見過ごせない事態だった

だから明久は、何とか近づいていった

そして、次の駅に到着した時にその男の肩を掴もうとした

その時、開いたドアの外から伸びてきた手に明久の腕と男の腕が捕まれた

「おっ?」

と明久が不思議に思った瞬間、乗客が外に出始めたのと同時に明久の体が凄まじい力で引つ張られた

「なんっ!?!」

明久は驚くが、空中で体を捻ってなんとか着地した

そして見たのは、あのスーツの男がチャイナ服を着た女性に取り押さえられていた
そしてその女性を、明久は知っていた

「笹崎先生!?!」

「おー? 誰かと思ったら、吉井兄じゃんよ」

その女性の名前は、ささきみさき 笹崎岬

風沙と雪菜のクラスの担任である

すると、その笹崎の隣に先程の被害者らしい中等部女子と想っていた人物が居ただがその人物を見て、明久は固まった

なぜならば

「那月ちゃん? 何してるんですか?」

その人物は、中等部の制服を着ているが間違いない明久の担任

南宮那月だったからだ

すると、那月は明久を睨んで

「なに、最近このモノレールで痴漢にあう生徒が続出していてな。私が囹になって一網打尽にしていた所だ」

と告げた

それを聞いて、明久は風沙から聞いた話を思い出した

最近、中等部女子で痴漢の被害が多発しているということ

「その制服は？」

「これか？ これは、私が彩海学園の生徒だった時の物だ」

明久の問い掛けに、那月はそう答えた

確かに、よく見たら今のとデザインが違う部分があった

すると、複数の男達を縄で縛った笹崎が近づき

「南宮先輩。痴漢集団、捕縛完了しましたよ」と

と軽い調子で言った

笹崎岬

普段は中等部の体育教師をしているが、彼女も那月や西村と同じ降魔官である

しかも、かつての西村と同じ四仙拳の一人

仙姑せんこと呼ばれているのだ

しかし普段からノリが軽く、しかも那月は身長差があることから苦手としている数少ない一人だ

「さて、吉井明久。そろそろ行かないと遅刻するぞ」

「げっ、それは不味い」

那月に言われて、明久は腕時計を見た

確かに、結構ギリギリの時間だった

そして明久は、投げられた時に落としたカバンを雪菜から受け取りホームから改札に向かった

この時、既に不穩の種は島に入っていた

青き魔女の血筋が

待ち人来る

そして放課後

明久達は、空港に居た

「で、なんで皆着いてきたのさ？」

と問い掛けたのは、呆れた表情の明久である

そんな明久の視線の先に居たのは、何時ものメンバーだ

浅葱、基樹、風沙、雪菜、康太、雄二、秀吉である

本来ならば、明久と風沙、雪菜の三人だけの筈だった

しかし気付けば、大所帯になっていた

「ん？ 明久が知り合いを迎えに行くって言うからな。暇潰しにな」

と言ったのは、雄二だ

すると明久は、そんな雄二を睨んで

「本音は？」

と問い掛けた

すると雄二は、いい笑顔で

「明久を弄るネタを入手しに来た！」
と答えた

その直後、明久は雄二にアップパーカットを見舞っていた
この時のことを、明久は後に語る

『吸血鬼の力が出なくて、良かったよ』
と

そして、気絶した雄二をベンチに放置

明久は基樹を見た

すると基樹は

「ん？ 暇だから、買い物ついでにな」

と言った

「あっそ……」

基樹に関しては、予想通りだった

そして明久は、浅葱に視線を向けた

すると浅葱は

「私もついでよ、悪い？」

と明久を軽く睨んだ

「いや、別にいいけどさ」

睨まれるとは思わず、明久は軽く驚きながらもそう返答した
すると、基樹が小声で

「つたく、お前は……もう少し、素直になれっの」

と浅葱に言った

すると浅葱は、顔を赤くしながら

「出来たら苦労しないわよっ」

と返答した

実は浅葱達が着いてきたのは、明久が会いに行くと言った相手が気になったからだっ
た

浅葱の勘だが、女だと思ったのだ

そして迷っていたことに気づいた基樹が、一緒に行くことを提案したのである
それに便乗し、来たのである

すると康太が

「……それで、どういう奴が来るんだ？」

と問い掛けた

すると明久は、思い出すように

「ユウマって言つてね。まあ、僕たちの幼馴染みつてところかな」と言つた

すると、風沙が

「ユウちゃんはね、運動神経が凄いいんだよ！ 明久君と二人で、バスケットしてたし！」

と言つた

明久も剣術に於いては有数な腕を誇り、それを支えた運動神経だ

その明久とバスケットが出来たのだから、相当の運動神経だろう

その時だった

「アキヒサー！」

と上から、声が聞こえた

呼ばれた明久は、反射的に上に顔を向けた

そして見えたのは、今まさに落ちてくる一人の人物

「ちよっ!?!」

明久は驚きながらも、腰を落とした

その直後、明久はなんとかその人物を受け止めた

そして、驚きの表情を浮かべながらも

「危ないでしょう、優麻!?!」

と怒った

すると、驚きの登場をした人物

としよぎゆうま
仙都木優麻は悪びれもせず

「ははは、驚いてもらえたかな？」

と朗らかに笑った

すると明久は、嬉しそうに

「つたく……まあ、変わってないみたいで安心したよ」

と言つて、優麻を下ろした

すると、凧沙が

「久しぶり、ユウちゃん！」

と優麻に飛び付いた

優麻は、危なげなく凧沙を受け止めて

「久しぶり、凧沙ちゃん。可愛くなつたね」

と凧沙を誉めた

すると、秀吉が

「のう、明久よ……まさか、そやつか？」

と明久に問い掛けた

すると明久は、呆れた表情で頷いて

「そ。今回のフェスタを一緒に回る相手」

と言った

すると、優麻が凧沙を撫でながら

「初めまして、仙都木優麻です」

と名乗った

すると、浅葱が

「あんた……女の子……よね？」

と優麻に問い掛けた

すると優麻は、朗らかに笑いながら

「そうだよ」

と肯定した

そう、大胆なことをしたが、優麻は真正正銘の女の子である

「先輩より、男らしいですね」

「どういう意味さ!?!」

雪菜がポツリと言った言葉に、明久は思わず突っ込みを入れた

すると、それに同調するように

「確かにのう」

「……運動神経も凄まじい」

「なんていうか、言動も男の子っぽいし」

と一同が口々に言った

これが、彼等と優麻の出会いで、騒動の始まりだった

異変

優麻と会った後、一同は解散

明久は島を案内することにした

優麻にとってはやはり珍しいからか、かなり興味深い様子だった

その後明久は、優麻を伴って帰宅

そして、手料理を振る舞った

明久の料理を食べて、優麻は

『凄い負けた気分だね……』

と告げた

その後優麻は、凧沙と一緒に寝ることが決まり凧沙の部屋に入った

それを見送った明久は、風呂に入ろうと脱衣場で服を脱いだ

そして、浴室のドアを開けた時に違和感を感じた

「今のは……」

と明久は僅かに視線を上に向けた

その直後

「え、お兄さん……う？」

と知り合いの声が聞こえた

「えっ!？」

その声に驚いた明久は、その声のした方に顔を向けた

そこには、入浴中の夏音の姿があつた

「ごめんなさい!」

反射的に謝罪しながら明久は、脱衣場に脱出

ドアを閉めた

そして、激しく鳴る心臓の音を聞きながら

「な、何事……う？」

と呟くことしか出来なかつた

それから数十分後、明久は雪菜の部屋にて正座していた

その前では、明久の監視者

姫終雪菜が、腕組みしていた

そして雪菜は

「自ら出頭するとは、いい心がけです。先輩」

と明久に言った

すると明久は、右手を上げて

「えー……一応弁明しますと、僕は間違いなく自分の部屋のお風呂に入ろうとしたんです。そうしたら何故か、こちらの部屋のお風呂に入ってしまったという事態でして……」

と告げた

そして、泊まりに来ていたららしい夏音とアスタルテの方に向いて

「乱入してしまい、すいませんでした」

と深々と頭を下げた

すると夏音は

「いえ、こちらこそ……お見苦しい物をお見せしました」

と慌てた様子で、そう言った

すると、雪菜が

「まあ、確かに今回は先輩に非は無いですね……それに、原因不明ですが、変なことが起きているみたいですから」

と言った

「変なこと?」

「はい……魔力を持つ者がドアや敷居を跨ぐということをする、何処かに飛ばされる

ようです」

明久が首を傾げると、雪菜がそう言った

そして、雪菜は説明を始めた

どうやら今、島にラ・フォリアで護衛として沙矢華が来ているらしい

しかし空港に入ったと思ったら、何故か明久や沙矢華達が一緒に戦い壊された増設島に出たらしい

そこから分かるのが、どうやら空間魔術で道の連続性が変えられているということだった

「なるほど……それで、僕の部屋の脱衣場が雪菜ちゃんの部屋のお風呂に繋がってたってことか」

雪菜の説明を聞いて、明久は納得した様子で頷いた

そして、アスタルテの方に視線を向けて

「アスタルテちゃん、那月ちゃんに連絡着かない？」

と問い掛けた

しかし、アスタルテは首を振って

「^{リシューブ}命令不受理、南宮教官とは連絡出来ない状況です」

と言った

「何かあったの？」

明久が問い掛けると、アスタルテは

「どうやら、島に所属不明の者達が多数侵入している模様」

と言った

そこから察するに、那月はその所属不明勢力を追い掛けていようだ

「そっか……空間魔術関連なら、那月ちゃんが頼りになるんだけど……連絡着かないなら仕方ないか……今は、自分で注意するしかないか」

明久はそう言つて、立ち上がった

すると、雪菜も頷いて

「その通りですね。特に、先輩は気を付けてください。この島で、特に強い魔力の持ち主ですから」

と明久を見送った

そして明久は、自分の部屋に戻って寝ようとした

すると、ノックされて

『明久、居るかい？』

と優麻の声が聞こえた

「居るよ、入っていいよ」

と明久は入室するように促した

すると、ドアが開いて優麻が入ってきた

どうやら風沙が貸したのか、明久のジャージを着ている

「この島は、面白いね……明久とも会えたし」

優麻はそう言いながら、明久の隣に腰かけた

すると、明久は

「まあ、退屈はしないかな……何かしら起きるし」

頬を掻きながらそう言った

本当に、短い間に様々なことが起きた

そのことを振り返っていると、優麻が

「そうみたいだね……」

と言って、明久の肩に手を置いた

「ん？ どうしたの？」

と明久が顔を向けた直後

「ごめんね、明久」

と優麻の謝る声が聞こえて、明久の意識はそこで途切れた

騒動

「んあ……朝か……」

と起きた明久は、違和感を感じながらもベッドからおりた

そして、ヨタヨタと洗面所まで行つて鏡を見た

そして、違和感の原因に気付いて

「な、なんでさああああああああ!?!」

と声を上げた

そして直ぐ様明久は、隣の雪菜の部屋に向かった

「雪菜ちゃん! 居る!?!」

とノックもそこそこに入ると、明久の眼前には巨大なカボチャの頭が見えた

「も、もしかして……アスタルテちゃん?」

「肯定……これは気に入りました」

明久が驚いた表情で問い掛けると、アスタルテはカボチャに彫られた目に付けられたLEDをピカピカと光らせた

どうやら、フェスタで着ていく衣裳らしい

すると、居間に続いているドアが開いて

「アスタルテさん、誰か来たんですか？」

と雪菜が現れた

すると雪菜は、明久を見て

「優麻さん。魔女ですか？ よく似合ってますよ」

と誉めた

そう

今明久の体は、優麻になっていたのだ

「違うよ、雪菜ちゃん！ 僕は、明久だ！」

「……………はい？」

明久の言葉を聞いて、雪菜は首を傾げた

そして、数十分後

「……………まさか、優麻さんが魔女だったなんて」

と雪菜は額に手を当てていた

あの後、色々と確認をして現状を把握したのだ

「しかし、魂を入れ替えたという訳では無さそうですね……………それだったら、優麻さんの体が先輩の魂に耐えられないはずですから……………」

と雪菜が悩んでいると、アスタルテが

「提案……恐らく、空間置換した可能性あり」

と事務的に言った

「それって、那月ちゃんみたいに？」

「肯定」

明久の問い掛けに、アスタルテは頷いた

そして明久は

「で夏音ちゃん……何してるのさ？」

と、髪を鋤いていた夏音に問い掛けた

すると、夏音は

「あ、綺麗な髪だったので……鋤いていました」

と梳を見せた

そして雪菜は

「それで先輩……風沙ちゃんも居なかったんですね？」

と明久に問い掛けた

すると、明久も頷き

「うん。確認したけど、居なかった」

と答えた

そこから考えられるのは

「最悪」

「人質になつてるよね……」

今の優麻の見た目は、明久になっている

明久の口調を真似すれば、容易く連れていけるだろう

「さて、行くか」

そう言つて明久は、バットケースを背負つた

それを見て、雪菜が

「先輩、それは？」

と問い掛けた

すると明久は

「ん、まあ……対魔女用兵装だね」

と言つた

それを聞いた雪菜は

「また、どんな刀が……」

と呟いた

そして一行は、アパートから離れた
そこで分かったのは

「やっぱり、優麻の身体能力が高いなあ」

優麻の身体能力の高さだった

優麻の身体能力は、流石に吸血鬼モード程では無かったものの、かなり高かった
しかし、中々見つからない

その第一要因になったのは、空間魔術が原因と思わしき転移だった

アパートの玄関口から出たら、何故かモノレール駅に出た

そういつたことを何回か繰り返し、一行は一度レストランで休憩していた
すると

「先輩、疲れてるのは分かりますが……足を開かないでください……下着が見えますか
ら」

「勘弁して……少しは休ませて」

雪菜の小言に、明久はそう返した

やはり慣れないからか、明久は疲れた様子で座り込んでいた

すると、明久が

「それでアスタルテちゃん……やっぱり、那月ちゃんには連絡着かない？」

とアスタルテに問い掛けた

すると、カボチャ頭を取ったアスタルテが

「肯定……連絡着かず」

と言いながら、携帯を取り出した

それがどうやら、那月から渡された携帯らしい

「西村教官にも、連絡着かず」

「鉄人も？ 相当だなあ」

アスタルテの言葉を聞いて、明久はいよいよと頭を抱えた

その頃、ある埠頭では

「どうだ、康太？」

「……怪我人は、全員搬送した」

基樹の問い掛けに、影の中から出てきた康太がそう答えた

そこはつい先日、あるテロ集団との戦闘で警備隊に重傷者が多数出た現場だった

康太は残りが居ないか、確認していたのだ

「……それで、相手は図書館か？」

「ああ、双子が来たらしい……」

康太の問い掛けに、基樹が苦々しい表情でそう答えた

図書館というのは、魔導書の使い手達

魔女や魔法使いにより構成された、テロリスト集団だ

そして双子というのは、その中でも名の知れた危険人物達だった

確認されているのは、今から約十年程前に広大な森が一晩で消滅した

という事件があつた

その時にも那月が当たつたが、相手に相当な手練れが居たらしくその魔法使いは捕まえたが、双子には逃げられてしまったのだ

「さてと……問題は……何が目的なのか、だ」

「……もしや、噂の監獄島やらではないか？」

基樹の言葉を聞いて、康太がそう言った

監獄島というのは、絃神島に流れている噂である

夜な夜な、その監獄島が現れては凶悪犯を収容し、海の底に消えていく

という怪談めいた噂である

「わからんが……嫌な予感がする……」

と言つた基樹が見ていたのは、キーストーンゲートだった

捕捉

「だあ……優麻は何処に居るのさ!？」

と言ったのは、街中を走り回っていた明久だった

探し始めて、早数時間

未だに影すら見ていなかった

すると、雪菜が

「魔力で探そうにも、今日は島全体で魔力が……」

と苦い表情で言った

その時だった

突如として、爆発音が聞こえた

「なんだ!？」

と明久達が振り向くと、ある場所から煙が上がっていた

すると、雪菜が懐から札を取り出して飛ばした

そして、少しすると

「キーストーンゲートで、アイランドガードと何者かが交戦しています!」

と明久に告げた

「誰かは分からない？」

「すいません。不用意に近付いたら、交戦に巻き込まれる可能性が高すぎて……しかし、魔法使いなのは確実です」

明久からの問い掛けに、雪菜はそう言った

すると、明久は

「行きたいけど、空間転移がなあ……」

と呟いた

今居る場所にも、空間転移で何回も飛ばされた挙げ句、ようやくである

下手に動いたら、何処に飛ばされたか分からない

そして、明久が唸っていた時だった

明久の携帯が、いきなり鳴った

「お、おう？ 誰だ？」

そう言つて明久は、ポケットから携帯を取り出した

「あ、浅葱からだ……ぶっ!？」

相手は、今日は朝からキーストーンゲートのサーバルームに閉じ籠もりきりの浅葱からだった

閉じ籠もりきりの理由は、明久達も巻き込まれている空間転移だった

それにより、渋滞だけでなく様々な苦情が寄せられていた

それに対応するために、浅葱は空間転移のパターンからルート検索用の即席アプリを開発したのである

そして雪菜は、明久の携帯の画面を見て

「先輩……?」

と白い目で明久を見た

すると明久は

「待って、雪菜ちゃん。まったく覚えはありません」

と言うしかなかった

雪菜の言葉の理由は、明久の携帯の画面

それに、寝ている浅葱の写真が表示されていたからだ

そうなっている理由は、浅葱の仕事の相手

モグワイだった

モグワイが明久の携帯にハッキングし、明久の携帯の待受画面を仕事疲れで寝た浅葱の寝顔にしたのである

それが予想外だったので、明久は吹き出したのだ

すると明久は

「ん、このアプリは……」

と新たなアプリが有ることに気づいた

それを起動すると、何故かキーストーンゲートまでの行き方が表示された

「これは……」

「迷ってる暇はないね……行こう！」

明久はそう言って、そのアプリに従って動き始めた

その先に、優麻が居ると信じて

「えっと、次を右に！」

明久と雪菜は、アプリの案内に従って時にトイレのドアを潜り、高架橋の下を通った

そうして、数分後

「着いた！」

明久と雪菜は、キーストーンゲートの屋上に着いた

そしてそこには、明久の姿の優麻が居た

「優麻!!」

「明久……」

こうして、騒動は加速していく

これからどうなるのか
明久には分からなかった

メイヤー姉妹

「やあ、明久……来たんだね」

「優麻……まさか、魔女だったなんてね……」

優麻にそう言うと、明久は優麻の背後に二人の女性が居ることに気づいた

その姉妹を見て、雪菜が

「まさか、メイヤー姉妹!？」

と驚いた様子で、目を見開いた

メイヤー姉妹

姉妹とは言っても、実際の姉妹ではない

黒いドレスを着ている、エマ・メイヤーと赤いドレスを着たオクタヴィア・メイヤー

図書館

通称、LCO所属の魔女だ

その昔、マジメだったオクタヴィアを魔導書の精神汚染で操り義理の姉妹としたので

ある

そしてメイヤー姉妹で有名なのは、アッシュダウンの惨劇と呼ばれる事件である

このアツシユダウンの惨劇というのは、今から数年前に北欧のある広大な森が一夜にして全て消滅

そして、近くの街が消え去ったのである

この事件により、森林保護区域の森が荒野に変わり、更に約一万人が無惨な死体として見つかった

それにより、このメイヤー姉妹は第一級魔導犯罪者として国際指名手配されている
そして、そんな二人が所属しているのが魔法使い

もしくは、魔女達が居るテロ集団のLCO

図書館である

図書館の構成員たる魔法使い、もしくは魔女達は数多くの魔導書を用いて自分達の目的

究極の魔法に至ろうとしているのだ

その究極の魔法というのがなんなのかは、未だに不明

しかし、そのLCO所属の魔女や魔法使い達によるテロはどれもこれも規模が大きいのである

アツシユダウンの惨劇が、その例だろう

「あらあら、オクタヴィア。あそこに、いい生け贄が居るわ」

「そうですわね、エマお姉様。あの娘には、私達の美のために死んでもらいますよ」

二人がそう言った直後、二人の背後から夥しい数の触手が雪菜に殺到した

しかし、それは

「雪霞狼！」

「疾！！」

雪菜の雪霞狼と明久が抜刀した小太刀

鉤切長光によつて切り裂かれた

すると、姉妹は

「獅子王機関の七式突撃降魔機槍……は、まだ分かるけれど」

「あの刀は……」

と明久の持っていた、鉤切長光を見た

鉤切長光は、魔殺しの刀

対魔法使い・魔女には最適な刀である

明久はそれを右手に持ち、新たに左手に刀身が黒い刀を抜いた

それは、まるで鴉の濡れ羽のように真っ黒だった

長さは、平均的な打刀

その刀を見て雪菜は、頬をひくつかせて

「先輩……その刀は、まさか」

と明久に問い掛けた

すると明久は

「銘は、こがらすまるあまくに小鴉丸天国」

と端的に告げた

小鴉丸天国

これは遙か昔、八駝鴉に授けられた小鴉丸

その対の刀と言われる一振りだ

知られている小鴉丸は、正式銘を小鴉丸風牙

もしくは、小鴉丸天津と呼ばれる

小鴉丸天津は風を操ることで知られ、勝利を呼ぶ風とされる

それに対して、小鴉丸天国は

「八駝の黒羽の風切り羽……森羅に化生す万象を斬れ！」

と明久が呪文を唱えた

その直後、その刀身を漆黒の炎が覆った

小鴉丸天国の炎は、蓮獄の業火

一度燃え移れば、対象を焼き尽くすまで収まらない

その炎を見て、メイヤー姉妹は触手を少し引かせた
その時だった

「よし、間に合ったわね！」

と新たな声が聞こえた

その方向に視線を向けると、沙矢華とラ・フォリア

そして、賢生が居た

「ご苦労でした、賢生」

「いえ……姫様のお役に立てて、なによりです」

ラ・フォリアの言葉に、賢生はそう返しながら恭しく頭を下げた

賢生は、元宮廷魔導師だ

恐らく、空間転移を使ったのだろう

すると沙矢華が

「つて、吉井明久!? なんて、あんたが!？」

と優麻の入っている明久を見て、驚いていた

すると雪菜が

「沙矢華さん……その、こつちが……吉井先輩です」

と優麻の体

明久を指差した

すると明久が

「やっほ、煌坂さん」

と手を振った

それを見て、沙矢華は

「なんじやそりやあああああああ!?」

と叫んだのだった

監獄結界

「つまり、今あの中に居るのは優麻って奴なわけね……」

「イエス」

沙矢華からの問い掛けに答えながら明久は、メイヤー姉妹が放ってきた魔法を長光で切り捨てた

そして、優麻に視線を向けて

「優麻、なんで僕の体を……」

と問い掛けた

すると優麻は

「僕のお母さまを助けるためさ」

と答えた

「優麻の……お母さん？」

「そうさ……この島にある監獄結界に收容されているのさ……そこからお母さまを助けるために、明久の力が必要だったのさ」

明久が首を傾げると、優麻がそう言った

すると、雪菜が

「監獄結界が、この島にあるんですか!？」

と驚いていた

「監獄結界って、なに？」

「その名前の通り、犯罪者を収容するための結界よ。ただし、そこに収容されているのは、普通の監獄じゃあ収容出来ない超極悪犯罪者ばかりね」

明久の疑問に、沙矢華がそう言った

それを聞いた明久は、優麻に

「つまり、優麻のお母さんって、極悪犯罪者ってこと？」

と問い掛けた

すると優麻は、頷いて

「そうなるかな……でも、僕にとっては大事な母親でね……会ったこともないけどね……」

と言った

会ったこともないというのは、今の時代、なんら珍しいことではない

しかし、監獄結界に収容されるほどの母親とは

「優麻のお母さんって……誰？」

明久がそう問い掛けると、優麻は少し間を置いてから「僕のお母さまの名前は……仙都木阿夜とこよぎあや」

と言った

その名前を聞いて、沙矢華と雪菜の二人が

「仙都木阿夜って!」

「ノ、書記ノタリヤの魔女!」

と驚愕していた

書記の魔女

それは、メイヤー姉妹の比ではない魔導犯罪者である

その名前を聞いた二人は、監獄結界に収容されたのを納得した

それほどの重魔導犯罪者が、母親

「そしてそれも……今日、叶う」

優麻がそう言った直後、優麻の背後に顔の無い青い騎士が姿を現した

その騎士の姿が消えて、入れ替わるように獅子の黄金が姿を現した

「獅子の黄金!」

「あれは恐らく、過去の獅子の黄金です!」

明久が驚いていると、雪菜がそう言った

今居るキーストーンゲートの海底近くで、明久は獅子の黄金を呼び出していた
恐らく、その残子だろう

そして獅子の黄金から放たれた雷撃が、ある場所に落ちた

その数秒後、それが姿を見せた

今まで何故気付かなかったのかと言いたいほどに巨大な、禍々しい監獄が

「あれが……」

「監獄結界……ですか」

その監獄を見て、賢生とラ・フォリアがそう呟いた

そして優麻が

「あそこに、お母さまが……」

と言つて、姿を消した

「優麻!!」

「先輩、恐らく優麻さんは、監獄結界に!」

雪菜の言葉を聞いて、明久は視線を監獄結界に向けて

「今から行こうにも、空間転移が怖い」

と呟いた

恐らく、浅葱が作ったアプリも非対応だろう

すると、ラ・フォリアが

「賢生、空間転移をあそこに繋ぐことは出来ますか？」

と賢生に問い掛けた

すると賢生は、首を振って

「流石に、ピンポイントは無理です。しかし、極めて近い場所に飛ばすことならば」

と答えた

それを聞いて、ラ・フォリアは

「明久、雪菜。ここは、私と沙矢華が引き受けます。貴方達は、監獄結界へ」

と言って、呪式銃を構えた

それを聞いた明久は、僅かに考えてから

「分かった、ありがとう！」

と言って賢生の方に向かった

そして、沙矢華の近くを通り過ぎようとした時

「あ、そうだ。あの姉妹、僕の小烏丸の炎を見て、あの触手を僅かに下がらせた。もしかしたら、何かのヒントになるかも」

と沙矢華に言った

それを聞いた沙矢華は、剣を構えながら

「分かったわ、ありがとう」

と言った

そして明久と雪菜は、賢生が発動した空間転移で監獄結界の近くに飛んだのだった
そこで明久は、衝撃的な真実を知ることになる

監獄結界の真実

転移した明久と雪菜が見たのは、まるで城を彷彿させる建物だった

しかし、窓には鉄格子が嵌められていて、壁の上には有刺鉄線が張り巡らされている
それは正しく、監獄だった

「ここが、監獄結界……」

「先輩、早く中へ」

雪菜に促され明久は、監獄結界の中に入った

中に看守は居らず、人の気配は感じない

しかし明久と雪菜は、とてつもない量の魔力が満ちているのを感じた

「なるほどね……確かに、普通の監獄じゃあ無理そうだね」

「はい……人数はわかりませんが、凄い魔力を感じます」

二人はそう会話しながら、奥へと走った

そして、見えたのは優麻の背中と

「な……そんな……」

「なんで……」

椅子に座って眠っている、少し幼い印象の那月だった

「那月ちゃん!」

「南宮先生!」

明久と雪菜が驚くと、優麻はゆっくりと振り向いて

「彼女が、監獄結界の主さ」

と二人に語りかけた

そして続けて

「監獄結界というのはね、明久……彼女の夢の世界なのさ……その人の夢の中では、あらゆる凶悪犯だろうが無力に捕まる」

と言った

それを聞いて、明久は

「待って、そんなのおかしい! だったら、僕達に教えていた那月ちゃんは偽物だとしても言うの!」

と優麻に問い掛けた

すると優麻は

「ある意味では、偽物と言えるね……本体はここで眠り続け、外には空間魔法を使って幻影を編み出して行動させていたんだ……外を知ると、島を見守るためにね」

と言った

それを聞いた明久は

「島を……見守るため？」

と首を傾げた

明久の言葉を聞いて、優麻は頷き

「そう……それが、彼女と人工島管理公社の契約だった……真正の魔女ならば、不老長寿だからね……ほぼ悠久と言える時を生きる……だから、守護者とするにはちようどいいのさ……」

と説明した

「そして、外に出ている体のほうが、彼女にとっては夢なのさ……成長することのない自分が、成長する子供達を見守るのがね」

確かに、そうなのかもしれない

過去には那月も、学生だったはずである

その時は、他にやりたいことがあつたはずである

しかし、人工島管理公社との契約があり出来ない

だから那月は、教師となって生徒を教育することを選んだ

生徒達には、夢を追い求めてほしいから

そして那月がなんやかんやと面倒を見るのは、自分と同じような道を進んでほしくないからではないだろうか

そこまで思い、明久は拳を握り締めた

すると、優麻が

「その長い間続いた夢を……終わらせよう」

と言いながら、右手に魔力を集めた

今的那月の体は、眠っている

無防備なのだ

「つつ!!」

その瞬間、明久の姿が掻き消えた

そして、優麻の右手から魔力弾が放たれたがそれは

「疾!」

と明久が振るった長光によって、斬られた

「今の動きは……」

「縮地……優麻も魔女だからね、魔力を有してる……感覚を掴むのに手間取ったけどね

……今は、十全に使えるよ」

明久はそう言いながら、両手に刀を構えた

そして、優麻に

「確かに……優麻はお母さんが大事なのかもしれない……だけど、僕は島と那月ちゃん
が大事なんだ……それに、優麻のお母さんだけでなく、他の凶悪犯も解放されてしまう
……だから、ここから先は第四真祖の戦争だ！」

と宣言した

すると、いつの間にか雪菜が明久の隣に現れて

「いえ、先輩……私達の戦争です！」

と言った

決着

刀を構えた明久は、優麻に向かって走り出した

すると優麻は、羽織っていたマントに隠していた腰から一振りの剣を抜いた

それは、武骨な西洋剣だった

優麻はその剣で、明久が振り下ろした小烏丸を受け止めた

その直後、明久の背後から雪菜が明久の頭上を飛び越えて優麻の上を取った

「はあっ！」

ル・ブル
「青！」

雪菜が雪霞狼を振り下ろした直後、横から突き出された大きな剣がその一撃を防いだ

それをしたのは、顔の無い青い騎士だった

一撃を防がれた雪菜は、その衝撃を利用して距離を取った

すると、明久も後退して

「何あれ」

と雪菜に問い掛けた

すると、雪菜は

「あれは、魔女が契約して得る守護者です……しかも、騎士型とは……純粋な魔女のようですね」

と言った

この守護者というのは、純粋な魔女が騎士型

適性の低い魔女が自然界に生息する動植物をベースにした物の場合が多い

それにより、純粋タイプと低適性と見分けることも可能である

「久しぶりに、ル・ブル青を出したよ……獅子王機関の劍巫……中々の腕前のようにだね」

優麻は雪菜を見ながら、感心したようにそう言った

しかし、次の瞬間

「雪菜ちゃんだけじゃ、ないよ」

気付けば、明久が優麻の背後を取っていた

しかも、左手に持っていた鉋切を突きだした

それを優麻は、紙一重で回避した

だが、羽織っていたマントは切り裂かれた

「本当に厄介だね……その縮地は」

「だからこそ、劍術の移動の奥義なんだよね……その気になれば、車並に走れるから」

優麻が悔しそうに言うと、明久はそう言った

古流剣術移動の極み

それが、縮地である

過去の文献によれば、極めれば全速で走っている馬車に余裕で追い付いたとされている

その速さは、普通の人間が行った場合だ

もし、魔力を有する魔女や吸血鬼が行えばどうなるか

それは、推して知るべし

しかも、初速から最高速を出せる

それにより、一瞬にして消えたように見えたのだ

これにより、優麻は明久と雪菜に挟まれた形になる

だが、優麻は落ち着いた表情で

「忘れてないかな、明久……僕には、空間魔術があるんだよ」

と言った

その直後、優麻の姿がユラリと消えた

そして現れたのは

「貰った」

眠っている那月の頭上

しかし

「忘れてはいないさ」

と那月の近くに、明久が現れた

そして、持っていた小烏丸を投擲

それを優麻は、持っていた西洋剣で上に弾いた

しかし、次の瞬間には明久が目前に居て

「後、僕が使うのは剣術だけじゃないよ」

と明久は言つて、左手を優麻の腹部に当てた

その直後、優麻の体を凄まじい衝撃が襲つた

「ガハッ!？」

その一撃は予想外だったらしく、優麻は完全にバランスを崩して墜落した

そして那月の隣に着地した明久に

「い、今のは……!？」

と顔を向けた

すると、明久は

「徹し勁と言われる技だね。鉄人から教わった」

と返した

それは、衝撃を相手の体内に直接叩き込む技である

雪菜の使う響ゆんぎと同種の技だ

そして、幾ら吸血鬼の体とは言えども衝撃による内臓への傷ではないダメージは治らない

その隙を突いて

「これで終わりです、優麻さん」

と言つて、雪菜が雪霞狼を軽く刺した

その直後、バチリと音がして、明久と優麻の体が入れ替わった

すると、明久は膝を突いた

それを見た雪菜が

「先輩!？」

と心配そうにした

すると、明久は

「やっぱり、雪霞狼で刺されるのは、キツいか……」

と呟いた

それは、事前に話し合っていた策だった

先程までの明久と優麻は、空間魔術を用いて体が入れ替わっていた状態だった

それを解除するには、優麻を殺すか魔術を解除するしかない
しかし、優麻殺すのは無い

そして、魔術の解除

これには、雪霞狼を使えば簡単だと分かっている

しかし、雪霞狼を刺した後はどうなるかわからなかった

だから、優麻には刺さなかったのだ

不死の明久だからこそ、取れた選択肢だった

しかし、やはり明久とは言ってもかなりのダメージのようだ

そこはやはり、対第四真祖用に作られた兵器なだけはある

そして明久は、倒れている優麻に近づいて

「それで、優麻……どうする？　まだやる？」

と問い掛けた

すると、優麻は

「そうしたいところだけど……体が動かない……無理だね」

と言った

どうやら、長時間明久の体を使っていたのが堪えたらしい

こうして、優麻の企みは失敗に終わったのだった

観測者達の宴編

終わりにして始まり

「立てる、優麻？」

「なんとかね……」

明久の問い掛けに優麻はそう言いながら、ゆつくりと立ち上がった

その表情は、何処か憑き物が落ちたようにすら見える

「さて、この後はどうする？」

明久がそう問い掛けると、優麻は

「そうだね……フェスタを回りたいかな」

と言つて、明久の方に振り向いた

その時

「お前が、阿夜の娘か」

と声が聞こえた

明久が振り向いてみればそこには、先程まで椅子に座って眠っていた筈の那月が居た

「那月ちゃん!？」

「貴女が……空隙の魔女……」

明久がちやん付けで呼んだのが不服らしく、那月はしかめっ面だった
しかし、優麻に視線を向けて

「確かに、阿夜によく似ているな……」

と言った

そして、続けて

「それで、もう戦うつもりはないんだな？」

と優麻に問い掛けた

すると優麻は

「ああ……もう、僕にはどうしようもない」

と返答した

それを聞いた那月が頷いた

その時、優麻の背後に優麻の守護者

青が姿を現した

「青？　僕は呼んでないんだが……」

と優麻が不思議そうにした

その直後、青は腰の剣を抜刀

優麻に突き出した

「優麻!？」

余りにも予想外の事態に、明久は驚愕した

すると優麻は、青の顔を見て

「お……お母……様……そこまでして」

と言つて、口から血を吐き出した

すると、青が

『待ッテイタゾ……那月……貴様方、隙ヲ見セルタイミングヲナア』

と喋った

それを聞いて明久は、視線を那月に向けた

そして見たのは、青の剣によつて胴体を貫かれた那月だった

「阿夜……貴様……そこまで……して……この……外道が……」

そこまで言った時、那月を貫いていた剣が消失

那月が倒れそうになった

「那月ちゃん!」

それを、明久がギリギリで抱き止めた

しかしどう見ても、それは致命傷の域だった

その時、監獄結界が揺れ始めた

もしかしたら、那月が重傷を負ったからかもしれない

「これは、嫌な予感がする！ 雪菜ちゃん、那月ちゃんをお願い！」

明久はそう言うと、倒れてる優麻に駆け寄った

その直後、一際強い揺れが起きて、上から大きな瓦礫が落ちてきた

「やばっ!？」

「先輩!!」

と二人が声を上げた直後、視界が歪んだ

次の瞬間、明久達は監獄結界の外に居た

「これは……空間転移……優麻!？」

と明久が視線を向けると、優麻は

「違うよ……明久……僕だけじゃない……空隙の魔女が……力を貸してくれたんだ

……」

と言った

どうやら、那月が力を貸したらしい

しかし、その那月の姿は無くなっていた

「那月ちゃん……どこに……」

と周囲を見回していた

その時

「那月には逃げられたか……」

と少したどたどしい言葉遣いの声が聞こえた

それを聞いた明久は、思わず

「誰だ!？」

と声を上げながら、視線を声のした方に向けた

その先に居たのは、着物を着た少女と見間違えそうな程に若い女性だった
そして、その女性の見た目は優麻に瓜二つだった

その女性を見て、優麻が

「お……母様……」

と呟いた

まだ、この事件は終わりではなかったのだ

脱獄者達

「あれが……書記の魔女……」

雪菜と明久が視線を向けた先に居たのは、少女にも見える着物姿の一人の女性だった
それが、優麻の母親

仙都木阿夜だった

「ふむ……ようやく、外に出れた」

阿夜はそう言うと、まるで物を見るように倒れている優麻に視線を向けた
すると優麻は、ゆっくりと阿夜を見上げて

「お……お母、様……」

と呼んだ

しかし、阿夜は

「貴様の役割も終わりだ……」

と言って、右手を上げた

その直後、優麻の後ろに青が現れて

「あ……が……やめて！ お母様!!」

と優麻が、まるで苦痛を堪えるように叫んだ

しかし阿夜は、何も答えない

そして

「返してもらうぞ」

と言った

その直後、まるで布を引きちぎるような音が響き渡った

「アアアアアアアアアアアア!?!」

そして優麻は、絶叫を上げて倒れた

すると、優麻の騎士

青の装甲の色が黒に変わり、阿夜の背後に現れた

それを見て、雪菜が

「なんてことを?! 魔女にとって契約者は、魂を別けた自身の半身! それを、無理矢理

奪うだなんて!?!」

と叫んで、阿夜を睨んだ

すると、阿夜は

「もともと其奴は、我が脱獄するための人形……その役割が終わったのだから、どう扱お

うが、我の勝手だ」

と言った

それは、優麻を娘としてではなく、道具としてしか見てない証拠だった

その時

「あんた……いい加減にしろよ……」

と明久が、地を這うような怒りの声を漏らした

そして、明久の全身から膨大な魔力が溢れだした

「先輩……」

「その魔力……そうか、貴様が第四真祖か」

雪菜は驚き、阿夜はようやくやく気付いたという感じで言った

しかし明久は、それを無視して

「優麻は、あんたを助けようと一生懸命頑張ったんだぞ……それを労いもせず、まるで

道具みたいに……!!」

と阿夜を睨んだ

すると、阿夜は

「其奴は、我の娘ではない……確かに遺伝子上は娘かもしれないが。其奴は、我を脱獄させるために、単一性行為により造り出されたにすぎん人形だ」

と言った

つまり優麻は、クローンなのだ

だから、優麻と阿夜は瓜二つだったのだ

「だからって、あんたは……つつ!？」

怒りから明久は、魔力を高めた

しかしその時、明久が放出していた魔力が霧散

明久は、片膝を突いた

「先輩!？」

それに驚き、雪菜は明久に駆け寄った

それを明久は片手で制して、立ち上がった

それを見て、阿夜は

「ふむ……我が計画の前に、貴様を葬るとしようか」

と言つて、片手を上げた

そこに

「ふむ……中々の光景ですね」

と新たな声が聞こえた

そして現れたのは、中国系の民俗衣装を着て、眼鏡を掛けた一人の青年だった

いや、一人だけではない

更に、数人の男女が姿を見せた
それを見て、阿夜が

「貴様らだけか……他はどうした？」

と問い掛けた

すると、ドレッドヘアの男が

「どうしたもこうしたもねえ!! こいつだ！」

と言つて、片手を掲げた

その手首には、ゴツイ金属製の手錠が嵌められていた

そしてその男は、片手を近くに居た紳士服の男に振るつた

すると、その男の左肩から右腰辺りから激しく出血した

「シユトラ・D! 貴様あああ!」

その紳士服の男は、憎しみを込めた声でそのドレッドヘアの男

シユトラ・Dを睨んだ

その直後、その紳士服の男の左手手首の手錠から一気に鎖

束縛の鎖が伸びて、その男の体を縛つた

そして男は、虚空に姿を消した

それを見て、阿夜は

「なるほど……監獄結界のシステム自体は、まだ生きてるのか」

と言った

それを聞いて、雪菜と明久の二人は気付いた

その男女は、監獄結界に収容されていた普通の監獄では収容出来ない超凶悪犯達なのだ
だと

「ええ……それにより、魔力や体力が弱くなれば引き戻されます」

「そもそも、力が弱いと出てくることすら出来ないわ」

と言ったのは、明久とそんなに然年齢が変わらないだろう二人の少女達だった

それを聞いて、阿夜は

「なるほど……他の者達は、出ることすら叶わなかったか」

と言った

すると、先に姿を見せた青年が

「つまり、完全に自由になるためには、南宮那月を葬るしかありません」

と言った

すると、阿夜が

「今の那月ならば、簡単に殺せるはずだ」

と言った

それを聞いた、女性が

「どういうことかしら？」

と問い掛けた

すると、阿夜は

「今の那月は、この魔導書……個人パーソナル・ヒステリー歴史の書により、魔力だけでなく、経験した時間を失っている」

と語った

すると、アジア系の民俗衣装を纏った老人が

「なるほど……今ならば、容易く殺せるか」

と呟いた

すると、明久が

「させないよ……あんたらは、全員……もう一度監獄結界に放り込んでやる！」

と言った

それを聞いて、脱獄者達の視線が明久に集まった

脱出

明久の言葉を聞いて、ドレッドヘアの男

シュトラ・Dが

「はっ！ 第四真祖風情が、言ってくれるじゃねえか!!」

と言つて、跳んだ

それを見た明久は、迎撃しようとしたらしく、足下に転がっていた刀

鉋切と火車を蹴りあげて、構えた

しかし、そんな明久より早く

「はあっ！」

と雪菜が動いていた

雪菜はシュトラ・Dの手の振るいに合わせるように、雪霞狼を突き出した

もし、シュトラ・Dの攻撃が魔力を用いた物だったら、それで無効化されていただろ

う

だが、シュトラ・Dの攻撃は無効化されず、雪菜の雪霞狼とぶつかり、周囲に暴風を

撒き散らした

その後、雪菜とシュトラ・Dの攻撃は拮抗

二人は、衝撃で離れた

すると、着地したシュトラ・Dが

「俺の轟嵐碎刃が防がれただ？　そうか……そいつが、獅子王機関の秘奥兵器ってやつか！」

と雪菜を睨んだ

そして、雪菜は

「先輩、引いてください。相手は、普通の魔族じゃありません」

と明久に警告した

シュトラ・Dが普通の魔族でないことは、明久にも分かっていた

だが、明久の背後には重傷で身動きが出来ない優麻が居る

その優麻を、置いていくことは出来ない

明久がそう思っていた

その時

「二人供、伏せて！」

と声が聞こえて、明久と雪菜はその場で伏せた

その直後、眩い閃光がその場を支配した

やはり、その閃光は予想外だったのだろう

脱獄囚達は視界を奪われていた

そして、視界が元に戻った時には、明久と雪菜

そして、優麻の姿は無くなっていた

そこから離れた場所では

「こんな時に、何処を掴んでるか!？」

「落ちそうなんだから、仕方ないでしょう!？」

三人を助けた人物

沙矢華の腰に、明久が必死な表情で抱き付いていた

そして、明久

「というか、このバイクらしき物はどうしたのさ!？」

と沙矢華に問い掛けた

すると、沙矢華は

「そこら辺の道端に、転がってたのよ!」

と返した

それを聞いた明久は

「こんなのが、転がってたまるか!？」

と突っ込みを入れた

すると、雪菜が

「これは、ケッテン・クラートですね。第二次世界大戦時に、東ドイツで開発・配備された半履帯式キヤタビラの乗り物です」

と説明した

それを聞いた明久が、思わず

「ゆ、雪菜ちゃん？」

と問い掛けるように、名前を呼んだ

すると雪菜は

「の、レプリカでしょうね。これも、モデルガンみたいですし。恐らく、パレード用に作られたのかと」

と雪菜は、自分が掴んでる機銃の懸架台を見ながら、付け加えるように言った
確かに、パレード用ならば納得がいく

今は、波廊院フェスタ真つ最中

コスプレして歩き回るのも、多々居る

恐らく、何処かの企業が大学のサークルかが作ったのだろう

「雪菜、追っ手は？」

「ありません」

沙矢華の問い掛けに、雪菜は周囲を見回してから答えた

それを聞いた沙矢華は、ケツテン・クラートの速度を落とした

すると、態勢を立て直した明久が

「煌坂さん。優麻を治せる?」

と沙矢華に問い掛けた

すると沙矢華は

「そいつ、あんたの体に乗っ取ってた奴でしょう? 何があったのよ」

と二人に問い掛けた

その問い掛けに二人は、分かりやすく簡潔に、沙矢華に教えた

すると、沙矢華は

「つまりその母親は、自分が脱獄するためだけに、そいつを使い捨てにしたわけ!? なん

て奴よ!!」

と憤った

彼女は過去に、家族関係で事件があつた

だから、許せなかつたようだ

「助けてあげたいけど、私には無理ね……」

「そもそも魔女関連は、未知の部分が多分にあります。現代の科学技術でも、解明されていません」

沙矢華が残念そうに言うと、雪菜が補足説明した

「どうやら、沙矢華にはお手上げらしい」

そして、沙矢華は

「相当の技量を持つ魔女か魔法使い。もしくは、魔導医療施設のある施設なら、治療出来るかもしれないけど……」

「しかし、南宮先生は行方不明です……どうすれば……」

沙矢華の言葉を聞いて、雪菜はそう言った

すると明久が

「魔導医療施設か……」

と言いながら、波面を浮かべた

そして

「煌坂さん。次の角を右に」

と言った

それを聞いた沙矢華は、言われた通りに曲がつてから

「なにか、心当たりがあるの？」

と明久に問い掛けた

すると、明久は

「ああ、うん……僕と凧沙の母さんの勤め先……MARの医療セクション研究所」と教えた

すると沙矢華と雪菜は

「ええ!?!」

と揃って、声を上げたのだった

母親

「(ハハ)と……」

「先輩のお母様が……」

と沙矢華と雪菜が見ていたのは、一軒の建物

MARの来賓用宿舎だった

そこに、明久と凧沙の母親が居る

しかし、なぜ来賓用宿舎に居るのか

その理由は、その母親

吉井深森よしいみもりが研究バカだったからだ

生活能力が欠如している代わりに、研究に対する意欲が並外れていたのだ

最初はちゃんと、アパートから出勤していたのだが、気付けば来賓用宿舎に住み込み

始めた

最初はMAR側も、深森にきちんと帰宅するように促した

しかし深森には、生活能力の欠如から来る自己管理の無さがあった

しかもそれに重なって、研究バカ

倒れる寸前まで研究し、同僚達に運ばれるという事態が多発

そして運ばれたのが、件の来賓用宿舎だ

そうしている内に、来賓用宿舎には深森の私物（主に服や化粧品）が散乱

それにより、MARは諦めてその来賓用宿舎を深森用の宿舎として貸し与えたのである

そして明久は、二人を見て

「取り合えず、気をしっかり持ってね」

と言つて、インターホンを鳴らした
すると

『はーい！ ちょっと待っててねー』

と若い女性の声が聞こえた

それを聞いた明久は、僅かに後退した

そして少しすると、ドアが開いて

「バア!?!」

とかぼちや頭が眼前に現れた

『キヤアアアア!?!』

それは流石に予想外だったらしく、雪菜と沙矢華は驚いた

しかし明久は、優麻を背負ったまま器用に、何処からかハリセンを取り出して、叩き
「いきなり何やってんのさ!？」

と突っ込みをした

すると、そのかぼちや頭

深森は、かぼちやの被り物を脱いで

「だつてさ、今日はせっかくのフェスタでしょ？　だつていうのに、今日はお出れないのよ
？　だつたら、目一杯楽しむしかないじゃない……トリック・オア・ダイ！」

と言った

最後は、盛大に間違えている

だから、明久は

「イタズラか死つてなにさ!？　嫌過ぎるから!？」

とまた突っ込みを入れた

しかし深森は、そんな明久を無視

雪菜と沙矢華を見て

「何々、この可愛い娘達!？　付き合ってるの!?　出来てるの!?　私、お祖母ちゃんになつ
ちやうの!？」

と怒濤のように、嬉しそうに言った

すると、明久は

「付き合っていないから！ 出来てないから!! ならないから!!!」

と重箱突っ込みを繰り返した

その突っ込みに疲れて、明久はゼーゼーと荒く呼吸していた

その時になって深森は、明久に背負われている優麻に気付いた

「あら……ユウちゃん？」

と呟いてから、明久を見て

「何があつたの？」

と問い掛けた

その問い掛けに、明久は

「詳しく説明してる暇は無いんだ。優麻を治療してほしい」

と言った

それを聞いた深森は

「ま、いいわ。中に入りなさい」

と言って、受け入れた

そして中に入ったのだが

「あれ、明久君？」

そこには、猫を彷彿させる仮装をした凧沙が居た

「凧沙!? こつちに来てたのか!」

「そうだよ。今朝早くに、いきなり電話があつてね。替えの服や料理を作つてたんだよ」

明久が問い掛けると、凧沙はそう答えた

そして、明久に背負われてる優麻に気付いて

「ユウちゃん!? 何があつたの!」

と近寄つた

その時、沙矢華に気付いて

「貴女は……前に学校の屋上で、明久君に剣を向けてた……」

と呟いた

そして、警戒した表情で沙矢華を睨んで

「また何か、家の明久君に御用でしようか?」

と詰め寄つた

「あ、いや、あの……」

どう答えればいいのか分からず、沙矢華は狼狽えた

それを見て、明久は

「煌坂さん……頼んだ」

と言つて、部屋の奥に向かった

「え!?! ちよつ!?!」

まさか押し付けられるとは思つてなかつたらしく、沙矢華は更に狼狽えた
そして

「後で覚えてなさいよ!?!」

と叫んだ

その間に明久と雪菜は、深森と一緒に優麻をソファーに寝かせた
すると深森は、そんな優麻の腹部に軽く触れて

「出血の割りに、傷口は深くないわね……」

と呟いた

だが、顔をしかめて

「やっぱり、服越しじゃあ、分かりにくいわね」

と言つて、優麻の胸元に手を突っ込み

「はい、これ。預かつててね」

と雪菜に、優麻の下着を投げ渡した

「ちよつ!?!」

やはり下着を投げ渡されると思わず、雪菜は顔を赤くした

しかしその間に、深森は直に優麻の胸を触り

「なるほどね……そういうことか」

と納得していた

すると、その光景を見た雪菜が

「先輩……まさか、この人は」

と明久に視線を向けた

すると、明久は頷きながら

「うん……サイコメトラーの過応適応者だよ」
ハイパーアダプター

と言った

深森は、相手に触れることでその相手の情報を知ることが出来る、所謂超能力者なのだ
ただ、少し変態混じりなので、質が悪い

「しかし、納得しました。やはり、先輩のお母様ですね」

「どういう納得の仕方かな？」

明久が睨むが、雪菜は答えなかつた

すると、深森は

「取り合えず、奥の部屋で治療をしないと……雪菜ちゃんだったかしら？ 手伝ってく

れる?」

と雪菜を見た

すると明久が

「運ぶんだったら、僕が運ぶけど……」

と言った

しかし深森は、そんな明久に近寄り

「ウチの研究室は、男子禁制よ……それに」

と言って、明久の下腹部に肘打ちを叩き込んだ

「痛っ!?!」

「先輩!?!」

明久が痛みで踞ると、深森がそんな明久の耳元で

「あんたも、治療が必要でしょう? 救急箱は、寝室のクローゼットの中よ」

と言って、立ち上がった

そして

「雪菜ちゃん、手伝ってね」

と言ったのだった

診察

「えつと……ああ、あつた」

と明久は、深森に教えられた寢室のクローゼットの中から、救急箱を見つけた

その救急箱を近くの椅子に置いてから明久は、着ていた衣装を脱ぎながら

「怪我してゐるって分かつてるなら、その傷口をど突く？ 普通……」

とブツブツと言った

そして着ていたワイシャツの前を開ければ、深森が肘打ちした下腹部の少し上に、刺創があつた

それは、雪菜が刺した傷口だった

明久はその傷口を、恐る恐ると触って

「いった!?」

と言った

その直後、その寢室のドアが乱暴に開けられて、沙矢華が入ってきた

驚いた明久は、ワイシャツの前を閉じて

「き、煌坂さん!？」

と沙矢華の名前を呼んだ

よく見れば、かなり寡れている

「な、凧沙はどうしたの？」

「ちよつと呪術で、眠ってもらったわ」

明久の問い掛けに、沙矢華はそう答えながら、ベッドに腰掛けた

どうやら、かなり苦労したようだ

「呪術でつて……」

「仕方ないでしょう!? 貴方が第四真祖だつてこと、秘密なんでしょ？」

明久が非難がましい目で見ると、沙矢華はそう言つた

確かに、深森は気付いてる節が有るが、凧沙には秘密にしていた

その理由は、凧沙は魔族恐怖症だからだ

そうなつた理由は、過去に魔族が起こしたテロに巻き込まれたからだ

「まあ、そうだね……ありがとう」

「ふん……吉井明久、ちよつとこつちに来なさい」

明久が感謝すると、沙矢華はそう言いながら、手招きした

それを聞いて明久は、スタスタと沙矢華に近付いた

すると沙矢華は、明久の顔を見て

「傷口、見せなさい。治療出きるかもしれないから」

と言った

「気付いてたの？」

「当たり前でしょう？ 私は舞威姫。呪詛と暗殺を得意としてるのよ？ 呪力の流れに

違和感を感じたわ」

明久が驚いた様子で問い掛けると、沙矢華は自信満々と云った雰囲気ですう云った

それを聞いて明久は、閉じていたワイシャツを開いた

すると、沙矢華は

「うわ……これが……」

顔を赤らめながらそう呟き、ゆっくりと傷口付近を触った

その瞬間

「つつ!?!」

「あ、ゴ、ゴめん!」

明久が痛みで体を強張らせたことに気づき、沙矢華は反射的に謝った

すると沙矢華は、今度は少し離れた場所に手をそつと当てた

そして、少しすると

「なにこれ……回復が、阻害されてる？」

と怪訝そうに、呟いた

それを聞いて、明久が

「それって、雪霞狼で刺されたから？」

と問い掛けた

すると、沙矢華は

「いえ……雪霞狼に、そんな能力は無い筈よ……確かに、真祖殺しの槍だけど……」
と否定した

「そうだよ……ね」

沙矢華の言葉を聞いて、明久は同意した

だがその直後、明久は倒れた

「ちよっ!? 大丈夫!？」

慌てた沙矢華は近寄り、明久の体を揺らした

すると、明久の目がうつすらと開いて

「……お」

と呟いた

「なに、どうしたの!？」

と沙矢華は問い掛けた

すると、グキュルルルという間拔けな音がして

「お腹すいた……」

と明久が言った

「はあっ!?!」

明久の言葉を聞いて、怒った沙矢華は悪くないだろう

刺客

明久が（空腹で）倒れて、十数分後

「空腹で倒れるってなによ!？」

「仕方ないでしょ!？」 優麻が、丸一日何も食べてないなんて思ってたんだからさ
!？」

と口論してる明久の頭頂部には、見事なタンコブが二段重なりで鎮座していた
それは、沙矢華の拳で作られたタンコブだ

そして明久は、冷凍庫から出してレンジで暖めたピザを食べている

その時、何故かナース服を着た雪菜が現れて

「優麻さんの応急処置が終わりました」

と告げた

すると、明久が

「なんで、ナース服？」

と首を傾げた

すると雪菜は、恥ずかしそうにしながら

「仕方ないじゃないですか。私が着ていた服は、戦闘で汚れてしまって、深森さんに渡されたのがこれだったんですから……」

と言った

気付けば、沙矢華が何処かから出したデジカメで、撮影しまくりである
そして明久は、ゆっくりと雪菜を見てから

「うん、よく似合ってるよ」

と言った

それを聞いて、雪菜は顔を赤くしながら、部屋のテレビに視線を向けた
その直後

「あれ、藍羽先輩？」

と言った

「へ、浅葱？」

雪菜の言葉を聞いて、明久もテレビに視線を向けた
すると雪菜が

「はい、先程……あ、ほら！」

とテレビを指差した

確かに、浅葱が映っている

しかも浅葱の隣には、長い黒髪の少女が映っていた

それを見た明久は

「あれ……那月ちゃんに似てない？」

と二人に問い掛けた

すると、沙矢華が

「確かに、似てるわね……」

と呟いた

そこに、雪菜が

「もしや南宮先生は、キーストーンゲートに転移したのではないのでしょうか？」

と言った

その言葉を聞いて、明久と沙矢華の視線が雪菜に向いた

「恐らく南宮先生は、警備隊詰所のあるキーストーンゲートに向かって転移しようとした。しかし途中で子供になってしまい、そこに藍羽先輩に出会い」

「まるで、生まれたての雛みたいに、親だと思ってる……みたいな感じ？」

雪菜の言葉を継いで、明久がそう言った

すると、雪菜は頷き

「恐らくは、本能的に安全だとも思っただけです」

と言った

それを聞いて明久は、納得しつつ

「とりあえず、浅葱にコールだ」

と言いつつ、携帯を取り出した

その頃浅葱は、中央道で行われてるパレードを小さな少女と一緒に見ていた

その少女は、少し前

浅葱がキーストーンゲートから出て、すぐ近くのモノレール駅の売店に行った時、売店のおばちゃんが

『子供とはぐれないようにね』

と言つて、初めて気づいた

勿論だが、浅葱はまだ結婚すらしていない

驚きながらも浅葱は、その小さな少女に

『お母さんは誰？』

と問い掛けた

すると、少女は

『藍羽浅葱！』

と元気に答えた

とりあえず浅葱は、どうしようか考えながらも、その少女が退屈しないようにと、祭に繰り出した

なお浅葱は、その少女を仮におさなちゃんと呼ぶことにした

そこに

「えっ!?! 明久から!?!」

浅葱は驚いたが、すぐに携帯に出た

「はい、もしもし?」

『浅葱、今パレード見てるよね!?!』

第一声にピンポイントで当てられて、浅葱は驚き

「え、なんで知ってるの!?!」

と問い掛けた

すると明久は

『テレビに映ってたの!』

と言った

それを聞いて、浅葱は

「しまった……映ってたか……」

と頭を抱えた

そこに明久が

『それより、隣に居る女の子は誰!?!』

と問い掛けてきた

その問い掛けに、浅葱は

「それがね、気付いたら居たのよ。しかも、アタシをお母さんと勘違いしてるみたいで

……」

と言った

その時、尋常じゃない気配を感じて、右に視線を向けた

その先には、民族衣装を着た老人が居た

それを見た浅葱は

「ごめん、明久。なんかヤバそうだから、切るね」

と言って、携帯を切った

すると、その老人は

「本当に幼くなっているのだな……女……その少女を渡せ……そうすれば、命だけは助

けてやる」

と言ってきた

しかし、浅葱は

「そう言われて、渡すわけないでしょ！」

と言って、少女

おさなと一緒に、走り出した

そして

「モグワイ！」

と相方を呼び出した

すると、携帯画面にブサイクなコアラが現れて

『状況は把握してるぜ。あいつは、キリカ・ギリカ。ある部族の精霊使いで、自分の体に炎の精霊を宿した化物だ。前に空隙の魔女に捕まり、監獄結界に収監された奴の一人だ』

と教えた

それを聞いた浅葱は

「監獄結界!? あれって、噂じゃなかったの!？」

と驚いた

しかし、後ろから飛んできた火球を避けて

「とりあえず、この危機的状況を乗り越えるのが先ね……モグワイ、キーストーンゲートのEエントランスまでの最短ルートを一！」

と指示を出したのだった

脱獄者達2

地下道を利用し、浅葱は目的地

キーストーンゲートのEエントランスに到着

そこに待機していた警備隊とアスタルテが、浅葱を追い掛けていたキリカ・ギリカを無力化

キリカ・ギリカは、監獄結界に引きずり込まれた

すると、アスタルテが浅葱に近寄り

「マスター那月を発見」

と言った

「え？ 那月ちゃん？」

「イエス……そちらの少女の特徴が、97%の確率でマスター那月と一致しました」
浅葱が驚きながら問い掛けると、アスタルテはそう言った

そこに

「その子供、渡してくれるかしらあ？」

と女の声が聞こえて、浅葱とアスタルテは声のした方向に視線を向けた

そこに居たのは、扇情的な服装の妖艶な美女と学生服を着た二人の女学生だった
すると、モグワイが

『不味い！ そいつらは、ジリオラ・ギラルテイ、姫路瑞希、島田美波！ 全員、監獄結
界の囚人達だ！』

と言った

すると浅葱は

「惨劇の歌姫に、ポイズンマスター、ハンドシェイカー!? どいつも、S級魔導犯罪者
じゃないの!?!」

ジリオラ・ギラルテイ

ケイオス・ブライト
混沌の皇女の血に連なる旧い世代の吸血鬼で、欧州で当初は高級娼婦として知られてい
た

だが、彼女に一人の王族男性が恋に落ち、結婚させまいと他の王族が暗殺者を差し向
けたが、眷獣の力で支配し、逆に王族の悉くを惨殺

逮捕され別の監獄に収監されていたが、眷獣の力でその監獄を支配

那月の耳に入り、監獄結界に収監された

姫路瑞希

通称、ポイズンマスター

毒を生成し操る過応適応者^{ハイパーアダプター}で、その毒で一つの街を全滅させた凶悪犯罪者

その毒の中には、殆どの物質を溶かす毒もあり、通常の監獄では収監するのが不可能だった

だから、那月の監獄結界に収監されていたのだ

島田美波

通称、ハンドシエイカー

獣人と普通の人間の間に産まれたハーフで、見た目は人としての血が強いが、中身は獣人の血が強いという特殊な個体だった

だが、その後が不味かった

彼女は当初、欧州で産まれ育ち、ある時に日本に帰化した

だがそこで、ある事件が勃発

何処からか、彼女がハーフということが露見し、反魔族派が彼女と彼女の家族のことを聞き付けて、襲撃

彼女の家族は、殺害されてしまった

その後彼女は、怒りに任せてその犯人達を全員殺害

更には、自分が通っていた生徒や教師の大半を瀕死の重傷に追いやったのである

その時に使われたのが、獣人としての並外れた膂力

それで、まるで地面や建物を揺らすように力任せで戦ったのが、ハンドシェイカーの由来である

そんな彼女を捕まえたのが、那月と西村だった

西村が押さえ込んでいる間に、監獄結界に収容したのである

「ミス藍羽、私に任せてください」

アスタルテはそう言つて、眷獣

ロドダク・テュロス
薔薇の指先を展開し、戦闘態勢に入った

その時、アスタルテに次々と銃弾が撃ち込まれた

それは、周囲に展開していた警備隊の内の半数が、ジリオラ・ギラルティの眷獣

ロサ・ゾンビメイカーによつて、操られていたのだ

それに気づいた残り半数は、その隊員達を無力化しようとした

だがそこに、姫路瑞希と島田美波が動いた

生成された毒で、残りの半数が倒れ伏し、残り半数はまるで人形遊びのように叩き潰

された

「これは、不味い!?!」

「逃げてください、ミス藍羽……!」

浅葱は焦り、アスタルテは逃げるように促した

そこに

「ふうん……惨劇の歌姫にポイズンマスター。それに、ハンドシェイカーか……どいつもこいつも、監獄結界に収監されていた奴等か……」

と新たな声が聞こえてきた

そして現れたのは、場違いな純白のスリーピースを着た優男

デイミトリエ・ヴァトラーだった

「デイミトリエ・ヴァトラー……」

「戦王領域の貴族ですか……」

「退きなさい！ ウチらは、その女を殺さないといけないのよ!!」

三人はそう言って、ヴァトラーを攻撃しようとした

ジリオラはロサ・ゾンビメイカーで、隊員達を操り銃口を向けさせ、姫路は毒を生成

島田は、地面に手を突っ込み、巨大な岩塊を持ち上げた

しかし、ヴァトラーは慌てずに

「バツナンダー！」

と自身の眷獣を召喚

それは、水を操る眷獣だった

膨大な水で、隊員達と毒は押し流され、島田はバランスを崩して、岩塊を落とした

すると、ヴァトラーは

「いいね、中々の強敵じゃないか！」

と歓喜に震えた声を上げたのだった

行き先は

「誰か、あの人を止めて……！」

と言ったのは、おさな目と耳を覆っている浅葱だった

脱獄囚三人との戦闘は、ヴァトラーが終始圧倒

そして今、三人はヴァトラーが召喚した数多の蛇に全身をかじられていた

今も、浅葱の耳には三人の悲鳴と絶叫が聞こえてくる

「お願い、誰か止めて……！」

と再び、浅葱が願った

その時だった

「ヴァトラー!!」

と浅葱の知ってる声が聞こえた

そして現れたのは、跳躍してきたらしい明久だった

浅葱との電話が切れた明久は、雪菜と沙矢華の二人と一緒に、ケツテン・クラートで

向かおうとした

だが、その途中でケツテン・クラートが燃料切れで動けなくなった

すると雪菜が、明久に自身の血を本の少し吸わせ、吸血鬼の身体能力で屋根の上を走ってきたのだ

「やア、明久。こんなところで、どうしたんだい？」

「どうしたじゃない！ やり過ぎだ！」

明久はそう言つて、絶叫を上げて血塗れになつた三人に視線を向けた

すると、三人の左手手首にあつた手錠から鎖が伸びて、三人を拘束

三人の姿は、虚空に消えたのだった

どうやら、監獄結界に収容されたようだ

それを見て、ヴァトラーが

「なるほど……監獄結界のシステム自体は、まだ生きている訳か」

と感心した様子で呟いた

すると、力ない声で

「明久……」

と浅葱が、明久を呼んだ

その浅葱に、明久は近寄り

「浅葱、大丈夫？」

と問い掛けた

よく見れば、浅葱の顔色は蒼白だ

だが、それは仕方ないだろう

目前で行われていた惨劇

それは、浅葱が経験したことない類だったのだから

そして浅葱は

「私は大丈夫……それより、なんでアルデアル公のことを知ってるのよ」

と明久に問い掛けた

その問い掛けに、明久は

「まあ、色々あつたとしか言えない」

と何処か遠い目をしながら、答えた

そして

「それより、なんで那月ちゃんと一緒に居るのさ!？」

と浅葱に問い掛けた

すると、浅葱は

「那月ちゃんって、おさなちゃんのこと?」

と首を傾げた

「おさなちゃん?」

「そ、幼い那月ちゃんだから、おさなちゃん」

「あつそ……」

明久の問い掛けに、浅葱はそう答えた

その時だった

「まさか、その少女が空隙の魔女かい？」

とヴァトラーが、問い掛けてきた

その問い掛けを聞いて、明久は反射的にヴァトラーの前に立った

ヴァトラーにとっても、那月は邪魔な存在なのは間違いない

もしかしたら、殺しに掛かるかもしれないと判断したのだ

しかしヴァトラーは、額に手を当てて

「クハハハハハハ！ 欧州魔族恐怖の代表とも言える空隙の魔女が、変わり果てた姿

じゃないか！ アハハハハハハ!!」

と笑い始めた

突如笑い始めたヴァトラーを見て、明久は怪訝な表情を浮かべながらも、警戒を続け

た

ヴァトラーを信用していないからだ

ひとしきり笑ったヴァトラーは、明久達を見て

「なんなら、ボクの船に来るかい？」

と問い掛けた

「なに？」

その問い掛けの意図が分からず、明久は思わず首を傾げた

するとヴァトラーは

「治外法圏になるが、今のキーストーン・ゲートよりも、安全だと思うヨ？」

と言つてのけた

確かに、今のキーストーン・ゲートの戦力はがた落ちも良いとこだ

それならば、ヴァトラーの船に行ったほうがいいだろう

そう判断した明久は

「分かった。行くよ」

と言つた

すると、浅葱が

「私も行くわ！」

と手を上げた

「浅葱!?!」

「なによ。私一人を、凶悪犯達が居る町中に放り出すわけ？」

明久が驚くと、浅葱はそう言った
確かに

もし脱獄囚達が情報を共有していたら、浅葱も狙われるだろう

明久が悩んでいると、ヴァトラーが

「一人二人増えたって、構わないサ」

と言った

「ヴァトラーアアアアア!!」

どう言って引き離そうか考えていた明久は、思わず怒声を張り上げた
ヴァトラーが言ったら、受け入れざるをえなくなってしまうからだ

こうして明久達は、ヴァトラーの船

オシアナスグレイヴⅡに、乗ることになったのだった

鼻血

『はあ!? アルデアアル公の船の中あ!?』

と怒鳴ったのは、明久の通話相手

沙矢華だった

『分かってるの!? そこは治外法圏で、私達は中に入れないんだけど!』

「仕方ないでしょ!? 今のキーストーンゲートは、戦力ガタガタで安全とは言えなかったんだからさ!」

沙矢華の文句に、明久はそう反論した

その明久だが、鼻にティツシユで詮をしている

その理由だが、オシアナスグレイヴⅡに乗った時、明久や浅葱達の服装は汚れていたそれを見たヴァトラーの部下

キラ・レーベデフが、明久達に入浴を進めた（その様子を見た浅葱は、一瞬明久が同性愛者かと疑ったが）

その後、明久が一人で入浴していると、ヴァトラーのメイド集団が乱入してきたそのメイド達だが、なんでもヴァトラーの領地の隣国の王族や代表の娘達らしい

そんな彼女達がメイドに居る理由だが、要は人質と誘惑目的だった
しかし、ヴァトラーは戦闘狂

だから、彼女達には見向きもしなかった

そこで彼女達が考えたのは、第四真祖たる明久との間に子供を設けること
そうすれば、産まれるのは第四真祖の血を継いだ強力な吸血鬼

そうして産まれた新たな吸血鬼で、ヴァトラーを倒す

そう判断し、明久を誘惑しようとしてきたのだ

予想外の乱入に明久が狼狽していると、そこに浅葱とおさなが現れた
しかも気付けば、メイド達の姿は消えている

予想外の事態の連続に、明久は思考がオーバーフロー寸前になった
その後、なんだかんだで浅葱達と入浴することになった

すると浅葱が、明久に

『あんた……私に何か、隠してるでしょ?』

と問い掛けてきた

その問い掛けに、明久は動揺した

確かに、浅葱は頭の回転が早く、勘も鋭い

どうやら、その勘の鋭さから、明久が何か隠してると思ったらしい

だがそのタイミングで、明久に限界が来た

明久は我慢していた吸血衝動が原因で、鼻血を噴出

風呂に土左衛門の如く浮いたのだった

そうして気付いてみれば、ある一室のベットに寝かされていた

その時に、明久を探していた沙矢華から電話が掛かってきたという訳である

「浅葱や小さくなつた那月ちゃんを守るには、こつちの方が都合が良いと思つたんだよ」
『先輩、状況は分かりました。とりあえず、私と沙矢華さんも近くに居ますから、これ以上状況をややこしくしないでくださいね』

どうやら、途中で雪菜に代わっていたらしい

雪菜はそう言つて、通話を切つた

そこに、おさなを抱えた浅葱がやってきて

「この船、凄いわね。まさか、私達にびつたりサイズの服があるなんてね」

と驚いていた

浅葱が着ているのは、ロングスカートに白いワイシャツだった

それだけなのに、まるで何処かのお嬢様のような雰囲気だった

そしておさなだが、おさなが着ているのは水色の半袖のシャツに、ミニスカートだ

明らかに、子供服である

しかし眠いのか、船を漕いでいる

だからか、浅葱は優しくおさなをベツトに寝かせた
その時だった

部屋に据え付けられていたテレビが繋がり

『嬢ちゃん！ ようやく見つけた！』

と不細工なコアラ

モグワイの姿が映った

「モグワイ！」

『嬢ちゃんの携帯がバツテリー切れになったから、街頭カメラから探して、テレビ電波で入ってきたぜ』

浅葱が相棒の名前を呼ぶと、モグワイはそう言った

そして浅葱に

『嬢ちゃん、悪いんだが、仕事してくれないか？』

と言った

それを聞いた浅葱は、テレビのリモコンを持って

「嫌よ。ただの女子高生を、どんだけ働かせるのよ」

と言つて、テレビの電源をオフにした

しかし、すぐに再点灯して

『頼む、この通り！ 緊急事態なんだ！』

と土下座してきた

「はあ？ 緊急事態？」

『そうなんだ……脱獄囚達も一大事だが、今絃神島全体で、徐々に魔法が使えなくなつてきてるんだ』

浅葱が片眉を上げると、モグワイはそう説明した

それを聞いた浅葱は

「そんなん、平和になるじゃない」

と言った

しかし明久が

「それってもしかして……人工島に掛けられてる強化魔術もじゃない？」

と首をかしげた

すると、モグワイが

『正解だぜ、嬢ちゃんの彼氏（予定）さん』

と言った

それを聞いた浅葱は

「誰が彼氏（予定）が！ ……つて、不味いじゃない!?」
と驚愕の声を上げた

するとモグワイは、キーストーンゲート地下は映像を表示させて
『このままじゃあ、夜明けにはこの島が沈みかねない』

と説明した

それを見た浅葱が、唸っていると

『とりあえず、そっちに迎えを送った。すぐにこっちに』
とモグワイが言いかけた

その直後、テレビの映像が消えて、船が大きく揺れたのだった

脱獄者達3

「な、なんだ!?!」

浅葱を抱き止めた明久は、慌てた声を上げた
その時だった

「緊急事態キュン!」

と寝ていた筈の、おさなが起き上がった

しかも、意味不明な語尾を言いながら

「おさなちゃん?」

「……ふあ?」

浅葱は呆然としながら

明久は奇声を漏らしながら、おさなを見た

しかしおさなは、気にした様子もなく

「ただちに、脱出することを薦めるキュン!」

と言った

しかし明久は

「もしかして、那月ちゃんが復活した？」
と首を傾げた

だが、それを聞いたおさなは

「残念！ それはまだまだキュン！」

と否定した

確かに

今の言動は、那月とは架け離れている

そして、おさなが

「言うなれば、今の私はバックアップキュン！」

魔力も余り生成出来ないし、空間魔術も体が未熟だから使いにくいキュン！」

と言った

「つだよ、マジかよ……」

それを聞いた明久は、両手両膝を突いた

すると、おさなが

「後10年位待てば、体が成長して使えるようになるキュン」

と言った

それを聞いた明久は、思わず

「待てないからね!？」

と突っ込みを入れた

その直後、明久は外で膨大な魔力の高ぶりを感じた

だから

「危ない!？」

と、浅葱とおさなの二人を抱えて、ベッドの陰に隠れた

その直後、窓を突き破って人影が入ってきた

それは、この船の主

ヴァトラーだった

「ヴァトラー!？」

そのヴァトラーは、全身血塗れだった

まさか、ヴァトラーが血塗れで吹き飛んでくるとは思わず、明久は外に居るだろう相

手を見た

居たのは、武骨な鎧と大剣を持った男だった

そいつの左手手首には、厳つい手錠がある

脱獄囚なのは、疑うまでもない

「あいつ、誰だ!？」

「ヴルート・ダンブルグラフィキュン！ 龍殺しの力を持つ降魔師で、過去に無実の魔族を殺した罪で収監された凶悪犯だキュン！」

明久が声を上げると、おさながそう説明した
すると、その男

ヴルートは明久を見て

「あの第四真祖か……始末する」

と言つて、大剣を構えて跳んだ

それを見た明久は

（浅葱に見られることになるけど、仕方ないっ！）

と眷獸を呼び出そうとした

だが、それより早く

「困るな、明久……僕の大事な強敵を……奪わないでくれるかな」

と声が聞こえて、明久は嫌な予感から伏せた

その直後

「ウハツラ！ バツナンダ!!」

と二匹の蛇が、ヴルートに迫った

しかしヴルートは、その二匹を大剣で切り捨てた

「眷獣を斬った!？」

その大剣には、何ら魔術によるエンチャントは施されていない
つまりそれは、ヴルートの能力に他ならない

「流石は、かの龍殺し……ジークフリートの末裔と言われるだけのことはあるねエ……
いいね、久しぶりの血沸き肉踊る強敵だ!!」

ヴァトラーは、血で全身を濡らしながらも、ランランと輝く目でヴルートを睨んだ
完全に、闘争本能が刺激されたらしい

それを見た明久は、どうすべきか迷った

その時、背後から

「皆様、ここに」

と高い声が聞こえた

振り向いてみれば、部屋の入り口にキラ・レーベデフが立っていた

どうやら、戦闘の余波で歪んだドアをこじ開けたらしい

「今の内に、船から降りてください」

近寄ってきた明久達に、キラはそう言ってきた

それを聞いた明久は

「あれ、止めなくていいの?」

とヴァトラーを指差した
すると、キラが

「既に、同僚達が動いています。船も、港への被害を防ぐために離岸します。お急ぎください」

と近くのタラップの方を指差した

その対応の早さから、慣れていることが伺える

「君達も、苦勞してるね」

「何時ものことですから」

二人はそう会話すると、明久はタラップ目掛けて走った

そして背後では、飛んでくる衝撃波をキラが防いでいた

やはり、手慣れている

それを見ながら明久は、近くのタラップから外に出た

だがその直後、タンカーや船に荷物を積載するための巨大なクレーン

メガガントリー・クレーンの基部で、爆発が発生

明久達に倒れてきた

それを見た明久は、浅葱とおさなを安全な方に突き飛ばした

だがその直後、そのメガガントリー・クレーンに数回爆発が起きて、遠くに吹き飛ん

だ

「な、なんだ？」

何が起きたか分からず、明久は固まった

その直後

『ハーハツハツハ！ 大丈夫でござるか！ 女帝殿達！』

と子供の声が聞こえた

声が聞こえてきた方を見たら、その先には一両の赤い塗装の施された多脚戦車が止

まっていた

どうやら、先ほどの戦車の砲撃らしい

「せ、戦車？」

明久が呆然としていたら、浅葱が

「今のしゃべり方……まさかアンタ……《戦車乗り》!?」

とその相手の異名を呼んだ

すると、上部のハッチが開いて

「その通りにござる！ 初めましてにござるな、女帝殿。拙者は、リディアーヌ・ディエイと申す者。モグワイ殿に頼まれて、女帝殿を迎えに来たでござる」

と中から現れた赤い髪の少女

リディアーヌ・ディディエが、そう言った

そのしゃべり方を聞いた明久は、内心で

(間違った日本知識を覚えた外国人観光客みたい……)

と思った

なお戦車乗りというのは、浅葱と同じように人工島管理公社に雇われたプログラマーで、腕の立つ迎撃屋だ

しかしその姿は、浅葱も初めて見た

「今、絃神島に起きている現象……10年前とまったく同じでござる」

「それってもしかして……闇誓書事件？」

リディアーヌの話の聞いて、明久はそう問い掛けた

するとリディアーヌは

「その通りにござる！ よくご存知にござるな、女帝の彼氏（予定）殿」

と肯定した

すると、浅葱は

「だから、誰が彼氏（予定）よ!!」

と顔を真っ赤にした

その時明久は、近くの物資置き場で更なる魔力の高ぶりを感じた

それは、慣れた雪菜のものだった

だから明久は

「浅葱、そつちを頼む。僕は、行かないと」

とその物資置き場の方を見た

それを聞いた浅葱は

「分かったわ。私は、私に出来ることをするわ」

と言った

それを聞いた明久は、その物資置き場の方に走ろうとした

しかし、そんな明久の背中におさなが飛び捕まり

「私も連れていくキュン！」

と言った

気付けば、浅葱を連れて戦車は走り去っている

連れていくしかないようだ

「振り落とされないのでよっ！」

明久はそう言って、唇を噛みきった

そして、吸血鬼としての身体能力で物資置き場に向かったのだった

脱獄者達 4

「こいつ、強い!？」

「流石は、天武ですね……!？」

沙矢華と雪菜の前には、あの監獄結界で見たドレッドヘアの男

シウトウラ・Dが居た

しかも、そのシウトウラ・Dの腕が増えていた

全部で四本に

その腕が振るわれる度に、凄まじい風が起きて二人の攻撃を防ぐか、二人を攻撃した

その正体は、てんぶ天武

それは過去に、高度な文明を築き上げた人類だった

しかし、それが神の怒りを買って滅んだとされている

そして、シウトウラ・Dだが、その力である一つの街を壊滅寸前まで打撃を与え、派

遣された那月に捕まった凶悪犯だった

「行くぜえ! 轟嵐碎牙!!」

シウトウラ・Dは、そう言いながら腕を振るった

その直後、暴風が二人に襲いかかった

「雪菜！」

「くっ！」

その一撃を二人は、散開して回避

「幾ら二人が凄腕だろうが、目に見えない風の一撃は対処が難しいだから、回避するしかなかった」

近付こうにも、風の一撃で迎撃される

有効打になりそうだったのは、沙矢華が持つ焔火燐の弓形態

しかし、その矢も風で威力が発揮できなかった

「あいつ、厄介過ぎる！」

「でしたら、足場を崩します！」

沙矢華の言葉を聞いて、雪菜はシュトウラ・Dが足場になっているコンテナに

「響よっ！」

強力無比な一撃を叩き込んだ

「ちいっ！」

その一撃で、シュトウラ・Dが足場に使っていたコンテナが崩れた

それを見たシュトウラ・Dは、足場に使っていたコンテナから跳んだ

それに

「二人とも、無事!？」

と明久が現れた

その背には、おさなを背負っていたが、おさなを下ろした
すると、雪菜が

「今現在、脱獄囚の一人と交戦中です」

と明久に告げた

それを聞いた明久は、おさなを地面に下ろして

「だったら、早く無力化しないとね」

と言って、刀を構えた

その時だった

「行くぜえ！」

と崩れたコンテナを飛び越えて、シユトウラ・Dが現れた
それを見た雪菜は

「先輩、後ろに！」

と言って、槍を構えた

その直後に

「轟嵐碎牙!!」

とシュトウラ・Dは、技を繰り出した

その一撃は、雪菜の槍によって弾かれた

だが、その一撃で周囲のコンテナは更に破壊された

つまりは、雪霞狼でも無力化出来てないのだ

「風……そうか!」

その風で何か気付いたらしく、沙矢華は太股から矢を抜いた

その直後

「今度は最大出力で行くぜえ!」

とシュトウラ・Dは四本の腕を大きく広げた

それを見た沙矢華は、矢を伸ばし

「獅子の舞女たる舞威姫が願ひ奉る!!」

と祝詞を唱えながら、その矢をシュトウラ・Dの方に投げた

その直後、シュトウラ・Dの一撃が放たれていた

その一撃は、矢に当たった

しかし、それで沙矢華の目論みは成功した

沙矢華の放つ矢は、鳴り鏑矢

本来だったら、弓で放つことで様々か効果の極大魔術が発動される

しかしその弓で放ち鳴らす工程を、相手の風を利用して短縮すればどうなる？

結界は

「なっ!?!」

シウトウラ・Dの目前で、広い魔法陣が展開された

「あんたの風、使わせてもらったわ!」

沙矢華がそう言った直後、シウトウラ・Dを雷撃が襲った

その一撃をマトモに喰らい、シウトウラ・Dは全身から煙を上げていた

その直後

「ちくしよおおおおお!!」

とシウトウラ・Dが叫び声を上げて、その姿を消した

どうやら、監獄結界に送り返されたらしい

一段落したから、三人は安堵の溜め息を吐いた

その時だった

「ようやく見つけたぞ、那月」

と舌つたらずな女の声が聞こえた

その瞬間

「…………え？」

明久の胸から、白刃が突き突き出していた

前に

「ああ、もう！　こんな時に、魔術が使えれば!!」

と慌てていたのは、救急箱を開いて包帯を取り出した沙矢華だ

それを見て、ソファに寝転がっていた明久は

「あー……煌坂さん……とりあえず、落ち着こう」

と言った

そう言った明久の胸元は、真っ赤に染まっている

すると、沙矢華は

「落ち着けるわけじゃないでしょ!?!　魔力が消されてるから、あらゆる魔術が使えないし、貴方だつて回復が疎外されてるのよ!?!」

と涙目になった

そんな二人が居るのは、港湾の管理事務所らしいプレハブだ

シウトウラ・Dを撃破した直後、阿夜の襲撃を受けて、明久は重傷

更に、雪菜と那月が誘拐されてしまったのだ

勿論だが、沙矢華は阿夜を攻撃しようとした

だが、阿夜が所持する魔導書

闇誓書の力で、彩海学園を中心に、魔力が消され始めていたのだ

それにより、沙矢華は煌華燐がただの金属の塊になって、魔術も使えなくなっていた

それは明久も例外ではなく、途中まで召喚出来た獅子の黄金が消えた

それだけでなく、回復も出来なくなつた

だが、そんな中でも例外は居た

それが、雪菜だつた

雪菜の雪霞狼は力を失わず、阿夜が沙矢華と明久を狙つて放つた魔術を切り捨てた

それを見た阿夜は、ポツリと

『おもしろいな』

と言ひ、空間魔術で雪菜と那月を連れて消えたのだ

その後沙矢華は、慌てて逃げたらしく鍵が空いていたこのプレハブに煌華燐と明久を運び込み、明久の治療をしようとしているのだ

しかし、今まで魔術ありきの治療だったので、魔術無しで重傷を治すという事態に半ばパニックに陥っていたのだ

「というか、なんで貴方はそんなに落ち着いてるのよ!？」

「いわゆる、近くにパニックになつてる人が居るから落ち着くつてやつかと」

沙矢華の問い掛けに答えながらも、明久は内心で
(とはいえ、長くは持たないかも……)

と思つた

その時

「やつと……見つけたよ……明久……」

と新たな声が聞こえた

明久と沙矢華が見た先に居たのは、病衣を着た優麻だった

「優麻!？」

「貴女、まだ動ける体じゃないでしょ!？」

優麻を見て明久は驚き、沙矢華は一步前に出た

その直後に、優麻の膝がカクンとなり倒れそうになった

しかし倒れるまえに、沙矢華が支えた

すると、明久が

「優麻、無理しないの……」

と言つた

よく見れば、病衣が所々赤くなっている

どうやら、ここに来るまでに傷口が開いたようだ

明久の言葉を聞いて、優麻が

「明久だつて、相当無理したんだろ？ その出血……長くは持たないはずだよ？」
と言った

それを聞いた沙矢華は、明久に視線を向けた
すると、明久は

「そうだね……刺された直後に、回復を後回しにして、獅子の黄金を呼んだしね……多
分、後小一時間が限界だろうね……」

と言った

それを聞いた沙矢華は、顔を蒼白にした

今の明久は、第四真祖としての魔力の大半が使えなくなっている
使える僅かな魔力を生態維持に回しても、それが限界だったのだ

まさに、デッドラインだった

すると、優麻は

「明久……ボクの血を吸うんだ」

と言った

「闇誓書を使うために、母さまは自分の魔力は消さなかった……いや、消せなかったんだ
……だから、ボクも魔力を使える」

優麻はそう言って、魔力の球を形成した

それは、優麻が阿夜のクローンだから使えたのだ

そして優麻は、明久に自身の血を吸わせることで、明久の魔力を復活させるつもりなのだ

だが、それは余りにもギャンブルだった

今の優麻は、阿夜に契約者を奪われているために、魔力の生成にすら難儀する状態だ
そこに更に、明久に血を吸わせたら、生態維持も困難になるだろう

だが、優麻は

「もし死んだとしても、満足だよ……ボクの血は、明久の中で生きていくんだからね」

と微笑んだ

だが、明久は

「死なせるか……誰も死なせるか!!」

と力強く言ったのだった

突入

「なるほど……つまり貴女が言いたいののは、狂ってるのは世界のほうだということですね？」

と問い掛けたのは、巨大な鳥籠に囚われている雪菜だった

雪霞狼では、破壊出来ない

だから、脱出も出来ない

雪菜の居る鳥籠の隣に、別の鳥籠があり、その鳥籠の中には意識を失っているおさなが居る

「そうだ……我々魔女は軽蔑され、差別される……そんな世界、狂ってるに決まってる」

雪菜の問い掛けに答えたのは、着物姿の女

仙都木阿夜だった

阿夜は先程まで、雪菜にある幻影を見せていた

魔女も魔族も、魔術も存在しない世界を

その世界では、明久は剣道部で凄腕の選手になっていて、沙矢華が普通の先輩だった

雪菜はそこで、二人の後輩だった

確かに、そこはある意味で理想の世界だろう

穏やかに過ごせるのだから

しかし雪菜は、その世界を否定した

何故ならば、もし普通の世界だったら出会えなかったかもしれないからだ

そして雪菜は、阿夜を見つめながら

「それに、貴女の認識は間違っています。例え魔女だろうが、キチンと社会に貢献すれば、認められます……認められないのは、誤ったことをしているからです！」

と言った

その言葉に、阿夜が反論しようとした

その時、阿夜はある方に視線を向けた

それを追い掛けるように、雪菜もそちらを見た

その直後、阿夜が貼っていた結界を突き破り、水銀色の双頭蛇龍が現れた

「ちいっ!?!」

それを見た阿夜は、舌打ちしつつ空間魔術で回避

雪菜は、反射的にしゃがんだ

そして水銀の双頭蛇龍は、雪菜とおさなが囚われていた鳥籠の上半分を、空間諸とも

嘯み千切った

それを確認した雪菜は、まず自分の鳥籠から脱出し、おさなを救出

そして、水銀の双頭蛇龍が空けた穴から入ってきた人物達を見た

入ってきたのは、三人

その三人を、雪菜は知っていた

「先輩！ 沙矢華さん！ 優麻さん!？」

優麻は明久が背負っていたが、確かに居た

そして現れた三人は、雪菜の近くに着地した

そして明久は、優麻を優しく下ろして

「やあ、書記の魔女さん……僕達の学校で、好き勝手してくれたね」

と阿夜を睨んだ

実は明久は知らなかったが、阿夜も彩海学園に在籍したことがあったのだ

だから、阿夜は明久からしたらOGになるのだ

そして阿夜は、優麻と明久を見て

「そうか……人形の血を吸ったのか」

と納得した様子で頷いた

そう、今の明久から魔力が溢れている理由を察したのだ

「そうだよ……あんたが人形と蔑み、まるでぼろ雑巾みたいに扱った優麻が、僕に血を吸わせてくれたから、僕の力が復活したよ」

明久が言葉を言う度に、魔力が昂ってきていた

そして明久は、抜刀した刀

鉋切長光を突き付けて

「覚悟しろ、書記の魔女……あんたが何を企んでるのか知ったこつちやないが、これ以上好き勝手されてたまるか！」

と告げた

そして続けて

「あんたの企み、全部ぶち壊してやる！　ここから先は、第四真祖ポクの戦争だ!!」

と言った

すると、明久の両隣に沙矢華と雪菜が布陣して

「いいえ、先輩！」

「私達の戦争よ!!」

と言ったのだった

開戦

「行け、我が記憶の犯罪者達よ！」

阿夜はそう言つて、魔法で再現したらしい脱獄囚達を放つた

それを見た明久は

「今さら……そんなコピイに負けるかあ!!」

と獅子の黄金と双角の深緋を召喚

一撃で、全て消し去つた

その直後、明久に対して数多くの魔法が迫つた

だが明久は、慌てずに

「遅いっ!!」

と右手に持っていた小太刀

鉋切長光で、全て切り裂いた

それに阿夜は驚いたが、すぐに

ル・オンブル
「闇！」

と黒に染まった騎士を呼んだ

それは、阿夜に支配されている、元は優麻の青き騎士
それを見た明久は

「お前も……唯々諾々と、従ってるんじゃない！」

と言いながら、駆け出した

その直後、闇の姿が掻き消えた

「つつ!!」

それに明久は、思わず脚を止めた

それは、那月が使う空間魔術と似ていたからだ

(どこから来る!?)

明久はそう思いながら、周囲を見回した

そこに

「先輩!!」

と雪菜が、背後に布陣

それと同時に、重い金属音が鳴り響いた

肩越しに見てみれば、雪菜が槍で、闇の剣を受け止めていた

どうやら、霊視で闇の出現位置と攻撃軌道を見て、カバーに回ったようだ

そこに

「私も居るんだけど!？」

と沙矢華が、雷切を上段に構えて、闇の背後から切りかかった

沙矢華の武器たる煌華燐は、未だにその力を失っている状態である

だから、まだ力を保っていた雷切を貸したのだ

その剣技は、卓越している

袈裟斬りから、股割りを一瞬にして繰り出した

だが、闇は本来は非実体型の守護者だ

阿夜が魔力密度を下げたことで、ダメージは入っていない

だが、それでいい

何故ならば、闇

否、青を優麻の為に奪還する腹積もりだからだ

だから、出来る限りダメージを与えるわけにはいかないのだ

「ええいつ!？」

阿夜は苛立たし気に声を漏らし、魔法を次々と繰り出した

その魔法は、弾幕となって明久達に殺到した

だが、その魔法の弾幕は

「疾!？」

「はっ!!」

明久と雪菜の二人によって、全て弾かれた
それを見た阿夜は、舌打ちして

「闇!!」

と守護者に、高い密度の魔力を回した

その直後、全員の耳に聞こえたのは、金属の重い悲鳴だった
それを聞いた明久が

「まさか、魔力の無効化を!?!」

と阿夜に視線を向けた

すると、阿夜は嗤い

「そうだ……魔力無効化の速度を上げた……この島は、もうすぐ崩壊する」
と言った

それを聞いた沙矢華は

「そんな!?!」

と顔を蒼白にした

しかし、明久は

「……ある意味、こいつはうってつけだね」

と呟いた

そして、刀を左手に持ちかえると、右腕を高々と掲げて
「焰光カレイドフラットの夜伯の血脈を継ぎし者、吉井明久が汝の枷を解き放つ！」
と新しい眷獸を呼ぶ時の式句を紡いだ

それを聞いた雪菜は、ムツとした表情で明久を見ていた

「疾こく在いれ！ 四番目の眷獸！ 甲殻ナトラシネレウスの銀霧！！」

明久がその名前を唱えると、右腕から血が吹き出した

その直後、その場に居た全員の視界が、白に染まった

魔女の復活

「これは……」

視界が白一色に染まった阿夜は、周囲を見回した

すると雪菜が

「まさか……霧の眷獣!? 島自体を霧化させたんですか!?!」

と驚愕した

雪菜の指摘は、正解だった

明久が沙矢華と優麻の血を吸って支配下に置いた新たな眷獣

ナトラフシネレウス
甲殻の銀霧

それが表すのは、吸血鬼を代表する能力

霧化だ

旧い世代ともなれば、相手の攻撃を無力化し別の場所に現れるということも平然と成し遂げるとされる

しかし、明久のは術が違った

甲殻の銀霧の霧化の範囲は、なんと絃神島全体に及んでいた

明久は絃神島全体を霧と実体の間で固定することで、魔力の無効化からくる島の崩壊を防いだのだ

それに気付いた阿夜は、明久を睨み

「おのれ！ 第四真祖風情が！」

と言いながら、魔法を立て続けに放った

だが、それを座して見ているだけの雪菜と沙矢華ではない

二人は明久の前に陣取り

「はあー！」

「せあっ!!」

と明久に迫った魔法を弾いた

すると明久は

「獅子の黄金！ 双角の深緋！」

と更に二体の眷獣を同時召喚した

はつきり言って、今の明久にはかなり負担が大きい

しかし、阿夜に勝つためにはやる必要がある

阿夜は那月並の腕前の魔女である

全員が全力で挑まなければ、勝つのも勝てなくなる

それに呼応するように、雪菜と沙矢華も動いた

明久の眷獣の攻撃を回避したタイミングを狙い、雪菜と沙矢華は攻撃を繰り出した
だが、二人の攻撃は闇によって防がれた

しかも、その時の衝撃を増幅、二人を撥ね飛ばした

そして、二人が着地したタイミングを狙い、二人に魔法を放った

だがその魔法は、獅子の黄金と双角の深緋によって弾かれた

はつきり言って、いたちごっこだろう

だが、長くは戦えない

明久の集中力が途切れて、眷獣達の支配が失敗すれば、大災害になるのは確実である
だから、短期決戦が必須条件である

それを理解しているからか、三人は攻撃の手を緩めない処か、苛烈にした

明久は獅子の黄金と双角の深緋の波状攻撃を繰り出し、それに追隨して雪菜と沙矢華
も更に攻撃を繰り出した

しかしその攻撃を、阿夜は空間魔法で回避

一気に距離を取った

すると、一冊の魔導書を取りだし

「ええい、煩わしい餓鬼共め！ この個人歴史パーソナルヒストリーの書で、貴様らの時を奪ってくれる!!」

と怒った

それを聞いた三人は、慌てて攻撃しようとした

その時だった

「待っていたぞ、阿夜……お前がその書を出すのをな」

と聞きなれた声が聞こえた

その直後、何処かから伸びた鎖が、阿夜が持っていた魔導書を絡めとり、引つ張ったそれをキャッチしたのは、意識を失っていたはずの人物

おさなこと、那月だった

「那月ちゃん!?! 戻ったの!?!」

明久が問い掛けると、那月は

「一時的にだがな。何処かのバカが、鼻血を盛大に流したから、こうして一瞬の隙を突くぐらいの魔術は使えるさ……」

と言いながら、明久を睨んだ

叩かなかつたのは、明久が脊獣を操っているためらしい

そして那月が魔導書を強く握った直後、那月の体つきが変わった

それは、見慣れた那月の姿だった

どうやら、奪われた時を取り戻したようだ

そして、魔導書を消すと

「諦めろ、阿夜……もうお前に、勝機は無い」
と告げたのだった

決着

「もう諦めろ……阿夜……」

「那月……!」

那月の言葉を聞いて、阿夜は那月を睨んだ

やはり、負けを認めたくないようだ

その証拠に、背後に闇を出した

それを見た那月は

「ああ……そういえば、そいつも解放しないとな」

と言つて、右手を掲げた

そして

「蒼き乙女に誓いの剣を捧げし騎士よ……今一度、真の姿を取り戻し、汝の真の主の下に
帰れ!」

と呪文を唱えた

すると、闇にヒビが広がり始めた

それを見た明久は

「優麻！」

と優麻の名前を呼んだ

すると優麻は、大きく息を吸い込んで

「青！」

と自分の騎士の名前を呼んだ

その直後、闇の騎士の下から青が姿を現した

そして、阿夜の背後から優麻の背後に位置を入れ換えた

どうやら、青を取り戻したらしい

だが、今度は阿夜が辛そうにしている

そんな阿夜は、那月を睨み

「那月……何故分らない！ この世界は、間違っている！ なまじ魔力や霊力がある

から、我々のような魔女や魔法使いは排斥される！ それにお前だって、何人を見送っ

てきた!？」

と叫んだ

すると那月は

「すまんが、私は今の世界を気に入っている……それにな、見送るのも悪くはない……確

かに、辛いことが多い……だがな、子供達が成長していくのを、見守るのは楽しい」

と言った

その言葉と表情は、普段の那月からは想像出来ない程に穏やかなものだったしかし、考えてみれば当たり前なのかもしれない

那月は、もう長い年月を魔女として生きている

それは、監獄結界に安置されていた本体が物語っている

その分、多くの人々を見送ってきたはずだ

それに、学生だった時の友人達は、もう亡くなっているか、かなり年老いているだろう

本当は、辛いはずである

だが那月は、その辛さよりも育てる楽しさに比重を置いている

そして何より、共に生きる喜びは、生徒達に託した

だから那月は、その生徒達を育てる教師を本職にし、その生徒達を守るために降魔官を副職にした

子供達の成長を、見守るために

「もう、世界を呪うのは辞めるんだ、阿夜……」

那月がそう言った直後、阿夜が

「こうなったら、最後の手段だ……」

と呟いた

それを聞いた那月は、目を見開き、優麻は

「ダメだ、お母様!!」

と声を張り上げた

その直後、阿夜の体を漆黒の炎が覆った

「なに……あれ？」

それを見た明久は、嫌な感覚に襲われていた

すると、雪菜が

「ロストです……」

と言った

それを聞いた明久が、雪菜に視線を向けた

すると、雪菜は

「魔女や魔法使いの最終手段……自身の全てを捧げる代わりに、強力無比の力を得るんです……しかしそうなったら、現代の技術では戻ることが出来ません」

と言った

それを聞いた明久は、もう一度阿夜を見た

そのタイミングで、阿夜の周囲に漆黒の炎で編まれた存在が現れた

そんな阿夜を見て

「……バカ者が……」

と辛そうに声を漏らした

そして、明久達に視線を向けて

「お前達は手出しするな……こうなったら、阿夜はもう助からない……だったら、私が始末を付ける」

と辛そうに言った

それを聞いた明久は

「待った……僕達がやります」

と言った

「吉井兄……」

「僕は決めたんだ……犠牲を出させないって……それが例え、敵だとしても！」

明久がそう言うのと、その両隣に雪菜と沙矢華が陣取った

それを見た明久は

「雪菜ちゃん、煌坂さん……僕が道を切り開く！」

と言った

すると二人は、武器を構えて

「任せてください、先輩！」

「終わらせましょう！」

と言った

その直後、雪菜と沙矢華が同時に駆け出した

それを阻もうと、吸う体の化物が二人に飛び掛かろうとした

だが、明久が

「獅子の黄金！ 双角の深緋！」

と召喚していた眷獣に指示を下した

その直後、その二体が二人に殺到した化物達を吹き飛ばした

だが、流石に明久の集中力が切れ始めてきていたのか、一体が残っていた

そしてその一体が、雪菜に攻撃を加えようとした

だが、それを

「させないわよ！」

と沙矢華が、刀で化物を切り捨てた

その隙を突いて、雪菜は阿夜に接近

雪霞狼を振り上げて

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて、我に悪神百鬼を祓わせたまえ！」

と祝詞を唱えながら、阿夜に雪霞狼を繰り出した

その一撃は、表皮を少し傷付ける程度の一撃だった

しかし、それだけで十分だった

その一撃により、漆黒の炎に包まれていた阿夜が姿を現した
それを見た那月が

「よくやった、お前達！」

と言った

それと同時に、那月の背後に黄金の騎士が姿を見せた

その騎士が右腕を阿夜に向けてと、騎士の周囲から数本の鎖が射出された

その鎖は阿夜を絡めとり、漆黒の炎から引き剥がした

それを見た明久が

「龍蛇の水銀！」

と新たに、対の龍蛇を召喚

残っていた漆黒の炎を、全て喰らった

それを見た明久は、召喚していた眷獣全てを消し、それと同時に座り込んだ

どうやら、疲労感からのようだ

やはり、複数の眷獣の同時使役はかなり疲れるようだ

しかし、満足そうに

「ようやく、終わった……」

と言って、満天の星空を見上げたのだった

幕引きの一幕

阿夜が起こした、第二次闇誓書事件の翌日

「つたく……こつちがフェスタの準備で忙しいの、知ってるでしょ……那月ちゃん」

明久は、突如那月に呼び出された

明久のクラスは準備に時間が掛かり、連日遅くまで準備している

明久に電話が来たのは、まさにそんな時だった

呼び出された明久は、適当な理由を着けて教室から離れた

そして呼び出されたのは、商業地区の外れにあるビルの屋上だった

そこには、何故か幼い見た目の那月が居た

「何な……貴様らには、世話になったからな」

そこには、沙矢華の姿があった

そして何より、会いたかった人物

優麻の姿もあった

「優麻……」

「本当なら、厳しい尋問が始まる筈だったんだけどね……空隙の魔女が、今日だけはって

ね……」

明久が視線を向けると、優麻はそう言った

「どうやら、那月が許可を取って外に連れ出したようだ

よく見れば、優麻の両手手首には魔法封じの手枷が付いている

もし魔法をしようとすれば、電撃が放たれる仕組みの代物だ

「それとだ、吉井明久」

「はい？ おおっ!?!」

呼ばれた明久は、顔を那月の方に向けた

その直後、黄金の腕に殴られた

那月の守護者である

「何度言えば、覚える？ 教師をちゃん付けで呼ぶとな……ただし、おさなちゃんの特

別に許す」

「気に入ったのね……それ……がくっ……」

「せ、先輩……」

一応、明久が悪いので、雪菜は苦笑いを浮かべることしか出来なかった

そして数分後、明久は首をゴキゴキと鳴らしながら

「僕じゃなかったら、死んでるからね？」

と言った

すると、沙矢華が

「あんただから、守護者で殴ったんでしようが……」

と言った

確かに、そうかもしれない

そこに、浴衣姿のアスタルテが歩みより

「いりますか？」

とビニール袋を掲げた

中を見てみると、街の出店で販売されている缶ジュースと食べ物だった

「あ、ありがとう」

とりあえず明久は、それを受け取った

断る理由も無かったからだ

ふと気付けば、屋上の一角にベンチが置かれてある

明久が座ると、その両隣に雪菜と沙矢華が座った

それを見た優麻が

「本当、明久は昔から変わらないな……」

と呟いた

その優麻は、那月の隣に座った

そこに、花火が上がり始めた

「おー……なるほど、いい場所だね？」

と明久が言うと、那月が

「本当なら、私の特等席なんだがな。この事件は、お前達に世話になったからな……特別だ」

と言った

考えてみれば、優麻と再会してから一週間と経っていない

だと言うのに、あまりにも怒涛のように起きていた

「やれやれ……平和は、何処に行ったのさ？」

ここ最近のことを思い出し、明久はそう呟いた

明久としては、平和に過ごしたいのだ

だが、事件が起きるから、走り回ることになる

損な性分なのかもしれない

せめて今は、それを忘れて花火を見ることにした

そして花火が終わると、明久は帰宅することにした

すると、優麻が

「空隙の魔女」

と那月を呼んだ

すると那月は

「……手短にな」

と言った

それを聞いた優麻は、明久に近寄り

「明久……」

と見詰めた

すると明久は、微笑みを浮かべて

「出てくるのを、待ってるからね。優麻」

と言って、優麻の頭を撫でた

その瞬間、優麻は明久に飛び付き、キスをした

「なっ!?!」

「んなっ!?!」

それを見た雪菜と沙矢華は、目を見開いた

そして優麻は、明久が驚きで固まっている間に素早く離れて

「またね、明久!!」

と言つて、那月とアスタルテの二人と共に、消えた
そうして、明久はしばらく固まっていた

だがその時、背後から凄まじいプレッシャーが放たれているのを感じて、振り向いた
その先に居たのは、涙目の雪菜と顔を真っ赤にした沙矢華だったのだが、その手には、
それぞれ鎗と剣があつた

「へいへいへい!! ちよつと待つておくんなまし!! 今のは、僕からやつた訳じゃない
んだよ!」

と明久は言うが、雪菜は

「先輩が隙だらけだから、今みたいに体を奪われたんじゃないんですか!」

と言われた

「うぐつ!」

そう言われたら、否定のしようがない明久

さらに

「あんたは……ここで死ねえええ!!」

沙矢華は、剣を大上段に振り上げた

「あーもう! なんでさあああああああ!!」

こうして、島を巡る事件は幕を下ろした

だがこの時、ある場所で

「では、私はこれで……止められるなら、止めてみますか？

静寂破り？」ペーパーノイズ

「いえ、やめておきます……絃神冥雅」

新たな火種が、撒かれていた

錬金術師の帰還

序章

文化祭が終わり、暫くしたある日の夜

ある秘匿施設の奥深く

そこでは、銃声が鳴り響いていた

その銃声を鳴らしていたのは、アイランドガードの精鋭小隊だった

普通ならば、獣人の部隊の一個中隊を抑えきれる実力を有している部隊であり、簡単には負けない

しかし

「がああああああ!?!」

その部隊隊員達は、まるで金属彫刻のようになっていた

それを成したのは、白黒チエツクのスーツを着た青年だった

その青年はある重厚なドアの前に立つと、右腕を大型のように変成させ、乱雑に振るった

その直後、そのドアは重い音を立てて崩れ落ちた

その中に居たのは、一人の白衣を着た中年男性

叶瀬賢生だった

賢生は振り向き、その青年を見ると

「……随分と、乱暴なノックだな」

と静かに言った

すると、青年は

「いやあ、悪いね。中々通してくれない上に、セキュリティが無駄に堅かったからね」

と言つて、変成させていた腕を元に戻した

それを見た賢生は

「……錬金術師か」

と目を細めた

すると青年は、恭しく頭を下げながら

「天塚です……天塚^{あまつかこう}丞」

と名乗った

それを聞いた賢生は

「天塚……確か、ニーナ・アデラードの弟子の中に、そんな名前の男が居たな……」

と思ひ出しながら言った

それを聞いた天塚は、酷薄な笑みを浮かべて

「流石は、元アルディギアの宮廷魔導技師。よくご存知だ」

と言つて、パチパチと拍手した

その間に賢生は、少しずつ下がった

しかし、賢生が居る部屋は狭い

すぐに、一番奥に着いてしまった

しかし天塚は、そんなことを気にした様子もなく

「さて、こちらの要求は一つだ……アレを渡してもらおうよ」

と言つた

それを聞いた賢生は

「アレとは、なんのことだ……？」

と問い掛けた

しかし天塚は

「やだなあ、惚けなくていいよ……こっちは知ってるんだ……あんたがああ教会から、師匠が大事に仕舞っていたアレを、回収したつてね」

と言つて、賢生に一步近づいた

それを聞いた賢生は、僅かに視線を部屋の一番組にある金庫に向けた

それを見逃さなかった天塚は、大声で笑い

「そこに有るんだね？ 素直に渡してくれるなら、痛い思いしなくて済むけど？」

と杖を脇に抱え直し、更に一步迫った

しかし、賢生は

「渡すわけには、いかんよ……あの少年と約束したからな……もう、違えないと！」

と言つて、机の上に置いてあつたカードホルダーを掴んだ

それを見た天塚は

「やれやれ、仕方ないなあ……本当はこういうこと、したくないんだけどねえ!!」

と右腕を刃物に錬成した

それから少しの間、激しい音が鳴り響いた

そして部屋から出てきたのは、血に濡れた右腕に赤い球体を持った天塚だった

天塚は、その球体を見ながら

「さあ……今回のことが終わったら、返してもらおうぞ！ 賢者!!」

ワイスマン

と憎しみの籠った声で言った

その言葉に、脇に抱えた杖の先端にあるドクロの装飾から

『呵呵呵……』

と笑い声が聞こえた……

こうしてまた、騒動の幕が上がる

錬金術師の奇襲

「……僕居る意味、あるのかな？」

と呟いたのは、ベンチに座っている明久である

今明久は、妹の風沙と監視役の少女、雪菜

中等部の聖女、夏音の買い物に付き合っていた

その買い物理由だが、中等部は二日後から本土に修学旅行に向かうのだ

その準備のために、なぜか明久も来ていた

だが明久は、流石に下着店に入る気はないので、外で待っていたのだ

そして、冒頭のセリフに繋がる

「……はあ……」

周囲を見回して、明久は深々と溜め息を吐いた

周囲には、同じように買い物に来ている学生達が多く来ている

それを見ていると

「どうも」

と明久に、一人の青年が声を掛けてきた

明久が視線を向けると、そこに居たのはチェック柄のスーツを着た青年だった
「……あんた、誰？」

無気力になりかけていた明久は、思わずそう問い掛けていた
すると、青年

天塚永は

「真理の探求者さ」

と答えた

その瞬間、明久は脳内に危険信号が鳴り響き、明久は直感に従って、一気に前に転がるように跳んだ

その直後、明久が座っていたベンチが真つ二つになり、金属質になった

それを見て、明久は

「いきなり、なんだ!？」

と怒鳴った

すると、永は

「答える義理は無いね!! 僕は、仕事をこなすだけさ!!」

と言つて、風沙達が入った下着店に変成した腕を伸ばした

それを見た明久は

「させるかよっ!!」

と木を思いきり、蹴り折った

その時になって、警報が鳴り響き、周囲に居た民間人達は避難を始めた

その間に、明久が蹴り折った木は金属に変わっていた

「これは……」

「邪魔だな、お前は!」

天塚はそう言うのと、明久に向けて腕を伸ばした

そこに

「はあっ!!」

と割り込む小柄な人影

その人影

雪菜は、雪霞狼を振るった

その銀閃により、汞の腕は半ばから切り裂かれた

「その槍は……なるほど。それが噂の、獅子王機関の七式突撃降魔機槍か……」

切り裂かれた腕と雪霞狼を見て、汞はそう言った

その間に、雪菜は

「先輩、無事ですか?」

と明久に問い掛けた

「ん、無事……いきなりだったよ」

明久がそう言うのと、雪菜は

「あの人は？」

と明久に問い掛けた

すると、明久は

「真理の探求者だってさ」

と言った

それを聞いて、雪菜は

「真理の探求者……錬金術師ですか……」

と呟いた

それを聞いた明久は

「錬金術師？ 初めて見た……」

と言った

錬金術師

それは、普通の石を金にしたり、植物を布に変えたり出来る

しかし、主流ではない

今は、一部の企業が医療用に使ってる位だ
アスタルテがその代表例となる

しかし、その利便性や柔軟性は非常に高い

過去には、剣をまるで鞭のようにして、数人を纏めて斬ったという記録すらある
「やれやれ……剣巫が邪魔をするのか……」

汞はそう言うのと、斬られた腕を鉄塔にくっ付けた

その直後、鉄塔を吸収して腕を再構築した

「うわあ……あんなことも出来るのか……」

その光景に、明久はそう漏らした

すると、汞は

「しかし……剣巫の相手は面倒だね……吸収も出来ないし……」

と言って、雪霞狼を見た

どうやら、雪霞狼が天敵のようだ

「僕の目的は、あの生き残りなのにさ……やれやれ……」

あの生き残り

それを聞いた明久は

「生き残り……まさか……夏音ちゃん？」

と言った

汞の条件に当てはまるのは、夏音だけなのだ

夏音の居た教会は、数年前に放火殺人が起きて、夏音だけが生き残ったのだ
どうやら、汞はそれを知っているらしい

「さてと……こうなったら、僕は逃げるよ」

汞はそう言うのと、二人に背を向けて走り出した

それを見た明久は

「待てー！」

と追い掛けようとした

だが

「先輩、待ってくださいー！」

と雪菜が引き留めた

その直後、明久の目の前に金属化した木が倒れてきた
どうやら、走り際に斬っていたらしい

それに登った時には、汞の姿は無くなっていた

それを確認した明久は

「はあ……また、何か起きるのか……」

と呟いた

そして、なるべく雪菜の方を見ないようにしながら

「あー……雪菜ちゃん……前、気にして頂戴」

と指摘した

それを聞いた雪菜は、着ていた制服に視線を降ろした

するとそこには、胸元が開いた制服が見えた

それを見た雪菜は

「つっー!？」

顔を真っ赤にして、叫ぶしかなかった

アデラード修道院

「あれ、那月ちゃんは居ない……?」

「はい……南宮教官なら、先程警察局に呼ばれて向かいました」

那月の部屋に入った明久の言葉に答えたのは、メイド服のアスタルテだった

明久は那月に、錬金術師のことを聞こうとしたのだ

しかし、目的の那月は居なかった

ふとその時、明久はアスタルテがホムンクルスだということを思い出して

「ねえ、アスタルテちゃん。錬金術師の目的って知ってる?」

と問い掛けた

するとアスタルテは

「広義的には、不老不死を目指している。と言えます」

と答えた

「不老不死……」

明久の呟きを聞いて、アスタルテは頷き

「その内の一人は、貴方です」

と明久を見ながら、そう言った

確かに、明久も不老不死の一人である

負の生命体の極致、第四真祖

それが、明久である

「そして、錬金術師が目指す不老不死。その一つの極致が、賢者の血液ワイスマンズ・ブラッドです」

「賢者の血液……？」

賢者の血液が何か分からず、明久は首を傾げた

するとアスタルテは

「はい……特殊な流体金属です。それにより不老不死となった代表的錬金術師が、ニ

ナ・アデラードです」

と説明した

「ニーナ・アデラード……ん？ アデラードって、あの教会の名前……？」

明久の呟きに、アスタルテは頷き

「アデラード修道院は、そのニーナ・アデラードの偉業を称えて名付けられた教会です。

なおニーナ・アデラードは、生きていれば270歳を越えます」

と言った

その後明久は、嫌な予感から更に調べることにした

しかし、情報通たる康太と基樹が早退

だから明久は、食堂に居る浅葱の所に行った

そこでは最早、お馴染みの光景が広がっていた

浅葱の前には、大量の皿が積まれている

それを見て固まっている、中等部生徒

そんな浅葱に近寄り

「浅葱、今いい？」

「ん？ なによ？」

明久が呼び掛けると、浅葱は飲み込んでから明久を見た

それを見た明久は

「ちよつとき、アデアロード修道院で起きた事件のことを教えてほしいんだ」

と言った

それを聞いた浅葱は、眉をひそめて

「アデアロード修道院って、あの丘のでしょ？ 私が小学校の時の事件ね……なにが起き

たんだったかしら……」

浅葱は思い出すようにしながら、スマホを操作した

しかし、片眉を上げて

「あれ、記録に残ってない……」

と呟いた

「残ってない？」

「ええ……管理公社のアーカイブに残ってない……これ、消された感じね……」

明久の言葉に浅葱はそう言つて、再びスマホを操作し始めた

「どうやら、探しているようだ

だが

「ダメね……これ、完全に隠蔽されてるわ……」

と言つた

それを聞いた明久は

「だったら、直接行つて調べるか」

と行つて、浅葱の所から離れた

すると浅葱は

「あ、こちら！ 待ちなさい！」

と浅葱は、明久を追いかけた

それから、数十分後

「なんで、浅葱まで来たのさ？」

「知りたくなるじゃない！」

明久と浅葱の二人は、アデラード修道院の近くまで来ていた

「いや、かなり嫌な予感がするから、帰ったほうがいいって！ 何があつたのかは、今度教えるから！」

「嫌よ！ 自分の目で見ないと、納得出来ないじゃない！」

やはりハツカーとしてのプライドなのか、自分で見ないと納得出来ないらしい

そんな浅葱を帰らせようと、明久は浅葱の肩に手を置いた

その時、明久と浅葱は朝方に降った雨により、足が滑った

「わあっ!？」

「きゃあ!？」

その見た目は、完全に明久が浅葱を押し倒した形である

その状態に、二人は固まった

そこに

「……こんな所で淫行とはな……いい度胸だ、お前達」

と不機嫌そうな声が聞こえた

それに驚き、明久と浅葱は素早く離れて、その声の主

那月を見た

「な……」

「南宮先生!？」

その時になつて二人は、アデラード修道院が見える位置に来て、ことに気づいた。「どうか那月ちゃん、何があつたのさ?」　　「なんで、警備隊がフル装備で?」

明久がそう問い掛けると、那月は

「教師をちゃん付けで呼ぶな!」

と言つて、扇子を振つた

しかし、明久に衝撃は来ない

だがその直後、明久の頭上から何かが落ちてきた

それは、蝶の形に切られた紙

「これは……雪菜ちゃんの式紙?」

それに見覚えがあつた明久は、そう言つて首を傾げた

すると、那月が

「ここからは、オフレコだ……」

と念押ししてきた

「吉井明久……叶瀬賢生を覚えてるか?」

「まあ、覚えてるよ?」

那月の問い掛けに、明久はそう返した

それほど時は経ってないのだから、忘れる訳がない

それを聞いた那月は

「昨日の朝、襲撃されて重傷を負った。幸いにも一命はとりとめたが、今も意識不明だ」と言った

それを聞いた明久は

「まさか、犯人はチェック柄のスーツを着た男？」

と言った

それを聞いた那月は、少し驚いた表情で

「天塚を知ってるのか？」

と明久に問い返した

すると明久は

「昨日の昼過ぎに、襲撃された」

と言った

それを聞いた那月は、舌打ちし

「ちいっ……動きが早いな……狙いは、夏音だろうな」

と呟いた

それに首肯し、明久は

「かなりしつこく狙ってるみたいだったよ」

と言った

それを聞いた那月は、しばらく黙り

「やはり、一度島外に避難させる方が正解だな」

と言った

それを聞いた明久は

「そして、帰ってくるまでに捕縛か打倒する……でしょ？」

と言った

それを聞いた那月は、頷きつつも

「だが、貴様は動くな。厄介事にしかならないからな」

と前置きした

その言葉に、明久は

「僕は平和に生きたいんです。でも、気付けば渦中に居るのは仕方ないんだと思うんで

す……！」

と言いながら、両手両膝を突いた

それを聞き流し、那月は

「とりあえず、しばらくの間は、ここに近寄るな。いいな？」
と念押しして、二人に学校に戻るように言ったのだった

出張所

「へいへい、雪菜ちゃん……ここは流石に……」

「先輩、何か勘違いしてませんか？」

放課後、明久と雪菜の二人はある場所に居た

そこは、所謂そういうことをするための地区だった

その証拠に、周囲にはピンク色の店や宿泊所がいくつも建っている

なぜ、二人がそんな場所に居るのか

それは、学校から出た後に雪菜が

『先輩、行きたい場所があるんですが、いいですか？』

と言ってきたからだ

最初面白い物かと思いい明久は、二つ返事で了承した

しかし実際に連れて来られたのが、そこだった

「先輩、目を閉じててください」

「……」

雪菜に言われた通り、明久は目を閉じた

そして、内心で

(いいか、僕。冷静になるんだ。いくらなんでも、これは……いくら雪菜ちゃんが連れてきたからとはいえ、制服姿で入るのは……いや、そもそもまだ僕達は学生であつて……)と思考していた

すると

「もういいですよ」

と雪菜に言われたので、目を開いた

そして見えたのは、一軒の場違いな古物商の店だった

「()は……」

「獅子王機関の出張所です」

雪菜はそう言うと、その店に入った

「いらつしやいませ」

そう出迎えたのは、何故かメイド服姿の沙矢華だった

「はい? 煌坂さん!？」

明久が驚いていると、雪菜が

「先輩、これは式神です」

と冷静に教えた

「式神？ それにしては、凄いいてる……というより、なんでメイド服？」

と明久が、不思議そうに首を傾げた

すると

「許可もなく、煌華燐の矢を全部使いきってしまったバカな弟子へのお仕置きさね」

と女性の声が聞こえた

それを聞いた二人は、弾かれるように声が聞こえた方向を見た

タンスの上に居たのは、一匹の黒猫……に見える式神だった

明久でも式神と分かった理由だが、その黒猫が猫らしからぬ気配を放っていたからだ

その黒猫の前で、雪菜が片膝を突いて

「お久しぶりです、師家様。劍巫、姫終雪菜。ここに参りました」

と言った

すると、黒猫は

「ん、久しぶりだね。杜に居た時以来かい？」

と返した

それを聞いた雪菜は

「はい。師家様も壮健そうで、何よりです」

と言った

それを聞いた黒猫は

「それで、鎗は？」

と雪菜に問い掛けた

その問い掛けに、雪菜は

「(ハハハ)」

と背負っていたケースごと掲げた

そのケースを、沙矢華式神が受け取り、中から雪霞狼を取り出した

そして、鎗を一瞥し

「ふむ……鎗には受け入れられてるようだね……ただ、眼に頼り過ぎだよ。精進しな」

と言った

それを聞いた雪菜は、無言で頷いた

そして沙矢華式神が、雪霞狼をケースに収納

それを奥に仕舞うと

「それでは……劍巫、姫柊雪菜……この時を以て、一時第四真祖監視の任を解く………たまには、ただの学生らしく過ごしな」

と言った

それを聞いた雪菜は、少しすると

「やはり、先輩を一人にするというのは心配です！　今回、私は残りますす！」
と力説した

それを聞いた明久は

「雪菜ちゃん。僕をなんだと思ってるのさ」

と突っ込んだ

それに同意するように、黒猫は尻尾で畳を軽く叩き

「大丈夫さ。そこは、対策を考えている」

と言つて、明久を見た

そして、微笑みながら

「あんたが、今の第四真祖かい……」

と言つた

それを聞いた明久が、頷くと

「あの眠り姫アツローラを助けてくれて、ありがとうね」

と言つた

その直後、明久の脳裏に何かが走つた

それにより、明久は激しい頭痛に襲われながら

「あんた……先代を……知ってるのか!？」

と問い掛けた

すると黒猫は

「知ってるさ……あの眠り姫のことは、よく知ってるさ……」

と懐かしみながら、肯定した

それを聞いた明久は、更に問い掛けようとした

だがその時、ポケットの中で携帯が震えた

見てみれば、電話だった

相手は、浅葱

「浅葱? どうしたの?」

と明久が問い掛けると、浅葱は走っているらしく少し荒く呼吸しながら

『明久。あんた、私の誕生日プレゼントに買ったイヤリング、覚えてる?』

と問い掛けてきた

それを聞いた明久は

「ああ、覚えてるよ? 高かったのを覚えてる。それがどうしたの?」

と言った

すると浅葱は

『それがさ、あの修道院付近であんたと纏れ合った時に落としちゃったみたいなのよ』
と言ってきた

それを聞いた明久は

「待って!! まさか、アデラード修道院跡地に向かっているの!？」
と驚きながらも、問い掛けた
すると浅葱は

『そうよ……今、探してるところ』

と言った

それを聞いた明久は

「何やってるの!! 今すぐ戻って!! 今度一緒に探すから!!」

と怒りながら言った

すると浅葱は、怪訝そうに

『何怒ってるのよ……』

と言ってきた

だが明久は

「今そこら辺は、凄く危ないんだ! 今すぐ戻って!!」

と言った

その時だった

『何、あれ……警備隊や、研究員が……彫像になってる?』

と浅葱の、呆然とした言葉が聞こえた

それを聞いた明久は、浅葱に逃げるように伝えようとした

その時、何かが崩落するような音が聞こえた

「浅葱! 今の音は何!? 何があったの!」

と問い掛けたが、返事はこない

「浅葱! 聞こえてる!? 浅葱い!!」

明久が二度三度と呼び掛けると、遠くから

『ごめん、明久……あたし……ミスったみたい……』

と弱々しい浅葱の声が聞こえた

「待ってて、浅葱!! 今から行くから!!」

明久はそう言うと、出張所から飛び出した

自身の嫌な予感を否定するために、全速で走り出したのだった

怒りの拳

「あ……さ、ぎ……？」

アデラード修道院跡地に着いた明久が見つけたのは、血溜まりの中倒れている浅葱だった

その出血量は、明らかに人間の致死量を越えている

吸血鬼ならば、まだ治る可能性はある

しかし、人間たる浅葱は……絶望的だった

倒れている浅葱の近くで膝を突き、明久は

「……嘘でしょ……こんなところで、死ぬようなキャラじゃないでしょ!？」

と思わず叫んだ

そんな明久に、雪菜も思わず俯いていた

雪菜も、浅葱の人柄には好意を覚えていた

その浅葱の無惨な有り様に、拳を握りしめていた

「僕が……ここに連れてきたから……僕が……つあああああああ!？」

浅葱を死なせてしまったという絶望と、浅葱を死なせる原因を作ったという怒りから、明久は叫び始めた

その直後、明久の全身から魔力が溢れ始めた

すぐにそれは、周囲に波動として衝撃を走らせた

それは勿論、近くに居た雪菜にも襲いかかった

「先輩!？」

その一撃は、雪菜と共に来ていた沙矢華式神によつて防がれた

しかし雪菜は、放置する訳にはいかないと判断

自身に防御の術式を掛けると、ゆっくりと近づき始め

「先輩! 落ちて着いてください! 先輩!!」

と明久に声を掛けた

しかし、明久は叫び続けている

だから、意を決して雪菜は

「先輩!!」

と明久の首筋に抱きついた

「つつ?!」

「落ちて着いてください、先輩!! これで、先輩の正体が露見して、先輩が討伐されるよう

な事態になれば、浅葱先輩がもっと可哀想です!!」

明久の意識が向いた直後、雪菜はそう言った

すると、徐々に明久から溢れていた魔力の奔流が収まり始めた

そして、収まると

「ゆ……き、な……ちゃん……」

明久はようやく、雪菜を認識した

「はい……」

明久が辿々しく呼ぶと、雪菜は頷いた

そして、ようやく落ち着いた明久は、雪菜が血を流していることに気付いて

「雪菜ちゃん……怪我……」

と雪菜の頬に、ゆっくりと手を当てた

すると雪菜は、手を頭に持っていき

「この位ならば、大したことありません」

と言って、小声で呪文を唱えて止血

そこで二人は、沙矢華式神の方に視線を向けた

すると沙矢華式神は、一礼して札へと戻った

「どうやら、呪力を使い果たしたようです」

と雪菜が言った

その直後

「やれやれ……逃げられちゃったよ……上手く行かないものだな……」

と軽薄な声が聞こえた

その声を聞いて、雪菜が視線を上げるとチェック柄のスーツを着た男

天塚が居た

明久は、視線を向けずに

「一つ聞くよ……天塚永……」

と努めて冷静に、呼び掛けた

「なんだい、第四真祖？」

呼び掛けられて気づいたと言わんばかりに、天塚は明久に視線を向けた

すると明久は、ゆっくりと立ち上がり

「浅葱を、こんな風に殺したのは……お前か？」

と問い掛けた

すると、天塚は

「浅葱って、誰だい？ その辺に転がってる、死体のどれかな？」

と笑いながら言った

それを聞いた雪菜が、怒りから睨みつけていると

「もういい、分かった……それ以上喋るな、錬金術師風情が……」

地を這うような声で、明久は言った

初めて聞いた声音と言葉遣いに、雪菜は驚いた表情を浮かべ、天塚はムツとした表情で何かを言おうとした

だがその瞬間、天塚は驚愕した

何故ならば明久が既に肉薄し、左拳を握りしめていたからだ

そして明久は、冷酷な光を宿した目で天塚を見ながら

「あの世で、貴様が殺した人達に土下座してこい」

と言った

その直後、まるで大砲のような轟音と共に、左拳を天塚の胸部に叩き込んだ

その一撃により、天塚は数m吹き飛び、壁に激突

その壁を突き抜けて、瓦礫に埋まった

「先輩……」

「……こいつだけは、生かしておけない……」

生まれて初めて、明久は殺意と共に攻撃を繰り出した

それ自体に、後悔は無かった

言った言葉に、否やも無かったからだ

先程の一撃の威力は、吸血鬼としての身体能力と呪力による身体強化が重ねてあったその威力は、推して知るべし

生身の人間ならば、一撃で即死である

その時だった

「酷いなあ……」

と声が聞こえた

二人が見てみれば、衣服はボロボロだが天塚が立っていた

よく見れば、天塚の胸部に黒いピンポン球サイズの球が埋まっている

「人間の姿を、保てないじゃないか……」

そう言った直後、球に大きなヒビが入り、まるで金属で出来たスライムのようになつた

それを見た明久は、目を見開き

「人間じゃない!?!」

と驚いた

すると雪菜は

「まさか……ワイスマンズ・ブラッド賢者の血液!?!」

と言った

その瞬間、二人目掛けて触手が伸びた

だが二人は、跳躍して回避

そして明久は

「人間じゃないなら……容赦しない……疾こく在いれ！ 龍蛇アル・メイサ・メルクーリの水銀!!」

と双頭の龍蛇を喚んだ

そして、最早人の姿じゃなくなった天塚を指差し

「全て食い尽くせ」

と冷酷に命じた

その命令を受けて、龍蛇の水銀はその双頭の顎門であつという間に全て食い尽くした

そして明久は、欠片が残ってないか確認すると

「戻れ……」

と龍蛇の水銀を消した

そこに、雪菜が歩み寄り

「先輩……」

と辛そうな表情を浮かべた

すると、明久は

「あいつを殺しても……浅葱は……」

と言いながら、拳を握りしめた

その直後

「うわっ!! なんじゃこりゃ!!」

と声が聞こえた

二人が振り向いた先では、浅葱が起き上がっていた
起き上がった浅葱は、全身を見ると

「な、何が起きたの?」

と困惑した

なお困惑していたのは、二人もだった

浅葱の出血量は、間違いなく致死量を越えていた

だが、見える限り怪我は塞がっている

何があつたのかは、分からない

だが明久は、額に手を当てて

「はは……良かった……本当に、良かった……」

と言葉を漏らした

この時、明久と雪菜の二人は、解決したと思つた

だが、これはまだ序章に過ぎなかったのだ
賢者の血液を巡る戦いは、始まったばかりなのだから

古の錬金術師

浅葱が奇跡で生きていたことを喜んだ後、明久は浅葱に自分が着ていたジャージを上着として着せた

そしてすぐに、アデラード修道院跡地から離れた

すると、道路を次々とパトカーや装甲車が走っていく

警備隊が向かっていったようだ

それを見送り、ある信号のところまで来た

すると、雪菜が

「では、先輩方。私はここで」

と言った

そして明久に小声で

「師家様に報告してきます」

と告げた

それを聞いた明久は

「あの式神壊しちゃったけど、大丈夫？　今度は雪菜ちゃんバージョン作られないよね？」

と問い掛けた

すると、雪菜は不安げに

「分かりません……何せ、気まぐれな方ですから……」

と言って、信号を渡っていった

雪菜を見送ると、明久は浅葱を見て

「流石に、その状態で帰す訳にはいかないよねえ……」

と言葉を漏らした

今の浅葱は、明久が渡したジャージで辛うじて隠しているが、血塗れなのだ

下手すれば、警備隊に尋問されるのは間違いない状態である

そして明久は、少し悩むと

「仕方ない……ここから、近いしね」

と言って、ある方向を見た

それから、数分後

「ただいまー」

「あ、おかえりー。牛乳、買ってきてくれた？」

明久は、自分の部屋に戻ってきた

そして帰ってきた明久に、凧沙がそう問い掛けてきた

「ああ……ごめん、携帯のバッテリー切れてて見てない……」

「ええ！ 今日のご飯、シチューなのに！ 牛乳無くて、どうするの!? って、誰か居るの?」

明久の言葉を聞いた凧沙は、憤慨した表情で明久に詰め寄った

その時、明久の後ろに他に誰か居ることに気付いた

「ああ、うん……実は……」

「こ、こんばんは……」

明久が後ろに視線を向けると、浅葱が気まずそうに挨拶した

「え、浅葱ちゃん!? 何事!？」

浅葱の姿を見て、凧沙は思わず混乱した

そして、数分後

「牛乳はあたしが買ってくるから、明久君は準備をお願いね。あ、浅葱ちゃん。洗面台の化粧品は使つていいからね。下着も、適当に買ってくるから」

と凧沙は、買い物に出掛けた

それを見送った明久は

「あ、浴室はそっちね。洗濯機に入れとけば、僕が回すから」と浅葱に言った

それを聞いた浅葱は、言われた通りに浴室に向かった

そしてジャージを脱いで、改めて自分の惨状を目の当たりにした

着ていた制服はボロボロに切られ、素肌には夥しい量の血が着いている

そして最後に、自分の片耳に触れた

そこに着いていた筈のピアスは、未だに見つかっていない

だが今は、現状をどうにかするのが先だと判断し

「よし」

と気合いを入れてから、服を脱いでいき、浴室に入った

鏡で見ると、自分の体に付着している血の量に改めて驚く

「うわっっちゃあ……この量、本当なら即死級じゃない……」

浅葱は思わずそう言ってから、シャワーに手を伸ばした

そうして、シャワーで全身の血を流し始めた

ふとその時、胸元で少しひきつる感覚がした

「ん？ なにこれ……？」

その時になって初めて、浅葱は自分の胸元に赤い少し大きめのビー玉サイズの玉が着

いていることに気付いた

それに軽く触れた直後、浅葱は意識を失ったのだった

そして、浅葱が入って十数分後、明久は一人厨房で料理をしていた

予め何を作るのかは聞いていたので、後は失敗せずに作るのみである

そして、明久が水分補給にと水を飲んだ時、ドアが開く音が聞こえた

それを聞いた明久は、浅葱が出たのかなと思つて視線を向けた

その直後

「ぷっぷえぶぶ!?!」

明久は思わず、水を吹き出した

何故ならば現れた浅葱は、一糸纏わぬ姿で居たからだ

「あ、浅葱さん!?! なにしてるんですかにやー!?!」

「ん? 浅葱とは、この体のことか?」

明久の言葉を聞いて、浅葱(?)はそう問い掛けた

その口調と雰囲気から、明久は

「待って……貴女、誰?」

と問い掛けた

すると、浅葱(?)は

「ん？ 私は、トリス・メギストスの後継者と名高き錬金術師。ニーナ・アデアードよ」
と告げたのだった

ニーナ・アデラード

ニーナ・アデラード

約三百年前の大錬金術師

そのニーナは、ハードコアという金属製の玉に自身の意識と魂を移し、更に肉体をワイズマンズ・ブラッド賢者の血液で構成することにより、無限の命を得ることに成功した錬金術師の一人だ

そんな人物が今、明久の前に居た

しかも、明久が殺した天塚はそんなニーナの弟子の一人だと言う

(どうしよう……そいつを殺したこと、一応謝るべきかな……)

天塚のことが許せなかったことは事実だが、天塚はニーナの弟子の一人だった

だったら、形式だけでも謝るべきか明久は悩んだ

すると、ニーナが

「どうした、第四真祖よ」

と問い掛けてきたどうやら、明久が悩んでいることを察したようだ

すると、明久は

「えっと……その天塚のことなんだけ……」

と言いつらそうにしながら、殺したことを謝罪しようとした

すると、ニーナは

「状況は知っている……それにな、あれは天塚本人ではない」

と告げた

それを聞いた明久は

「本人じゃない!?!」

と驚いた

すると、ニーナは

「うむ。主が殺したのは、ダミーコアを使った分身の一つよ」

と説明した

ダミーコアというのは、天塚が造り出したハードコアの劣化版とも言わべき代物

ハードコアと違うのは、ダミーコアは一つには人間一人の魂と意識を入れられない

その代わりに、複数個用意すれば、ダミーコアと賢者の血液を使った分身を複数造

り出せるようだ

それを聞いた明久は

「つまり、僕が殺したのは……限り無く本人に近い偽者……ってことか」

と呟いた

それを聞いたニーナは、胸元に手を当てて

「この娘には、すまないことをしてしまった……ワシの支配下を離れた賢者の血液で、危うく死ぬところだった」

と申し訳なさそうに言った

そもそも、浅葱が生きている理由はなんなのか

それは、浅葱が倒れた時に伸ばした手が、転がっていたハードコアに触れて、ニーナは浅葱を生かすために一時的に浅葱の体にハードコアを融合させ、近くに残っていた極僅かか賢者の血液を使い、浅葱の体を治したらしい

それを聞いた明久は

「まあ、ニーナのお陰で浅葱は助かった訳だし……ありがとう、ニーナ」

と頭を下げた

するとニーナは、一瞬驚いた表情をしてから

「第四真祖よ……主、甘いか優しいと言われたことはないか？」

と明久に問い掛けた

それを聞いた明久は、苦笑いを浮かべて

「ん……バカってなら、結構言われたね」

と言った

それを聞いたニーナは、くくつと短く笑い

「なるほどな……だが、主のは善きバカだ」

と言った

この後、買い物に出ていた風沙が帰宅したので、夕食にした

なおニーナの服装だが、今は明久の予備のジャージを着ている

最初は裸だったが、明久が鼻血を流すと居間のテーブルの上にあった花を使って、

シーツを錬成

だが、余りにも刺激的な姿だったので、ジャージを貸したので

そして夕食後、明久はニーナとまだ話をしたかったから、明久の自室で待っているように頼んで、風沙と一緒に片付けをした

そして部屋に戻ると、ニーナは明久のベットで寝ていた

それを見た明久は、頭を掻いてから

「まあ、明日でいいか……」

と言って、着替えと寝間着を持って自室から出た

そして入浴すると、居間のソファで寝たのだった

その頃、島の港湾区画では

「どうだ、康太。見つかったか？」

「……この近辺に居ることは分かっているが……」

基樹と康太が、何かを探していた

そして、康太の報告を聞いた基樹は

「……うしっ！ だったら、この辺に仕掛けるか。人的被害を出さないって意味なら、この辺が最適だ」

と結論着けた

そして、賢者の血液を巡る戦いは加速する

復活

翌日の朝九時頃

明久は、甲高い悲鳴で目を覚ました

その悲鳴を聞いた明久は、悲鳴の上がった場所

自室に駆け込み

「何(なに)と!?!」

と声を上げた

するとベッドの上で、半泣きの浅葱が

「明久……私、なんでこんな格好で、明久の部屋で寝てたの……?」

と、明久に問い掛けてきた

それを聞いた明久は

(あ、浅葱に戻ってるのかあ……)

と気付いた

迂闊にニーナと名前で呼ばなくて、良かった

と、明久は思った

だがその間に、浅葱は

「シャワー浴びてる所までは、覚えてるのよ……その後が覚えてない……明久、もしかして私……」

と潤んだ目を、明久に向けた

どうやら、所謂桃色な妄想をしているようだ

「あー……昨日浅葱ね、シャワーを浴びてる途中で気絶したんだよ。雪菜ちゃん曰く、精神的疲労が重なったのが原因らしいよ」

明久はとりあえず、ニーナと予め決めていたでつち上げの理由を言った

それを聞いた浅葱は、まだ混乱しているらしく

「つまり……まだ、シてない……?」

と涙目で問い掛けてきた

それを聞いた明久は、良心の痛みを堪えながら

「浅葱の予想していることは、起きてないよ」

と言った

それを聞いた浅葱が、安堵した

その直後だった

「つつ!? 今のは!?!」

明久は、膨大な魔力による揺れを感じた

その発信源は、港湾地区

「今のは……賢者の血液が、目覚めたか」

「ニーナ!? 起きたの!?!」

明久が振り向くと、先ほどまで涙目だった浅葱が、真剣な表情を浮かべていた

「この娘、意外と早起きなのだな。まさか、ワシより早く起きるとはな」

「それより、賢者の血液が目覚めたって、本当なの!?!」

と明久が問い掛けると、ニーナは

「ああ……今の魔力波は、ワシが知る奴のモノだ」

と頷いた

そして立ち上がると、着ていた明久のシャツや短パンが、一瞬にして浅葱の制服に変わった

どうやら、錬金術で変えたらしい

それを見た明久は

「……僕の服が……」

と落ち込んだ

それを聞いたニーナは

「ああ、すまん。少し動き辛かったからな……一応戻せるが、その場合は少し縮むぞ？」

と言った

それを聞いた明久は、深々と溜め息を吐いて

「予備ならあるから、大丈夫……とりあえず、現場に急ごう！」

と言った

そして数分後、着替えた明久はニーナを抱えて港湾地区目指して、吸血鬼の身体能力で跳んだ

風沙だが、すでに家を出ている

その理由だが、本土への就学旅行のために検疫局のある港に向かったのだ

絃神島では飛行機と船で、本土と行き交うことが出来る

入るのは比較的簡単だが、出るのは非常に面倒なのだ

血液検査から、未登録魔族でないかの確認

変な病気に掛かってないかや、前科の有無

そういつた検査に、かなりの時間を費やすのだ

だから、最低でも二時間前に空港か港で検査をしないといけない

そして出るのを認められると、体の中にナノマシンサイズの発信器を入れられるのだ
それでようやく、船が飛行機に乗るのが許されるのだ

だから風沙は、かなり早くに港に行ったのだ

「これは……」

到着した明久は、港湾地区の惨憺たる有り様に絶句していた

積み上げられていただろうコンテナは、軒並み破壊されており、一面が火の海だった
「これは……魔力によつて撃ち出した荷電粒子ビームだな……」

「ビーム!? そんなのも撃てるの!?!」

ニーナの言葉を聞いて、明久は驚愕した

するとニーナは、足下に落ちていた骨を拾った

「その骨は……」

「……10年前の犠牲者だ……修道院には、夏音を含めて、多くの霊媒者が居た……その
者達の血肉を糧としたのだろう……」

明久の問い掛けに、ニーナは辛そうにそう言った

出会って短いが、明久はニーナが優しい性格だと思っていた

浅葱を治したこともだが、浅葱への説明用の言葉を考えるのを手伝った

恐らくだが、修道院の子供達が死んだことにも心を痛めていることが予想出来た

ふとその時、明久はあるモノを見つけた

それは、赤いスライムのような物体だった

しかもそれは、周囲に飛び散っていた

「ニーナ……これ……」

と明久が問い掛けると、ニーナは

「ふむ……奴の支配下から外れた、賢者の血液だな……」

と言った

どうやら、それが賢者の血液らしい

それを見たニーナは、少し間を置くと

「ワシの全身を作るには、ちと足りぬが……」

と言って、胸元を開けた

「に、ニーナ？」

明久が問い掛けるが、ニーナは無視

胸元に有ったハードコアを、取り外した

そして、数十秒後

「ふむ……こんなものか」

褐色肌のもう一人の浅葱が、明久の目の前に居た

「なんで、浅葱の姿？ しかも、胸が大きくない？」

「む？ ワシの全身を作るには、賢者の血液の量が足らなかったからな。見た目は、娘の姿を参考にさせてもらった。胸は、主へのサービスも含めた」

明久の問い掛けに、ニーナは意地の悪い笑みを浮かべながらそう言った

それを聞いた明久は、深々と溜め息を吐いた

その後

「金属スライム風情が、やってくれる……」

と声が聞こえた

それを聞いた明久は、声のした方に視線を向けた

そこには、苦々しい表情の那月が居た

「那月ちゃん……」

「また動いたか、このバカは……む」

その時になって那月は、倒れてる浅葱とニーナを見た

そして、数瞬して

「ニーナ・アデラードか」

と気付いた

すると、ニーナも

「この島を守護する、真性の魔女か……」

と那月の正体を見破った

「那月ちゃん、賢者の血液が……」

「分かっている。午前10時30分発、本土行きの船を追い掛けたようだな」

明久を遮るように、那月はそう言った

それを聞いて、明久は

「そうか！ 夏音ちゃんや、凧沙。雪菜ちゃんが狙いか!!」

と敵の狙いに気付いた

それを聞いた那月は、頷いて

「追い掛けたいが、最早私の魔術でも届かない……だから、出番だぞ。腹黒皇女」

と言った

その瞬間、明久の右側に音も無く一人の女性が姿を見せた

「あ、ユステイナさん」

その人物は、ラ・フォリアが夏音の護衛として派遣した、ユステイナ・カタヤだ

見た目は非常に出来る女性なのだが、その正体は要撃騎士だ

その戦闘力は、獣人化した獣人種にも勝てる程だ

しかし残念なことに、忍者フリークなのだ

そのために、武装も剣ではなく小太刀やクナイなのだ

そのユステイナは、懐から端末を取りだし

「殿下、どうぞ」

と明久の前に掲げた

その画面には、ラ・フォリアが映っていて

『間に合ったようですね、明久♪』

とラ・フォリアが言った

それを聞いた明久は、嫌な予感に襲われながらも、それに頼るしかない。とも察していた

こうして、バカは渦中に突っ込んでいく

正体

「つつ……まさか、海上にまで追い掛けてくるなんて……い！」

と言ったのは、操舵室の惨劇を目の当たりにした雪菜だった

操舵室内には、無惨にも惨殺された操舵手や航海士達の遺体が転がっていた
しかも、自動航法装置は破壊されている

確かに気付けば、船の進みが遅くなっている

「……仕方ありません」

雪菜は一人呟くと、荷物が置いてある大広間に向かった

そこでは、他の学生達がトランプをしたり寝ていたりしている

雪菜その荷物の中から、あるものを取り出した

すると、トイレから戻ってきたらしい風沙が

「雪菜ちゃん。何かあったの？ 先生達も、なんかピリピリしてるし……」

と問い掛けてきた

すると雪菜は、取り出した物を制服の裾に隠して

「大丈夫だよ、 凧沙ちゃん」

と言うと、その大広間から離れた

そして少しすると、一気に駆け出した

目指すは、適度な広さの空間

車収容所だった

そこには本土に輸送するためか、数台の絃神島製の車が駐車されていた

雪菜はその影に隠れながら、周囲を見回した

そこに

「やっぱり居たね、獅子王機関の劍巫」

と頭上の通気孔から、まるでスライムのように汞が現れた

「天塚汞!!」

雪菜はバックステップで距離を取ると、裾の中から持つてきた物

一対のナイフを構えた

「タダのナイフで、戦えるのかい!？」

汞はそう言うのと、腕をまるで鞭のように伸ばした

その腕を雪菜は

「はあっ!」

両手に持っていたナイフで、切り捨てた
すると、汞は

「そのナイフ……魔術を付エンチャント加された隕鉄のナイフか!!」

と雪菜の持っているナイフの正体に気づいた

それは、希少な隕石の金属を使ったナイフだったのだ

しかも、魔術による強化が施されているので、簡単には吸収出来ないのだ

「貴方の狙いは、夏音ちゃんですね？ 何故ですか？」

雪菜が油断なく構えながら問い掛けると、汞は近くの鎖の束を使って腕を再構築

そして、雪菜を見ながら

「なあに。10年前の続きをしようとしているのさ。だって、彼女だけが生き残ったんだよ？ 余りにも不公平じゃないか」

と答えた

それを聞いた雪菜は

「やはり、10年前の事件は、貴方が……」

と睨んだ

そこに

「あ……」

と声がした

ふと気付けば、車を挟んだ雪菜の右側に夏音が居た

「ははっ！ 自分から来てくれるとはね!？」

汞はそう言うのと、夏音目掛けて腕を伸ばした

だが、雪菜が直ぐ様車を側転の要領で乗り越えて、夏音の前に着地

汞の腕を、再び斬った

すると汞は、舌打ちしてから

「本当に邪魔だな、劍巫!!」

と雪菜を睨んだ

すると雪菜は、肩越しに夏音を見て

「夏音ちゃん、なんでここに!？」

と問い質した

すると夏音は、汞を見て

「彼に、言いたいことがあります」

と言った

それを聞いて、汞の視線が夏音に向けられた

すると夏音は

「貴方は、可愛そうな人でした……偽りの記憶を与えられて、あの人の言いなりにさせられてました」

と語りだした

それを聞いた汞は、困惑した様子で

「何を……言っている……？」

と夏音に問い掛けた

すると夏音は

「貴方は、全てが偽り……記憶も、正体も、目的も……全てが、偽物でした」

と言った

それを聞いた汞は、頭を押さえて

「黙れ!!」

と三度、腕を伸ばした

だがその攻撃もまた、雪菜に斬られた

すると汞は、今度は車に切断面をくっ付けて

「アアアアアアアア!!」

と思い切り、振り回した

それは防げないと察した雪菜は、夏音を抱き締めて床に伏せた

その直後、二人の頭上を凄まじい勢いで車が振り回された

それが終わったのを確認すると、雪菜は顔を上げた

するといつの間にか、永は居なくなっていた

しかし、上の通気孔が切られている

どうやら、そこから逃げたようだ

すると雪菜は、夏音に

「夏音ちゃん……さっきのは、どういうことですか？」

と問い掛けた

その問い掛けに、夏音は

「彼は、全てが偽りの存在でした……人の体を取り戻すと言ってましたが、そもそも何故そうなったのかを、覚えてませんでした……」

と語った

それは恐らく、10年前当時に修道院に居たニーナが問い掛けたのだろう

その問い掛けに、永は今と同じように暴れて、あの事件

夏音一人を残し惨殺し、修道院を燃やしたのだろう

「……なるほど……」

雪菜は頷くと、立ち上がり

「夏音ちゃんは、笹崎先生か西村先生の近くに居てください！」
と言って、駆け出した

そんな雪菜に、夏音は

「あ、あの……頑張ってくださいでした！」

と見送った

その後雪菜は、汞を探して前甲板に出た

その後

「僕が、偽物だって？ そんな訳が……」

と汞が現れた

その姿は、何処か弱々しい雰囲気醸している

「天塚汞……貴方は……」

雪菜が憐れみを含んだ目を向けながら、何かを問い掛けようとした

しかし、それより早くに汞が

「僕には、それしかないんだ!!」

と、両腕を伸ばした

その後、二人の耳に独特の金属質な重低音が聞こえてきた

それを聞いた二人は、同時に音が聞こえてきた方向を見た

それは、細長いシルエットの兵器

「なっ!?!」

「じゅ、巡航ミサイルだと!?!」

そのミサイルは、まっすぐに船に向かってくる

あと数秒もしない内に、船に直撃する

だがその時、ミサイルが霧化

船を素通りした

「今の気配は……まさか!?!」

その霧の気配に、雪菜はある人物が脳裏に浮かんだ

その直後

「あ痛たたた……やっぱり騙されたでしょ、あれ!?!」

とその人物の声が、僅かに残っていた霧の中から聞こえた

しかも、無防備になっていた汞を雷撃が攻撃した

そして

「よ、天塚汞……決着を着けに来たよ」

霧が晴れた場所に、明久が居た

危機

「先輩……」

霧の中から現れた明久を見て、雪菜は安堵の表情を浮かべた

しかし、直ぐに明久をキツと睨んで

「巡航ミサイルで突っ込んでくるなんて、どういう神経してるんですか!？」

と明久に抗議を始めた

明久は、抗議を始めた雪菜に叩かれながら

「一応あれ、新型の飛行機らしいよ!?! 中には操縦レバーあったしね! 自動操縦だつ

たけど!！」

と説明を試みた

しかし雪菜は

「そんな簡単に分かるような、嘘を言わないでください!!！」

と言いながら、明久を叩き続けた

それに対して明久は

「詳しくは、ラ・フォリアに聞いてください！　というか、雪菜ちゃん！　そのナイフ、対魔族術式が付与されてるでしょ!?　痛い！　結構、痛いからあ!!」

と雪菜を止めようとしていた

なお、明久とニーナが乗ってきた巡航ミサイル

もとい、新型飛行機の名前はフロツティ

アルディギア王国が試作中だったという、飛行機らしい

らしいというのは、余りにも信じがたい代物だったからだ

確かに乗れたが、それは余りにも居住性が悪く、人二人がギリギリで入れるスペース
その中に、申し訳程度にクッションと操縦レバー、モニターが有るだけだった

しかも、速度も速すぎた

普通の人間だったら、間違いなく失神していただろう

そんな速度で、明久とニーナの二人は船に向かった

それしか方法が無かったから仕方なかったが、文句は言いたかった

そうして船に迫った所で、明久はミサイル諸とも霧化して、直ぐに自分達のみ実体化
船に着地したのである

そしてフロツティだが、燃料切れで海に没した

その間に、天塚は雷撃のダメージから回復

立ち上がろうとしていた

そこに、ニーナが歩み寄り

「もうやめよ、天塚……お主にも、もう分かっているはずだ」

と優しく言った

「ニーナ……アデアロード……」

嘗ての師匠の登場に、天塚の瞳が揺れた

それを見たニーナは

「お主は、賢者ワイズマンに騙されているのだ……偽りの記憶、憎しみ……それらを植え付けて、お

主を自分の手駒にしていたのだ……」

と語り掛けた

それを聞いた天塚は、足を震わせながら立ち上がり

「あんたまで、そんなことを言うのか……師匠！」

とニーナを睨んだ

それを見た明久は、落ち着かせた雪菜に

「どうい（い）と（と）？」

と問い掛けた

すると雪菜は

「彼は、賢者に生み出されたホムンクルスなんです……しかも、自分が人間だったが、賢者によりその半身を奪われたという偽りの記憶を植え付けられていた……そうすることで、賢者は彼を呈のいい手駒にしていたんです」

と説明した

それを聞いた明久は

「つまり、その賢者という外道を倒せばいい訳か……」

と納得した

だが、ふと

「……その外道は、どこ……?」

と明久は首を傾げた

その直後、膨大な魔力が発せられた

その発信源は、海中から

「海中!?!」

「しまった……! 海水か!?!」

明久は驚き、ニーナは賢者の真の狙いに気付いた

賢者の狙いは、海水中にナノミクロンサイズで存在する希少金属レアメタルだった

海水中には、人間の目に見えないサイズで膨大な量の希少金属が溶け込んでいるのだ

その量は膨大だが、今の人間の技術では回収は不可能
しかし、錬金術では可能だ

それを使い、賢者の血液を精製していたのだ

明久達が視線を向けた直後、海中からそれが現れた

金色に輝く、高さ10mに迫る巨人だった

「こいつが……賢者!?」
ワイルズマン

と明久は驚き、ニーナが

「完全復活を果たしたか……賢者!!」

と声を上げた

すると

『カカカカ 啊啊! 平伏せよ、不完全なる者達よ! 今ここに、我は甦った!!』

と声が聞こえた

どうやら、それが賢者の声らしい

『不滅なる我の復活祝いに、号砲を放とう!!』

賢者がそう言った直後、賢者の口らしい部位に膨大な魔力と光が集まっていく

「不味い!!」

それを見た明久は、左手を掲げた

その直後、閃光が放たれた

その衝撃に、雪菜は船の壁に叩きつけられた

「かはっ……つう……い！」

雪菜は痛みに身を振るが、それが予想より遥かに低い痛みだと気付いていた

「これは……賢者の血液……まさか、ニーナさん？」

雪菜の体を、赤いスライム

賢者の血液が覆っていたのだ

それが、衝撃から雪菜を守っていた

だが、それだけではない

今雪菜の視界は、一面霧に包まれていた

その霧から、雪菜は知っている魔力を感じていた

「まさか……先輩が、船毎霧化させて……私達を？」

そう言っている間に、霧が少しずつ晴れていく

そして雪菜が見たのは、まるで彫像のように金属化した明久だった

「せ、先輩!？」

それを見た雪菜が驚くと、ニーナが姿を見せて

「賢者が砲撃を放つ瞬間に、第四真祖は船やワシらを優先して霧化させたのだ……自分

なら、助かると思ったのだろう……」
と語りだした

「だが、その隙を突いて、天塚が金属化させたのだ……ワシは、お主を守るので精一杯だった……すまぬ……」

そう言うと、ニーナは頭を下げた

そして、雪菜は気付いてしまった

今の状態からは、明久は復活出来ない

第四真祖たる明久は、間違いなく不死身である

例え瀕死の重傷を負っても、必ず再生する

だが、金属化はその再生の例外だった

なぜならば、明久本人が傷を負わずに変わってしまったからだ

こうなってしまうては、例え第四真祖でも復活は絶望的だろう

そう理解した雪菜は、両手両膝を突いた

「そんな……先輩……!」

このまま終わってしまうのか

誰も、助けられないのか

雪菜を、そんな絶望が襲った

その時

「ふ……たかが金属のスライムごときに、手酷くやられたな……」
と新たな声が聞こえた
ここから、逆転劇が巻き起こる

復活の時

「ふ……たかが金属のスライムごときに、手酷くやられたな……」

と言って現れたのは、普段とは様変わりした雰囲気の凧沙だった

「な、凧沙……ちゃん？」

余りにも様変わりしている凧沙に、雪菜は困惑していた

だが、凧沙は無視して彫像と化した明久に歩み寄り

「少し、手助けしてやろう」

と言って、明久と口づけした

その直後、明久の体から魔力の柱が立ち上ぼり

「ぐっ……あああああああ!!」

元の姿に戻ったと思えば、明久が苦悶の声を上げた

「せ、先輩!」

その状況に、雪菜は困惑した

しかも気付けば、凧沙の姿が無くなっている

「い、一体、何が!？」

と言った直後、雪菜は分かった

「まさか、暴走!？」

それは、今まで何回か見た現象だった

今明久が掌握している眷獣の数は、4体

未だに、過半数以上が明久の掌握外なのだ

手段は不明だが、風沙は先程の口づけでその内の一体を、強制的に目覚めさせたのである

それにより、掌握していない何れかの眷獣が暴走を始めたのだ

これを放置すれば、間違いなく船は沈んでしまう

そう確信した雪菜は

「先輩！ 目を覚ましてください、先輩!!」

と声を掛けながら、明久に歩み寄り始めた

勿論、それで明久が目覚めるなら苦労はしない

だから雪菜は、手に持っていたナイフで首筋を薄く切った

その傷口から、少しずつ血が流れる

その状態で、雪菜は明久に抱きつき

「先輩!!」

と声を掛けた

すると明久は、そんな雪菜を抱き締めて、雪菜の首筋に牙を突き立てた

その直後、雪菜の口から艶っぽい声が漏れた

それから、数十秒後

「ん……あー……」

と明久が、声を漏らした

そして、ゆっくりと体を起こした

そこに

「起きたか、第四真祖よ」

とニーナが声を掛けた

すると、明久は

「えつと……あの砲撃を防いだ時に、天塚が腕を伸ばしてきて……」

と呟いた

それを聞いたニーナは、頷き

「そこまで覚えているなら、問題あるまい。お主は金属にされたんだ。それから復活する切っ掛けを、劍巫が与えたのだ」

と簡潔に述べた

それを聞いた明久は

「あー……また、雪菜ちゃんに迷惑掛けたか……」

と言つて、周囲を見回した

「……つて、何事？」

そして明久は、周りを見て驚いた

何故ならば、船諸とも周囲の海面が凍っていたからだ

それは本来、絃神島では起きない現象だった

すると、ニーナが

「これはな、お主の眷獣が引き起こしたのよ。暴走状態でこれか……凄まじいな」

と言つた

それを聞いた明久が、呆然としていると

「先輩……目覚めましたか……」

と雪菜が、気だるげに起きた

そんな雪菜を、明久は抱き支えて

「ありがとう、雪菜ちゃん。助けてもらったみたいだね」

と言つた

それを聞いた雪菜は、首を振って

「私は、先輩の……監視役ですから」

と言った

そこに

「凄かった、でした……」

と聞き覚えのある声が聞こえた

その声を聞いた明久と雪菜は、揃って声が聞こえた方向に顔を向けた

その先、階段付近には夏音の姿があつた

しかも、顔を朱に染めている

「夏、夏音ちゃん……」

まさか人に見られていたとは思わず、雪菜は狼狽していた

すると、夏音は

「お二人共、凄く情熱的でした……」

と言いながら、真っ赤な頬に両手を添えた

その状況に、雪菜は

「ま、待って、夏音ちゃん！ あれはなんて言うか、緊急事態だったから!？」

と釈明しようとしていた

だか夏音は聞いておらず、両手で顔を覆っている

その間に明久は、近くに落としておいたギターケースを拾って

「夏音ちゃん、危ないから、何処かに隠れてて」

と告げた

それを聞いた夏音は、両手を僅かに降ろして

「お兄さん？」

と明久を見た

すると、明久は

「ちよつと派手な、ケンカになるから」

と言った

それを聞いた夏音は

「わかりました……お兄さん、頑張ってくださいでした」

と言って、階段を降りていった

そして、最後の幕が上がる

宣戦布告

「雪菜ちゃん、これ」

明久はそう言いながら、持ってきたギターケースを差し出した

それを見た雪菜は、驚いた表情で

「これは!？」

と明久を見た

すると、明久は

「あの師匠さんから、預かってきたよ」

と言った

それは、あのミサイルに乗る前のことだった

明久とニーナの前に、メイド服姿の沙矢華を連れたあの黒猫が現れた

呼ばれた明久は、二人に駆け寄ろうとした

しかし石に躓いて、沙矢華の胸元に顔を埋めたのだ

本物の沙矢華の、胸元に

まさか本物とは思わず、明久は固まった

その間に沙矢華は、顔を真っ赤にしながらもアツパーを繰り出した
それを明久は、間一髪で回避

その時になって、ようやく沙矢華が本物だと気付いた

それにより喧嘩が起きかけたが、それを黒猫が制止

明久に、雪霞狼が入ったケースを手渡したのである

雪菜はナイフを仕舞うと、雪霞狼を展開して構えた

その時、海中から氷を砕きながら賢者が現れた

『呵呵呵！ 不完全なる者よ！ 完全なる我に恭順せよ！ 完全な我が手により、完全

な世界を作ろうぞ!!』

それを聞いた明久は、深々と溜め息を吐いて

「確かに、人間や僕を含めた魔族は完全には程遠いよ……でもだからこそ、精一杯生きるんだ！ 精一杯生きて、確かに自分が居たっていう足跡証拠を残すんだ！」

と言った

その明久の感情に揺さぶられたのか、明久の体から嘗てない程の魔力が溢れ出す

そして明久は、賢者を指差して

「あんたはさつきから、自分のことを完全だつて言うけどさ、こつちから見たら、あんたは不完全以下だ!!」

と告げた

それを聞いた賢者は、明久をその不気味な目で睨み

『有り得ぬ!! 訂正せよ、不完全なる者よ!』

と否定した

だが明久は

「訂正しないね! 確かに、あんたは賢者の血液つていう、凄い物を造つたかもしれない。だけどね! あんたはその力で、何を成した!? 何が出来た!? あんたは、その力を、自分の為にしか使つてなかつた! だから、ニーナは約三百年の間監視し続けたんだ! あんたが悪さをしないようにね!!」

と声を張り上げた

すると賢者は、腕を振り上げて

『沈黙せよ! 完全なる私の命令に従い、沈黙せよ!』

と言つて、腕を明久目掛けて振り下ろした

だが明久は

「黙らないね!!」

と言いながら、双頭の蛇竜を召喚し、腕を消滅させた
そして、賢者を睨みつけて

「もうこれ以上、あんたの盲執で誰も死なせるもんか！ 傷付けさせるもんか！！ 誰も、縛らせてやるもんか！！」

と声を張り上げた

それを聞いたニーナは

「第四真祖……お主……」

と声を震わせた

その間に明久は、賢者を指差して

「もう眠る時間だ！ 賢者！！ あんたの盲執はここで終わらせる！ ここから先は、
第四真祖ホクケンカの戦争だ！！」

と宣言した

すると、そんな明久の背後に雪菜が寄り添い

「いいえ、先輩！ 私達の戦争ケンカです！！」
と告げたのだった

終わりの刻

戦いが始まると、雪菜は雪霞狼を構えながら、天塚と相對した
すると天塚は、船の一部を使つて、賢者の血液を生成
分身体を作り出した

しかしそれは、ようやく人の形を保っているというレベルである

それは恐らく、天塚の精神が揺れているからだろう

「天塚さん……貴方はもう、氣付いているはずですよ」

雪菜がそう言うと、天塚が

「ごめんねえ……こうする以外に、分からなくてさあ」

と答えた

その瞳は、意思の光が不安そうに揺れていた

それは、自分の過去の記憶

人間だった頃の記憶が、無いことに氣付いたからだつた

偽りの記憶が与えられ、偽りの思いを植え付けられ、賢者に都合のいいように使われ

続けた

それが、天塚の精神を不安定にしていた

「行けえ！」

天塚が指示した直後、その人形達が雪菜に飛び掛かった
しかし、雪菜は慌てずに

「はあっ！」

雪菜は雪霞狼を振り回し、次々と人形を撃破

天塚に迫った

そして、天塚に雪霞狼を突き付けて

「貴方は、人間であろうとすればよかったです！」

と言つて、雪霞狼に呪力を回して神格振動波を起動

祝詞を唱える

それに呼応し、雪霞狼が光輝く

それを見た天塚は、自身の片腕を槍に錬成

雪菜に攻撃を仕掛けた

その穂先を狙つて、雪菜は雪霞狼を突き出しながら

「先輩みたいに、人間であろうとすればよかったです!!」

と言った

それを聞いた天塚は

「そうか、僕は……人間として生きれば良かったのか……」

そう言つて、消滅した

それを確認した雪菜は、明久の方を見た

明久は両手を雷で覆い、賢者が放つ荷電粒子砲を弾いていた

どうやら、船を守るためらしい

すると賢者は、大規模砲を撃とうと考えたのか、最初に撃つた時と同じように高い魔

力を溜め始めた

その隙を突いて

「獅子の黄金!!」

獅子の黄金を突撃させて、賢者の頭部を吹き飛ばした

だが、その程度で終わるとは、明久も思っていない

だから、左手を高々と掲げて

「カレイドフラッド焰光の夜伯の血脈を継ぎし者、吉井明久が、汝が枷を解き放つ!!」

と新たな眷獣の召喚を始めた

「サタルメリク・アルバス疾キく在イれ! 11番目の眷獣、水精の白鋼!!」

そうして明久が召喚したのは、下半身は蛇、上半身は妖艶な美女のセイレーンの眷獣だった

その眷獣は、頭を再生した賢者に向かい、絡み付いた

その直後、賢者の体が縮み始めた

「あれは!?! 再生……いえ、時を巻き戻している!?!」

それを見た雪菜は、その眷獣の能力に気付いた

「あの眷獣は、吸血鬼を示す能力……再生能力を司る眷獣!?! その力で、賢者を原初にま

で巻き戻している!?!」

『バカな!?! 消える!?! 完全なる我が!?! バカなあ!?!』

賢者がそう驚いている間にも、賢者の体は少しずつ縮んでいく

それを見ていた明久は

「あんたの妄執も、ここで終わりだ! 消え去れ!!」

と告げて、更に魔力を込めた

それにより、更に加速度的に縮んでいく

そうして数十秒後、賢者は完全に消え去った

こうして、約300年続いた賢者の妄執は終わり、ニーナは縛られる必要がなくなつたのだった

幕引き

「あー……結局今回も、中心に居たよ……」

とぼやいたのは、氷が張った海上に立っている明久だ

一応明久は、船に乗っていないことになっているから、もし教師に見つかったら面倒だからだ

「先輩……」

そんな明久を労るように、雪菜は明久の背中に手を当てた

そこに

「世話になったな、第四真祖よ」

と声がした

振り向けば、夏音と一緒に褐色の肌と金髪が特徴の美女が居た

その人物を見て、明久は

「もしかして……ニーナ？」

と首を傾げた

すると、その褐色美女

ニーナは

「ああ、この姿で会うのは初めてだったな。私が、ニーナ・アデアードだ」

と名乗りながら、胸を張った

浅葱の姿では違和感を感じていたその豊かな胸だが、高い身長の子なら均整が取れている

身長は、約170間近だろう

胸の大きさは、沙矢華より少し大きい位か

見事なプロポーションである

「後で、私がお世話になっている、南宮先生に相談して、住む所を相談でした」

と言ったのは、夏音だ

夏音はあの事件以降、那月の住んでいるアパートと一緒に住んでいるのだ

「まあ、そうだろうね」

と明久が言った時

「ちよっ!?! なにこれ!?! 氷山にぶつかった!?!」

と騒がしい声が聞こえた

それを聞いた明久は、視線を上に向けた

よく見れば、風沙が船の柵から身を乗り出すようにして周囲を見回していた
そして、明久に気がついて

「え！ 明久くん!?! なんでここに居るの!?!」

と驚いていた

それを聞いた明久は

「本当に、なんでだろうね」

と苦笑いを浮かべた

そして、明久は雪菜に

「いや、雪菜ちゃんも災難だったね。折角の休暇が、こんな形でダメになっちゃって」

と声をかけた

すると雪菜は

「いえ、今回の件でよく分かりました。先輩は少しでも目を離すと、何に巻き込まれるか
分からないって」

と言つて、明久を見上げた

そして

「だから、より一層監視態勢を強化しないと!」

と言つた

それを聞いた明久は、ウゲツという表情をしながら

「勘弁して頂戴よ……」

と呟いた

そこに

「わあ！ なにあの飛行船！ 大きいっ!!」

と風沙の声が聞こえた

それを聞いた明久は、視線を絃神島の方向に向けた

その先には、白い巨大な装甲飛行船が飛んでいた

それは、アルディギア王国のランヴアルド級二番艦のランヴェリドだった

「あ、頼んでたお迎えが来たみたいだね」

そう言いながら明久は、空を見上げて

「まあ、今回もどうにかなったし……終わり良ければ、全て良し……かな？」

と首を傾げた

だが、雪菜が

「いえ、南宮先生がなんて言うか……」

と言った

それを聞いた明久は

「…………ですよねえ…………また課題が山積みだよお…………」

と両手両膝を突いた

こうして、錬金術師達による騒動が幕を下ろしたのだった

黒の剣巫編

招待

「あつつう……本当に、12月？」

と言ったのは、プール掃除中の明久である

プール掃除していたのは、以前の事件の罰則である

「今年は、日本全体で暖冬ですからね……仕方ないかと」

と言ったのは、監視役を任された雪菜だ

雪菜の言葉を開いた明久は、デッキブラシを振り回しながら

「というか、この広さを一人は無理でしょう!？」

と文句を言った

彩海学園のプールは、近くの学校の大会にも使えるようにとかなり広い

休日の早朝から頑張っている明久だが、ようやく三割洗えたか、という位である

「まあ、流石に難しいですね……」

雪菜はそう言って、履いていた革靴を脱いだ

そして、梯子で降りてきて

「ですから、手伝いますよ、先輩」

と言った

それを聞いた明久は

「ありがとう、雪菜ちゃん」

と言って、雪菜に近づこうとした

その時、手に持っていたホースの先を強く掴まんでしまった

その直後、ホースから吹き出した水が雪菜に掛かった

「あ……」

明久は冷や汗を流すが、雪菜はびしょ濡れで腕組みしている

そして、明久をジト目で睨んで

「せーんーばーいー?」

と地を這うような声で、明久を呼んだ

「え、えつと……わざとじゃないから、許してほしいなあ……なんて?」

明久はそう言うが、雪菜は

「許しません!!」

と言って、明久の持っていたホースを奪って、明久に水を大量に吹き掛けた

「うごばばばば……」

「これは、どうですか!？」

雪菜はそう言いながら、更に水圧を上げた

しかしその時、雪菜はホースを踏んでしまい

「わ、きやあ!？」

バランスを崩して、雪菜は明久の方に倒れた

それを見た明久は、反射的に雪菜を抱き留めようと、両手を広げながら前に出た

しかし、足下が濡れていたためにバランスを崩し、結局二人とも倒れたのだった

「だ、大丈夫? 雪菜ちゃん……」

「は、はい……ありがとうございます……」

明久の問い掛けに、雪菜はそう答えた

そこに

「よう、楽しんでるか? 明久」

と声が聞こえた

呼ばれた明久は、声が聞こえた方向を見た

すると、こちらを見下ろしている少年

明久の友人の基樹が居た

「なんか用？ 基樹……」

と明久が問い掛けると、基樹は

「いや、何な……明久がちゃんとプール掃除してるか、那月ちゃんに見てこいつて言われてな。見に来た……ごぶはっ!」

基樹が途中まで言うと、基樹は奇声を上げながら倒れた

それを見ていた明久は

(あ、那月ちゃんの空間魔術突っ込み……)

と基樹を襲った攻撃の正体に気づいた

恐らく、那月は基樹がちゃんと呼んだことを何らかの方法で知って、空間魔術を使った衝撃波で突っ込みをしたのだろう

「い、今のは、なんだ……?」

と基樹は周囲を見回したが、近くには攻撃をした相手は近くには居ない

「あー……魔女からの、お叱りかな?」

明久はそう言いながら、頬を掻いた

その間に、基樹は立ち上がり

「まあ、そっちは副題だ……本題は、お誘いだな」

と言った

それを聞いた明久は

「お誘い？」

と首を傾げた

すると、基樹は

「おう、あそこだ」

と上を指差した

明久は、その指の先を追い掛けた

すると上空では、大きな画面が着いた一隻の飛行船が飛んでいた

その画面には、あるCMが流れていた

それは、最近よく見るある遊園地のCMだった

「あそこって……ブルエリ？」

ブルエリというのは、通称である

正式名称は、ブルーエリジウムである

「おう。人工島管理公社も出資していてな。その関係で、プレオープンに招待されたんだ……どうする？ 宿泊費は無料だぜ？」

基樹はそう言いながら、ニヤリと笑ったのだった

少女との出会い

「……騙された……」

と呟いたのは、鉄板で焼そばを作っていた明久だ

そこに

「はい！ 焼そば二つとアイステイー二つですね！ 1400円になります！」

と声が聞こえた

接客しているのは、明久とお揃いのTシャツを着た浅葱だった

今二人が居るのは、リゾート施設

ブルーエリジウム、プールエリアの出店だった

「明久！」

「はいよ！」

浅葱の呼び掛けに答えながら、明久は出来立ての焼そばを紙皿に盛って

「お待たせしました！ 特製焼そばです！」

とカウンター越しに、二人のお客に手渡した

その後、浅葱が

「こちら、アイステイーです！ お待たせしました！」

と手渡した

なぜ、二人がブルーエリジウムでこんなことをしているのか

それは、このブルーエリジウムに到着し、基樹に案内されたロッジに荷物を置いた直後のことだった

そこに、ブルーエリジウムスタッフのTシャツを着た一人の女性が来て

『お、その二人が例の助っ人だね？』

と言った

それを聞いた二人が、首を傾げていると

『はい、コキ使ってください』

と基樹が言った

それを聞いた二人が、基樹に迫ると基樹は

『いや、実はな……本来予定してたスタッフ二人が、怪我してこれなくなったんだ』
と語った

つまり、明久と浅葱はその二人の代わりに働くことになったのだ

本人達の同意無しに

しかも、あれよあれよと二人は水着に着替えさせられて、スタツフTシャツを手渡されて、屋台で働くことになっていたのだ

なお、雪菜と凧沙は観光に回っている

基樹曰く、中学生を働かせる訳にはいかないとのこと

それには、明久とて同意である

しかし、やはり納得出来なかつた

そして、一段落すると

「やられたわね……もう少し、疑うべきだつたわ」

と言いながら、浅葱が近寄つてきた

それに同意するように頷き、明久は

「帰ったら、基樹をシバく……」

と呟いた

その発案に、浅葱は同意

そこに、明久と浅葱を連れてきた女性スタッフが来て

「いやあ、モツ君の言つた通り。中々やるわね。あんた達」

と快活に笑つた

「モツ君？」

「そ。基樹だから、モツ君。あの子とは、昔馴染みのよ」

明久の問い掛けに、その女性スタッフはそう答えた

それを聞いた明久と浅葱は、顔を見合わせて

（弄るネタ、ゲット！）

と親指を立てた

すると、その女性スタッフが

「あ、そうだ。これを、監視所のライフセーバー^{筋肉バカ}達に、届けてくれない？ そしたら、休

憩入っていいから」

と明久に、岡持ちを手渡した

然り気無く、配達先の客を罵倒していたが、明久はスルー

「わかりました。場所は……ああ、ここですか」

と言いながら、到着した時に渡された端末で確認した

「ん、じゃあ、お願いねー」

女性と浅葱に見送られて、明久は配達に向かった

だが、かなり遠かった

歩いて、30分は掛かっている

「あの人……自分が行きたくなかったただけだ、絶対」

明久はそう確信しながら、監視所のドアをノックして

「すみません！ 注文された品をお持ちしました！」

と言った

すると、中から見事な筋肉と日焼けした男性が出てきて

「おおー、ありがとう！ ところで、君……中々の筋肉だね？ 一緒に、働かないか？」

と言いながら、ボディビルのようなポーズをした

それを聞いて、明久は

「いえ、遠慮します」

と拒否した

その時、受け付けで

「あ……すみません、知り合いの人が来たので、失礼します」

と声が聞こえた

そして明久は、視界の端で受け付けに立っている別のライフセーバーに、頭を下げて
いる少女に気がついた

その少女を見て、明久は

（しっかりした子だなあ……小学五年生位かな？）

と内心で首を傾げた

その後、お代を貰った明久は、屋台まで戻った
すると、浅葱が

「遅い！」

と怒声を張り上げた

それを聞いて、明久は

「遠かったんだから、仕方ないでしょ!？」

と反論した

その反論を聞き流した浅葱は、明久の背後を見て

「で、その子はどうしたのよ」

と言った

「はい？」

その問い掛けに、明久は後ろを見た

そこには、あの監視所に居た少女が居た

これが、この事件の幕開けだった

結瞳という少女

少女の名前は、えぐちゆめ江口結瞳

少女の名前を聞くと、浅葱はスマホを取り出して調べ始めた

それを見つつ、明久は

「えつと……なんで、僕の後を追い掛けてきたの？」

と結瞳に問い掛けた

すると、結瞳は写真を一枚取り出して

「沙矢華さんが、言った時間までに来なかったら、この写真の人……つまり、貴方を頼れ
と」

と明久に見せた

確かにその写真には、明久が写っている

しかも裏には、明久のプロフィールがビツチリと書かれてある

それを見た明久は

（なんで僕が写ってる写真を持ってて、裏にプロフィールが書かれてあるのか……凄い

気になる)

と思った

しかし、それよりも

「煌坂さんは、どうしたの?」

と明久は問い掛けた

何だかんだで面倒見のいい沙矢華が、結瞳を放置するのはおかしいと思ったのだ
すると結瞳は、俯いて

「それが……クスキエリゼの施設から私を助けてくれたんですが……途中で、追手が来て……その足止めを言っつて、そのまま……」

と言いながら、声を震わせ始めた

その声を聞いて、明久は慌てながら

「ああ! 泣かないで! 焼きそば、食べる!」

と近くの机に置いておいた、賄い代わりの焼きそばのパックと飲み物が入ったカップを差し出した

今三人が居るのは、あの売店の休憩フロアである

すると、浅葱が

「あんた、何泣かせてるの……」

と呆れていた

すると、明久は

「不可抗力というか、なんというか……地雷を踏みました」

と土下座を敢行した

そんな明久の首根っこを掴んで、浅葱は引きずってから

「絃神島の戸籍を調べたけど……あの子の名前は無かったわ……親族の戸籍も」

と耳打ちした

それを聞いた明久は

「ということは、結瞳ちゃんは、外部から来たってことか……」

とゆっくりと焼きそばを食べている結瞳を見た

そして明久は

「にしても、クスキエリゼ……確か、ブルエリの出資会社だったよね？」

と浅葱に問い掛けた

すると、浅葱は

「そうね。一応、水棲魔獣を含めた水族館も出してるわね……会社のキャッチコピーも、

魔獣の保護だし」

と言った

だが、すぐに洗面を浮かべて

「だけど、それは表向きね……裏では、戦闘力が高い魔獣を密売したり、環境保護と称してのテロ活動なんか武器を売ったりしてわ」

とスマホを見せた

そこには、武器を掲げている男達が写っていた

それを見た明久は

「魔獣保護をしてる会社が、テロ活動ねえ……」

と呟いた

すると浅葱は

「こういう輩は、手段と目的が入れ替わってること気付かないものよ……」

と溜め息混じりに言った

その時、明久は凄まじい魔力を感じた

「つつ……今のは……なんだ？」

感じた魔力の量からは、第四真祖たる自分に匹敵すると感じた

だが同時に、違和感も感じた

それは、余りにも遠い所からのように感じもしたからだ

そうなれば、実際の魔力量は明久を越えることになる

しかし明久は、それが何なのかは分からなかった

実は同時刻、雪菜と凧沙が居た水族館でも、雪菜もその魔力を感じていた

しかも、その魔力に恐怖したらしく、水棲魔獣達が恐慌状態になり、暴れだしたのだ
どうにかしなければ、水族館で大変なことが起きる

雪菜がそう思った直後、凧沙からとてつもない魔力が放たれて、魔獣達は静まった

そして雪菜は、そこである人物に出会った

年齢的には、明久と同一年位の長い黒髪が特徴の美少女だった

名前は、きさききりは妃崎霧葉

この少女が後に、今回の事件に深く関わっているのだが、この時の雪菜には分かる筈
もない

そして時は過ぎ、明久と浅葱は一日目のバイトが終わったので帰ることにした

なお結瞳だが、よほど疲れていたのか眠っており、明久が背負っている

ふとその時、浅葱が

「明久、財布持っつけてきてる?」

と明久に問い掛けた

すると明久は

「あ、うん……ここに、あるけど」

と水着のポケットから、財布を取り出した

その直後、その財布を浅葱は奪い取り

「ちよつとばかり、結瞳ちゃん用に服を買わないとね。あのブランド、絃神島には出てないのよ。アルディギアの王室御用達なんだって」

と言つて、明らかに高そうな店に向かつて、歩きだした

それを見た明久は

「へいへい、待つておくんなまし！ そんなことされたら、僕の財布が死ぬ！！ 少し待つて！ ラ・フォリアに連絡するから！！」

と慌てて、浅葱を追い掛けたのだった

料理

あの後、なんとか財布の破滅を免れた明久（その代わり、ラ・フォリアにかなり弄られたが）

その後、結瞳と一緒に宛がわれたコテージに到着した

そして、夕食

バーベキューの準備をしながら

「どうだった、雪菜ちゃん。煌坂さんと連絡は着いた？」

と雪菜に問い掛けた

すると雪菜は、首を振りながら

「いえ、ダメでした……そもそも、舞威姫の任務は秘匿性が高いので、連絡が着き辛いです……」

と言った

それを聞いた明久は

「そっか……まあ、煌坂さんのことだから、無事だとは思うけど……心配だね……」

と言った

その言葉に、雪菜は頷いた

明久の話を聞いた直後、雪菜は顔を蒼白にした

だが、感情に駆られることなく、確認に動いた

しかし、獅子王機関は雪菜に教えなかった

沙矢華は要人護衛や、救助等の秘匿性の高い任務に就くことが多数あった

今回はどうやら、その秘匿性の高い任務に就いていたようだ

「沙矢華さん……」

沙矢華の名前を呟いた雪菜の頭を撫でてから、明久は

「そういうえば、結瞳ちゃんは起きてたよね……何か食べられない食材が有るか確認しない」と

と呟いて、浅葱の部屋に向かった

その浅葱の部屋で、結瞳は過ごすことになっているのだ

だがこの時、明久は失敗していた

先に、雪菜から話を聞いておけばよかったのだ

明久が階段を登って、浅葱の部屋に向かったことに気付いた雪菜が、階段を登った時

「結瞳ちゃん？ ちょっと確認したいことがあるんだけど……」

と明久は、既にドアを開けていた

そして見えたのは、下着姿の浅葱と結瞳だった

「あ……」

明久は自分の失態に気付いたが、浅葱は

「先に、ノックしろお!!」

と近くにあった目覚ましを、思いきり投げた

浅葱が投げた目覚ましは、見事に明久の顔面に直撃

明久は、倒れた

「先輩……」

一連の光景を見た雪菜は、呆れた様子で額に手を当てていた

そして、しばらくして

「明久。何があった?」

「気にしないで」

基樹は明久の顔面が赤くなっている理由を問い掛けるが、明久はそう言いながらバー

ベキュウの定番

鉄板料理をしていた

見事な手際で肉や野菜を焼き、混ぜていた

そして、適宜各人の皿に分けていた

その中で、浅葱が凄まじい量を食べているが

「……やつぱり、凄い美味しい……」

と呟いていた

なお、結瞳は

「鉄板料理なのに、凄い美味しい！」

と驚いていた

なお明久が料理しているのは、浅葱からの罰である

目覚ましを投げ付けた後、浅葱は手早く服を着た後に明久に更に鉄拳を叩き込もうとした

しかし先に、明久は土下座を敢行

浅葱から、許してもらおう条件を引き出した

それが、夕食を明久が調理することだった

「はい。次はシャケを使った、ちゃんちゃん焼き！ 皿持ってきて！」

明久がそう言うのと、いの一に風沙が駆け寄ってきた

「明久くんの料理、本当に美味しいね！」

風沙はそう言いながら、モグモグと料理を食べている

なお食材だが、基樹が調達してきた

曰く、VIP権限で安く買えたらしい

それに感謝しつつ、明久は腕を振るっていた

「明久お兄さん、料理上手なんですね！」

と結瞳は、明久をキラキラした目で見ていた

すると、明久は

「あはは……必要に迫られただけさ」

と答えた

結瞳が首を傾げると、風沙が

「深森ちゃんが作ると、謎の物体が爆発が起きたからねえ。私たちが作るしかなかった

んだよ」

と教えた

それを聞いた結瞳は

「なかなか、凄いお母さんなんですけどね……」

と半ば呆然としていた

その言葉を聞いた明久は、遠い目で

「研究バカなだけだよ……」

と言った

一番の犠牲者は、ある意味で明久だったから、仕方ないのかもしれない

父親は全く家に居なくて、凧沙はまだ病院に入退院を繰り返していた時期だった

当時の凧沙は、自分の高い霊媒体質が安定しきっておらず、何度も入退院を繰り返していた

その時ばかりは、深森が料理を作ろうと頑張っていた

しかし出来たのは、謎の物体

もしくは、爆発が起きた

それを繰り返す内に、明久が料理を覚えたのだ

そして、明久の手料理を食べた後は各々入浴を済ませたりして、就寝した

だが、その後に問題が起きる

古代

否、神代の化け物を巡る問題が

もう一人の結瞳

「……………んあ？」

朝とも夜とも言えない、午前4時

明久はフと目覚めた

最初、何故起きたのか分からなかった

しかし、気付いた

「……………なんだ、この魔力は……………」

今居るコテージに、凄まじいまでの魔力が満ちていた

それがまるで、地震のように明久を揺らしたから起きたのだろう

明久は隠し持ってきた刀を手に、ゆつくりと部屋から出た

今のところ、異常は確認出来ない

だから明久は、廊下を歩いた

「異様な魔力……………下手したら、僕越えてる……………」

そう呟きながら、明久は居間に出た

時間が時間なので、誰も居ないはずだった

「ん……基樹？」

そこには、基樹が居た

そして、明久が名前を呼ぶと体を震わせて

「ひーいなさーん!!」

某怪盗三世を彷彿させる跳躍で、明久にくっついてきた

なお、基樹が言った名前は、基樹の彼女の名前らしい

「ぬあつ!? 寝惚けてるな!？」

明久は基樹が寝惚けてると判断し、刀の鞘で基樹の頭を思いきり強打した

その一撃が効いたらしく、基樹は床にうつ伏せに倒れた

それを見た明久は

「基樹……? 大丈夫?」

と声をかけた

すると、基樹が

「ヤラれたぜ……まさか……リリースが……あの子なんて……」

と呟いて、意識を失った

「リリース……?」

そう呟いた直後、明久は知ってる気配を感じて振り向いた。そこには、何故か雪霞狼を展開した雪菜が居た。

「雪菜ちゃん、リリースって知ってる?」

と明久が問い掛けると、雪菜は

「また、新しい女の子ですか……?」

と呟くように、明久に問い掛けてきた。

それを聞いた明久は

「……なあんか、雲行きが怪しくなってきたぞう?」

と首を傾げた。

その直後

「先輩は知らないんです……私が、どんな気持ちで過ごしているか……!」
と明久に、雪霞狼を突き付けた。

「ゆ、雪菜ちゃん……?」

明久は両手を上げながら、雪菜を呼んだ。

すると、雪菜が

「先輩には一度、私の気持ちを分かっていたいただきますっ!!」

と言い、雪霞狼が光った

「どうやは、神格振動波が起動したようだ

「お、落ち着いてえ!？」

と明久が声を上げた

その時

「明久……」

と浅葱の声が聞こえた

明久が居間の入り口に視線を向けると、そこには浅葱が居た

「明久……私……」

と浅葱が、一步踏み出した

その時

「申し訳ありません、藍羽先輩……」

と雪菜が、雪霞狼を軽く服に当てた

その瞬間、浅葱の体から力が抜けて、倒れた

「ゆ、雪菜ちゃん?」

「どうやら、精神操作の影響のようです」

明久が恐る恐ると呼び掛けると、雪菜はそう言った

それを聞いて、明久は

「せ、精神操作？」

と首を傾げた

雪菜は、それに頷き

「ですから、先程の事は忘れてください！ いいですね!？」

と顔を赤らめながら、雪霞狼を突き付けた

「ア、ハイ」

それに対して明久は、両手を上げながら頷くしかなかった

そこに

「明久君……」

と新たな声

すわ、何事か!? と明久は、声のした方向を見た

その先には、凧沙が居て

「明久君……私……私……」

と繰り返して、呟いていた

それを見た明久は、凧沙を指差して

「雪菜ちゃん」

と雪菜の名前を呼んだ

それに応えるように、雪菜は駆け出して

「ごめんね……」

と呟くと、風沙の眼前で指を鳴らした

その直後、倒れかけた風沙を雪菜が支えた

そこに、明久が近寄り

「どう？」

と問い掛けた

それに対して、雪菜は

「術で眠らせただけです」

と返答した

その時だった

「あーあ……せつかく少しだけ、素直にしてあげたのに」

と声が聞こえて、二人は声のした上を見た

二階の柵から見下ろす形で、一人の少女が見下ろしていた

明久と浅葱が保護し連れてきた少女、結瞳が

だが、その雰囲気はまるつきり違う

妖艶な雰囲気を醸し出していた

そして何より、その身から漏れ出す強い魔力

「君は……誰だ……？」

明久がそう問い掛けると、結瞳はニヤリと笑い

「私は……莉瑠……もう一人の結瞳……」

と告げた

夢魔

「莉璫……だつて？」

その名前を聞いた明久は、いぶかしんだ

その名前は、結瞳から聞いていた双子の姉妹だという名前だったからだ

だが、目の前に居るのは確かに結瞳の体だが、中身が違う

そこから明久は、ある可能性に気付いた

「まさか……二重人格……？」

二重人格

または、多重人格

所謂精神的な病気に属するもので、大概が過去に何らかの辛い経験をしたことで起きる

すると、結瞳

否、莉璫は

「あは、大正解」

と肯定した

そして、莉瑠は妖艶な笑みを浮かべ

「結瞳はズルいよねえ……辛い経験をしたからって、逃げて……私に、罪の意識を押し付けてさ」

と語りだした

その言葉には、軽い軽蔑の念が込もっている

「だけど、仕方ないよねえ……結瞳は小さい頃から、世界最強の夢魔の力を宿して……それが理由で、両親からは疎まれて、イジメが起きて、イジメてきた奴が二度と目覚めなくなつたんだからさ……」

「夢魔……」

「サキユバス……ですね」

夢魔

女性だとサキユバス

男性では、インキュバスと呼ばれる種族だ

その特性としては、淫らな夢を見せて、その性欲からなる精気を吸いとる種族だ
「最強の夢魔……莉瑠……まさか……リリース？」

と明久は、その名前に行き当たった

それは、基樹が言った名前だった

「あれ？ 私の名前、知ってるんだあ……じゃあ、手加減の必要は無いよね！」

莉瑠はそう言うのと、魔力弾を放った

だが、その一撃は

「はあっ！」

雪菜が振るった雪霞狼によって、防がれた

それを見た莉瑠は

「なるほど……それが、七式降魔機鎗なんだ……」

と目を細めた

すると、外を見て

「霧葉も来たみたいだし……バトンタッチね」

と言って、背中から悪魔みたいな翼を出して飛んだ

そして、魔力弾で窓を破砕

外に出た

「先輩！」

「追うよ！」

明久はそう言うのと、外に出た

外に出ると、莉瑠の他に一人の少女が居た

黒い制服を着た一人の少女

「彼女が霧葉……?」

「恐らく……」

明久の問い掛けに、雪菜は頷いた

すると莉瑠は、霧葉の隣に着地して

「やつほ、霧葉♪ 迎えに来てくれて、ありがとう♪」

と朗らかに、声を掛けた

すると、霧葉は

「莉瑠……もう、満足したかしら?」

と莉瑠に問い掛けた

その問い掛けに、莉瑠は

「うん♪」

と朗らかに頷いた

それを聞いた霧葉は

「それじゃあ、行くわよ」

と言つて、車のドアを開けた

それを見た明久は

「行かせると思っか」

と言つて、縮地を発動させた

縮地を発動させた明久は、一瞬で霧葉に肉薄

鞘入りの刀を、振り下ろした

その直後、車の中から伸びた手が明久の腕を掴んだ

「な!?! 煌坂さん!?!」

その人物は、行方不明になっていた沙矢華だった

しかしよく見れば、沙矢華のめに意思の光が感じられない

「操られて……がつ!?!」

沙矢華が操られていることに気付いたが、明久は沙矢華から一撃を受けて大きく吹き

飛んだ

「先輩!?!」

そんな明久に、雪菜が駆け寄って助け起こした

そして、車の中から出てきた沙矢華を見て

「沙矢華さん……」

と辛そうな声を漏らした

すると明久が

「精神操作で、操られてるんだ……」

と言つて、立ち上がった

その間に、莉瑠と霧葉は車に乗り込んだ

それを見た明久は

「雪菜ちゃん……二人を追つて……煌坂さんは、僕が引き受けるから」

と提案した

「付エンチャント与した雪菜ちゃんなら、車も追い掛けられる筈だ……行つて」

明久のその言葉を聞いた雪菜は、しばらく悩むと

「分かりました……お願いします」

と言つて、小声で呪文を唱えた

どうやら、肉フィジカルエンチャント体付与を発動したようだ

そして、走り出した車を見ながら

「沙矢華さん、本気を出した私でも、五回に一回勝てるかどうかです！」

と言つて、駆け出した

「……マジかあ」

それを聞いた明久は、絶句しながらも雪菜を追い掛けようとした沙矢華の前に立ち

だかり

「ここから先は、通行止めだよ!!」
と言つて、飛び掛かった

解放

「……早まったかなあ」

と明久は、呟いた

雪菜の強さは、明久はよく知っている

その雪菜ですら、勝てる確率は約二割

となると、明久では勝てる確率は更に低いだろう

しかし、雪菜と沙矢華を戦わせる訳にはいかない

沙矢華はかなり重度に精神操作の影響にあるが、もしかしたら記憶には残っているかもしれない

だったら、沙矢華と雪菜を戦わせて、もし雪菜に怪我を負わせたら、沙矢華はどうなるのか

そう考えた明久は、柄尻で頭を掻きながら

「やっぱ、僕がやるしかないか……」

と呟いた

その直後、沙矢華が動いた

吸血鬼の明久の目でも、ギリギリ見える速さで明久に接近
煌華燐を振り上げ、明久に振り下ろした

「つつ!?!」

それを明久は、紙一重で回避

鞘を、沙矢華の後頭部目掛けて振った

だがその一撃を沙矢華は、しゃがんで回避

同時に、足払いを明久に放った

それを明久は、側転の要領で回避

逆立ち状態から、沙矢華の頭を狙って蹴りを放った

その一撃は、沙矢華の掲げた刀身の横腹で受け止められた

それを見た明久は

「なるほど……空間切断は、刃にしか無いのか」

と気付いた

その瞬間、明久の足を沙矢華が掴み、投げた

「ぐうっ! つあっ!?!」

明久を叩き付けた後、沙矢華は追撃にと煌華燐を繰り出したが、明久はギリギリで回

避

どうしようか、考えた

刀で攻撃は出来ない

なるべくなら、怪我はさせたくないからだ

「それに……問題は精神操作だけ……」

精神操作はつまり、対象に流し込んだ魔力で対象を操るのだ

「狙うなら、後の先……」

後の先

つまりは、カウンターによる一撃による無力化になる

しかし、一筋縄にはいかないのは明白だ

短い攻防だったが、明久は沙矢華の実力を把握した

(あのルードルフ・オイスターハといい勝負だなあ……敵しい……)

明久はそう思いながら、刀を肩に担ぐように構えた

その直後、二人は激突

沙矢華が振り下ろした剣撃を、明久は刀を横から当てて迎撃

軌道を逸らした

その隙に懐に入り込もうとしたが、沙矢華が肘打ちを繰り出してきたので、片手で防

御

大外刈を繰り出そうとしたが、それは沙矢華が敢えて重心を崩すことで技を無効にされて、隙だらけになっていた脇腹に峰打ちを叩き込まれた

だが、明久は距離を取らずに組打ちで戦おうとした

その時、沙矢華が足下に札を叩きつけた

それを見た明久は、反射的にある脊獣の力を解放した
甲殻ナトラシネレウスの銀霧である

それにより、二人を中心に半径数m規模で穴が開いた

だが、今居るブルーエリジウムは人工島メガフロートで出来ている

その結果、二人は海に落下した

その衝撃で、沙矢華が身に纏っていた水着の上がはだけて、沙矢華の豊かな双丘が明久の目に飛び込んだ

その光景に、明久は吸血衝動に襲われた

そして沙矢華は、顔を真っ赤にしながらも煌華燐を明久の腹に突き刺した

だが次の瞬間、明久は沙矢華の首筋に牙を突き立てた

それで、沙矢華を支配する精神操作の魔力を血と一緒に吸い出すのだ

最初は抵抗した沙矢華だったが、気づけば明久の頭を抱き締めていた

雪菜が帰還したのは、それから約二十分後のことになる

その名は

「な……何が起きたんですか、これは……」

と言ったのは、帰還した雪菜である

雪菜が見たのは、コテージの前にある巨大な穴

直径数mの穴

そんな穴を空けたのは、間違いなく明久だろう

しかし、決着はどうなったのか

それが気になった雪菜は、穴を覗くために近寄った

その時、淵の一ヶ所に沙矢華が倒れていることに気づいた

「沙矢華さん！ 大丈夫ですか!？」

もし戻ってなかったことを想定し、何時でも動けるようにしながら、雪菜は沙矢華に

声をかけた

すると、うつすらと沙矢華の目が開き

「う……確か、あの研究所っぽい所で、精神操作……」

と沙矢華が、額に左手を当てながら呟いた

「どうやら、正気らしい」

雪菜がそれに安堵した直後

「そうだ！あのバカは!! 私思いきり、あのバカの腹に煌華燐をぶつ刺しちやっただけど!!」

「腹、ぶつ刺し!!」

沙矢華が告げた言葉聞いて、驚いた

煌華燐は雪霞狼のような魔力無効化能力こそ無いが、それでも獅子王機関の切り札の一つに当たる

剣形態の疑似空間切断は、ほぼ防御を無効化する

それで、腹を刺し貫いた

幾ら何でも、大ダメージは確実である

その時だった

「あ………やっぱり、記憶が有るんだ………だったら、僕が戦って正解だったね………」
と弱々しい声が聞こえた

その声を聞いた二人は、弾かれたように声が聞こえた下の方に顔を向けた

二人の居る場所から、斜め下方

そこに、下半身を海水に入れた状態の明久が横たわっていた

その近くには、自ら抜いたらしい煌華燐が無造作に置いてある

二人は滑落しないように、かつ素早く明久に近寄り

「先輩！」

「あんた……怪我は……！」

と明久を、引き上げた

よく見れば、明久の右腹部に縦に刺痕が残っている

それを見た沙矢華は、泣きそうになっていた

すると、明久は

「大丈夫……傷は、大方治ってきてる……流した血も、煌坂さんから少し貰った……」

と言った

それを聞いた沙矢華は

「けど、私……思いきり……」

と刺痕に手を当てた

すると明久は、そんな沙矢華の頬に血が残っている手を当てて

「まあ、僕で良かったよ……僕なら、治るし……あ……刀使わないで、良かった……」
と呟いた

血が残っているのは、海水が混じったからだろう

幾ら沙矢華から血を吸ったとは言っても、かなり戻っていない筈だ

その証拠に、明久の顔は少し白い

すると、雪菜が

「すいません、先輩……私は、結瞳ちゃんを連れ戻せませんでした……」

と謝罪した

あの後雪菜は、強化された脚力で車を追い抜き、先回り

霧葉と交戦した

その霧葉だが、獅子王機関とは別の対魔組織

太史局の六刃の一人だと分かった

別名、黒の劍巫

獅子王機関が表ならば、太史局は裏

獅子王機関も任務の為ならば手段は問わないが、太史局は更に過激な面が強いらしい
今回はどんな命令を受けたか知らないが、精神操作という後ろ暗い術を使ってきた程
だ

かなりのことをしてくるのは、雪菜にも予想出来た

「ん、分かった……だったたら、やることは決まってる……」

明久はそう言つて、起き上がろうとした

すると、二人が

「先輩！」

「無理しないで!？」

と明久を支えた

そして明久は、二人に支えられながら穴から出た

そこに

「うわっ!? なにこれ!？」

と浅葱の声が聞こえた

どうやら、穴を見て驚いたようだ

そして、明久達を見て

「何があつたのよ!？」 とうか、明久はどうしたのよ!？」

と近寄つてきた

すると、明久は

「浅葱……今すぐ、クスキエリゼを調べて」

と浅葱に言つた

「クスキエリゼを?」

「うん……結瞳ちゃんが、拐われた……それに、クスキエリゼが深く関わってる筈だ……」

浅葱が首を傾げると、明久はそう言った

それは、様々な状況証拠からだ

結瞳が逃げてきたのは、水族館のエリアかららしい

次に霧葉が乗ってきたらしい車だが、側面には水族館の名前があった

そして水族館は、クスキエリゼが出資している

そしてそのクスキエリゼは、裏でテロに深く関わっている

それらを総合すると、どうしても嫌な予感がした

それを聞いた浅葱は、少ししてから

「分かったわ……」

と言つて、コテージに戻った

その後に、三人もゆっくりと戻った

三人が浅葱の部屋に入ると、浅葱はノートパソコンを高速でタイピングしていた

「このノートパソコン、少しパワーが弱いから、少し待って……よし、モグワイ!!」

『おお、久しぶりだな。嬢ちゃん。バカンスは楽しんでるか?』

浅葱が呼び掛けると、画面の端に浅葱の仕事の相手たるモグワイのアバターが映った

しかし浅葱は

「そんな余裕無いわよ！ それより、クスキエリゼのサーバーに侵入するから、手伝いなさいー！」

と言った

『はいよ………つたく、本当にAI使いの荒い嬢ちゃんだぜ』

モグワイがそう言った直後、一気に数枚のウィンドウが表示された

浅葱はそれらを素早く確認していき

「やっぱり、相当後ろ暗いことをやってるわね……金の動きが激しいわ……特に、最近は何かやってるわね………」

と呟いた

そして、数秒後

「はあ!?! ちょっと………本気!?!」

と驚きの声を上げた

それを聞いた明久は

「何か分かった？」

と問い掛けた

すると、浅葱は

「クスキエリゼの社長、絃神島を……ううん、世界征服にある化け物を支配するつもりよ！」

と言った

それを聞いた沙矢華は

「ある化け物つて、なによ？」

と浅葱に問い掛けた

すると、浅葱は

「明久でも、知ってる筈よ……欧州の神話にその名を残す、海の化け物……」

と言った

「待ってください、藍羽先輩……まさか!？」

雪菜は浅葱が言おうとした名前に行き当たったのか、目を見開いていた

すると浅葱は、頷いてから

「真正正銘の海の化け物……世界最古にして最強の生態兵器……レヴィアタンよ……」

とその名前を言った

レヴィアタン

「れ、レヴィアタン!? あれって、実在したの!?!」

浅葱が告げた名前を聞いて、明久は驚いた

レヴィアタン

その名前は、確かに欧州の神話に刻まれている

しかし、実在するかしないかは長い間議論されていた

すると浅葱は

「約一ヶ月位前に、実在することが証明されたわ……他ならないクスキエリゼによってね」

と言った

約一ヶ月ほど前、クスキエリゼは水棲魔獣を調べるために、深海7000mに探査挺を送り込んだ

しかしその探査挺は、ある映像を最後に、帰ってこなかった

その映像というのは、全長200mの探査挺を一飲みにする巨大な口だった

そんな巨大な生物、魔獣でも中々居ない
それこそ、伝説クラスでなければ

そしてこの映像が、レヴィアタンが実在するという証明になったのだ

「レヴィアタンはどうやら、深海7000m付近を遊泳しながら寝ているみたい……そこを、LYLって代物を使って支配するようね」

「LYL?」

「ええ……詳細は分からないけどね」

浅葱はそう言うと、カバンを手繰り寄せた

LYL

読みとしては、リルだろう

それは、結瞳のもう1つ名前

偶然とは思えなかった

「浅葱……そのLYLってヤツの対処、お願い出来る?」

明久がそう言うと、浅葱が

「何するつもりよ」

と明久に視線を向けた

すると明久は

「拐われた結瞳ちゃんを、助けてくる」

と言った

確かに、嘘は言っていない

ただし、ついでにクスキエリゼの企みを跡形もなく破壊することにはなるだろう
そのために、あらゆる手を尽くすつもりだ

すると浅葱は、カバンの中から取り出したゴムで髪を纏めて

「いいわ、やったげる……私も、なんか気に入らないのよね、コレ」

と言って、パソコンに向かった

そして、明久、雪菜、沙矢華の三人がカートに乗ろうとした時

「なんじゃこりや!? 何が起きた!?!」

と声が聞こえた

後ろを見てみれば、基樹が穴を見て驚愕している

そんな基樹に、明久は

「寝てろ!」

とカートに残ったペットボトルを投擲

「ぶべら!?!」

見事に、顔面に直撃させた

「先輩……」

「い、いくらなんでも……」

それを見た二人は、驚いているが

「騒がしくされるのも、面倒だから」

と言つて、カートを進ませた

その頃、水族館の海に面している区画

そこには、ブルエリも知らない港湾があつた

「よし……あとは、レヴィアタンに取り付くだけだが……レヴィアタンの進路は、大丈夫なのかな？ 妃崎降魔官？」

と霧葉に問い掛けたのは、スーツ姿の40代半ばの男だつた

その男ころが、現クスキエリゼの社長

くすきそうげん
久須木惣元だつた

すると、暗い場所から滲み出るように

「ええ……間違いありませんわ……」

と霧葉が、現れた

それを聞いた惣元は、狂気的な笑みを浮かべて

「君たち太史局のおかげで、私の望みも叶う……世界の王となるのは、私だ……ああ、勿

論見返りはキチンとするさ。それが、ビジネスマンの基本だからね」

惣元はそう言いながら、一隻の船を見た

そこに

『ヨダカの準備は万全にござる……LYLの調整も済んだ……後は、社長次第にござる……』

と幼い声が聞こえた

それを聞いた惣元は

「ああ、君にも感謝しているよ。戦車乗り……流石は、名だたるデイデイ重工のデザインチャイルド……まさか、半月程でシステムを構築するとはね……しかも予想外だったのは、まさか戦車乗りが子供だったとは……これでは、電子の女帝もかな……」

と呟いた

その呟きに、戦車乗りことリディア・ヌ・デイデイエは答ええない

そうする理由も、義理も無いからだ

そうしている間に、惣元は船

高速挺たるヨダカに乗り込み

「さあ……新たな時代の幕開けだ……世界よ、私にひれ伏すがいい……」

と成功を確信した様子で、そう言った

自分が使われているとも、
気付かずに

それぞれの突入戦

水族館エリアに到着すると、三人はカートから下車

そして、沙矢華の煌華燐で裏口のドアを強硬突破した

今は、時間が惜しいのだ

その裏口近辺に、霧葉が乗ってきていた車が停車していた

そこから、結瞳は既に中なのだろうと考えたのだ

そして、三人が中に入った時

「先輩！」

と雪菜が声を上げた

が

「うん、気付いてるよ」

明久はそう言って、横の影から突き出された双頭槍

リチエルカーレを刀で防いだ

そして、その一撃を繰り出した人物

霧葉を視認して

「不意打ちとは……やっつけてくれる！」

と言つて、施設諸とも強化した蹴りを叩き込んだ
すると、その施設の中から黒い人影が現れて

「流石は、世界最強と呼ばれる第四真祖……馬鹿げた蹴りですわね……」
と呟いた

そして、石突きで床を突いて

「改めて……太支局六刃神官が一人……妃崎霧葉……と申します」
と恭しく、一礼した

「黒の劍巫ですか……」

「ええ……貴方方獅子王機関が表ならば、太支局は裏……」

獅子王機関と太支局の関係は、まさに太極図なのだ

獅子王機関が白い面で、太支局が黒い面

二つは決して相入れず、互いに牽制と対立する

その霧葉と戦うために、雪菜が構えた

そこに

「雪菜……私にやらせて……」

と沙矢華が雪菜を止めた

その目には、強い意思が伺える

「煌坂さん……」

「こいつには、一度負けた借りがあってね……その借りを返すだけよ……行つて」

明久の問い掛けに、沙矢華はそう返答し構えた

それを見た明久は

「……健闘を祈る」

と言つて、雪菜と一緒に走り出した

それを見送ると、沙矢華は

「通してくれるなんてね……どういうつもりかしら？」

と霧葉に問い掛けた

すると霧葉は、妖艶な笑みを浮かべて

「もう、止められないわ……レヴィアタンは……そして、絃神島の破壊と……何より、藍

羽浅葱の抹殺はね」

「藍羽さん……!?!」

驚愕的な事を告げた

その時、コテージでは

「なによ、これ!? まるで、人間に対する負の感情の集まりじゃない!!」

浅葱は、LYLにハツキング

中を見て、驚愕した

なにせ、LYLの中身は人類に対する負の感情の塊だったのだから

「こんなんがLYL!? これで、レヴィアタンを支配しようっての!?!」

と浅葱が声を上げた時

『その通りに御座るよ、女帝殿』

と部屋のインターホンから、その声が聞こえた

「あんだ……戦車乗り!? まさか、クスキエリゼに雇われてるの!?!」

『クスキエリゼ……というより、太支局に御座るよ』

浅葱の問い掛けに、戦車乗りことリディアーヌはそう答えた

もちろん、リディアーヌ本人は水族館エリアに居る

「太支局? 政府直轄の降魔組織が、なんでクスキエリゼに手を貸してるのよ!?!」

『まあ、拙者は雇われてる身ゆえ、それは言えぬが……こうして、女帝殿と戦えるなど、

滅多に無きこと……本気で行かせてもらおうで御座る!』

浅葱の問い掛けに、リディアーヌがそう言った

その直後、浅葱のパソコンの画面に凄まじい速度でウィンドウが表示され始めた

「ちいつ!? こつちとしては、あんたの相手なんざゴメンだつてえの! モグワイ!
スパコンのアーキテクチャのリソースの8割を回しなさい! このバカ、なんとかする
わよ!!」

『はいよー! ようやく、何時もらしくなってきたな、嬢ちゃん』
「やかましいー!」

軽口を叩くモグワイに、浅葱は一喝したのだった

突入

「到着したけど……やっぱり、居ないよね……」

と言ったのは、水族館裏手の港に到着した明久だった

港のシャッターは開いていて、その向こうには果てしない海が広がっている

「しかし、ここに居たのは間違いないです。少し前まで、誰か居た形跡があります」

「うん……さて、どうするか……」

雪菜の言葉を聞いて、明久は頭を掻いた

その時、携帯が震えたので取り出すと

「ん？ 浅葱？」

浅葱からだだったので、出た

すると

『よう、兄ちゃん。オレだ』

とモグワイの声が聞こえた

「ん？ モグワイ？」

『嬢ちゃんの手が離せないから、オレが二人をレヴィアタンの場所まで連れてってやる。そのボートに乗りな』

モグワイがそう言った直後、近くにあったボートのエンジンが掛かった

どうやら、ハッキングして始動させたようだ

明久が視線を向けると、雪菜は察したらしくボートの紐を係留用の柵から外した
そして、二人が乗ると

『しつかり掴まってな！ 飛ばすぜ！』

とモグワイは、ボートを発進させた

『つとそうだ。モニターを見な、お二人さん』

モグワイがそう言った直後、一つのモニターにある映像が写った

それを見た明久は

「これは？」

と問い掛けた

するとモグワイは

『ソナーによるスキャンデータだ。この赤いのが、レヴィアタンだ』

と言った

それを聞いた雪菜が

「どの位の大きさなんですか？」

とモグワイに問い掛けた

するとモグワイは

『そうだな……計測出来た部分だけで、1 kmは確実だな』

と答えた

「デカッ!？」

『言つとくが、全長じゃないぜ? 魔力の波動からして、5 kmはある筈だ』

モグワイの告げた数字に、明久は思わず天井を見上げた

余りにも、大きかったからだ

『そろそろ、見える筈だぜ!』

その言葉を聞いた明久と雪菜は、進路上を見た

少し霧が出ているが、確かに前に何やら影が見える

まるで、山のような影が

「まさか……」

「あれが、レヴィアタン!？」

と二人が驚いた直後、その影

否、レヴィアタンが動いた

海中から姿を現して、空間を震わせる程の咆哮を上げた

「ヤバッ!!」

その時、明久は何か感じたらしく、ボートの窓を叩き割って、外に出た
そして

「獅子の黄金!!」

獅子の黄金を召喚した

その時、レヴィアタンから射出された物

生體式のミサイル群に、獅子の黄金が雷撃を放って迎撃

空中に、破壊の炎の華が連鎖的に開いた

一発でも当たれば、沈没は必至だろう

「先輩!？」

「ギリギリだった……って!？」

安堵した明久だったが、レヴィアタンの口に凄まじい魔力が集まっていることに気付いた

刀は持ってきているが、発射には間に合わない

明久はそう判断し

「雪菜ちゃん!」

「はいっ!!」

雪菜を呼び、雪霞狼を構えさせ、それを支えた

その直後、レヴィアタンから魔力砲が放たれた

その一撃は、直撃していたらボートは木っ端微塵になる威力を秘めていた

だがその一撃は、雪菜が展開させていた雪霞狼の神格振動波による結界によって防がれた

しかし、凄まじい威力で完全に防ぎきれず、ボートの船室の屋根が吹き飛んでいた
『マズいぜー！ 今の一撃で、舵がイカれた!! まともな機動が出来ない!』

それを聞いた明久は、左手で刀を持ちながら

「モグワイ、加速して!! 強行突入する!!」

と言って、雪菜の前に立った

その直後、ボートは先が上がる程に加速した

「先輩、何を!？」

それが信じられなかったのか、雪菜は驚いた

だが気付いた、明久の持っている刀から、凄まじい魔力が噴き出していることに

そして明久は、その刀

童子切安綱を高々と掲げて

「鬼牙……絶刀!!」

咆哮と共に、振り下ろした

その直後、雪菜には空間が切れたと錯覚された

その一撃で、レヴィアタンの一ヶ所に裂け目が出来た

ボートは最速を維持したまま、その裂け目目掛けて跳んだ

そしてボートは、レヴィアタン内部に突入した

代償と一端

「あたたた……雪菜ちゃん、大丈夫？」

「はい、なんとか……」

明久が問い掛けると、雪菜は体を起こしながらそう言った

そこに、ノイズ混じりに

『悪いな……どうやら……レヴィアタンの中は……電波が通りにくい……らしい……こ
こまでだ……』

とモグワイの声が聞こえた

「ありがとう、モグワイ……」

明久がモグワイに感謝の言葉を言うと、雪菜が

「ここは……ドック……ですか？」

と周囲を見回した

「なるほど……その入り口だから、魔力の流れが弱かったのか……狙って正解だった」

そんな二人から少し離れた場所には、一隻の船

ヨダカが、懸架されている

クスキエリゼの船に、間違いないだろう

それを見た明久は

「ねえ……雪菜ちゃん……少し、血を貰える？」

と雪菜に問い掛けた

すると雪菜は、顔を真っ赤にしながら

「い、いきなり何を言ってるんですか!? 血なら、沙矢華さんから吸ったじゃないんですか!？」

と反論した

確かに、明久は沙矢華から血を吸っている

「まあ、確かにそうなんだけどね……割りと切実なんだよね……」

「? それって、どういう……」

明久の言葉に、雪菜は問い掛けようとした

その時、ビチャリと嫌な音がした

それを聞いた雪菜は、明久の左腕が、真っ赤になっていることに気がついた

「先輩!？」

「この刀の……反動ってというか……リスクだよ」

明久はそう言つて、右手でなんとか刀を納めた

「童子切安綱……」

「天下五剣……まさか……妖刀……？」

雪菜のその推察は、正解だった

天下五剣の一振り、童子切安綱

この刀は昔、日本三大妖怪と言われていた内の一体

酒呑童子を切った刀である

しかしその後、安綱は呪われた

絶大な威力を發揮する変わりに、使い手の血肉を喰らう妖刀に

では、博物館に展示されているのは？

その正体は、影打ちである

その昔、神社に奉納される御神刀は二本打たれた

その理由は、何らかの事態により失われた場合、代わりに奉納するためである

一説によれば、その酒呑童子を討った武将は、酒呑童子を討つたためにある神社に奉納

されていた真打ち安綱を借り受けた

神性の力を帯びているだろうから、討てるだろうと

その目論見は成功し、確かに討伐出来た

だが、討たれた酒呑童子の怨念が非常に強く、御神刀だった安綱を妖刀に変じせた妖刀になってしまつては、最早神社に奉納することは出来ない

だから真打ち安綱の代わりに、影打ち安綱を納めた

影打ちとは言つても、刃紋から反りに至るまで、完全に同一の代物で、唯一違うのは耐久性位だろうか

しかし、真打ちの安綱は二度に渡る世界大戦の影響で失われてしまつていたのだ

「先輩っ！」

「つつ……やっぱり、左手一本分の血肉は……厳しいか……」

ふらつuitした明久を、雪菜は支えた

よく見れば、明久の左手は痩せ細っている

はつきり言つて、最早使い物になりそうにない

「……取り敢えず、しばらく放置すれば……再生するだろうけど……」

幾ら不死だろうが、手一本分の血と肉の大部分を失つたのだ

回復に時間が掛かるのは、一目瞭然だ

だが、今居る場所はレヴィアタンの中

つまり、敵地のど真ん中である

長居するのは、リスクがあり過ぎた

そう判断したのか、雪菜は

「仕方ないですね……」

と呟いた

何より、明久の戦闘力は頼りになる

長時間失うには、惜しいのだ

「先輩……」

雪菜はそう言いながら、着ていた服の胸元のボタンを外して、うなじを露出させた

「雪菜ちゃん……いいの？」

「先輩のほうが、辛いじゃないですか……だったら、吸ってください……」

雪菜がそう言うと、明久は優しく雪菜を抱き締めて

「ありがとう、雪菜ちゃん……結瞳ちゃん……助けようね」

と言つて、雪菜の首筋に牙を突き立てた

その頃、水族館エリアの一角では

「どういふことよ……藍羽さんが……カインの巫女？」

と沙矢華は、倒した霧葉を見下ろしていた

どうやって倒したのかと言えば、沙矢華は自分に呪い間近の身体強化フィジカルエンチャントを付加

高められた身体能力を活かして、肉弾戦で倒したのだ

しかし、気になることを聞いていた

それが、今ロツジにて電脳戦を繰り広げている少女

浅葱が、旧神カインの巫女であり、絃神島がその祭壇だと聞いたのだ

「取り敢えず、今は……待機するしかないわね……頼むわよ、雪菜……吉井明久……」

今は出来ることが無い沙矢華は、レヴィアタンに取りついたらと信じることしか出来な
かった

心の氷

「よし……なんとか、左腕が動くようになった……」

「良かったです、先輩」

左腕の調子を確かめた明久の言葉に、雪菜は安堵の言葉を漏らした

雪菜の血を吸ったことで、回復力が上げられた結果だった

「さて、結瞳ちゃんを見つけないと」

「はい、そうですね」

ヨダカの中に結瞳が居なかったのは、既に確認済み

ならば、レヴィアタンの中に居る

しかも、ヨダカ内部の残留魔力を考えると、まだ近くに居ることは明白だった

「さて……後は、何処に居るかだけ……」

「それは……つつ！ 先輩！」

雪菜が声を上げたと同時に、明久は電撃を周囲に放っていた

その理由は、壁に開いた穴から射出された生態式の針だった

針は高速で迫ったものの、明久から放たれた電撃で全て迎撃された

そして二人は、ある気配の方に顔を向けた

その先に居たのは

「あーあ……ここまで来ちゃったんだ……」

夢魔としての結瞳

リリースだった

「こんな所まで来るなんて、とんだ変態だよ、明久さんって」

とリリースが妖艶に言うが、明久は深々と溜め息を吐いて

「下手な演技してないで、帰るよ。結瞳ちゃん」

と言った

その直後、結瞳の体がビクリと震えて

「……なんで、分かったんですか？」

と問い掛けてきた

すると、明久は

「リリースは、僕のことを第四真祖としか呼んでなかったし、何よりも……さつき、さん付けしてたし」

と指摘した

しかし結瞳は、首を振って

「ダメなんです……私は、戻れないんです……」

と言って、語り始めた

なぜ結瞳が、リリスの力を得たのか

世界最強の夢魔、リリス

その正体は、精神体の魔族だったのだ

恐らく、最初は体が有ったのだろう

しかしリリスは、今は失われた魔術で精神体のみで転生する術を編み出した

それによりリリスは、転生した個体の肉体が死んだ場合、次の肉体に転生するように

なった

勿論、無条件で転生出来るわけではない

転生するには、幾らかの条件がある筈である

その条件に、結瞳は適合した

適合してしまった

そうして結瞳がリリスの力を得たのは、まだ物心が付いたばかりの頃だった

それにより、結瞳は周囲から虐められるようになってしまい、最初は虐めてきた子供

達が昏睡

次は、そんな結瞳を討伐しようとしてきた無免許降魔官を

そして滔々、両親すら昏睡させてしまった

そうして、膨大な人数を昏睡させてしまった結瞳は、親戚中をたらい回しにされた
なお、未だに両親を含めた殆どが目覚めておらず、その事実と罪悪感が、莉瑠という
人格を作り出した

それ自体、彼女を非難することは出来ないだろう

幼い彼女には、重すぎたのだ

そんなある日、クスキエリゼと太史局だった

クスキエリゼは、当時は居るか定かではなかったレヴィアタンを支配するために

そして太史局、結瞳に死に場所を与えた

レヴィアタン内部で死ぬば、リリスは二度と転生出来ない

それを聞いた結瞳は、ある覚悟を決めた

それが

「私の代で、リリスを終わらせます！　そうすれば、もう私のようなことを経験する人は
居なくなります！」

自分を、人柱にすることだった

世界最強にして最古の生態兵器、レヴィアタン

その内部で結瞳が死ぬと、リリースはレヴィアタンの展開している様々な障壁により、外に出ることは出来ず、長い年月が掛かるが、魔力に分解されて、レヴィアタンに吸収される

それを知った結瞳は、太史局が何を考えているのかも聞かずに、太史局に協力することにした

「だから、私は……!」

と言った結瞳は、俯いていた顔を上げた

すると目の前には、明久が居て

「ちえいさ」

と結瞳の額に、デコピンを放っていた

「あ痛っ」

「先輩!」

まさかデコピンされるとは思わず、結瞳は額を押さえながら明久を見た

すると、明久は

「子供が、そんな決意しないの。それに、僕はどうなのさ? 僕なんて、世界最強にして不死の第四真祖だよ? 居ること事態が、災害扱いされてる」

と語り始めた

「確かに、結瞳ちゃんは今まで辛い経験をしてきたんだろうね。僕には、想像出来ないほどに……けど、だつたらさ……これから幸せにならないと嘘でしょ。ようするに、今までが長い長いプロローグだったんだ……結瞳ちゃんにとつて、長いプロローグだった……ならさ、ここから始めようよ。結瞳ちゃんの物語をさ」

明久はそう言つて、結瞳に手を差し伸べて

「居場所が無いなら、絃神島においてよ。もしかしたら、その夢魔の力……なんとか出来るかもしれないよ?」

と言つた

それを聞いた結瞳は、涙を流しながら

「私……居ていいんですか? 生きて……いいんですか?」

と明久に問い掛けた

すると、明久だけでなく雪菜も

「生きていいに決まつてる」

「そうですよ、結瞳ちゃん」

と、結瞳に手を差し伸べた

それを聞いた結瞳は、二人に抱きついたのでした

脱出

明久が結瞳を説得した頃

「これで、終わりっ!!」

と浅葱は、キーボードを叩いた

すると、戦車乗りたるリディアーヌは

『諦めるでござるよ、女帝殿。拙者も鬼ではござらん。せめて、日記の暴露で……あなや!?!』

と驚いた

何故ならば、リディアーヌが乗っていた多脚戦車

膝丸が、突如として機能をダウンさせたからだ

『これは……ディディエ重工からの強制命令!? まさか、ディディエ重工のサーバーに乗っ取ったでござるか!?!』

リディアーヌが乗る膝丸は、彼女の実家に当たるディディエ重工の試作機をリディアーヌ専用に変更強化した代物で、何かあった時のために、ディディエ重工から強制命

令で機能停止させられるようにしてあったのだ

「あんたが直接守ってるクスキエリゼのサーバーより、簡単だったわよ！」

『バカな!? デイディエ重工は軍需企業にござる! そのサーバーを、たった数分で!?』
デイディエ重工は戦王領域においては、一大軍需企業であり、その物理的ならびに電子的防御網は並大抵ではない

しかし浅葱は、リディアーヌと電子戦を繰り広げながら、僅か数分でデイディエ重工のサーバーをハッキング

強制命令を出させたのである

「さて、後はこのLYLの解体ね……やれやれ、疲れたわ……」

浅葱はそう言つて、LYLシステムの解体を始めた

すると、リディアーヌは

『……女帝殿……やはり女帝殿は……カインの巫女なんでござるな……』

と呟いたのだつた

その頃、レヴィアタン内部では

「わつと……な、なんだ?」

突如として、レヴィアタンが大きく揺れたのだ

そこに

「大変です……!!」

と結瞳が、痛みを堪えるように言った

「結瞳ちゃん!？」

「何があつたの!？」

と二人が問い掛けると、結瞳は

「レヴィアタンが……私の制御を外れつつ、ありますっ!」

と言つた

「なっ!？」

「なんだって!？」

結瞳の言葉を聞いて、二人は驚愕した

つまり、レヴィアタンが本来の機能を発揮しつつあるということになる

「今はまだ、完全ではありません……しかし、このままでは……!!」

頭を抱えながら、結瞳さそう言つた

それを聞いた明久は

「急いで、脱出するよっ!」

とヨダカに向かつた

そして、ヨダカに乗って

「結瞳ちゃん、隔壁の開放と注水は出来る!？」

と結瞳に問い掛けた

その問い掛けに、結瞳は少ししてから

「なんとか、出来ます……!！」

と答え、目を閉じた

その数秒後、確かに注水が開始された

それを見た明久は

「さてと……上手く動いてよっ!！」

と明久は、操舵悍を握った

そして、ある程度注水されて、隔壁が開いた

その直後、明久はレバーを思い切り上げた

そして、思い切りUターン

結瞳が一度開けたが、閉まり始めていた隔壁を見て

「しっかり捕まってるよ!!」

と二人に忠告した

その数十秒後、ヨダカは閉まり掛けていた隔壁の隙間を、火花を散らしながら強行突

破

外に出た

「ふへえ……なんとか、出られた」

窓から見た見た光景に、明久は気の抜けた声を漏らしつつ、レバーを手前に引いて、ヨダカ
の速度を落とした

その直後、空間を震わせる程の咆哮が轟いた

それを聞いた三人は、外を見た

すると、数百m離れた位置にその巨体が現れた

「あれが……レヴィアタンか……!」

漆黒の装甲に、直径1kmは有りそうな胴体が見えた

「つう……凄いやばい魔力です……!」

「うーん……これは、所謂激おこですな」

と明久が言った直後、凄まじい数の生態式ミサイルが発射された

「やばっ!」

その数は、突入時の比ではなかった

黙視で、数百発に及ぶ生態式ミサイル

それを見た明久は

「深緋の双角!!」

と深緋の双角を召喚

衝撃波で、直撃するミサイルを全て撃墜した

だが、残ったミサイルは全て周囲の海に着水

高さ10m以上の水柱を形成した

「おおおおお!？」

「きゃああああ!？」

明久達三人は取っ手を掴んで耐えたが、ヨダカは嫌な音が響いた

直撃ではなくとも、長くは持たないだろう

「まあ……レヴィアタンには同情するよ……静かに寝てたのに、いきなり、精神操作され
たんだからね……だけど、君に暴れられたら、島も危ないんだ……」

明久はそう言っつて、ヨダカの甲板から、レヴィアタンを見た

そして

「だから……また深海で寝てもらおうよ……ここから先は、第四真祖の戦争だ!」

と宣言した

その隣に、雪菜が立ち

「いいえ、先輩……私達の戦争です!」

と力強く言った

深海の歌姫

明久と雪菜が並び立った直後、レヴィアタンは咆哮
そして、口を開けた

「雪菜ちゃん！」

「はい！」

明久が雪菜の名前を呼ぶと、雪菜は雪霞狼を構えた
その直後、レヴィアタンから砲撃が放たれた

余りの威力に、雪菜の体が後ろに押される
だが、その雪菜の背中を明久が支えて

「頑張つて！ 雪菜ちゃん！」

と激励した

それが聞こえたのか、雪菜は

「はあああああ！！！」

雪霞狼の神格震動波を最大展開させ、レヴィアタンの砲撃を防ぎきった

しかし、やはりレヴィアタンの砲撃を防ぐのは雪菜に多大な負荷を与えていた
防ぎきった直後、雪菜は膝を突いて荒く呼吸を繰り返していた

だが、レヴィアタンは攻撃を緩めなかった

数秒後、レヴィアタンはあの生体式ミサイルを発射した

それも、数える気すら起きない数を

「獅子の黄金！ 双角の深緋！」

その生体式ミサイル郡に対して、明久は広範囲攻撃が可能な二体の眷獣を召喚

迎撃した

それにより、空中に炎の絨毯が形成された

「つう！ 明らかに、数が多い！」

「来た時は、私が放つてたんです！ 牽制だけが目的だったから、最低限だけにしました

!!」

明久の言葉に、結瞳がそう言った

それを聞いた明久は、レヴィアタンを睨み

「つまり、これが完全解放されたレヴィアタンの能力か……」

と呟いた

それを裏付けるかのように、今のレヴィアタンからは凄まじい魔力が漏れ出している

その比は、来た時の比ではなかった
やはり、眠っていたのだろう

しかし今のレヴィアタンは、完全に覚醒し、しかも怒っている
出力は段違いに跳ね上がっているのだ

「……しかも、攻撃だけじゃなく防御の出力も上がってるのか……隔壁付近の魔力の流れが変わってる……いや、学習して、防御の障壁自体を複層式にしてるのか……！」

それは恐らく、明久が突撃する時に使った安網対策だろう

突撃した時は、左腕一本分の血と肉を生け贄にして、レヴィアタンの障壁と隔壁を切り裂いた

しかし、複層式障壁に出力が強化された隔壁

左腕一本分では、斬れるか分からない

その時だった

レヴィアタンは、体を高く持ち上げた

「なんだ……なにを!？」

と明久が言った直後、凄まじい数の生態式ミサイルが放たれた

「なっ!?! 何処に!?!」

しかもそのミサイルは、明久達の頭上を越えていった

すると、雪菜が

「先輩、あの方角は!？」

「……しまった、ブルエリか!？」

雪菜の言葉に、明久はレヴィアタンの狙いに気付いた

自分を使おうとしていたクスキエリゼ

そのシステムと様々な設備と社員を、狙ったのだと

それも、複数波放っていた

「このお!!」

それを見た明久は、二体の眷獣でミサイルの撃破を行った

しかし、余りの数に全て撃破出来ずに、相当数が抜けた

「くそっ! 抜けられた!!」

「先輩、来ます!!」

雪菜の言葉に、明久は振り向いた

すると、レヴィアタンは赤い目で明久達を睨んでいた

そのレヴィアタンに

「ある意味、こいつは適任だね……今回、使わないかとも思ってたけど……」

と言って、右腕を掲げた

そして

「焰光カレイドブラッドの夜伯の血脈を継ぎし者、吉井明久が、汝が枷を解き放つ！ 疾こく在いれ！ 7 番目
の眷獸……夜摩キワァーアールの黒剣!!」

明久のその呼び掛けに、一体の眷獸が上空に姿を現した
その見た目は、神仏が持っている武神具、三鉈剣だった

それを見た雪菜は、その三鉈剣の正体に気付いた

「あれは……意思インテリジエントウエボンを持つ武器!？」

そうそれは、吸血鬼の眷獸の中では珍しいタイプの意思を持つ武器だった
しかし、その規模が段違いだった

柄尻から切っ先まで、約100mは優にあつた

そして明久は、レヴィアアタンを指差し

「行けえ!!」

と指示を下した

その直後、夜摩の黒剣は凄まじい速度で落下を始めた

「まさか……重力制御!？」

夜摩の黒剣の能力

それは、重力制御だった

それも自分だけでなく、相手にもだ

レヴィアタンは避けようとしているようだが、動きが鈍かった

その理由は、夜摩の黒剣がレヴィアタン周囲の重力を不規則変動させていたからだ
幾ら高い学習能力を持つレヴィアタンだろうが、不規則に変わる重力に、簡単には対応出来なかった

その間にも夜摩の黒剣は加速化し、まるで隕石のように赤熱化した気流を伴いながら
レヴィアタンに直撃した

推定数十万トの隕石の直撃に匹敵する威力に、レヴィアタンは悲鳴を上げた

だが、悲鳴を上げたのはレヴィアタンだけでなく、

「落ちる、落ちるっ!!」

「先輩、やり過ぎですっ!!」

夜摩の黒剣の着弾の衝撃で、海が大きくうねったのだ

それにより船から振り落とされないように、明久と雪菜は必至に柵に捕まっていた
なんとか収まり、明久と雪菜はレヴィアタンの方を見た

すると海中から、流石に無傷ではないが、レヴィアタンが姿を現した

しかもよく見れば、少しずつ損傷が直っている

「不味い……これ以上は……っ!」

安綱の使用と度重なる眷獣の召喚

それは確実に、明久の体にダメージを与えていた

それに、雪菜の雪霞狼も当たらなければ意味が無い

海という不利なフィールドでは、レヴィアタンに分が有った

雪菜も打開策が浮かばないらしく、悔しそうにしていた

だが、その時

「いえ……決まりですよ、明久お兄さん、雪菜お姉さん……」

と結瞳が、ゆっくりとレヴィアタンに近づいていく

「結瞳ちゃん!?!」

「何を!?!」

それを見た二人は、まさか結瞳が生け贄になるのかと思つた

しかし結瞳は、大きく深呼吸すると歌を歌い始めた

その旋律に、明久は不思議と安らぎを覚えた

「これは……子守唄……?」

と呟いたのは、雪菜だった

恐らくその子守唄は、過去に結瞳の両親が結瞳のために歌っていたのだろう

それを結瞳は、レヴィアタンのために歌つた

すると、レヴィアタンから放たれていた怒りの雰囲気と迸っていた魔力が徐々に収まっっていく

その光景に、明久は

「最悪の夢魔？ 僕には、最高の歌姫に見えるよ……」

と呟いた

結瞳が歌い終わった時には、レヴィアタンはゆっくりと海中に姿を消していったのだった

こうして、世界最古にして最強の生態兵器は深い深い海の底に帰っていったのだった

ハチヤメチヤ

「もう無理……もう動けないわ……」

と力なく言ったのは、赤い戦車

膝丸の足に背中を預けて座っている沙矢華だ

『こちらにも、弾切れでござる……』

「……動けん……」

そして、沙矢華とは反対側の足に、康太が背中を預けて座っていた

この三人は、ブルエリに迫ってきていたレヴィアタンの生体式ミサイルを迎撃していたのだ

そのおかげで、ブルエリに大きな被害は無し

短期間で、復旧が可能なレベルだ

しかしそれにより、膝丸は主砲だけでなく全兵装で弾切れ

沙矢華は矢と呪力を使いきり、康太は体力と霊力を使いきった

もしもう一波有ったら、防ぎきれなかっただろう

「……あっちも、上手くやったみたいね……」

沙矢華は、明久達がレヴィアアタンをどうにかしたと悟り、空を見上げたその少し後、コテージにて

「あー……散々だった……」

と疲れて寝ている結瞳を背負った明久が、言葉を漏らした

コテージを出た時は、ようやく水平線が白み始めた位だった

しかし今は、完全に陽が登っている

実質、徹夜だ

明久もだが、雪菜も眠そうにしている

「……寝たいですね、先輩……」

「深く同意する……」

雪菜の言葉に、明久は返事しながら頷いた

すると、コテージの中から浅葱が姿を現した

浅葱を見た明久は

「おーい……全部片付いたよー」

と力なく、報告した

のだが

「明久！ 逃げるわよっ!!」

と浅葱は、やってられるかつ。という表情で、そう言った

「……はい?」

と明久が首を傾げると、新たにコテージの中から人影が現れた

一つは、水着に着替えた風沙

そしてもう一つは、水着の上にスタツプという文字が印刷されたTシャツを着た女性

「……あ」

その女性を見た明久は、全てを察した

それを肯定するように、風沙とその女性が

「明久くん！ お仕事だつてえ!」

「はい、楽しい仕事の時間だよー」

と言ってきた

それを聞いた明久は、浅葱の言った通りに逃げたくなつた

徹夜してレヴィアタンと戦ってきたのに、何故に働かなければならないのか、と

その時だった

寝ていたはずの結瞳が、ガバリと起きて

「ダメです！ 明久お兄さんは、私と遊ぶんです!」

と言いなから、明久の首に抱き付いた

実はレヴィアアタンが潜った後、明久は結瞳とこれまで不幸だった分一杯遊ぼうと話していたのだ

そして結瞳は、明久の耳元で

「待っててくださいね、お兄さん……今はまだ無理ですけど、後四年程で……ですからね」

と呟いた

すると、先の結瞳の言葉を聞いた浅葱が

「あんたは……何したのよ、明久っ！」

と浅葱が、明久を睨んだ

雪菜は、怒り半分呆れ半分といった表情で明久を見ながら

「先輩……」

と呟いていた

そして明久は、憎たらしいまでに青い空を見上げ

「……ジーザス」

と呟いた

その頃、ある紛争地帯で

「それが、俺の名前だっ！」

と言いながら、敵を撃つ凄腕傭兵が居たとか居なかったとか……

焰光の夜伯編

序章

虹色に燃え盛る焰の中、一人の少女が血溜まりに倒れる少年を見ながら

「…………なぜ、恐怖せぬ…………」

と短く問い掛けた

少年は致死量の血を流し、最早その命は風前の灯火

だがその顔にあるのは、死に対する恐怖ではなく、まだヤツてやるといふ気概に満ちている

「…………まだ、動く必要があるからだ…………あの子を、助けないと…………それが、僕の役割なんだ…………っ」

少年はそう言って、震える両手で必死に体を動かそうとした

しかし、自身から流れ出た血で手が滑り、無様に仰向けに倒れた

そんな二人を見下ろすように、マーメイドのような妖鳥のような見た目の存在が浮いていた

その妖鳥は、冷厳な双眸で少年を睨んだ

そして少女の意思は、この世界を支配する冷徹な理ルールそのもの

少年が一瞬でも恐怖に圧され、自身の死を受け入れたら、その瞬間に、圧倒的力で少年にとどめを刺していただろう

だが少年は、己の死を受け入れずに、その行動で不屈を示していた

『汝の生は、既に尽きかけている。もはや、出来ることは何もない』

一切感情が感じられぬ声が、少年の頭の中に響いてくる

『ここは、第四真祖の血の記憶……悠久の生によって無限に堆積する時間の墓場。我らはその血脈の中に潜み、真祖の記憶を糧として生きる者。今や、汝もその一部になりかけている……』

巨大な氷の翼を動かし、妖鳥はその姿を変えていく

逆巻く炎のような虹色の髪に、焰光の瞳

美しい少女の姿へと

『死にゆく人の子よ、何故、我を恐れぬ？ 何故、我の名を呼んだ？』

「うるさいよ……！」

少女の問い掛けを遮り、吐き捨てるように少年は叫んだ

虚空に沈みかけていた血まみれの腕に、力を込めて体を起こそうとしながら

「まだ終わってない！ 僕は、あいつを守るために来たんだ！ そのためなら、どんな力でも使う！ それが、世界を滅ぼす力だとしても……!!」

と魂の叫びを上げた

『真祖ならぬ只人の身で、我が悠久の《血の記憶》を喰らうか……?』

少年の言葉に、少女は感嘆した表情で問い掛けた

妖精のような顔立ちに相応しい、無邪気な笑み

喪われていく筈だった少年の血が、肉が、骨が、内臓が、何もない虚空から再生されていく

少年を呑み込もうとしていた《血の記憶》を、少年は逆に喰らおうとしているのだ

吸血鬼の真祖のみが制御出来る無限の《負の生命力》を、無力な筈のただの人間の少年が

『その代償、高くつくぞ、哀れなる人の子よ……』

焰光に輝く瞳を細めながら、少女は少年に告げた

彼女が掲げた手の中に、小さな氷の破片が現れた

それはあつという間に成長し、一本の長大な槍へと変わった

二又の穂先を持つ、氷の槍へと

少年は、それを見て

「それでもいい……だから、力を貸してくれ……アヴローラ!!」

血に濡れた腕を懸命に伸ばし、少年は少女の名前を呼んだ

その直後ら少女の瞳に過つたのは、泣き笑いに似た優しい表情だった

微笑みを浮かべて、少女は小さく

よかろう。受け取れ……!

と囁き、少女は無防備に手を伸ばしていた少年の胸に、氷の長槍を深々と突き立てた

……

中にて

「……気付いたら、縛られてる件について」

意識が快復した明久は、思わずそう呟いた。

その理由が、今言った通りに椅子に縛られていたからだ。すると、背後から

「明久、起きた？」

と浅葱の声が聞こえた。

肩越しに見てみれば、もう1つの椅子に浅葱が縛られていた。

「今起きた……何が起きたんだっけ？」

浅葱の問い掛けに、明久は答えてから首を傾げた。

どうにも、記憶があやふやだった。

すると、浅葱が

「それより、明久……よくも、隠してたわね……あんたが吸血鬼……それも、第四真祖
だって……」

と言って、明久は固まった。

「ナズエ、知ツテルンデイス!？」

「日本語喋りなさい……あの雪菜って子を問い詰めたのよ！」

浅葱の言葉を聞いて、明久は縛られたまま身もだえた。何が起きたか分からないが、何故喋ってしまったのかと。

そこに

「起きましたね、先輩方」

と新たに、第三者の声が聞こえた。

二人が見た先、薄闇の中から、雪菜が現れた。

その直後に、三人が居た場所が一気に明るくなったのだが……

「……あれって……」

「拷問器具？」

雪菜の背後の壁に、夥しい数の拷問器具が展示されていた。

それを見た二人は、困惑した表情で

「ちよつと、明久、どうなってるのよ……あの子、あんなことする性格だったわけ……

!？」

「うーん……確かに、少し生真面目過ぎるし、思い込み激しい処あるからなあ……」

浅葱の問い掛けに、明久は思わず視線をさまよわせながらそう呟いた。それを聞いた

浅葱は

「つまり、私があんたの秘密を知ったから、私達に拷問をしようっての!? あんた、あの子を追い込み過ぎたんじゃないの!？」

と明久を非難した。

そう言われた明久は、唸ることしか出来なかった。

すると、雪菜が

「……お二人が、私をどう思ってるのか、よく分かりました……私だって、泣きますよ……」

と二人を睨んだ。そして、壁の拷問器具を見て

「これは、中世欧州で使われた本物のようですね……」

と呟いた。それを聞いた二人は、ビクリと震えて

「だ、だから、なんでそんな物が有るのかなあ?」

「そ、そうよ……少し落ち着きましょう、姫終さん……私、秘密は喋らないから……確かには、ハッカーで信用ないかもしれないけど、約束するわ……」

と雪菜に言った。

その言葉に、雪菜は深々と溜め息を吐いて

「ですから、落ち着いてください。先輩方……拷問する気は微塵もありませんから……」

この拷問器具は、触媒です」
と二人に教えた。

その時、明久は今居る場所が何処だか分かった。内部に入ったとは言え、部屋の中は初めて見たから分からなかったのだ。

「……は、まさか……」

「そう、監獄結界だよ……」

明久に続けるように、新しい声が聞こえた。そして気づけば、部屋の片隅に大きな椅子に座った那月が居た。

「那月ちゃ……」

「だから、教師をちゃん付けするな、バカ者」

空間魔術を使ったデコピンを受けて、明久は身もだえた。

縛られているために、衝撃を逃がせないのだ。

すると、浅葱が

「……が、監獄結界……の、中……」

と興味深い様子で、部屋の中を見回した。

すると、雪菜が

「……なら、大抵の事態には対処出来ます……ですから、南宮先生に頼みました……今か

ら、先輩方の記憶を甦らせませます」と告げた。

ドタバタな朝

時は遡り、約半日程前。今朝になる。

明久は、連打されていたインターホンの音で起きた。

「……誰？ こんな時間に……」

そう呟きながら明久は、目覚ましに視線を向けて

「……フアー!!」

と奇声を上げた。

目覚ましが表示する時間は、7時50分。

何時もより、一時間近く遅い時間になる。

ベッドから飛び起きた明久は、廊下に出るとインターホンの受話器を掴み

「雪菜ちゃんだよね!! ごめん！ 今起きた!!」

と捲立てるように、告げた。

すると、画面に雪菜の顔が映しだされて

『なんとなく、予想してました。待ってますから、早く準備してください』

「悪いから、先に行つても……」

雪菜の言葉を聞いて、明久はそう返答した。すると、雪菜は軽く睨むような表情をして

『……遅刻するつもりですか？ そうはいきませんよ。先輩達が出るまで待ちますから、早く準備してくださいね』

と告げた。それを聞いた明久は、思わず唖ってしまった。

実にその通りだったからだ。今から走つて向かつて、間に合うか間に合わないかの瀬戸際だ。

ならば、いつそ諦めて遅刻しようかと思つていた。

しかし、炎天下の中に雪菜を長時間待たせる訳にはいけないので、明久は急いで風沙の部屋に向かい

「風沙！ 起きろー!!」

と一気に、風沙がくるまっていたタオルケットを引っ張った。

「あ痛あ!? いきなり何!?!」

引っ張られた勢いで、床に落ちた風沙は慌てた様子で明久を見上げた。

すると明久は、目覚ましを指差し

「時計を見ろおおお!!」

と声を張り上げた。

それを聞いた凧沙は、目覚ましを見て

「……………ふええええええ!!? なんで!?!」

と声を上げた。

そして、明久は

「とりあえず、雪菜ちゃんを待たせてるから! 急いで着替えて!」

と凧沙に指示して、自身も部屋に戻って急いで着替えた。

そして、全速力（人間の範疇）で走り、電車に飛び乗り、学校に向かった。

「けど、珍しいね。凧沙ちゃんが寝過ぎすなんて」

「そうなんだよね……………どうも、一度は目覚ましで起きたみたいだけど、止めて二度寝しちゃったみたいで……………」

雪菜の言葉に、凧沙はそう言いながら頭を掻いた。

凧沙の話では、確かに目覚ましをセットした記憶はあるらしい。しかし、寝ぼけて止めてしまったらしい。

そして、予鈴が鳴る五分前になんとか校門付近に到着したのだが

「……………なに、あの人だから?」

校門前には、凄まじい人数の生徒が居たのだ。

その人だかりの向こう側に、辛うじて黒い塗装の長い車。リムジンが止まっているのが分かる。

「何々、何事？」

「……さあ？」

風沙の言葉に、雪菜も首を傾げた。

どうやら、雪菜も知らないらしい。その後、何とか苦勞して人だかりを越えて教室に向かったのに、朝礼から自習となった。

だがこれが、明久の過去に向き合う話の始まりになった。

編入生

「……オシアナス・ガールズ？」

「……ああ、最近動画サイトで有名になってきているユニットが、彩海学園に編入してきたんだ」

明久が首を傾げると、康太がそう教えた。

それが、今朝のリムジンで来たらしい。

正確に言えば、編入してきたのはそのユニット含めて七人らしい。

「……なあんか、嫌な予感がする……」

そう呟いた明久は、早く帰ろうと帰る準備を始めたのだが

「あ、居た！」

「居たわ、吉井様よ！」

と聞き覚えのある声が、明久の耳に入った。それを聞いた明久は、天井を見上げながら

「遅かったかあ……」

と額に手を当てた。

そんな明久の教室に入ってきたのは、五人の少女達。

その少女達に、明久は見覚えがあった。他ならぬ、ヴァトラーの船たるオシアナス・グレイヴⅡに居た少女達だ。

「……はあ……」

この後起こる事態を予想して、明久は深々と溜め息を吐いた。その理由は、至極単純。明久に、凄まじい殺気が向けられているからだ。

そんな時

「どけ、貴様ら……邪魔だ」

と若いが、厳しい声が聞こえた。

ふと見てみれば、欧州系の少年二人が教室に入ってきた。

その二人もまた、明久には見覚えがあった。

その二人は、オシアナス・グレイヴⅡに居たヴァトラー配下の吸血鬼だった。

「君たちは……」

と明久が、その二人に視線を向けると

「ふん、絞まりのない顔だな……ヴァトラー様は、何故こんな奴を気に入るのか……」
と一人が、鼻で笑った。

するともう一人、キラ・レーベデフが

「まあまあ、トビアス……閣下の命令ですから」

とその吸血鬼を宥めた。

その吸血鬼。トビアス・ジャガンは、キラの言葉に舌打ちした。

「キラ君、何があつたの？」

「それが、閣下……ヴァトラー様が手紙を残して姿を眩ませたのです」

明久の問い掛けに、キラは苦笑いを浮かべながらそう告げた。

それを聞いた明久は

「ヴァトラーが、居なくなつた？ あ吸血鬼、領主兼駐在大使なんですよ？ いいの

？」

とキラに問い掛けた。

するとキラは、苦笑いを浮かべたまま

「まあ、何時ものことですから……慣れていきます」

と答えた。

どうやら、過去に何度かあつたらしい。

「そして、その手紙には……貴方を護衛せよ……と書いてありました」

「僕の……護衛……？」

キラの言葉に、明久は眉を潜めた。

なぜ、明久の護衛を命じたのか。

「ヴァトラー様の命令だから従うが、我々の仕事を増やしてくれるなよ。貴様は、大人しくしている」

トビアスはそう告げると、オシアナス・ガールズを撮影していた男子達を蹴散らし、教室から去った。

そんなトビアスを見送り、キラは

「護衛は、僕達以外にも多数投入するつもりですが、基本的には僕達が当たります。彼女達は……まあ、オマケ程度に思ってください……では」

と頭を下げると、オシアナス・ガールズを引き摺るように連れていった。

それを見送った明久は、一度深々と溜め息を吐くと

「……さて……鬼ごっこの始まりだ……！」

と言ってカバンを掴み、一気に駆け出した。

その直後、数多くの男子達がまるで、幽鬼のように明久を追いかけるのだった。

邂逅

時は少し遡り、昼頃の事だ。

旧アイランドサウス島、そこは以前に大事故が発生し、一般人の立ち入りが制限された場所であり、本来は誰も居ない筈の場所。

しかし、その一角では陽気な音楽が流されていた。

そこに集まっていたのは、大柄な男達だった。その身長は優に3mを越えている。

それもその筈で、彼等は巨人族^{ギガス}。それも、その中でも最も強力と言われる古代の血を引く者達だ。

その管理は魔族特区と云えども嚴重にされており、その証拠に彼等の左手手首には、普通のとは違う魔族管理腕輪が装着されている。

普通のは銀色なのだが、彼等のは黒い。

それは、魔力の高まりを閔知すれば、高濃度麻酔薬が注入される仕組みになっている。そんな彼等は、違法経営の酒場に集まって酒を飲んでいた。

そこに、その場に相応しくない格好、ツーピースのスーツを着た金髪の青年が入って

きた。

それを見た一人が

「おいおい、ここは高級な店じゃねえ。とつとと帰って寝てな」

と声を上げた。

しかし、青年は意に介さず

「シー……此処にも、居ないか……」

と酒場内を見渡した。それが気に食わなかったのか、一人が立ち上がり

「調子に乗ってんじゃねえぞ、ボウズ……痛い目見る前に、とつとと失せろ……」

と青年を睨み付けた。

すると青年は、ようやく気付いたという風体で

「ああ、雑魚に興味は無いヨ」

と言いながら、手をヒラヒラとさせた。

その言葉に、立ち上がった巨人だけでなく、その場に居た全員が憤怒の表情を浮かべ

て

「(こいつ……!」

「調子に乗ってんじゃねえぞ、(こらあ!?!」

「泣いて謝っても、ぶつ殺す!!」

と怒鳴り、その身を更に巨大化させて、その身から魔力を吹き出させた。しかし、腕輪はウンとも言わない。

「ああ……ここら辺は、システムが死んでるのか……なるほどねエ」

そう言うのと、青年。否、ヴァトラーはその身から魔力を迸らせながら

「ジャンナダ、ウハツラ!!」

と二体の蛇で眷獣を召喚した。

その二体を見て、一人の巨人が

「その眷獣は……まさか、お前は……デイミトリエ・ヴァトラー!?」

と驚愕した。

するとヴァトラーは、凄惨な笑みを浮かべて

「さあ、精々暇潰し位にはなってくれたまエよ!」

と手を振り下ろした。

その直後、その店があつた一角が綺麗に吹き飛んだ。

そして、それから数分後

「やれやれ……大した暇潰しにもならなかったナ」

と退屈そうに、ヴァトラーは首を鳴らしていた。

今彼が居るのは、同じ旧アイランドサウスの少し離れた場所だ。

「さて……異物は何処に居るのやら……」

とヴァトラーが呟くと

「お探しは、私かな？」

と声が聞こえた。

その声を聞いたヴァトラーは、目を見開きながらある方向を見た。その先に居たのは、小柄な体軀に膝辺りまで伸びた金髪に紅い目が特徴の少女だった。

その少女を見たヴァトラーは、怒りを滲ませながら

「その姿でボクの前に立ったんだ……覚悟してもらおうぞ……！」

と牙を剥き出し、少女は

「さあ、お前に出きるのかな……ボウヤ？」

と妖艶な笑みを浮かべたのだった。

急行からの急降下

「……ま、さか……その眷獣は……貴女は……!?!」

焼け野原と化した旧アイランド・サウス。

その一ヶ所で、ヴァトラーは血塗れになり、更には球状の空間型眷獣に囚われていた。

「ふむ……流石は、戦闘狂の坊やだ……私の正体に、気付いたか……」

そう呟いたのは、背後に巨大な骸骨の眷獣を従えた金髪赤目の少女だった。

その長い髪が波打つ度に、まるで風に揺らめく炎のように色が変わっていく。

すると、ヴァトラーは

「その眷獣を操るのは……世界宏しと言えど、貴女のみ……先の無礼な振舞い……お許しいただきたく……」

とその人物に謝罪した。

ヴァトラーの謝罪に、その人物は

「よい。私も、少々遊びが過ぎたからな……不問にする……」

と告げた。

だが、ヴァトラーを閉じ込めている空間に触れながら

「しかし、邪魔されたくないからな……暫くは、その中に居てもらおうぞ……まあ、安心しろ……お主ならば、半日以内には出てこれるだろうて」

と告げた。

それを聞いたヴァトラーは、肩を竦めて

「仕方ありません……ボクは負けたのですから……しかし、貴女がこれからやるだろう事を予想すると、非常に楽しみだ!!」

と獐猛な笑みを浮かべた。その直後、ヴァトラーの姿は消えた。

それを見送ったその人物は、高い所に登り、絃神島本島を見て

「さて……会いにきたぞ……新たな第四真祖よ……」

と呟いた。

その頃、絃神島本島の彩海学園の校門。

「え!? 凧沙が倒れた!?!」

「はい……体育の授業中に、顔色が悪くなって……」

校門で待っていた明久は、雪菜からの話を聞いて驚いた。妹の凧沙が、倒れたようなのだ。

「それで、凧沙は?!」

「はい、行き付けという病院に搬送されました」

「あそこか!!」

雪菜の話の聞いた明久は、一気に駆け出した。背後から雪菜が呼び掛けてくるが、それを聞き流して駅まで走った。

明久が向かったのは、MAR直系の病院であり、今まで何回も風沙が入院してきた病院である。

全速力でモノレールの駅まで走り、モノレールに乗った所で

「先輩……早い……です……」

とようやく、雪菜が追い付いてきた。

「あ、ごめん」

そこまで来て明久は、自身が縮地で走ってきたことに気付いた。靴から、異臭がする。どうやら、少し焼けてしまったようだ。

「あー……新しいの買うかな……」

軽く靴底を見た明久は、頭を掻きながらそう呟いた。

すると、呼吸を整えた雪菜が

「先輩、いきなりどうしたんですか……風沙ちゃんが倒れたのが心配なのは分かりますが……」

と明久に問い掛けた。

それを聞いた明久は

「最近、新しい薬のおかげで安定してたのに、倒れたなんて……」

と呟くように言いながら、モノレールの窓から見えてきた大きな病院を見た。そこに、風沙が居る。

そして病院に到着すると、明久はカウンターにて風沙の居る部屋を聞き、その病室に向かった。

「個室なのは、母さんのコネなのかな」

風沙に宛がわれたのは、個室だった。

そして明久は

「風沙、入るよ」

と言いながら、ドアを開けた。

が、中では風沙が検査用の服からパジャマに着替えていた最中だった。

「あ」

「出てけえ!!」

固まった明久の顔面に、届けられたらしい学生靴がめり込んだ。

数分後

「信じられない！ 普通、いきなり開ける!! ノックして返事がされてから、開けるでしよ!?!」

「すいませんでした」

風沙の怒濤とも言える指摘に、明久は素直に土下座を敢行。風沙が許すのを待った。

そして、一通りに言い終えたらしく

「まあ、今回は大丈夫だよ。明久くん。たまたま貧血が起きただけだから。ついでに、予定を早めて検査入院することになっただけだよ」

と明久に教えた。

「……もしかして、母さん?」

「うん。貧血が起きたの、何処で知ったんだろうね」

明久の問い掛けに、風沙は心底不思議そうに首を傾げた。確かに、明久も不思議である。

「まあ、そういう訳だから、三日位したら帰るから、大丈夫だよ」

「ん、分かった……何かあったら、連絡してね」

明久はそう言つて、風沙の頭を撫でてから外に出た。

そこでは、雪菜と浅葱が対面していた。

「……嫌な予感が……」

明久はそう眩きながら、逃げようとした。だが
「逃がさないわよ、明久……」

その首根つこを、浅葱に掴まれた。

「……詰んだか……」

明久は、窓から見える青空を見上げたのだった。

騒動の幕開け

浅葱に捕まった明久と雪菜は、人が居なかつた休憩所に連行されて

「さてと……洗いざらい吐いてもらおうわよ。何を隠しているのか」

と問い詰められていた。

「考えてみたら、姫終さんが来てから色々起きすぎで、その騒動の中心には必ず明久が居るのよね」

という浅葱の言葉を聞いた明久は、思わず視線を雪菜に向けた。

（だからって、私を疫病神みたいにしなくてくださいね。先輩だって、騒動の中心に自ら飛び込んでるじゃないですか）

（うぐふつ）

アイコンタクトでの会話で、明久は精神的にダメージを受けた。

そこに

「さあ、何を隠しているのか喋ってもらおうわよ!？」

と浅葱が詰め寄った。

その時だった、病院が大きく揺れた。

「な、なに!？」

浅葱が驚いた表情で顔を上げると、赤い非常灯が点滅を繰り返しながら

『緊急事態発生! 緊急事態発生! 当病院入り口にて魔族の魔力が暴走、被害が出ています! 警備員は至急対応に向かい、スタッフは患者及び一般客の避難を!!』

と放送が流された。だが、雪菜と明久は

「先輩!」

「今の、魔力の暴走程度じゃない……貴族……ううん、旧き者クラスの眷獣だ!」

と言って、座っていたソファから立ち上がって駆け出した。それを見た浅葱は

「あ、ちよつと! 二人とも!？」

と二人を追い掛けて、駆け出した。

少し時は遡り、病院から少し離れた場所

「ふん……人間とはヤワだな……倒れて病院に搬送されるとはな」

「妹思いの良い方ではないですか、トビアス」

あるビルの屋上に、トビアス・ジャガンとキラ・レーヴェデフ・ヴォルデイズボワの

二人が居た。

なお、病院を挟んだ反対側のビルの屋上にはオシアナスガールズが狙撃と迫撃砲の用

意をして待機している。

「さて、仕事の時間ですよ。トビアス」

「そのような……まったく、本当に奴は……」

キラの言葉を聞いたトビアスは、悪態混じりに近づいてきていた人物を視認した。

揺れる度に炎のように色が変わる長い金髪に、幼いと呼べる体躯。そして、紅い目に

吸血鬼を示す長い犬歯。

「……その姿を俺に見せて、無事で済むと思うな!!」

トビアスは怒号と共に、相手の少女を睨んだ。

しかし、少女は

「ふむ……それがお主の魔眼ウエジエトか……残念だが、私には効かない」

と涼やかに告げて、腰に両手を当てた。

その言葉に、トビアスは舌打ちしてから

「ならば……行け、妖撃イェルリヒトの暴王!」

と炎の巨大な猛禽類の眷獣を召喚し、その少女に向けて放った。

しかし、少女は慌てずに

「ふむ、おいで……」

とだけ呟き、その後ろに体長10mに達するだろう巨大な骸骨を召喚した。

トビアスが召喚した炎の猛禽類は、確かにその骸骨に体当たりした。しかし、少女が召喚した骸骨は一切ダメージは無い。それどころか、その拳で炎の猛禽類を殴り倒した。

「な!? ちいつ、崩撃の鋼王!!」

まさか倒されると思っていなかったトビアスは、即座に鋼のゴーレム型の眷獣を召喚した。その直後

「炎網回廊」

とキラが、溶岩によって体が構成されている眷獣を召喚した。

「キラ! こいつは俺が!」

「トビアス……この方は、私の予想通りならば二人掛かりでも怪しいですよ」

キラの言葉に、トビアスはうろんな表情を浮かべた。すると、少女は

「ほう……流石だな、キラ・レーヴェデフ・ヴォルディズボワ……その眼力は、見事よ」とキラを称賛した。

「さて、そろそろ今代の第四真祖に会いたいのでは……通らせてもらおうぞ……」
そして少女は、新たな眷獣を召喚。

二人の眷獣を一撃で撃破し、病院を見てニヤリと笑みを浮かべたのだった。

病院内にて

「避難状況は!？」

「最上階がまだ!」

避難誘導しているらしい看護師や警備員の横を、明久、雪菜、浅葱の三人は走っていた。

そんな三人を止めようとした警備員も居たが、それよりも避難誘導を優先したらしい。

そんな廊下を走りながら、明久は

「つつ……正面玄関に居るのは、脊獣か!？」

と渡り廊下から、階下の玄関を見た。

そこに居たのは、一体の脊獣だった。

その脊獣に対して、数人の武装した警備員が銃撃をしているのだが、全くダメージを受けた様子がない。

「凄い魔力だ……間違いなく、旧き者クラスだけど……」

明久は、その眷獣の動きに違和感を感じた。

その眷獣がどのような能力を有しているかは知らないが、感じる魔力から今交戦している警備員達は簡単に倒せる筈だと思ったのだ。

事実、先に交戦したらしい数人の警備員が倒れているのが見えたが、重傷だが生きている。

「もしかして……陽動？」

と雪菜が呟いた直後、明久は

「こつちだ！」

とある方向に駆け出した。

「先輩！」

「待ちなさい、明久！」

駆け出した明久を追い掛けて、雪菜と浅葱も走り出した。そして明久が向かったのは、裏側の地下に続く階段だった。

そしてそこには、既に一人の少女が居た。

揺らめく度に炎のように色を変える金髪の、幼い少女が

「き、君は……!?!」

その少女を見た瞬間、明久を激しい頭痛が襲った。

まるで、頭の中を電撃が走っているようで、その度に脳裏に何かが見えた。それはまるで、目の前の少女を知っているかのように。

「ふむ……まだ、記憶が欠けているか……では、少し試させてもらおうぞー！」

少女はそう言うと、凄まじい速度で明久に迫った。だが明久は、その少女の速度に即座に反応。

少女の手を掴むと、くるりと投げ飛ばした。

だが少女は、空中で器用に体を捻って着地した。

「なるほど……今代のは中々の戦闘力の持ち主のようだな……」

と少女が感心していた時

「はあー！」

雪菜がまるで、流星のようにその少女に奇襲を仕掛けた。

しかし少女は、軽やかに跳躍して回避。

「ふむ……獅子王機関の劍巫……ということは、それが七式降魔機槍か……」

「先輩、(´)無事ですか？」

「なん……とか……」

雪菜に問い掛けられた明久は、頭を押しえながら答えた。その明久の様子に、雪菜は
(彼女に、反応してる……?)

と少女に視線を向けた。

「ふむ……流石に、獅子王機関の劍巫まで相手にするのは、避けたいな……」
少女はそう言つて、右手を肩の高さに掲げて

「おいで……」

と眷獣を召喚した。

それは、小さいがまるで火山を彷彿させる眷獣だった。

「あの眷獣は!？」

その眷獣を知っていたのか、雪菜は目を見開いた。

その間に、眷獣の中に凄まじい魔力が集まっていく。

「ヤバい……あんなのが放たれたら、病院が!」

集まっていく魔力を感じた明久は、左手を高々と上げた。

（浅葱に見られるけど、仕方ない!）

「疾く在れ! アルメイサ・メルクーリ 龍蛇の水銀!」

明久は龍蛇の水銀を召喚し、少女の眷獣に差し向けた。

それを見た浅葱は、雪菜に

「あれつて、眷獣……ウソ、明久は人間の筈……吸血鬼になつてたの?」

と問い掛けた。

すると、雪菜は

「先輩は、ただの吸血鬼ではありません……非公式の真祖……第四真祖です」と答えた。

その間に、明久が召喚した龍蛇の水銀は少女の脊獣を消し去ったのだが、余波で廊下の一角が消えていた。

その下に見えたのは、巨大な氷で出来た棺。

その中には、今目の前に居る少女と瓜二つの少女が眠っていた。

それを見た明久は、小さく

「アヴローラ……」

と呟いたのだった。

記録

そして時は戻り、今

「あー……そうだった……そこまでは、なんとか思い出した……」

縛られたままだが、明久は一日の内に起きたことを思い出した。

それは浅葱も同じようで、頭痛に悩まされて痛みを堪えながら頷いていた。

そして明久は、雪菜に視線を向けて

「それで、雪菜ちゃん……あれは、結局誰だったわけ？」

と問い掛けた。明久が言ったのは、明久達の前に姿を見せた一人目のアヴローラのこ

とだ。

すると雪菜は

「ケイオス・フライド混沌の皇女……ジャーダ・ククルカン様です」

と教えた。

その名前は、世界規模で有名だ。南北アメリカ大陸を支配する第三真祖、ジャーダ・ク

クルカン。

意外と気さくらしく、度々街中に出没しては街の人々と話しているという。しかし、真の姿を知っているのは極一部のみと言われており、会う度に姿が違うことから幻惑系の眷獣を有していると推測されている。

「……なんで、そんな吸血鬼ヒトが絃神島このに？」

「なんでも、今代の第四真祖たる先輩を見に来たそうです……」

明久の問い掛けに、雪菜は呆れ半分といった表情でそう告げた。

確かに、その為だけに密入国した挙げ句にトラブルを引き起こしているのだから、呆れるしかないだろう。

「……それで、ジャーダ・ククルカンは？」

「あの後、姿を消しました……目的を達したからと」

雪菜のその説明に、明久は深々と溜め息を吐くことしか出来なかった。

トラブル引き起こすだけ引き起こして、去っていったのだから。

まさに、嵐のように現れて、嵐のように去っていく。である。

「それで……何時、この縄を解いてくれるのかな？」

「まだです……本来の目的を果たしていませんから」

明久の問い掛けに、雪菜は毅然とした態度でそう答えた。

「本来の目的……？」

「はい……先輩だけでなく、藍羽先輩も……先輩が第四真祖となる所以となったことを思い出してもらいます」

雪菜がそう言うのと、那月が立ち上がり

「ふん」

と指を鳴らして、明久の全身を鎖で拘束した。

「ホワッツ!?!」

「何が起きてもいいいようにな……さて……私の得意分野は空間魔術だが……他の分野も使えない訳ではない」

那月がそう言うのと、明久を中心にして地面に魔法陣が描かれた。

そして、魔法陣から光が溢れてきて、明久の意識は闇の中に落ちた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は遡り、今から約二年前。

場所は、ゴゾの遺跡発掘地域。そこが、今の明久達の始まりの地となる。

そこでは、様々な時代の遺跡が見つかり、考古学者達にとっては宝の地と言えた。

しかし同時に、失われた技術による厄介事も起きるのだ。

「ガホ！ 落ち着いてる場合か!?!」

「カルーゾ、だからガホじゃねえつての……本音としたら、なるべく無傷で捕獲したい

ね。それに、何もしなけりや、あの守護像だつて反撃も」

と東洋人の男が言った直後、遺跡の中から現れた巨像に一発のロケット弾が命中した。

その直後、閃光が走つて展開していたPMCの一隊が吹き飛んだ。

「あーあ……勝手に調査した挙げ句、地雷踏みやがつて……」

「ガホー！」

ガホと呼ばれた男は、呆れた様子で髪をかき揚げた。

そこに、出来る雰囲気的女性が駆け寄り

「どうするんですか？ あのままでは、彼等全滅しますよ？」

と問い掛けてきた。

「しゃあねえな……やりますか……後カルーゾ、俺はガホじゃなくて、牙城がじょうだつての」

そう言いながら吉井牙城は、何処からともなく対物ライフルを取り出して構えた。

そして轟音と共に放たれた弾丸は、見事に命中したが巨像の表面に不思議な模様が浮かび上がるだけで、動いている。

「あ、やっぱりそのタイプか。だったら、こいつだな」

牙城はそう言いながら、懐から一発の貴金属によって出来た弾丸を取り出して、装填した。

そして、迫ってくる巨像を冷静に見ながら

「悪いな、起こしちゃまってよ……」

と謝罪しながら、発砲。巨像を破壊した。

彼こそが、明久と凧沙の父親にして、通称死都帰りと呼ばれる考古学者の吉井牙城である。

ゴゾ遺跡

「牙城、連れてきましたよ」

と四駆車から、眼鏡を掛けた女性。

リアナ・カルアナが出てきて、椅子に座っていた牙城に告げた。

そして、リアナの後に巫女服を着た少女。凧沙が降りて

「牙城君！」

と手を振った。その直後、立ち上がった牙城は

「おお、よく来たな！」

と凧沙を抱き上げた。

「大きくなつたな！」

「それは、一年ぶりだからねえ」

牙城の言葉に、凧沙がそう言った時、新たに車から一人の少年。明久が降りて

「父さん、この荷物はどうするの？」

と牙城に問い掛けた。

「なんだ、てめえも来てたのか。ガキ」

「実の息子に対する態度か、それが」

牙城の第一声に、明久は思わず牙城を睨んだ。余りにも、風沙とで扱いが違い過ぎる。

「俺が呼んだのは、風沙だけだ。てめえは何処かに失せろ」

「OK、わかった。リアナさんのことを母さんに連絡するから」

「待てやめろ、ふざけんな。いや、止めてください。本気で」

明久が携帯を取り出すと、牙城は風沙を下ろして土下座を敢行した。

明久と風沙の母親であり、牙城の奥さんの深森だが、牙城の女性関係のだらしなさには大変厳しい。

それで以前、大惨事が起きたことがある。

すると、風沙が

「それで、牙城君。私を呼んだ理由はなに？ しかも、態々道具まで一緒だなんて」

と牙城に問い掛けた。何気なく扱いが雑だが、何時ものことだから慣れてるだけである。

「ああ、そうだった。あの遺跡の封印が厄介だな。ちよつとばかり手伝ってほしいんだわ」

風沙の問い掛けに、牙城はそう言いながらある方向を指差した。その先には、ちよつ

とした小高い丘があり、その真ん中にポツカリと穴が開いている。

その手前には、大破した石像の残骸が転がっていた。

それを見た明久は

「あの石像……守護像？ 何をやらかしたのさ？」

と眉を潜めた。

明久は今回も含めて、度々牙城に呼ばれる風沙の護衛のために遺跡に来ており、時々守護像を見たことがあるのだ。

そして明久は、隣に居たりアナに

「あの遺跡、何に関する遺跡なんですか？」

と問い掛けた。

するとリアナは、眼鏡の位置を直してから

「聖^{せい}熾^せに関する遺跡です。牙城の推測では、今回の遺跡は核心に迫る遺跡だとか」

と明久に教えた。

それを聞いた明久は、

「聖^{せい}熾^せか……」

と呟いた。

聖熾。それは、遙か古代に起きた神々による戦争と言われており、時々通常では考え

られない物。

殺神兵器と呼ばれる物の残骸が、世界各地の遺跡から出土している。

そして牙城は、その聖職を専門に世界中を渡り歩く学者なのだ。

そして一度、危険な遺跡。通称死都と呼ばれた都市遺跡に発掘隊のオブザーバーとして同行。

だが、発掘隊は牙城を残して全滅した。

それにより牙城は、死都帰りと呼ばれていた。

死都帰りの吉井牙城と。

「それで、吉井明久君」

「あ、明久で構いませんよ。リアナさん」

明久がそう言うと、リアナは僅かに黙考してから

「では、明久君と……先ほど、牙城に見事な土下座をさせていましたが……」
と明久に問い掛けた。

「まあ、あのダメ親父は何度か女性関係で母さんを怒らせてましてね。一度、部屋が吹き飛ばす程の喧嘩に発展。その部屋の修理代をダメ親父に全額負担させたんですよ。その時からか、母さんには逆らえなくなりました」

「ほう」

明久の話を聞いて、リアナは興味深そうにした。

なおその喧嘩が理由で、明久と凧沙はしばらくの間ビジネスホテルから学校に通うハメになった。

そしてその宿泊費も、牙城持ちにさせた深森である。

「それで……何かありました？」

と明久が問い掛けると、リアナは努めて冷静さを保ちながら

「私を含めてですが……炊事班の女性メンバーにセクハラ紛いを度々……」

と、地を這うような声で明久に告げた。

それを聞いた明久は、携帯を取り出して

「OK、詳しく」

と言った。

容赦なく父親牙城を売る息子明久だった。

そして少しすると

「そーいや、リアナ。カルーゾはどうした？」

と凧沙を肩車した牙城が、リアナに聞いてきた。

するとリアナは、端末を取り出して

「だから、端末を持ってくださいと言ってるんです……」

と言って、軽く牙城に投げ渡した。

そして、それを牙城がキャッチすると

「カルーゾさんでしたら、先ほどの独断専行に關しまして、抗議に行きました。今回の調査は、牙城の指示に従うという約束を反故にした」と

と牙城に教えた。

それを聞きながら牙城は、端末を見て

「あー……しかも、さっきので内部の防衛システムが起動したか……仕方ねえな……
いっちょよ、入りますか」

と風沙を下ろした。

どうやら、遺跡に入るつもりのようなのだ。

「という訳だ、風沙。テントを一つ押さえてあるから、そこで休みな……ガキはそこらで
野宿な」

「OK、母さんにここでやってたことを残らず送るから」

「待てやめろ」

明久の言葉に、牙城は慌てた様子で振り向いた。

だが、明久は

「もう遅い、リアナさんのボイスメッセージを送ったから」

とメールを送った後の画面を見せた。

「チクシヨウ!? なんてことしやがる!?! 親を敬う精神が無いのか!?!」

「自分の胸に手を当てて、原因を振り返れ!」

と明久が言った直後、牙城の体がビクツと震えた。

そして、恐る恐ると携帯を取り出して

「はい、もしもし……」

と出た。

「あ、いや……あれはその……はい、すいませんでしたあ!!」

そして再び、電話しながら見事な土下座を敢行した。

それを見たりアナは

「明久君、奥様の電話番号を教えてくださいませんか?」

と問い掛けた。

「いいですよ、携帯を出してください。赤外線で送りますから」

着々と出来つつある父親包囲網。そして凧沙は、地面に頭を打ち付けるように土下座

を繰り返している牙城を見て

「自業自得だよ、牙城君……」

と溜め息混じりにしか、言葉が出なかった。

緊急事態

二人がゴゾ遺跡に來た翌日、二人はその遺跡に入った。

道中には、牙城やPMCが破壊したらしい遺跡の防衛機構の残骸が転がっていた。

明久は、それらを刀で突きながら進んだ。まだ生きていて、後ろから奇襲された面倒だったからだ。

「……あれ？ 牙城君は？」

「カルーゾって人を探しに行つたよ」

周囲を警戒しながら、風沙の問い掛けに明久は答えた。

ふとその時、遺跡の壁面が突如光り

「そつか……ここは、貴女の……」

と呟いた。どうやら、何やら感じたようだ。

風沙は過応適応者と霊媒の二重能力者で、直感的に遺跡や古代遺物を分かることが出来るのだ。

そして風沙が奥の壁面に触れた時、内部の壁全体に幾何学的な模様が浮かび上がつ

た。

「これって……封印？」

その模様を見た明久がそう呟くと、風沙が触れた壁が地響きと共に動き始めた。

「開く……」

とリアナは呟いた直後、鋭い目で来た道を振り返った。

そのリアナに問い掛けようとした明久は、尋常じやない気配が近づいてきていることに気付いて、竹刀袋から刀の柄を出して、鯉口を切った。

すると、暗かった通路の向こうから身長3mに迫る大柄な体格が特徴の黒い獣人が現れた。

しかも、大量の死体を率いて

「獣人が、魔術を……?」

獣人というのは自身の身体能力に絶大な自信を持っていて、魔術を覚えることは殆どない。しかも、下手したら腐臭で鼻を妨害しかねない、死体魔術ネクロマンシーを使うなど、本来なら有り得ないことだ。

しかし、その相手に心当たりがあるのか、リアナが

「まさか……黒死皇……いえ、黒死弟のゴラン・ハザーロフ!」

と驚愕の声を上げた。

「ほう……ワシを知っている輩が居たか……娘、何者だ？」

「リアナ・カルアナ……」

ゴラン・ハザーロフの問い掛けに、リアナは名乗りながら左手に装着していた腕輪を外した。そう、彼女は魔族特区に登録している魔族なのだ。

「カルアナ……そうか、貴様……カルアナ辺境伯の娘か！」

カルアナ辺境伯、それは今居るゴゾ遺跡を含めた魔族特区を管理する吸血鬼の貴族だ。

「来て、スコル!!」

リアナが叫んだ直後、リアナの傍に巨大な白い毛並みの狼が現れた。眷獣を召喚したようだ。

そしてリアナは、ゴラン・ハザーロフの従えている死体の中に、見つけた顔を見付けたらしく、顔を歪めつつ

「……外に居た、彼等は……どうしました？」

と問い掛けた。

するとゴラン・ハザーロフは、鼻で笑いながら

「虫けら共など、知ったことではない。恭順を選んだ畜生のこともな」

と答えた。調査団の中には、傭兵として活動していた獣人も少なからず居た。

しかし、獣人至上主義の黒死皇派にとって、雇われと言えども人間に従う獣人は最早同族ではいらしい。

「待つて……牙城君は……牙城君は、どうしたの!？」

「牙城……? ああ、死都帰りのことか……やはり只の人間だな……楽しませてはくれたが、大したことはなかったぞ」

風沙の問い掛けに、ゴラン・ハザーロフはそう言いながら、何かを放り投げた。

それは、血に濡れた黒いボロボロのコート。牙城が着ていたコートだった。

「そんな……牙城君……」

それを見た風沙は、涙を滲ませながら膝を突いた。

そんな風沙の前に、抜刀の構えをした明久が割り込み、更にはリアナが前に出た。

そしてリアナは、明久に

「明久君……私が、なんとか時間を稼ぎます……妹さんと……出来るなら、彼女を外に連れていってください」
と言った。

「彼女……?」

それを聞いた明久は、肩越しに背後を見た。

風沙が開けた扉の先に、水晶で作られたかのような巨大な棺桶があり、その中には一

人の少女が眠っていた。

金髪の、人形を彷彿させる容姿の少女だ。

明久がその少女に視線を奪われていると、ゴラン・ハザーロフが

「逃がすと思うか？」

と言いながら、右手を挙げた。その直後、死体群がその手に重火器を構えた。

「ハティ！」

リアナが新たな眷獣を召喚したのと同時に、洞窟内に炸裂音が連鎖した。

PMCの中には、対魔弾を装備した部隊もあり、リアナが新たに召喚したハティが展開した轟炎の壁すらも容易く貫通。

リアナと、風沙を突き飛ばした明久を、次々と銃弾が撃ち抜いた。

銃撃により、リアナは即死。明久も、右腕を肩辺りから喪失。左目にも、穴が穿たれていた。

それを見た風沙は、涙を流しながら

「いや……嫌だよ……明久君……」

と明久にすがり付いた。

ゴラン・ハザーロフは、そんな明久を見ながら

「妹を守るとは、大した気概だ……だが、無駄な足掻きだったな……聖熾の遺産は、破壊

させてもらうぞ」

と告げた。

だが、その時

「……………あ……………とは……………頼んだ……………よ……………」

と明久の声が聞こえた。

「貴様、まだ……………」

明久がまだ生きてると気付いたゴラン・ハザーロフは、再び死体群に撃たせようとした。

だが、気付くべきだったのだ。

奥に有った透明な棺桶に眠っていた少女が、棺桶から出ていたことに。

「十二番目の眠り姫……………」
アヴローラ・フロレスティナ

明久がその名前を言った直後、洞窟内を極寒の冷気が襲った。

岩や、銃撃によつて発生した火すらも凍りつかせる冷気は、一瞬にしてゴラン・ハザーロフと死体群を凍らせた。

そして少女は、裸足で死体となった明久と気絶した風沙の近くに歩みより、膝を突いた。

そして静かに、明久に手を這わせた。

それから少し経ち、ゴゾ遺跡の外

「あ……が……ぐ……畜生……中に入った奴等は、大丈夫なのか……う？」

と血塗れの牙城が、何処からともなく、予備の黒いコートを羽織って立ち上がった。

その時

「生存者は、二人だけだ。吉井牙城」

と声が聞こえて、牙城は先ほどと同じように何処からともなくサブマシンガンを出して、声が聞こえた方向に向けた。

「あんた……空隙の魔女……南宮那月か!? なぜここに!？」

「なに、調子に乗ったネコ共がこちらに來ていると聞いてな……まあ、既に氷付けにされていたがな」

那月はそう言いながら、牙城に一枚の書類を突きつけた。その書類には、明久と風沙の二人を絃神島にて預かるという旨が書かれていた。

「それと、一つ教えておく……息子の方だが、一度即死級の攻撃を受けた形跡があり、更には瀕死級の流血跡も有った……だが、全くの無傷だったぞ」

那月の話を聞いて、牙城は驚いた表情で

「まさか……血の従者になったのか、あいつが!？」

と声を上げた。

しかし、那月は気にした様子はなく

「さて、死都帰り。お前は どうするつもりだ？」

と牙城に問い掛けた。

すると牙城は、傷を労りながらも立ち上がり

「探すさ……宴を終わらせる方法を……」

と言つて、去つていった。

その背中には、強い決意が伺えた。

宴の幕開け

「あつっ……」

そう呟いた明久は、汗をハンカチで拭った。

今居る絃神島は、日本本島から南に約330km離れた人工の島で、一年中暑い気候だ。

その絃神島の彩海学園に転入して、約二年が経った。

明久と凧沙は、なぜ絃神島に来ることになったのか覚えていない。

医者の話では、欧州で起きた列車事故に巻き込まれて重傷を負い、医療技術が発達していた絃神島に運ばれたらしい。

明久はすぐに良くなり、普通に生活出来るようにはなった。しかし、凧沙は入退院を繰り返していた。

今もMARの母親の部署が原因を探っているが、分からないようだ。

「さてと……見舞いに行きますか……」

学校帰りに明久は、入院中の凧沙の見舞いに向かった。

そして病院に到着すると、待合室に見知った姿を見つけた。同級生の藍羽浅葱だ。

「藍羽さん……お見舞い？」

「うん……お母さんの……」

明久が問い掛けると、浅葱は力なく頷いた。

「どうやら、母親が入院中らしい。」

「そっか……早く善くなるといいね……」

「ありがとう、吉井……そういえば、吉井は誰が入院してるの？」

明久の言葉に返答すると、浅葱はそう問い掛けてきた。すると明久は、頬を掻きなが

ら

「うん、まあ……妹……名前は風沙って言うてね……もし良かったら、話し相手になつてあげて。話すの好きだから」

と言うて、受付を済ませた。

そして、病室に向かう前に

「藍羽さん、眼鏡よりコンタクトの方が似合うと思うよ。可愛いんだしね」

と言うて、病室に向かった。

この頃の浅葱は、まだ今のような格好ではなく、黒髪に眼鏡を掛けた姿だ。

「……私が、可愛い……」

初めて可愛いと言われた浅葱は、顔を真っ赤にしながら頬を抑えた。

その頃、ある港に一隻の小型クルーザーが停泊していた。

そのクルーザーから、二人の男女が出てきた。

一人は中年の男、吉井牙城。もう一人は、欧州系の顔立ちのまだ幼さが目立つ少女だった。

名前は、ヴェルデアナ・カルアナ。ある目的の為に、牙城と一緒に絃神島に来たのだ。

「さてと……本当にやるんだな、嬢ちゃん？」

「ええ……私は、なんとしても……あいつらから、故郷を取り戻すの……その為なら……！」

牙城の問い掛けにそう言うと、ヴェルデアナはクルーザーから降りて町の中に消えていった。

それを見送った牙城も、軽く首を鳴らしてから行動を開始した。

そして、小一時間後。場所は戻って病院。

「じゃあね、風沙。また来るからね」

「またね、明久君」

面会時間がギリギリになったので、明久は家に帰ることにして、帰宅の途に就いた。

しかし、ある歩道橋を渡っていた時だった。

「なんだ……？」

明久は奇妙な感覚に襲われて、周囲を見回した。

そして気付いた。人の姿が、全く無い。

「嫌な予感……！」

そう思った明久は、急いでその場を離れようとした。

だが、時既に遅しだった。明久が渡っていた歩道橋の先に、小さな鎧兜を着た小柄な人物が居た

「……誰？」

「我は……五番目なり」

明久の問い掛けに、その人物はそう答えながら、凄まじい魔力を放出させた。

「魔族!」

相手の正体に気付いた明久に、雷が襲い掛かった。

準備段階

明久達が記憶を遡っていた時、雪菜は

「まさか、聖殲とは……」

那月が空間魔術と精神魔術の併用で投影していた記憶映像で、明久の過去を見ていた。

雪菜も獅子王機関の劍巫として、聖殲のことは知識として知っていた。

「というより、南宮先生は先輩のお父様をご存知だったのですね？」

「ん？ まあな。聖殲の遺跡は、欧州に多くあるからな。捕縛や討伐に赴けば、鉢合わせすることも多々あったという位だ」

雪菜の問い掛けに、那月は何処から出したのか紅茶を飲んでいた。そして、飲み終わると

「それより、構えておけ劍巫……そろそろ、来るぞ」

と那月は、扇子を広げた。

それと同時に、明久の頭上に映されていた映像にノイズが走り、もう一人の明久が現

れた。

「やはり、システムトラップか」

那月がそう言うのと、その明久は機械的に

『禁忌領域に侵入を確認……目標を、殲滅する』

と告げて、眷獣を召喚した。だが、即座に雪菜が

「雪霞狼！」

と雪霞狼を展開し、召喚された眷獣を撃破。そのまま、雪霞狼をその明久に突き刺した。

『ギ、ジジ……システム領域に……命的な損傷……』

刺されたその明久は、そう言った後にフツと消えた。それを見た雪菜は、視線を那月に向けたが

「ちっ……やられたな。吉井の記憶が見れなくなった」

と苛立たし気に舌打ちした。どうやら、システムトラップの一環で、明久の記憶が見れなくなったようだ。

それを聞いた雪菜は、心配そうに明久を見ながら

「先輩……」

と見守ることにした。

場面は、記憶の中の明久に戻る。正体不明の鎧を着た相手に襲撃された明久だったが「……………あれ?」

痛み処か、衝撃すら来ないことを不思議に思い、ゆっくりと目を開いた。

気付けば、目の前に居た筈の鎧を着た相手は居なくなり、居なかつた人影もいつの間にか戻っていた。

「何かが……………起きようとしてる……………」

明久はそう呟くと、取り敢えず家路に付いた。

その頃、遠く離れた場所で

「ルール違反ですよ、五番目……………ルールは守ってもらわないと……………」

「人の定めし約定に、我が従う道理はない」

眼鏡を掛けた少女。閑古詠の言葉に五番目と呼ばれた鎧姿の相手は、にべもなく断つた。

その直後、五番目の周囲で二つの魔力が吹き荒れた。音波、次元食い。

その二つの中から、同じ姿の少女が姿を現した。

揺らめく度に色を変える炎を彷彿させる金髪に、切れ長の目。

「……………九番と三番か……………」

「まだ時に非ず」

「引け、五番目よ」

二人に言われたからか、五番目は昂らせていた魔力を引かせて、身を翻して姿を消した。

それを確認したからか、九番と三番も姿を消した。

三人が姿を消すと、閑古詠は

「……いよいよ、焰光の宴ですか……日本に、真祖が誕生する……世界最強の第四真祖が……」

と呟いて、姿を消した。

再び場所が変わり、MARのある一室。

「なぜですか!?! なぜ、私の宴への参加が認められませんの!?!」

「理由は至極単純……領地を失っているからですよ、ヴェルディアナ・カルアナさん」

ヴェルディアナの前に座っていた眼鏡を掛けた出来る雰囲気纏った女性が、ヴェルディアナに参加出来ない理由を突き付けた。

あのゴゾ遺跡での事件後、カルアナ辺境伯は跡継ぎだったリアナが亡くなったことと、当主だった父親が殺害された為に、領地を失ってしまったのだ。

「それは、あのザハリアスが卑怯な手を使ったからで!」

「しかし、領地を失ったのは事実です……残念ですが、それも回収します」

その女性が指差したのは、ヴェルディアナの足下に置いてあった一つのケース。

「これだけは、ダメ！ 父様と姉様が残した、たった一つの!!」

ヴェルディアナはそれを胸元に抱き締めながら、涙を流した。

家族が残した、唯一の遺品。ケースの中に入っていたのは、姉が発掘に立ち会い、父親が長年保管していた聖職に関する聖遺物。

それを見たもう一人の女性、吉井深森は悲しそうな表情を浮かべた。

そして、窓の外を見て

「お願いだから……誰も、犠牲にならないで……」

と小声で呟いた。

しかし、刻一刻と宴の時は近付いてきていた。

焰光の宴 1

謎の襲撃から逃れられた明久は、夕食をどうしようか考えながら歩いていた。深森は帰ってくることで体が珍しく、風沙は入院中。

「うーん……肉野菜炒めにでもするか……？」

無難にその辺りにするか？ と明久が思考していると、ドクンと胸が高鳴った。

「……なんだ？」

何やら異様な感覚に、明久は足を止めた。何か、大切な事を忘れていると言わんばかりの感覚に、明久は戸惑った。

そして、足を止めていると

「早く、汝が半身を見つけよ……宴は、もう間もなく開かれる」

と聞こえ、明久は思わず振り返った。

聞き間違いでなければ、その声はあの鎧を着ていたのと同じ声だった。しかし振り向いても、あの鎧は居ない。

代わりに居たのは、金髪に赤い目が特徴の小柄な女の子だった。

「君は……」

「我は、四番……十二番目の従者よ……早く、十二番を見つけて……宴は、もう間近だ……」

四番と名乗った少女は、意味深なことを告げると身を翻した。それを呼び止めようと明久は、一步踏み出した。

その直後、濃霧が溢れて明久の視界を覆った。その濃霧に驚き、明久は足を止めて右腕を上げて視界を覆った。

霧は直ぐに晴れて視界は回復、明久は周囲を見回したが、四番と名乗った少女は消えていた。

「……十二番に……僕が、従者……?」

その言葉の意味が分からず、明久は困惑した。

その頃、ある場所では

「いやいや、お待たせしました」

と一人の男が笑みを浮かべながら、ある場所に現れた。

日に焼けた肌に、小太り気味ながらガツシリした体の男だ。その男が入った部屋には他に、褐色の肌に小柄な体躯。短く切り揃えられた黒髪が特徴の少年。純白のスリーピースを着た金髪の青年。長い髪を三つ網にして眼鏡を掛けた少女が居た。

すると、褐色肌の少年が舌打ちしてから

「卑しい武器商の僵尸^{ネブラン}鬼風情が……本来なら、貴様を八つ裂きにしてやりたいところだ」

と憎々し気に、その男

バルタザール・ザハリアスを睨んだ。

ネブラシというのは、吸血鬼の低位存在であり、眷獣と永遠の命は持たないが、高い回復力と高い身体能力を持っている。

そしてバルタザール・ザハリアスは、その身体能力と経営力を使って死の商人として一財産を築いた男だ。

「おやおや、イブリスベール・アズイーズ殿下。何のことでありましょうか？」

褐色肌の少年、滅びの王朝。第二真祖直系第九王子。イブリスベール・アズイーズの事を聞いて、バルタザールは白々しく肩を竦めた。

実は約半年程前、バルタザールの私兵がイブリスベールの領地を襲撃し、イブリスベールの城から二人の焰光の夜伯を奪われたのだ。

「貴様……」

バルタザールの白々しい態度に、イブリスベールはその体から魔力を溢れさせた。すると、三つ編みの少女。

すると、獅子王機関三聖が一人、^{ペーバーノイス}静寂破りが

「お引きください、アズィーズ殿下……お気持ちは察しますが、今回の宴は、彼が開いたのですから」

とイブリスベールを引き留めた。

その制止を受けて、イブリスベールは舌打ちしてから魔力を霧散させた。彼の實力ならば、並大抵の降魔師は太刀打ち出来ない。しかし、静寂破りにはある特殊能力があり、それによりイブリスベールを含めた旧き吸血鬼達と互角以上に闘えるのだ。

今はその能力を買われて、今回の宴の裁定者の役割が与えられている。

「では、ザハリアス氏からの要請により、この地……絃神島にて焰光の宴を開催します」
静寂破りの宣言を聞いたスリーピースを着た青年、ヴァトラーは獰猛な笑みを浮かべた。

そしてこの日を堺に、第四真祖を巡る争いが小さい島で行われる。

出会いから

翌日、明久はまた風沙のお見舞に寄っていた。

しかし、明久より先にクラスメイトが来たらしく、風沙はそのクラスメイトと楽しそうに会話していた。

それを邪魔するつもりは無い明久は、ふと据え付けられていたテレビに視線を向けた。

すると、欧州のネプラシ暫定自治区で未知の病気が起きているらしく、民間人達が次々と倒れては吸血鬼化している。と報道されていた。

それを見た明久は、激しい頭痛に襲われた。まるで、忘れていた何かを思い出せ、とも言おうようだった。

その後、見舞いが終わった明久は帰り際に風沙から洗濯物を預かった。

「ん……なんだ？」

それを感じたのは、病院の階段を降りていた時だった。

明久が居たのは、丁度一階に到着した時だ。何やら一度、胸が高鳴った。

それが気になった明久は、軽く周囲を見回してから、背後を見た。

その先には地下に続く階段があったのだが、そこに一人の少女が居た。

腰辺りまで伸ばした長い金髪に、赤い目が特徴の一人の少女だ。

「き、みは……」

何故かその少女に既視感を覚えていた明久だったが、威圧しないようにと片膝を突いて、少女に視線の高さを合わせながら問い掛けた。

すると、少女は

「……我の名前は……アヴローラ……アヴローラ・フロレスティーナ」と名乗った。

「ん、アヴローラでいいかな？」

明久の問い掛けに、アヴローラが頷くと

「それじゃあ、親御さんは？」

と問い掛けた。

アヴローラが出てきた地下区画は、所謂特別区画と言われており、簡単には入れない区画になっている。

「我に、血族は有らず……我は、孤独……」

「そっか……」

アヴローラの言葉に、明久は頷きながら

(この感覚……この子、魔族か……けど、登録の腕輪が無い……なんなんだろう?)

と内心で首を傾げた。

すると、アヴローラは

「我は衣を替えたい……」

と言ってきた。

「着替えたい? 着替えは……無いよね……」

今アヴローラが着ているのは、所謂病人服と言われる簡易的な服だ。

さて、どうしようか。と明久が考えていると、アヴローラはジツと明久が持っていた

紙袋を見ている。

その紙袋の中には、風沙の洗濯物が入っている。

(アヴローラの身長は……風沙より少し小さい位か……)

そう目測した明久は、深々と溜め息を吐いた。

そして、数分後

「最後に……よしっ」と

明久はアヴローラに、風沙の制服を着せていた。

最初はアヴローラに着替えてもらおうかとも考えたが、アヴローラが制服の着方が分

からないと言ったので、仕方なく明久が着させたのだ。

ただ無心で着替えさせた明久は、今居る多目的トイレのドアをゆっくりと開けて、外を見回した。

幸いに、人は居ない。

「よし……アヴローラ、静かに着いてきて」

「う、うむ……」

アヴローラが頷いたのを見て、明久はアヴローラの手を握って歩き始めた。

そもそも、何故明久はアヴローラと一緒に行動することを決めたのか。

明久はアヴローラが、違法研究の被害者ではないか。と考えたのだ。

魔族特区たる絃神島だが、時々魔族に対する違法研究をやって捕まる研究者が出るのだ。

そう判断したのは、まずアヴローラが血族すら居ないと言ったこと。つまりは、違法研究施設に捕らえられても、探してくれる人が居ない。

そして二つ目は、魔族登録章が無かったこと。

この魔族登録章にはGPSを含めた様々な機能が備わっていて、対称の魔族が何処に居るのか、体調はどうなのか、どういった状態なのか、ということ常態に人工島管理公社に伝えている。

それが無いということは、後ろ暗いことに使われていると思ったのだ。

だから明久は、アヴローラを一度自分の家に連れていくことにしたのだ。

(大丈夫……これは人助け……犯罪じゃない……堂々としてれば、怪しまれないはず……)

明久はそう自身に言い聞かせながら、まず受付で面会許可証を返却。

そして、出口に向かった。

今のアヴローラは、先の病人服から風沙の制服を着ていて、更に革靴も履いている。

革靴は少し歩きづらいようだが、明久はなるべくアヴローラに歩調を合わせた。

そうして病院から出て、暫く

「だああああ……緊張した……」

周囲に人が居ないことを確認した後、明久は深々と溜め息を吐きながらそう言った。

「さてと……買い物に行かないと……アヴローラ用の服もだけど、食料買わないと……」

アヴローラ、何か食べられないのある？」

「……分からね……」

明久の問い掛けに、アヴローラは首を振った。

(うーん……これは、かなり厄介事に首を突っ込んだかなあ……けど、やらないで後悔よりマシかな……)

明久はそう思いながら、よく行くスーパーに向かった。

その頃、ある場所では

「はあ……はあ……はあ……やったわ……十二番目を解放出来た……！」

と霧化から本来の姿に戻った、少女吸血鬼。

ヴェルディアナが、嬉しそうに呟いた。

宴への参加を拒まれて、親族の遺品だった聖鎗。

古代の遺物、魔力殺しの鎗も没収されてしまったが、その鎗はヘッドホンを着けた少年と三白眼が特徴の少年達により、取り戻せた。

その後ヴェルディアナは、一度拠点としていたクルーザーに戻り、その物置の中から牙城が用意していたボウガンを持ち出し、アヴローラが收容されていた病院の地下に、霧化の能力で侵入。

ボウガンに装填した鎗を使って、アヴローラを縛っていた封印を破壊。アヴローラを外に出したのだ。

その後、再び霧化の能力で地下から脱出。

今居る区画まで、何とか逃げてきたのだ。

そこに

「なんとか、無事みたいだな」

とヘッドホンを首に掛けた少年、基樹が三白眼の少年、康太と一緒に現れた。

「それで、本当なんでしょうね……私の隠れ家を用意してくれるって……」

「ああ……っーわけで、掴まりな」

基樹はそう言いながら、ヴェルディアナに手を差し出した。

それを見たヴェルディアナは、僅かに躊躇ったが今は二人しか頼れる人物が居ないか

らと、基樹の手を握った。

「いいぜ、康太……あの店に」

「……分かった」

基樹の言葉に頷き、康太は自身の能力。影を発動。

三人の姿は、そこから消えた。

こうして、物語は加速していく。

焰光の宴 2

明久とアヴローラが買い物するため、スーパーに寄った。そして、夕食の買い物をしていた時、アヴローラがアイス売り場で動きを止めたことに気付いた。

「アヴローラ……アイスが気になる？」

「む……」

明久の指摘を受けて、アヴローラは顔を赤くして固まった。それを見た明久は、微笑みながら財布を開けて中を見た。

そこに

「あら、お兄さん。妹さん達の面倒を観て、偉いわねえ」

と一人の女性が言いながら、横を通り過ぎた。

「へ？」

それを聞いた明久は、周囲を見て固まった。

何故ならば、アヴローラに瓜二つの少女が更に三人居たからだ。

「ほ!？」

と明久は驚くが、その三人もアイスをジツと見ているのが分かった。それを見た明久は、再度財布を確認し

(……まあ、大丈夫だね)

と判断。その後、食材を買ったついでにアイスを5つ購入。全員で食べることにした。

(……けど、アヴローラの声って、あの時僕に12番目とか従者とか言った相手と同じ声のような……)

と明久が考えていると、一人が

「美味だった……」

とアイスを食べ終わったらしく、近くのごみ箱に空容器を投げ捨てた。

それに続く形で、アヴローラを含めた三人も食べ終わり、最後に明久も食べ終わった。

そうして、離れようとした三人に明久は

「また、一緒にアイスを食べようね」

と言葉を投げ掛けた。

それに三人は僅かに驚いた表情を浮かべるが、頷いた後に姿を消した。

その光景を見たアヴローラが

「……………怖いもの知らずか、汝は……………」

と呆然と呟いた。

「え、そうかな？」

「はあ……」

会話しながら二人は、立ち寄っていた公園から出た。すると、ビルの外壁のモニターであるニュースが流されていた。

「……ネプラシ自治区で、未知の病気が大流行……」

それは、欧州の臨時ネプラシ自治区で起きている未曾有のバイオハザードと流されていた。住んでいる人々が、次々と倒れては擬似的に吸血鬼に変貌しているという。聞いたこともない病気だった。

この時、明久は気づかなかつたが、アヴローラは俯きながら

「もう、猶予は無い……^{ルート}原初を、どうにかせぬと……」

と呟いた。

一方その頃、ある喫茶店では

「……やっぱり、納得いかない！」

と一人の少女。

正体を明かすと、ヴェルディアナが、頭に着けていたカメイドチューシャを床に叩き付けた。

「何故私が、使用人の格好をしなければならないの!？」

とヴェルディアナが憤慨していると、横から現れた男性が

「文句があるなら、外に放り出してもいいんだぞ? ヴェルディアナさん? こっちは、まあ人手不足になる位だからな」

と告げた。今ヴェルディアナが居るのは、一言で言えば、メイド喫茶である。

基樹と康太の二人が連れてきたのは、訳アリ魔族を受け入れる趣味を持つ紅い髪のが特徴の青年が経営する喫茶店だ。

その青年と基樹は友人で、基樹がよく訳アリ魔族をその青年の所に連れていき、その青年が訳アリ魔族が一人立ち出来るまで面倒を見るのだ。

「う……」

そしてヴェルディアナは、今外に出たら捕まってしまう確率が高い。報道はされていないが、MARがヴェルディアナを探しているのはほぼ確定しているのだから。

だからヴェルディアナは、床に叩き付けたカチューシャを拾って、装着した。

実はそのカチューシャには、認識阻害の魔術が施されており、余程のことが無い限りは相手に正体がバレない代物である。

そしてヴェルディアナが着ているメイド服の胸元には、ヴェルアーナという名前が書かれている。どうやら、働いている間の偽名のようなようだ。

「さて、ヴェルアーナ……どうする？」

「うう……働きますわ……」

青年の問い掛けに、ヴェルデアナはそう答えるが、内心では

(早く、私を見つけてください、牙城!!)

と牙城に、助けを求めていたのだった。

焰光の宴 3

アヴローラを自宅に受け入れた翌日。

「とりあえず、今日はどうするか……」

と明久は、今日はどうするか考えていた。

その時だった、明久は鋭い視線を玄関の方に向けた。そこに直後、爆発音が響き渡り、数人のマントを頭から被った連中が押し入ってきた。

「いきなり、なに？」

「十二番を渡せ……」

「それは、貴様のようなガキには不相応な代物だ……」

「我等、ネプラシ武器商が有効活用する」

押し入ってきた連中は明久の問い掛けにそう答えると、袖の中から黒光りした凶器を出した。

（ネプラシ武器商……父さんが言った、死の商人か）

その手に握られている拳銃と、ネプラシ武器商という名前を聞いて、明久は牙城から

聞いた話を思い出した。

ネプρασ武器商、吸血鬼の下位存在であるネプρασが自身の身体能力を活かして、戦場まで武器を運び売り捌く死の商人だと。

「死ね」

「遅い」

一人が拳銃を向けて、引き金を引こうとした。だがその瞬間には、既に明久は一人の背後に回りこみ、首筋に手刀を叩き込んでいた。

「貴様!？」

「ほっと」

仲間が無力化されたことに怒り、他の数人が拳銃を向けて即座に発砲したが、その時には明久は、自室のドアを開けて自室に滑り込んでいた。

すると、銃声で起きたらしいアヴローラが、驚いた表情で入ってきた明久を見ていた。実は先日、一人で寝るのは怖いと言ってきたアヴローラと一緒に寝たのだ。

「何が……」

「大丈夫だよ、アヴローラ」

明久は微笑みながら答えると、クローゼットの下の引き出しの裏面に貼り付けてあった小太刀を外した。

「まさか、使う時が来るなんてね……」

牙城から押し付けられた刀の一本、鉋切長光だ。

押し付けられた時はどうか迷って、そんな所に隠したが、まさか使う時が来るとは。

そして明久は、銃撃が止んだタイミングを狙って長光を抜刀しながら突撃。

数分と経たずに、突入してきた連中を全員無力化した。

「さてと……」

全員を倒した明久は、一発の銃弾がかすった肩を見たのだが、既に傷口が塞がっていた。

「……これって、もしかして……」

その現象が何なのかを察して、明久は今まで聞いたキーワードから答えを導いた。

「血の従者……ってやつ？」

血の従者。

それは、永い年月を生きる吸血鬼が自身の体の一部を相手に移植することで成る存在で、高い再生能力と身体能力。そして何より、吸血鬼程ではないが、永い年月を生きることが出来るようになるのだ。

「そうだ………汝は、我が従者だ……」

そう言いながら自室から、アヴローラが現れた。

アヴローラは辛そうにしながら

「覚えてはいないだろうが、汝は一度死にかけた……我は汝を助けるために、私の骨を移植した……」

と言いながら、左手で脇腹の少し上辺りを触った。恐らく、肋骨を移植したのだろう。「済まぬ……我には、それ以外どうしようも……」

「いいよ、アヴローラ……どうやら、アヴローラは僕を助けてくれたみたいだし……恨んだりほしくないさ」

泣きそうになったアヴローラを見て、明久はアヴローラの頭に手を置いて撫でた。そして、荒れ果てた居間を見て

「さて、どうするか……」

と考え始めた。恐らく、後数分と経たない内に警備隊が駆け付けるだろう。そうなるのと、色々と面倒な事態になる。

と明久が考えていると、ドカドカと新たに誰かが入ってきて

「ちい！ 遅かったか!？」

と牙城が舌打ちした。

「父さん!？」

「明久！ 最低限の荷物だけ持って、着いてこい！ アヴローラも連れてこい！」

牙城はそう言いながら、明久が無力化したネプρασ達の武器を奪っていく。明久は言われた通り、ポストンバックに最低限の着替えやらを入れてから、アヴローラと一緒に牙城の後に着いていった。

そして本能的に

(これは、長い一日になりそうだ……)

と察したのだった。

焰光の宴 4

「ここなら、奴等には見つからない筈だ」

「……この船、どうやって入手したのさ……」

牙城に案内された明久は、目の前で停泊している一隻のクルーザーを見て思わず呟いた。

いくら明久でも、そのクルーザーが決して安くないと分かる。すると、牙城は

「なに、ある貴族が税金逃れのために買ったのを少し拝借しただけだ」

と告げた。それを聞いた明久は、今は緊急事態だから何も言わないことにして、中に入った。

中は人が二人位ならば、楽に住める環境だった。

「いいか、明久。今から俺は、宴を終わらせるために動く……お前は大人しくしてろ」

牙城はそう言つて、クルーザーから出ていった。

「宴……」

「真なる第四真祖を生み出す焰光の宴よ……我々は、既に参加することが可能……」

アヴローラがそう言うのと、明久は右下側の肋骨に触った。本当に直前にだが、明久はそこから高い魔力が流れ込んでいることに気付いた。

そしてそれが、高い身体能力の理由だと分かった。

(ある意味、剣術部を引退したのは必然だったのかな)

今から少し前に、明久は剣術部を引退している。その理由は、大会で起きた一つの事件。引退すると顧問に話した時は強く引き留められたが、明久はそのまま引退した。しかし、どっちみち剣術部には居られなかつただろう。剣術大会では、魔族の参加は認められていないのだから。

しばらくすると、明久の携帯が鳴った。画面を見てみれば、母親たる深森の名前。

「……はい」

『よかった……明久、無事ね?』

その声音から、深森が本当に心配していたことが分かった。

「うん、なんとかね」

『今、どこに居るの?』

「……父さんが用意してたクルーザー」

『ふんふー……ということとは、あそこらへんかしら』

明久の説明を聞いて、深森はそう呟いた。そして

『明久、貴方に起きたことは牙城くんから聞いたわ……』

「……………うん」

『私から言えるのは、一つだけよ……どんなことをしてでも、生きなさい……それが、母親たる私からのお願いよ……』

「わかった……」

その会話を最後に、電話は終わった。

携帯を仕舞うと明久は、一度ベッドに寝転がり

「……………大丈夫か？」

「大丈夫……ただ少し、考えたいだけなんだ……この後、どう動くべきなのか……」

アヴローラからの問い掛けに、明久はそう答えた。

その頃、ある大学の一角。そこで牙城は、腹部から血を流して倒れていた。

「いつつつつ……ちよいとばかり、やり方をミスっちゃったか……」

牙城がそう言ったタイミングで、その部屋のドアが開き

「ふんふ………やつほ、牙城くん……それで、少しは懲りたかしら？」

と深森が現れた。その肩には、クーラーボックスがある。

「まったく……ただでさえギリギリの女の子を、更に追い込むからそんなことになるの

よ……」

「返す言葉も無いぜ……」

本来なら逃げたい牙城だったが、刺された傷が深い為に動けないでいた。

そんな牙城の頭に、深森は持っていたクーラーボックスを落とし

「さーて、どうしてあげましょうか……私としては、女癖の悪さを改善させるために、放置してもいいのよ？」

「お願いします、深森さん……治してください……」

これが、久し振りに再会した夫婦のやり取りなのだから、ある意味で末恐ろしいだろう。

その後、深森の伝で牙城はMARの医療ブロックに運ばれ治療を受けることになる。

しかし同時刻に、予想していなかったことが起きていた。

今回の焰光の宴を要請した暫定ネプラシ自治区の議長兼ネプラシ武器商のリーダーだった男が、暫定ネプラシ自治区の住人の過半数を生け贄にして喚んだ原初アヴローラルイトに、惨殺されたのだ。

彼は第四真祖を兵器として利用するために、霊媒師としての能力が高かった妹を殺害し、その遺体を封印兼人形に加工していた。だが原初アヴローラは、その企みに気付いていて、その遺体を魔力で破壊。一番目に命じて男を惨殺させた。

提案者が死んだからと言って、焰光の宴が止まる訳が無かった。

裁定者役だった獅子王機関は、続行を決定。

焰光の宴は続いたが、原初アヴローラは自身が宿るに相応しい肉体を探し、見つけた。そもそも、焰光の宴とは何か。

それは遙か過去に造られ、十二に別たれた第四真祖を一つに戻す儀式だった。

なぜ、十二に別たれたのか。確かに、造られた時は第四真祖は一人だった。しかし、造られた第四真祖は闘争本能に従い、世界を破壊しようとした。それは何とか防がれたが、まだ暴れられたら抑えられる可能性が低かった。

その為に、造った人物は原初アヴローラの魂と肉体をその眷獣の数と同じ十二に別けて、世界各地に造った遺跡に分割・封印した。

そして、封印が何らかの理由で解かれた時を考えて、ある一つの策を講じた。

それが、焰光の宴という儀式だった。

焰光の宴に参加させるには、各アヴローラは血の従者を選定・参加させ、最後まで生き残った一人が第四真祖となるようにしたのだ。

だがそれは、同時に大きな賭けでもあった。

もしその最後の一人の精神力が弱ければ、再び全力を取り戻した原初アヴローラが世界に解き放たれることになり、世界は確実に大災害に焼かれる。

無責任かもしれないが、それしか方法がなかった。

その最後の一人の精神力が、原初アヴローラに勝つと信じて。そうして、焰光の宴は最終局面を迎える。

焰光の宴5

「……君は……」

「……許されるなんて、思っていない……なんであれ、私は……牙城を……」

外に出た明久の目の前には、血に濡れたメイド服を着た一人の少女。ヴェルディアナが居た。その表情は沈んでおり、自殺しても可笑しくない雰囲気だった。

「……船に乗って……私が、貴方達をあの場所に、連れていくから……」

ヴェルディアナはそう言っ、明久とアヴローラを船に乗させた。彼女が言うあの場所というのは、凄まじい魔力が柱のように立ち上っている場所のことだろう。

ヴェルディアナは船のエンジンを始動させると、舵を取った。船は少しずつ速度を上げて、旧アイランドサウス第十地区へと向かった。

旧アイランドサウス第十地区は、今から数ヶ月前に建設中にテロが行われ、いつ倒壊しても可笑しくないという損傷を受けて、他の人工島から切り離された人工島だ。

それ以降、旧アイランドサウス第十地区は犯罪者の隠れ家となっており、近づくだけで襲われるということも多発。近い内に、警備隊が対処する予定だった。

「あそこに……う？」

「ええ……魔力で分かるわ……あそこに、その子以外の第四真祖が居るわ……」

明久が視線を向けると、ヴェルディアナはそう教えた。

確かに、まだ距離が有るというのに、明久も尋常ではない魔力を感じていた。もし耐性が無い者が近付けば、それだけで体に変調を来しかねないだろう。

そして船は、ヴェルディアナの操舵で旧アイランドサウス第十地区の橋だったのだから場所に接岸。明久とアヴローラは、そこに飛び移った。

そして、ヴェルディアナも飛び移るだろうと思ひ、振り返った。しかしヴェルディアナは、船に乗ったままだ。

それを見た明久は僅かに首を傾げたが、すぐに驚愕で目を見開いた。

「体が!？」

ヴェルディアナの体が、少しずつ薄くなっていたのだ。この時の明久は気付かなかつたが、それは吸血鬼の能力の一つ。霧化能力の制御が出来なくなつたから起きた現象だった。

ヴェルディアナは牙城を刺した後、ネブラシ武器商の戦闘班数名と交戦した。しかしその際、重傷を負っていて、それを霧化と再生能力を併用して誤魔化していたのだ。そして、牙城を刺してしまった罪悪感から明久を旧アイランドサウス第十地区に送つた

のだが、そこで限界が来てしまった。

「……貴方なら、終わらせられるって……信じてるわ……吉井明久……」

そう告げた直後、ヴェルディアナの姿は無くなった。

それを見た明久は、歯をギリツと鳴らして

「……終わらせます……焰光の宴だかなんだか知らないけど……こんなふざけたことは、終わらせる！」

と言って、アヴローラを抱えて走り出した。

目的地は当然、魔力が立ち上る中心地。原初のアヴローラの場所へ。

「……なんで……」

しかしその場所で、明久は驚いた。確かに、そこには凄まじい魔力を吹き出している相手が居た。

だがそこに居たのは、爛々とした好戦的な笑みを浮かべた明久の妹。

風沙だった。

「風沙あ!？」

明久が駆け出した直後、風沙。

否、原初のアヴローラは右手を明久のほうに向けて

「行け、一番」

と告げた。その瞬間、明久の眼前に雷で出来た獅子が居た。

「なっ!?! がああああ!?!」

辛うじて直撃は避けた明久だったが、余波の雷に全身を焼かれた。

地面を転がりながら明久は、背中から一本の刀。雷切りを抜刀し

「なんで、風沙が眷獣を!?!」

と困惑していた。暫定ネプラシ自治区議長に呼び出された原初のアヴローラは、自身の魂が宿るに相応しい体を探した。本来ならばそれは、全ての個体が合体したアヴローラが担う役割だったが、そもそも今絃神島に居るのは12体ではなかった。

実は、絃神島に来ていたのは11体だった。牙城も含めて今回参加・参加出来なかった勢力は、探したが、見つからなかった。

しかし、一体を除いて集まったのだから出来る筈だとあの男が声高に提唱したために、宴は強行された。

それ自体が、世界最強の兵器を入手して、兵器として運用しようと思っただからだ。しかし、その企みは失敗。

その後アヴローラは、相応しい肉体を見つけた。それが、絃神島に居る中では最高峰の霊媒体質を持っていた風沙だった。勿論風沙は、精神防御に関する修行もして、並大抵の精神系の術では小揺るぎもしない防御を得ていた。

だが、相手が悪すぎた。なにせ原初のアヴローラは、神を殺戮するために造り出された存在だ。その能力もまた、殺神級さつじんだった。

それにより、風沙の体を支配した原初のアヴローラは、絃神島に居たアヴローラ達を吸収したのだ。

ただ一人、アヴローラ・フロレスティーナを除いて。

「来い、12番目よ……我と統合し、世界を焼き尽くそうぞ」

原初のアヴローラはそう言いながら、アヴローラに手を伸ばした。しかし、アヴローラは

「否……我らの役割は、そのようなことではない……我、アヴローラ・フロレスティーナは、原初に反逆する」

と宣言した。

「くつくつく……ハッハッハッハッハ！ 本気か、12番目よ……分身の人形風情が、我に敵うとでも……思うたか!!」

一頻り笑った後原初のアヴローラは、周囲に数体の眷獣を召喚した。一体一体が天災級の眷獣の一斉召喚。それにより、凄まじい魔力が吹き荒れた。

その余波だけで、明久は吹き飛ばされそうになるが、重心を低くして耐えると

「風沙の体で、好き勝手言ってくれるじゃないか！ お前が誰かなんて、知ったことか！

こつから先は、僕の戦争だ!!」
て風沙を助けるために、戦いを挑んだ。

焰光の宴6

「はああああ!!」

雷切を構えた明久は、原初のアヴローラが憑依している風沙に向かって駆け出した。しかしながら、明久に風沙を攻撃することは出来ない。出来る訳が無い。

それを知ってか知らずか

「愚直に向かつてくるだけか？ この戯けが!!」

罵倒しながら、明久に対して高密度の雷撃を放った。

明久に到達するのは、正に一瞬。普通ならば回避も防御も儘ならないだろう。

しかし、明久は

「しっし!!」

気合いの声と共に雷切を振るい、その雷撃を弾いた。

もとより、雷切は雷を切ったという伝承を持つ対雷の概念を持つ概念武装。

合わせられれば、弾くのは容易いこと。

特に明久は、自身が世界最強と唄われる第四真祖の血の従者だと自覚したことで、高

い能力を開花させていた。

「む!? 貴様は!!」

原初のアヴローラは驚いた表情を浮かべるが、すぐに新しい眷獣を召喚した。

召喚したのは、三体。

水銀色の双頭龍と雷光の獅子、そして銀色の霧を纏う灰色の亀。

「くっ!?」

その眷獣達から感じる魔力波で、どれ程デタラメか明久には分かった。いくら血の従者とは言っても、確実に一撃が致命傷に至る。だから、一撃も当たるわけにはいかない。

そう考えた明久は、更に速度を上げようとした。だが、その必要が無く、明久は驚愕で目を見開いた。

何故ならば、原初が呼び出した眷獣達が、その原初に攻撃を始めたからだ。

「貴様ら!」

まさか裏切られるとは思わなかった原初は、悪態を吐きながら回避を始めた。

そして明久も眷獣が主を裏切るということを予想しておらず、固まっていた。すると、近くに来たアヴローラが

「三番、四番、五番……お主達……」

と呟いた。そこで明久は気付いた。

その眷獣達は、明久の為に戦っているのだと。

「君たちは……まさか!？」

しかもその眷獣達は、あのスーパードアイスを買ってあげた三人だと気付いた。

「まさか、一回アイスをあげただけで……!？」

と明久が驚いていると、獅子が軽く一鳴きした。

まるで、私たちの意思だと言わんばかりに。

「ありがとう……!？」

それに感謝の言葉を述べた明久は、一気に駆け出した。三体が原初を引き付けている内に、出来るだけ接近しようと考えたのだ。

「悔るな!!」

しかし流石に気付いたらしく、原初はその全身から凄まじい魔力を放った。

その魔力波に明久は吹き飛ばされそうになったが、刀を地面に刺して耐えた。しかし

「今だ、アヴローラ!!」

と明久が呼んだ瞬間、明久の背後からアヴローラが駆け出していた。今までは明久の背後に隠れていたのだ。

原初は先ほど、膨大な魔力を放ったばかりで、直ぐには動けず、アヴローラに押し倒された。

「貴様!？」

「我々の勝ちだ、原初!」

アヴローラは勝利宣言をすると、原初の首筋に噛み付いた。

「が、ああああああ!？」

アヴローラが成そうとしているのは、俗にオーバーライドと呼ばれる、吸血鬼同士による上書きだった。

相手の血を吸いとることにより、その相手の能力を奪うのだ。しかも原初は、本来の体ではないために、それ即ち敗北を意味する。

アヴローラが原初に噛み付いた数秒後、原初の動きが止まり、更には召喚されていた三体も消えた。

それを見て明久は、ようやく終わったと思いき、アヴローラが退いて動かなくなっている風沙に近寄り、名前を呼ぼうとした。

「……あ、れ……?」

しかし、風沙の名前が出てこない。

それだけでなく、風沙のことを忘れそうになっていた。

「な、なんで……!？」

妹を忘れそうになっているという異常事態に、明久は困惑していた。すると、アヴ

ローラが

「宴が、終わろうとしているのだ」

と呟いた。

「アヴローラ……どうということ？」

「宴は、余りにも規模が凄まじく、人間達にも被害が大きい……終わる時、関わった者達から記憶を奪うのだ……宴に関わる記憶の全てを」

つまり、一時とは言えども第四真祖の仮の肉体に選ばれた凧沙に関する記憶も、奪われるということなのだ。

「そんな……!?!」

「安心しろ……策はある」

明久が絶句していると、アヴローラは振り向いて

「お前が、我を……食らうんだ……」

と告げながら、スツとクロスボウを明久に差し出した。

焰光の宴 終

「あ、アヴローラ……？　な、何を言ってるの？」

「再度告げる……我を食らい、貴様が新たな第四真祖になれ……それが、解決策だ」

明久が呆然としてみると、アヴローラはそう告げた。それを聞いて、明久は

「そんなの……認められる訳が無いだろ!?　アヴローラだって、普通に生きたいって言ってたじゃないか!？」

それは、牙城に船に案内された後のことだった。

明久が料理していると、アヴローラは明久に普通の生活を送ってみたいと語っていたのだ。

それは、長年に渡って一人で眠り続けていたからの願いだった。彼女は造り出されてから、気の遠くなる時間を一人で眠り続けていた。

その間他の個体は、世界に何度も災厄を巻き起こしてきた。それこそ、天災レベルの災厄を。

だから、破壊を撒き散らさずに普通の生活をしてみたいと。細やかな願いを口にして

いた。

その願いを、明久は聞いていて、絃神島という魔族特区なら出来るかもしれないと言っていた。

「そうだ……だが、我を食らい貴様が新たな第四真祖になるしか、この娘を忘れないで済む方法が無い……妹、なのだろう？」

「そうだよ……だけど……っ!!」

風沙は明久の大切な妹。それは変わらない。

「だけど……何か、他に方法が……!」

明久はそう言つて、拳を握りながら俯いた。そんな明久に、アヴローラは

「否、方法はこれしかない……済まぬ」

と言つて、明久の手にそのクロスボウを握らせた。

握ったのは、明久の意志じゃなかった。体が勝手に、動いていた。

「これって……アヴローラ!」

明久が抵抗しているからか、クロスボウをカタカタと鳴らしながらゆつくりと構えていく。それは、アヴローラが明久の体を操っているのだ。

「血の従者が本物の吸血鬼になるには、その手で主を殺し、血を吸う必要がある……」

明久の呼び掛けに、アヴローラは俯きながらそう教えた。ならば、第四真祖たるアヴ

ローラを普通の武器あるクロスボウでは殺せない。

だが、装填されている矢、否、杭が特殊だった。

その杭は、今から数年前に故カルアナ辺境伯がある遺跡から発掘した魔殺しの杭だった。

その杭は、あらゆる魔力を霧散させる対魔の切り札だった。推測だが、恐らくは原初のアヴローラが勝ってしまった際の保険だったとは、牙城の考察だ。

それは、数年間に渡りカルアナ辺境伯の地下宝物庫に保管され続け、ネブラシに襲撃された時にヴェルディアナが唯一持ち出せた、家族の遺品だった。

それを打ち出すクロスボウには、更に膨大な靈力を込めた弾丸カートリッジも装填されている。

杭の魔殺しの能力を発動するには、膨大な靈力が必要。

その靈力だが、深森曰く

『牙城君が、何処かの靈能力者の女の子を騙くらかして込めさせたんでしょうね』
とのこと。

それをアヴローラが船のベッドの下から見つけ、密かに持ってきていたのだ。

自分を殺させるために。

「アヴローラ!!」

「……濟まない、心優しき少年よ……貴様は、我を恨んでくれていい……」

アヴローラは泣きそうな笑顔を浮かべながら、明久にそう語った。そして、明久の持つクロスボウの照準は、アヴローラの胸部に向けられて

「……さらばだ……我が従者……いや、新たな第四真祖よ」

「アヴローラアアアアアアアア!!」

明久が叫んだ直後に杭は放たれて、アヴローラの胸に深々と突き立った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「そうだよ……思い出した……僕が……アヴローラを……殺したんだ……」

「先輩……」

「明久、あんた……」

どれ程時間が経ったのか。気付けば明久は、用意されていたらしいソファに寝転がっていて、他のソファに雪菜と浅葱が居た。

目覚めた明久は、開口一番に泣きそうな声で呟き、雪菜と浅葱はどう言っているか迷っていた。

すると、那月が

「1つ、耳寄りな情報を与えてやる。吉井明久」

と明久に語りかけてきた。

「そのアヴローラの体を、MARが回収し、今も大事に保管している」

「……MARが？」

そう問い返した明久だが、そう言えばと病院で氷の棺桶で眠っていたアヴローラを思い出した。

「何を考えているのかは分からんが、どうも何かを研究しているらしい……」

「……研究……」

「さて……お前はどうしたい？ このままでいるか？ それとも……」

「決まってる……アヴローラを解放する……」

明久はそう言いながら、体を起こした。

「MARがどうしたいのかなんて、僕は知らないし関係ない……けどね、アヴローラの体を好き勝手弄られるなんて許さない……アヴローラは、普通の生活を望んでたんだ……だったら、叶えてあげたい……」

「先輩……」

「あんた……」

明久の話しを聞いて、雪菜と浅葱は驚いていた。

しかし、那月はニヤリと笑みを浮かべて

「ふ……バカなりにつつ走ってみせるがいい……私は、見守ろう」

と告げた。

その後、明久達は監獄結界から解放された。

「明日も普通に授業だ。遅刻は許さんぞ」

那月はそう言っつて、姿を消した。

そしてやはり、監獄結界の中では時間の流れも違つたらしい。外は綺麗な茜色に染まっていた。

「だけど、明久……あんた、よくも私に隠し事をしてくれたわね……しかも、割かし大事なことを」

「いや、だからね……簡単には話せないことだから仕方ないんだつて……」

「問答無用!!」

明久の言葉に浅葱は、明久を殴ろうと拳を振り上げたが、その前に明久が石に躓いて転倒した。

「あ痛たたた……」

「大丈夫ですか?」

明久が打つた頭を抑えていると、一人の少女が手を差し伸べた。顔立ちは欧州系で、年齢は明久と同じ位だろうか。

何故かメイド服を着ていて、胸元にはヴェルアーナと書かれたネームプレートが着いている。

「ありがとうございます……」

「いえいえ」

立ち上がった明久が感謝の言葉を述べると、その少女は微笑みを浮かべながら首を振った。

そして少女は、持っていたチラシを明久に手渡しながら

「改装したメイド喫茶。カルーアには是非お立ち寄りくださいませ」

少女は着ていたメイド服のスカートを僅かに持ち上げながらそう言うと、去っていった。

すると、浅葱が

「へえ……この辺に、メイド喫茶なんて有ったのね」

と言って、明久が持っていたチラシを横から取った。

明久と雪菜も横から見ると、どうやら改装工事を終えてオープンした喫茶店らしい。

チラシの下端には、クーポン券も着いている。

それを見た浅葱が、何やらニヤリと笑みを浮かべて

「よし、明久。あんたの奢りで行くわよー！ 洗いざらい喋ってもらおうから」

と言って、明久を引きずり始めた。

「やーめーてー!? 人の財布を大破させようとしないでー!?」

「あ、ま、待ってくださーい!!」

涙目で引き摺られる明久に、とりあえずといった様子で明久と浅葱を追い掛ける雪菜。

三人は、確かに喧騒の中に戻っていったのだった。

冥き神王の花嫁編

序章

南米のあるジャングル、そこでは激しく砲火が飛び交っていた。

片方は揃いの迷彩服を着て、その手に持つ重火器で向かってくる獣人達を銃撃している。それに対して獣人達はある程度の被弾は無視し、敵兵士に近寄り

「不粋な侵略者め！」

「我等神官が、裁きを下さす!!」

と口々に言いながら、爪で敵兵士を引き裂いていく。

しかし、銃撃は激しさを増して、次々と獣人達を穿っていく。そんな中、ある一人の兵士が遺跡の祭壇に昇ると祭壇に居た一人の少女に銃口を向けた。その直後

「無礼者があああ!! その御方に触れるなあああ!!」

と怒声を張り上げながら、その兵士の頭を掴んで壁に叩き付けた。普通ならば、死んでもおかしくない一撃にも関わらず、その兵士は平然と笑った。

それに驚いていると、兵士は対魔族用小銃の銃口をほぼ密着させた状態で、引き金を

引いた。

「があ……」

その獣人の口から、血の塊が吐き出されて、獣人は倒れ付した。兵士は歪んだヘルメットを投げ捨てると、再度銃口を少女に向けて

「目覚めろ……ザザラマギウ！」

と狂信的な笑みを浮かべながら、引き金を引こうとした。その瞬間、兵士の腕諸とも小銃が消え失せた。

「なっ!？」

消え失せた理由は、周囲にいた銀色の輝きが特徴の夥しい数の蛇だった。そしてその蛇の群れはまるで滝のように兵士に殺到し、あっという間に食い尽くした。

先程まで感じていた死の恐怖と銃声が消えると、少女は祭壇に背中を合わせて座り込んだ。

そんな少女の耳に聞こえたのは、緊張感を一切感じない足音と場違いな軽薄な声。

「無様だねエ、族長殿。聖域に、こんな無粋な連中の侵入を許すなんて……ザザラマギウの神官も、堕ちたものだ」

廊下から現れたのは、ジャングルには不釣り合いな服装。純白のスリーピースを着た金髪の優男。デIMITリエ・ヴァトラードだった。

「ディミトリエ……ヴァトラー……か……まさか、貴様に……頼ることに、なろうとはな……」

先程撃たれた獣人は、苦しそうに呼吸しながら、自虐的に笑みを浮かべた。死臭が強くなる中、族長は

「奴等は……どうした……？」

とヴァトラーに問い掛けた。するとヴァトラーは、無造作に外を見ながら

「ボクの部下が制圧した。ただし、聖域を守っていたキミの一族は壊滅だヨ。残念だねどね」

「そうか……」

ヴァトラーの言葉を聞いた族長は、咳き込むと更に血を吐いた。最早、その命も風前の灯火だった。族長は最後の力を振り絞りながら、座り込んでいた少女を指差して

「頼む……ヴァトラー……その御方を、連れ出してくれ……花嫁を……」

と言って、族長の手から力が抜けて、地面に落ちた。ヴァトラーはそんな老神官の死を無表情に見下ろしていた。その時、爆発音と共に神殿が揺れた。

どうやら、兵士達が仕掛けた爆弾が起爆し始めたらしい。ヴァトラーは大して慌てもせずに、少女にゆっくりと視線を向けた。

少女は、ヴァトラーに目を奪われたまま、小さく

「ディミトリエ……ヴァトラー……」

と呟いた。そしてヴァトラーは、ある方向を見て

「さて……使わせてもらうよ、明久」

と言いながら、ニヤリと笑みを浮かべたのだった。

来襲

「ねえ、あれって結瞳ちゃんじゃない？」

と言ったのは、浅葱だった。12月末の最終登校日。冬休みが始まった明久達は、これからどうしようかと話ながら、校門に向かっていた。すると浅葱が、校門に結瞳が居ることに気付いたのだ。

「あ、本当だ」

浅葱の言葉を聞いた明久は、校門付近をよく見た。すると確かに、校門の柱に背中を預ける形だが、結瞳が居た。そのタイミングで結瞳も気付いたらしく、笑顔を浮かべて駆け寄ってきた。

「お久しぶりです、明久さん！」

と挨拶してきた。

「久しぶり、結瞳ちゃん。元気そうでよかったよ」

「はい！ ようやく、明久さんに会えました！」

結瞳は嬉しそうに言いながら、明久に抱き付いた。すると、周囲から何やら、鋭い視

線が明久にザクザクと突き刺さる。

すると浅葱が

「そういえば、結瞳ちゃんが着てるのって……天奏学館てんそうがっかんの制服？」

と問い掛けた。今結瞳は、白を基調に水色のラインが入った制服を着ている。

「あ、はい。今日、編入手続きが終わったんです」

「へー……というか、天奏学館って、かなり偏差値高くなかった？」

明久が首を傾げると、結瞳は持っていたカバンに手を入れながら

「はい、確かに少し難しかったですけど……問題ありませんでした」

と言いながら、一枚の紙を明久達に見せた。

それは総合成績表と書かれてあり、全てに於いて高い成績だった。

「うわ……結瞳ちゃん、頭良いんだ」

その成績を見て、明久は思わずそう溢してしまった。流石に浅葱には及ばないだろうが、将来有望だろう。

「ありがとうございます！ 今は無理ですが、待つててください、明久さん！」

結瞳のその言葉に、周囲がざわついた。そして明久が冷や汗を流していると、基樹が携帯を取り出して操作を始めた。それを見た明久は、思わず

「待った、基樹……何をしようとしている……」

と問い掛けながら、その手を掴んだ。

「なにな、学園の掲示板上に明久がロリコンだと書こうかと……」

「待て、こら……そんなことされたら、僕が社会的に死ぬことになる……!!」

基樹の言葉を聞いた明久は、基樹の愚行を止めようと、取っ組みあいを始めた。しかし基樹も、あの手この手を駆使して、携帯を操作しようとしていた。その時だった。

「せっ!」

「えいつ」

浅葱が脛を、結瞳が股間に蹴りを放った。二人の蹴りを受けて、基樹は言葉にならない悲鳴を漏らしながら悶絶する。

「流石に、ネットマナーは守りなさい」

「明久さんを貶めることは許しません!」

二人はそう言うが、今の基樹に聞く余裕など無かった。

「も、基樹……大丈夫……?」

まさかの横槍、しかも急所への一撃に明久は基樹を心配し声を掛けたが、基樹は痙攣するのみ。それから数分後、何とか復活した基樹と一緒に、一行は近くの喫茶店に向かうことにした。

しかし、そんな一行を少し離れた位置から見つめる人影があった。誰であろう、雪菜

である。

「先輩……！ 結瞳ちゃんは小学生なんですよ……！ 節度を持ってください……！」

雪菜はそう呟くが、離れている明久に聞こえる訳がない。すると、そんな雪菜を後ろから見ていた風沙が

「いや、近づいて言いなつてば、雪菜ちゃん……」

と半ば呆れていた。

「それは……出来ません……」

風沙の指摘に、雪菜は僅かに視線を反らしながらそう告げた。なぜ近づかないのか。それは、浅葱と結瞳にある。浅葱は少し派手目ではあるが、紛れもなく美少女。そして結瞳は、幼いがこれまた美少女である。そんな二人に手を捕まれている明久も含めて、周囲からの視線は凄まじく、そんな中に自己に対する評価が低い雪菜は突撃する勇氣は無かった。

しかし、風沙から言わせてもらえば、雪菜も間違いない美少女なのだが。

「まあ、いいけどね。見てるこつちからしたら、色々楽しいから」

風沙はそう言うと、明久達の方に視線を向けて

「あ、明久君達、あの喫茶店に入るんだ！ あそこのショコララテ、美味しいんだよねえ。飲みたいけど、今入ったら怪しまれるし。よし、隣のコンビニで飲み物買ってくるね！」

雪菜ちゃんは何が飲みたい？ 炭酸？ スポーツドリンク？ 果汁系？
「え、えつと……冷たいお茶で……」

マシンガン張りの風沙のおしやべりに、雪菜は半ば気圧されながらお茶を頼んだ。雪菜の注文を受けた風沙は、グツと親指を立てると、隣のコンビニに突撃していった。最近慣れたつもりだったが、いきなりのマシンガントークにはまだ慣れそうになかった。

そして雪菜は、近くに人が居ないことを確認してから、式神を明久の方に飛ばし、近くのベンチに座って一息吐いた。

その時

「隣、いいかな？」

と雪菜に、一人の中年男性が話し掛けてきた。暑いというのに着ている黒いコートと黒い中折れ帽子が特徴の男だった。

「は、はい。どうぞ……」

「ありがたいな。いやあ、この歳になると一日中立つってのが疲れるんだわ」

雪菜の言葉を聞いた男は、軽い口調でそう言いながらベンチに腰かけた。しかし雪菜は

（この人、いつの間に!? さつきまで、誰も居なかった筈なのに!?）

突如として現れた男に、警戒心を露にしていた。しかし男は、そんな雪菜の内心を知ってか知らずにか

「しかし、君。音楽やってるのかい？ そのケース、何が入ってるんだい？」

と雪菜に問い掛けてきた。雪菜は、そんな男の声に聞き覚えを感じながら

「あ、あの……私、そんなに音楽は得意ではなくて、これはクラスメイトのを預かってるだけで……」

と当たり障りの無いように答えた。

「ほうほう……しかし、さつきは何を見ていたんだい？ 何やら熱心に見ていたようだが……あれか、青春か？ 男かな？ いやあ、いいねえ、若いってのは！」

「あ、あの……!!」

矢継ぎ早の言葉に、雪菜は狼狽え始めた。その時だった。男の顔面に、ペットボトルが直撃し

「い、ふ、あつ!!」

男は情けない悲鳴を挙げながら、大きく体を仰け反らせた。それを見た雪菜は、反射的にペットボトルが飛んできた方に視線を向けた。

するとその先には、ペットボトルを投げた張本人。明久が

「あんたは……一体、何をやってんだ！ このバカ親父!!」

と怒っていた。

「へ……親父つてことは……吉井先輩と凧沙ちゃんの……」

明久の言葉を聞いた雪菜は、男。明久と凧沙の父親、吉井牙城の方に顔を向けた。すると牙城は、右手に明久が投げたペットボトルを持ちながら

「どうも、バカ息子と凧沙の父親の吉井牙城です。ヨロシク」

と何故か怪しい発音で、気楽に挨拶してきた。

突然の通達

「なんで、絃神島に居るのさ」

「あん？ そんなん、帰省に決まってるだろ。婆さんから、珠には顔を見せに来てってせつつかれてんだよ」

明久の問い掛けに、缶コーヒーを飲みながら牙城が答えた。それを聞いた風沙が「ああ、そういえばこの二年位は行けてないからね」

と納得していた。

確かに、記憶を振り替えてみると、ここ二年程はなんだかんだと祖母に会えていない。有名な神主兼巫女である明久達の祖母は、その役職故に神社から簡単に離れることが出来ない。だから最低でも、一年に一度は祖母に会いに行っていたのだが、この二年は様々なことが重なって行けてなかったのだ。

「確かに、会いに行かないとな……で、何時行くの？」

「今日」

『今日!?!』

牙城の言葉に、明久と凧沙は揃って驚愕の声を上げた。そして気付けば、牙城は懐から飛行機のカケツトを出して掲げていた。確かに、今日の日付である。

「いくらなんでも、急過ぎるわ!?! もっと常識的に考えろ!?!」

「本当だよ!?! こつちだつて、色々と予定とか有るんだからね!?!」

二人して牙城を非難するが、牙城はどこ吹く風という様子で缶コーヒを飲んでゐる。そんな牙城に呆れたのか、二人は深々と溜め息を吐いた。その横では、浅葱と雪菜の二人が牙城を見ながら喫茶店で買った飲み物を飲んでゐた。

なお、今五人は公園の休憩所に集まっている。

「あれが、明久の……」

「なんとというか、あまり似てないような……」

確かに、明久の顔立ちには牙城と余り似ていないだろう。明久と凧沙は、どちらかと言えば母親たる深森寄りだろうか。

「今のうちに、点数を稼いでおこうかしら……」

浅葱は何やら真剣に考えながら、何やらブツブツと呟いているが、雪菜は

(この人が、先輩と凧沙ちゃんのお父さんにして、あの死都帰り……)

と牙城を観察していた。

死都帰りの吉井牙城と言えば、降魔師達で知らぬ者は居ないと言える程に有名な人物

である。まず、考古学者としては聖職を専門としているが、時々出す論文が他の分野でも高い評価を得ることがあるのだ。

次に、フィールドワークを通じた火事場泥棒染みた武器の収集。

特に有名となったのは、その二つ名の由来ともなった伝説の遺跡。死都からの帰還だった。

廃都市型遺跡・死都。紀元は不明だが、その規模からかなり高い文明を誇ったとされる都市型遺跡で、様々な調査隊がその技術を調べようと入っていった。しかし、一人を残して、誰も帰らなかった。

中に入ったのは、延べ数万に上るとされているが、詳細な人数は不明。

その調査隊の一つが、牙城率いる調査隊だったが、その調査隊は牙城だけが生きて帰り、そして、全調査隊の中で生きて帰ってきたのは、牙城だけだった。

以後、国連と魔族特区協議会の決定で、場所の秘匿と封鎖が行われ、誰も入ることが出来ないようにした。

そして牙城は、死都からの唯一の生還という事実から、死都帰りという二つ名で呼ばれるようになったのだ。

(あの記憶映像で名前を聞いた時は、まさかと思いました……)

監獄結界で明久の記憶を見て牙城の名前を聞いた雪菜は、あの獅子王機関の出張所が

赴き、師家に牙城という名前で有名な人物が他に居ないか確認した程だ。

（聞いた情報では、かなりの数の銃火機を使っているということですが……一瞬にして銃を持ち変えるというのが気になります……）

獅子王機関には、かつて牙城と共闘したという降魔師が居て、その人物の話では多彩な銃を使い分けていたという。しかし、何らかのケース等は持つていないのに、何処からともなく銃を取りだし、更には一瞬にして銃を持ち変えていたという。

（あり得るのは、空間魔法位ですが……吉井牙城は魔法使いではない……一体……）
と雪菜が思考していると、明久が

「あー、もう……急いで帰って荷物を作らないと……でないと、飛行機に乗れない」

と言つて、飲み物を飲み干そうとした。だが牙城が

「あ？ 誰がお前まで連れていくつて言ったよ」

「……は？」

「俺が連れていくのは、風沙だけだ。行くのなら、自腹でどうにかしろ」

「牙城君……」

牙城の言葉に、明久は真顔になり、風沙は額に手を当てた。

「俺が、男のために金を払うと思つたか」

「そういう奴だったね、このバカ親父。そんなんだからあんた、母さんから女つたらしつ

て言われるんだよ、自重しろ」

明久が白い目を向けながら言うが、牙城は気にした様子もなくタバコを吸い始めた。そんな牙城に、風沙が

「牙城君……また深森ちゃんから、踏まれるよ?」

「やめろ、風沙……古傷が開きそうになる……」

風沙の言葉に、牙城は脇腹辺りを押さえた。

「何があつた、何が」

「聞くな……色んな意味で、古傷が開きそうになる……」

思わず明久が聞くと、牙城は視線を逸らした。本当に、何があつたのか。この後、風沙は荷物を急いで纏めて牙城と一緒に空港に向かったのだつた。

「さて……僕は、どうするか……」

そう言つて明久は、背伸びした。

だがこの後、まさか厄介事が配達されてくるとは、この時の明久は思いもしなかつたのだ。

トラブルのお届け物

風沙が空港に向かった、数十分後。吉井家。

「はあ……ごめんね、常識外れのバカ親父で」

「いえ、むしろ納得しました。確かに、先輩のお父さんですね」

「どういう意味さ」

「過去を振り返ってください」

明久と雪菜がそんなやり取りをしていると、チャイムが鳴った。

「はい？」

『すいません、白猫宅急便です！』

明久がインターホンを操作すると、モニターには見慣れた配送業者の姿が映った。

「はい、今行きます」

明久ははんこを持って、玄関に向かい

「じゃあ、ここにはんこをお願いします」

「はい」

と簡単なやり取りをしながら、業者が差し出した用紙にはんこを捺した。すると業者は、一つの大きなキャリアバッグを差し出して

「お荷物はこれです、ありがとうございますごさいましたー」

と言って、去っていった。その直後明久は、その荷物の差出人の欄を見て

「待てい！ 差出人バトラージャーじゃなか!? 業者さん!? これ要らない……つて、もう居ないし!?!」

と受け取り拒否しようとしたが、既に業者の姿は既に消えていた。

「先輩……どうしますか?」

声を聞いて歩み寄って来た雪菜は、明久の足下にあるキャリアバッグを見ながら、明久に問い掛けた。

「……一回、雪菜ちゃんの部屋の方に運んでいい?」

「……そうですね。私の部屋なら、複数の結界が張ってありますから、対処がしやすいかと」

明久の問い掛けに雪菜がそう答えると、取り敢えず二人は、そのキャリアバッグを雪菜の部屋の方に運び込んだ。

そして、部屋の結界の強度を高めた後、雪霞狼を構えると

「先輩、何時でもどうぞ」

と雪菜は、開けるように促した。

ここまで嚴重態勢になるのは、はつきり言ってしまえば、バトラーが信用出来ないからに他ならない。何かと厄介事を持ち込む（今回は送り込んできたが）戦闘狂というのが、明久と雪菜がバトラー抱える評価だ。

「じゃあ、開けるよ……」

一回深呼吸した後、明久はキャリーバッグの留め具を外した。その直後、隙間から白い空気は出てきた。それを見た瞬間、雪菜は身構えたが

「冷たっ!? これ、冷気!?!」

と明久が驚いた声を上げた。

「冷気? ……まさか!?!」

雪菜は何かに気づいたらしく、僅かに前のめりになった。しかしその間に、明久はキャリーバッグの蓋を完全にそして、明久と雪菜が見たのは、キャリーバッグの中で寝ている、褐色の肌が特徴的な一人の少女だった。

数十分後

「コソブリスト受診終了、呼吸、脈拍、脳波、何れも異常無し。ただ寝ているだけです」

「そっか、良かった……」

「すいません、アスタルテさん。いきなり呼んでしまつて」

雪菜の部屋の客室にて、先の少女をベッドに寝かし、医療用の知識がデフォルトで備わっているアスタルテに少女を診察してもらった二人は、少女に異常が無いと分かるほど深々と安堵した。

「しかし、なんでバトラーは女の子を送ってきたんだ？ 態々、キャリーバッグに封印の術式を施してまで」

「分かりません……」

明久の言葉を聞いて、雪菜は困惑した表情で首を振った。二人は気付かなかったのだが、配送票が貼られた場所。蓋の継ぎ目部分には、封印の術式が刻んであったのだ。それも、中の時間の流れを止める高等術式だ。

そもそも、人間を配送するという行為自体が非常識であり、ようするに密入国になる。なぜ空港で気付かなかったのかと言うと、キャリーバッグの内側に、探査を誤魔化す術式が施されていた。

確実に確信犯になる。

「そもそも、この女の子が誰なのか……」

「セレスター・シアータ」

明久が頭を掻いていると、アスタルテがポツリと少女の名前らしき言葉を言った。

「え、アスタルテちゃん。この女の子の名前を知ってたの？」

明久が困惑した表情で問い掛けると、アスタルテはキャリアバッグを指差し「配送票に記載」

とだけ言ってきた。それを聞いた二人は配送票を見た。確かに、荷物の欄に《中身、セレストア・シアーター》と書いてあった。送り主の名前に意識が向き過ぎて、見逃していたようだ。

「普通に書いてありましたね……」

「確かに……」

少し悔しそうにしながら、明久はアスタルテに視線を向けて

「いきなりありがとうね、アスタルテちゃん。助かったよ。けど、本当に那月ちゃんの居場所を知らないの？」

「肯定。私が出る十数分前に、出掛けました」

「そっか……」

実は、少女。セレストアのことをどうにかしてもらおうと、那月を呼ぼうとしたのだ。しかし那月は居らず、アスタルテが那月宅で暇を持て余していたとのことで、診察に来てもらったのだ。

「言伝てしておきますか？」

「あ、お願い出来る？」

「命令受諾」
〔アクセプト〕

明久のお願いに頷くと、アスタルテは診察に使った器具を鞆に仕舞った後、去っていった。

時は少し遡り、那月宅

「ふむ、今年は行けるか……」

那月は一冊の分厚いカタログを見ながら、紅茶を飲んでいた。そこに、携帯が鳴ったので出ると

『お、繋がった。那月ちゃんか？』

「……貴様、何故私の電話番号を知っている。吉井牙城」

何故か教えた覚えの無い相手、牙城から電話が掛かってきたことに困惑した。

『まあまあ、んなことどうだっていいじゃねえか。それよりな、さつき凄い美人を見たんだがな』

「切るぞ、貴様……いや、それより今何処に居る？」

『あ？ 空港の搭乗ゲートだよ。んでな、そいつに見覚えがあつてな。ようやく思い出しました』

「……誰だ」

『ありや確か、アメリカ連合国の特殊部隊の隊長の一人だ』

「アメリカ軍特殊部隊だと……?」

アメリカ連合国軍特殊部隊。簡単に言えば、アメリカ連合国が有する対魔属専用部隊であり、更に言えば後ろ暗い作戦もこなす部隊だ。

特にアメリカ連合国は、混沌の皇女、ジャーダ・ククルカンを目の敵にしており、討伐の機会を伺っているらしい。

「それで貴様は、その女隊長を見逃したと?」

『おいおい、攻魔官でもない一般人の俺に、何を期待してんだ?』

少なくとも、ただの一般人ではないのは確かだが、牙城の言い分は正しい。少なくとも、牙城は攻魔官ライセンスは取得しておらず、一応は一般人の部類に入る。

『それでだ、今ようやくあの女の名前を思い出した』

「なに? 有名人なのか?」

『ああ、那月ちゃんだって知ってる筈だぜ? アンジェリカ・ハーミダ。通称、血塗れアンジェリカなんて呼ばれてる女傑だ』

牙城の告げた名前を聞いて、那月は思わず舌打ちした。

始動

明久の家にセレスタが配達された数十分後、人工島管理公社。

「だー、もう！ 年末にまで女子高生を働かせるんじゃないってえの!!」

と浅葱が、サーバールームで怒りの声を上げていた。なんでも、年末に際してか予想以上の客入りや物資の輸送により、データ管理が間に合わず、一部がパンク。

新しいプログラムを組んでほしいと頼まれたのだ。

「だから、こんな程度が知れる安物を使うなって言ったのよ！ ワンオフ使いなさいってのよ！ ついでに、サーバーも新しいのにして!!」

『嬢ちゃん、さりげに無茶を言うなって。言っとくと、このサーバーだってフルチューニングしてあるんだぞ?』

「あたしが気に入らないの!!」

『何気にひでえ』

浅葱の言葉に、サーバー管理用AIのモグワイはメソメソと泣く仕草をした。何とも、人間臭いAIである。

すると、モグワイは一枚のウインドウを表示させて

『ん、こいつは……』

とその映像に映っている女性を見た。長い金髪に、女性にしては高い身長とガタイの良さだが、それでも美人と分かる女性だった。

「どうしたの、モグワイ……まさか、性欲でも湧いたわけ？」

『そんなわけあるか。こいつだ』

浅葱の言葉にモグワイは、一枚の写真を表示させた。

どうやらパスポートの写真らしく、名前はミーナ・パステイヤと表示されている。

「ただの観光客でしょ？」

『いや、こいつの本名はアンジェリカ・ハーミダ。アメリカ連合国軍特殊部隊フォーの隊長だ』

モグワイが新しく表示したのは、アメリカ連合軍のデータベースから持ってきたらしい、全く同じ写真だが、軍服を着た彼女だった。確かに、アンジェリカ・ハーミダと書かれてある。

「偽名で入国してきた!? まさか、何らかの作戦行動で!？」

この時、浅葱の脳裏には明久の姿が過っていた。明久は世界では非公式の第四真祖だ。しかしその存在は一部では知られており、先日もジャーダ・ククルカンが密入国してきてまで、会いに来ている。

それを考えると、もしかして殺しに来たのではないかと浅葱は思ったのである。
更に

『今確認したが、他に三人は居やがる！ そいつらも、全員ゼンフォースの所属で、偽名で入国してきてる！ 明らかに何らかの作戦行動だ！』

「モグワイ、すぐに警備隊に出動要請！ それと、民間人の誘導とこいつらの誘導を開始！ 孤立化させて、隔壁で閉じ込めるわよ！」

『あいよ！』

浅葱の指示にモグワイが答えた直後、激しく警報が鳴り響いた。

「モグワイ!？」

『どうやら、遅かったようだぜ。嬢ちゃん。アンジェリカ・ハーミダを含めた四名が何らかの爆発物を使用。壁を破壊した後、そこから脱出！』

「行き先を追跡^{トレス}！ 絶対に、見逃さないで！」

浅葱は指示を出しつつ、追跡プログラムの構築を開始。そして、明久に通話しようとしたが

「繋がらない……あのバカ、何やってんのよ!？」

最初自宅に居た明久だが、雪菜の部屋に行く時に携帯を持つのを忘れていたのである。そうこうしている間に、モグワイが

『嬢ちゃん、警備隊の先発隊が交戦開始した!』

「よし、本隊を早く向かわせるのよっ!」

事態が動き始めたので、浅葱は携帯を私物が置いてある辺りに放り投げた。

襲撃

空港で騒ぎが起きる、少し前。雪菜の部屋で明久は、雪菜とセレスタのことをどうするか話し合っていた。

「やはり、アルテアル公の舟に引き渡すべきかと」

「だよねえ……僕も、それが良いと思う」

とは言っても、ヴァトラーから送られてきたのだから、やはりヴァトラーに引き渡すのが最良だと、二人は判断し、それで落ち着いていた。

そして明久は、食事の用意を雪菜に任せると、セレスタの様子を見に行くことにした。「まだ、寝てる……か」

一度ノックしたが返事が無かったので、ドアを開けるとまだ寝ている。しかし、アスタルテが診察した時より何やら甍されていることから、もしかしたら目覚めが近いのかもしれない。

「どうしたらいいのかな……」

アスタルテが診察の際に座っていた椅子に腰掛けながら、明久はため息混じりにそう

眩いた。

その時、セレスタの目蓋が震えながら開いた。

「あ、起きた」

セレスタが起きたことに気づいた明久は、声を掛けようと前のめりになった。その直後、セレスタはガバリと起き上がって明久に抱き付き、何語かで喋り始めた。

「待つて待つて!!? 何を喋ってるのか分からない!!? 取り合えず一旦落ち着いて!!?」

明久はセレスタに落ち着くように促しながら、両手を上げていた。すると何かに気づいたセレスタは、一度明久の顔を見てから明久から離れて、明久の頬を叩いた。

「あ痛あ!?! 僕、何かした!?!」

と明久がセレスタを睨むと、ドアが開いて

「先輩、何ごとですか!?!」

と雪菜が突入してきた。そして雪菜は、今の状況を軽く観察する。

1、目覚めたセレスタが、タオルケットを胸元まで上げながら顔を赤くして、明久を睨んでいる。

2、頬を叩かれたらしい明久が、床に座り込んでいる。

かなりの確率で、明久が犯人だと言える状況だった。

「……………先輩……………?」

「待って、僕は無実だ」

雪菜が絶対零度の視線で明久を見下ろすと、明久は切実な表情で自身の無実を訴えた。その間も、セレスタは二人からしたら分からない言葉で喚きながら明久を指差している。

流石に雪菜も埒が明かないと思ったのか、一計を案じた。

数分後

「雪菜ちゃん、それは？」

「沙矢華さんから習った翻訳術式を込めた護符です……これを、腕輪みたいにすることで、互いの言語が翻訳されます」

明久からの問い掛けに、雪菜は説明しながら金属製らしい護符をセレスタの腕に装着した。そして、最後に靈力を込めると

「はい、これで私達の言葉が分かるはずですよ」

とセレスタに言葉を掛けた。その直後

「気安く私に話し掛けしないで、この地味女！」

セレスタの口から出たのは、罵倒だった。

「じ、地味女……」

「それに！ あんた、さつきはよくもヴァトラー様の振りをしてくれたわね!？」

「誰があんな戦闘狂いの振りなんかするか！ さつきは君が勝手に間違えたんじゃないか!？」

「ヴァトラー様を戦闘狂いだなんて、失礼よ!!」

明久の反論に、セレスタは怒った表情で怒鳴った。その時、雪菜が窓の方に向きながら

「誰ですか!？」

と雪霞狼を向けた。明久も視線を向けると、窓の外に一体の獣人が居た。

「獣人!? しかも、ただの獣人じゃない!？」

雪菜はその獣人から、今までの獣人から感じたことの無い呪力が溢れてることに気づいた。

その獣人が大きく息を吸うと、雪菜は雪霞狼を床に突き立てて

「二人とも、動かないで下さい!」

と言いながら、神格振動波による結界を展開。その獣人の咆哮から、二人を護りきつた。ただの咆哮の筈が、窓が粉々に割れて、床や壁には大きなヒビが入っていた。

「あの獣人……かなりの年齢のようですね……もしかして、教本で習った神獣の域に到達している……?？」

本来、獣人は極一部を除いて魔術行使をしない種族だ。例外の一つを挙げるならば、

既に死んでいる黒死弟のゴラン・ハザーロフだ。

しかも、異例中の異例たる死霊術。

「……先輩、セレスタさん。移動しましょう」

「行き先は？」

「……アルデアル公の舟です」

獣人が居なくなつたのを確認した雪菜は、雪霞狼を引き抜いてから移動することを提案した。

それに頷いて、明久は部屋から出て刀を取りに行つた。そうして、明久と雪菜は、セレスタを巡つて邪神と戦うことになる。

敵対者

「あ、いけね……携帯持ってくるの忘れた」

「何やってるんですか、先輩」

マンションから出た明久は、バトラーに連絡するために携帯を出そうとポケットに入れたが、無いことに気付いた。しかし、今から戻るのも面倒だったので、そのまま行くことにした。

「まあ、キラ君が居れば入れてくれるかな？」

そう言いながら明久は、頭を掻いた。そしてモノレールの駅に着いた時、何時もより少し騒がしいことに気付いた。

「なんだ？ 何かあったのかな？」

「どうも、空港で何かあったようです」

明久が首を傾げると、雪菜がそう言いながら少し遠くのビル壁面のモニターを指差した。明久も目を細めながらそのモニターを見るが、字は読めなかった。

「なにが起きたんだか……まあ、今はバトラーの船に向かおう」

「バトラー様って呼びなさい！」

「断固断るっ!!」

そこから、明久とセレスタの口喧嘩が始まるが、雪菜は呆れた表情を浮かべながらも止めなかった。その時モノレールが来たのだが、セレスタは珍しそうにしていた。

「ん？ モノレールが珍しい？」

「私が居たシアーテには、無かったから」

シアーテというのが、セレスタが居た場所の名前のようだ。ということ、セレスタとしか呼ばれてなかったのか、もしくはシアーテ村のセレスタという意味なのかな。と明久は考えていた。

すると雪菜が

「シアーテという名前に聞き覚えがありました、セレスタさんはあのシアーテの方なんです」

と少し驚いていた。

「雪菜ちゃん、知ってるの？」

「はい……南米の隠れ里、シアーテ……確かそこでは、いわゆる土着神に近い邪神が奉られていて、長い間巫女がその邪神に生け贄とされてきたと……」

明久の問い掛けに、雪菜は小声で明久にそう教えた。それを聞いた明久は、ある

ニュースを思い出した。

それは、アメリカ連合が南米で起きた独立運動に軍隊を派遣をしたというニュースだった。

それにより、独立運動をしていたグループとアメリカ連合国軍の双方に甚大な被害が出ているという。

そしてその独立運動側に、混沌皇女の勢力が加担しているとされている。

「……もしかして、バトラーはあの独立運動に何らかの介入をしたとか？」

「……あり得なくはありません……私が聞いた話では、独立運動側は混沌皇女から強力な魔導兵器を入手し、アメリカ連合国軍も精鋭部隊と最新兵器を投入しているようですから……」

二人はそこまで会話すると、二人して嫌な表情を浮かべた。戦闘狂のバトラーのことだから、嬉々として戦場で暴れているのが予想出来たからだ。

少しすると目的地たる駅に到着したので、三人はモノレールから下車し改札から出た。

するとセレスタは、周囲の光景を見回して

「改めて見ると……本当に、シアータとは全然違う……」

と呟いた。それを聞いた明久は

(隠れ里って言うってだし、やっぱりジャングルの中にあるのかな……う?)

と内心で首を傾げた。その時、セレスタが突如として走りだした。本当にいきなりだったため、明久と雪菜の二人は反応が遅れてしまった。二人が気付いた時には、セレスタは既に信号を渡り終えていて、しかも信号が赤に変わってしまった。

「しまった!?!」

「雪菜ちゃん、式紙を飛ばして!」

明久の咄嗟に指示に、雪菜は即座に応じて懐から取り出した折紙を空に飛ばして

「追って!」

とセレスタの走っていった方角を指差した。折紙は空中で鳥の形状になり、雪菜が指差した方角に飛んでいった。それを見た二人は、信号が変わった直後に走り始めてセレスタを探し始めた。しかし、幾ら探しても見つからない。

「雪菜ちゃん、式紙は?」

「……ダメです、見つかりません……」

明久の問い掛けに、雪菜は少し間を置いてから悔しそうに首を左右に振った。どうやら、式紙も見失ってしまったらしい。

「……探すにしても、こう人が多くつちゃ……」

もうすぐ大晦日とあつてか、街中にはかなりの人数が歩いており、その中からセレス

タ一人を見つけるとなったら、まさに砂漠の中から一つの石を見つけるといったレベルだろう。

それでも二人は、セレスタを見つけようと探した。そして二人が、少し広めの場所に移動した時

「先輩、伏せてください!」

と雪菜が声を上げながら、雪霞狼を構えた。その直後、雪菜は遙か遠くから飛来してきた弾丸を弾いた。

「雪菜ちゃん!」

「狙撃です! それも、かなり遠くから!」

明久が呼び掛けると、雪菜は弾丸が飛来してきた方角を睨んだ。そこに、一人の大柄な男が現れた。

「……何者ですか」

「貴様らに名乗る名は無い……!」

雪菜が問い掛けるが、男はそう言つて拳を構えて突撃してきた。

「速いっ!」

男の予想外の速さに驚く雪菜だったが、雪霞狼で何とか防いだ。しかし、男は即座に二撃目の蹴りを繰り出していった。

その二撃目の蹴りで、雪菜は大きく吹き飛ばされて、男は明久の方に視線を向けた。だがその時には、明久は既に態勢を整えていて

「何処の誰かは知らないけど……これは正当防衛だよ」

抜刀していた鉈切長光を、突き出していた。しかし男は、その一撃を体を横にずらし、回避。明久のボディーを狙って拳を繰り出した。その一撃を咄嗟に腕で防御した明久だったが、余りの威力に3mは押し飛ばされた。

「この威力は……あんだ、普通の人間じゃないな!？」

明久は睨みながら言うが、男は答えず

「貴様らを、排除する」

と宣言し、構えた。

交戦

「しっ!!」

男は逆手に持ったナイフを素早く連続で繰り出してきたが、それを雪菜は難なく防いだ。霊視で先読みしたからだ。男は一旦距離を取ると、冷静に

「なるほど……霊視か……ということは、貴様が獅子王機関の劍巫……そしてその鎗が、秘奥兵器とやらか……」

「貴方は……軍人ですね？　それも、特殊部隊の」

雪菜は何やら確信した表情で問い掛けるが、男は答えない。そして、雪菜と明久を見て

「余り時間が無いからな……手早く片を付ける」

と呟いた。次の瞬間、姿が消えた。

「つつ!!」

驚きの表情を浮かべながらも、雪菜は雪霞狼を頭上に掲げた。その直後、火花が散った。あの男の姿が、雪菜の頭上にあつた。その瞬間、またも男の姿が消えた。そして雪

菜は今度は、雪霞狼を右に構え、それと同時に火花が散った。

「この、速度は……?!」

余りにも、人間離れた速さの動きに、雪菜は目を見開いた。雪菜は獅子王機関で並大抵の特訓はしておらず、実力的にはそこらの武装降魔官を越えており、獣化した獣人の速さも視認出来る。その雪菜が、完全に視認出来ない。霊視に助けられて、何とかギリギリ間に合うというレベルだった。男は消えては現れるを繰り返しながら、雪菜にナイフを繰り出していく。

戦い方としたら、普通の一撃ヒットアンドアウェイ離脱戦法。ただし、その速度がデタラメだが。

雪菜も善戦するが、徐々に防御がギリギリになっていき、滔々限界が来た。

「しまっ!!」

大きく深呼吸した際に叩き込まれた一撃で、雪菜の態勢が崩れた。そして男は、その隙を見逃さずに

「終わりだ、劍巫」

と呟きながら、ナイフを雪菜の首目掛けて突き出した。しかし、次の瞬間

「しっ!!」

明久が振るった刀が、男の突き出したナイフを根元から切り飛ばした。

「僕のこと、忘れないでくれるかな?」

無視されていたからか、少し怒った様子の明久がそう言いながら刀を突き付けた。すると男は、切られて柄だけになったナイフを放り捨てて

「ブイン、何をしている。ブイン」

と言った。本名かコードネームかは分からないが、それが恐らくは一番最初に狙撃をしてきた人物の名前なのだろう。ふと気付けば、最初の一発以降は狙撃が来ない。

多分、眼前の相手が雪菜を担当し、ブインという人物が明久を抑える手筈だったのかもしれない。しかし、手筈通りにいかなかったから相方を呼んだのだろう。そこに

「あら、この方はブインという方だったんですね」

「余りにも多くの武器を持っていたから、武器商人かと思いましたよ」

と明久と雪菜からしたら、聞き慣れた声が聞こえてきた。驚いた二人が視線を向けると、路地裏から数人の派手な色彩の迷彩服を着た女達が現れた。

「お、オシアナスガールズ!」

「なんで!」

二人が驚いていると、一人がその手に持っていた人。恐らくブインだと思われる人物を放り投げて

「第四真祖様、大丈夫ですか?」

とまるで、散歩中に会ったかのような気楽さで、手を振ってきた。

「ブイン……!」

やはり、オシアナスガールズに倒された人物が、ブインだったらしい。すると一人が、散弾銃を持って

「この散弾銃ショットガンもですが、彼が全ての武器は、アメリカ連合軍制式採用の物ばかり……貴方達は、アメリカ連合軍ですね？」

と問い掛けた。

「アメリカ連合軍!?!」

「ということは、魔導強化兵ですか!?!」

魔導強化兵。それは、アメリカ連合軍にて行われている魔道具をその身に移植されて更には魔術や魔導薬物を使って強化を施された兵士であり、その力は普通の兵士の数倍に匹敵する。聖域条約に加盟せず、更には降魔官が居ないアメリカ連合に於いて、対魔族戦力とされている。

「しかし、納得しました……貴方は、移動系の魔道具を移動されているんですね……」

「じゃないと、さっきの移動速度は説明出来ないしね」

雪菜と明久の二人が納得していると、男は舌打ちして

「ブインめ、不甲斐ない……」

と言って、身を翻して走り出した。

「待て!!」

「逃がしません!!」

その男を追い掛けるために、明久と雪菜。オシアナスガールズも走り出した。そして一同は、この事件の発端を知る。

ザザラマギウ

逃げた魔導強化兵を追い掛けていくうちに、明久と雪菜は前方から激しい魔力を感じた。それは、明らかに古い世代の魔力。それも、波動からして吸血鬼が眷獣を呼び出した際のもの。

「一体、誰が!？」

明久がそう言ったタイミングで、出た広場で数人の人影を見つけた。一人は、捜していたセレスタ。その近くにはバトラー、そして、女性にしては大柄な金髪の女性が居た。その女性の前に、明久達と戦っていた軍人が片膝を突いて

「ハーミダ大尉、ブイン軍曹は戦死。残るは、自分だけです」

と女性。アンジェリカ・ハーミダに報告した。よく見れば、右腕が肩辺りから無い。恐らくは、バトラーによって斬られたのだろう。

「そうか……私も、右腕を失った……ルード曹長、貰うぞ」

「は……我が身は、大尉と共に」

ルードと呼ばれた男が頷くと、アンジェリカは左手をルードの肩に置いた。そこに

「バトラー様！ その女の左手は、《女神の抱擁》です!!」

とジャガンの声が響いた。その瞬間、ルードの姿が消えて、アンジェリカの右腕が再生した。否、肌の色や左右非対称になった腕の太さを見るに、融合した。が、正しい表現だろうか。

「女神の抱擁?! 前大戦期に喪われた筈の、他者融合の魔道具?!」

と雪菜が驚愕した直後、バトラーの頭が消し飛んだ。

「バトラー……様……? いや……イヤアアアアアアアアアア!?!」

それを見て、セレスタは頭を抱えて絶叫。その直後、セレスタの頭上に空間を歪ませながら黒い球体が現れた。

「なんだ、あれは……凄い魔力だけど……」

と明久が驚いていると、雪菜の携帯が鳴った。見てみれば、掛けてきているのは浅葱だ。

「藍羽先輩? どうし……」

『どうせ、そこにあのバカも居るんでしょ!! ああ邪神……ザザラマガウの完全出現を阻止して!!』

雪菜が問い掛けようとしたが、それに被せるように浅葱の声が携帯から響いた。

「ザザラマ……ギウ……?」

『そう！ 南米の隠れ里、シアアテが長年封印してきた邪神よ！ 詳しい情報は分らないけど、シアアテでは長年生け贄として巫女を捧げ続けて、ザザラマギウを封印し続けてきた。一説には、その力が解き放たれたら、一国を壊滅させるだけの力が無秩序に撒き散らされるって！』

浅葱の説明に明久達が驚いていると、重い音を立てながら二人の獣人が現れた。片方は、いつそ神々しいまでの雰囲気を持つ虎柄の獣人。もう片方は、黒い毛並みの獣人だったのだが、黒い毛並みの獣人には見覚えがあった。なにせ、セレスタが目覚めた直後に襲ってきた獣人だった。

「まさか、神官団の中に裏切り者が居たとはな……」

「生涯を辛気臭いジャングルの中で終われるか！ アメリカ連合国軍からは、10年は遊んで暮らせる金を前金で貰ってる！ ザザラマギウを捕獲出来たら、一生遊んで暮らせる額になる！ それを持って、俺は欧州辺りにでも高飛びさせてもらう！ そうすりゃ、晴れて自由だ！」

よく分からないが、どうやら内部分裂が起きたようだ。黒い毛並みの獣人の方が若いようだ。そして黒い毛並みの獣人は、神官の役割に嫌気が差してきていたらしい。

虎柄の獣人は、セレスタの頭上に現れている黒い球体を見て

「(イ)に祭壇は無い……もはや、これまで！」

と言つて、自身の胸部をその爪で抉った。それに驚いている間に、虎柄の獣人は「目覚めよ、ザザラマギウ!!」

と言つて、抉り出した心臓を球体に投げつけた。それを取り込んだ直後、更に凄まじい魔力が周囲に放たれた。

「雪菜ちゃん!」

「はい!!」

明久の意図を察した雪菜は、雪霞狼を突き立てて簡易結界を展開。魔力波を耐えた。しかしその間に、劇的な変化が起きた。セレスタは意識を失つたらしく、その場に倒れ、黒い球体。ザザラマギウの中から、数本の触手が伸びて、黒い毛並みの獣人に絡み着いた。

「クソ! 放せ……や、やめろおおおお!!」

黒い毛並みの獣人は必死に抵抗するが、あつという間に取り込まれていった。すると、中から更に数十本の触手が出てきて、周囲にまるで蜘蛛の巣のように張り巡らし、球体を形成した。

「二体、何がどうなつて……」

「ザザラマギウが目覚めようとしているのサ」

明久が呆然としていると、突如として軽薄な声が横から聞こえた。見てみれば、そこ

には頭が吹き飛んだ筈のバトラーの姿があった。

「バトラー!? あんた、死んだ筈!」

「ああ、キラの眷獣サ」

バトラーがそう言いながら指差した先には、チロチロと燃える炎があった。その近辺の空間が揺らぐと、キラが姿を見せて、恭しく一礼してきた。どうやら、幻覚系の眷獣のようだ。

「……バトラー、あんたの目的……もしかして……」

「うん、戦いたいのだサ」

明久がジト目で睨みながら問い掛けると、バトラーはシレッとしながら答えた。その返答を聞いた明久は内心で

(この戦闘狂……何時か、痛い目見させるからな……)

と怒りながら、密度を増していつているザザラマギウを睨んだ。

「どうせ、ザザラマギウのことも調べたんでしょ? 教えてくれないんじゃないの?」

「ふむ、いいだろう。ザザラマギウというのは、土着の邪神でネ。その正体は、地脈から溢れだす行き場の無かった力の塊……それは不定期に暴走しては、周囲に甚大な被害を与えた……しかしある時期から、それを制御する術を編み出した……それが、シアーテ

の巫女……つまり、人柱だネ。人柱に選ばれるのは、若い少女……その少女を祭壇に寝かせて、少女に力を寄り付かせて、少女は死ぬまで夢を見させる……そうして、千年以上封印し続けてきたのサ」

バトラーの説明を聞いて、明久はギリツと拳を握り締めた。明久と雪菜は、短い時間だったが、セレスタと街を歩き回った。その姿は年相応の少女で、見たことの無い光景に興奮していた。それを知っているからこそ、明久は怒りを覚えた。

「セレスタだって、少女なのに……いや、一体何人の少女を犠牲にした……！」

「ん？ 少女達は、幸せだった筈だよ？ 少なくとも、夢の中ではネ」

「そんなの関係あるか!! セレスタもだけど、生け贄に選ばれた少女達にだって、普通の幸せがあつた筈だ!! 恋人を見つけて、子供を産んで……家族として過ごして、皆に見守られながら死んでいく……そんな普通の幸せが！ それを、あんな訳の分からない邪神の生け贄に使われて、夢を見ながら死んでいく？ そんなの許せるもんか!!」

「先輩……」

明久は怒りの表情を浮かべながら、少しずつ密度を増していく。ザザラマガウを睨んだ。そして、明久の言葉を聞いた雪菜は、胸元で手を握り締めた。そこに、アンジェリカが駆け出し

「ザザラマガウは、我らが兵器として使う！ アメリカ大陸の平定のために！」

と言いなから、ザザラマギウに手を伸ばした。しかし、その前面の道路を雷が焼いた。明久が喚んだ獅子の黄金だ。

「あんたもだ……軍人だか何だか知らないけど……他所の国の土地に来て、無関係な人を巻き込んで作戦行動だ？ 軍人なら、一般人を作戦行動に巻き込むな!! あんたらは、軍人じゃない! テロリストと一緒だ!! これ以上作戦行動を取るっていうのなら、僕がその作戦行動を阻止してやる! ここから先は、第四真祖の戦争だ!!」

「いいえ、先輩! 私達の戦争です!!」

今ここに、一人の少女を解放する戦いが始まった。

三つ巴

「邪魔はさせんで、第四真祖！」

アンジェリカはそう言って、明久を狙って拳銃を撃った。45口径、それも対魔族用の法銀弾頭弾。普通の魔族だったら、確実に致命傷間違いなし。しかしその弾を、明久は持っていた刀で弾き

「邪魔は、あんた!!」

と足下にあつた石を蹴り飛ばし、アンジェリカが持っていた拳銃を弾き飛ばした。それにアンジェリカが舌打ちした直後、ザザラマガウに著しい変化が起きた。それまで一定のサイズを維持していたのだが、突如として肥大化。それだけでなく、中から夥しい数の触手。否、とてもなく太い蔦を生やして、周囲に伸ばした。その内の何本かが明久達を捕まえようとしたが、全員素早く回避した。その瞬間、周囲の景色までも変わった。

鬱蒼と生い茂る太い木々に、一目で分かる古代の遺跡。

「これは……」

「先輩、固有結界です！ あの邪神は、自分の力を最大限発揮するための場所を再現した

んです!」

明久が周囲を見回していると、雪菜が明久の背後を守りながらそう告げた。

固有結界。魔術の中でも、秘奥に分類される魔術で、本来は自身の心象風景を世界に上書きする空間魔術に分類される。魔術師や魔法使いが発動した場合、僅か数分で世界の修正力と使い手の魔力が尽きてしまい、終了する。

しかし、相手は一応とは言えども邪神。その魔力量と世界の修正力に抗う力。それが、今の状況を形作った。

「つまり、ザザラマギウが力を解放しようとしてるってことか!」

明久はそう言うと、少し黙考し

「ねえ、雪菜ちゃん……血を、吸わさせてくれるかな?」

と雪菜の耳元で囁いた。

「今、そんな場合では……先輩!」

雪菜が声を挙げた瞬間、気が付けばアンジェリカが目前に居た。そして、左手を無造作に振るった。それを見た雪菜は、反射的に雪霞狼を掲げた。その直後、凄まじい衝撃が雪菜を襲った。

「ぐうっ!?!」

「雪菜ちゃん!?!」

雪菜が押し飛ばされた直後、新たな声が響いた。三人の視線が集中した先には、夏音が居た。その夏音に気付いたアンジェリカは、今度は夏音に向けて左手を振るった。見えない衝撃が、夏音に襲いかかる。だが

「夏音ちゃん!!」

その前に、明久が布陣した。その直後、明久の体を、右肩から左腰に掛けて、大きく切り裂かれ、血が吹き出した。

「先輩!」

「お兄さん!」

雪菜は一瞬目を見張るが、直ぐにアンジェリカに突撃し次撃を未然に防ぎ、夏音は膝を突いて後ろに倒れてきた明久を、何とか抱えた。

「夏音……ちゃん……無事……?」

「私は大丈夫でした! しかし、お兄さんが!」

明久が息絶え絶えに問い掛けると、夏音は明久の傷口を見た。今も激しく出血しており、人間だったら長くは持たなかっただろう。

そんな二人の前に、アスタルテが現れて

「エグスキュート ロッド ダク キユロス
執行、薔薇の指先」

アンジェリカが放っていた、衝撃から二人を守った。

「アスタルテ……ちゃん……なんで、ここに……」

「返答、彼女の買物に付き合っていました」

明久の問い掛けに、アスタルテは視線をアンジェリカに向けたまま答えた。それを見た雪菜は、アンジェリカを蹴り飛ばし

「アスタルテさん、夏音ちゃん。先輩をお願いします！ その間、私は彼女を押さえませます！」

と言つて、アンジェリカに突撃。そのまま、樹海の中に姿を消した。それを見送つたアスタルテは、一度眷獸を納めると、夏音と明久に近寄り

「提案。彼を運びましょう」

と夏音に提案した。

「そ、そうでした！ お兄さん、立てました？」

夏音の問い掛けに明久は何か立ち上がろうとしたが、足に上手く力が入らず、倒れそうになった。それを、夏音とアスタルテは二人掛かりで支えた。そうして、アスタルテが

「あそこに、運びましょう」

と一ヶ所を指差した。そこには大木があり、その根元が大きく開いている。アスタルテと夏音の二人は、ゆっくりとだが、何とか明久をそこまで運び入れた。

中は予想以上に広く、三人が入ってもまだ余裕がある。

「お兄さん……お兄さん……！」

「大……丈夫……放っておけば……勝手に、治るから……」

明久はそう言うが、夏音は涙を流しながら一生懸命に傷口を押さえている。すると、アスタルテが

「提案……彼に血を与えれば、直ぐに治ります」

と夏音に提案した。それを聞いた夏音は、思い出した。目の前に居るのは、世界でも最強級の第四真祖だと。

「お兄さん……」

「夏音ちゃん……それは……ダメだ……僕に血を与えたら……夏音ちゃんも、狙われるかもしれない……」

夏音は着ていた服の胸元のボタンを外そうとしたが、その手を明久が掴んで、制止した。

今も明久は、様々な勢力に狙われている。

少し前に那月から聞いた話では、欧州から吸血鬼ハンターが討ちに来たらしい。しかしその吸血鬼ハンターは、西村によって一発KOされたとか。

更に言えば、夏音はあの人造天使の影響か霊媒能力が人並み外れて高い。それを狙う

輩も居て、夏音が那月の家に一緒に住んでるのは、夏音を護る意味合いも有るのだ。夏音の周囲には、アスタルテ、那月、ユステイナといった護衛が着いているのだ。

雪菜も実は多数狙われたが、雪菜の場合は自身で対処が可能であり、今まで大した問題にはならなかった。

しかし、夏音自身には戦闘力は皆無に等しい。もし夏音までが明久に血を与えたと知られたら、今まで以上に狙われることになる。

それを、明久は危惧したのだ。

しかし、アスタルテがいつの間にか下着姿になっていて

「問答している暇は、ないかと」

と言って、明久の背中に抱き付いた。アスタルテは吸血鬼の吸血衝動が性欲が起因していると知っているので、手早く吸血衝動を起こさせるためにそうしたようだ。

そうして、夏音も胸元のボタンを外し

「お兄さん……」

と明久に抱き付いた。どうやら、決意しているようだ。だから明久も、意を決して

「ありがとう……夏音ちゃん……」

感謝の言葉を告げてから、その牙を夏音の首筋に突き立てた。

一方、外では

「ザザラマギウが固有結界を張ってる位置から、僅かに離れた場所のビルの屋上。

「で、会社の人工知能はアレをどう分析している?」

「あー……ザザラマギウとやらを降臨させるために形成された、保護フィールドって分析してました。言うなら、卵つす。恐らくは、あの中に邪神のコアがあるて見てます。んで、今は人工衛星からのレーザー攻撃の準備中らしいつす」

何時もの格好の那月の問い掛けに、矢瀬はそう答えた。今も二人の視線の先では、ザザラマギウの球体が不気味の蠢いている。

そして矢瀬は、腕時計を見て、後90分と呟いた。

人工衛星の対地レーザーだが、未だ未完成の攻撃システムで、人工衛星の数と軌道の影響で三時間に一度しか射撃は出来ず、はつきり言って間に合うかは微妙で、更に言うてしまえば効果があるかも分からなかった。

「邪神の実体化を止める方法は?」

「今のところは不明つす。他の魔族特区にも問い合わせしてますが、何分古い資料しか

見つからないので、正確な時間は……あの二人に期待するしかないっすね」

「あの二人にか……無謀だな。ダムが決壊に、たつた二人の技師が対処するようなものだぞ」

矢瀬の説明に、那月は思わず眉をひそめた。魔力を無効にする槍も神気には相性が悪く、世界最強と吟われた第四真祖も現状の眷獣で対処が出来るとは、那月には思えなかった。

「まあ、時間を稼げば、明久がどうにかする。つて姫柊ちゃんは考えてるんでしようね。だからこそ、公社も対策を考える余裕が有るんですが」

「……少しばかり、あのバカに頼り過ぎな気がしないでもないが……」

「まあ、確かに……」

那月の言葉に、矢瀬も同意した。そのタイミングで、矢瀬の足下の影が盛り上がり、康太が現れた。

「おう、どうだった？」

「……ダメだ。中には入れない……完全に異界になっているようだ」

矢瀬の問い掛けに、康太は答えながら首を振った。どうやら康太は、影を使ってザラマギウの固有結界内部に侵入を試みたらしいが、ダメだったようだ。

それを聞いた那月は、溜め息混じりに

「では私と西村は、あの木偶共を引き渡してくるぞ」

と言って、振り向いた。その先には、レージングで縛られた筋骨隆々の男が三人程居た。その内の二人は、胸部に拳の痕がクッキリと残っている。どうやら、西村の拳の直撃を受けたようだ。

「お疲れ様です」

矢瀬が労いの言葉を言った直後、那月と西村の姿が消えた。恐らく、警備隊に引き渡しに行つたのだろう。それを見送つた二人は、今もゆつくりと大きくなつてゐるザザラマギウの固有結界を見て

「さて……………どうすつかな……………卵だけなら、まだ被害は少ないらしいが……………」

「……………降臨した場合は、被害が不明か……………そういう意味では、藍羽もだろう」

「言うなよ……………浅葱は、どうだった？」

実は浅葱は、あれから強制的に地下に入れられており、外に出る許可も出ていないのだ。つまり、約数時間に渡つて閉じ込められてるのだ。

「……………激おこカムチャッカファイアー……………つてところか？」

「つだよ、マジかよ……………それレベルだと、どつかのケーキ屋のケーキを全種類買わないと機嫌取り出来ねえ……………畜生、経費で落ちねえかな……………」

「……………無理だろうな……………財布の大破は免れないな……………」

「……………今月の俺の財布が死んだ……………」

矢瀬は涙を流しながら、両手両膝は突いたのであった。

二人の共通点

夏音から血を吸った明久は、体の傷が治り、更には新しい眷獣を掌握したのを自覚した、そして明久は、自身の上で寝ている夏音に視線を向けて

(さて、どうしようかな……)

と悩み始めた。そこに

「夏音ならば、ワシに任せよ。第四真祖」

と新たな声。体を僅かに海老反りさせながら、明久は声が聞こえた方を見た。すると、入り口にエキゾチック美人が立っていた。

「ニーナ……どうやって」

古代から生きる錬金術師、ニーナ・アデラードは、明久の問い掛けに、フフンと笑い「ワシ程にもなると、異空間に入る為の物の錬金も容易いものだ。それに、夏音が着けている、そのネットクレス。位置をワシに教えるものだ」

と言いながら、左手には何らかの杖を持ち、右手で夏音の首もとを指差した。確かに、よく見ればネットクレスがある。羽を模したネットクレスで、聖女然とした夏音によく似

合っている。

「それじゃあ、アスタルテちゃんは……」

「アスタルテならば、既に外に居るよ。どうやら、警戒していたようだ」

実を言えば、明久が気付いた時にはアスタルテの姿が消えていたので、少し気になっていた。しかしどうやら、既に外に居たらしい。

するとニーナは、近くに落ちていた夏音の服を拾ってから、夏音を優しく持ち上げて「さあ、行け。第四真祖よ……この戦いを、終わらせてこい」

と告げた。素早く立ち上がった明久は、軽く体を動かしてから

「うん、終わらせてくるよ」

と言って、駆け出した。

時は遡り、明久と別れた雪菜は遺跡を駆けていた。不安定な足場だが、その程度ならば雪菜からしたら、大した障害ではない。しかし、問題は

「はあっ！」

今居る世界そのものだった。蔦だけでなく、大木の枝。遺跡の防衛機構。否、空間そのものが、侵入者を排除しようとしてくる。それを雪菜は、槍で次々と払い除ける。

(予想はしてましたが、予想以上です……しかも)

「隙ありだ、劍巫」

突如として現れるアンジェリカが、雪菜に対してナイフを振るう。それを雪菜は、体を大きく反らして回避。槍を繰り出すのが、アンジェリカは優々と回避し、大木の裏に消えた。

（流石は、ゼンフォースの隊長クラス……身のこなしが並大抵では……）

実は、既に数回程アンジェリカから奇襲を受けており、雪菜はその全てを回避している。しかしアンジェリカは、時に上から、またはワイヤーを駆使して横からと、様々な角度から奇襲してきていた。

（地の利は、相手にありますね……）

雪菜も様々な地形で戦えるように訓練したが、アンジェリカには遠く及ばない。それは、装備面からも明白だ。恐らく、ワイヤーは都市戦を想定したのだろうが、森林内でも十分に有効な装備だ。

今のように奇襲にも使えれば、罠にも使える。

そして、ナイフと拳銃。ナイフはどうやら特殊な加工が施してあるようで、雪霞狼と互角に打ち合っている。それだけでなく、拳銃にも加工が施してあるようで、ナイフは障壁を切り裂き、拳銃は弾が容易く障壁を貫通した。

（流石は、対魔排斥国家……対魔族用装備では、世界でも群を抜いています……）
アメリカ連合国^C_S^A

C S Aは世界で唯一と言える魔族特区条約非加盟国で、更に言えば、魔族排斥国家である。

魔族は世界の毒であり、徹底的に排除すべきだ。もしくは、人類が徹底的に管理し、使えても実験用。人権を与える必要など無い。というのが、C S Aの一貫したスタンスだ。その対魔族用に編制されたのが、対魔族非正規特殊部隊。ゼンフォースだ。

ゼンフォースの活動は多岐に亘り、他国に入り込み、魔族の仕業に見せ掛けた破壊工作。魔族特区に対する破壊工作。魔族と争う者達に対して教習したり、武器の供給等となる。

しかし、只の人間では魔族に勝てる確率は非常に低い。やはり、全体的に能力が低いのだ。そこで、C S Aが開発したのが、魔導強化兵である。

外科、薬物、魔導技術、あらゆる手段を用いて、徹底的に兵士の能力を強化したのだ。つまりは、人体実験。その検証にも、捕らえた魔族を使つたと思われ、結果として、魔族と互角と戦える性能を入手した。

「なぜ、C S Aがセレスタさんを捕まえようとしているんですか!」

「あの小娘になど、要はない。私達が欲しいのは、ザザラマギウのみだ」

雪菜が問い掛けると、何処からかアンジェリカが答えた。しかし、ザザラマギウはセレスタに憑いている形の邪神だ。それを無理矢理奪うとなれば、最悪の場合、セレスタ

が死ぬことになる。

更に言うと、もしC S Aがザザラマガウの膨大な力を兵器として使ったら、どうか予想がつかない。

「そんなこと、させません」

「貴様に出来るか、劍巫」

アンジェリカの言葉を聞いた雪菜は、走る速度を上げた。そうして雪菜は、懐から数枚の札を取り出して投げた。札は空中で金属の鳥に変わり、ある方向に飛んでいった。式紙に命じたのは、アンジェリカの妨害。

その間に雪菜は、祭壇と思われる場所に入った。その直後、雪菜を奇妙な感覚が襲った。

真つ暗な上に、上下の感覚が無くなったのだ。雪菜は槍を突いて杖代わりにすること、辛うじて平衡感覚を保った。

床だと思ったのは壁で、天井だと思ったのは床。階段だと思っていたのは、階段の裏側で、少し離れた位置の窓を見れば、そこに見えたのは空。天窓を見れば、そこに広がるのは海。

このままでは正気すら失いそうで、雪菜は唇の端を軽く噛み切ることで意識を強引に引き戻し、視線を前方の奥に向けた。その先には、黄金の祭壇があり、祭壇の上にはセ

レスタが力なく浮いていた。

「セレスタ……さん！」

雪菜は近づこうと、走り出した。だがその瞬間、雪菜は上下の感覚を奪われて転んだ。それは、防衛機構ではない。今居るのは、神の間。つまり、居ることを許されているのは、ザザラマギウの花嫁だけなのだ。

「お願いです！ 答えてください、セレスタさん……！」

その理屈を理解しながらも、雪菜は懸命に足を踏み出した。その時、セレスタの目がゆつくりと開いた。それを見て、雪菜は確信する。セレスタはまだ、引き戻せる。セレスタの精神は、まだ人間のままなのだ。

「地味……女……」

セレスタは祭壇の上で身動きしながら、雪菜の方に視線を向けた。だがその声には、絶望と諦めが混じっていた。しかし、それも無理からぬことだろう。なにせ、セレスタの体からは、おぞましいまでの神力が溢れてきている。

「あなた……なにやってんのよ……早く、逃げなさいよ……見てよ……あたしは、もう……」

「いえ、駄目です。あなたを連れて帰ります」

セレスタが最後まで言う前に、雪菜は迷いなくそう告げる。するとセレスタは

「あたしがどうなろうと、あんた達には関係ないじゃない!? あんたは、明久と二人で家でイチヤイチャしてなさいよ!」

「言われずとも、そうします!」

セレスタの言葉に、雪菜は顔を赤くしながらも即答した。セレスタは、雪菜が叫ぶように答えたからか、気圧された様子で

「ひ、開き直ったわね……地味女のくせに!」

「だけど、その前に、あなたをここから連れ出さないと駄目なんです!」

セレスタの言葉を見無視し、雪菜はゆっくりと祭壇の階段を登っていく。そうしていく間にも、遺跡の防衛機構が作動し、雪菜を魔力の奔流が襲う。それを雪菜は、雪霞狼の結界で耐えて登っていく。

「……どう……して……どうして、そこまで……?」

理解出来ないという様子で、セレスタは雪菜を見た。邪神たるザラマギウの降臨を防ぐのが目的ならば、セレスタを殺すのが確実かつ最速の解決法だ。

そうして雪菜は、階段を登り

「……そうでなければ、わたしが救われないからです」

「え……?」

雪菜のその言葉と泣きそうな表情が予想外で、セレスタは固まった。

「……わたしも、あなたと同じなんです……神を喚び出すための生け贄として、死ぬはずでした……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」
「……七歳の誕生日を迎える前に……誰も……吉井先輩も知らないことです……」

私には、セレスタを助ける理由がある。そう言おうとしながら、雪菜は祭壇に手を触れた。その直後、雪菜はまるで砲弾のように吹き飛ばされ、それと同時に壁を突き破って現れた蔦が濁流のように雪菜に襲い掛かる。

「地味女ーっ!?!」

轟音と共に叩きつけられた雪菜の姿に、セレスタは思わず叫んだ。その直後、青い光が刃のように伸びて、蔦を裁断した。

その中から、雪菜が姿を見せる。だが、絶望的な戦いだ。傷付き、消耗し、残った霊力も少ない。

それに対して、ザザラマギウは邪神らしく無尽蔵の神力を撒き散らしている。戦いの素人のセレスタから見ても、結果は見えていた。

「もういい! あんた一人で、神に勝てるわけが無い! 逃げなさいよおお!! あんただって、わかってるでしょう!?!」

「逃げません、わかっていきます」

セレスタの絶叫に、雪菜は微笑む。しかし、ザザラマギウは雪菜を排除するために神力を消費する。その分、実体化が遅れることに繋がる。

そうすれば、時間稼ぎが出来る。

彼が回復し、駆け付けるまでの時間を。

到着

「くあっ!?」

「地味女!」

雪菜に雪崩のように押し寄せる蔦。雪菜はそれらを、雪霞狼で切り払うか、回避する。しかし、余りにも膨大な数に対処が追い付かず、一本の太い蔦が雪菜を打ち据える。それでも雪菜は止まらず、祭壇に向かって前進する。一歩ずつでも、確実に。

その時、セレスタが目を閉じた。目の前の光景を見たくないからか。否、それは抗ったからだ。その運命さだめから。死の運命から。

「痛った……」

「セレスタさん!」

それまで雪菜に襲い掛かってきていた蔦が、消滅していく。雪菜が視線を向けると、セレスタが全身に力を込めて動いていた。祭壇から離れようと。雪菜が最後の一本を切った時、セレスタは祭壇から転げ落ちた。それと同時に、蔦が全て消えた。雪菜はセレスタに駆け寄ると、身動き出来ないらしいセレスタを助け起こした。雪菜も満身創痍

に近いが、まだ動ける。

その時、神殿が大きく揺れた。

セレスタを失ったことで、力の供給源が無くなり、結界そのものが震えているのだと、雪菜は気付いた。

その証拠に、祭壇が。邪神を実体化させるための魔術装置が、激しく明滅し、莫大な神気が不規則に乱れ始めていた。

このままでは、邪神として実体化することも出来ずに、溜め込んでいたエネルギーだけが解放され、神気の大爆発が起きる。最低でも、半径数十kmが吹き飛び、絃神島はほぼ確実に消滅する。

「セレスタさん!？」

セレスタは何とか立ち上がると、祭壇に手を触れた。雪菜はセレスタを制止しようとしたが、それをセレスタは振り払い、祭壇によじ登って

「大丈夫よ……地味女……あたしが、なんとかしてみせる……」

セレスタはそう言って、祭壇に横たわった。邪神の卵を召喚したのは、セレスタである。セレスタの絶望と同調^{シンク}することにより、ザザラマギウの実体化が始まった。ならば、ザザラマギウの実体化を止められるのもまた、花嫁たるセレスタだけになる。

勿論だが、上手くいくという確証も保証もない。セレスタにも自信はないだろう。だ

が、ほんの僅かでも可能性が有るならば、今はセレスタを信じるしかない。

その証拠に、少しずつだが不規則に乱れていた神気が収まっていく。

これならば、と雪菜が期待した。その直後、ズガンという予想外の音が響き、祭壇と階段が砕け散った。

「なっ!?!」

階段に居た雪菜は、崩落する階段に巻き込まれないようにと後退。それにより、雪菜とセレスタの距離は開いた。

気付けば、神殿の床に大きな亀裂が走っていた。

つまり、祭壇と階段を砕いたのは、圧倒的な破壊力を持つ不可視の斬撃。その攻撃を、雪菜は知っていた。

「よくやってくれた……と言っておこうか、民間人。貴様のおかげで、生贄じゆいの間に入れた」

神殿の入り口には、左手を振り上げた姿勢のアンジェリカ・ハーミダが居た。

アメリカ連合国陸軍所属、第十七特殊任務部隊分遣隊。アンジェリカ・ハーミダ率いる特殊部隊は、今や残存戦力は二名のみ。

その一名は、入り口から少し離れた場所で軽機関銃を持ってアンジェリカの脱出経路の確保をしている。同様の任務は過去に何度も繰り返し行われ、その度に多くの血が流

れた。敵と味方、双方で。

血塗れアンジェリカの異名の理由だ。

アメリカ連合国の歴史は、戦争の歴史である。そもそもアメリカ連合国そのものが、欧州北海帝国に対する独立戦争、北米連合^{NAU}との武力衝突の末に成立した軍事国家だからだ。

戦争の直接の原因は経済的な面からだが、その背景には魔族に対する差別があった。

人間と魔族の共存を目的にしたのが、聖域条約。それに、アメリカ連合国は調印していない。

人類純血政策を掲げ、人類至上主義に傾倒しているアメリカ連合国にとって、魔族は淘汰か家畜以下の下等な存在なのだ。

過剰と言える差別政策により、国際的に孤立しているアメリカ連合国では、軍事力の整備が最優先課題とされていた。国家を存続させるには、世界各地の紛争に常に介入し、軍事パワーの調整を続ける必要があった。

そのような軍事介入の主力となっているのが、特殊部隊だった。故に、彼等の国家に対する忠誠心は篤く、そして死を厭わなかった。

そして、アンジェリカ率いる部隊は何度も激戦地に投入された精鋭だった。

『隊長！ 今しがた、謎の衝撃が！』

「……警戒態勢を強化。視界に入ったモノは、全て殺せ」

『了か……な、あれは、眷獣!?!』

「眷獣だと?! まさか、第四真祖か!?!」

部下からの報告に、アンジェリカは驚いた。アンジェリカの記憶では、第四真祖たる吉井明久は、瀕死の重傷を与えた。幾ら第四真祖と言えども、たった十数分で行動可能域まで回復するとは思えなかったのだ。

『クソツ!?! こいつ、俺の魔道具では!?! しまつ……があああああ!?!』

「ランド! どうした、ランド曹長!?!」

アンジェリカが繰り返し呼んだ直後、瓦礫によつて塞がれていた入り口が、瓦礫が吹き飛ばされて開いた。そうして入ってきたのは、血で汚れたジャージを着た明久だった。

「ランドって、こいつのこと?」

明久はそう言つて、右手で引き摺っていた男を無造作に放り投げた。上半身だけになつており、その胸には深々と刀が突き刺さっていた。

「こいつ、聞いてもないのに、僕で60人目の獲物だつて言つてたよ……まあ、その過半数が罪もない民間人だろうし……殺したよ」

明久は感情を感じさせない声でそう言つて、ランドに刺さっていた刀を抜いて

「ここで終わりだ、アンジェリカ・ハーミダ……切り捨てる」と突き付けた。

怒涛

先に口を開いたのは、アンジエリカだった。

「……第四真祖。取り引きをしよう」

「……取り引き？」

予想外の言葉に、明久は思わず片眉を上げた。するとアンジエリカは、祭壇から投げ出されて意識を失っているセレスタを見て

「そうだ。我々は、あの花嫁……もとい、あの邪神ザザラマギウが欲しい。そちらは、あの邪神ザザラマギウに、この島から居なくなつてほしい……そら、悪い取り引きではあるまい？」

確かに、明久の最大の目的はザザラマギウを絃神島から出すことになる。そうしなければ、絃神島が跡形もなく消え去つてしまうからだ。しかし

「……そうなつたら、セレスタちゃんはどうなるのかな？」

「さあな。それは、我々の知るところではない」

明久の問い掛けに、アンジエリカは冷たく返答した。

「そっか……」

その返答に、明久は目を閉じた。次の瞬間、明久はアンジェリカの目前に現れて刀を振った。その一撃をアンジェリカは、ギリギリで回避すると、一気に距離を取って「……なんのつもりだ、第四真祖」

と明久を睨んだ。

「簡単なことだよ……交渉決裂つてこと……だつて、ザザラマギウをどうにかすることは、セレスタちゃんを助ける途上に有るだけだからね」

明久はそう言つて、刀の切っ先をアンジェリカに向けた。

「……理解しかねるな。赤の他人のために、何故そこまで出きる？」

「あんたらには、理解出来ないだろうさ……戦争の為と言つて、他人を傷付けて、戦火を振り撒くあんたらには」

二人は会話しながら、ゆっくりと構えていく。

「それに……C S Aの魔族排斥主義に、ザザラマギウを使わせられない……今はケイオス・ブライド混沌の皇女……ジャードと争つてみたいけど、何時かはその矛先が他の魔族特区に向く……そんなこと、許すわけにはいかない……だつたら、今ここでその企みを潰す……ここから先は、私達第四真祖の戦争だ！」

「いいえ、先輩……二人の戦争です！」

闘志を溢れさせる明久の隣に、回復術式で傷を治した雪菜が寄り添った。

そんな二人を見て、アンジェリカは

「いいだろう……貴様ら二人を殺し、ザザラマギウを祖国に持ち帰るとしよう……」

と告げて、左手を勢いよく縦に振り下ろした。それが、開戦の号砲となった。

「雪菜ちゃん！ 右に跳んで！」

「はい！」

明久の合図を聞いて、雪菜は右に跳び、明久は左に跳んだ。その間を不可視の斬撃が走った。

「なに……」

「遠距離で、同じ技が二度も通用すると思うなよ……その技は、振った左手の直線上に見えない刃を飛ばす技で、射程距離はおおよそ20mと行ったところでしょ……距離が空いてれば、簡単に避けられるよ……それと、余所見してていいの？」

「はああああああ!!」

明久が首を傾げた直後、雪菜が気合いの声を挙げながらアンジェリカに飛び掛かった。

「ちいっ!？」

アンジェリカはその一撃を、ナイフで受け止め、更にその衝撃を利用して後退。雪菜に、ナイフを向けた。だが

「ゼエエエエエ!!」

今度は、明久が切りかかった。

「くっ!?!」

アンジェリカは後退して距離を取ったが、今度は雪菜が入れ替わるように槍を突きだし、それを避けたアンジェリカを狙って、明久が蹴りを放つ。

「ぐうっ!?!」

流石に避けきれず、蹴り飛ばされたアンジェリカ。しかし、二人の攻めは止まらない。明久と雪菜の即興の連撃。それは、これまで越えてきた修羅場で、互いの動きを見てきたからが故だった。

怒涛の攻めに、アンジェリカは防戦一方に追いやられる。だが

「ガキ共が……調子に乗るなあ!!」

怒号と共に、左手を横に一闪。その一撃を避けるために、明久は高く跳躍し、雪菜は伏せた。

その間に、アンジェリカは跳躍の魔道具を使って移動した。半ばまで崩れた、祭壇の上。

「これだけはしたくなかったが……仕方あるまい……」

アンジェリカはそう言うと、右手を高々と掲げた。その先に有るのは、最初に比べた

ら幾らか小さくなつたザザラマギウの卵。

「……まさか!？」

雪菜は気付いて遠距離術式で攻撃しようとしたが、遅かった。

「……祖国に、栄光を……」

アンジエリカが呟くように言った直後、ザザラマギウの卵はアンジエリカの右手に吸い込まれて消えた。その瞬間、アンジエリカから凄まじい衝撃が吹き荒れる。人の身に余る霊力が、行き場を求めて無秩序に吹き荒れた。

「クハハハハハハ!! 素晴らしイ! コノ力ガアレバ、祖国ノ勝利ハ揺ルガナイ!!」

アンジエリカはそう言うが、明らかに制御仕切れておらず、アンジエリカの体から触手やら根つこが生えてくる

「……バカ野郎……!」

明久は吐き捨てるように言つて、構えた。左手は柄尻を握り、右手は刀身に添えるだけ。まるで弓を引くように構えられた刀は、何時でも放てる弩砲を彷彿させる。

「雪菜ちゃん……これが、この戦いの最後みたいだよ」

「はい、先輩……終わらせましょう」

明久の言葉に答えながら、雪菜は明久と背中合わせになるように構えた。穂先を下に向けて、腰を低く落とした明久とは対称的に、前のめりに構える。

そして、二人同時に駆けた。明久は地面に足跡を残し、砲弾のように。雪菜はしなやかな雌豹のように。

アンジェリカはその二人に対して、十数本の触手を放つ。

しかしそれは、雪菜の槍によって細断される。明久は一切速度を落とさず、風を切り裂きながら進む。その明久を止めようとしたのか、地面から太い樹木が壁を形成する。

「そんなんで……止められるかあっ!!」

明久の突きは、容易く貫通。道を切り開く。

「先輩！ 右肩の付け根辺りに、靈力の流れが集中してます!!」
「っっ!!」

雪菜の助言を受けて、明久は狙いを定めた。明久の突きは、アンジェリカの右肩付け根に命中。突き抜けた切っ先が貫いていたのは、一枚の金属板。その金属板には、子供を優しく抱いている女性の姿が刻印されている。

明久は一気に急制動を掛けて、停止すると同時に刀を引いてアンジェリカの体から引き抜いた。その反動で、金属板が空中をクルクルと回転する。それを狙い、雪菜は槍を一閃。金属板。女神の抱擁を破壊した。

すると、女神の抱擁から解放されたザザラマガウの卵が、一気に膨張。その異様な神気の高ぶり方から、爆発すると思われる。

その神気の強さに、雪菜は対処出来ない諦めかけた。その時、明久が雪菜を抱き締めて

「カレイドブラッド 焰光の夜伯の血脈を継ぎし者。吉井明久が、汝が枷を解き放つ！ 疾*く在いれ！ 一番

目の眷獣！ 神羊メサルティム・アダマスの金剛!!」

明久が掲げていた右腕から鮮血が吹き出し、血を門にして異界からその巨体が姿を顯す。全身が金剛石。つまりは、ダイヤモンドで作られた巨大な羊。それはザザラマギウを視認すると一鳴きし、ザザラマギウを覆うように透明な壁を形成した。その後、ザザラマギウから破壊の力が全周囲に解き放たれた。

戦術核に匹敵するその威力、本来ならば間近に居る明久と雪菜は一瞬にして消滅していたのは間違いない。

だが、何時まで経っても痛みどころか、衝撃さえも来ない。

その理由を、雪菜は察した。

「防御であると同時に攻撃……カウンターの眷獣!？」

そう、それこそがその眷獣の能力だった。一部の例外を除き、破壊の力を跳ね返す。解放された破壊の力は、完全にザザラマギウに跳ね返された。それで多少弱ったが、ザザラマギウはまだ消えない。ゆっくりとだが、意識を失っているセレスタに近づいていく。

もちろん、それを明久は見逃さない。

「アル・メイサ・メルクーリ龍蛇の水銀!!」

続けて召喚した水銀の双頭龍蛇が、ザザラマギウを捕食。次元喰いから逃れる術など、有るわけがない。一分と経たずに、ザザラマギウは消滅。

その後、結界は消滅して、明久達は絃神島に帰還。

こうして、邪神を巡る戦いは幕を下ろした。

終わりと始まり

「……疲れたね、雪菜ちゃん……」

「……そうですね、先輩……」

二人は病院の待ち合い室のソファ―に座りながら、自販機で買ったお茶を飲んでいった。あれからだ、固有結界から解放された明久達の近くに、那月が現れた。

その那月の指示で、明久と雪菜は一度身を隠し、防衛隊をやり過ごした。アンジェリカは拘束され、セレスタは今居る病院に運ばれた。

「……そろそろかな？」

「あ、来ましたよ」

明久が呟いた直後、雪菜はある方向を指差した。その先には、那月が付き添う形でセレスタが居た。

明久達は缶を捨ててから、セレスタ達に歩み寄り

「セレスタちゃんの容態は？」

と問い掛けた。

「長年邪神を宿したことで、体内には凄まじいまでの神気が宿っているが、体調は概ね問題はない。暫くの間経過観察は必要だがな」

「つまり、暫くの間は絃神島この島に居る……ということですか？」

「そうなるな」

雪菜が問い掛けると、那月は應楊に頷いた。

「どうやら、セレスタは暫くの間は絃神島に居ることになるらしい。すると、那月はそれと、あの女隊長は暫くは地下の牢獄に監禁されることが決まった。それに合わせて、厳しい尋問もセットだな。どうやら、アメリカ連合国に対する外交の切り札にする気のような。ククク……内容によっては、ジャーダ滅びの瞳辺りに、デカイ借りが作れるな」

「那月ちゃん、悪い顔になってるよ……うごっ!？」

「吉井兄、貴様はいい加減に教師をちゃん付けで呼ぶな」

明久は余りの痛みに、額を押しさえながら呻いていた。その間に、雪菜がセレスタに近寄り

「セレスタさん……」

何かを言おうとしたらしいが、上手く言葉に出来ずにいた。するとセレスタは、雪菜の耳元で

「あんたは、あいつとイチャイチャするんでしょ？」

と囁いた。その瞬間、固有結界内での発言を思い出した雪菜の顔は、まるで瞬間湯沸し器を彷彿させる速度で真っ赤になった。

それに気付いた明久は、雪菜に

「雪菜ちゃん、何かあった？」

と明久は問い掛けた。それは、単純に雪菜を心配したからだが、顔が大分近い。その行動に、雪菜は更に顔を赤くして

「なんでもありません!？」

と明久の腹に、見事に腰が入った拳を叩き込んだ。

「ぐふっ……な、なぜ……」

明久の脳内に、何故かゴングの音が鳴り響いた。雪菜は顔を両手で覆いながら壁際で踞り、一連を見ていた那月はやれやれと首を振っていた。

それを見たセレスタは、ひとしきり笑うとまだ倒れてる明久に近寄り

「ありがとうね、バカ真祖……」

と小さな声で、感謝の言葉を述べた。

その頃、日本本土のある神社の石段の前。

「ようやく、着いた……ババア、生きてるか？」

「もう、牙城君がネズミ海に行きたいって言うから遅くなったんじゃない」

「いやいや、たまには家族サービスをつてな……ん？」

風沙の言葉に反論した牙城は、視線を高い石段の先に向けた。そして少しすると牙城は

「風沙、まだ降りるな。車の中で待つてろ」

と降りようとしてた風沙を止めた。

「えー！　ここ、携帯の電波状況悪いのにー！」

「俺のゲーム貸してやるから」

「牙城君のゲームは、脱衣麻雀しか入ってないじゃない！　そんなのを、娘にやらせる
!?!」

風沙のごもつともな指摘に、牙城は

「なあに、どうせ怒ってるババアを少し宥めるだけだよ。いい子で待つてな」

と言つてから、石段を上り始めた。そして数分後、風沙は空に幾何学的な模様が写つてることに気付いて、それを携帯で撮影し、明久に送信した。

それが、新たな騒動に繋がることも知らずに。

逃亡の第四真祖編

序章

「つたく……相変わらず、無駄に長い階段だぜ……おっさんには辛いつての……」

牙城はブチブチと文句を言いながら、長い石段を登りきった。そうして到着した境内。灯籠の電球も消され、人の気配一つしないことから、今居る神社。

神緒多神社は、既に今日の営業が終わっているのが分かる。この神緒多神社はあまり知られていない神社だが、歴史は旧く、特に呪術との関わりが深い。

現宮司の緋紗乃は、かつて何度か大規模な魔導災害の鎮圧に尽力したことがあるらしく、政府の魔導関係機関とも浅からぬコネを持つているらしい。

そのため年末年始となると、緋紗乃を訪ねてくる客は多い。

しかも時期的に考えて、緋紗乃や巫女達は、年末年始の準備に追われている筈なのに、静かだった。否、静か過ぎた。

周囲が木立に囲まれているために、境内は一層暗く完全に暗闇に包まれていた。

そうして牙城は、参道の真ん中辺りに来ると、溜め息を吐いて

「やれやれ……かくれんぼする歳でもないんだがな……おら、そこに隠れてる奴。出て
いこ」

と一つの灯籠に視線を向けた。

「……OK……出てこないんなら、こつちから仕掛けるからな」

牙城はそう言つて、何処からか一挺のサブマシンガンと缶状の物を取り出した。そして、缶状の物からピンを抜くと、無造作に投げた。

牙城が投げたのは、スタングレネード。

スタングレネードは灯籠付近に落ちて、効果を發揮した。一気に明るくなる周囲と爆発的な音。それらで目と耳を潰すのだ。

(まあ、効果無いんだろうが)

牙城の予想通り、灯籠の陰から小柄な人影が飛び出してきた。それを見て牙城は、サブマシンガンの引き金を引いた。

軽い炸裂音が連続して響き渡り、秒間10発の弾丸が相手に飛翔していく。だが、弾が効果を發揮することは無かった。

「今のは……疑似空間切断か……六式？ いやあれは確か、扱いが非常に難しく、一人しか使い手が居なかった筈……となると、量産型……ははあ、六式改か。既に実践運用段階だったか」

「つつ!?!」

牙城の言葉に動揺する気配がするが、直ぐに立て直したらしく、一瞬にして懐に入り込まれ、サブマシンガンが弾かれた。

「お、中々やるね……だが残念賞!」

牙城がそう言った直後、両手に散弾銃が現れた、

「なっ!?!」

「驚いてる場合かなあ!?!」

牙城は散弾銃をフルオートで撃った。明らかに、人に向けるには過剰な火力で、その証拠に一本の木が折れて倒れた。

「はっはあ!… まだまだ行くぞ!!」

弾切れになった散弾銃を放り投げると、次は二挺の大型拳銃を取り出した。その時

「唯里!…」

「おっ!…」

新しい声が聞こえて、牙城の体が重くなった。視線を上に向けると、牙城の頭上に幾何学模様。魔法陣があった。

「あー………そういやあ、六式改は対って話だったな………忘れてたわ」

牙城はそう言って、爪先でトントンと地面を叩いた。その直後、ズボンの裾から小さ

い何かが落ちて、凄まじい閃光を放った。

「しまった！ 魔法陣潰し!？」

魔法陣潰しとは、その名前の通り様々な効果を発揮する魔法陣を使えなくするための道具で、新たな相手が展開した魔法陣は消えていた。

それで自由になった牙城は、拳銃を肩越しに撃つて背後の相手が居る木の枝を撃つて、折った。

「わ、わあっ!？」

「志緒ちゃん!？」

仲間が落ちたからか、唯里と呼ばれていた少女の気が牙城から反れた。そして牙城は、その隙を見逃さず

「それ、戦場じゃあ死ぬぞ」

と言つて、唯里を志緒と呼ばれた少女の方に投げた。

「わああっ!？」

「うぐっ!？」

唯里と志緒はぶつかり、そのまま転倒。すると、牙城が

「しっかも、なんだこの下着は？ 攻めすぎだろ」

いつの間にか、牙城の手には一枚のシヨーツがあつた。どうやら投げた際に、唯里の

を脱がしたらしい。やっていることは、ただのエロオヤジである。牙城はそのショーツを放り捨てると、落ちてきた二挺拳銃をキヤッチし

「さて、どうするよ」

と言つて、二人に銃口を向けた。その時

「そこまでです。このバカ息子」

と聞こえ、強烈な光が当てられた。眩しかった牙城は、思わず片腕で視界を覆つた。そして気付くと、周囲には物々しい銃火器を持つた一団が居て、全員が牙城に銃口を向けていた。

「……ババア……」

しかも、階段の方には一人の老婆が居た。彼女が、吉井緋紗乃。明久達の祖母に当たる人物である。しかし、その背筋はピンとしており、右手には薙刀があつた。しかもその背後に居た人物は、意識が無いらしい風沙を抱き抱えていた。

「ちつ……わあつたよ……つたく」

舌打ちした牙城は、持っていた拳銃を投げ捨てると両手を挙げて降参の意志を示した。それを確認した緋紗乃は、立ち上がった二人の少女に

「ご苦労様でした、羽波降魔官に斐川降魔官。少しの間ですが、ゆつくりと休みなさい」と告げた。

「は、はい！」

「失礼します！ 緋紗乃様！」

二人は深々と頭を下げた後、それぞれの武装（唯里は自身のシヨーツも）を回収し、去っていった。そして緋紗乃は、月を見上げて

「……もうすぐです……もうすぐ、終わる」

と呟いた。

大晦日の始まり

「……なんで僕は、大晦日なのに補習を受けているのか……」

「赤点を取ったからだ」

「アスヨネー……」

明久の現実逃避気味の呟きに那月が答えると、明久は力尽きたように机に突っ伏した。12月31日、まさに大晦日に明久は教室で補習を受けていた。その理由は、少し前に行われた中間試験で赤点を取ったからに他ならない。そして先にも述べたが、今は大晦日。本来ならば休みなもので、学校の冷房は動いておらず、申し訳程度に運び込まれた扇風機が稼働しているが、その内の一台の前ではアスタルテが何故か宇宙人ゴツコをしている。

楽しそうで何よりである。

「……終わりました……」

「少し待て……アスタルテ、そのバカに飲み物を出してやれ」

「命令受諾」
アクセプト

那月の指示を受けて、アスタルテは横に置いてあったクーラーボックスからペットボトルを取り出して、明久に手渡した。流石に、熱中症で倒れたら敵わないからだろう。明久が飲んでいる間に、那月は手早く採点しながら

「そういえば、吉井……お前の父親は何処に居る？」

と明久に問い掛けた。

「バカ親父なら、風沙を連れて本土のお婆ちゃんの方に帰省中ですよ……たまには顔を見せろって、言われたようで」

「……神繩か」

「です……というか、バカ親父のことを知ってたんですね……」

明久が問い掛けると、那月は表情も変えずに

「あいつには、何回か副業の方で邪魔されたからな」

と語った。

「……あのバカ親父、何やってんだ……」

那月が告げた内容に、明久は思わず頭を抱えた。忘れられがちだが、那月や西村は教師が本業で、攻魔官は副業である。

絃神島を含めた魔族特区は、他の街に比べて魔族の比率が高い。そのために、魔族が何らかの理由で暴れたりした時の備えに、一定の比率で攻魔官を配置することが定めら

れている。

しかも、那月と西村の両名は諸外国にもその名前が轟いており、時折要請を受けて諸外国に行つては、対象魔族の討伐か捕獲を行っている。特に那月は、監獄結界という大きな利点があるため、捕獲から投獄をやっている。

その那月の邪魔とは、一体何をしたのか。

「……何をしてみました？」

「火事場泥棒張りに、武器を回収していたな」

「大変申し訳ありませんでした」

那月の話を聞いた明久は、机に額をぶつけるように頭を下げた。

「ふむ……この点数ならば、数学も終わりとしよう」

「ようやく終わった……」

一段落付いた明久は、安堵した様子で深々とため息を吐いた。その時、ガラツとドアが開き

「吉井兄ー、筆記が終わったなら、次はマラソンだかねー？ 体操着に着替えて、グラウンドに来なよー」

と風沙の担任の笹崎が告げた。それを聞いて明久は、空からギラギラと陽を照らし続ける大陽を見て

「……不幸だ……」
と呟いた。

『上城さんのアイデンティティーが!?!』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから、約三時間後。

「せ、先輩……大丈夫ですか？」

「……体が熱い……」

「こ、これ飲んでくださいっ!」

モノレールに乗った明久を、雪菜が労っていた。無理もない、35度近い炎天下の中で約二時間近く走り続けたのだから、体調的にも中々辛い。

明久は雪菜から手渡された飲み物を、一気に飲んで

「幾らなんでも、この炎天下の中でマラソンは死ぬって……キツいって……」
「お疲れ様でした……」

明久の愚痴に、雪菜は労りの言葉しか返せなかった。その後、適当に年末の買い物を買わせてから帰宅したのだが、明久と雪菜は中に入って固まった。

何せ、中がまるで全てひっくり返されたように荷物が散乱していたからだ。

「な……」

「泥棒ですか!？」

明久と雪菜は慌てて突入し、原因を探し、見つけた。

「あ、明久君。おかえりー」

「……何やってんの、母さん」

非常に珍しいことに、明久と風沙の母親。吉井深森が帰宅し、滅多に開かれない牙城と深森の部屋から、何やら引つ張りだそうとしていたのだ。

「何って、このキャリーバッグを出そうとしてるのよ」

「待て待て! そのまま引つ張るな!?! 荷物が崩れ!?!」

母親を止めようと一歩踏み出した明久だったが、間に合わず、深森が乱暴にキャリーバッグを引つ張ったために、キャリーバッグに乗っていた荷物とキャリーバッグに引つ掛かっていた荷物も一緒に引つ張り出されて、明久は荷物の下敷きになった。(深森は無事)

「いやー……ようやく見つけられたわあ」

深森は満足そうだが、荷物に押し潰されていた明久が

「あんた……この惨状は無視なんか……」

と睨み付けた。

「ん? なんのこど?」

「あんたがひっくり返した、この荷物だよっ!」

素で分かつていないらしい深森に、明久は周囲を指差しながら怒鳴った。深森が見事にひっくり返したために、最早超局所的な嵐が通り過ぎたような有り様だ。

「えつとお……大掃除?」

「これを大掃除とは認めないっ! むしろ真逆だよ!」

明久の指摘が気まずかったのか、深森は視線をさ迷わせた。そして、何かに気付いた様子で

「そういえば、凧沙は?」

と明久に問い掛けた。

「凧沙なら、バカ親父と一緒にお婆ちゃんの所に行つたよ。連絡されてないの?」

「ちっ……あのババアか……」

明久が行き先を告げると、深森は舌打ちした。実は、緋沙乃と深森は非常に仲が悪いのだ。以前に顔を合わせた時、大喧嘩した程だ。

「で、母さんは何処に行く気?」

「ん? 会社の社員旅行。明久も行く?」

「行かないからね。前に行つて、散々な目に合わされたからね!」 賭け麻雀に強制参加させられて、お小遣い全額奪われるわ、女装させられそうになるわ、襲われそうになる

わ!？」

深森が一緒に行くか問い掛けるが、明久は被せ気味に拒否した。その理由を聞いて、雪菜は

(MARには、マトモな人は居ないんでしょうか……人事の方、もう少し性格面を……)と危惧していた。そうこうしている間に、深森は荷物を詰め込んだらしく

「それじゃあ、私は行ってくるわねえ。あ、雪菜ちゃん。これ挙げる。じゃあねー」

と雪菜に一台のデジタルカメラを手渡して、出ていった。それを見送った明久は

「……この惨状を、僕一人で片付けろ……と?」

と途方にくれた。だが雪菜が

「先輩、私も手伝いますから」

と明久に提案した。

大晦日2

明久と雪菜が家の掃除を始めて数時間後、何とか掃除は終わった。その少し後、チャイムが鳴った。

「ん？ 誰だろ？」

蕎麦を茹でていた明久は、首を傾げながらも玄関に向かった。そして、ドアを開けると

「よ、明久」

そこには、基樹が居た。

「あれ、基樹？ なんで？」

「おいおい、忘れたのか？ 大晦日に全員お前の家に集まるって決めたろ」

基樹のその言葉に、明久は休みになる前にした約束を思い出した。

「あー………そういえば、そうだったね………」

「だろ？」

「あーのさ………そろそろいい？」

明久と基樹が話していると、新たな声が聞こえた。その声を聞いた明久は、顔を外に出した。そこには、更に二人。浅葱と結瞳が居た。居たのだが、二人は晴れ着姿だった。恐らくは、基樹の家で着付けしてから来たのだろうが

「……無茶したね。大丈夫?」

「だ、大丈夫よ」

「明久さんに見せたくって、着てきました」

そう語る二人だったが、目は虚ろだった。しかし、無理もない。そもそも、晴れ着は真冬の時期に着ることを想定されていて、かなり厚く造られている。しかし、今居るのは季節的には真冬だろうが、30度を越える気温が平均の絃神島である。

二人は、熱中症になりかけていた。

明久は、そんな二人を助けるために中に招き入れた。

「先輩、何方……って、藍羽先輩に結瞳ちゃん!? 大丈夫ですか!」

「あれ、なんで姫終ちゃんが居るんだ?」

「お隣だからね。最近は割りと夕食とか一緒に食べてるよ」

「それに、今日は先輩は一人ですし……大晦日にお一人というのは、流石に寂しいでしょうし」

基樹が雪菜が居ることに首を傾げていると、雪菜は浅葱と結瞳に飲み物を渡しながら

説明した。その間に明久は、冷房を強めて、更に深森が散らかした最後の荷物を納めた。
「んー……お蕎麦食べる？」

「食べる……明久のことだから、出汁から拘ってるんでしょ？」

「まあね」

「私も食べたいです」

「あ、俺も」

「はいはい」

浅葱、基樹、結瞳の返事を聞いた明久は、キッチンに向かった。追加で蕎麦を茹でるつもりらしい。

すると雪菜は

「藍羽先輩、結瞳ちゃん、写真いいですか？」

と深森から貰ったデジタルカメラを掲げた。

「あ、はい。大丈夫ですよ」

「え、その機種……と9じゃない!? どうしたのそれ!？」

結瞳は快諾したが、浅葱は雪菜が持っていたデジタルカメラを見て、思わず雪菜に歩み寄り、肩を掴んだ。

「あ、あの……吉井先輩のお母様から頂いたんです……」

「流石は、MARの主任の一人……日本非売品をポンと渡すなんて……」

雪菜が狼狽しながら教えると、浅葱は深森の顔を思い出した。実は浅葱は、今雪菜が持っている機種が欲しくて様々な手を尽くしたが、結局入手出来なかったのだ。

「この機種、解像度が凄いのよ……それだけでなく、自働手振れ補正に逆光修正……カメラに必要な機能を全部詰め込んで、この小ささ……惜しむらくは、日本では非売品の機種だったことよ……!」

入手出来なかったことが相当悔しかったらしく、雪菜が持っているデジタルカメラを見ながらグヌヌという表情をしていた。そうこうしている間に、雪菜は浅葱と結瞳を撮影。それを見てみると、浅葱が

「このデジカメのデータ、携帯と同期出来るのよ。やってあげようか?」

「あ、そうなんですか? お願ひしても?」

「OK! えつと……あ、明久。あのパソコン、借りるわよ?」

と浅葱が指差したのは、居間の端にある一台のノートパソコンだった。

「ああ、大丈夫だと思うよ。風沙が家計簿を取るのに使ってるだけだから」

「またいい機種の無駄使いを……これ、MARのθ10じゃない……うわっ」

浅葱がうわつと言った理由は、至極簡単。閉じていたノートパソコンを開いたら、画面の上枠部分に風沙のIDやらパスワードが書いてある付箋紙が貼ってあったからだ。

「……ハツカーのあたしからしたら、こんなの……」

「まあまあ……」

凄腕のハツカーたる浅葱からしたら、パスワードがドドンと書いてあるのは、どうやら許しがたいらしいが、今は非常時でもないのです、飲み込んでもらい、起動。

浅葱は雪菜の携帯とデジカメのデータを同期させた。すると、浅葱は

「あれ……明久、もしかして、凧沙ちゃんから写真着きでメール来た？」

「あ、うん。そうなんだけどね、データが破損したみたいで、文字化けしてて見れなかったんだ」

浅葱の問い掛けに、明久はそう答えた。すると、浅葱は画面の一ヶ所を指差し

「これ見て。凧沙ちゃん、このノートパソコンと携帯を同期させてみたいでね……写真が挙げられてる」

と説明した。

「お、本当？ どんな写真？」

「ちよつと待ってね……今解凍するから……何これ」

「ん、どうしたの？」

蕎麦を茹でていた明久は、蕎麦を丼に移してから浅葱の隣に立って画面を見て、固まった。

「これは……魔法陣!？」

そこに写されていたのは、夜空に光る幾何学的な魔法陣だった。

大晦日3

「この魔法陣……どこで撮影されたか、分かる？」

真剣な表情で明久が問い掛けるが、浅葱は首を左右に振り

「確かに良い機種だけど、スペックが足りないわ……位置情報も……ダメね、破損して
る。相当電波が悪い所で撮影した。位しか、分からないわ」

と言いながら、お手上げと言わんばかりに両手を挙げた。それを聞いた明久が唸って
いると、基樹が

「おーい、明久。出汗が煮えてきたぞー」

と言ってきたので、明久は蕎麦の調理に戻った。その後、蕎麦を食べ終わったら結瞳
が眠そうになったので、基樹が結瞳をタクシーに乗せて帰ることにした。

午後11時50分頃。除夜の鐘が鳴り始めている。

基樹は結瞳が寝ているのを確認すると、携帯を取り出して短縮番号で相手を指定し
た。

名前は、矢瀬幾磨^{やぜかずま}。十歳以上歳上の基樹の異母兄だ。

「……兄貴、俺だ」

幾磨と繋がったのは、約30秒程してからだった。イライラし始めたタイミングだったので、口調にも多少苛立ちが混じってしまったのは仕方ないだろう。

『分かっている。基樹、結瞳はどうした?』

「結瞳坊なら寝た。今から連れて帰るところだ」

幾磨の問い掛けに、基樹は要点だけ伝えた。そして、即座に本題を切り出すことにした。

「それより、ちよつと厄介なことが起きた。情報が欲しい」

『悪いが、規定の就寝時間を過ぎている。用があるなら明日にしろ』

「就寝時間だ? 正月だぞ?」

『日付など、しよせん人が便宜的に決めた記号だ。俺がそんなものに従う理由はない』

「あんな……絶対モテないだろ」

幾磨の話聞いて、基樹は思わずそう言ってしまった。

幾磨が多忙なため、時間に非常に厳しいのは知っていたが、まさか用件すら聞かないとは思わなかった。

だから、皮肉の一つでも言わないと気が済まなくなつたのは仕方ない。

『監視報告ならば、情報部に伝える。今なら羽沢が残っているはずだ』

「稜子さんの手に負えない案件だと判断したから、あんたに連絡したんだよ」
『……説明しろ、手短かに』

基樹の声音から切羽詰まってるのと分かったのか、幾磨が促してきた。

「どうやら、本土で風沙ちゃんが生事件に巻き込まれた公算が高い……画像を送る」

基樹はそう言つて、端末を操作して魔法陣が映つた写真を幾磨の端末に送つた。少しすると、幾磨が

『……かなり大規模な魔法陣だな……確かに、この近くに居るのなら巻き込まれた可能性が高いが……』

「管理^ウ公^チ社の諜報員がくつついてる筈だ。何をしていたんだ」

『……遊園地の人混みを利用され、撒かれたらしい』

「……吉井牙城の仕業か……」

『そのようだ……死都帰りの吉井牙城……予想よりも、厄介な人材のようだ』

基樹は脳裏に、数日前に出会つた牙城の姿を思い出した。見た目は、何処にでも居る中年オヤジという風体だが、その気配は違つた。

（あのオヤジさん……相当な修羅場を潜つただろうしなあ……こつちの監視に最初から気づいてたか……）

と基樹が考えていると

『ただ、この写真だけでは管理公社の戦力は動かせん……攻魔官の派遣も出来んぞ』

「分かつてる……だが、下手したら明久が本土に行きかねないぞ……あいつはあれで、内には相当に心配性だ……特に風沙ちゃん、病弱の節があるからな……」

『第四真祖がか？ そんな情報は初耳だが……分かった。諜報員を増員し、情報収集に当たらせる』

「それが無難か……」

『何か分かつたら、そちらの端末に直接送らせる。それと、第四真祖に対する監視は続行し、もし動いたら報せる。こちらで対処する』

「対処って、まさか……」

『二度言わせるな。監視していろ』

幾磨はそう言つて、通話を切った。携帯を仕舞つた基樹は、無邪気に寝ている結瞳を見てから、シートに深々と体を預けた。

場所は変わり、神社。

蕎麦を食べ終わった明久は、雪菜と浅葱の二人と一緒に二年参りに来ていた。

絃神島唯一の神社のために、境内から人が溢れる程に参拝客が居る。

その一角に、明久達が居るのだが

「明久。いい加減落ち着きなさい」

「これでも、落ち着いてる方だよ」

「そうは言いますが……殺気が凄いですよ、先輩……」

見た目は落ち着いている明久だが、やはり写真が気になるらしく、その身からは殺気が洩れている。もし感覚が鋭い人が居たら、反応していただろう。

「まあ、あれが気になるのは分かるけど……」

「それより先輩。先ほど、おみくじを買ってましたが……結果はどうでした？」

雪菜が明久の気を逸らそうとしたのか、明久が先ほど買ったおみくじのことを聞いた。

「ん……」

「……うわぁ……」

「ええ……」

明久は二枚のおみくじを二人に見せたのだが、その二枚を見た二人は言葉を失った。何故ならば、大凶と凶だったからだ。そうそう出ない二枚を、明久はピンポイントで引いたようだ。

「だ、大丈夫ですよ、先輩！　今がドン底なら、挽回が可能です！　ほら、結びましょう！」

雪菜はどうやら、フォローしようとしているようだが、はつきり言って微妙である。

取り合えず明久は、言われた通りにおみくじを巻きに行つた。そして、二枚を巻き終わると

「ねえ、二人とも……私の家に来ない？」

と浅葱が、二人に問い掛けてきた。

藍羽家

二年参りが終わると浅葱は、メッセージを送った。

「ちよつと待つてて。迎えが来るから」

実は、浅葱の家は今居る神社から少し離れており、モノレールを使つても家まで結構歩くのだ。そのため、車を使った方が早いらしい。待つていると、一台のセダンが来たのだが、運転席から出てきた人物を見て、浅葱が

「え、すみれ董さん!? 今日は、父さんと公社に居る予定じゃあ!?!」

と驚いていた。

藍羽董。あいはせんさい名前から浅葱の母親と分かるが、正確には義理の母親だ。昔は浅葱の父親、藍羽仙斎の車の専属運転手だった女性だ。

なお、浅葱の実母は浅葱が中学生の時に病気で亡くなつてゐる。

「ああ、うん。確かにそうだったんだけど、予定より早くに仕事が終わったから、帰宅してたのよ。それに、たまには運転したいしね」

董はそう言いながら、電子キーをクルクルと回した。

「ああ、そうですか……明久、姫終ちゃん。とりあえず乗って」

「あ、うん……なんか、お疲れ？」

「気遣いありがとう……」

ガツクリと肩を落とした浅葱に手招きされ、明久と雪菜は車に乗った。それをニコニコしながら見た後に、堇は運転席に座ってエンジンを始動。車を出発させた。

「中々の運転技術のよう……あんまり、体にGがかからなかった」

「あら、ありがとう」

車が加速する時というのは、普通だったら体が座席に押し付けられるものだ。しかし、堇の場合はあまりそれを感じなかった。そこから、堇が高い運転技術を有していることが伺える。

「つて、堇さん！ 褒められて嬉しいからって、あんまりスピードアップしないで！」

「おっと、危ない」

「……それすら分からなかった……」

どうやら、堇は少しばかり速さを求める質らしい。外を見ていた浅葱は、車が加速していることに気付き指摘。堇は車の速度を落とした。

「堇さん、父さんの専属運転手だった頃から、かなりの腕を有してるし、危機感も凄くつてね……聞いた話じゃあ、爆弾を取り付けて特攻してきた車を避ける為に片輪走行した

とか、ビルの屋上で一瞬光つたのを見た瞬間、車を急加速させて狙撃を避けたとか、結構聞くのよ……」

「いや、とんだだけ？」

浅葱の語つた董の逸話を聞いた明久は、思わず呟いた。すると董は、クスクスと笑い「その位しないと、専属運転手の意味が無いわねえ」

と語つた。浅葱が語つた内容を、否定しない辺りが恐ろしい。そうこうしている内に、車は一棟の高級マンションの前に停まり

「先に降りてください。私は、地下駐車場に車を停めてきますので」

と董に促されて、明久、雪菜、浅葱の三人降りて、マンションに入った。流石は高級マンションなだけあり、入口にはセキュリティがあり、入るにはカードキーと掌紋認証をさせる必要だった。

浅葱の手によりパパッと終らせ、三人は廊下を進み奥のエレベーターに乗った。そうして浅葱が押したのは、最上階のボタン。

(最上階なのか……雪菜ちゃん、大丈夫かな?)

明久はそう思いながら、雪菜を見た。雪菜は高所恐怖症であり、前に飛行機に乗った時は、明久の手をギュッと握りながら何ごとかブツブツと喋っていた程だ。

その時、軽い電子音がしながらドアが開いた。すると、すぐ目の前に玄関の靴脱ぎス

ペースが目に入った。

「直結してるんですか……」

「そ。この階だけね。入って入って」

雪菜の呟きに答えながら、浅葱は履いていた下駄を脱ぎ、手招きした。呼ばれた二人はエレベーターから降り、靴を脱いでから上がった。

廊下の壁には様々な大きさの写真やら絵が額縁に入れて飾っており、明らかに高級な物と分かる。

そのまま進んでいると、不意に右側が開けた。そこから見えたのは、広い青空と枯山水を中心にした日本庭園だった。

すると、浅葱が振り返り

「ちよつと、ここで待ってて。着替えてくるから」

と言って、先の曲がり角を曲がって、姿を消した。やはり、暑かったらしい。

「……ここで待っててって言われても……どうしよう……」

「とりあえず、その席に座りませんか？」

雪菜が指差したのは、左側の壁際にあつた木製のベンチだった。少し考えた明久は、その提案に従うことにした。雪菜と二人でベンチに座り、ボンヤリと浅葱を待っている

「おや……浅葱が客人を招き入れるとは、珍しいね……」

と奥の方から、声が聞こえた。視線を向けると、突き当たりの部屋から和服を着た大柄で強面の男性が出てきていた。

初見では、ヤの付く自由業の人を彷彿するだろう。

「あー……お会いしたのは、二度目でしたか？ 藍羽仙斎さん」

その人物こそが、浅葱の父親にして絃神島の市議会議院の最高責任者。藍羽仙斎だ。

「そうだね……前に会ったのは、一年位前にMARでかな？」

「ですね。母さんの研究成果の発表会の時でした……少し、痩せました？」

「まあ、忙しい立場だからね……中々休む時間が取れないのさ……おや、そちらのお嬢さんは……なるほど、噂に聞く獅子王機関の劍巫か」

「……御存知なら、名前だけ……姫終雪菜と言います」

「私が、藍羽仙斎だ。よろしくね」

雪菜が名乗ると、仙斎も礼儀として名乗った。すると仙斎は、明久に顔を向けて「しかし、君は少し雰囲気が変わったかな？ ふむ……いい気配を纏ってる」

「はあ、ありがとうございます。まあ、色々ありましたからね」

仙斎の言葉に生返事をしながら、明久は頭を掻いた。

そこに、仙斎が

「君とは、前々から話してみたいと思っていたんだ……吉井明久君……君、私の跡を継いでくれないかな？」

「……………はい？」

予想外過ぎる言葉に、明久は首を傾げた。

「いや、なに……君ならば、良い政治家になれると思うんだよ……人の為に、街の為に……だから君には、私の政治基板を引き継がせようかと……」

と仙齋が喋っていたら

「あー！ 父さん！ 何やってるのよ!？」

と浅葱が現れた。

「いやなに、彼に私の跡を継いでもらおうと思つてな……」

「明久にそういうの、似合わないから！ あーもう……ボクサー!!」

浅葱が声を挙げた直後、庭の端を通つて大型犬が現れた。

「ま、待て、浅葱……!」

「問答無用！ GO、ボクサー!!」

「ぬおおおお!!」

現れた大型犬。ボクサーと呼ばれた犬は、何とも気の抜けた鳴き声を挙げながら、仙齋を押し倒した。

その光景に、雪菜はどうしたらいいのか分からず、ワタワタとしていて、明久は
(ここ、ペット可なのかあ……凄いなあ……)

と少し、的外れな事を考えていた。

要は、思考が追い付いていないのだ。

そして、私服に着替えた浅葱はボクサーがじやれついでる仙齋を無視して

「来て、二人とも。調べるから」

と明久と雪菜を手招きした。呼ばれた二人は、まだボクサーに抑えられている仙齋の横を通って、浅葱の部屋に向かおうとした。そして、明久が仙齋の横を通った時

「浅葱を頼むよ」

という声が聞こえた。

情報収集

浅葱の部屋は、浅葱らしい飾り立てつつもシンプルな部屋だった。ただ異色なのが、机の上の幾つものモニターだった。

浅葱は、その内の幾つかを点けて

「それじゃあ、本土に着いてからの跡を追うわね……モグワイ！」
と相棒を呼んだ。

すると、モニターのひとつの隅っこにあのアバターが姿を現し

『よう、嬢ちゃん。新年明けましておめでとさん。おっと、彼氏（予定）さんとライバルの嬢ちゃんを呼んで、3Pでもやる気か？』

いきなり、猥談をぶち込んできた。そんなモグワイに、浅葱は
「新年早々、ぶっ飛んでじゃないわよ。初期化するわよ？」

割かし容赦なく、そんな言葉を投げ掛けた。

『おっと、そりゃ勘弁だ。話は聞いてたぜ？ そっちの妹さんと親父さんの跡を追うんだったな』

「そうよ。だから、さっさとやるわよ」

『あいよ』

そこで会話を終わらせると、浅葱は素早くキーボードを叩き始めた。そして、一分と経たない内に

「よし、見つけたわ……飛行機は、予定通りに本土に到着してるわね……その後は……レンタカー店に寄ってるわ……偽名で借りてるわね」

『ちなみに、名前は冴羽遼だな』

「何で偽名。どこの掃除屋だ」

偽名で車を借りた父親に、明久は思わず突っ込みを入れた。しかも、女にだらしない所が同じだから、複雑な気分であった。

「その後は……ネズミ園に行ってるわね」

「何故真っ直ぐ行かなかったのか」

恐らくは、まともに帰ってこれないから、その代わりに家族サービスかもしれないが、さっさと行けと言いたかった。

『んで、その後は近場のホテルに泊まってるが……ストリップショー見てるぞ』

「母さんにリークしてやる……」

モグワイの告げた内容に、明久は深森に牙城の所業を告げ口することを誓った。

「そして翌日は……新宿で買い物してるわね……女の子用の服とか……風沙ちゃん用みたいね」

「だから、早く行けと……」

牙城と風沙は、本土に渡って一日経っても本来の目的地に到着していない。

「えっと、夕方位まで買い物したり食事をしてから……あ、高速に行つたわね……神縄湖方面よ」

「漸くかい」

丸一日と数時間経って、漸く牙城と風沙は本来の目的地。神縄湖方面に向かった。

「ん、待って……なんか、おかしいわ」

その違和感に最初に気付いたのは、浅葱だった。

「何がおかしいんですか、藍羽先輩？」

「……これ、年末なのに、高速がいやに空いてない？」

雪菜が首を傾げていると、モニターを見ていた明久が二人が乗った車がスイスイと走っていることを指摘した。

すると、浅葱も頷き

「幾ら何でも、これは不自然過ぎる……」

と言つて、再びキーボードを叩き始めた。それから少しすると、ひとつのモニターに

情報を表示させて

「これだわ。神繩湖方面に、規制が張られてることになってる」

とある一文を指差した。確かにそこには、《神繩湖方面、規制中》と表示されている。「だったら、父さん達も検問で止められてる筈……まさか、人払い？」

「つばいわね……自衛隊の攻魔大隊が出勤してる……出勤理由は、魔導災害発生ってことになってるけど……その依頼人は……陰陽公社って所」

「陰陽公社!？」

浅葱が告げた名前を聞いて、雪菜は思わず声を挙げた。

「雪菜ちゃん?」

「陰陽公社というのは……獅子王機関のダミーカンパニーのひとつです……」

明久が顔を向けると、雪菜は声を震わせながらそう告げた。つまりは、獅子王機関が関わっているということになる。そして、責任感が強い雪菜のことだから、凧沙の行方知れずに獅子王機関が関わっているとしたら、自責の念を抱いているだろう。と明久は予想し、そんな雪菜の頭を撫でて

「大丈夫、雪菜ちゃんのせいじゃないから」

と励ますが、雪菜の表情は固いままだった。しかし、無理ないかもしれない。雪菜にとつて、獅子王機関は幼かった自分を育て上げ、更には生きる術を色々と教えてくれた

所だ。しかし、その獅子王機関が監視対象の家族であり、自分の友達を巻き込んだ作戦を始めようとしている。

気にならない訳がなかった。

そして、少しすると

「ん、これだわ」

と浅葱が、少し大きめのモニターにあの写真と同じらしい魔法陣を表示させた。

それを見た明久は

「……この魔法陣、煌坂さんのやつに似てない？」

と指摘した。

「確かに似てますが……しかし沙矢華さんは、主に国外案件が担当です……国内では、考えにくいですが……」

「……だったらさ、量産型ってのはある？ あの弓だけの奴とか」

明久のその言葉に、雪菜は唸りながら

「確かに、そういう話もありましたが……そもそも、沙矢華さんの六式は非常に扱いが難しいために、沙矢華しか扱える人が居なかつたんです。ですから、それを量産型にするとは言っても、相当扱える人は少ない筈です……」

と答えた。つまりは、雪菜が知らないだけで、造られてる可能性は高いということに

なる。

そう考えると、色々と辻褄が合うのだ。

そう考えた明久は、頭をガシガシと掻いてから小さく

「これは、面倒事な気配がピンピンするなあ……」

と呟き、更なる情報収集を始めた浅葱を見たのだった。

暗雲

「……はあ」

高く上った太陽を見ながら、明久は深々とため息を吐いた。今明久は、藍羽家の廊下のベンチに座っていた。つまり、泊まったのだ。

泊まった理由は、雪菜が意識を失ってしまったからだ。浅葱の部屋で風沙に関する情報を集めていた際に、雪菜が所属している組織。獅子王機関が関与していることが分かった。それを知った雪菜は、酷く狼狽していた。

別に、雪菜自身が直接的に手伝った訳ではない。

しかし、外部に初めて出来た同年代の友人が、自分が所属する組織が理由で危機的事態に巻き込まれた。

その事実が、雪菜を打ち据えた。

明久は雪菜が原因ではないと慰めたが、事実は変わらなず、それが責任感が強く生真面目な雪菜に重くのし掛かった。

情報を聞いていた明久は、途中から雪菜が異様に静かになったことに気付き、大丈夫

か聞こうと顔を横に向けた。そのタイミングで、雪菜が後ろに倒れ始めたのだ。

それを明久は、完全に倒れる前に間一髪で受け止めた。

その後、浅葱の奨めもあつて泊まることにしたのだ。

しかし、客室はひとつだけしかなく、それに伴つてベッドもひとつだけ。流石に同じ部屋に寝る訳にはいかず、明久は居間のソファで寝ることにして、座布団を枕代わりにし、タオルケットを借りて寝た。

「さて、どうするか……」

今後の行動も含めて、明久は眩きを溢した。そこに、着流しを着た仙齋が現れて

「おはよう、明久君。連れの子は大丈夫かい？」

と明久に問い掛けた。

「おはようございます、仙齋さん。少し前に、様子を見てきました。多分、そろそろ目覚める筈です」

「そうか……」

明久の言葉に頷いた仙齋は、明久の隣に座った。そして、少し間を置いてから

「この後は、どうするんだい？」

と問い掛けてきた。仙齋も、それなりに情報網を持っている。その情報網で、現状を把握しているようだ。

「……明確には決まっています……ですが……」

「……後悔だけはしないようにしなさい……私から言えるのは、それだけだ……」

仙齋はそう言つて、居間の方に歩いていった。それを見送つた明久は、暫く黙考した。それから数十分後、雪菜が目覚めて、仙齋の薦めで車で送ってもらえることになった。明久と雪菜は、董が運転する車に乗り、何時も通る道まで来た。その時

「すいません、ここで下ろしてください」

と雪菜が突然言つた。董がミラー越しに見ると、雪菜は

「ちよつと、買い物をするかと思ひまして……この近くのスーパーに行きたいんです」と説明した。確かに、季節を考えると買うタイミングではある。董は少し考えた後、車を路肩に停めて

「では、後ろを開けますね」

と後ろのドアを開けた。先に明久が降り、雪菜が後で降りた。すると、董が顔を出して

「では、私はこれで」

「ありがとうございますました」

明久が感謝の言葉を言うのと、車は去つていった。それを見送つた明久は

「で、雪菜ちゃん。買い物つて、なにを……」

明久が問い掛けた直後、雪菜は一目散に駆け出した。

「ちよつ!? 待つて!？」

明久は慌てて雪菜を追いかけ始めた。その間も明久は何度か雪菜を呼ぶが、雪菜は止まる処か振り向きもせずには走って行く。最初は行き先が分からなかった明久だが、途中で雪菜の目的地が分かった。

(この先は確か……ホテル街だ)

雪菜の目的地は、ホテル街。正確には、その一ヶ所にある獅子王機関の出張所だった。それを肯定するように、雪菜はある場所で立ち止まり、人指し指と中指を立てて、小さく呟いた。だが、変化は無い。

すると雪菜は、齒噛みして

「結界の解除術式が変更されてる……一切の連絡も無しに……だったら!」

ケースから、素早く雪霞狼を展開し一閃した。すると、空間が歪んで、あの古物店風の建物が姿を現した。

「雪菜ちゃん! 流石に強引過ぎるよ! 結界を切り裂くだなんて!？」

「離してください、先輩! 今回の風沙ちゃんの件、獅子王機関が深く関わっているのは確実です! 師家様に伺わないと!？」

明久が肩を掴んで止めると、雪菜は明久の手を振り払って、そう返答した。その目に

は、強い覚悟が見てとれる。しかし

「だけどそれは、獅子王機関を裏切ることになるかもしれないんだよ!? 下手したら、煌坂さんと戦うことになるかもしれないんだよ!」

明久は最悪の想定のひとつを挙げた。

紗矢華の強さは、明久と雪菜はよく知っている。紗矢華は雪菜を溺愛しているが、組織からの命令となったら、戦うことも十二分にあり得るだろう。

明久の言葉を聞いて、雪菜は俯き

「ですが、このままでは……」

と呟いた。それほどまでに、風沙を心配しているというのは、明久からしたら嬉しいことだ。しかし、だからといって仲間に刃を向かせる訳にはいかない。

「とりあえず、今は離れよう。この中に、人の気配は無いし……それに、人が集まってきた。あの結界、人払いと認識障害の結界だったんでしょ?」

明久の言葉で、雪菜は近くに人が集まってきていることに気付いた。それに、冷静になり感覚を向けてみれば、確かに出張所の中に人の気配は無い。

あの黒猫は式神だから違うが、四六時中その式神に意識を移している訳ではないのは、少し考えれば分かるだろう。だから、今はこれ以上居ても意味は無い。

「……分かりました……」

「よし、急いで離れよう。もしかしたら、警備隊が来るかもしれないしね」

明久の言葉に従い、雪菜は雪霞狼を収納すると、一旦その場を離れ、明久の自宅に向かったのだった。

準備

獅子王機関の派出所から離れた明久と雪菜は、一旦帰宅。食事をして、落ち着くことにした。そして食事が終わると、明久は風沙の部屋に入り

「さて……風沙のここだから……ここかな」

と風沙の勉強机の裏に、手を伸ばした。そして、少しすると

「あった」

明久が取ったのは、ひとつの鍵。それを見た明久は、ぐるりと風沙の部屋を見回して「……あれかな？」

と言つて、タンスの鍵穴に鍵を差し込んで回した。するとカチリという、解錠の音が聞こえた。それを聞いた明久は、引き出しを開けると

「いや、この中かい……」

その中には、下着が詰められていた。明久も洗濯物を折り畳んでは仕舞うので、風沙が下着を入れる場所は知っているが

「……増えすぎでしょ……しかも、このチョイス……バカ親父か……今度から、エロ親

父って呼んでやる……」

その下着は、かなり過激な物ばかりだった。透けていたり、小さかったりと。

「あのエロ親父……実の娘に、どんな下着を送ってるんだよ……」

恐らく、鍵付きの引き出しに仕舞ったのは、恥ずかしかつたからだろう。風沙は、かなり純心である。以前のラブレター騒動（実際は猫の相談）の時も、顔を赤くしていた程だ。

「……母さんにバレたら、母さん何を仕出かすやら……」

明久はそう呟きながら、その引き出しの奥の方に手を突っ込み、目的の物の掴んだので、引っ張り出した。

それは、二冊の通帳だ。名義は、風沙と明久になっている。

明久は数学が苦手で、家計簿等がどうしてもズレが生じてしまう。そこで、数学が得意な風沙が家計簿だけでなく明久のお小遣いも管理することにしたのだ。

明久と風沙のお小遣いは、母親が月一で振り込んでいる。

明久も自分のお金の管理が杜撰なのは自覚していたので、お小遣いの管理は風沙に一任することにした。

だが、今は緊急事態として取り出したのだ。

明久は通帳を開き、残額を確認。

「うん……これなら、大丈夫だね……というか、母さん。お小遣い増額したの？ あー……そういうえば、研究成果が認められて、給料が増えたって言ってたな……そこからか」
 明久はそう言つて、通帳に挟まっていたキャッシュカードを取り出して、自分の財布に入れた。その時

「先輩……何をしてるんですか……？」

「わーお……タイミング悪う……」

背後から聞こえた雪菜の低い声に、明久は天井を見上げた。後ろを見てみれば、そこには冷たい目を向けてくる雪菜の姿があつた。

「……先輩……何か、言い残すなら聞きますが……？」

「即死刑!? 待つて!? 話を聞いて、裁判長!？」
雪菜ちゃん

「誰が裁判長ですか」

雪菜は怒気を揺らめかせながら、ゆっくりと雪霞狼を取り出した。それを見た明久は、思わず雪菜の前で正座した。そして雪菜は、開きっぱなしの引き出しを見て

「……先ほど、その引き出しに手を入れてましたが……随分と過激な下着が入ってますね?」

「その下着に関して、僕は一切知りません。恐らく、エロ親父が犯人です」

雪菜の問いかけに、明久は素直に答えた。それを聞いた雪菜は、明久に視線を向けて

「それで、何を取り出したんですか?」

「通帳とキャッシュカードです」

明久の返答を聞いた雪菜は、片眉をピクリと動かした。

「何故、通帳とキャッシュカードを……先輩、まさか……」

「……多分、雪菜ちゃんが考えてる通りになるかな?」

明久がそう言った直後、雪菜は明久の肩を掴み

「一人で本土に渡るつもりだったんですね!? 何故ですか!?!」

「今、雪菜ちゃんと一緒に行くことは出来ないと思ったからだよ……今回の件は、獅子王機関が関わってる。下手したら、雪菜ちゃんが裏切り者扱いされる」

「だからと言って、先輩を一人で行かせられる訳が無いじゃありませんか!?! 忘れたんですか!?! 獅子王機関は、魔導災害対策機関なんです! 対魔族装備は、警備隊の比で

はありません! 先輩が、殺される可能性だつて!?!」

「だからって、雪菜ちゃんを連れていったら、最悪仲間から殺されるかもしれないし……雪菜ちゃんに、仲間を攻撃させるなんて出来ない」

明久のその言葉に、雪菜は声を詰まらせた。はつきり言って、雪菜のコミュニケーション能力は、お世辞にも高いとは言えない。しかしそんな雪菜でも、獅子王機関に知り合いは多数居る。その人達と戦うというのは、確かに生半可な覚悟では出来ない。

しかし

「それでも、先輩を一人で死地たる本土には行かせられません！ 私は、先輩の監視役ですから!!」

雪菜の覚悟の籠ったその言葉に、明久は雪菜を止められないと悟った。だから明久は、タメ息混じりに

「わかった……それじゃあ、本土に行く準備をしようか……絃神島じゃ使わない、冬服とか」

「そうですね」

明久の提案に、雪菜は頷いた。常時常夏の絃神島では分かりにくいのが、今の季節は冬である。夏服で行ったら、凍えてしまう。

だから明久は、物置から冬服を取り出しに向かった。

逃走開始

物置から冬服を取り出し、更に少し大きめのボストンバッグを出した明久は、冬服を仕舞っていく。雪菜も少し大きめのリュックに学園の冬服と本土に居た頃の冬服を詰めていく。

(冬服自体を見るの、久しぶりだなあ)

明久はそう思いながら、冬服を詰めた。そして、準備を終えると家を出た。しかし行き先は、空港や港の方向ではなかった。すると雪菜が、それを不思議に思ったらしく

「先輩、一体何処に向かっているんですか……う？」

と明久に問い掛けてきた。すると明久は

「ほら、僕って未登録魔族でしょ？ だから普通に空港や港に行っても乗れないんだ……だから、外に出してもらおうように頼みに行くんだよ」

「誰にですか？」

「那月ちゃん」

雪菜の問い掛けに、明久はそう答えた。そして、モノレールに乗って十数分。明久は、

那月が住んでるマンションに到着すると、慣れた様子で入り口のセキュリティを操作し「吉井明久です、那月ちゃん、居る?」

と問い掛けた。すると、返事は無かったがドアの鍵が開いた。

「ん? 返事は無かったけど……」

明久は不思議そうにしながらも、ドアを潜って奥のエレベーターに乗った。そして目的の階で降りて、ドアの呼び鈴を鳴らした。すると、ドアが開き

「入ってください」

とアスタルテが入室を促してきた。明久と雪菜は入ると

「アスタルテちゃん、那月ちゃんは居ないの?」

と問い掛け、アスタルテがそれに答えようとした。その直後、周囲の空間が歪み、周囲に物々しい装備の警備隊が10人程。そして、那月と西村が現れた。

「……これは、つまり……」

「察しがいいな、吉井」

「お前を島の外に出す訳には、いかないんだよ……吉井兄……」

二人の気配から気付いた明久が身構えると、西村と那月が構えた。どうやら西村と那月の二人は、人工島管理公社から命令を受けたのか、明久の島の外に行くのを妨害するようだ。

「先輩……」

「ダメだよ、雪菜ちゃん……この二人相手に、いくら雪菜ちゃんでも勝ち目は無いに等しいよ」

雪菜が雪霞狼に手を伸ばそうとしたが、それを明久が制止した。二人の実力は明久もよく知っており、いくら雪菜が強かろうが、規格外と言つてもいい二人と戦い、行動可能な範囲で島の外に出るのは絶望的と言つても過言ではなかった。しかも周囲には、手練れらしい警備隊も10人近く居る。

（絶対的不利つてやつだ……どうする……）

明久がそう考え始めた直後

「那月よ……それは幾らなんでも、大人気ないというものではないか?」

と声が聞こえ、那月が周囲に巡らせていたレーシングが溶けるように形を替えた。

「なに!?!」

「錬金術だ?!? まさか!?!」

西村と那月が驚きの声を上げた直後、再び空間が揺れて明久と雪菜の前に新たに三人現れた。

「優麻、夏音ちゃん、ニーナ!?!」

現れた三人を見て、明久は驚いた。その三人は、那月の下で監視保護となっている三

人だった。更に

「エクスキュート 薔薇の指先」
ロドダクテユロス

眷獸を展開したアスタルテが、明久達に銃口を向けていた警備隊達を吹き飛ばした。

「お前達……」

「どういふつもりだ……」

「なに、これも大人の務めというやつよ……家族の為に頑張る若人を、進ませるといふものだ」

西村と那月の問い掛けに、ニーナが余裕綽々という風体で答えた。すると、優麻が「明久、ここはボク達が時間を稼ぐ……行きなよ」

と言つて、指を鳴らした。すると、優麻の背後にあの青い騎士が姿を現して、剣を抜いた。どうやら、空間魔術を使って明久達を逃がすつものようだ。

「使わせると……!!」

「させると思ふか？」

それを見抜いた那月は、即座に妨害しようとした。だがそこに、ニーナが錬金術で作った針を那月に飛ばして妨害。更には、動こうとした西村をアスタルテが殴り飛ばした。その隙に、青い騎士は剣を振るい、空間を切り裂いた。

「行つて、明久!」

「行つてくださいでした、お兄さん！」

「行け、第四真祖よ！」

三人の言葉を聞いた明久は、後ろ髪を引かれる思いだったが

「ありがとう、皆！」

と言つて、雪菜と一緒に空間の裂け目に飛び込んだ。

そして気付けば、海岸沿いの道路に立っていた。素早く周囲を見回すと、明久は

「ここは……空港に繋がる道路だ！」

と直ぐに、現在地を割り出した。

「先輩、これからどうすれば……」

「どうするか……」

雪菜の問い掛けに、明久が考え始めた。その時、後ろから一台の白いバンが明久達の

横に止まり

「乗りなさい、吉井明久、姫終雪菜」

中からドアを開けて、かつて敵対した太史局六刃神官。妃崎霧葉が、二人に車に乗る

ように促してきた。

「な……妃崎霧葉!?!」

「なぜ!?!」

「いいから、早く乗りなさい。本土に行きたいのでしょうか？ 手助けしてあげるわ」

明久と雪菜の二人は驚くが、霧葉は再度車に乗るように促してきた。確かに、今はどんな手段だろうが本土に渡りたい。ならば、使わない手はない。

そう判断した明久は

「わかった、今は乗ってやる」

と言って、雪菜の手を引いて車に乗り込んだ。それを見た霧葉は、ドアを閉めて

「出しなさい、行き先は空港よ」

と運転席に乗っている運転手、に見える式紙に指示を下した。その指示を受けて、車はスルスルと走り始めた。

それを確認した明久は、霧葉を睨み

「どういうつもりだ、妃崎さん……何が狙いだ？」

と問い詰めた。すると霧葉はふてぶてしい態度で

「簡単よ……私達太史局は、獅子王機関の作戦を失敗させたいだけよ……神縄湖……ここに、獅子王機関三聖が指揮官として自衛隊の攻魔第1大隊が展開してるわ……展開目的は、魔導災害に対処するためとなっているけれど、それは表向き……どうやら、聖織に関する何かを呼び起こす気のように……」

「神縄湖!?! あの人工湖には、古代の遺跡を隠すために作られたと聞きましたが……本

当たったんですね……」

霧葉の説明を聞いた雪菜は、何処か納得した様子で頷いた。神繩湖、神緒多神社の裏手に広がる国内でも大きい人工湖だ。表向きはダムのために作られたとなっているが、実際は聖熾の遺跡を封印するために作られた。

「あ、そうそう……これ、貴方達の偽造身分証よ」

霧葉はそう言いながら、明久と雪菜の前に二冊の身分証を投げた。それを見た二人は、顔を真っ赤にして

『なんで、夫婦になつてるの!?!』

と同時に声を上げた。すると霧葉は、ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべ

「その方が、二人で居る理由が簡単でしょう? 他に、何かいい方法があるかしら?」

と二人に返した。そう言われた二人は、返す言葉を失った。何せ、那月の手伝いが使えない時点で本土に渡る方法は一切無かった。

つまり、霧葉の方法に頼るしかないのだ。その時、雪菜が車の外を見て

「異様な呪力です!」

と声を上げた。その瞬間、気が付いたら車が宙を飛んでいた。そう思った瞬間、明久は刀を抜刀。車のドア部分を切り裂いて、雪菜を脇に抱えるようにして跳んだ。それに僅かに遅れて、霧葉も車から脱出。三人は砂浜に着地した。

「なんだ、今の!?!」まるで、時間が跳んだみたいに!?!」

明久には呪力が高ぶったと同時に、車に攻撃が当たり飛ばされたようにしか感じなかった。そんなこと、理論上はあり得ない。

それこそ、時間が跳んだとしか説明が付かない程に。

すると雪菜は、顔を蒼白にしながら

「ま、まさか……!?!」

と砂浜に立つ四人目を見た。その格好は、巫女のような服装で、顔立ちはそこら辺に居そうなく、一般的な女子のそれ。しかし、その気配を雪菜は知っていた。

「獅子王機関三聖……閑古詠様……!?!」

「姫柊雪菜……これは、明確な裏切り行為になりますよ……!?!」

獅子王機関だけでなく、日本国内でも最強の術者と名高い三聖の人。閑古詠だった。

対閑古詠

「まさか、獅子王機関の三聖が動くなんてね……予想外にも程があるわ……」

「そういう貴女は、太史局の六刃神官ですか……まさか、第四真祖の手伝いをするとは予想してませんでした……まあ、大丈夫でしょう」

閑古詠は一度妃崎霧葉を見たが、気負いした様子もなく視線を明久と雪菜に向けた。そして雪菜は、閑古詠の前にガタガタと震えていた。接近戦ならば非常に高い戦闘能力を有する雪菜だが、自分が所属する組織のトップの一人にして、世界でもトップクラスの術師たる閑古詠を相手にするのは絶望的だった。

「再び問います、姫柊雪菜……今貴女がやろうとしているのは、組織に対する反逆行為では？」

「あ、わ、私は……」

「雪菜ちゃんは、僕の監視者として僕に着いてくるだけだ……別に、命令違反ではない筈だよ？」

雪菜が言い澀んでいる間に、一步前に出た明久がそう答えた。確かに、雪菜に下され

た最大命令は、第四真祖たる明久の監視に他ならない。そして今は、それ以外の命令は、一切受けていない。

つまり、明久の監視のために明久と一緒に本土に渡るのは、なんら命令違反ではないのだ。

「……なるほど、確かに一理ありますね……」

「せ、先輩……!」

「大丈夫……僕に任せて……」

そう言つて、明久は一步前に出た。それに合わせるように、霧葉も前に出ながら槍リチエルカーレ乙式降魔槍を構えた。

リチエルカーレは太史局が作った対魔装備で、本人が使えない魔術を充填し、使用することが出来るのだ。

ブルエリの時は、精神操作の魔術を使って沙矢華を操っていた。

今は何を充填しているか分からないが、強力な装備であることは変わらない。そして霧葉は、好戦的な光を瞳に宿しながら駆け出した。その直後、気付けば霧葉の背後に閑古詠が居た。

「なっ……!?!」

「がっ……」

本当に、一瞬としか言えなかった。一瞬で、雪菜と同等クラスの霧葉が敗北し、倒れ付した。

「まただ！　また、時間が跳んだ!？」

明久は驚きながらも、刀。安綱を構えた。閑古詠相手に、生半可な刀では意味が無いと判断したのだ。それに触発されたように、雪菜も雪霞狼を構えていた。

「後は、あなた達だけですよ……」

「そうか……貴女が、父さんの言ってた静寂破りか……ペーパードライズ……」

明久がその名前を言うと、閑古詠みの眉がピクリと動いた。静寂破り、それが閑古詠の二つ名だった。獅子王機関の三聖の一人としての二つ名。

「……死都帰りの吉井牙城……それに、連牙の吉井明久……親子揃って、高い戦闘能力を有する……貴方の父親には、こちらの降魔官もてこずったという報告が上がってます」

(あのエロ親父は、本当に何処で何をやってるんだか……)

閑古詠の話聞いて、明久はそう思った。

そして、雪菜は

「閑古詠様……そこまでして、先輩を本土に行かせたくないのですか……?」

「そうです……今、本土で行っている秘匿作戦……それに、彼は最大限のイレギュラーになります……ですから、ここで足止め……最悪は、滅ぼします」

雪菜の問い掛けに答えると、閑古詠は更に呪力を高めた。その呪力の高さに、空気が震える。

そして雪菜は、一気に駆け出した。雪菜の雪霞狼は確かに対魔族用装備だが、同時に対魔法装備でもある。

並の術師相手ならば、十分に優位に立てる程だ。

しかも雪菜は、近い未来を視ることを可能とする霊視もあり、近接戦闘では比類なき戦闘能力を得ている。

例え実力のある術師でも、雪菜に勝つのはかなり難しいのだ。だが

「……甘いですよ……無策で、私に勝てるど？」

閑古詠は、その上を行く。

気付けば、雪菜は倒れ付していて、閑古詠の手に雪霞狼が有った。

「な……あつ……」

雪菜は何をされたのか分からないのと、ダメージで動けなくなっていた。そして閑古詠は、雪霞狼を軽く回して

「……やはり、貴女を選んで正解でしたね……ここまで受け入れられている……私が、軽く拒絶される程に」

と呟き、明久を見た。

(……時間が跳んだような感覚……まるで、相手だけが動いている……時間を止めてる？) けど、だったら那月ちゃんの空間魔術と相性最悪で、この島では使いにくい筈だ……固有技能……まさか)

「……時間の差し込み？」

明久の言葉に、閑古詠は体をピクリと震わせた。

「貴女の能力は、過応適応者に近い時間制御……それも、任意の時間差し込み……それなら、色々と説明が着く」

「……中々の洞察力ですね……流石は二つ名持ち、ということですか」

閑古詠は明久の洞察力に感心した様子で頷きながら、雪霞狼を構えた。その直後、砂浜の一ヶ所で爆発が起きた。

「な、なんだ!？」

明久が驚いていると、海の方から

「第四真祖様——！ お手伝いしまーす！」

と声が届く。視線を向けると、大きめのモーターボートに乗ったオシアナスガールズの姿があった。その内の一人が、両手でロケットランチャーを持っている。どうやら先ほどの爆発は、ロケット弾を撃つたらしい。

「雪菜ちゃん達に当てないようにして！」

砂浜には、未だに気絶してる霧葉とダメージで動けなくなっている雪菜が倒れてい
る。

その時、明久はあの感覚を覚え、ある眷獣を選択した。

その直後、明久の眼前に閑古詠が居て、閑古詠は雪霞狼を突き出してきた。

明久はそれを右手を盾にして受け止めたが、容易く貫通して体に刺さった。

だが同時に、明久は自身目掛けて獅子の黄金を降らせた。

自爆覚悟のカウンター、それが閑古詠に対する明久が取れる唯一の戦略だった。

砂浜に落雷が降り注ぎ、大轟音が鳴り響いた。

本土へ

「う、あ……あ？」

目覚めた明久が最初に見たのは、見慣れぬ木製らしい濃い茶色の天井だった。

「ここは……」

「あら、起きたようね……」

「あ……？」

耳元で意外な声が聞こえ、明久は右側に顔を向けた。すると真横に、何故か霧葉が寝転がっていた。

「……………ホワツツ？」

「貴方、発音は見事ね……英語塾でも通ってた？」

明久が困惑していると、霧葉は明久の英語の発音を褒めた。発音が良いのは、二人の教師の扱きの賜物である。

「それにしても、貴方……寝相の手癖は悪いのね……」

「……………」

再び明久が困惑すると、霧葉は浴衣を着直して

「私の体……まさぐつてたわよ?」

何処か妖艶な雰囲気を漂わせながら、そんなことを告げた。それを聞いた明久は、ビシリツと音を立てるように固まった。

霧葉だが、沙矢華や浅葱よりかは控えめだが、スタイルは抜群である。出る所は出て、引つ込むべき所は引つ込んでいる。

寝ている間とはいえ、そんな霧葉をまさぐつたと思つた明久は身悶えていた。

その時、襖が開いて

「妃崎さん。先輩の部屋には入らないで下さいと、何度も……先輩! 目覚めたんですね!」

入ってきた雪菜が、明久が起きたことに驚いた。

そして雪菜は、明久の隣に近寄り

「大丈夫ですか、先輩! 何か異常は!」

と捲し立てるように問い掛けながら、明久の浴衣を脱がそうとした。

「待つて待つて、雪菜ちゃん! 落ち着いて! 脱がさないで!」

まさか脱がされそうになるとは思わず、明久は慌てて雪菜を制止した。すると雪菜は、顔を真っ赤にして

「す、すいません……取り乱しました……」

と謝罪して、離れた。そして雪菜は、明久に

「それで先輩……再度聞きますが、体に異常はありませんか？ 先輩は、まる2日は眠っていたんです」

「2日も!？」

明久からしたら、衝撃的な事を告げた。それに驚いた明久だったが、それより気になったことが有ったので、聞くことにした。

「それより雪菜ちゃん……ここは……」

「お目覚めですかー! 第四真祖様!!」

雪菜が答えようとした時、襖がスパーンと開いてオシアナスガールズが突入してきた。

「え、オシアナスガールズ!? まさか、ヴァトラーの船?」

明久が驚いていると、雪菜が首を振って

「いえ……確かにアルデアル公の船は乗りましたが私達が居るのは……日本本土、草津です」

そう言いながら、カーテンを開けた。

窓から見えたのは、確かにテレビでよく見るあの湯煙の光景だった。

「草津……なんで草津？」

「それは、私達の休暇も兼ねてます！」

明久が首を傾げると、オシアナスガールズの一人がビシリツと拳手した。話を聞くと、どうやらオシアナスガールズは一応ヴァトラーのメイドとして働いているらしい。以前までは戦王領域のアルデル領に居たために、定期的に自分達の故郷に帰っていた。

しかし、日本からでは中々帰れない。そこで考えたのは、行きたかった日本観光地巡りだった。

その矢先に、明久達の日本本土に行くという情報。

それも、行き先の一つの草津間近の神繩湖。ならば、協力しよう。それが、オシアナスガールズの考えだという。

「……協力してくれるのはありがたいけど……休暇はいいの？」

「大丈夫です！ 多少超えても、ヴァトラー様は許してくれますから」

「休暇日数の概念はどこに行った？」

思わず、明久は突っ込んでいた。

こう言つてはなんだが、ヴァトラーは戦闘^{バトルジャンキー}狂で二刀流(嫌な意味で)だが、仕事はきつちりとこなすらしい。

これは、沙矢華から聞いた話だが、外交官としてのヴァトラーは普段とは打って変わって真面目なのだとか。

それを聞いた明久は一度疑ったが、沙矢華も最初は信じられなかったが、事実なのか。

そしてその真面目さは、部下への慰労にも向けられているようで、最低でも月一の休暇日と不定期だが週2日の休み。申請すれば、長期の休みも受け付けられるという。

「……信じられねえ……」

「私も同じ気持ちです……」

明久の呟きに、雪菜は苦い表情を浮かべながら同意した。そして明久は、思い出したように

「あれ、僕の荷物は……」

「あ、それならば一度洗濯しまして……こちらに」

明久の呟きを聞いて、雪菜が部屋の隅から明久のボストンバッグを手繰り寄せた。「海に落ちてしまいました、私達が皆さんと一緒に回収しました」

どうやら、明久の自爆覚悟のカウンターは一応功を奏したらしい。話によれば、閑古詠は落雷の余波で負傷し撤退したようで、その際に雪霞狼も回収したようだ。

しかし、海水に浸ったために一度洗濯したとのこと。

「でその後は、約一日掛けて本土に到着し、一日宿泊してたつてことか……」

「はい。式紙を飛ばしまして、まだ神繩湖の方では動きは感知されませんが……自衛隊が何らかの準備をしているのは確認出来ました」

雪菜がそこまで言ったタイミングで、明久のお腹が鳴った。考えてみれば、二日間も何も食べてないので、仕方ないことだろう。

「ちようどお昼ですし、先にご飯にしましょうか……」

「そうだね……絞まらなくてごめん……」

そして一行は、お昼が出される食堂に向かった。

実はこの時、絃神島で浅葱の大脱出劇が繰り広げられ、浅葱はリディアーヌと共に本土に向かっていたりするのだが、明久は知らない。

咎神の騎士編

把握

食事が終わった明久は、女将さんの薦めもあつて露天風呂に入浴していた。流石は有名な湯の街なだけあり、その光景は凄いの一言だった。

しかし明久は、それよりも気になることがあつた。

明久は濁り湯から右手を出して、ジツと見つめた。そして、僅かに靈力を回した時、手の甲に幾何学的な模様が浮かんだ。

その模様には、明久は見覚えがあつた。その模様は、雪菜の使う雪霞狼の神格振動波の模様だった。

「……右手に感覚が無いの、これが理由だよね……」

明久がそれに気付いたのは、起きてすぐだった。最初は、寝ていた際に右手を下にしていて、痺れたのか、と思っていた。

しかし、どんなに時間が経つても感覚は戻らなかつた。何が理由か分からず、明久は自身の回復の促進を図るために靈力を回した。その時、手の甲に神格振動波の模様が浮

かび上がってききたのだ。

「……ベーパーノイズ静寂破りが、僕の封印を考えてて、失敗したのか……う？」

「それは分からないわね」

「ぶげほっ!？」

真横から聞こえた声に、明久は驚いて思わず頭を石に打ちながら

「なんでここに居るんでせうかー!？」

と霧葉を見た。

「何故って、温泉に入りに来たのよ。何を当たり前のことを」

「こっちは男湯!？」

明久の問い掛けに、霧葉は普通にしながら温泉に浸かっていた。動揺している明久を

スルーし、霧葉は

「右手、感覚が無いのね……」

「気付かれたか……」

「食事の時、右手の動きがかなり慎重だったからね……その原因は、その模様かしら

……」

「覚えはそれだけだ……あの、雪霞狼での攻撃しか」

そう言って明久は、静寂破りとのたった一度の交戦を思い出した。任意の時間の差し

込みという反則染みた技能を有する、静寂破りとの交戦。明久は静寂破りが雪霞狼で攻撃した直後に、自身諸ともに落雷攻撃をすることで静寂破りを退けることに成功した。

「あの軌道は、完全に心臓を狙っていた……もしかしたらだけど、一時的に僕を封印するつもりだったのか……」

「まあ確かに、それも考えられるし可能かもしれないわね……聞いた通りの能力なら、貴方には効果が高いから……」

確かに、神格振動波はあらゆる霊力・魔力・呪力を無力化する。それを、吸血鬼の心臓に転写したら、暫くの間明久は行動不能になるだろう。

それを考えると、封印が目的と見るのが自然だろう。

「……それを、咄嗟に右手で防いだから、それが右手に転写された……」

「その効果か分からないけれど、右手の感覚が無い……剣士の貴方には、致命的なことね」

確かに、剣士からしたら両手が使えないのは辛いだろう。しかし、使い手の実力によつてはある程度は補える。

その時

「妃崎さん！ 男湯に入るなんて、何を考えてるんですか!?!」

と雪菜が、雪霞狼片手に突入してきた。タオル一枚で。

「槍を片手に突入してきた貴女には言われたくないわね」

確かに、ごもつとも。

「とりあえず、一緒に女湯に行きますよ！」

「あらあら、情熱的ね」

雪菜が霧葉の腕を掴むと、霧葉は一応立ち上がった。だが

「それより、貴女……彼の右手に異常が出てるのは気付いてるのかしら？」

「……本当なんですか、先輩？」

霧葉の言葉に、雪菜は霧葉から手を放して明久を見た。その瞬間、霧葉が素早く雪菜の後ろに回り、タオルをひっぺがした。

「あ……」

「……いやあああああああ!?!」

事態を把握した雪菜は、顔を真っ赤にしながら雪霞狼を思い切り投げ、投げた雪霞狼は明久の顔面に柄がめり込んだ。

それから十数分後、急いできた中居さんを何とかやり過ごし

「それで、先輩……右手の感覚が無いというのは……」

「これが原因だろうね」

雪菜からの問い掛けに、明久は右手を掲げて右手の模様を浮かび上がらせた。それを

見た雪菜は

「それは、神格振動波の……！」

「うん……静寂破りの一撃の時に、転写されたみたい……もしかしたら、僕を封印しようとしたのかもしれない……」

明久の右手に浮かび上がった模様を見て、雪菜は息を飲んだ。そして、ゆっくりと明久の右手に触って

「私が、雪霞狼を奪われたから……」

「いやまあ、あれは仕方ないと思うよ？ 最初から奪うことを考えてたみたいだし……あの場では、雪霞狼が僕に一番効果的な武器だったし……だから、雪菜ちゃんは気にしないでもいいよ」

そう言って明久は、泣きそうな表情の雪菜の頭を撫でた。そして明久は、外を見て（なあんか、嫌な予感がするんだよなあ……）

と思っていた。

実はこの時、浅葱が軍用機で本土に向かってきていて、かなり危険な事態に巻き込まれることを、明久は知らない。

この本土で、聖嬢に関する幕が上がる。

神繩湖へ

「さてと……そろそろ、行くかな……」

明久はそう言いながら、浴衣から着替え始めた。絃神島では分からなかったが、本土は真冬。動きやすいかつ寒さに強い服を着ていく。それは雪菜も同じで、冬服を着ていく。

「先輩、ここから神繩湖辺りは雪が深いそうですから、普通の靴では心許ないのでは……」

「ああ、うん……実は前に、母さんに連れられて社員旅行に行った先がスキー場で……その時に、ブーツを買って、今回持ってきてきたんだ……雪菜ちゃん、このサイズで行けるかな？ 母さんのなんだけど……」

明久はそう言つて、雪菜に一組のブーツを差し出した。それを受け取つた雪菜は、サイズを比べて

「少し大きいですが、大丈夫ですね……」

と言つて、履き始めた。そして明久は、頭を搔いて

「問題は、どうやって神繩湖にまで行くかなあ……」

と呟いた。少し前に見たテレビでは、まだ神繩湖方面への移動規制は続いていた。となれば、公共移動方法は使えないだろう。さて、どうしようか。と明久は唸り始めた。そこに

「ならば、私達がお手伝いしまーす!」

とオシアナス、ガールズが挙手した。

「へ、けど……」

「それに、今は戦力は多いに越したことはないと思いますよ、第四真祖様?」

明久が躊躇っていると、一人がそう言つて車の鍵を掲げた。確かに神繩湖はわりと近いが、それでも徒歩となるとどれほど時間が掛かるか分からない。足が有るのと、戦力が増えるのは魅力的である。

暫く悩んだ明久は、顔を上げて

「お願いしても、いいですか?」

「OKです!」

明久のお願いに、オシアナスガールズは全員がサムズアップした。そして十数分後に、明久達は神繩湖に向かって出発した。なお、霧葉はここで別れた。

何でも、明久達に手を貸したのは霧葉の独断だったらしく、これ以上は流石に危ない

橋を渡る羽目になるようだ。

それから約二時間後、神繩湖の湖畔に祭壇があり、その真ん中に凧沙が寝かされていた。

「さあ、これから始めます……風間三佐、そちらの準備はどうですか？」

「大丈夫です、吉井巫士……隊も既に展開済みです」

凧沙乃の問い掛けに、陸上自衛隊第一降魔大隊指揮官の安座真は頷いた。

第一降魔大隊

陸上自衛隊でも対魔に優れた部隊であり、日本国内で魔導災害や魔導テロが起きた際に即座に出撃していい独立権限が与えられている部隊だ。

凧沙乃はその部隊と協力し、神繩湖の湖底にある聖殲の遺産を利用して、凧沙の中に居る存在。

12番目の第四真祖の魂を排除しようと目論んでいた。

だが、それは間違いだったのだ。儀式がある程度進み、排除しようと術式の詠唱を始めようとした。

その時、凧沙乃の脳裏に

『ダメええええええ!!』

と凧沙の声が聞こえた。その直後、神繩湖一帯で、異変が始まった。

「え、地震……?」

「ち、ババアめ……しくじりやがったな……」

神繩湖だけが大きい地震が起きて、それを座敷牢で感じた詩緒は姿勢を保つために体を低くし、牙城は舌打ちした。

「しくじったって、どういう……な!?!」 牙城、お前は何故牢の外に!?!」

牙城の言葉が気になった詩緒は、牙城の方に顔を向けたが、気付けば牙城が座敷牢の外に出ていた。しかも、両手を拘束していた手錠まで目の前で落ちた。

「な……!?!」

「死都に行つて帰ってきたが、その時から俺はな、体の半分が死都の向こう側に置いてきちまつてな……それ以来、こんな手品紛いの事が出来るようになったのさ!!」

そう言った直後、牙城の両手には長大な銃身の武器。軽機関銃が握られていた。

「死都帰り……そういうことか……!」

死都帰り、牙城の二つ名でもあり、そして同時にある特殊な魔術の名前でもあった。

死都から帰還した牙城だが、未だに体の半分は死都に縛られていて、その場所は巨大な武器庫らしい。牙城はそこに、大量の銃火器を収納。残された体の半分を中継点にして、自由自在に銃の取り出しや収納が出来るようになったのだ。

そして牙城が脇に挟むように軽機関銃を構えた直後、壁を突き破つて見たことのない

魔物が現れた。

見た目は、蜂と蛇が合体したような魔物だった。

「な!？」

「ハッハー!!」

詩緒は驚愕で固まるが、牙城は両手の軽機関銃の一斉射を始めた。詩緒は知らなかったが、M60軽機関銃から放たれる7.62mm弾は、遺憾なくその威力を発揮した。毎分550発という馬鹿げた速度で放たれる弾丸が、壁を突き破って突入してきた魔物を、蜂の巣にしていく。しかし、入ってくる魔物は、一体だけでなかった。次は天井を突き破り、牙城は右手のM60軽機関銃を上に向けて、左手のは壁の方に乱射しながら「ほれ、いつまでも固まってないで、六式改を展開しな！俺一人じゃ、長くは保たないぞ!!」

牙城はそう言って、弾が切れた軽機関銃を放り捨てると、今度は散弾銃を構えた。すると、詩緒はハッとしてから

「言われずとも！六式改、起動!!」

足下の楽器ケースを蹴り開け、更に蹴り上げた六式改を掴むと音声認識入力で六式改を起動させた。詩緒が持つ六式改は、紗矢華の持つ六式の簡易仕様と呼べる兵器で、使い手を選ぶ六式の弓としての機能のみに分離・特化させたものだ。

そして、詩緒の六式改で付近の魔物を殲滅させると、牙城は予備の服を着て、靴を履き

「さてと……娘を探しに行くか……ついでに、ババアは……まあ、あつちは生きてるか……見つけたら、回収してやるか」

と言いながら、外に出た。詩緒も外に出ると、驚愕した。確かに今は冬で、屋根には氷柱が付くこともある。しかし、湖が凍るといふのは予想していなかった。

「一体、何が……」

「盛大に失敗しやがったな、あのババア……さて、凧沙はどこだ？」

「あ、待て！」

凧沙を探すために牙城は行動を始め、そんな牙城を詩緒は追い掛けた。

聖職の遺産を廻り、戦いが始まる。

別行動の一行

神繩湖で異変が起きて、少しした時間の近くの山間。

「ほう……これは変わっているが、中々に美味だな」

「でしよう？ このカップ麺、私の一押しラーメン屋が直々に監修してるのよ。島に着たら、本店に行ってみてほしいわね」

「むう……カップ麺は味噌にしろとあれほど……」

浅葱と戦車乗りことリディアーナは、一人の褐色肌の少年に見える吸血鬼。滅びの王朝の王子の一人、イブリスベール・アズイーズが三人でカップ麺を食べていた。

さて、何故こんなことになっているのか。

それは、今から1日ほど時を遡り絃神島でのことだ。浅葱は本土で何が起こっているのか、更に自分も風沙を助ける助力になるはずと思つて、一人空港に向かい、本土に渡ろうとした。

しかしそこに、何故か警備隊が殺到。浅葱は掴まらないために逃走を開始したが、相手は仮にも軍事訓練を受けた警備隊。足の速さや持久力は、女子高生の浅葱を超えてお

り、更には人数も多かったために、追い込まれた。

そんな浅葱を助けたのが、新型の多脚戦車に乗ったりディアーヌだった。

リディアーヌが絃神島に居るのは、リディアーヌが大の日本好き（特に侍が好き）なのと、彼女の実家にあたるディディエ重工で設計・開発される新型兵器のテスト運用のためである。

実は絃神島の警備隊の一部兵器は、ディディエ重工がデータ収集のために格安で売られた物であり、リディアーヌはそれらのソフト関連の開発とデータ収集を行い、ディディエ重工の専用サーバーに送っているのだ。

そして今回は、リディアーヌが個人的に浅葱を助けてくれたのである。

そして二人は、ディディエ重工が試作した無人機で本土に向かい、神繩湖に向かうという予定だった。

しかし、神繩湖上空に差し掛かった辺りで、無人機が未知の魔物、蜂蛇ほうだに襲われて撃破されてしまい、多脚戦車に念のために装着されていた緊急用ブースターで不時着に成功。

予定外ではあったが、二人は神繩湖に向かうことにした。

その途中で、大量の蜂蛇に包囲されていた（最初は気付かなかったが）イブリスベールを発見し、リディアーヌは、イブリスベールを助けようとした。だが、ここで試作機

の脆さが出てしまった。主砲の火器管制システムがエラーを起こし撃てなかったのだ。リディアーヌはせめて、多脚戦車を盾に守ろうとしたが、その時にイブリスベールが眷獣を召喚し、蜂蛇を一網打尽にして窮地を脱したのだ。そこからは、リディアーヌが火器管制システムの調整をしつつ夜食を取ることにしたので。

しかも、何故か浅葱はイブリスベールに自身のオススメのラーメン屋を教えたりしている。

これもまた、浅葱の恐いもの知らずな性格が理由だろう。

そして浅葱は、カップ麺の容器をゴミ袋に入れつつ（ゴミはその辺に放り捨てず、ちゃんとゴミ箱に捨てるか自宅で処理しましょう）

「けど、あの魔物は何なのかしら？ あんなの、データベースでも見たことないわよ？」と蜂蛇の残骸を見た。浅葱は警備隊のデータベースを時々見ているので、一通りの物の種類と特徴は把握しているが、蜂蛇は初めて見たのだ。

すると、イブリスベールが

「大方、神繩湖に封じられていた聖職の遺産だろう……少し前に、この国の軍隊が動いていたからな」

と自身の推測を告げた。それを聞いて、浅葱は

「自衛隊か……問題は、その自衛隊が張ってるだろう検問よね……」

「女帝殿。その検問でござるが、どうも今は機能不全に陥ってる模様。神繩湖に行くなら、今が好機かと提案するでござる」

「機能不全？ 自衛隊も、さっきの魔物に手を焼いてるってことかしら？」

浅葱は少し考えると、立ち上がり

「よし……一息に神繩湖に行くわよ！ 何か、嫌な予感もするしね！」

と告げた。そして、リディアーヌを見て

「戦車乗り、今度こそ大丈夫よね、その戦車……今度ダメだったら、ポンコツって呼ぶわよ？」

「今調整が終わったところだ。大丈夫かと」

少し自信無さげだったが、リディアーヌはそう言っただけで臨時で増設された客室のドアを開けた。そして、気付いた様子で

「む……この場合は、女帝殿かアズイス殿下に乗ってもらわなきゃ……」

増設された客室は、浅葱が乗ることしか考えてなかったもので、一人しか乗れない。だがそうになると、イブリスボールはどうするべきか、リディアーヌはそう考えていたが「そちらの娘で構わん。どうも、狭い空間は苦手だから……それに……見た目が寒そうだな」

「好きでこんな格好してるわけじゃないんだからね!？」

イブリスベールの最後の言葉に、浅葱は顔を赤くしながら反論した。実は今の浅葱は、水着のような見た目のパイロットスーツを着ているのだ。

一応体温保護機能はあるが、見た目はかなり寒そうである。そうして、奇妙な組み合わせの三人は神縄湖に向かう。

幻想種

「うう……志緒ちゃーん……風沙ちゃーん……何処ー？」

と不安そうな様子で、凍った湖の上を一人歩いているのは、獅子王機関の劍巫羽波唯里である。彼女は今回の儀式の際には、風沙の護衛ということで、風沙が寝かされていた祭壇の端で待機していた。

しかし、気付けば氷原のど真ん中に居て、結構歩いた筈なのに誰にも会わない。

「うう……なんか、嫌な気配がする……」

唯里は、不安そうにしながら周囲を見回し

「漫画だと、こういう時はヒーローとかが助けに来てくれるけど……」

と呟いた。彼女だが、愛読書は少女漫画。年齢は雪菜の一歳年上で、雪菜のことをゆっきーと呼ぶ。

そして実は、雪菜と並んで明久の監視役の選定に選ばれた劍巫候補の一人でもあった。

だがしかし、唯里の雪霞狼への適性が低かったことと、獅子王機関では珍しく両親が

健在という点から、雪菜に決まったという経緯がある。

その後、六式簡易型量産計画の折に正規剣巫に選ばれ、初の大規模任務と張り切つていた矢先に、この事態になった。

情けないやら心細いやらで、唯里は泣きそうになっていた。その時

「つつ!?! 前から、何か来る!?!」

唯里は水蒸気と氷の結晶による煙の先から、何か異様な気配が接近してくるのに気づき、六式剣・改を構えた。その直後、煙を切り裂いて見たこと無い魔獣。蜂蛇が現れ

「つつ! ……へ?」

攻撃しようとした唯里だったが、蜂蛇は何故か唯里を無視して通り過ぎた。しかし唯里は、蜂蛇から感じた気配から

「今の……何かから逃げてた?」

と首を傾げた。魔獣というのは本能で行動し、自分より遥かに強い相手には服従するか、逃走する。唯里は蜂蛇の行動が、それに似ていると思つた。

「けど、何から……え?」

六式剣・改を仕舞いながら、唯里は前を向いた。すると、氷煙の向こうに巨大な影が見えた。それは、巨大な翼を広げ、咆哮した。空気が震え、一瞬だが氷煙が晴れて、それを見た唯里は思わず

「り、龍……?」

と呟いた。唯里は龍を、教本でしか見たことがなかった。現代では一体も存在しない、嘗ての地上の支配者。それが、龍である。教本でしか見たことがなく、現代では倒し方すらあまり知られていない龍にどう対処していいか分からず、唯里は混乱していた。だが気付くと、龍の影は消えていた。

「あ、あれ……消えた……?」

幻でも見たのかな? と思っていた唯里だったが、その耳が足音を捉え、再び構えた。自衛隊の可能性が最も高いが、人型の魔獣という線も捨てきれないからだ。

しかし、少ししてから魔獣という線は消えた。

「軽い足音……それに……この音は、裸足……?」

人型の魔獣はは、大抵は質量が重いために地面が揺れる感覚がする程の音を伴い、更には大抵が蹄や爪が伸びているために引つ掻くような音がするのだ。

しかし、唯里の耳に聞こえるのはタシタシという軽い音。

「どとういう……え!?!」

困惑していた唯里は、現れた人物を見て驚いた。

唯里の前に現れるのは、背丈的には唯里より小柄で、褐色の肌に長い鋼色の髪の少女。なのだが、何故か裸だったのだ。真冬のこの時期に、シャツ処か下着すら身に付けてい

ないことに、唯里は驚いて固まった。

「なんで裸なの!？」

「み？」

唯里が問い掛けるが、少女は不思議そうに首を傾げるのみ。だから唯里は、急いで自分が着ていたコートを着させて

「取り敢えず、このコートを着てて!」

「おー!」

唯里がコートを着させると、少女は興味津々という様子でコートと唯里を見た。すると、唯里は少し考えてから

「予備の靴は無いから、私がおんぶするね」

「おん……ぶ……おぶー!」

「わつと!」

唯里が背中を向けると、少女はご機嫌な様子で唯里の背中に飛び乗った。その勢いで唯里はバランスを崩しかけたが、直ぐに建て直し

「この少女……なんなの……? 助けて……志緒ちゃん……」

と唯里は星空を見上げ、その星空から方角を割り出すと、自衛隊の拠点がある筈の堤防に向かった。

その同時刻、少し離れた場所にて

「さっきのは……」

「龍ねえ……つーことは、婆あの子想が当たってたか？ 災厄が封じられてたって……」

そうになると、ここは当たりだったか……マズいな」

志緒と牙城は、唯里が見たのと同じ龍で、志緒は困惑し、牙城は嫌な予感がする、と頭を搔いていた。

「災厄って……先ほどの龍か？」

「あ？ 何言ってるやがる。龍ってのは、護る者まもらるまもる者まもだろ」

「護る……者……？」

牙城が言った言葉の意味が分からず、志緒は混乱した。しかし牙城は、何時もの胡散臭い笑みを浮かべて

「さてと、風沙を探さないと……つと、お？」

周囲を見回して、大きく裂けた氷の崖に腰掛けている巫女姿の風沙を見つけた。しかし志緒は、その風沙の髪を見て驚いた。

黒かった筈の髪が、揺れる度に色が変わる金髪になっていたのだ。そんな風沙を見て、牙城は

「やっぱりか……お目覚めかな、姫？」

と凧沙に声を掛けた。

『汝は……』

「俺のことは、覚えてるかな？
眠り姫？」
アヴローラ

牙城が問い掛けると、凧沙。否、凧沙の体に憑依しているアヴローラ・フロレスティーナは

『……汝は、この依り代の……』

「お、覚えててくれたか。良かった」

アヴローラが覚えていることに、牙城は笑みを浮かべた。そんな二人の会話を、志緒は可能な限り息を殺して見守っていた。

今の牙城の行動は、薄い刃の上を歩いているように思えてならなかったのだ。

志緒も、沙矢華より劣るとはいえ腕利きの舞姫だ。魔力を感じとることに長けており、今の凧沙から放たれている魔力が、真祖クラスだと気付いていた。

『何故、汝は笑う……我は、汝に謝罪することしかできず……汝から侮蔑と罵倒の言葉を投げられるのを、覚悟しているのに……』

「なあに言つてやがる。俺も、明久も、お前を恨んでなんざいねえよ……むしろ、凧沙を助けてもらつて、感謝してるんだ」

アヴローラがうつ向くと、牙城はアヴローラの頭を撫でた。声音と行動から、本当だ

と分からせるためだ。

そして牙城は、アヴローラに

「それで、風沙は無事かな？」

と問い掛けた。するとアヴローラは、自分の胸元に手を当てて

『かの見頃ならば……我の中に……』

と呟いた。その直後、髪が元の黒色に戻り、後ろに倒れそうになったが、それを牙城が支えた。

「牙城……今のは、一体……」

「風沙の中で眠ってる、眠り姫さ……さてと、戻るとするか……」

志緒の問い掛けに短く答えると、牙城は風沙を背負って立ち上がった。その時、それまで二人の周囲を覆っていた氷煙が晴れて、二人は周囲を見て驚いた。

夥しい数の蜂蛇の死骸が、付近に転がっていたからだ。

「いっつは……」

「……全て、一撃で倒されてる……それも、刃物の類で」

志緒は近くの数体の蜂蛇の死骸を確認すると、驚いていた。

志緒と牙城も蜂蛇と戦ったから、蜂蛇の頑丈さはよく理解している。だというのに、蜂蛇が全て一撃で仕留められているのだ。それも、近接攻撃で。自衛隊ではない。

自衛隊は銃火器が主体であり、志緒が知る限り、自衛隊で大きな刃物を装備していた隊員は居なかった筈だ。

「……急いで戻るので、嫌な予感がする」

「わ、分かった」

声音が変わった牙城に従い、二人は堤防の方角に戻ろうとした。そこに、緋沙乃が現れて

「無事でしたか、斐川攻魔官。それに、バカ息子」

「緋沙乃様!」

「よ、婆。やらかしたな? だから、手出しするなつて言っただろうに」

志緒は片膝を突き、牙城は少し非難したような目で緋沙乃を見た。そして緋沙乃は、牙城に

「……貴方の考えが正しかったのは認めます……しかし、今は一刻を争います。斐川攻魔官、風沙を連れてこの場から離れなさい」

「……そうした方が良さそうだな。志緒ちゃん、ちよつと風沙を頼んだ」

牙城は風沙を志緒に預けると、機関銃を取り出した。その直後、三人の頭上に予想していなかった存在が現れた。

「わ、飛竜!」

亜龍と呼ばれる存在で、現代の戦闘機でも倒すことが難しい、ワイバーンとそのワイバーンに乗った騎士だった。

咎神きゆうしんに関わる戦いが、幕を上げる。

到着と困惑

「……なにこれ。何が起きたの……」

呆然と呟いたのは、オシアナスガールズが運用する装甲車から降りた明久だった。確かに神緒田近辺は寒い地域だが、それでも湖が凍るといふのは、予想外にも程があった。

「先輩、この一帯に凄まじい魔力が……」

「うん……こんなの、吸血鬼の真祖級だけ……」

雪菜の言葉に、明久は同意するように頷いた。今神繩湖周辺には、凄まじい魔力が残留していた。その濃度や量から、明久は真祖級だと考えた。

しかし、日本本土に自分以外の吸血鬼の真祖が居るとは思えなかった。

すると、装甲車から降りてきたオシアナスガールズが

「第四真祖様……無線を傍受したのですが、どうも自衛隊は大きな損害を受けているようです」

と報告してきた。それを聞いて、明久は怪訝な表情をして

「自衛隊が大きな損害？」

「はい。無線も混乱してましたが、どうやら未知の魔物が現れて、対応出来なかったと言っていました」

明久の問い掛けに、一人がそう報告してきた。視線を動かすが、別の一人がヘッドホンを着けて機械を操作している。恐らく、それが無線なのだろう。

「……なあんか、こつちの予想を上まわってきたるなあ……」

「少し前に見た、龍の影も気になります……一体、神繩湖（かみづうみ）で、何が起きてるのでしょうか……」

装甲車のカメラでモニターに映された映像で、巨大な龍の影を見ていた。それも気になり、オシアナスガールズは完全武装である。

装甲車の一角には、凄まじい武装が大量にあった。しかも、全員が訓練を受けているらしく、対魔族も相手可能らしい。

(メイドの定義が分からないなあ……)

明久はそう考えながら、ジツと神繩湖を見て

「……確か近くに、登山家用の休憩小屋が有った筈……そこに行つて、一度対策を考えようか」

と言つた。神繩湖のある神緒多は登山家達も多く訪れるために、何カ所かに休憩小屋が設置されているのだ。

明久はそこに行くことを提案し、全員が了承。一番近い休憩小屋に行くことにした。そこでなら、無線での情報収集を鑑みながら落ち着いて会議出来ると考えたからだ。そうして、明久達は休憩小屋に向かった。

この時、実は風沙の方は危機に陥っていた。

飛竜に乗った騎士だが、異質な強さを誇っていた。飛竜は確かに強力な魔物だが、それでも琥珀金を使った対魔物弾を食らっては無事では済まないのだが、その飛竜は何故か無事だった。それだけでなく、飛竜諸とも騎士を狙って放った式紙は、騎士に触れた瞬間に砕け散った。

しかも、牙城の切り札たる呪式弾も効かず、志緒の六式降魔弓・改の術式までもが無効化された。

無力を感じて動かなくなった志緒を狙って放たれた攻撃を受けて、牙城は重傷。緋沙乃も倒された。

そして、風沙が連れ去られそうになった時に、ヴァトラーが現れて、風沙を抱き上げ「……少し予定が早まったが……これで、三・体・目、か」

と呟いた。この直ぐ後に、イブリスベールと浅葱を乗せた多脚戦車が現れて、ヴァトラーは浅葱を見ながら、衝撃的な言葉を紡いだ。

「これはこれは、イブリスベール・アズィーズ殿下……よりもよって、《カインの巫女》

を連れて御来臨とは……予想もしてませんでした」

ヴァトラーの言葉を聞いて、イブリスベールは驚愕の表情を浮かべながら浅葱を見た。

カインの巫女、かつて聖殲を引き起こしたとされる咎神に使えたとされる巫女。

そして、イブリスベールとヴァトラーの部下が協力し、騎士。咎神に使える騎士を撃退し、飛竜を確保した。

そこへ、豪華な装飾が施され、アルデイギア王国の紋章が入った一隻の飛行船が降りてきた。

こうして、神繩湖での戦いは、明久の予想を超えた規模へと発展していくことになるが、明久は知らなかった。

接敵

山小屋に向かっていた明久達は、目的の山小屋を見つけた。

「あそこだけど……」

「誰か、居ますね……」

明久と雪菜は、その山小屋に誰か居ることに気付いた。

この季節に、山小屋を使う人が居るのはおかしい。そう考えながらも明久は、山小屋に近付いて、ドアを開けた。その直後、明久に銀閃が迫ったが、当たる直前で刃は止まった。

「……誰？」

「吉井明久……って言えば、分かるんじゃないのかな？ 獅子王機関でしょ？」

唯里が驚いていると、明久の横から顔を出した雪菜が

「唯里さん！ 私です！」

と簡易的に名乗った。すると唯里は、目の前に居る明久が日本に現れた第四真祖だと気付いて

「あ、貴方があの第四真祖でしたか！ 失礼しました!!」

と謝罪しながら、六式剣改を納めた。それを見た明久は

「……本当に、獅子王機関の人？」

と雪菜に問い掛けた。

「そうですが……なんで不思議そうなんですか？」

「だって、謝罪してきたよ……？ 今まで居なかったよ……？ いきなり攻撃されて、殺

されかけたりはしたけど」

「ぐっ」

「ゆっきー……？？」

明久の言葉に雪菜は反論出来ず、唯里は困惑した表情で雪菜を見ていた。明久が言ったのは、主に紗矢華と古詠の事である。

(しかし、ゆっきーか……彼女、中々に剛の人かな?)

そして明久は、唯里が言った雪菜のアダ名らしいのに驚いた。そして明久は、もう一人居ることに気付き

「あの子は……？」

「えっと、この近くで保護した子で……名前はよく」

明久の問い掛けに、唯里は少女を見ながら返答した。その時、外から異様な気配を感

じた。そして明久は、直感で

「外に出て!!」

と警告を発した。その言葉に従い、唯里は少女を抱えて、そしてオシアナスガールズと一緒に明久達も外に出た。

そして、上空にそれを見つけた。幻想種の一体、ワイバーン。そのワイバーンに乗った一人の騎士。

「誰だ……」

「グレンダを、渡せ……」

明久の問い掛けに騎士は答えず、唯里が抱える少女を見ながら引き渡しを要求してきた。すると、明久は

「……あなた、なんでこの女の子がグレンダだって分かった？ 僕達だって、今初めて知ったのに……それに、怪しそうな人物は他に何人も居るのに……」

と騎士に問い掛けた。明久が言っているのは、制服姿の雪菜や唯里もだが、オシアナスガールズである。全員が様々なカラーリングだが迷彩服を着ていたり、武器を携帯したりしている。怪しさでは、かなりの物だ。

しかし騎士は、唯里が抱えてる少女がグレンダだと断言した。つまり、知っていたのだ。

視界の端に見た少女、グレンダは不安そうに唯里に抱き付いている。

「あんに、この女の子を渡す訳にはいかないな……抵抗させてもらうよ」

明久がそう言いながら構えると、雪菜やオシアナスガールズも構えた。それを見て、騎士は

「たかが第四真祖風情が……邪魔するな！」

そう言って、持っていた突撃槍を突きつけた。その直後、突撃槍が変形し、長大な銃。機関銃になった。それを見た瞬間、全員は一斉に散開。放たれた黒い弾丸を回避した。

「普通の弾じゃない!? なんだ!?!」

「死ね!!」

騎士は明久に狙いを定め、集中的に射撃してきた。明久は刀で弾かずに、避けることに集中した。当たれば、無事では済まないと思つたからだ。そして明久は、避けながら

「獅子の黄金!!」

獅子の黄金を召喚し、騎士とワイバーンに向けて突撃させた。普通ならば、これで終わるのは確実だ。しかし、ワイバーンに当たる直前に、黒いオーラのようなのを纏つたかと思えば、獅子の黄金が掻き消された。

「なっ!?! 獅子の黄金が!?!」

予想していなかった光景に、明久は驚いた。すると、オシアナスガールズの一人が小

銃を構えて、ワイバーンを狙って撃った。放たれた弾丸は対魔獣を想定した弾丸で、幾らワイバーンといえども無事では済まない。

だがその弾丸は、金属質な音をたてながら弾かれた。

「なっ!？」

「どんな皮膚してるのよ!？」

撃った本人は目を見開いて固まり、別の一人が悪態を吐きながらロケットランチャーを構えた。その直後、巨大な爆発が起きた。

「なんだ!？」

「先輩! もう一人来ました!」

雪菜が指差した先には、もう一人のワイバーンに乗った騎士が居た。そのワイバーンの口から煙が上がっていることから、先ほどの爆発はそのワイバーンの攻撃だと分かった。だが、ただの火球だとも思えなかった。

「まずいな……一体でも勝てるか分からないのに……」

明久がそう言っている間に、後から来た騎士が最初に交戦していた騎士に近付き、何か耳打ちした。少しすると、最初の騎士が

「……今はグレンダを一時預けるぞ、第四真祖……」

と言つて、後から来た騎士と共に離れていった。状況では有利だったのに、離れて

いった。

「……何か、優勢すべきことがあった……のか？」

「先輩、状況の整理と把握する為に、一度話し合いましよう」

雪菜の提案に、明久は頷いて山小屋に向かって歩き始めた。後に、聖殲派と分かる相手との初戦だった。

聖殲派

正体不明の騎士との交戦後、明久達は自衛隊との合流を目指しオシアナスガールズの装甲車に乗っていた。

「あいつら、一体なんなんだ……それに、グレンダも」

「うん……」

明久の呟きに、唯里は同意しながら唯里の膝枕で寝ているグレンダの頭を撫でた。そして、唯里は

「ただ、グレンダと会う前に龍を見たの……」

「あ、影なら一瞬見たけど……まさか、ねえ……」

明久は、寝ているグレンダを見た。今まで見たことの無い髪色、鋼色の髪色。それが気になっていた。その時、装甲車が止まり

「申し訳ありません、ここから先は通れないんです」

と男性の声が聞こえた。隙間から見てみると、窓の外に自衛隊隊員が見えた。怪我をしているようで、モニター画面のカメラを変更すると、正面に負傷者を運んでいるト

ラックが見えた。運転席近くに居た赤いバンダナを肩に巻いた一人は、明久を見て口パクで

(強攻突破しますか?)

と問い掛けてきた。確かに、それも手ではあるが、相手は怪我人ばかりなために躊躇われる。その時、雪菜が前に出て

「こういう者です」

と言つて、一枚のカードを提示した。すると、その自衛隊員は驚いた表情を浮かべて「太史局の、六刃神官の一人!」

と声を挙げた。それは、妃崎が雪菜用に用意した偽造の身分証だ。

「何やら緊急事態と聞き、ここまで来ましたが?」

「そ、そうですが……え、29歳?」

自衛隊員が溢した年齢に、雪菜は一瞬青筋を浮かべた。設定年齢に、悪意しか感じられない。因みに、明久は24歳となっている。何故に逆にした。

「それで、確かここには獅子王機関も協力していた筈ですが、どうなったのですか?」

「はっ!」それが、突如として多数の魔獣に襲われて、隊は散り散りに。安座真三佐とも連絡が取れなくなりました!!」

雪菜が強めに問い掛けると、その自衛隊員は敬礼しながら答えた。なお、雪菜は気付

いていなかったが、必死に唯里は口元を抑えている。

「……ならば、次席指揮官は誰ですか」

「は！ 冲山二等特尉になります!!」

自衛隊員の答えを聞いて、雪菜は口を開こうとした。その時、自衛隊側から警報音が鳴り

「総員降車！ アンノウンが接近中！」

と大声が聞こえた。すると、トラックから比較的軽傷者が降りてきて、小銃を構えた。その直後、寝ていた筈のグレンダが上部ハッチから飛び出していった。

「グレンダ!？」

「僕達も行くよー！」

「はいー！」

唯里は上部ハッチから顔を出し、明久と雪菜達は後部ハッチから飛び出した。すると、自衛隊員が小銃を向けた先には、あのワイバーンが居た。

時は少し戻り、自衛隊陣地の一ヶ所。

「……どういふつもりだ、斐川降魔官」

「安座真三佐……今回の作戦、最初から違和感だらけだった」

自衛隊側の最高指揮官たる安座真三佐に、志緒は六式弓改を向けていた。今この場に

は、負傷している緋娑乃と牙城。意識の無い風沙、志緒の他に膝丸に乗っているリディアーンと浅葱。そして、イブリスベールが居る。

安座真三佐は少し前に戻ってきたらしいが、一度は行方不明と聞いていただけに、疑うのは仕方ないかもしれない。だが、それより前に志緒はこの作戦自体に違和感を覚えていた。

「まず、この作戦に民間人を利用すること……確かに、彼女には私達でもよく分からない何かが取り憑いているみたいだが……それに、強力な霊媒体質だからといって民間を巻き込んでいい理由にはならない。それに、自衛隊に協力を要請するという点も」

「……事実、そちらだけでは蜂蛇に対応出来ていなかったようですが？」

「確かに、それは事実だ……だが、それは自衛隊もだ……いや、対応出来な過ぎと言つても過言じゃなかった。装備で確認していたのは、小銃と散弾銃レベル……第一降魔大隊の装備には、軽機関銃や重機関銃もある筈……しかし、私は見ていない」

志緒の指摘に、安座真の後ろに居た自衛隊の隊員達は困惑した表情を浮かべている。どうやら、彼らもその点には違和感を覚えていたらしい。

「それに、装甲車も対戦ヘリも見えていない……これは、どういうことですか、安座真三佐？」

「……我々自衛隊は、何かと制限が多い……それに、今回は我々の想定を超えていた……」

それより、なぜ戦王領域の吸血鬼がここに？」

志緒の問い掛けに答えた安座真は、そう言つてイブリスベールを見た。

「何を言つてる、この方は……」

「クツクツク……何故我が戦王領域の吸血鬼だと思つた？ 安座真とやら……我が、あの蛇遣いと一緒に居たからか？ だがな、あの場に貴様は居なかつた筈だぞ？」

そう……聖殲派の騎士たる貴様以外はな？ それと、我の名前を言つてやろう……よく覚えておけ……我の名前は、イブリスベール・アズイーズだ」

イブリスベールが指摘しながら指差したのは、安座真が包帯を巻いていた右腕。実はここに来る前に、イブリスベールと今は居ないヴァトラーの二人は襲撃してきた騎士達に対して眷獣を放ち、その一人の右腕に負傷させていたのである。

そう、正に安座真の怪我と同じ場所だ。しかも、安座真は致命的なミスを犯した。

イブリスベールを戦王領域の吸血鬼と言つた。イブリスベールは、滅びの王朝の王子であるのに。

安座真も自分のミスを気付いて頬をひきつらせ、自衛隊員達は困惑の表情を安座真に向けていた。

しかし、安座真は拳銃を抜いて

「もう一度言うぞ、斐川降魔官……吉井凧沙を引き渡せ。これは命令だ」

と命じ、安座真の背後に居た自衛隊員達も志緒に銃を向けた。自衛隊を含め、あらゆる組織は上からの命令は絶対である。例えそれが、疑いの掛かっている上官でもだ。

志緒も、今は自衛隊の指揮下に入っている。命令に従い、志緒はゆつくりと六式弓改を下ろした。

だがその時

『いや、従う必要は無いぞ。斐川詩緒よ』

という声が聞こえ、安座真の背後に居た自衛隊員達が一斉に安座真に銃口を向けた。

「今の声は……?!」

くらきしろな

「闇白奈様!」

獅子王機関三聖の一人、闇白奈。

その正体は、魂だけになって自分に特性が近い少女に憑依し、これまで獅子王機関を支えてきた創設世代の一人である。その特性は、神テは女王オクを護ラりたテもうア。不可視の霊糸により、最大で数百人の人間を無慈悲に操り人形にする。

『我々、獅子王機関を利用した気で居たか、安座真。だがそれは、こちらとて同じことよ……確かに、神繩湖の脅威を取り除くことも目的だったが……本当の目的は、貴様ら聖殲派の焙り出しと殲滅だったのだ……』

「まんまと、そちらの罠に引つ掛かったか……やはり、貴様らも黒殻アバロンの中身を知つてたの

だな」

「なるほどな……最初から龍族が目的地だったのなら、風沙が使われたのにも説明がつか……龍を覚醒させるための条件に合致していたのが、偶々風沙だったって話だ……ついでに、その条件をあんたらに教えた黒幕は誰なねか、教えてくれねえか？」

牙城はそう言いながら、安座真に機関銃を向けた。

「牙城、無理をするな！」

「はっ！ 大事な娘を利用されたんだ……怒らねえ親が居るかよ……それにどうやら、あのバカ息子も来たみたいだしな」

志緒は心配して言うが、牙城は獰猛な笑みを浮かべている。やはり、かなりふざけているとはいっても一人の親のようだ。

『安座真元三佐……貴様に対する拘束命令が下された……場合によっては、射殺も許可されている。大人しくするのだな』

闇がそう言った時

『皆の者、伏せよ!!』

志緒の背筋に悪寒が走ったと同時に、リディアーナがロボット戦車の外部スピーカーで叫んだ。その数秒後、そのテントを激しい衝撃が襲った。

グレンダの正体

激しい爆発と衝撃に襲われて、テントは吹き飛んでいた。全員が助かったのは、志緒が咄嗟に展開した障壁が理由だった。

「くっそ……この威力は、対戦ミサイルだな……!? 無茶苦茶しやがって……!」
「牙城……!」

牙城は威力から攻撃手段を特定しながら、悪態を吐いていたが、右脇腹辺りから出血している。先の戦闘の傷口が、今の衝撃が理由で開いてしまったようだ。

「だが……一発は当てた筈だ……! やってやったぜ、あの野郎が……!」
そう言つて牙城は、持っていた銃を放り投げて、無事な姿の凧沙を見た。すると、イブリスベールが

「しかし、あやつら……カインの巫女が居るのに遠慮なく撃つてきたな……」
と呟きながら、浅葱を見た。何のことか分からない浅葱は首を傾げるが、それに対し
て牙城が

「確かに……凧沙にばかり意識を向いてたな……知らないってんなら、余りにもお粗

末過ぎるが……まさか、目的は別……龍か!？」

と立ち上がろうとしたが、やはり傷口が開いたからか片膝を突いた。

「牙城！ だから、無理をするな！ 今は、治療に専念すべきだ！」

そんな牙城を、志緒は嗜めた。確かに、傷口から溢れる血は止まる様子がなく、下手すれば命に関わるのが分かる。

「……こうなったら、バカ息子に任せるしかないか……」

そう言った牙城を、志緒がベッドに座らせた。周囲からは自衛隊隊員達の困惑する声が聞こえてきて、志緒が

「今は、怪我人の確認と治療を最優先！ 怪我してない隊員十数名は、武装して不意打ちを警戒！」

と指示を出した。そして、志緒は

「……まさか、沖山特尉もなのか……」

と呟いた。その理由は、先のミサイルが直撃する直前に、安座真元三佐の背後から沖山特尉が現れて、安座真元三佐を助けた後に一緒に逃げたからだ。

そうになると、自衛隊側のトップ二人だけとは思えない。

「くっ……指揮系統が」

志緒は歯噛みするが、自分ではどうしようも出来ないと考えて、先ほど牙城が言って

いたバカ息子とやらに託すしかないと判断した。

その時明久達は、自衛隊と共にワイバーンと遭遇していた。そのワイバーンの上には、一人の騎士が乗っている。

「さつきからよく見るけど……それに、季節的にもあつてるけどさ……ここつて、有明とかコスプレ会場だったっけ？」

心底嫌だ、という風体で明久が呆れていると

「死ね」

騎士が呟いた直後、ワイバーンの口から炎弾が放たれた。その狙いは、負傷者が多く乗っている自衛隊のトラック。それに気付いた明久は

「レグルス・アウルム
獅子の黄金!!」

雷の獅子を召喚し、その炎弾を迎撃。その流れで、ワイバーンと騎士を狙って雷を落とさせた。だが当たる直前、黒いオーラに雷は弾かれた。

「弾かれた!?!」

「確かにワイバーンは幻想種ですが、あんな対魔防御があるなんて、聞いたことありません!。それに、あんなオーラも初めて見ます!」

明久は驚き、雪菜は自身の知識と擦り合わせてから雪霞狼を構え

「自衛隊の方々は、負傷者の乗っているトラックの防御に専念してください!」

と自衛隊に指示を下した。確かに、騎士は負傷者の乗っているトラックを狙ったのだから、正しい指示だろう。

しかし、騎士はそんな二人を無視し唯里に抱き付いているグレンダを見て

「正統な後継者が命ずる……グレンダよ、情報を開示せよ」

と命じた。だが、グレンダは困惑気味に首を傾げるのみ。そんなグレンダに、騎士は驚いたのか

「グレンダよ、情報を開示せよ！」

と怒声交じりに命令した。しかし、何も起きない。騎士が何をしたいのか分からず、明久達も固まっていた。その時

「ゆっきー！ 向こうから更に一体来る！」

と唯里が、指差した。その先を見ると、確かに同じワイバーンと騎士が来ている。しかし、先に交戦していた騎士は突撃槍を持っているのに対して、後から来た騎士は金属製の杖を持っている。

「何を遊んでいる……我々の大義を忘れたか……」

「申し訳ありません！ しかし、グレンダが要求しても情報を開示しないのです！」

どうやら、後から来た騎士の方が上の立場らしく詰問すると、先に交戦していた騎士は何やら困惑気味に報告した。それを聞いて、後から来た騎士は

「まだ覚醒が十分ではないのか……だが、これ以上待つことは出来ない……」
そう言って、杖をグレンダに向けて

「命ずる……グレンダよ、真の姿を解き放て」

と言った。その直後、劇的な変化が始まった。グレンダの体が不気味に脈動し始めて、背中から迷彩服を突き破る形で龍の翼が生えた。

「なっ……!!」

「ぐ、グレンダ!」

「何が起きてるんですか!」

明久達が驚いている間にも、変化は続く。人型だった見た目が爬虫類を彷彿させる姿になり、一気に巨大化した。その姿は正に、伝説に聞く龍そのもの。

「な……」

「り、龍!」

明久達が驚いている間、グレンダは苦しそうに身悶えて咆哮を上げている。

「グレンダ! どうしたの、グレンダ!」

唯里は必死にグレンダの足にしがみつき、グレンダに声を掛けています。しかし、グレンダは落ち着く様子が見られない。それに危機感を覚えて、明久は唯里に歩み寄り

「一度離れよう。最悪、攻撃される可能性が」

と一度唯里を、グレンダから離そうとした。

だがその時、グレンダが一際長い咆哮を上げたかと思えば、大きく翼を広げた。次の瞬間、明久は尻尾に風払われる形で背中に飛ばされ、唯里は足で掴まれた。それを見て、雪菜はしなやかに駆け出して飛び始めたグレンダの背中に飛び付いた。

それと同時に、グレンダは一気に急加速で空高く舞い上がり

「グレンダのバカああああああ?!」

と唯里の悲しい悲鳴が木霊した。

突然

「うぐぐぐ……！」

「先輩！ 捕まってください！」

龍になり飛んでいる明久だが、背中のトゲに何とか足を引っ搔けて耐えている状況で、上にくっついていた雪菜が明久に手を伸ばしていた。明久はなんとか上体を上げると、雪菜の手を掴んで危機を脱した。

「大丈夫ですか、先輩？」

「な、なんとかね……！」

体勢を立て直した明久は、一息吐くと

「……そういえば、羽波さんは!？」

「あっ!？」

足に引っ掛かった状態だった唯里のことを思い出し、雪菜と一緒に足の方を見た。

「助けてほしいけど、見ないでええ!!」

そして唯里は、グレンダの爪に摘ままれる形で逆さまになっていたのだが、パンツ丸

見せ状態だった。明久は見ないように顔を引つ込め

「雪菜ちゃん、助けられる?」

「すいません、私の術でも助けることは……」

明久の問い掛けに、雪菜は申し訳なさそうな表情を浮かべて首を振った。雪菜の式紙は探索や連絡用。更に言うと、雪菜は術方面は不得手なので、どちらにしても現状ではどうしようもない。

「だけど、まさかグレンダちゃんが龍だったなんて……」

「一体、何処に向かっているのでしょうか……」

明久と雪菜は、飛んでいるグレンダを見下ろした。何回か声かけしたが、呼び掛けに応じる気配はない。恐らくだが、混乱しているのかもしれない。

そして少し飛んでいたら、明久が

「ん……山頂の方に向かっている?」

と首を傾げた。

「山頂の方にですか?」

「うん……なんでかは分からないけど」

一応は祖母の地元な為に、ある程度は地形を把握していた明久だが、グレンダが自分達の居た麓の方から山頂方面に向かっていることに気付いた。なぜ山頂方面なのか考

えていると、突然グレンダが高度を下げ始めた。

「い、いきなりなんだあああ!?!」

「きやあああああああああ!?!」

いきなり降下し始めたグレンダに驚きながら二人は、落ちないようにとしつかり捕まっていた。そして、地表まで10 m程の高さで緩やかになったかと思えば、小さくなり始めた。

「ちよ、まさか消えるとかはないよね?!」

最悪の事態を考えた明久は、高所恐怖症（だと思われる）雪菜を抱えて、グレンダから離脱すると、足に魔力を回して何とか着地。そして雪菜を即座に下ろすと、上から落ちてきていた唯里を見て

「ふんすつ!」

「ひああああ!?!」

なんとか受け止めた。少年のフラインプレーにより無事だった唯里だが、事態の七転八倒具合に頭が混乱しているようで、まだ現状を把握しきれていなかった。そうして明久は、唯里を素早く下ろすと激しく土煙が舞う場所を睨み付けた。それから十数秒後、土煙が収まった場所には裸のグレンダが居た。

「先輩、見ちゃダメです!!」

「見ちゃダメええええええええ!?!」

「ソドム!?!」

グレンダを視認した直後、明久の腹に雪菜と唯里の見事なボディブローが直撃した。

それから、十数分後。近くにあった山小屋に三人は居たのだが

「え、えつと……大丈夫かな、第四真祖様?」

「……二人同時は、やめてほしかったなあ……」

雪菜と唯里のボディブローを同時に喰らった明久は、床に敷いた寝袋の上に寝転がっていた。そんな明久を、唯里が看病している。雪菜はキッチンに行き、缶詰め備蓄されていた食糧で食事を作っている最中だ。

「えつと……気が動転しちゃって……その……」

「いやまあ、あれは仕方ないかもしれないけどね……」

唯里は顔を反らしながら弁明すると、明久は一応同意した。そのグレンダだが、今は山小屋にあった服を適当に着せて、ハンモックで寝ている。明久が殴られた直後に、グレンダは意識を失って倒れてしまったのだ。

何が起きているのか分からなかった為に、長距離移動はせずに近くの山小屋に避難し、グレンダの服を探してから、明久の看病をしているのだ。

「けど、グレンダちゃんは一体……」

「私にもよく分かんないの……神繩湖で出会ってから、異様に懐かれてるんだけど……」
明久が疑問を口にする、唯里は首を左右に振りながら経緯を軽く説明した。それを聞いた明久は、会ってからのグレンダを思い出してみた。ただひたすらに、唯里に純粹に懐いている姿。それはまるで、子供のようにも見えたからだ。

「……インプリンティング……だったかな？」

「インプリンティングって、あのひよこことが産まれた直後に見たのを、親って認識するっていう？」

唯里が確認すると、明久は頷き

「僕には、グレンダちゃんがまるで子供みたいに見えた……本当に、生まれたての子供みたい……」

「……確かに、そう言われてみれば……」

明久の言葉を聞いた唯里は、思わず納得していた。

初めて会った時、グレンダは唯里をジッと見ていて、その直後から異様に懐かれていた。確かにそれは、インプリンティングの条件に符号する。

「……話は変わりますが……」

「あ、敬語じゃなくていいよ？ 僕なんて別に、大したことない存在だし」

唯里の言葉を遮る形で、明久はそう提案した。明久はそう言うが、唯里からしたらか

なりの人物に思える。唯里も雪菜と同じ剣巫な為に、ある程度は情報共有されている。（吉井明久……日本に現れた第四真祖……記録が正しければ、剣術の日本大会個人戦優勝経験があり、二つ名持ち……その由来となったのが、縮地と連続突き……はつきり言って、剣の腕なら私より上かも……）

唯里も剣巫に選ばれているから、剣の腕にはそれなりに自信はある。だが、成績に於いては何時も雪菜の後塵を拝しており、それ故に自身のことは過小評価気味になっている。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……話は変わるけど、明久君はゆつきーとどう生活してるの？」

（ゆつきー……雪菜ちゃんのことか）

「んー……どうって言われても、お隣さんで同じ学校に通ってるし……時々一緒に買い物して、ご飯も一緒に食べてる……ってところかな？」

明久の説明を聞いた唯里は、目を輝かせた。

以前にも説明したが、唯里は少女マンガを愛読しており、明久と雪菜のそれは、正に少女マンガと同じ状況だ。

「半同棲状態……！ いいなあ……羨ましいなあ……」

小さく呟きながら、唯里はその状況に自身を当て嵌めて想像した。そして、身悶えし

ていると

「羽波さん？ どうしたの？」

と明久が呼び掛けた。それで我に返った唯里は

「だ、大丈夫です！ なんでもありません……ひゃああ!?」

「むぐっ!?!」

慌てて明久の方に向いたのだが、それでバランスを崩して明久の方に倒れた。それにより、明久の顔には唯里の豊かな胸が当てられた。

「羽波さん！ 今のは、なにが……」

そこに、雪菜が突入してきて、光景を見て固まった。

明久の無事や如何に。

休憩と謝罪

「さっきのは私が足を滑らしたから起きたことであつて、彼は一切悪くないの……だから、七式を下ろしてユツキー!!」

「ふー……ふー……ふー……」

鼻息荒い雪菜を羽交い締めにして抑えながら、唯里は雪菜に雪霞狼を下ろすように懇願した。そして渦中の明久は、ベッドでお茶の間には放送出来ない姿になっていた。唯里には、それ以上悪化するのを止めることしか出来なかつた。

そして、数分後

「雪菜ちゃん、僕じゃなかつたら本当に死んでるからね!」

明久が抗議するも、雪菜は視線を逸らして無言だつた。

こうなつたらどうにもならないと考えて、明久は唯里に視線を向けて

「グレンダちゃんはどうか?」

「まだ眠っています……相当疲れたのか……」

グレンダのことを問い掛け、唯里は首を左右に振つた。どうやら、グレンダはまだ

眠っているようだ。

すると、雪菜が

「しかし、まさか伝説の龍……それも、人化能力を有する龍なんて、教本でしか見たことありません」

「うん、私も」

雪菜の言葉に、唯里も同意した。確かに、明久も那月から教えられただけであり、そもそも眷獣以外で龍を初めて見た。

那月から聞いた話では、欧州には絶滅危惧種として龍種の保護区が有るらしいが、それすら話に聞いただけである。

その龍から更に人化能力を有するとなると、最早神話や聖職での記録にしか残っていない。それほどに、グレンダという存在は希少かつ貴重らしい。

「で問題は、そのグレンダちゃんをあの騎士鎧の連中が狙ってるってこと……しかも、僕の眷獣が弾かれたなんて、初めて見たよ……」

「はい……それも、見たことないオーラで弾かれました……結界とは違う感じでしたが……唯里さんは、どうですか？」

「私もアレは初めて見たよ……あんな桁外れな魔力の眷獣を弾くなんて……魔道具にしても、聞いたことないよ」

明久の話を聞き、雪菜と唯里は同意した。

もし、そんな魔道具を開発したのが反魔族団体ならば、日本本土ではなく欧州などの魔族特区等で大規模な事件を起こしている筈である。

三人が唸っていると、ドアがガチャリと開き

「ゆいりー……」

と寝惚けた様子の子のグレンダが入室してきた。それを見て、唯里が立ち上がり

「ああ、はいはい。ほら、ちゃんと服着ようね？ それと、ご飯にしようか」

と胸元がはだけているグレンダの肩を掴み、回れ右させるとグレンダと一緒に退室していった。それを見送った明久が

「唯里さんって、面倒見良いよね」

「はい。杜でも、よく年下の子達の面倒を見ました」

明久の話を、雪菜は同意するように説明した。そして雪菜は、明久に視線を向けて「ところで……グレンダさんの胸元を見ましたよね？」

「待って、あれは不可抗力だと思っただよ」

雪菜からの冷たい問い掛けに、明久は説得を開始した。

それから、十数分後

「なんか、疲れてませんか？」

「大丈夫、気にしないで」

居間に来た明久がグツタリしているのに気づき唯里が問い掛けたが、明久は大丈夫と答えた。そして、雪菜が用意したご飯を食べ始めたのだが

「ユツキーは昔から、凄い生真面目で近寄りがたい雰囲気ですねえ……剣巫適性試験にも最年少で選ばれて、唯一私の渾身のジョークに無反応だったなあ……」

「あ、あれは、緊張していたから反応出来なかっただけで……」

第一回、唯里による雪菜の過去語りが開催されていた。どうやら、雪菜は訓練生時から生真面目で高嶺の華だったようだ。

「ああ、ほら……グレンダちゃん、ゆっくり食べてね」

「うー!」

そして明久は、小さな子供のように食べているグレンダの口周りを拭いていた。それを見ていた唯里は

(面倒見良いなあ……風沙さんの面倒を見てたからかな……)

と思っていた。そして、思い出した。

「あっ!」

「羽波さん!」

「ど、どうしたの!」

いきなり大きな声を上げた唯里に、雪菜と明久、グレンダが驚いた表情で顔を向けた。すると唯里は、机に頭をぶつける勢いで頭を下げて

「申し訳ありません！ 私、風沙さんを見失ってしまいました！」

と明久に謝罪してきた。すると明久は、首を傾げながら

「えっと、つまり……羽波さんが風沙の護衛役だったってこと？」

「その通りです！ 今回の作戦中、私が風沙さんを護る筈でした！ それなのに、見失ってしまっ……」

明久の疑問に答えながら、唯里は泣きそうな顔で俯いた。それを見た明久は、少し考えてから

「僕はその時の状況を知らないけど……だけど羽波さんは、その時出来ることをしてた筈……だよな？」

「は、はい……結界を張ったり式を展開したり……出来る限りはしてました……」
「だったら、責める理由はないよ……」

と唯里を許した。

「しかし……」

「まあ、バカ親父が居るから大丈夫だろうし……それに、過ぎたことより間近のことに意識を向けよう……気になるってなら、今後活かすことで反省にしようか……頑張っ

ね」

そう締めくくった明久は、軽く唯里の頭を撫でた。その行動に、唯里が顔を赤くしている。

「敵が接近してきます！」

と雪菜が声を挙げた。

「人数は？」

「二人です！」

明久の短い問い掛けに答えながら、雪菜は素早く雪霞狼を展開して外に飛び出し、僅かに遅れて明久。その後、唯里とグレンダが出た。

そして、雪菜の視線の先にあの騎士達が居た。

相對

騎士を見つけたグレンダは、怯えた様子で唯里にしがみついた。そんなグレンダの前に出て、明久は

「やれやれ、しつこいね……しつこいと嫌われるって、聞いたことないの？」

そう半ば呆れたように問い掛けた。しかし、騎士達は何処吹く風という様子で

「グレンダを渡せ……それは、貴様には過ぎた存在だ。第四真祖」

「そう言われて、怯えてる女の子を渡す訳がないじゃん」

短い会話を合図に、戦闘は始まった。先に攻撃を仕掛けたのは、騎士からだった。騎士は脇に抱えるように持っていた突撃槍を構えると、黒い弾丸を放った。

明久達は、弾丸を素早く散開して回避。黒い弾丸は着弾すると、直径2 m程のドーム状に広がった。それを見た明久は

「今の弾丸、大きく回避！ 最低限だと、巻き込まれる！」

と忠告した後、眷獸を召喚した。前回の獅子の黄金と違い、今回は双角の深緋を召喚したのは、獅子の黄金が弾かれたからだろう。

召喚された双角の深緋は、明久の意思を受け取ったのか、早速一人の騎士に突撃。音による攻撃を開始した。

双角の深緋の衝撃波による攻撃は、またも弾かれた。しかし、振動までは防げなかったらしく

「ぬ、ぐお……っ」

と騎士が、苦悶の声を漏らす。しかし、直ぐに態勢を立て直して反撃してくる。次は騎士が乗っているワイバーンの口が開いて、炎弾が放たれた。

その狙いは、明久。そう気付いた雪菜が

「先輩ー！」

と警告の意味で、明久を呼んだ。意味を察した明久は、回避するために走り出した。だが驚いたことに、炎弾が明久を追尾するように曲がった。それを見た明久は、回避を諦めて刀。鉋切長光を構え

「はっ!!」

気合い一閃。自身に迫った炎弾を真つ二つに斬った。真ん中から両断された炎弾は、少し進むと散ったのだが

「今の炎弾……追尾もだけど、手応えが……」

と呟いた。そこに、雪菜が駆け寄り

「先輩、大丈夫ですか？」

と問い掛けた。すると明久は、ワイバーンを睨みながら

「大丈夫……雪菜ちゃん、ちよつと確かめたいことがあるから、協力してくれる？」

「分かりました」

作戦内容は聞かなかつた雪菜だが、即座に頷いた。それは、明久を信用しているからに他ならない。

普段はおバカな明久だが、剣術家としての優れた戦術眼と判断力は特筆すべきものがある。だから雪菜は、明久の考えを信じて走り出した。

「愚かな……獅子王機関の劍巫が、討伐すべき第四真祖に従うか!!」

騎士は怒声を張り上げながら、雪菜を狙つて突撃槍を構えた。だがその直後、騎士は自身に迫る直径8 mはある岩塊に気付いた。

「なに!? グウツ!!」

岩塊に気付いた騎士は、慌ててワイバーンを下降させた。それにより、確かに岩は避けられた。だが、そこに

「はあああああ!!」

雪菜が、烈迫の気合いと共にまるで砲弾のようにワイバーンに突撃した。雪菜が突き出した雪霞狼は、そのままワイバーンの首筋に当たり、火花が散るに留まつた。

「この堅さは!？」

その堅さに、雪菜は驚いた。確かにワイバーンも龍種の端くれ。聞いた話によれば、鱗の堅さは小銃を弾くという。しかし、対魔に優れた雪霞狼の攻撃を弾けるとは思えなかつた。

雪菜は動揺から立ち直ると、素早く離脱。そんな雪菜を狙い、突撃槍を構えた。だが「頭上注意だよ」

という明久の言葉を聞き、頭上を見上げた。そこには、先ほど自身に迫っていた岩塊が有ることに気付き、更にはその岩に明久の腕と紐で繋がった刀が突き刺さっていた。

「しまった!？」

「押し潰されてろ」

騎士と明久の言葉が重なり、明久は腕を大きく振って刀を岩から引き抜いた。その直後、岩が騎士諸々ワイバーンを押し潰した。

「傲るからだ、バカ者め……」

杖を持っていた騎士は、立ち上がる雪煙を見ながら吐き捨てるようにそう言った。明久にはではなく、仲間の騎士に怒っているらしい。

雪煙が晴れると、見えたのは骨と血肉。ではなく、機械の部品と油を撒き散らして動かないワイバーン。そして、下半身が潰されて、こちらも血ではなく黒い液体が溢れて

いる迷彩服を着た男だった。

「自衛隊隊員?!」

「あの階級……三尉のようです、先輩」

敵の正体が自衛隊隊員と分かり、驚く明久。それに対し雪菜は、明久の前に立って構えた。もう一人の騎士を警戒したのだろう。すると、グレンダの前に立っていた唯里が

「まさか……噂に聞く聖殲派……?」

と小さく呟いた。そこに、新たに一騎のワイバーンに乗った騎士が現れて

「……敗北するとはな……」

とくぐもった声を漏らした。明久は、その騎士から発せられる気配に

「これは、真打ちが来たかな……?」

と呟いた。

黒幕の正体

「……まさかとは思うけど……あんたら、全員自衛官？」

先ほど自身が倒した自衛隊員を見ながら明久は、まだワイバーンに乗った二人を見た。明久からの問い掛けに、ワイバーンに乗っていた騎士達が答える前に、その答えは示された。

「安座真三佐！ 私に、新しい情報を下さい！ 新しい情報を!!」

それは、明久が倒した自衛隊員だった。下半身が無くなっているというのに、普通にしながら後から現れた騎士の方に手を伸ばした。

「三佐……指揮官か……」

三佐という階級から、明久はその人物が部隊指揮官だと考えた。すると、その騎士。安座真は倒された隊員の近くにまで降りて

「……お前が、私の情報になれ」

「え」

安座真の言葉の意味を理解する前に、安座真は部下の胸を突撃槍を突き刺した。

「安、安座真三佐!? 何故!?!」

「お前には、これ以上情報を与えた処で使いこなせない!」

部下からの問い掛けに、安座真は無感情に答えた。その直後、部下の姿が掻き消えていく。

「あ、ああ……ああああああああああ!?!」

叫び声を挙げながら、部下は消えた。

「あんた……どういうつもりだ……? 部下を……!!」

「……一度負けた奴には、期待しない……それに、あいつに渡した紛^{レブリカ}い物では、あれが限界だった……それに……」

明久が怒りを滲ませながら睨むが、安座真は淡々と答えた。その時、重低音が聞こえて

「先輩!」

「あれを!!」

雪菜と唯里はある方向を指さし、その先に明久も視線を向けて固まった。その先に見えるのは、迷彩柄の巨体。

「輸送機……いや、ガンシップ!?!」

それは、航空自衛隊の有していた輸送機のC-4輸送機を基に対魔族用に装甲を強化

し、大火力を施したAC-2対地攻撃機だった。

安座真は一気に高度を上げると、ガンシップに接近。右手を触れさせた。すると、ガンシップの見た目が変貌していく。

現れたのは、巨大な多数の頭を持つ龍だった。

「やっぱり、そういうことだったか……！ そのワイバーンも、元々は対戦ヘリコプターか何かだな!!」

変貌した三つ首の龍を見て、明久はワイバーンを睨んだ。そして、明久の読みは当たりだった。安座真達が乗っていたワイバーンは元々は装甲が強化された対戦車ヘリコプターだった。

安座真達はそれらの装備を、一般隊員達に気付かれないように聖職派の仲間達に遠回りさせて近隣に運ばせて、隠していたのだ。

それらを、聖職の遺産を使って変質させていたのだ。

「もう一度言うぞ、第四真相……今すぐ、グレンダを差し出せ……それは、貴様には過ぎた存在だ……それに、なんなら貴様に、人としての死を与えてやるぞ?」

「……嫌なこった。あんたらに渡したら、絶対にロクな事にならない……そんな確信がある……それにさ……あんたが、自分の部下を容易く切り捨てたのを見てるんだ……だから、安座真だっけ……あんたを、倒す」

「傲ったな、第四真祖!!　ここでも消えろ!!」

明久が刀を突き付けた直後、安座真は明久の方に右手を向けた。その直後、黒い弾丸が明久に迫った。その弾丸の速度は、部下の比ではなく、明久は回避が間に合わない判断し

「離れて!!」

と雪菜と唯里を突き飛ばした。その直後に足下に着弾し、明久の足下に一気に広がった。

「ぐっ……あつ……!」

明久は何とか離脱しようとしたが、離脱出来ずに黒い水溜まりの中に沈んでいく。

「先輩!!」

「明久さん!!」

雪菜と唯里は明久を助けようとしたが、その二人を明久は視線で止めて

「離脱して!!　多分、湖の近くに父さんかお祖母ちゃんが居る筈だから……!!」

と助言して、そのまま沈んだ。

「そんな……!」

それに雪菜と唯里が固まった時

「うー……ダー!!」

なんとグレンダが、明久が沈んだ黒い水溜まりに飛び込んだのだ。

「なっ!?!」

「グレンダが!?!」

安座真と残った騎士。御影特尉は、驚きで固まったどうやら、完全に予想外だったらしい。そして、黒い水溜まりは、閉じきった。

「バカな……グレンダが……」

「異境オドに、自ら飛び込んだだと……バカな……!?!」

そうして明久は、異境を知る。

異境

「なんだ、ここは……」

黒い水溜まりの中に沈んだ明久は、気がつくやうと廃墟の中に立っていた。しかも只の廃墟ではなく、廃都市だった。それも、見覚えのある廃都市。

「絃神島……じゃないけど……凄く似てる……」

余りにも見覚えのある光景に、明久は一瞬自分が居るのが絃神島だと思つた程だ。しかし、直ぐに違つたと分かつた。

その理由は、瓦礫に半ば埋もれていた道路標識に書かれている文字だ。日本語でも英語でもない、否、地球の言葉でもない、初めて見る文字だったからだ。

しかし、それ以外は余りにも絃神島と酷似していた。

モノレールの橋脚、バス停、そしてキーストーンゲートの建物。そのどれもが、絃神島と瓜二つだった。

だが明久は、ある考えに至つた。それは

「まさか……絃神島は、ここをモデルにしたのか……？」

それは、絃神島が今居る場所のコピーだという考え。

そう考えたら、むしろ納得してしまえたのだ。

その時、徐々に周囲の光景が見えなくなり始めた。

「な、なんだ……!?!」

明久が慌ててる間にも、周囲は闇に染まっていく。魔力すら使えない状況では、どうすればいいか分からなかった明久が固まっていると、とうとう何もかも見えなくなつた。

それでも何かヒントを得ようと、明久は周囲を見回していた。その時、自分の体まで見えなくなってきたことに気付いた。

「う、うそでしょ!?!」

徐々に見えなくなっていく体に、明久は動揺した。体の感覚はあるが、見えなくなるというのは精神的に動揺してしまう事態だった。

完全に見えなくなった明久は、自分がまだちゃんと居ると自覚する為に、強く両手を握りしめた。

それから、一体どれ程の時間が流れたのかはわからない。暗闇というのは、時間の流れすらも分からなくさせていて、明久は初めての経験に不安に押し潰されそうになつていった。

(一体……何時まで……)

そう考えていた時、不意に頭上に何かを感じた明久は視線を上に向けた。すると頭上に、光が見えた。

最初は眩しく思ったが、久しぶりの光に明久は無意識に右手を伸ばしていた。脳裏には敵かもしれない、という考えが過つたものの、手を伸ばした。

最初は光の珠だと思っていたのだが、徐々に高度を下げてきていた光の珠の中心に、人影が見えてきた。

(人……なのか……? 一体、誰が……)

目を凝らしていると、光は徐々に収まっていつて、人影の正体が分かった。長い鋼色の髪の毛の不思議な少女、グレンダだった。

「グレンダ……!?!」

「あきひさー!」

まさかグレンダが来るとは思わなかった明久は、驚きながらも降りてきたグレンダを抱き止めた。

「グレンダ! どうして、ここに!?!」

「あきひさを、むかえにきた!」

明久の問い掛けに、グレンダはたどたどしく答えた。確かに、一人よりも二人の方が

ずっと気が楽になった。しかし

「迎えに来たって言っても、此処が何処かも分からないのに……」

「グレンダ……ここ、しつてる……」

グレンダの言葉を聞いて、明久が驚いていると、グレンダはいつの間にか見えるようになっていた周囲を見回して

「ここは……異境……」

「異境……？」

明久がおうむ返しに問い掛けると、グレンダはゆっくりと歩き始めた。明久もその後を追いつけると、少しずつ周囲の景色が変わり始めた。廃墟は普通の街並みになり、そこを人々が駆けていく。

ただ、ぶつかると思った人がすり抜けていき、明久は

「これは……」

「この世界の記録……聖殲の記録……」

「聖殲の記録!?!」

グレンダから告げられた言葉に、明久は驚いた。聖殲は遙か過去に起きたという世界を巻き込んだ大きな戦いだ。遙か過去というからには、文明も魔導以外は古い文明だと思っていた。

しかし、その技術水準は現代と変わらないものだ。

どういふ事だと明久が混乱していると、周囲の景色はまた廃墟に変わり、また暗くなり始めた。

するとグレンダは、明久の方に振り向いて

「あきひさ」

と手を伸ばした。その手を握ると、グレンダの姿が変わった。雪菜、沙矢華、夏音、ラ・フォリア、優麻と次々に。それを見た明久は

「まさか、僕の血の記憶を読んだの!？」

と驚愕した。極一部だが、血の記憶を読める能力が有る存在が居る、という話を那月から聞いたことがあった明久は、グレンダが姿を変えた事から、自身の血の記憶を読んだと気付いた。そしてグレンダは、雪菜の姿で明久に抱きつき

「ねえ、あきひさ……かえりたいよね……?」

「当たり前だよ……待たせてるし、何より……まだ終わってない……!」

明久の言葉を聞いて、グレンダは頷いた。そして、着ていた服の胸元を開いた。明久は、グレンダの意図を察して

「……いいんだね、グレンダ?」

という明久からの問い掛けに、グレンダは無言で頷いた。それを見た明久は、グレン

ダを抱き締めてからその首筋に噛み付いた。

帰還

明久とグレンダが沈んだ時、雪菜達だけでなく聖殲派側も固まっていた。雪菜と唯里が呆然としていると

「三佐、これは完全に想定外です！ まさか、グレンダが異郷に自ら飛び込むなど!?」
「分かっている！ くそっ！ これでは、我々の計画が!!」

と聖殲派の二人が、苛立った様子で会話していた。

そこで雪菜は、我に返って

「計画というのは、何のことですか？」

構えながら、二人を睨んだ。そこで唯里も我に返り、遅れて構えた。

「貴様らに、教える訳が……!」

「いや、計画は最早最終段階間近だ……どうせ、止められん……」

御影特尉を遮る形で、安座間三佐が前に出て

「……貴様らは、可笑しいとは思わないのか？ なぜ、この世界には魔族などという穢れた存在が居るのか……本来この世界は、我々人間のみが住まう世界だ……」

と語りだした。雪菜は最後まで聞くつもりだが、油断なく構えている。安座間は動かないだろうが、御影が何時動くか分からなかったからだ。

「そうお考えになられた我らが神は、魔族を異郷に追いやり封じ込める為の戦い……聖職を始めた。しかし、仲間裏切り者が居て、負けてしまい、逆に異郷に追いやられ封印された……我らはその御遺志を継ぎ、魔族を異郷……魔力・霊力・呪力が使えない場所に追いやり封印することにした……密かに同志を集め、戦力を集め……そして、情報を集めた……その情報の一つに、この地に異郷を管理する龍……グレンダが封印された聖職の遺跡が存在することを突き止めた」

そこまで聞いて、唯里が驚いた様子で

「まさか……今回の儀式は、その封印を解く為に!？」

「その通りだ、羽波攻魔官……蜂蛇が出てくることも想定していた……同志以外を生き餌にして蜂蛇を引き離し、その間に我らの誰かがグレンダを回収し、離脱するつもりだったが……吉井嬢に感応し、目覚めたのは予想外だった……おかげで、余計な手間と損害が出てしまった」

唯里の言葉に頷き、後半は何処か呆れた様子で首を振った。つまり安座間は、最初から聖職派以外の人間全員を見捨てるつもりだったのだ。

しかし、幾つも予想外が重なり今に至る。

「グレンダは、数少ない異郷の出入口を作れる存在だ……そのグレンダを手中に収め、操れば世界中の魔族を異郷に追いやれる……筈だった……」

安座間はそこまで言うかと、苛立った様子で持っていた鎗を地面に突き刺し

「まさか、そのグレンダが自ら異郷に飛び込むなど思いもしなかった!! たかが吸血鬼の小僧を追い掛け、異郷に飛び込むなどとはな!!」

と怒鳴った。

彼らにとつてグレンダは、神が残した異郷の管理者。つまりは、使徒に当たる。その使徒が、排除すべき魔族の後を追いかけた。

確かに、彼らからしたら許しがたい事だろう。

だが

「……グレンダの気持ちは分かるよ」

「なに……?」

唯里の呟きを聞いて、安座間と御影は唯里を睨んだ。しかし唯里は、毅然とした態度で

「貴方達は、最初から犠牲を容認し過ぎてる! そんな貴方達が怖くて、グレンダは私達に着いてきた! グレンダは、自分の意にそぐわない事をしたくなかった!」

「貴様……!」

唯里の言葉を聞いて、安座間と御影は苛立ちを更に募らせた。その身から、殺気を感じさせる程だ。

しかし唯里は、確固たる意思で

「貴方達は、ここで倒す！ それで、私達……獅子王機関の剣巫の役割！」

と告げて、六式改を構えた。その唯里に従うように、雪菜も構えた。その時、唯里が何かに気付いて視線をある場所。

明久とグレンダが沈んだ場所に向けて

「ゆっつきー！ あれ!!」

と指差した。それを聞いて、雪菜、安座間、御影の三人も視線を向けた。すると、一度は閉じた筈の黒い影。

異郷の門が、少しずつ大きくなっていたのだ。

「安座間三佐！ あれは一体!?!」

「私にも分からない！ 何が起きている!?!」

御影と安座間は困惑するが、雪菜にはある確信があった。その時、異郷の門から巨大な影が飛び出した。

最初はその風圧に全員が身構え、動きを止めたが、雪菜は反射的にその影を追って頭上を見上げた。

そこに見えたのは、鋼色の鱗の巨大な龍。龍の姿のグレンダと、その背中に乗っていた明久だった。

「先輩！」

「明久君!？」

雪菜と唯里は、嬉しそうに

「バカな!？」

「第四真祖!？」

御影と安座間の二人は、心底驚いていた。

すると明久は、人間の姿に戻ったグレンダに持つていた上着を投げ渡して

「よう、お二人さん……そっちからしたら、予想外なようだけど……帰ってきたよ……」

と安座間と御影を睨んだ。すると安座間は、明久に鎗を突きつけて

「貴様……どうやって戻ってきた!？」 異郷から帰るなど、今まで誰も出来なかったのだ

ぞ!？」

困惑した様子で、明久に問い掛けた。すると明久は、背中にくつついてきたグレンダの頭を撫でて

「グレンダのおかげだよ……グレンダが、門を開けてくれたから戻ってこれた」と告げた。

それは、安座間からしたら完全に予想外の事だった。

異郷では、あらゆる異能が使えなくなる。それは、以前から知っており、安座間はグレンダも例外ではないと考えていた。

だが、何事にも例外が存在した。

まず、安座間は勘違いしていた。グレンダが操るのは、異郷の力の行使、と安座間は考えていた。

しかし実際は、異郷の空間を操ることなのだ。異郷の力の行使は、その副産物に過ぎなかったのだ。

その勘違いに気付いた安座間は、笑いながら

「素晴らしい……素晴らしいぞ、グレンダ！ その力があれば、間違いなく魔族を排除出来る！ さあ……神の正統後継者たる私達に……」

とグレンダに手を差し伸べた。だが、グレンダは従わず

「や！ あきひさと居る！」

と拒否した。グレンダの言葉に、安座間達が固まっていると

「という訳だ、安座間……あんたらにグレンダは渡せない……部下を見捨てて殺したた奴を、簡単に信じられると思うな……ここから先は、第四真祖ポの戦争ケンカだ!!」

「いいえ、先輩！」

「私達の戦争だよ!!」

宣戦布告した明久の両側に、雪菜と唯里が立った。
今、最終局面に突入する。

戦闘開始

初撃は、安座間の後ろに居たヒュドラモドキだった。ヒュドラモドキは口を開き、炎弾を放った。

その狙いは、明久。

「ここは、私が！」

そう言つて、唯里が前に出て

「六式改・剣……起動!!」
ブートアップ

2つに別たれた六式改の剣、その能力を起動させた。

六式改・剣の能力は、沙矢華の持つ六式攻魔機構弓デア・フラッシュの剣形態と同じ空間切断術式である。

「はっ!!」

気合いと共に振り下ろした剣の軌跡に、空間切断術式による空間の断層が出来て、そこに飛来した炎弾は弾かれた。

「明久くん! あいつは、私がなんとかします!」

「だー!!」

唯里はそう言って、動き始めていたヒュドラモドキに突撃を開始。それに同調して、グレンダが龍化して唯里の援護に動いた。

実はこの選択は、正解だった。ヒュドラモドキはワイバーンモドキと違い、聖殲派の騎士が騎乗していない為に異郷による防衛が展開されない。だが、攻撃機としての装甲の堅さは健在なので、雪菜の雪霞狼では相性が悪いのだ。しかし、空間切断ならば装甲の堅さは関係無い。

ヒュドラモドキは全ての口を開き、次々と炎弾を放った。

だがその炎弾は、グレンダが腕を振り払って逸らされた。その間に、唯里は一本目の根元に踏み込み

「はああああああ!!」

気合い一閃、一撃で一本目を切り落とした。

僅かに時を戻し、グレンダが動いてそのグレンダを安座間達の視線がグレンダを追った瞬間、明久が動いた。

縮地で一瞬にして、安座間の乗っていたワイバーンモドキの頭の上に移動し

「なっ!?!」

「落ちてもらうよ」

安座間が驚いている間に、ワイバーンモドキの首を切断。落ちる前にまた縮地で移動し、今度は沖山のワイバーンモドキの背中に着地。

「貴様!!」

「お前は、直接落ちろ!!」

沖山が振り向く前に、側頭部に思い切り蹴りを放って叩き落とした。それを確認してから、明久は直ぐにワイバーンモドキの首を切断して離脱した。

「先輩!」

「いくよ、雪菜ちゃん!!」

これで、対空戦を意識する必要は無くなった。やはり頭上を抑えられるというのは、戦略的にも意識的にもかなり不利なのだ。

言葉短くやり取りした直後、明久と雪菜は突撃した。雪菜は沖山に、明久は安座間である。

「来い、劍巫!」

「はああああ!!」

なんとか立ち上がった沖山は、蹴りで碎かれた兜を放り投げると、杖を構えた。だがやはり、明久の蹴りが効いてるらしく、足が震えているのを雪菜は気付いていた。

だが、相手は戦闘のプロと言える自衛隊の特務仕官。

雪菜の一撃を、杖でなんとか受け止めた。

つばぜり合いになると、雪菜は

「……その杖が、異郷の道具なんですね？ 安座間三佐のあの突撃槍もですか？」

と沖山に問い掛けた。

「その通りだが、我々の持つレプリカを三佐の持つオリジナルと一緒にするな……！」

我々のは、三佐の持つオリジナルから能力の一部を与えられたに過ぎない……！」

雪の問い掛けに、沖山は押し返しながら答えた。

「どうやら、先に死んだ聖職派の自衛隊隊員の持っていた槍と沖山の持つ杖は、安座間
が持つ槍から能力を与えられたレプリカらしい。」

ということとは、出力や能力は安座間が持つ槍の方が強力のようなのだ。

「私たちは、負ける訳にはいかないのだ……！ この地球を、魔族共から取り戻す為にな
!!」

「そうやって、排斥しようとするから……排斥する為に手段を選ばないから、貴女達はテ
ロリストと呼ばれるんです!!」

魔族を見下す沖山に、雪菜も負けじと全身を呪力で強化し、沖山の腹に蹴りを入れた。

「ぐうっ!!」

蹴りを叩き込まれた沖山は、明久の蹴りのダメージを有って両膝を突いた。その瞬間

「響よ……」
ゆらぎ

全身の力を上乗せし、胸部に掌打を叩き込んだ。

魔族にも大打撃を与える一撃で、沖山は完全に意識を失い倒れ、杖を落とした。

雪菜は安座間に使われないうようにと、杖に雪霞狼を叩き込んでへし折った。

（あの異郷というのが展開されなければ、雪霞狼も効くようですね……）

破壊出来たのを確認し、考察してから視線を明久の方に向けた。明久と安座間は激戦を繰り広げていた。

安座間は槍から次々と異郷の弾丸を放ち、明久はその弾を縮地と体さばきで回避しつつ接近を画策していた。

だが、安座間は練度の高い仕官であり、明久を近付けまいと動いていた。

槍から異郷の弾を放つだけでなく、時々拳銃を使ったりしていた。今のところ、明久はその全てを避けており、それで時間を稼がれていた。

もしかしたら、聖殲派の自衛隊隊員達が来るかもしれないと明久は思っていたが、実はその心配は無かった。

今から数十分前、聖殲派の自衛隊隊員達が布陣していた陣地を、ヴァトラーとラ・フォリアが襲撃していて、壊滅していたのだ。

ヴァトラーは未知の相手との戦いが目的だったが、ラ・フォリアは聖殲派の道具の回

収が目的だった。

壊滅したことは、安座間も知らない。

だから明久は、少し強引に攻めることにした。

「行くぞ!!」

「死ね、第四真祖!!」

明久が縮地で移動を開始すると、安座間は予想軌道上に弾幕を形成したのだが、当たらない。というより、安座間の予想とは違って跳んでいたのだ。

予想外な動きに反応が遅れ、明久は安座間の頭上を取り、安座間は迎撃しようと槍を向けたのだが、その穂先を明久は蹴り

「はっ!!」

思い切り、袈裟斬りに鉋切長光を振るった。

決着

明久の袈裟斬りで、安座間が持つていた突撃槍は半ばから切断され、穂先は地面に落ちていく。それを安座間は、信じられないといった様子で視線が追う。

そしてその隙を、明久は見逃さずに返す刃で腰から肩まで切り裂いた。

その身から流れるのは、先に倒した自衛隊隊員とは違って赤い血だった。どうやら、体は普通の人間らしい。

出血量から考えて、今すぐに治療しないと助からないだろう。そう考えた明久は、刀を突きつけながら

「……今投降するなら、命は助けるけど」

と投降するように促した。

明久としても、むやみやたらに命を奪うつもりは無いのだ。出来ることなら、殺さないで終わらせたいのが本音だ。

だが安座間は、投降を促した明久を鋭く睨み付けて

「……我らが神に誓い、投降はせん!!」

と言うと、突撃槍の柄を構えた。それを見た明久は、その柄で戦うのかと思ったが
「ふんっ!!」

「なっ!?!」

なんと安座間は、その柄を自身に刺したのである。

まさか自決か、と最初は思っていた明久だったが、突撃槍が脈動し、安座間の体に同
化を始めたことに気付いた。

「な、なんだ!?!」

「先輩、下がってくださいい!」

明久は驚きながらも、雪菜の言葉に従って後退した。

すると、安座間の姿がみるみると変貌していく。

巨大化し、最早人とは呼べない見た目が変わっていく。

「なんだ、あれは!?!」

「恐らくですが、あの槍によって吸収された生物と融合したんだと思われます! ワイ
バーンもヒュドラも、あの槍の能力で作り出されたのかと!」

明久が混乱していると、駆け寄ってきた雪菜が推測混じりに告げた。そして、雪菜の
推測は当たりだった。

安座間が持っていた突撃槍は、刺した対象の情報を吸収し、融合する能力が備わって

いる。能力はそれ一つだけではないが、今回はそれが中心になっている。

今まで安座間は、様々な物の情報を吸収し、使用してきた。

今回は、自分自身に今まで突撃槍で吸収してきた全ての情報を流し込み、融合したのだ。

しかし代償として、最早理性は無くなり、本能に従って暴れ始め、その醜悪な見た目と相まって怪物としか言い様がなかった。

「くっ……！　攻撃範囲が広い!?!」

やはり巨体な為に、その攻撃範囲も常軌を逸しており、簡単には近づけない。そこに、ヒュドラ擬きを倒した唯里も来て

「援護しますー!」

と言って、術式を放った。

巨体だから攻撃範囲は広いが、動き自体はそこまで早くないので避けられる心配は無い。だが、唯里が放った術式は黒いオーラで弾かれた。

「あのオーラは!?!」

「異郷!?! あれでは、私達の攻撃は効きません!」

雪菜と唯里は、化け物から放たれた異郷の砲弾を回避する為に、一気に後退。それと入れ替わるように、龍形態のグレンダが突撃。尻尾で叩いたが、大して効いてるように

は見えない。

やはり巨体なだけあり、生半可な攻撃は大して効かないようだ。

「あれを倒すには……」

「術式ではなく、単純な物理攻撃……それも、対艦クラスの攻撃力が必要かも……」

今の自分達の攻撃では、倒せる可能性は皆無と考えた雪菜と唯里は必死に頭を回していた。その時、明久が前に出て

「……本当、いいタイミングでこの眷獣を掌握したよ」

と言つて、左腕を高々と掲げた。

「焰光カレイド・ブラッドの夜伯の血脈を継ぎし者！ 吉井明久が、汝の枷を解き放つ！ 疾しく在いれ！ 二

番目の眷獣、牛頭王コルタウリ・スキヌムの琥珀!!」

明久が掲げた左腕からマグマを彷彿させる血が溢れ、それが優に10mを越える溶岩で形成された牛頭の眷獣が現れた。

「あれは……新しい眷獣!？」

「これが、第四真祖の眷獣……!？」

雪菜は新しい眷獣だった事に驚き、唯里は眷獣から感じる凄まじい魔力に驚いた。

2つの巨大な存在が相対する様は、まるで怪獣大決戦のようだが、そんなことを気にする余裕は今の明久には無い。

「やれ、牛頭王の琥珀!!」

明久が指示すると、牛頭王の琥珀は咆哮を上げ、その手に持っていた戦斧を地面に振り下ろした。

眷獣自体は魔力で構成されているので、普通に攻撃したのでは異郷のオーラを突破出来ない。どうするのかわかっていると思ったら、戦斧を振り下ろした場所から溶岩で形成された槍が幾つも隆起し、次々と化け物に向かっていった。

「溶岩で形成された槍!!」

「この熱さ……本物の溶岩を使ってる!!」

牛頭王の琥珀の能力は、魔力で地面を溶岩に変えた後、その溶岩を槍の形にして相手に放つのだ。

その能力は、今までの眷獣とは気色が違うが、物理的破壊力は正に災害級になる。

巨大な溶岩の槍という単純な破壊力もだが、最低でも対象の半径数百mは溶岩の海に変わるのだ。

そして、物理攻撃ならば異郷のオーラも関係なく貫通する。

化け物は槍による破壊と、溶岩の海によって焼かれて苦痛の雄叫びを上げている。

化け物も反撃にその巨腕を振るうが、地中から隆起した溶岩の槍が刺さって止められ、更に破壊される。

その後、同じようにもう片方の腕も破壊され、最早攻撃手段は残されていない。

その時、化け物の姿が崩れ始めたのだ。

しかも、下からも溶け始めている。

「終わり……かな……」

明久がそう呟いた時、驚くべきものが見えた。

なんと、崩れていた化け物の胸辺りに、安座間の姿が見えたのだ。

「なっ!?! 安座間三佐!?!」

「先輩!!」

「助けたいけど……!」

既に、牛頭王の琥珀の召喚は解除している。しかし、溶岩の海は簡単には消えない。

明久にもどうする事も出来ず、それは雪菜と唯里も同じで、諦めるしかないのか、と

三人は思っていた。

その時、頭上から

『私にお任せを、明久』

と声が聞こえて、三人は頭上を見上げた。

明久達の直上に、一隻の白亜の装甲飛行船が飛んでいた。その飛行船を、明久は知っている。

「あれは……ラ・フォリアの！」

それは、アルディギア王国のラ・フォリア座乗飛行船に他ならず、それを証明するよ
うに、ラ・フォリアが飛び降りた。

雪菜と唯里は驚くが、明久は気付いていた。その身から、神々しい光が溢れているこ
とに。

すると、ラ・フォリアの背中から翼が現れて、浮遊を開始。そしてラ・フォリアは、そ
の手に呪式銃を持ち、撃った。

ラ・フォリアが撃ったのは、氷結地獄ニブルヘイムを封じ込めた弾であり、その効果は一気に解放
された。

みるみると溶岩の海が凍りつき、そして崩壊していた化け物の体も、安座間諸とも凍
りついたのだ。

それを見た三人が安堵していると、ラ・フォリアがゆっくりと明久の隣に着地し
「最後でしたが、お手伝い出来て良かったですよ、明久」

と朗らかに告げた。

こうして、咎神の騎士との戦いは終わったのだった。

帰路にて

「やれやれ……風沙を連れて帰ろうと思った筈なのに……どうして、こうなったんだか……」

そう呟いたのは、ラ・フォリアの飛行船に乗っている明久だった。戦闘終了後、ラ・フォリアが氷付けにした安座間を回収するついでに、明久達を乗せてくれたのだ。

「そうですね……流石に、疲れました……」

そんな明久に同意したのは、隣に居る雪菜だ。雪菜も相当に疲れたらしく、椅子の背もたれに体を預けている。

因みに、大きめのソファアーにグレンダと唯里が居るのだが、二人して寝ている。

「明久。あれは、貴方の所絃神島の人では？」

ラ・フォリアのその言葉に、明久はラ・フォリアから双眼鏡を受け取り、下を見た。確かに、赤い多脚戦車に乗った浅葱の姿があった。

「あ、本当だ……」

「ついでに、回収しましょうか……艦長」

「アイ・マム！」

艦長と呼ばれた厳つい男性は、威勢よく返答してから部下に飛行船を降下させるように命じた。

それから、十数分後

「……なんて格好なの、浅葱」

「好きで着てるんじゃないのよ!？」

まるで競泳水着を彷彿させる格好の浅葱に、明久は突っ込みを入れて、浅葱は顔を赤くしていた。

余談だが、スタイルの良さが際立つ格好なので、浅葱のスタイルの良さに雪菜が無の表情になっているのだが、明久は気付いていない。

その時明久は、多脚戦車の中から出てきたリディアーナともう一人に気付いた。リディアーナは、一度絃神島で会った為に知っていたが、もう一人。

イブリスベール・アズリーズを見て、首を傾げた。すると、雪菜が慌てた様子で

「先輩！ 彼は、滅びの王朝の王直系の一人。イブリスベール・アズリーズ殿下です！」

と説明した。雪菜の説明に、明久は驚いた表情で

「なんで、王家直系の吸血鬼ヒトが、一緒に……?！」

と呟いた。

「なにな、ちよつとした目的があつてな……まあ、その目的も今達成したが」
イブリスベールはそう言つて、ククツと笑つた。

明久には分からなかつたが、イブリスベールの目的は第四真祖たる明久を見に来たのだ。
だ。

ただ、絃神島に入るには一度日本本土に入らねばならず、日本本土に来たのだから、ついでに観光するか、という形で歩いていたら、今回の事態に遭遇したのである。

それはさておき、飛行船のクルーが用意してくれた上着を羽織つた浅葱が

「それより明久、どうやって絃神島に戻るのよ！」

「へ？」

浅葱の言葉の意味が分からず、明久は首を傾げた。すると、雪菜が

「そうですよ、先輩！ 私達、絃神島から正規手順を踏まずに日本本土に来たんです！」

と思ひ出したように言つて、明久も理解した。

確かに、明久達は一切正規手順を踏まないで絃神島を出て、日本本土に渡つたのだ。

もしノコノコと帰つたら、即座に拘束されるだろう。

明久が頭を抱えて唸っていると、ラ・フォリアが笑みを浮かべて

「それでしたら、問題は無いかと……」

と言って、明久達に端末を差し出した。困惑しながらも受け取ると、画面に表示されているのはメールだったのだが、内容は

『殿下のご指示に従い、絃神島の出入国管理センターのデータを書き換えておきました。第四真祖様、劍巫様、藍羽浅葱様のお三方は、正規手順を踏んで、日本本土に渡ったことになりました』

と書いてあった。メールの送り主は、絃神島で夏音の護衛の任務に就いているユステイナ・カタヤだった。

なるほど、忍者フリークの彼女ならば潜入もこなすだろうと明久は思った。

そして、ユステイナに絃神島の出入国管理センターのデータ書き換えを指示したのは、他ならぬラ・フォリアだと言うことを理解した三人は

『大変、ありがとうございます』

と口を揃えて、ラ・フォリアに感謝した。

すると、ラ・フォリアは

「ということですので、絃神島まではゆっくりしていつてください。艦長」

「アイ・mam! 空きの客室にご案内させましょう」

ラ・フォリアの意図を汲み、艦長は無縁を使って案内要員を呼び、それにより明久達

とイブリスベールは空きの客室に案内された。

その後、寝ようとした明久の部屋にラ・フォリアが現れてすったもんだ起きたのだが、詳細は割愛させていただく。

こうして、風沙を巡る戦いは幕を下ろした。

余談だが、その風沙は獅子王機関が責任を持つて絃神島に送ると言い、牙城は深森さんに殺されると怯えながらも、近くのある企業傘下の病院に運ばれていたりする。

タルタロスの薔薇編

序章

「……次の任務地が、まさか絃神島とは……」

「……そうだね。偶然だけど……」

そう呟いていたのは、船で絃神島に向かっている斐川志緒と羽波唯里だった。尚、唯里の膝を枕にしてグレンダが寝ている。

「確か、向こうは一年中暑いんだったか……」

「聞いた話だと、常に30度以上だって」

唯里の説明を聞いた志緒は、嫌そうな表情をしてから唯里を挟んで少し離れた席に座っている人物に視線を向けて

「それで、外国担当の筈が、何故絃神島に？ 煌坂」

と沙矢華に問い掛けた。

すると沙矢華は、少し面倒そうにしながら

「任務に決まってるでしょ？ 今絃神島には、滅びの王朝のVIPが居るのよ」

と答えた。

それを聞いた唯里は、少し考えてから

「……つまり、絃神島に劍巫と舞威姫が二人ずつ……計四人赴任するんだ……」

と何気なしに呟き、それを聞いた沙矢華は嫌な予感を覚えた。獅子王機関でも腕利きが揃う劍巫と舞威姫、それが四人も一ヶ所に集まる。

普通ならばあり得ない事態に、沙矢華は猛烈に嫌な予感を覚えた。

（まるで、あの島で何かが起きるみたいな……それを見越して、派遣した？ まさかね……）

そう考えながら、沙矢華は時計を見て、もう少しで絃神島に到着する時間だから、下りる準備をしようと考えて、立とうとした。その瞬間、甲高い警笛が鳴り響き、船が急制動を掛けた。

「な、なに!?!」

「なんだ!?!」

「ダー?」

まだ実戦経験の少ない唯里と志緒、起きたばかりのグレンダは困惑していたが、沙矢華は異常事態だと気付いて

「甲板に行くわよ!?!」

と言つて、ケースを担いで上甲板に出る為の階段に向かつて走り始め、僅かに遅れて唯里、志緒、グレンダの三人も走つた。

「なっ……!!?」

「な、なにこれ……!!?」

「何が起きたんだ……!!?」

「ウー……?」

沙矢華、唯里、志緒の三人は有り得ない光景に困惑し、グレンダは不思議そうに目前の光景を見た。

四人が乗る船の前方に、凄まじい数の様々な船が転覆し、浮いていたのだ。

その時、沙矢華はハツとした様子で

「斐川さん！ 式紙で生存者の搜索をするわよ！ 羽波さんは、船員に救助の準備をするように伝えて！」

と指示を出した。

「わ、分かりました！」

「了解した！」

唯里は艦橋に向かつて走り、志緒は腰の呪符ホルダーから素早く数枚の式紙用の呪符を取り出した。

沙矢華も式紙の準備をしつつ、内心で

(絃神島で、何が起きてるのよ！ 雪菜達は無事なの!?)

絃神島に居る雪菜と明久の安否を気にしながら、生存者の搜索を始めた。

そして、テロリストとの戦いが始まる。

不安

「なあなあ、お前ら。年末年始、何処に行つてたんだよ？」

「僕はお婆ちゃんと呼ばれて、本土の神繩湖に行つてたの」

「アタシは、絃神島じゃ売られてない服を買う為に、本土に行つてたわよ」

基樹からの問い掛けに、明久と浅葱は適当に返答した。一応、ユステイナ・カタヤから聞いた本土に渡る理由を伝えた形である。

しかし、基樹は納得していない様子でいた。

新年が明けて、早二週間。明久達は普通に登校していた。風沙はどうやら神繩湖で何があつたかはよく覚えてないらしく、お婆ちゃんに会つた事だけは覚えていた。

まあ、それも都合だと思ふし、教える理由は無いので話してはいない。

そして、授業が終わり、帰りに雪菜と一緒にスーパーに寄つたのだが

「……なんかさ、今年に入つてからどんどん値上がりしてるよね」

「そうですね……最低でも、50円は値上がりしています」

商品棚に並べられているあらゆる商品の値段が、全般的に値上がりしてきていた。

それだけでなく、並べられている数も少なく、棚の一部には空いてる所すら見える。今見ている牛乳ですら、年末から50円は値上がりし、肉に至っては一部は100g 100円近い値上がりになっている。

「どうなってるんだ？ 確か、不作ってニュースも無かったよね？」

「はい。本土ですが、諸外国でも不作や不漁というニュースは確認出来ていません」

二人は何が現いで値上がり続きなのか分からず、揃って首を傾げながらも、なるべく安く買いたい物を終わらせた。

「絃神島には水耕栽培があるから、一部の野菜はそんなに値上がりしてないけども……」
「やはり、何か有った。と考えるのが自然ですね」

二人はそう言いながら、商業地区の一際大きな建物。

物資集積所を見た。そこには、海空問わずに絃神島に運ばれたあらゆる物理が一度集められ、物資集積所から各地区のあらゆる施設に物資が送られる仕組みになっている。

しかし、その物資集積所の全出入口には完全武装の警備隊が配置され、物々しい雰囲気になっている。

普段は居たとしても軽装備の警備員が、数人居る位なのだが、今は明久が確認出来る限り、30人近く居る。

しかも、今朝見たニュースでは、近い内に配給制になるかもしれない、と報道されて

おり、一部では暴動になりかけている場所もあると噂を聞いた。

「……何が起きてるんだ……？　雪菜ちゃん、他の国の魔族特区で、似たような事件が起きた、とか知らないかな？」

「すいません、先輩。私は国内の事件なら大部分は把握してるんですが……外国ですと、沙矢華さんの方が詳しいかと……」

そう言われたら、明久としたら黙る他無かった。

確かに言われてみれば、雪菜は訓練生だったのを異例の抜擢で正規の剣巫になったわけ、そして剣巫は主に日本国内の事件を担当しているらしい。

そして、舞威姫たる沙矢華は外国の事件や何らかの外交関係を担当しているので、諸外国で何が起きているのか、どんな事件が起きたのかは殆ど把握しているという。

「……直感なんだけど、もう事件は始まって……それも、かなりヤバイレベルのが……」

「私もそう思います……一応、私の方でも似た事件が過去にあったか確認します」

二人はそう会話して、家路に着いた。

そして家に帰ると、凧沙がレシートを見て頭を抱えていた。やはり、値上りに驚き、どうすれば良いのか悩んでいるのだろう。

夕食後明久は、最近母から連絡がない事を考えていた。

一応、予定では年末年始のMARの社員旅行から帰ったら、一度帰宅し暫く休みの予定だったのだが、帰宅した形跡も無ければ、連絡すら無い。

「……それどころか、本土のニュースも見なくなつたな……」

それを思い出した明久は、また外国に行っているらしい父親に一度電話を掛けようとした。

だが、虚しい電子音ばかりで繋がらない。

「……なんだ……まるで、絃神島が世界から切り離されたみたい……まで、切り離された……？」

自分の言葉に引つ掛かりを覚えた明久は、窓際に寄つて空を見上げた。

「……空間遮断？ いや、だったら那月ちゃんの空間魔術と相性が悪い筈……」

明久が考えていると、風沙が

「ねえ、明久くん？ お風呂空いたよ？」

と声を掛けてきた。その様子から、何回も言っていたようだ。

「あ、ああ。ごめん。入るよ」

まさか、ね。そう思いながら、明久はお風呂に入る準備に向かった。

そして翌日、一気に事態が動く事になるとは、この時は予想すらしていなかった。

始まり

翌日、明久と雪菜は学校帰りに物資集積所に寄り、配給を受け取る為に列に並んでいた。今朝、ニュースで配給制になったのがニュースで知らされた為だ。

長い列に辟易しながらも、明久は

「それで、雪菜ちゃん。何か分かった？」

「すいません、軽く調べた限りではまだ……しかし、絃神島のデータベースを見た限りですが……どうも、隠蔽されているような感じで……」

「隠蔽されてる？」

雪菜の言葉に、明久は怪訝そうな表情をした。そんな会話をしている内に、自分達の番が来た為に、二人はメールで送られてきた番号を係員に見せて、食糧を受け取った。

その直後、轟音が響き渡ると同時に物資集積所の一ヶ所で大爆発が起きた。

突然の事態に人々は悲鳴を挙げながら逃げ惑い、明久と雪菜は飛んできた瓦礫を弾きながら後退し

「なんだ!？」

「呪力は感じませんでした！ 機械的な爆破！ テロです！」

突然の爆発に驚きながらも、何とか状況を推測しようとしていた。その時、一台の車が甲高いブレーキ音を立てながら二人の近くに停車した。すると、運転席の窓が開いて「お二人共、乗ってください！」

「董さん!?!」

浅葱の義母の董が顔を出し、二人に車に乗るように促した。二人が乗ると、ドアが閉まり

「しっかりと捕まっています、飛ばします！」

車は急加速で走り出した。Gでシートに押し付けられながら、明久が

「董さん、何が!?!」

「国際テロ組織、タルタロス・ラプスの襲撃です！」

「タルタロス・ラプス!?!」

董が告げた名前を聞いて、雪菜は驚いた。

タルタロス・ラプス

魔族特区の破壊を繰り返し行っている、黒死皇派に次ぐ国際テロ組織だ。その名前は明久も知っていたが、手段は知らなかった。

董が運転する車は、もの凄い速度で街中を走っていて、それでも事故を起こしていな

い事から、董の腕前が伺える。

明久は体制を維持しながら、周囲を見た。

爆破の煙は物資集積所だけではないらしく、他にも数ヶ所に煙が見える。

明久が何とか状況を把握しようとしていた時、董が突如

「しつかり捕まっついてくださいー！」

と告げて、急カーブした。次の瞬間、車の真横で爆炎が上がった。どうやら下水道に爆弾が仕掛けられていることを、董は察して回避したようだ。

「どういふ感覚してるのさ!?!」

「ここから、大きく行きます!!」

明久の言葉に被せる形で、車が大きく蛇行を始めた。

車が大きく曲がる度に、真横に爆炎が上がる。

明久と雪菜の二人は、最早翻弄されるばかりで、両手両足で踏ん張って耐えるしかない。そして迂闊に喋ったら舌を噛みそうなので、黙るしかなかった。

董の素晴らしいドライブテクニクにより、次々と爆弾を回避していき、明久は董が長年仙斉の専属ドライバーだった理由に納得した。

これ程のドライブテクニクと危機回避能力の高さならば、ミサイルや眷獣でも使わない限り、直撃しないだろう。

そして、どれ程経ったか分からないが、車の動きが大人しくなり

「ここならば、今は安全です」

止まった。そこは、明久と雪菜の家に程近い場所だった。どうやら、明久が武器を回収するつもりだったのを察したようだ。

「それと、こちらを持っていってください」

そう言つて明久に差し出したのは、一振の刀。

「実は少し前に、牙城さんが訪問された際に当家に置いていった刀でして……」

「なにやってんだ、バカ親父は」

余りに予想外かつ傍迷惑な父親の行動に、明久は困惑した。すると、董が

「こちらで鑑定させましたところ……銘は、村正・黄龍……」

「つて、妖刀村正!？」

まさかの刀が出てきて、明久は驚いた。

妖刀村正

この銘を知らぬ日本人の方が少ないだろう。余りに血にまみれた刀で、特に有名なのは多くの徳川家が村正に關わつて死んだ。

しかし、実は一部勘違いされているが、妖刀村正というのは、刀鍛冶の1つ。村正家の歴代が鍛えた刀の総称なのだ。

恐らく、牙城が見つけたのはその一振だろう。

「当家にあるより、君に渡した方が良い。私と旦那様はそう判断しました……頑張ってください、連牙」

董はそう言つて、車を発進させた。それを見送つてから明久は、部屋に武器を取りに戻つた。

怒涛の展開

明久達が董によつて送り届けられていた時から、少しばかり遡り

「うー……食べたいのに、凄い値段が上がつて……」

と風沙があるアイス屋の値段を見て、唖つていた。

風沙が知つてゐる年末から換算したら、二倍の値段になっている表示を見て、風沙は財布の中を見た。

アイスは買える事は買えるが、買ったなら暫くの間財布の中が北極圏の如く寒い事になる。どうしようか悩んでいると

「はい。るる屋のアイス、美味しいよね」

と横から、アイスが入つた器を差し出された。

思わず横を見ると、そこには帽子を被つた金髪の少女が居た。

頭痛と共に既視感を覚えていると

「相方が来れなくなつたから、あげるわ」

と言われて、風沙は受け取つてから

「ありがとう……けど、本当にいいの？」

とその金髪少女に問い掛けた。

すると、その少女は手を振りながら

「構わないわよ。いきなり相方が来れなくなつて、どう消費しようか悩んでたくらいだから。気にしないで」

と言つて、近くのベンチに座つた。その少女が食べているのは、絃神島限定フレーバーのようだ。

凧沙はアイスが入つた器を見てから、その少女の隣に座つた。そして、凧沙は

「アイス、ありがとう……えっと」

「デイセンバー……それが、私の名前」

凧沙が何て呼べばいいのか迷っていると、それを察した少女。デイセンバーが名乗つた。

「デイセンバーさん」

「あ、さんは付けないで。まるで、日付みたいだから」

「ああ……」

確かに、デイセンバーは12月という意味があり、そこにさんを付けたら、まるで12月3日という風にもなってしまう。

「だから、アタシの事はデイセンバーで良いから」

「うん、デイセンバー。私は風沙」

頷いてから風沙は、アイスを一口食べた。

すると、デイセンバーが

「風沙、貴女はこの島の住人なんだよね？」

「うん。ちよつと身体が弱くて、その治療の為に居るの」

「なるほどね……」

風沙が軽く語ると、デイセンバーは少し悲しそうな表情を浮かべた。デイセンバーの顔を横目で見ていた風沙は、徐々に強くなる頭痛を堪えながら

「今も、ちよつと頭が痛いしね」

「大丈夫？ 無理しないで、病院に行きなさいよ？」

風沙の言葉を聞いて、デイセンバーは心配した様子で風沙に進言した。

「大丈夫。この位なら、割りと何時もだから」

「我慢強いんだね、風沙は……」

風沙の話の聞いたデイセンバーは、風沙の頭を優しく撫でた。その手つきが優しく、更に風沙は撫で方に明久が重なった。

するとデイセンバーは、ある方向を見て

「出来るなら、風沙には島から脱出してほしいけど……もう、間に合わないか」

そう呟いた直後、複数の轟音が鳴り響き、空気が震えた。

「な、なに!?!」

風沙が立ち上がって周囲を見回すと、複数カ所で黒い煙が上がっているのが見えた。

「何が起きてるの!?!」

周囲では逃げ惑う人々が居るが、風沙は先ほどまでデイセンバーが座っていたベンチを見たが、デイセンバーの姿は無く、空のアイスの器が有るだけだった。

場所は変わり、学園

「親父が行方不明って、どういう事だ!?!」

基樹が電話で問い掛けたのは、爆発が起きた直後に送られてきたメールの送り主。基樹の兄に当たる幾磨だ。

『どういう事もない。第三駐車場全体に爆弾が仕掛けられていたようで、その第三駐車場が無くなるレベルで爆発が起き、会長……頭重の生体信号が途絶した』

「あのクソ親父が、その程度で死ぬタマじゃねえだろ!! おい、俺も手伝う……おい、兄貴……!!」

基樹が呼び掛けるが、既に通話は切れている。

実はタルタロス・ラプスの事は数日前から警戒しており、人工島管理公社は動いてい

たが、実は船舶や飛行機の事故による物流の停滞。そして何より、管理公社の上級理事二名が殺されていた。

ここまでの損失は、絃神島が始まって以来初めてだった。基樹も度々能力でそれらの捜査に携わってきたが、全て空振りだった。

その時、浅葱もノートパソコンでタルタロス・ラプスを探していたのだが

「しまった！ ヤられた!!」

と言つて、そのノートパソコンを思い切り床に叩き付けて破壊した。

「まさか、警備隊アイランドガードのネットワークがウイルス汚染されてるなんて……！ しかも、軍事規格の強力なやつ……！」

浅葱からしたら信じられないことに、警備隊のネットワークがハッキングされていたのだ。

浅葱は管理公社と南宮那月からの依頼で、タルタロス・ラプスの首謀者と見ている男。風水術士の千賀毅人せんがたけひとを探していたのだが、いきなりウイルスにより回線が使えなくなったのだ。

「……明久達、無事でいなさいよ……」

浅葱は教室の窓から、空を見た。

幕間 秘匿区画

その娘は、透き通った深紅の液体の中に沈んでいた。醜い娘で、血の気がなくなつた肌は死体を彷彿させる青白さで、全身には縫い目のような深い傷痕が刻まれていた。

まるで、一度引き裂かれた肉体を無理やりに繋ぎ合わせたかのような無惨な姿だった。

しかしそれでも、その娘は美しかった。

スラリとした体躯に、均整の取れたプロポーション。そして、長い黒髪。深紅の液体の中に居るといふのに、その美しさは損なわれていなかった。

その娘は、ポッドの中に居て、首筋には何らかのケーブルが刺さっていて、そのケーブルはポッドから出て据付けの機材に繋がっていた。

その機材を操作しているのは、グローバル企業M A R・絃神島魔導研究セクション責任者の吉井深森である。

その時、ポッドの中の娘が目を覚まし、それに気づいた深森が

「はあい、お姫様。ご機嫌は如何かしら？」

と何時もの声音で、その娘に声を掛けた。

すると中の娘は、ギョロリと窪んだ眼で深森を睨み付け、口を動かしたようだが、マスクを装着している為に何を言っているかは分からない。

「無理に喋らないの。貴女、まだ死にかけなんだからね」

深森はそう言つて、機材を操作した。すると、鎮静剤か何かが注入されたのか、娘の瞼が少しずつ下がりはじめた。娘は瞼が完全に下がるまでの間、深森を憎しみが籠った瞳で睨んでいた。

そして、娘が完全に眠ると

「いやはや……天下のMARで、このような事が行われているとは」

と少々芝居がかった声が聞こえて、深森は声のした方向に視線を向けた。その先には、中国系の民族衣装を着た青年。

絃神冥駕いとがみめいが居た。

「……今世間を賑わす脱獄犯の貴方が、ここに居ていいのかしら？」

「ふむ。痛い指摘ですが……今上では、騒ぎが起きてますし……なんなら、そちらのセンサーの一人が行方不明になっているようですが？」

深森の指摘に、冥駕はわざとらしく額に指を当ててから、そのように返した。それを聞いた深森は、端末を取り

「あら、本当……まあ、あのお爺さんなら大丈夫でしょ」

と軽く言って、その端末を放り投げた。そして、肩から掛けていたアイスボックスからアイスを取り出して啜えてから

「……このアイスは、あげないからね？」

と冥駕を見た。

絃神冥駕。

彼もまた、少し前に起きた監獄結界集団脱獄事件で監獄結界から脱獄した犯罪者の一人であり、唯一未だに捕まっていない犯罪者になる。

「おや、残念……しかし、あなた方のご協力には、本当に感謝していますよ。おかげで、快適な逃亡生活を満喫しています。しかし、御老体は何やら企んでいたようですが」

「御老体？ ああ……そういうこと……」

冥駕の思わせ振りの言葉に、深森は苦い表情を浮かべた。すると冥駕は、深森の背後のポッドを見て

「これが、聖嬢派が秘匿していた彼らの切り札……もう一人の《カインの巫女》ですか」

と言った。しかし深森は、ククツと笑ってから

「残念。それは少し違うわ……彼女は、巫女よ、シレヒコラもう一人のね」

「もう一人の……？ まさか……そうか……！」

深森の言葉に、冥駕は驚きの表情を浮かべた。

すると深森は、そんな冥駕に興味を無くした様子で、巫女に繋がっているケーブルに触れて

「さあ、視せて……貴女が体験した《聖嬢》の記憶を……」

と言つて、右手に嵌めていた白い手袋を外したのであった。

予想外の再会

爆発が起きてから、数分後。

海沿いの公園のベンチに、スタジャンを着た少女が座っていた。そんな彼女の隣に停まっているのは、色褪せた白のスクーター。そして彼女に膝枕されて、制服姿の女子中学生が眠っていた。

対岸に見える建造物からは煙が立ち上がっていて、周囲からは悲鳴が聞こえてくる。彼女はその光景を、ぼんやりと眺めていた。

そこに、一人の男が近寄り

「こんな所に居たのか、デイセンバー」

とデイセンバーに、無造作に呼び掛けた。

「あれ？ 殺人？」

その男こそが、那月が探していた人物。タルタロス・ラプスの千賀殺人。かつては東洋の至宝と呼ばれ、欧州方面の魔術界を震撼させた天才風水術士だ。

そんな千賀に、デイセンバーは親しげな様子で

「出歩いてていいの？ 先にセーフハウスに入ってる筈じゃなかった？」

「お前からの連絡が遅かったから、捜しに来た……ランが心配していたぞ」

「あらー……心配させてたかー。さすがあたしのラン。可愛いなあ」

千賀の言葉を聞いて、デイセンバーは頬を緩ませた。そんなデイセンバーに、千賀はやれやれと首を振った。

千賀の年齢は、四十歳前後になる。それに対して、デイセンバーは十五歳前だ。

見た目年齢では二十歳以上離れているが、千賀はデイセンバーを対等に扱っていた。

むしろ、デイセンバーの方が千賀を弟のように見ている雰囲気すら感じられる。

すると千賀は、デイセンバーが膝枕している少女を見て

「……無関係な一般人を巻き込んだのか？」

「ん？ ああ、風沙ちゃん？」

千賀が咎めるように問い掛けると、デイセンバーは風沙の頭を優しく撫でながら、愉しそうに笑った。

それはまるで、家族に接しているかのように見える。

「この子の事なら、心配いらぬ。近くで起きた爆発に驚いて、倒れただけだから」

実はあの後、風沙の居た場所の近くで爆発が起きて、それに驚いた風沙は気絶。バイクを回収して戻ったデイセンバーは、気絶した風沙を見つけて比較的安全だった公園ま

で運んだのである。

「それに……この子、完全に無関係じゃないわ」

「なに？ どういう事だ？」

千賀から見たら、風沙は何処にでも居る女学生にしか見えず、首を傾げた。すると
デイセンバーが

「この子の中に、12番の魂があるの」

と語り、それを聞いた千賀は驚きの表情を浮かべた。

「まさか……それでは、その少女の魂が消えるぞ」

千賀が言ったのは、魂の存在力の点だった。

魂にも力関係があり、1つの体に2つの魂がある場合、力の弱い者の魂が消えて、力の強い者が体の主導権を得る。それが普通なのだ。

「どうしてかは分からないけど……間違いなく、この子と12番の魂は共存してる……」

「そうか……」

「それにこんな可愛い女の子が道端で倒れてたら、変態に襲われるかもしれないでしょ？」

「爆破テロを起こしている私達が言えた事ではないな」

デイセンバーの言葉に、千賀は半ば呆れながら突っ込んでいた。確かに、その通りで

ある。

「……とりあえず、ラーンには無事だと伝えておく」

「うん、お願い……：そういうえば、毅人もこの島とは深い関係があるんでしょ？ いいの？」

立ち去ろうとした千賀に、デイセンバーがそう問い掛けた。すると千賀は、立ち止まり

「……無関係ではないからこそ、許せないこともある」

とだけ言っつて、立ち去った。

その直後、凧沙の髪が黒髪から金髪に変わり

「あ、起きた？ 12番？」

と気安い様子で声を掛けた。

すると、凧沙は少し驚いた表情で

「……：汝は……：何故、現今になって、此処に……！」

とデイセンバーに問い掛けた。

しかし、デイセンバーは答えず

「大丈夫。12番は寝てていいよ……：寝てる間に、全部終わるから」

と少しだけ、悲しそうな表情で告げた。

命懸け

大きめの竹刀袋を持った明久と式札を回収した雪菜は、マンションから出ると

「さてと……行くよ、雪菜ちゃん」

「はい、先輩……!」

事件の解決の為に、動き始めた。

ほぼ同時刻、学校に程近い街中で

「基樹、大丈夫!？」

「悪い……足をやられた……浅葱、50m何秒位で走れる?」

浅葱と基樹は、危機に陥っていた。

二人はモノレールの駅方面に向かい、そこからシエルターに入るつもりだった。しかし狙撃され、直撃は避けたものの車が爆発した際に飛んできた破片が基樹の左足に刺さり、基樹は走れなくなってしまったのだ。

「50m? 確か……7秒強ってところだけど……」

「だったら、何とかなるか……あのビルの屋上に、狙撃手が居る……姿勢を低くして、車

から車の間を全速力で走れ。タイミングは、俺が指示する」

浅葱のタイムを聞いた基樹は、車の影からあるビルを指差した。その方向にあるのは、島内に誘致した海外企業のビルだ。その屋上に、狙撃手が居るようだ。

「狙撃手って、なんで居る位置が分かるのよ」

普通、狙撃手は相手が見つからないように狙撃してくるが、基樹は先の一発でその狙撃手の位置を特定した。

それを不思議に思った浅葱は、車の影から出ないように意識しながらビルを見た。

すると基樹は、耳を指差しながら

「俺の能力でな……空気を操る能力で、音に対して敏感なんだよ」

とボカしながら教えた。

「音に敏感……だから、ヘッドホンをしてるのね」

「これしなきゃ、まともに生活が難しいからな……浅葱、相手は対^{アンチマテリアル}物ライフルを使っ

てる……威力は高いが、ボルトアクションだから、一発撃ったら次までは時間がある

……何とか相手の意識を反らすから、その間に走って、此処から離れるんだ」

そう言っつて基樹は、懐から手鏡と携帯を取り出した。

どうやらその2つを使っつて、狙撃手の意識を取るつもりのようなだ。

「だけど、基樹はどうするのよ!？」

「相手の狙いは、浅葱だ。俺は放置するだろうさ。そうすれば、何とか逃げられる。幸い、この辺りにはマンホールもあるし、地下区画への入り口もある……浅葱は、近くのEゲートに行け」

魔族特区警備隊の集まるEゲートならば、相手もおいそれと手出し出来ないだろう。確かに、そこならば安全だ。

（それに、どういう訳か二方向に相手は狙撃してるみたいだからな……どこに撃ってるんだ）

「……分かったわ」

基樹が考えてる間、浅葱はEゲートの方角を見ながら走る態勢に入った。それを確認した基樹も、手鏡に携帯を向けて

「今だ、行け！」

と携帯のライトを手鏡に反射させ、その直後に浅葱は走り始めた。その直後に轟音が鳴り響き、浅葱の走る先に合ったカーブミラーの鉄柱がへし折れた。

それを視界の端に見ながら、浅葱は少し離れた位置に停まっていた警備隊のだろう装甲車の影に隠れた。

短距離だったが、荒くなった呼吸を整えながら浅葱は基樹の方を見た。

基樹はまたもや、車の影に隠れていた。

次の目標は、約30m先の大型トラック。

そこまで走れば、その近くのビルに入って地下にある通路を通って、Eゲートにまで行ける。

息を整えた浅葱は、基樹の方向を見て親指を立てた。

それを見た基樹は、ヘッドホンを装着し

「行けえ!!」

と大声を張り上げて、それを聞いた浅葱は走り始めた。

その少し後に轟音が聞こえたが、浅葱の方には着弾しなかった。何故かは分からなかったが、浅葱はそのまま大型トラックに到着し、ビルに入った。

さてこの時、何が起きていたか。

それは、件のビルの屋上になる。

そのビルの屋上には、タルタロス・ラプスの構成員の一人。獣人のカーリが居た。

カーリは獣人だが、その体は小柄で細く、華奢と言えた。

これは、ある意味で彼女の特異体質だった。

彼女はその小柄な体で非力な為に、獣人のコミュニティから弾き出され、かといって人間に捕まって違法な実験に使われ、生きることと一度は諦めていた。

それを助けたのが、ある特区を破壊しに来たタルタロス・ラプスのデイセンバーだっ

た。

デイセンバーに救われた後、カーリという名前を貰い、更にはその小柄な体が狙撃に向いていることが分かり、カーリはタルタロス・ラプス唯一の狙撃手になった。

二方向に撃っていたのは、デイセンバーの手伝いで明久・雪菜・那月の三人を撃っていたのだ。

最優先目標の一人たる、那月に呪式弾を撃ち込んで一時的に行動不能にした。

本来だったら、明久と雪菜もだが、明久は剣士としての勘が鋭いのか、50口径弾を斬られた。

雪菜は霊視で、直撃弾を与えられない。

これ以上は無駄弾になると判断したデイセンバーの指示で、カーリは残弾が無くなった弾倉を排除し、最後の弾倉に交換した。

残り6発以内に、浅葱を始末しないとイケない。

そう思ったカーリは、走り始めた浅葱を狙ったが、その瞬間に光で目潰しされて、一発目は外した。

だが慌てずにボルトを動かして、次弾を装填。

二発目を撃とうとした。その直後、異様な気配を感じて後ろに振り向いた。

その先には、二体の人型が居た。

（片方は、もの凄いい風の音がする……もう片方は、影か……流石は魔族特区か。変な能力者が居る！）

カーリはそう思いながら、急いで対物ライフルをまず影の方向に向けて発砲。影の胴体を吹き飛ばして、撃破。

次に、排莖しながら風の人型の方に向けた。

だが、風の人型の方が動くのは早く、カーリは風の人型の攻撃を回転して避けた。

（早いな!?!）

カーリは冷や汗を掻きながら、風の人型を狙い撃った。確かに50口径弾は風の人型の頭を吹き飛ばし、風の人型はバラバラになった。

相手を無力化したと判断したカーリは、急いで浅葱の居た方向を見た。しかし、見たのはビルの中に入っていく浅葱の姿だった。

現在地からの狙撃は無理と判断したカーリは、急いで浅葱を追い掛けようとライフルを背負い、ワイヤーガンでそのビル手前のトラックにワイヤーを撃ち込み、簡易ジップラインで追い掛けようとした。

その時

『行かせるかよ!!』

と声が聞こえて、カーリは振り向いた。

すると目前に、先ほど倒した筈の風の人型が再構成されていた。

(バカな!?! これ程の能力を、短時間で連発出来る訳が無い!?!)

カーリは慌てながらも、副武装の拳銃を向けて撃った。

確かに当たるが、風の人型は構わず突撃。暴風の刃でカーリの全身を切り刻み、カーリはビルの屋上から吹き飛ばされて、落ちていく。

その時、背負っていたライフルが紐も切れたことで落ちていきそうになり、カーリはライフルを何とか掴むと

「デイセンバー……ごめんね」

とライフルを抱き締めながら、デイセンバーに謝った。そしてそれが、彼女の最後の言葉になった。

「……げほっ……何とか、倒せたか……」

血の塊と一緒に過剰投与した薬のカプセルの残骸を吐き出し、基樹は力無く体を車に預けた。

浅葱が息を整えてる間に、基樹は持っていた強化薬品ブースターを一気に飲み干し、気流分身エアロダインを発動。

一度攻撃された事で、ダメージのフィードバックが起きて、基樹の体の中はボロボロだが、それでも基樹は力を振り絞って気流分身を再構成し、カーリを攻撃した。

そこに、康太が現れ

「……………無茶したな……………」

と基樹に言った。だが、康太も歩き方がぎこちなく、更に腹部を抑え、口の端から血が流れている。

先ほどの影の人型は、康太の影分シャドートーカー身体だ。

こちらにも、影で受けたダメージは本人にフィードバックされる。それにより、康太も内臓にダメージを受けたようだ。

「それは……………お前もだろ……………」

「……………肩を貸す……………行くぞ……………医療班を待機させてある」

康太はそう言って、基樹に肩を貸して立たせた。

そして康太と基樹は、浅葱が入ったビルを見て

「ビルは……………シャッターが降りたか……………」

「ああ……………あれなら、間に合うだろう」

二人はそう言って、地下区画に入るハッチを開けて、その中に入ったのだった。

幕間

狙撃で那月が一時的に行動不能に追い込まれたが、明久と雪菜はデイセンバーを追った。

だが、懸念事項があつた。それは

「先輩……」

「うん……何故か、デイセンバーに脊獣が操られた」

それはデイセンバーと相對した時、明久は先手を打つて獅子の黄金を放つた。しかしデイセンバーが何か呟くと、獅子の黄金が消えたのだ。

それに明久が驚き固まっていると、カーリからの狙撃が明久に襲い掛かった。しかし初撃は、雪菜の靈視と卓越した槍捌きで防いだ。

次弾は雪菜を狙つたのだが、それは明久が刀で斬り捨てた。

そして、脊獣が効かないという理由から明久が攻めあぐねていると、デイセンバーは後退した。

追い掛けようとしたが、頭痛が激しくなったために明久の動きが止まり、見失ってしまった。

問題は、（一応仮にも）真祖たる明久の脊獣が操られた事。それはつまり、デイセンバーも真祖級の能力。または、脊獣を有している証明になる。

そして何より、デイセンバーを見ていたら頭痛がした。

それはつまり

「……もしかして……デイセンバーは……」

「先輩？」

「ううん、なんでもない……」

明久の眩きが聞こえた雪菜が顔を向けるが、明久は片手を上げて止めた。今は何より、デイセンバーを見つける事が最優先になる。

でなければ、絃神島が減ぶ。

「急ぐよ、雪菜ちゃん！」

「はいー！」

雪菜の返事の直後、二人は一気に加速した。

ほぼ同時刻、Eゲートからキーストーンゲートに入った浅葱は公開されている最下層よ更に下。第0層のCに入っていた。

絃神島のメインサーバーと直接繋がっているCの事を浅葱は、その狭さから棺桶コライと揶揄していた。

「あーもう……ここが一番安全だっっていうのは分かるけど……もう少し、広く出来ない訳？」

広さとしたら、約9畳あるか無いかという位で、その半分以上がパソコンで埋められている為に、浅葱からしたら息苦しさすら感じる程に狭いと思っていたのだ。

『しょうがないだろ？ 絃神島のメインサーバーを守るのが主目的で、使える人員は二の次になったんだから』

「あのね……私からしたら、壊れたら新しいのを導入すれば良いのよ！ その方が、こんな棺桶より安上がりよ！」

『酷い事を軽く言うね……』

浅葱の言葉を聞いて、モグワイは泣くようなモーションをした。本当に一々人間臭いAIAバターである。

しかし浅葱は、そんなモグワイを無視して

「それより、早く相手がネットワークに放ったウイルスを除去しないとね」

と言って、両手の指を解し始めた。

だがモグワイが

『いやいや、もつと確実な方法があるぜ？』

「え？」

モグワイの言葉に浅葱が首を傾げた直後、天井が開いて何か降りてきて、そこで浅葱の意識が無くなった。

これが後に、浅葱を巡る戦いの幕開けになるが、明久は知るよしが無い。

そして舞台は、廃棄区画に移り、そこで明久は今まで見つからなかった存在に出会う事になる。

一方の船組

「戻ったぞ」

「お帰り、志緒ちゃん。獅子王機関はなんだって？」

「海上自衛隊や海上保安庁に連絡し、こちらに船を回してくれるそうだ……」

艦橋から獅子王機関に通信してきた志緒は、唯里からお茶を受け取りながらソファアに座った。

絃神島手前で転覆していた船は、全部で数十隻。更に飛行機も含めれば数百に迫ろうとしていた。

流石に一隻で全ての被害者を救助出来る訳がなく、志緒は獅子王機関に応援を要請。獅子王機関は即座に受諾し、応援を回したという。

そして、お茶を一口飲んだ志緒はソファアにグツタリと座っている沙矢華を軽く睨み「……お前は、何をやっているんだ。煌坂」

「……何って、絃神島上空に展開されてるあの陣を解除しようとしてるんじゃない……」

おつかしいわね……八門屯行なのは間違いないんだけど……」

呼ばれた沙矢華は、気だるげに体を起こすとそう答えた。それを聞いた志緒は、驚いた表情で

「まさか……暗算でパターンを解析してたのか!」

「そうよ……とりあえず、八門屯行までは突き止めたわ……あと、奇門屯行も使ってるみたいだけど……中心は八門屯行……ただ、乱数パターンが中々特定出来ないのよね……とりあえず、20パターンはやったんだけど、どれも外れだったし……」

沙矢華の言葉に、志緒は頬をひくつかせた。

本来それは、専用の計算機を使って計算を繰り返していくものだ。だが沙矢華は、暗算でやってのけている。

一応志緒にも出来ることだが、暗算の速さが桁外れだった。

志緒が離れていたのは、約10分程だ。その間に、沙矢華は20パターン分も暗算して試していたという。

それは、気だるげにもなる、と志緒は納得した。

すると、沙矢華の口にチョコレートを入れた唯里が

「……確か、今回の主犯はタルタロス・ラプスって話だよね……そのタルタロス・ラプスには、風水師が居たって情報だったから……太陽と月の位置を使った乱数パターンを

使ってる……とかなのかな……」

と呟き、それを聞いた志緒と沙矢華が唯里を見た。

二人に見られて、唯里が困惑していると

「そうよ！ 風水よ！ なんて忘れてたのかしら！ 太陽と月の位置を使ったなら、乱数パターンが合わないのは当たり前じゃない!!」

「煌坂。私が月をやる！」

「OK！ 私が太陽をやるわ！ 一時間以内に解除するわよ！ 急がないと、救助に来た船まで転覆しかねない！」

志緒と沙矢華は、唯里からそれぞれチョコレートを貰うと、一気に乱数パターンの計算を始めた。

（速く終わらせないと、雪菜と明久が何をするのか分かったもんじゃないわ!!）

沙矢華は雪菜と明久の為に、計算をしていた。

それに対し、志緒は

（確か、絃神島には牙城の子供……私と同年の少年……確か、吉井明久とあの風沙が居るんだっただか……風沙はあの作戦で怖がらせてしまったから、助けてほしい……二人の手助けをしたら……）

「牙城さんに、恩返し出来る……?」

「牙城は関係ないだろ!？」

「斐川、集中しなさい!!」

「すまん!？」

「私が原因です!？」

なんとも締まらない光景だが、三人は最善を尽くす為に行動していた。

この後、明久は最後の宴を終わらせる。

明久の過去

ディセンバーの居場所を探しながら明久と雪菜は、色々と情報を調べていた。しかしなかなか決定的な物が見つからず、二人は公園で休憩していた。

明久が投げた古いバスケットボールが、緩い放物線を描いてゴールに入った。

「……嫌な雰囲気だね……嵐の前の静けさというか……」

近くの道路には、避難しようとしている人々や完全武装の警備隊が居る。特に避難している人々は、不安そうな表情で激しく黒煙を上げている物資集積所の方を見ている。

「……すいません。私が後手に回ったばかりに……」

「雪菜ちゃんのせいじゃないよ……」

落ち込み気味の雪菜の頭を、明久は優しく撫でた。

「しかし、私は獅子王機関の剣巫なのに……」

「見習いの剣巫、なんでしょ？」

「先輩……？」

明久は雪菜の隣に座ると、空を見上げて

「……雪菜ちゃん。僕が前に、剣術部に入ってたのは知ってるよね……？」

「はい……個人戦で優勝もしたことがあると……」

「……僕が引退した理由は、ある集団戦の時に相手に大怪我負わせたのと、準決勝中に怪我したからなんだ」

そこから明久は、引退した理由を語り始めた。

それは、明久が中等部の二年生だった時の話だ。その当時明久は、彩海学園中等部では知らない者は居ないと言える程に有名人だった。

それまで弱小部だった剣術剣道部を、全国大会に進出させる程に腕が立っていたからだ。

特に個人戦では負け無しで、連牙の吉井とすら呼ばれていた。

しかし集団戦の準々決勝の時、明久は加減を誤って対戦相手の一人に重傷を負わせてしまったのだ。

剣術の試合に於いて、怪我はよくある話だ。

それ自体は明久も分かっていたし、覚悟もしていた。

だが明久は相手が強かった為に気が昂ったとはいえ、力加減を間違えてしまい、相手の肋骨を折る怪我を負わせてしまったのだ。

流石にそこまでの大怪我となると明久も気が動転してしまい、準決勝時に意識が散漫となつて相手の一撃を上手く防御出来ずに右腕を負傷。

準決勝は難とか突破したが、チームメイト達は意気消沈し、決勝戦で惨敗。

明久は引退を決意し、部活仲間の引き留めを振り払つて引退したのだ。

「何やつてんだ、つて思った……怪我なんて、剣術の試合じゃよくある話だ……魔術で治療されたけど、決勝には出れなくて……その時のチームメイトはもう勝てないつて諦めて……見てられない試合だったよ……」

「けど、それは……」

明久のせいじゃない、そう言い掛けて、雪菜は止まった。

「……結局その時のチームメイトは、僕頼りだったんだ……僕が居れば勝てる……負ける要素が無いつて、僕に頼りきりだった……」

それで、愛想を尽かしたと言うべきだろう。

明久は剣術道具も全て処分し、もう二度と剣術剣道部には顔を出さないとつて退部した。

今はどうやら、それなりの成績を出してはいるようだが、最早関係無いと明久は思っている。

「……世界最強の吸血鬼つて言われて、良い気になつてたのかな……絃神島を救えるつ

て……そう思ってたのかもね。那月ちゃんから、余計なことはするなって言われてたのね……」

そこまで聞いて、雪菜はさっきの話を明久が今と重ねてると気付いた。明久は解決しようとするやうに脊獣を呼び出したが、脊獣の制御をデイセンバーに奪われてしまい、何とか制御していた時に目の前で那月を撃たれた。

幸いにも本体ではないから、時間が経てば那月は復活するだろう。しかし、それを明久は自分のせいだと思っているのだと雪菜は気付いた。

「しかし、それは……」

そこまで言って、また雪菜は止まってしまった。

まさかデイセンバーが精神操作系の強力な使い手だとは知らなかったから、対処が遅れてしまった。

だがそれは、明久や雪菜。警備隊にも分からなかった事で、手の打ちようがなかったからだ。

はつきり言って、誰の責任でもない。

「……浅葱が、タルタロスの薔薇を調べてくれたらいいんだけど……」

タルタロスの薔薇

それが、タルタロス・ラプスの根幹に関わる事なのは、デイセンバーの言葉から気付

いた。

だから明久は、浅葱に調べてもらおうとメールを送っていた。

そして明久は、空を見上げた。事件が起きてから、少しずつ濃くなってきた空の魔法陣。

明久と雪菜には分ならず、それに気付いたのは那月であり、那月がディセンバーから引き出したのがタルタロスの薔薇。という言葉だった。

「……タルタロス・ラプス……魔族を解放する為に……か」

「しかし先輩……彼らが行っているのは……」

「分かっている……タルタロス・ラプスがやっているのは、ただのテロ行為だ……確かに、どうしようもない奴が居るのは否定出来ない……魔族を実験動物みたいに考えてる奴が居る……けど、無関係な一般人の方が圧倒的に多い……止めないといけない……この島に住む一人として……」

その言葉に、雪菜はハツとした。

今まで忘れていたが、本来明久は一般人なのだ。

本来だったら明久は、避難シエルターに居てもなんらおかしくはない。

だが明久は、力を持つ者の責任として、自ら最前線に赴いている。

言って止めても、明久は止まらないと、今までの付き合いから分かる。

だから雪菜は

「先輩……この事件、何としても終わらせましょう」と明久に言った。

千賀毅人

公園に居た明久達の前に現れたのは、人工生命体の少年。ロギという名前の少年だった。

ロギは発火能力持ちで、浅葱からの連絡では物資貯蔵庫の爆破はロギの犯行らしい。最初は攻撃しようとした明久だったが、ロギの発火能力で民間人に攻撃する、と言われて止まった。

そして、千賀の居場所に連れていくというので、着いていった。

場所は、アイランド・ウェストの裏通りにひっそりと建っていた《センガ・ペットクリニック》と書かれた看板が掛けられた建物だった。

「……動物病院？」

「まさか、ここに千賀って人が居るっての？」

雪菜と明久の言葉に、ロギは頷き

「そう。ここが、タルタロス・ラプスの隠れ家だよ」セイフハウス

と答えて、休診日という看板が掛けられているドアの鍵を開けて、中に入った。

明久と雪菜は畏を警戒しながらも、中に入った。

どうやら建物の見た目だけでなく、普通に動物病院としても開いているようで、待合室も何処にでもある病院のそれだった。

「まさか、こんな街中に……」

「病院なら、見慣れない人間が入っても怪しまれず、危険な薬品も簡単に仕入れられる。それなりに社会的信用もある。便利だろ？」

雪菜の言葉に、ロギは得意気な表情を浮かべていた。

確かに、その通りである。

医療用と言い張れば、持ち込む事も可能である。

「だけど、その隠れ家に僕達を連れてきていいのかな？」

「先生が決めた事だからね」

明久の問い掛けに答えながら、ロギは診察室のドアを開けた。

確かに、医師ならば先生と呼ばれても何ら不思議ではない。

診察室に入ると、待っていたのは椅子に座った中年男性だった。ヨレヨレの灰色のジャケットを着て、髪を長く伸ばしている。

明久達に気が付くと、男は愉しそうに目を細めた。

その目はまるで、知り合いの教え子を観察するような目付きだった。

「第四真祖に獅子王機関の劍巫か……よく来てくれた、礼を言おう」

「あんたが……千賀毅人か？」

敵意が一切感じられない態度と声に、若干戸惑いながらも明久は問い掛けた。

「そうだ」

「風水術を使つて、この絃神島を封鎖したのも……」

「まあ、俺の仕事になるな」

明久の直球的な質問に、毅人は超然と答えた。

すると、毅人の背後のカーテンが揺れて、その向こうから小柄な少女が現れた。

ダブダブの厚手のコートを着て、長いマフラーを巻いている。

両手でトレイを持っており、その上にはアイスのカップが2つある。

「食べて」

「あ、ありがとうございます……」

「え、いいの、これ？」

雪菜もだが明久が躊躇っているのは、そのアイスカップの蓋には太字で《ディセンバーの！》と書かれてあるからだ。

「大丈夫。誰も気にしないから」

「あ、そうなんだ……」

そこまで言われたら断るのも失礼だろうと考えて、二人はアイスカップを取った。それを確認した少女は無言で奥に消えた。

すると、殺人が

「タルタロス・ラプスの構成員が、子供ばかりなのが意外か？」

と明久に問い掛けてきて、その問い掛けに明久は、当然だろう、と殺人を睨んだ。吸血鬼のデイセンバーは除外し、ロギもだが今の少女は明らかに未成年だった。

すると殺人は、自虐的な笑みを浮かべ

「言い訳に聞こえるかもしれないが……俺は彼らに、タルタロス・ラプスである事を強制はしていない。魔族特区の破壊は、彼らが望んだことだ」

「貴方が、そう仕向けたんじゃないんですか……？」

殺人の言葉を聞いて、思わず雪菜が問い掛けた。

「何も知らない子供達に、テロリストとしての技能を覚えさせて……！」

「……獅子王機関に育てられた攻魔師^{どまぐ}たる君が、それを非難するとは予想外だったな」

殺人のその言葉に、雪菜は動きを止めた。

光と影という差はあれど、雪菜とロギ達の境遇は鏡合わせのように似ていた。

雪菜は政府の特務機関に拾われて、剣巫になる為に特訓をしてきて、ロギ達は殺人に

拾われてテロリストになった。

運命が違えば、真逆だったかもしれないのだ。

「……彼らは君と同じだよ、劍巫……彼らは、魔族特区の被害者なのだ」
そう言つて、毅人はロギを見た。

選択肢

「被害者……それは、彼女達が何らかの実験の被験体だったってこと？」

「ほう……分かるのか？」

千賀の問い掛けに、明久は周囲に居たタルタロス・ラプスのメンバーを見て

「……例えば、僕達を連れてきたホームクルスの少年……さつき、異様な熱を感じた……多分、炎熱系の能力を付与されてるんだろうけど……違法な実験で与えられた能力……」

「さつきの一瞬でか……」

明久の言葉に、ロギが驚いた表情で明久を睨んだ。

ロギが熱を出したのは僅か短時間だが、それで明久は気付いたようだ。

「そつちの子は……魔族みたいだけど、魔力の流れが少し変だから……多分、何らかの能力を付与しようとして実験したのかな？」

「くっ……！」

明久の言葉に、アイスを持ってきた少女は驚きの表情を浮かべた。

彼女は今から数ヶ月前に、タルタロス・ラプスによって欧州のイロワーズ魔族特区から解放された魔族の少女だ。

「……話には聞いていたが、剣士としての感覚か……」

「まあ、剣術士は相手の魔力の流れから次に相手がどう動くのか、考えないといけないからね」

千賀は明久の感覚の鋭さに、驚いていた。

既に試合には出なくなったが、未だに明久は剣術士最強の一人と言われている。

その能力は速さと先読みに特化しており、公式戦では負け無しだ。

「やはり、欲しいな……」

「なに?」

千賀の言葉に明久が首を傾げていると、千賀は立ち上がり

「第四真相……我々の仲間にならないか?」

と提案してきた。

「……………は?」

あまりに予想外だった為に、明久は困惑した表情を浮かべた。すると、千賀は

「何も不思議ではなからう? 我々、タルタロス・ラプスは各魔族特区から囚われてる魔

族を解放し、魔族特区と戦っている。直前のイロワーズ魔族特区でも、そうだったからな」

イロワーズ魔族特区

それは、今から数ヶ月前に壊滅したという魔族特区だったのを、明久はニュースで見ているので覚えている。

原因までは言われていなかったが、どうやらタルタロス・ラプスが破壊したようだ。

「タルタロス・ラプスは、長い間そうやって活動してきた……何回も壊滅しかけ、ディセインバーを中心に復活してきた」

「ディセインバーを中心に……ああ、彼女吸血鬼だったね」

「……気付いていないのか？」

「何が？」

「いや、いい……」

千賀の反応に、明久は不思議そうにした。

そして、少し間を置いて千賀は

「さて、どうするかね。第四真祖？」

再度、問い掛けた。

「先輩……」

「大丈夫……」

雪菜が心配そうに明久を見るが、明久は微笑みを浮かべて雪菜の肩を掴んだ。そして、千賀を見て

「……なんか、前にも言ったような気がするセリフなんだけど……なんで、他の人を頼ろうとしなかったの」

と告げた。

「その様子じゃ、魔族特区の不正だけじゃない……多分、絃神千羅の何らかの計画に気付いたんだろうけど……なんでそれを公表せず、あんたらだけでやろうと決めたのさ……確かに、その決意は凄いと思うよ。自分達が悪になっても、大悪の計画を挫く……うん、凄いよ。多分、僕だったら出来ないと思う……けど、それを公表して、もつと多くの人の協力を得られたら、別の方法が見つかるって、なんで思わなかったの!？」

明久のその言葉に、ロギが怒った様子で一步踏み出した。しかしそれは、怒気に反応した明久が抜いた刀で止められた。

「ロギ、止まれ」

「……分かりました……」

千賀に止められたロギは、不承不承という感じだったが、下がった。

それを見て、明久も刀を鞘に納めた。

そして明久は、更に

「これは、僕の知り合いのハッカーの言葉なんだけど……ハッカーっていうのは、他人の秘密を暴露したがる人種なんだってさ。だから、あんたらも知った情報を暴露したらよかつたんじゃないの？　そうすれば、無関係な一般人を巻き込むような事をしなくても良かった筈だ！」

怒声混じりに告げた。

すると、千賀は

「……確かに、それもひとつの手ではあるな……しかし、誰も信じなければ意味が無い」と拒否した。

それに、明久が何か言おうとしたタイミングで

「それで、先ほど君が言った知り合いのハッカーというのは……藍羽浅葱の事かな？」

と浅葱の名前を出し、明久は僅かに動揺してしまった。

「どうやら、当たりのようだね……さて、彼女は無事かな？」

「どういう事だ!？」

千賀の言葉に、明久は刀の柄に手を伸ばした。

すると、千賀は

「さてね……そろそろ、お暇させてもらおうよ」

千賀がそう言った直後、千賀達の足下に魔法陣のような紋様が現れた。

「風水陣!?!」

どうやら雪菜は知っていたようで、すぐに鎗を展開して動こうとしたが

「では、我々は移動させてもらうよ……さらばだ、第四真祖」

僅かに早く、千賀達の姿が消えた。

「先輩!」

「つつ……人工島管理公社の警備隊を信じよう……僕達は、タルタロス・ラプスを止める

!」

そう言って明久は、動物病院から出た。

急行

動物病院から出た明久達は、一度キーストーンゲートの方を見てから移動を始めた。

向かう先は、アイランド・サウス。

そちらから、尋常じゃない魔力を感じたのだ。十中八九、タルタロス・ラプスの魔族特区の作戦が進んだのだろう。

その証拠に、上空には少しずつだが魔法陣が形成されていつている。

「何をする気なんだ……!」

「考えられるのは、大規模術式による直接破壊になりますが……あんな魔法陣、見たことありません!」

上空の魔法陣を見ながら、明久と雪菜は考えていた。

しかし、相手は二人からしたら良く分からない風水術を使う千賀が居る。単純な術式ではないだろう。

「雪菜ちゃん、こっつちに」

「どうしました?」

明久に手招きされた雪菜は、明久の隣に並走した。

その直後、明久は雪菜を抱き抱え

「せ、先輩!」

「しっかり掴まってよ!」

そう言つて明久は、自身の唇を軽く噛み切つて一気に跳んだ。最初の一步でほぼ真上に跳び、近くのビルの屋上に着地。二歩目で、約10m先のビルの屋上に着地した。

すると、雪菜が

「先輩! 姿が見られてしまいますよ!」

と明久に警告した。

今までは夜だったり、地下や結界内という人目に付きづらい場所だった為に見られる心配は無かった。

しかし、今は真昼の繁華街。

もし誰か、それも知り合いに見られたら面倒な事になるのは間違いないだろう。

だが

「今殆どの人は、避難に精一杯だし……それに、やらないで後悔するよりもやつて後悔した方が断然マシ!」

明久はそう断言し、跳躍し続けた。

その思い切りの良さに、雪菜は驚きながらも頷いた。

「このまま、アイランド・サウスに向かうよー！」

「はい、お願いしますー！」

そして二人は、そのままアイランド・サウスに向かっていった。

時は少しばかり遡り、絃神島近海の海上。

そこでは、駆け付けた海上自衛隊と海上保安庁により船員や飛行機の乗員達の救助作業が行われていた。

それを沙矢華達も式紙で補佐していたが、術式を自動化すると休憩の為に船室に戻っていた。

「なんとか、救助には目処が立ったけど……」

「問題は、絃神島に行く事だな……」

これは自衛隊が絃神島の現状を把握する為に、UAVを飛ばした事で分かったのだが、かなりの速さが出ないと風水術の方向感覚をデタラメにするという術に抗えないのが分かったのだ。

その速さは、最低でもマツハが必要だと考えられている。

しかし、だからと言って海上自衛隊に戦闘機を徴収する訳にもいかず、沙矢華と詩緒

は手詰まり感を覚えていた。

すると、艦橋に行っていた唯里が戻ってきて

「速さ……あ、行ける方法ある」

と呟き、それを聞いた二人の視線が唯里に集まった。

「え、あるの!?!」

「唯里! その方法は!?!」

「え……二人共、この子の事。忘れてない?」

唯里はそう言って、ソファーに寝転がっていた鋼色の髪の少女。グレンダを指差した。

「……だー?」

少々寝ぼけた様子だが、いきなり視線が集まったのを感じたグレンダは、不思議そうに首を傾げていた。

最後の一人

アイランド・サウスの廃棄島。

本島からは切り離され、後は解体されるのを待つその島に、明久達は到着した。その中心地点に、彼女。デイセンバーは居た。

「デイセンバー……」

「や……ようやく来たね」

明久と雪菜が対峙するが、デイセンバーは気負いした様子もなく、まるで久しぶりに再会した友人に接するような気安さで挨拶してきた。

「最後にもう一度聞くね……仲間にならない？ 第四真相」

「……ならない」

デイセンバーからの問い掛けに、明久は短く答えた。

その答えを予想していたらしいデイセンバーは、仕方ないという様子で

「やっぱり、そうだよね……じゃあ、始めようか」

と言つて、右手を高々と挙げた。すると、空中の魔法陣が光り輝いて、そこから数体の眷獣が姿を現した。

「なっ!?! 眷獣!?!」

「あの魔法陣が、眷獣を呼び寄せてるみたいですよ!」

喚ばれた眷獣は、若い世代から古い世代まで様々だ。

そしてこの眷獣達は、絃神島に住んでいる吸血鬼達の眷獣を無理やり呼び出して使役している。

何故、そんな事が出来るのか。それは、人工島管理公社のネットワークにばら蒔かれたウィルスにより、登録魔族達の腕輪の管理システムをハッキング。

それにより、腕輪の魔力干渉を用いて吸血鬼達に無理やり眷獣を呼び出させて、魔法陣がその眷獣をこの地に転移させ、更には使役出来るようにしているのだ。

そして、絃神島に住んでいる吸血鬼は優に1000人に迫る。

「くそっ! 倒しても、キリがない!」

「あの魔法陣を、何とかしないと……!」

明久と雪菜は、刀と槍を振り回して次々と眷獣を対処していたが、魔法陣から次々と新たな眷獣が姿を現して、殺到してくる。

このままでは、数で圧倒されてしまう。

流石に不味い、と二人が内心で焦っていた時だった。一瞬だが、頭上を何か通過した。

「雪菜！ バカ真祖！」

「ゆっきー！ 明久君！」

「無事か!!」

頭上から呼ばれて、明久と雪菜は反射的に見上げた。

そこには、龍形態になったグレンダ。その背には、沙矢華、唯里、詩緒が居た。

彼女達は絃神島に入るのを拒んでいた風水陣を解除すると、グレンダの背に乗って絃神島に来たのだ。

拒んでいた風水陣を解除したとはいえ、方向感覚を惑わせる風水陣は健在。その風水陣を突破するには、音速近い速度で一気に飛ぶ必要があった。

しかし、戦闘機は様々な理由から無理。

だが、グレンダならば突破出来る。三人はグレンダに乗り、明久達の救援に来たのだ。

「皆……!!」

「周りの眷獣は、私たちに任せなさい！」

「だから二人は、彼女を！」

着地した沙矢華達は、龍形態のままのグレンダと一緒に次々と襲い掛かる眷獣達と交戦開始した。

沙矢華と詩緒は、魔法陣に対して術で干渉を始めて、本当に少しだが眷獣の出現ペー
スが低下した。そして唯里がグレンダの背に乗り、剣で次々と眷獣を斬り捨てていく。
中には高い機動力を持つ鳥型の眷獣も居るが、それはグレンダがブレスを吐いたり、爪
で切り裂いたりしている。

これなら大丈夫と考えた二人は、デイセンバーに向かった。

「まさか、健人の風水陣を突破する奴が居るなんてね……！」

そう言いながらデイセンバーは、何処からか古式拳銃を取り出して明久を狙って撃つ
た。

だがその弾丸を明久は、村正・黄龍で斬った。

それを見て、デイセンバーは目を見開き

「魔法が発動しない!？」

と驚いていた。

「流石は、村正か……切れ味が良すぎて、魔法まで斬ったんだ……」

村正の鍛えた刀に共通するのは、よく斬れるという点にある。誰が鍛えたかは不明だ
が、黄龍もその点に漏れずに呪式銃の弾だけでなく、中に封印されていた魔法まで切斷
したようだ。

するとデイセンバーは、弾が切れたからか呪式銃を投棄した。それを見た明久は

「疾く在れ！ 獅子の黄金ー」

と眷獸を召喚した。廃棄区画だから、手加減の必要は無い。最大出力での召喚だった。しかし、デイセンバーの目が光り

「戻りなさい、獅子の黄金」

と呟いた直後、獅子の黄金が消えた。

「やはり、精神干渉……いえ、吸血鬼を代表する魅了」

それは、ある意味で吸血鬼を代表する能力の一つ。魅了だった。魅了の能力は、個体差が顕著で、目を向けただけで街一つを支配下に置くものから、一人の意識を混濁せる程度と様々である。

しかし、デイセンバーのはかなり強力な魅了になる。最大出力で召喚した第四真祖の眷獸を、目を合わせただけで支配下に置いたのだから。

「……確信したよ、デイセンバー……」

明久はそう言つて、刀を持つてる腕を霞む速度で振るつた。すると風の刃が、デイセンバーに迫る。それをデイセンバーは、紙一重で回避したのだが帽子が飛んで、その帽子の下から短く切られているが、揺れる度にまるで炎のように色合いが変わる金髪が見えた。

「……君は……あの宴に参加してなかった焰光の夜伯……最後の一人なんだね」

ディセンバー

つまり、12番目の第四真祖だったのだ。

復讐者

「12番目の、カレイド・ブラッド 焰光の夜伯!？」

「正確には、焰光の宴に参加してなかった12人目……10番目の焰光の夜伯……でしよ、デイセンバー?」

明久からの問い掛けに、デイセンバーは俯きながら

「この絃神島で行われた焰光の宴……私は、それより前に目覚めてた……けど私は……!」
と拳を握り締めた。

すると明久は

「何処かの魔族特区で、何らかの実験体にされていた……しかも、目覚めてから一度も血を吸ってないね?」

明久の言葉にデイセンバーは体を震わせ、雪菜は驚きながらデイセンバーに意識を集中させた。そして、明久の言葉を理解した。

「魔力の流れに、違和感が……それに、魔力が……」

実はもう、デイセンバーは限界が近かったのだ。

「デイセンバーが第四真祖だと気づいたのは……ここに来る前……船の中で、雪菜ちゃんから血を貰った時だよ」

明久と雪菜は、今居る廃棄区画にはモグワイが操縦する船で来たのだが、明久は念の為にと雪菜から血を貰っていたのだ。

その時、新しい眷獣を把握した事に気付いたのだが、その力が内に無く、外。しかもこれから向かう廃棄区画にあると分かった。

そこから明久は、もしかしたらデイセンバーは最後の第四真祖なのではないかと考えていて、到着し、デイセンバーと対峙した時にデイセンバーが第四真祖だと確信したのだ。

「そう……もう、私には時間が無い……だから！」

デイセンバーはその身から凄まじい魔力を解放し、風水陣から新たに現れた眷獣を操作し始めた。しかし、デイセンバーの体が透け始めた。

「デイセンバー!!」

「私は！ 人間が許せない！ 自分たちの欲を満たす為だけに、他者を……魔族を実験台にする連中が！ だから私は、タルタロス・ラプスに入った！ そんな連中と魔族特区を破壊する為に!!」

それは、悲痛なまでの決意だった。例え自分が消えようが、自分達の欲望で他者を不幸にする存在を許せないから破壊するという決意。

それは、正当な復讐だろう。

明久も、アブローラが実験台にされていると考えたら、それを行った者達を、企業を破壊し尽くすだろうと予想出来る。

だが

「だからって、無関係な人達が多く住む絃神島（この）を破壊させる訳にはいかない……！」

そう言つて明久は、放しにかけていた黄龍を掴み直し、構えた。その隣に、雪菜が並び立ち

「だから僕は、君を止めるよ。デイセンバー！　ここから先は、第四真祖（ポ）の戦い（ケンカ）だ!!」

「いいえ、先輩！　私達の戦い（ケンカ）です!!」

明久の言葉の後に雪菜も構え、呼応するように詩緒、唯里、沙矢華、グレンダも構えた。

決着

「行つて!!」

ディセンバーの指示に従い、数多の眷獣が明久と雪菜に向けて殺到する。しかし

「させないわよ!」

「グレンダ!」

いつの間にか地上に降りた沙矢華が剣を振り回し、上から降ってきた氷の塊を破碎し、更に副次効果の空間断裂で防御。

グレンダは尻尾を振り回し、巨体の岩のゴーレムを弾き飛ばした。

「唯里!」

「合わせる!」

志緒に合わせ、唯里は剣を振るう。続々と討伐される眷獣達。しかし、四人の迎撃を突破し、数体が明久や雪菜に迫る。

「邪魔だ!」

「はあー！」

明久は左手の小太刀。鉤斬長光で炎の弾を切り裂き、突撃してきた水の猛禽類を雪菜が槍で斬った。

その勢いのまま、デイセンバーに迫る二人。そうしている間にも、少しずつだがデイセンバーの気配が希薄になっていく。

明久は急ぎたいが、最悪はデイセンバーの魅了で操られる可能性がある。だが

「先輩！ 私が前に出ます！」

雪菜がそう言つて、明久の前に出た。その狙いに気付き

「分かった！」

と雪菜の後ろに着いた。

「チツ!？」

それを見て、デイセンバーが舌打ちした。

雪菜の雪霞狼が発する神格振動波により、デイセンバーの魅了が無効化され、明久にまで届かないのだ。

勿論だが、雪菜も無効化される。だからデイセンバーは、更に眷獸を差し向けようとしたが

「風水陣が!？」

上空に展開されていた魔法陣が、突如崩れて眷獣が無差別に暴れ始めた。

この時、浅葱が警備隊のネットワークを奪還し、ネットワークにばら蒔かれていたウィルスを駆逐。

更には千賀が那月と西村に敗れて、風水陣の制御に使われていた触媒が破壊されていたのだ。

その2つにより、魔族特区破壊の要たる風水陣が崩れ、風水陣が崩れた為に吸血鬼を操って無理やり召喚・使役していた術式も破壊されたので、眷獣達が無差別に暴れ始めたのだ。

その余波は廃棄区画だけでなく、明久達やデイセンバーにまで及んだ。

明久や雪菜も対処するが、これまでに召喚された眷獣は数十体に登る。

その時

「志緒ちゃん!」

「ああ!」

唯里と志緒の二人は、突如としてそれぞれの武器を合わせた。元々、二人の武器。六式・改シリーズは扱いの難しかった沙矢華の煌華燐を弓と剣という形に分離し、特化した武器である。

そして、普段から二人が常に行動しているのは、六式・改の本来の形態での運用の為だ。

『六式・改、連結起動！^{ブートアップ} モード・アルムプラスト!!』

2つの武器を合わせて、二人が息を合わせてコマンドを告げた。すると、2つの武器が合わさり変形し、まるでクロスボウを彷彿させる形になった。

しかし、絃を巻き上げる機構も矢も存在しない。

「多重目標固定……完了!!」

確かに、志緒の舞威姫としての総合能力は沙矢華には遠く及ばない。だが、それでも努力とある能力が買われて、六式・改の使い手に選ばれた。

それは、高い空間認識能力。

この時志緒の脳裏には、今この場所に存在している暴走中の眷獣の位置が把握されていた。

志緒は眷獣の位置を把握し終わると、クロスボウを眷獣達の居る上空に向けて

「空間消滅砲撃……発射!!」

まるで、光の槍が走ったかのように、明久には見えた。

放たれた光の槍は、空中で一気に拡散され、全ての暴走眷獣達を消滅させた。

正確には、居た空間そのもの諸ともに消え去ったのだ。

これを防ぎきれるのは、同じ空間消滅を司る眷獣か、雪菜の持つ七式しかない。

確かに六式・改は量産を前提にしたモデルだが、六式・改もまた対吸血鬼の真祖用の決戦兵器の一つなのだ。

これにより、明久達を遮る眷獣は消えた。

「今ならー！」

「はいー！」

二人は一気にデイセンバーに向けて走り出し、デイセンバーは袖の中から数枚の札を取り出して障壁を展開した。

だが

「はああああー！」

雪菜の一撃で全ての障壁が切り裂かれ

「…………ごめんよ、デイセンバー」

明久の振るった村正・黄龍で斬られて、倒れた。

後悔

自分が斬ったデイセンバーが倒れると明久は、刀を地面に突き立てて

「デイセンバー……」

とデイセンバーを抱き起こした。幾ら第四真祖の一人とはいえ、長年血を吸わず、存在が消えかける程に魔力を放出していて、そこに更に致命傷の斬撃を受けたのだ。

助かる訳がない。

雪菜もそれが分かっているからか、悲痛そうな表情で明久の隣に居る。

するとデイセンバーは、うつすらと目を開けて

「ありがとうね……私を、止めてくれて……」

と感謝の言葉を告げた。

「本当はね、分かっていたんだ……私がやってる事は、テロ行為だって……他の無関係な人も危険に晒してらって……けど、止まれなかった……怒りが……憎しみが……収まらなかった……」

「そうだろうね……君、優しそうだから……」

恐らく、デイセンバーは、自分だけじゃなく、何人もの魔族が違法な実験の実験台にされて、死ぬのを長年見てきただろう。

それが、彼女に魔族特区の破壊というテロ行為に繋がった。テロ行為自体は、非難されるべき事は確かだ。

しかし、相手は魔族特区の権利者も取り込んでいて、普通の方法では助けられない。だから、テロ行為をするしかなかった。

「ねえ、吉井明久くん……」

「何かな……」

「私は、もう消える……これは、もう避けられない……だから、お願いがある……」

「うん……」

明久が頷くと、デイセンバーは

「私達みたいに、違法な実験台にされてる魔族を……助けてあげて……その為に、私の眷獣も使つて……」

「僕に出来る事は、全部やるよ……」

それは、気休めなのかもしれない。

明久は確かに第四真祖だが、領土も持たないただの学生なのだ。しかし、デイセン

バーは嬉しそうに笑みを浮かべて

「ありがとう……私の眷獣の名前は、ダビ・クリュスタルス 磨羯の瞳晶……能力は、魅了を使った精神支配……並大抵の相手なら、支配下に置けるよ……」

「うん……デイセンバーの眷獣は、僕が引き継ぐよ……本当にありがとう……ゆっくり休んで……」

「うん……ああ……久しぶりに……ゆっくり眠れそう……」

それが、デイセンバーの最後の言葉だった。

明久はデイセンバーの首筋にゆっくりと噛み付き、デイセンバーの血を僅かに吸った。

それにより、デイセンバーの姿は完全に消滅し、明久は自分の中に新しい眷獣が増えて、掌握出来たのを理解した。

明久は泣きそうな表情を浮かべ、雪菜もそんな明久に何も言えなかった。

もしかしたら、雪菜がデイセンバーのような立ち位置に居たのかもしれない。そう考えていたのかもしれない。

だが、言える事はただひとつ。

もう、自分達の力の及ぶ範囲では、デイセンバー達のような被害者を出したくはなかった。

こうして、絃神島を廻るテロ事件は幕を下ろした。

だがこの時、裏では人工島管理公社で、代表が変わった。

それまでは基樹の父親だったが、今回の最中で不信任案が出されて可決。それにともない、なんと基樹が代表に選出された。

これは、その父親が以前から怪しい動きをしていたのを把握していたらしく、今回一時とはいえ姿を消した事が決定打になった。

だが基樹はこの後に、動くのが遅かった事を知る。

序章

タルタロス・ラプスによるテロから、約1ヶ月が経過した。一応だが、絃神島は安定を取り戻しつつはあったが、二つ大きな変化があった。

「いやあ……浅葱ってば、有名人になっちゃったねえ……」

という呟きを漏らしたのは、築島倫である。

実は浅葱は、タルタロス・ラプスのテロの解決の立役者の一人として報道され、それ以後はまるでアイドルのように扱われている。

実際、今築島倫が見ているのは、つい先日新しく発表されたMVであり、そのMVでは浅葱はアイドル顔負けのダンスと歌を披露している。

のだが、浅葱をよく知る明久達からしたら、違和感でしかないのだ。

確かに浅葱は運動神経も諸々の成績も良いが、アイドルに対して懐疑的な意見を言う性格だったし、男性アイドルにも一切靡かなかった。

だというのに、まるでアイドルのように活動している。

違和感を覚えない訳がなかった。

そしてもう1つが、人工島管理公社の事だった。

基樹の父親が（表向き）死亡により解任され、（こちらも表向き）基樹の兄が代表に就任。（これまた表向き）基樹はそんな兄の補佐で、中々学園に來れない状況になっている。

少し前に一度來たのだが

『くそっ……Cが中々戻ってこねえ……何とかしないと……』

と鬼気迫る表情だった。

Cというのが何なのかは明久は知らないが、基樹が忙しいというのは察した。

「……色々、変わったな……」

と明久が呟いた時、倫が歩み寄ってきて

「吉井くん。見てこれ」

とスマホを見せてきた。画面には、カラフルな衣装を着た浅葱がマイクを持って歌って踊っている。

確かにその声は浅葱なのだが、明久にはどうにも違和感があった。

すると倫が

「あ、やっぱり変な感じするわよね。確かに浅葱って、歌も運動神経も良いけどさ、こう

いう事する性格じゃないわよね」

と明久の表情を見て同意した。

どうやら倫も同じ事を考えていたらしく、明久は自分だけじゃなかったという思いから頷いた。

その時、MVの映像と音声に僅かにノイズが走った。

それに気付いた倫は

「あ、まただ。時々ノイズが走るのよねえ」

と呟いた。

二人は気付かなかったが、実は非常に小さい声が流れていたのだ。

その内容は

『明久……助けて……』

であった。

実はこのノイズは、明久に近い人物のスマホやパソコンから時々流れていて、非常に短時間かつ小さい声だったから気付いていなかった。

もし聞いていたら、その時点で何かしらの行動を始めていただろう。

もしくは、明久が自分のスマホやパソコンから聞いていたら、違ったかもしれない。

だが、言える事は一つ。

近い内に、また明久は渦中に飛び込んで刀を振る。